IS＜インフィニット・ストラトス＞～紅蓮の破壊神～

EXTREME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞～紅蓮の破壊神～

【Ｎコード】
Ｎ１６９２Ｒ

【作者名】
ＥＸＴＲＥＭＥ

【あらすじ】
女性にしか扱えない機動兵器『ＩＳ（インフィニット・ストラトス）』。しかし、何故か男なのにＩＳを起動させた少年、織斑一夏は半強制的にＩＳ学園に入学させられる。そこで再会したのは幼馴染みの篠ノ之箒。

・・・・・しかし、突如転入してきた４人の少年。アーノルド・ギアナ。龍鳳（りゅうほう）・クシュリナーダ。クリストファー・トールギス。そして、幼馴染みの鈴木政志。この出会いが世界を変える・・・・・

°

プロローグ（前書き）

初めての投稿って緊張するよね（キリッ）

プロローグ

―ＩＳ学園ゲート前―

「・・・・なぁ、ここ無駄にひろくね？」

「んなもん、見たら分かるやろ。どうでもえぇ事いちいち聞くなアホ」

「まぁＩＳは現時点で最強の兵器だからね。このぐらいの大きな施設でもなくちゃダメなんじゃない？」

「おぉ、なるほどな・・・・ってオイ龍鳳！！テメェ何どさぐさに紛れて俺のことバカにしてんだよ！！」

「『バカ』にはしとらん。『アホ』にしとるんや。アホ」

「もう龍鳳やめときなよ。アルも落ち着いて。ね？」

「クリス、悪ぃケド・・・・そいつやっぱここで殺す！！」

「お前等その辺で止めとけ。読者がついていけねぇ」

ＩＳ学園。それはＩＳ操縦者育成の特殊国立高等学校である。ＩＳは基本男には扱えない。なのでこの４人の少年がここにいることが既に妙なのに騒ぎ出したので、さらに・・・・変である！！金髪と青髪の少年が揉めだしたのを白髪の少年が止めようとしたが止まらずそれを見かねた茶髪の少年が止めようとしている。それが今の状況である。

「ほら政志も言うてるやろ。黙っとけ」

「コォンノ野郎ォォォォォ！！」

「いい加減にしねぇと「ドゴォ×2！！」ってもう遅かったか」

アルと龍鳳は頭を抑えて涙目になり、・・・・哀れである。

「まったく。こんな所で騒がれたら迷惑というのが分からんのか？この馬鹿者どもが」

「久しぶりだな千冬」

「教師と生徒の関係になるんだ。織斑先生と呼べ。・・・と言いたいところだが、お前に言っても聞くまい」

政志の相変わらずの態度に溜息を吐く女性ー織斑千冬。とてもスーツが似合う女性である。

「お久しぶりです千冬さん」

「あっ、姐さん・・・。お久しぶりです・・・・」

「久しぶりの再会に、こっ、これは無いやろ・・・・・」

「お前達は本当に何も変わってないな」

ハァとまた溜息をつく千冬。知ってた？溜息の数だけ幸せ逃げるんだぜ！！

「ところで俺たちのクラスはどうなった？」

「あぁ、それなら私のクラスにしておいた」

千冬にやられた二人も復活して話に食いつく。

「それって例のあいつがいるところっすか？」

「織斑・・・・なんやったっけ？」

「もう、みんなそのぐらい覚えとこうよ。確か織斑一護」

「織斑一夏な」

「「「それだ（や）！！」」」

どこの死神代行だよ。

「世間では『世界で唯一ＩＳが使える男』と言われているが、実際は唯の高校生だ。あんな奴でもたった一人の弟だ。面倒をかけるが、しばらくの間頼むぞ」

千冬は真剣な瞳で政志の赤と金のオッドアイを見つめる。それに政志はフッと微笑み、

「任せとけって。それにお前の頼みじゃなくても俺は、アイツがピンチになったら助けるさ。一応ダチだからな」

「オモシレェ奴だったらいいんだけどなぁ」

「アホやなかったらええわ」

「ちょっとワクワクするね」

弟を女だけのクラスに一人でさせていたため、さすがの千冬も罪悪感を抱いていたが男が増えるとなると弟も少し気が楽になるだろうと思い、千冬はホッとする。

「なぁ。そろそろ教室に行った方がいいんじゃねぇか？」

「あっあぁ、そうだな。では教室まで案内する。ついてこい」

「「「「あぁ（はい）」」」」

千冬は歩き出し、その凛とした後ろ姿に、ＩＳ学園の白い制服を纏った４人はついて行った。

こうして物語は始まった

プロローグ（後書き）

やってしまった

各種設定（前書き）

あれ、・・・・・

小説って・・・・・

結構・・・・・

疲れるね（キリッ）

各種設定

キャラ設定なのら～

・・・・ごめん、気持ち悪いね

主人公
◇鈴木政志（すずきまさし）◇
髪：茶髪で少しクセのある短髪
瞳：右目は赤、左目は金色のオッドアイ
好きなモノ：肉、可愛いもの、、楽しい雰囲気
嫌いなモノ：自分勝手な人間、果物、勉強、しんみりとした雰囲気、ゴキブリ
趣味：アニメ観賞
国：日本
容姿：上の上
備考：４人のリーダー格的な存在。アーノルド、龍鳳、クリストファーとは小さい頃からの知り合いで、普通の生活を送っていたがとある事件をきっかけに地球連邦軍に入る。

◇アーノルド・ギアナ◇
髪：金髪でいつもワックスでツンツンにしている
瞳：蒼色
好きなモノ：オムライス、友達との駄弁り、面白い事
嫌いなモノ：納豆、勉強、人を平気で傷つける奴、スルー

趣味：似顔絵描き
国：アメリカ
容姿：上の上
備考：基本的にバカ、アホ、マヌケの三拍子がそろっているがやる時はヤル男である。政志と共に連邦軍に入る。

◇龍鳳（りゅうほう）・クシュリナーダ◇
髪：青髪でサラサラした長髪は腰までである。
瞳：深紅
好きなモノ：たこ焼き、酢豚、メタリックな物、散歩
嫌いなモノ：ウルサい奴、トマト、虫
趣味：読書
国：イギリス
容姿：上の上
備考：アーノルドよりかはマシだが関西弁のバカである。政志と共に連邦軍に入る。

◇クリストファー・トールギス◇
髪：白髪で肩まで伸びた後ろ髪をゴムで1つに纏めている
瞳：翠色
好きなモノ：甘い食べ物、動物、穏やかな日々
嫌いなモノ：苦い食べ物、軍隊、平和を壊す人間
趣味：お菓子作り
国：ロシア
容姿：上の上（どちらかと言えばカワイイ系）
備考：小動物のような仕草で周囲の人を癒し、ドジッ子でもある。

政志と共に連邦軍に入る。

身長はアル　龍鳳＞政志　一夏＞クリス　シャルルとなっています。

容姿で分かると思うがこの４人・・・・・・・・無駄にモテます。

オリジナルＩＳ設定～

第０世代ＩＳまたは『ＧＵＮＤＡＭ（ガンダム）』

これらは政志達の育ての親である朝倉海苑が設計したモノであり、理論は篠ノ之束が開発したものと極似している。通常のＩＳとは異なりコアだけでは起動せずＧＮドライブ（太陽炉）が必要であり、現存するオリジナルの太陽炉は五つ。また、太陽炉を製造するには莫大な年月がかかるらしい。試験機として開発された最初のガンダムは、エクシア、デュナメス、キュリオス、ヴァーチェの四機。ガ

ンダムは通常のＩＳより機動性や火力、防御性を遙かに凌ぐが、シールドエネルギーによるバリアや絶対防御は存在せず、機体の装甲を貫く攻撃をすればパイロットの肉体にダメージが与えられる。が、その代わり、顔以外は全て装甲に覆われている。ＧＮドライブは半永久的にエネルギーを生み出すため２４時間の活動も可能である。

『アルケー』
パイロット：鈴木政志
～武装～
・ＧＮバスターソード　－　刀身にビームライフルを内蔵した大型の実体剣。ライフルモード時は右前腕にマウントして使用する。

・ＧＮビームサーベル　－　両脚爪先に固定装備されており、蹴り技と連動した奇襲攻撃が可能。

・ＧＮファング　－　「ファング」の名の通り「牙」のような形状をした遠隔操作が可能な移動ビーム砲。先端部にビームサーベルを発生させ、敵機を貫くこともできる。計１０基を両腰バインダー内に格納する。

・ＧＮシールド　－　ビームシールド展開機能を持つ専用シールド。

かつて政志が使用していた疑似太陽炉搭載型のガンダム、『スローネ・アイン』、『スローネ・ツヴァイ』、『スローネ・ドライ』の内の格闘型であるスローネ・ツヴァイの発展型であり、特徴の長い四肢と機体色と疑似太陽炉の粒子色の赤から、「破壊神」、「赤い悪魔」と呼ばれている。

『ケルディム』
パイロット：アーノルド・ギアナ
～武装～
・GNスナイパーライフル？　―　デュナメスのスナイパーライフルの発展型。銃身を折りたたむことで、取り回しと連射性能に優れた3連バルカンモードに変形する。不使用時は右肩に折りたたまれた状態でマウントされる。

・GNビームピストル？　―　左右の背部GNバーニアに1挺ずつ懸架されたビームピストル。アーノルドが提案したアイデアを取り入れ、接近戦用に耐ビームコーティングを施した銃剣が設置されている。このコーティングにより敵のビームサーベルを受け止めることができるほか、グリップを垂直に立てて手斧のように使うこともできる。

・GNミサイルポッド　―　腰部フロントアーマーに内蔵されているミサイルポッド。2連装のポッドを左右各2基ずつの4基、合計8発のミサイルを内蔵している。

・GNシールドビット　―　遠隔操作が可能なGNシールド。シールドを自在に分散、密集させることで、多方向からの攻撃に対応できるほか、僚機の防御にも使用できる。左肩に2基、両膝に2基、太陽炉に5基の計9基が装備され、パイロットの脳波でそうさする。各ビットにビーム砲が内蔵されており、4基を格子状に配置した「アサルトモード」では、より強力なビームを発射することができる。ビットの貯蔵粒子が少なくなった場合、太陽炉付近のプラットフォームにマウントすることで急速なチャージが行われ、素早い再展開が可能となる。

オリジナルの太陽炉を搭載しており、射撃型であるデュナメスの後継機である。

『アリオス』
パイロット：龍鳳・クシュリナーダ
～武装～
・ＧＮツインビームライフル　―　主武装の垂直２連装ビームライフル。ＧＮビームサブマシンガンの連射性能を維持しつつ、キュリオスの弱点であった単発の威力不足が改善されている。上部の銃身は可動式で、巡航形態時の対地攻撃が容易な設計となっている。任務に応じて２挺を携行することもある。
・ＧＮビームサブマシンガン　―　ＧＮビームサブマシンガンを両前腕内蔵式に改修した装備。
・ＧＮビームサーベル　―　左右フロントアーマー裏に１基ずつ格納されている。
・ＧＮバルカン　―　機首に内蔵された迎撃用火器。

オリジナルの太陽炉を搭載しており、高機動型であるキュリオスの後継機である。

『セラヴィー』
パイロット：クリストファー・トールギス
～武装～
・ＧＮバズーカ？　―　ＧＮバズーカの発展型。連射性能が向上しており、２基を合体させた「ダブルバズーカ」形態、両肩のＧＮキャノンと接続した「ツインバスターキャノン」形態など、多様な攻撃法が可能となっている。ダブルバズーカと４門のＧＮキャノンを

連動させることで、セラヴィー最大の攻撃「ハイパーバースト」を使用することができる。

・ＧＮキャノン　－　可動式ビーム塔砲。両肩、両膝に２門ずつ、計４門を装備する。両肩の２門はセラフィムの両腕でもある。４門の同時斉射は「クアッドキャノン」と呼ばれる。腕に変形させることが可能で、内蔵したＧＮビームサーベルによる奇襲を行うこともできる。なお、砲口部から現れる手には、人間でいう親指にあたる可動枝が片手につき２本あり、展開時の方向に合わせてどちらか１本は畳まれたままである。このため、バックパック時とセラフィム時とで左右の手の反転は起こらない。

・ＧＮビームサーベル　－　両前腕部に格納されている。ＧＮキャノン内に格納されているものを含めると計６本を装備しており、全てを同時に使用することができる。

・ＧＮフィールド　－　高濃度圧縮したＧＮ粒子を展開し強固な防御フィールドを形成し、実体弾やビーム兵器を防ぐ事が可能になる。ただし、機体の衝撃までは防ぐ事は出来ず、更に粒子圧縮率が解析されたりＧＮソードと言ったＧＮ粒子を纏った実体剣の攻撃で貫通されると、とたんに無力化してしまう。

オリジナルの太陽炉を搭載しており、殲滅型であるヴァーチェの後継機である。

各種設定（後書き）

機体は全部アニメから持ってきました～

機体の顔の部分だけはキャラの顔！
それ以外は全部アニメ通りで！！（ドヤッ）

主人公機体をアルケーにしちゃったけど、どうしよ・・・・・・・・

まっ、いいよね（キリッ）

転入初日、宣戦布告（前書き）

この一週間、家から一歩も出てねぇ・・・・・

転入初日、宣戦布告

千冬の案内で教室に向かった４人。
やたらと広く綺麗な学園内を見て驚きや関心、興味が沸いてくる。
ＨＲが始まっているためか、廊下には誰も居ず【一年一組】の教室のプレートが見えだしたぐらいで、

「男が代表など恥さらしにも程がありますわ！！」

廊下に響き渡る女性の声に千がやれやれとしている所からみると、どうやら政志達がこれから入る教室の生徒なのだろう。

アルと龍鳳はさっきの女性の言葉にこめかみをピクピクさせている。

「・・・今の言葉は、俺達への挑戦か？」

「あぁ、せやなぁ・・・」

「別に気にすることないよ。ね？」

クリスは二人が暴れ出さないよう宥めている。

政志はというと、・・・・

「（そういえば、とある科学の超電磁砲のＯＶＡまだ買ってねぇな）

」

どうでもいいことを考えていた
すると先ほどの女性が、

「実力がトップの方が、クラス代表になるのは当然・・・」

それを聞いた瞬間、アルと龍鳳は

「「ちょっと待てヤァァァァァ！！」」

ガンッ！

とドアを開け教室にクラスの視線がドアに集中する。ザワザワと女性とがざわめき、教卓に立つ緑の髪をした女性がおどおどしているが、アレが副担任かとすぐになっとくする。二人の後に教室に入る政志とクリス。またも、「きゃー！！」やら「私、死んでもイイ・・・」などと鼻から赤い液体を出したりして倒れる生徒がいるが、・・・・あれ、このクラスやばくね？そんな人達を無視し未だに頭がヒート・アップしている二人がいる。

「今男がどうたらこうたら言ったのは誰だ？アァ！！」

「わ、わたくしですが！」

席を立っている金髪の貴族っぽい女性が、４人の男がいきなり現れたため少し驚いた様子でそう答える。

「なかなか度胸のあること言う女やなぁ。実力がトップやったらそのクラス代表になれるんやろ？」

「だったらそれは、」

「こいつが良いんじゃね？」

「「何でだよ（やねん）！！！」」

政志はクリスを指さし、それに気付いたクリスはあたふたし始める。

「ちょ、政志～！ボクにそんなの無理だよ～！」

クリスがそう言い出すと、政志がクリスの耳元で何かをボソボソ言った。

「ハイッ！ボク、クラス代表やります！！」

「「買収されたぁ！！」」

「静にせんか。馬鹿者共」

ドガァ！！×２

やれやれとその場を見かねた千冬が金髪と青髪の頭に鉄拳を制裁すると、二人は頭かシューっと煙を出し撃沈している。

こいつらは学習能力というものがないのだろうか？

「ほら、全員席に着け」

そう言った瞬間、サッっと全員が席に着く。

どうやらこのクラスでは千冬は絶対的な存在であると理解しているらしい。

アホ二人と違って・・・・。

「山田先生。後は私がやります」

「は、はい」

そう言い副担任の山田先生から出席簿を受け取り、千冬が教壇に立つ。歩く度に揺れる山田先生のデカいオ～パイをアルがチラ見していたのは余談だ。

「突然だが転入生を紹介する。お前達、何でもいい。自己紹介しろ」

こうして、政志とクリスと復活したアホの二人は自己紹介をしＨＲを終えたが、その後の女子からの質問攻めのせいで昼休みまでの休み時間は、全てつぶれてしまったのであった。

◇

女子からの包囲網を突破し何とか食堂についたもののそこでも女子からの視線を集めたが、食堂ということもあって駆け寄ってくる人はいなかった。政志はラーメン、アルはオムライス、龍鳳はオムライス、クリスはチョコレートパフェをテーブルの上に乗せてハァと溜息をついていた。

「あ～やっと落ち着ける」

「ホントだよね。どうして女の子はあんなに質問するのかなぁ？」

「俺が聞きたいわ」

「テメェラなぁ・・・。転入生、転校生に対しての質問攻めはアニメの基本だろ」

それはどうだろうか？と三人は脳内で突っ込みを入れてい入るとトレーを持った二人の男女がこちらにやってくるのが見えた。その二人に政志は見覚えがあった。

「政志久しぶりだなぁ！」

「・・・・・・・誰だオマエ？」

「俺だよっ！織斑一夏！昔一ヶ月だけだったけど、道場で一緒だったろぉ！？」

まさかの忘れられていた事にショックを受ける一夏を無視してアルが興味を持ったように、

「なぁ政志。こいつが例の奴か？」

「どう見てもほうやろ？俺らのクラスにおった奴やし」

「どうなの。政志ぃ？」

「残念なことに・・・コイツが、俺の知り合いの・・・・・・織

斑一夏だ」

「何でそんなにマジな顔で残念そうに言うんだよ！でも覚えててくれたんだな！良かっ」

「箒も久しぶりだな」

「あぁ。政志も元気そうでなによりだ」

一夏と共にいた黒髪の女子篠ノ之箒は六年ぶりに再会する政志の変わらない様に少しあきれるも、共に道場で過ごした日々を懐かしんだのか小さく微笑む。放置されてＯＴＬ状態の一夏にアルが肩に手をかけ慰め出した。

「まぁ、イッチー。元気出せよ」

「イッチーって・・・・・。そういえば、自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏。」

「ＨＲで自己紹介したと思うけど、俺はアーノルド・ギアナ。アルでいいぜ。」

「俺は龍鳳・クシュリナーダや。よろしく頼むで」

「ボクはクリストファー・トールギス。クリスって呼んでね。」

「あぁ、よろしくたのむよ」

一夏と三人は握手も交わし、速くもうちとけている。その後、箒とも自己紹介をし六人で食事をとっていると一夏が、クリスがパフェ

しか食べていないのに気づいて聞いてみると、甘いものは別腹だからね！と訳の分からないことを入っていたが気にしたら負けだと悟り、そうかと返した。食事を終えた六人はトレーを返そうしたら、

「ちょっとお待ちになって！」

政志達がいたテーブルにＨＲの時の金髪ちゃんが来て、なんだか興奮してらっしゃるご様子であった。

「お前はＨＲの時の・・・・・。何の用だよ。」

「申し遅れましたわ。私の名はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。」

あれ、俺無視？とアルは凹むモノの政志はあぁ、なるほどと納得する。

「（どうせクラスの女子が男である一夏を面白がってクラス代表に推薦して、代表候補生である自分が選ばれず、男がえらばれるのが気に喰わずにこうなったと、

アニメでよくあるパターンだな）」

考えていることは正しいのにどこかズレている政志であった。

「というわけで、クリストファー・トールギスさん。あなたに決闘を申し込みますわ！」

あれ？何か話が進んでると政志は気づいた。

「ど、どうしてボクなの？」

「あなたもクラス代表に立候補しのですから、当然ですわ」

「「「「「（そういえば、コイツそんなこと言ってたな）」」」」」

と政志、アル、龍鳳、一夏、箒の心はシンクロする。

「ち、違うよ！あれは、政志が無理矢理」

「俺は甘いもの奢ってやるって言っただけだけど」

「じゃあ甘いものって何なのさ？」

「甘くて切ない物語の『けいおん』のＤＶ」

「『けいおん』のどこに甘い要素が含まれているんだよ！！あのアニメ、ただどこにでもいそうな女子高生の日々を描いてるだけだろう！！」

「おい澪。そんなこと言われてるぞ」

「何故私の方を見るんだ！」

中の人が同じ人だからさ（フッ）

「とりあえず、クリス。男が一度言うた事は絶対守らな示しがつかへんで」

「で、でも・・・・」

「でも、クソも」

ドゴォ！×2

本日三度目の魔神の雷を受けたアルと龍鳳。そろそろかわいそうになってきた。

「もうすぐ授業が始まる。さっさとクラスに戻れ」

もうそんな時間かと回りを見るが食堂には政志達以外は誰もおらず、トレーを帰して教室に戻ろうとすると千冬が、

「クラス代表の件だが・・・・」

≪？３？≫

「オルコット、トールギス。今度の月曜の放課後、第三アリーナで模擬戦をしろ。それでいいか、オルコット？」

「望むところですわ」

「待ってください！ボクは一言も」

「やれと言ったんのが聞こえなかったのか？」

「うぅっ。・・・・ハイ、分かりました」

凄みをきかした千冬の言葉に何も言い返せずシュンとしてしまうクリスを見てフッと笑うセシリア。

「月曜日が楽しみですわね。イギリスの代表候補生の力見せて差し上げますわ！」

ビシッ！っとクリスに指を差し高らか宣言する。これを見た政志はてヤレヤレとセシリアに向かって静かにこう告げた。

「なぁ、イギリスの代表候補生さんよぉ。一つ忠告しておくけど」

「何ですの？」

「クリスと、・・・・イヤ、俺達４人の誰かとやり合うんなら本気で来いよ。じゃねぇと、

死ぬぜ？」

転入初日、宣戦布告（後書き）

文才ないですよ。

ハイ、無いですね。

主人公がオタクってどうなの？（前書き）

これからが不安になってきたぜ・・・・・・

アハハハハハハハハ！！

あの後、午後の授業で一夏が山田先生の授業で、「全部分かりません」発言をしたので千冬が出席簿での制裁を下し、
それを見て笑っていた金髪と青関西弁もついでに食らっていた。

・・・オツ（ビシッ）！

授業が終わり、千冬から申し訳なさそうに電話帳と同じぐらい分厚い参考書を一夏は受け取り、後にしようとしたが、

「織斑。お前の専用機が今度の月曜に届くらしい。なので、お前にはオルコットとトールギスとの試合の後に機体の調整をかねて模擬戦をしてもらう」

「え～！そんないきなり・・・・」

ドガァ！

一夏の頭に出席簿クラッシャーを受け撃沈する。

「教師の返事にはハイと答えろ」

「は、・・・・はい」

「対戦相手はコチラで決めておくからお前は少しでも戦えるようにしておけ。政志」

政志達４人はまたも女子に囲まれており、千冬に呼ばれたのを聞い

て女子達の間をスル～と抜けて来た。

「政志。お前にはこのバカにＩＳの基礎をたたき込んで欲しいんだが」

「え～～～。イイよ」

「いいのかよッ！」

「期限はどれぐらいだ？」

「次の月曜までだ。イケるか？」

「最低限戦える程度に仕上げとけりゃ良いんだろ？余裕だよ」

「そうか。なら頼んだぞ」

「あぁ」

そう言って、千冬はその場を去った後、自分のこれからを考えてかハァと溜息をつく一夏の周りにうアル、龍鳳、クリス、箒の４人が集まる。

「イッチーのデビュー戦か～。楽しみだな」

「ほなけど、機体が来るんが試合当日って結構ムチャやで」

「一夏くんファイトだよ！」

「わ、私が教えてやってもいいんだぞ／／／／」

オイ。
最後のやつ私欲が混ざってるぞ。

「でも、男が一度決めたことだ。やれるだけやってやるよ。だから政志、悪いけど俺を鍛えてくれ」

凛々しい顔でそう言う一夏に政志はニヤっとする。

「元よりそのつもりだし、ダチの頼みとあっちゃあ、手ぇ抜く訳にはいかねぇな。じゃあ、今日の授業も終わったし早速始めるか」

「あぁ。よろしく頼むよ」

「イッチー。俺たちも協力すんぜ」

一夏の右肩に腕をかけるアル。

「大したことできへんかもしれへんけど」

一夏の左肩に腕をかける龍鳳。

「友達が困ってたら助けなくちゃね」

一夏の頭に後から顎を乗せるクリス。

「友情とは良いものだな・・・・・」

ハンカチで目元を抑える箒。

「箒。言っとくけどお前も教わる立場だからな」

突っ込む政志。

「ちょ、ちょっと待て！私は別に・・・・」

「いいじゃないか。せっかく何だから一緒に頑張ろうぜ」

「い、一緒に！？」

一夏のハニカミを見て顔を赤くしてもじもじし始める箒を見てアルと龍鳳とクリスは、「あぁ、なるほど」と納得すると同時に、

「そりゃ、多い方がはかどるからな」

「・・・・・・」

「「「（あちゃ～）」」」

一夏の鈍感さに気づいた。

一気に不機嫌になった箒はドスドスと歩き教室を出て行った。その時のドアを閉める音は結構ヤバかった。

「箒のやつ、急にどうしたんだ？ってみんなドコ行くんだよ、オイッ！」

政志達は呆れて教室を出ていこうとするのを一夏が呼び止めるが、それが彼らの耳に入る事はなかった。

「俺が何したって言うんだよーー！！」

◇

その後はなんだかんだで、箒も交えてのＩＳの講習を行いＩＳ用語を覚えさせたり、真剣でやり合ったり、綱でトラックを引いたり、野球の硬球を素手で受け止めたり、

・・・・・・アレこんなので大丈夫？

結局、試合前日までこんな感じで特訓は続いたのであった。

「なぁ、これで明日大丈夫なのか？」

「大丈夫に決まってるって！・・・・・・多分」

「アーノルド。今お前、多分て言ったよな？」

「今日までのおふざ・・・特訓はこれからのためになるハズやで」

「「今日までの地獄はおふざけだったのかぁ！！」」

最終メニューの体に２０？のおもりをつけての校庭を３周。ちなみにＩＳ学園の校庭は１周５？ある。

汗だくになってブチぎれる一夏と箒。すると、二人の頭にフワッと

やわらかい何かが掛けられる・

「二人ともお疲れさん。ほら、タオル。汗ふいとけよ」

「はい、スポーツドリンクどうぞ」

クリスからスポーツドリンク飲み少し落ち着いたようであった。

ＩＳ用語を一通り覚えさせた後の特訓の内容はアルと龍鳳が考えたものであり、「この二人に頼み事をするのは止めよう」と思ったのであった。

◇

「結局、明日の俺の対戦相手って誰なんだろな」

寮の部屋のシャワーを浴びた後、タオルで髪を拭きながら。同室である政志とアルに聞いてみる。

この部屋。本当は二人部屋なのだが、空いている部屋が二つしかなく、男子五人でくじ引きをした結果こうなったらしい。

当然ベッドも二つしかなく、それを巡るジャンケンに見事勝利した政志と一夏で、負けたアルは床で寝ることになっている。

「さぁな～。でもよほどの奴じゃなきゃ負けることねぇだろ。あの地獄を乗り越えたんだから。なぁ、政志。オ～イ」

「・・・・・・」

「ダメだ。こいつヘッドフォンしてやがる」

床にシーツを敷いて寝そべっているアルは政志に話しかけるものの、政志はベッドに座り真剣な顔でＤＶＤプレイヤーと見つめ合っていた。

どうやら、死後の世界で戦う少年少女のアニメらしい。

「何でだろう。不安になって来た・・・・・・」

ようやく自分の周りにまともな人間がいないことに気づいた織斑一夏１５歳であった。

◇

所変わって、明日の模擬戦に備えたセシリアはベッドに入り、自分の父親について思いかえしていた。

実家発展に尽くしている尊敬する母親にいつも卑屈になる父親。そのせいで、セシリアの中での男は必然的に女より弱い存在になって

しまったのだ。

そして明日の試合。対するは自分が軽蔑視する『男』。

「（負けるわけにはいきませんわ。候補生のプライドにかけて。クリストファー・トールギス・・・・・・・。あなたはこの私と『ブルー・ティアーズ』で、必ず倒してみせますわ！）」

主人公がオタクってどうなの？（後書き）

頭が、ディストラクション・・・・・・・・・・

防御こそが最大の攻撃（前書き）

ＩＳの初回限定版のＤＶＤを買うかブルーレイを買うか・・・・・・

あっ。

俺ブルーレイプレイヤー持ってねぇや（７Π７）

防御こそが最大の攻撃

「ついにこの日が～・・・・・・。キタァーー！！」

試合当日。

やたらとテンションが高いどこぞの織田サンのモノマネをする金髪を無視して、一夏の専用機が届けられたアリーナのピット搬入口へ向かう政志、一夏、箒、龍鳳、クリス。

そんな中、箒はアルと龍鳳とクリスが持っているコンビニの袋に目がいった。

「さっきから気になっていたんだが、その袋の中身は何なんだ？」

「コーラ」

「たこ焼き」

「ポテチ」

「・・・・・そ、そうか。何でもない」

あまりにもドヤ顔で袋を見せつける三人に突っ込む気が失せ溜息をつく箒を見て、クリスは何か気づいたようで、

「そうか分かった。箒ちゃんも欲しいんだね。大丈夫ちゃんと箒ちゃんの分も」

「ちっがーーーう!!この際だから全部言わせてもらうが、どうしてこれから試合だというのに三人はピクニックみたいにおやつを持ち込んでいるんだ!?龍鳳に限ってはもはや主食じゃないか!?」

「だって俺、たこ焼きメッチャ好っきゃねん」

「それにクリス!いつから私は食いしん坊キャラになったんだ?読者が勘違いするだろう!!だいたい最初はお前の試合だ!!」

「あれっ、そうだっけ?まぁいいや」

もはや突っ込み切れずゼーゼーと息をする箒。

今日まで全く練習という練習をしている様子が無かったクリスだったが、自信があるのか本当に忘れていただけなのかは分からない。政志の実力はだいたい分かっていた二人だが、アルと龍鳳とクリスについては何も分かってはいない。分かっているのは4人ともが専用機を持っていることだけ。その時点で実力があるのは分かるが、今日戦う相手も専用機持ち。代表候補生に選ばれた人間である。

それと戦う本人は、

「オイフィ~」

マシュマロを頬張っていた。

◇

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ!」

搬入口が見えたぐらいで駆け足でこちらに向かってくる小動物こと山田先生に、三回も呼ばなくてもと心の中で思った六人。いつ転けてもおかしくない足取りでこちらはハラハラしていると、

「あっ」

コチラまで残り5メートルぐらいの距離で躓き倒れそうになるモノの、

スッ！

一夏は隣に一瞬風が通ったのを感じ気がつくと、倒れかけの山田先生の腰を右手で支えている政志がいた。

「ったく、今度からは気を付けろよ」

「は、はい！ありがとうございます／／／／」

政志は山田先生を直立させ注意するものの、山田先生の顔が赤くなっていることに気づかなかった。

「（あいつ、あの距離を一瞬で・・・・）」

一夏と箒は政志の驚異的な脚力に驚いていた。昔から並はずれた身体能力を持っていることは知っていたが、昔とは比べモノにならないくらいに成長している政志に、この五年間の内に何があったか気になってしょうがなかった。

「で、山Pは一体何を焦ってたんだよ」

アルが話しかけるものの未だに顔が赤い山田先生は何か思い出したのかハッとし、

「そ、そうです！さっき織斑くんの機体が届いたので急いでください」

どうやら試合開始まであまり時間がなく少しでも機体をあわせさせるために、山田先生は急いでいたらしい。

少し、駆け足でピット搬入口についた矢先に「遅い」の一言で一夏に拳を御見舞いする千冬は何かパスワードを入力し搬入口を開ける。重量感のある扉はごごんっ、と音をたてその向こうにある一夏の専用機が姿をあらわにする。

そう、真っ白な機体。

『白式』がそこにいた。

皆が百式に目がいってる中、

「トールギス。お前の試合もうじき始まる。準備しろ」

「分かりました。行くよ、セラヴィー」

クリスの右手に付けている白いブレスレットが光った瞬間、そこにいたのは白い巨体のフォルムの装甲を身に纏ったクリスであった。

「これ、本当にＩＳなのか？」

クリスの機体は一夏が知るＩＳとは異なる点が多く、顔以外は全て装甲に覆われており、何より見たこともない緑色の粒子を吹き出していた。

「織斑先生、コレって・・・・！」

「あぁ、『ガンダム』だ」

聞き慣れない単語に一夏と箒は首をかしげる。山田先生の驚きようからはただのＩＳではないことが分かった。

「クリス。分かってると思うが、・・・・・」

「分かってるよ。『フェイスバースト』も『トランザム』も使わないよ」

「分かってるならいい。行ってこい」

「うん。じゃぁ、行ってくるね」

そう言ってクリスはピット・ゲートに進んでいった。

「お前達のＩＳもあんな形してるのか？」

「まっ、似たり寄ったりやな。そのうち分かるわ」

教えてくれないのは何か重要な秘密があるんだと思い一夏はそれ以上問いただしはしなかった。

◇

「何ですの？そのＩＳは」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』を身に纏ったセシリアは見たこともないクリスの姿に憤りを覚えた。

「この子はセラヴィー。ボクのガンダムだよ」

「ガンダム？」

「ハッキリ言うけど君はボクに勝てない。」

「ッ！どういう意味ですの・・・・・」

「ボク達が、ガンダムが普通のＩＳなんかに負けるハズがないからね。だから、」

ガチャ。

セシリアのシーザーライフル『スターライトｍｋ？』がクリスの言

葉を遮るように向けられた。

「ごたくはもう結構ですわ！どうやらあなたには教えてさしあげねばならないようですね。私の実力を！」

「はぁ・・・分かった。何をそんなにムキになってるのか分からないけど」

クリスは大型ビーム砲ＧＮバズーカ?を構えた。

「その歪みを、破壊する」

◇

「始まったな」

「まぁ、そうだけど」

「どうしたんだよ」

「・・・・何でポテチ食ってんの?」

ピットでリアルタイムモニターを見ていたのだが、隣でバリバリとクリスが持ってきたポテチ食う政志が気になって仕方が無かった。

「千冬も食うか？」

「戴こう」

まさかの千冬姉が！？とビックリした一夏だが、周りを見ると自分以外は全員ポテチを食べている事に気づく。

「（何、このカオスな状況）」

モニターではセシリアの四つの自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』がクリスの周りを囲んでおり、さすがにこれには、箒も山田先生もポテチを食べる手を止めたが、他の４人はただ平然とモニターを見ていた。

「オイ！あれってヤバいんじゃ」

「織斑、篠ノ之」

少し凄味をきかせているのに気づき一夏は黙り、箒もビクッとする。

「よく見ておけ。あれが現存するＩＳの中で最強を誇る『ガンダム』の力だ」

瞬間、四つのＢＴからレーザーが放たれクリスは煙に包まれた。

◇

三十秒近く、ＢＴによる砲撃は続いてクリスの姿が黙認できないほどに煙が彼の姿を覆っているが、それでもセシリアは攻撃の手を緩めなかった。

「負けるわけにはいきませんの。私が、・・・・私である為に！」

最後に留めの一撃と言わんばかりに、ハイパーセンサーを頼りにライフルの銃口をクリスに狙い定めトリガーを引く。

キュインッ！

独特の音がアリーナに響き渡り、それと同時に閃光がクリスめがけて走った。

「少し、やりすぎましたでしょうか・・・・・」

冷静さを欠いて一分近くにわたるビーム攻撃の直撃にはどんな機体であろうとただではすまない。

しかし、煙が序々に消えると同時にセシリアの顔は驚愕の色に染まる。

「どうやら相性が悪かったね。ボクじゃなかったらやられてたかもね」

煙から姿を現したクリスは無傷といった状態であった。

「あの集中砲火を無傷で、・・・・」

「このセラヴィーは鉄壁の防御力が売りだからね」

「くっ！」

セシリアはまだ諦めておらず、ＢＴによる砲撃を行い、当たりはするが全くダメージがはいらない。

「でも、腕はなかなかだよ」

クリスは両手に持ったＧＮバズーカ?を構え砲口をＢＴへ向け桃色の粒子ビームを発射する。

着弾するとＢＴは爆発もせず蒸発し、クリスは着々とＢＴを落としていった。

あまりもの火力と防御力に唖然とするセシリアに四つのＢＴ全てを撃ち落としたＧＮバズーカ?を上下に連結したダブルバズーカが向けられる。

「チェックメイトだね」

トリガー引き桃色の閃光がセシリアを包み、シールドエネルギーは一気に０になりＩＳが強制解除され、上空にいたセシリアは地上に落下した。

「（私はここで終わるのでしょうか・・・・。）」

地上に落下する途中、死を覚悟し目を閉じるが、そこから涙がこぼれ出す。あと少しで地上に激突する瞬間、

「（こんなところで、・・・・・私は、私は、・・・・）」

死にたくない！

そう願った瞬間。

身体が落下するのを止めた。

来る筈の痛みが無く不思議に思い目を開けるとそこには、

「ゴメン、大丈夫!?ドコか怪我とかしてない?」

目の前にクリスの顔があり、セシリアは状況が理解できなかった。

よく見ると、自分の太ももものと背中にクリスの腕があることからして、お姫様だっこ状態だとわかった。

「・・・・どうして」

「?」

「どうして、私を助けたのですか。私はあなたに」

「人を助けるのに理由なんていらないよ。それに、さっきの君の目は『死にたくない』って言ってた」

「！！」

「昔に何があったかはボクには分からないけど、困ったことがあったらいつでもボクは力になるよ。この広い世界で、ボクと君はこうして出会えたんだから」

クリスのやさしい笑顔にセシリアは見入ってしまう。

クリスを見ると今まで自分が思っていた男性のイメージが消えていく。

優しさと強さを持った翠色の瞳に心を奪われてしまった。

目の前の男性に・・・・。

セシリアはクリスの腕からおり、クリスはＩＳを解除するが、セシリアの顔が赤い事に気付く。

「オルコットさん。やっぱり、どこか具合が悪いの？」

「・・・・・・・・・・下さい」

「え？」

「・・・セシリアと、呼んで下さい／／／／」

「分かったよ、セシリアちゃん。ボクのことんもクリスって呼んでね」

「（セシリアちゃん／／／／）分かりました。クリスさん。これからもよろしくお願いします」

「こちらこそ。よろしく」

◇

「何かええ感じで終わったなぁ」

「クリスも少しは大人になったってことか」

モニターでクリスとセシリアが握手を交わしているところを見て感動する龍鳳とアル。

「一夏。次はお前の番だぞ。クリストファーに続いてお前も勝ってこい」

「分かってるよ。それより俺は誰と戦えばいいんだ？」

「お前の対戦相手なら、あそこに居るだろ」

千冬はそういってモニターに指を差す。

「「「「なッ！！」」」」

そこにはクリスとセシリアの姿は無く、代わりに訓練用のＩＳ『打鉄』を纏った政志がいた。

防御こそが最大の攻撃（後書き）

家のトイレが、

ディストラクション・・・・・・・・・

強さが全てじゃない（前書き）

これ書くのに一日かかりました

ツーカーレーター

強さが全てじゃない

政志は昔から変わった奴だった。アイツと初めて出会ったのは、箒の道場に高校生の不良が六人ぐらいで押しかけて来た時だ。その日は大人がいなくて、どうやら千冬姉の弟である俺が目的だったらしい。他の子どもたちは怯えて俺は竹刀を片手に、後にいる箒を守っていた。あいつらはケラケラ笑い俺の方に向かってきた。でも、いきなり道場の扉が開いて不良達はそっちの方に目がいって、そこには俺と同じぐらいの目つきが鋭い茶髪の少年がいた。その少年は一言だけ「あぁね。ナルホド」と言った。

「おい。なんだあのガキは？」

「ガキはママのおっぱいでも吸ってろｗｗｗｗ」

不良達に笑われるなか、丁寧に靴を脱いでスタスタと歩いていき一人の不良の前で止まり、

ドスッ！

右手で脇腹を殴った。殴られた不良は倒れて、その少年は追い打ちを掛けるように不良の顔にも拳をお見舞いした。不良はピクリともせず顔が血まみれになっていた。少年が残りの五人の方を振り向きニヤリと口に笑みを浮かべた瞬間「ヒィッ！」と怯え扉から逃げ出すものの、

「忘れ物だ。カスども」

少年は血まみれの不良の頭を右手で掴みブーメランのように投げる。

投げられた不良は扉を通り抜け階段を下りていた不良達にぶつかり不良達は階段から落ちていった。

「雑魚のクセに粋がりやがって。オイ、そこのお前」

少年は俺の方を向いてそう言った。あの圧倒的な力を見た後だったから少し怖かった。

「な、何だよ・・・」

「アニメイトはどこだ」

「・・・・・・え？」

「恥ずかしい話なんだが、アニメイト探してたんだけど分からなくなっちまって、何処か聞こうと思ってここに来たんだよ」

これが俺と鈴木政志との出会い。政志は最初から変なやつだった。でも、俺は政志の強さに憧れていたんだ。本当の強さを持った政志に、千冬姉と同じぐらいの憧れを抱いた。

そして俺は今から、その『憧れ』と戦う・・・・・

◇

「織斑先生、これは一体どういうことですか?どうしてあそこに政志がいるのですか!?」

「姐さん。これはさすがにどうかと思いますよ。今のイッチーじゃ政志の相手になるわけがねぇ」

「俺もそう思うわ」

一夏がピット・ゲートに向かった後、箒、アル、龍鳳は一夏の対戦相手が政志であることが納得いかないようで千冬に抗議する。

「お前達はそんなに私の弟が信用ならんか?」

「いや、そういうわけでは・・・・・・」

三人は政志の強さを知っているからこそ一夏を心配しただけであって、決して一夏を信用していない訳ではない。

「勘違いしてるようだが、織斑の対戦相手に志願したのは政志本人だ」

「「「え!?」」」

「本当なら他のクラスの代表候補生とやってもらうつもりだったんだが、昨日の夜にあいつから『一夏の相手は俺がやる』と言いに来てな。訓練用のＩＳを使う事を条件に許可したということだ。それに、中途半端に強いやつにやらせるよりかは幾分か安心だ」

「へ～。政志がそんなことを（昨日の夜Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！見てたくせに）」

「みんな何してるの～？」

そんな話をしていると先ほど試合を終えたクリスとセシリアがやって来た。

「お～、二人ともお疲れさん。セシリーもなかなか筋のいい射撃だったぜ。相手がクリスじゃなかったら絶対勝ってたろ。あれ」

「ほう。アルが射撃で人を褒めるんや、珍しいなぁ」

「あ、あの・・・・」

「ん？何だよ」

「今までの、あなた方に対しての暴言を」

「何やそんなことか。もう気にしとらんよ」

「で、ですが」

「その気持ちだけで十分だよ。なぁ、クリス」

「ね。だから言ったでしょ。みんなこんな感じだから、謝らなくてもいいって」

セシリアはクリスだけでなく、アル達の心の広さにも暖かいものを感じた。

「盛り上がってるところすまないが、そろそろ試合が始まるぞ」

箒がそういうと皆の視線がモニターにいき、『打鉄』を纏った政志と最適処理化（フィッティング）を終えた『白式』を纏った一夏が地上でたたずんでいた。

◇

「それがお前のＩＳか」

「あぁ。こいつが俺のＩＳだ」

政志は白式の眩しいほどの白い装甲を見て、口元を緩めた。

「いい機体だな」

「そりゃどうも。ところで、お前は専用機使わないのか？」

「自惚れるなよ。最初は素手でやるつもりだったんだが、さすがに千冬に止められてな。『打鉄（これ）』で我慢してんだよ」

「ガンダム」

「！」

ガンダムという単語が一夏の口から出たことに政志は少し驚く。

「お前もクリスみたいに、ガンダム持ってんだろ？」

「・・・・あぁ」

「だったら、嫌でも使わせてやるよ。俺と、この白式で！！」

そう言い、近接用ブレード『雪片弐型』の矛先を政志に向ける。対する政志はニヤリと笑みを浮かべ、装備武装である刀型ブレードを右手に展開する。

「やれるもんならやってみな」

左手でクイクイと挑発するし、一夏はスラスターを全開にし、弾丸のごとく政志に突っ込んでいった。

「行くぞぉ、政志ぃ！！」

そして、全力で振り下ろした雪片を政志はブレードで受け止める。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

一夏は雪片を握る力をさらに強めまた振り下ろす。

しかし、どれだけ小刻みに振るっても政志はただ受け止めるだけ。そして両方の刀がちょうど２０回交差したとき、それまで黙っていた政志が口を開いた。

「一夏。お前は何で戦う？」

「！？」

「お前の刀からは何も感じられない。今のお前は、ただ子どもみたいに力を振り回しているだけだ」

「そんなこと、無ぇよ！！」

一夏は一度距離を置きそしてまたスラスターを全開にして突っ込んでくる。

「バカ正直に突っ込んでくるとはイイ度胸だな。その度胸に敬意を表して、俺も少し本気でいくぞ」

矛先を一夏に向け、そのままブレードを持った右手を後に引き、突き出した。その刹那。

一夏は後に吹き飛んだ。

◇

「一体、何が起こりましたの？」

「私にも分からん」

モニターの中で起こったことが理解で来ていないセシリアと箒。政志がブレードを突き出した瞬間、一夏がいきなり吹き飛び壁に衝突した。それは理解できる。しかし何故、吹き飛んだのかが分からなかった。

「す、すごいですね～。鈴木くんは」

「あいつならできても不思議ではない。しかしあんな芸当、私でも初めて見る」

「織斑先生。政志は一体、何をしたんですか？」

「あぁ、あれか。見ての通り、『突き』を飛ばしたんだろ」

「「え？」」

千冬の言っていることが二人には理解できなかった。その様子を見てクリスが、

「簡単に説明すると、ブレードの矛先から空気の塊を弾き飛ばしたんだよ」

「しかし、打鉄にそんな機能は無いはずだが」

「箒の言うとおり、打鉄にはそんな機能着いてへん」

「でしたら、何で」

「あれは政志個人の力だ。アニメや漫画で斬撃を飛ばすやつあるだろ？あれの突きバージョンと思えばいい」

「そんなことが人間に・・・・」

「それが政志ならできちまうんだよなぁ」

「完全に力技だけどね」

簡単に言うものの、それをやってのける政志にちょっとした恐怖を覚えたのか、箒とセシリアは未だ信じられないような顔をしている。

「ほなけど、一夏も一夏やで。あんなアホみたいに突っ込んで」

「うん。いつもの一夏くんならあれぐらいよけれたと思うんだけど」

「一体何を焦ってんだかねぇ」

今日まで一夏の訓練を見てきた三人からの言葉には少し呆れを含んでいた。確かに、今の一夏は少し何か焦っているのが箒には分かった。

しかし、何に焦っているのかが分からなかった。

「（何をやっているんだ。・・・・・・一夏！）」

◇

【バリアー貫通。ダメージ１３９。シールドエネルギー残量、３２７。実体ダメージ、レベル低】

白式から報告される被害状況を見て、攻撃されたんだなと理解し立ち上がろうとするが衝撃を受けた腹部に激痛が走り、片膝をついてしまう。

「（ハァ、ハァ、・・・・さすが政志。やっぱ強ぇな）」

雪片を杖代わりに何とか立ち上がり、政志の方に目を向ける。政志は先ほどから動いておらず一夏が動くのを待っているようであった。

『お前の刀からは何も感じられない。今のお前は、ただ子どもみたいに力を振り回しているだけだ』

一夏は先ほどの政志の言葉の意味を考えていた。

「（俺はただ、お前や千冬姉みたいに強く・・・）」

「一夏ぁ！！」

「！？」

いきなり大声で政志に呼ばれたことに少し驚くが、そのまま政志の言葉に耳を傾ける。

「一夏。これだけは言っておくぞ。憧れを抱いたり、強くなろうとするのは結構。でもなぁ、

どれだけ強くなっても俺や千冬にはなれやしねぇんだよ」

「ッ！！」

その言葉を聞いた瞬間、一夏のなかで何かが崩れた。今まで願って、目指してきた力が否定されたからだ。政志は一夏の様子に「やっぱりな」と呟き、話を続ける。

「もう一度言うが、俺や千冬にはなれない。けど・・・・・・その代わりに、俺や千冬を超えることはできる。近づくことができる。そもそもどうしてお前は強くなりてぇって思ったんだ?思い出してみろ。その力でお前は、

何がしたかったんだ?」

「・・・・・・・・・」

何も言わずに一夏は空を見上げた。そして、自分に問いただした。
自分が力を求める、本当の理由を・・・・。

「思い出したよ」

雪片を構え何か吹っ切れたような清々しい顔で一夏は言った。

「俺が力を求めてたのは、その力で誰かを守りたかったからだ。お前や千冬姉みたいに」

一夏は白式の最強の武器『零落白夜』を発動させ、雪片を輝かせる。

「それがお前の答えか」

「あぁ、だから政志。もうちょっとだけ付き合ってもらうぜ」

それに応えるように、政志も今まで片手でもっていたブレードを両手に持ち直し、初めて構えを見せる。

「フッ。あたりめぇだ。行くぞぉ!!」

「おぉ!!」

◇

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

翌日の朝のＨＲで山田先生はにこやかに言うもののその選ばれた本人は、

「先生。ちょっと質問いいですか？」

「はい、織斑くん」

「何で俺なんですか？そもそも昨日、俺負けてるし」

結局あの後、政志と一夏の試合は政志の圧倒的な勝利で終わったが、負けた一夏の顔は前より一段と大人らしくなっており、どこか誇らしげであった。その様子に千冬が微笑んでいたのは内緒である。

「ボクとセシリアちゃんが辞退したからだよ」

「はい。そうですわ」

一夏はセシリアの変わりように突っ込みたかったが、今はそれどころではなかった。

「かわりに私達は政志さんを推薦しましたのですが」

「その政志が辞退して一夏くんを推薦したんだよ」

それを聞いた瞬間、一番後の席に座っている政志の方を見るが、

「（けいおんの映画。一体どんな内容になるんだ・・・・）」

腕を組んで真剣な顔で何か考え事をしているようだった政志に、実際はアニメの事を考えていた政志に、

「政志！どうして俺を推薦したんだよ！！」

「おい。呼ばれとるで」

右隣の席の龍鳳に言われて、政志は一夏が何か言っているのに気づいた。

「お前の意見を聞かせてくれ。映画では総集編をするか、新しい話をするか」

「何の話だよ！！そんなことよりどうしてクラス代表辞退したんだよ！？」

「俺にはゆりっぺみたいにみんなをまとめる力はねぇんだよ・・・・・」

「ゆりっぺって誰だよ!?」

「イッチー。落ち着けってなって。なっちまったもんはしょうがねぇだろ?」

「それに、一夏結構初心者とは思えへんぐらいに昨日戦とったやん?」

「一夏くんなら大丈夫だよ!」

「男なら腹を括れ、一夏!」

「一夏さん!」

「織斑くん!」

クラス中から一夏コールが起きて、一夏は諦めたように、

「分かったよ。クラス代表、・・・・やるよ」

ついに一夏が折れ、クラス代表が一夏に決まったその瞬間。

《イエーーーーーー!!》

クラス中から歓喜の雄叫びがあがる。

一夏は机に両手を着き、口元をひくひくとさせる。

「不幸だぁーーーーーーー!!」

スパァンッ！

魔王の出席簿ブレイカーが一夏の頭にお見舞いされる。

「うるさいぞ、馬鹿者」

一夏はあまりにも理不尽な世界を呪ったと、彼の幼馴染みの女剣士は語ったそうだ。

「そういえばさっきの叫び、上条当麻に似てたな」

「うるせぇよ！！」

強さが全てじゃない（後書き）

いつになったらラウラだせるのかなぁ・・・・・・

幼馴染み、蘇る記憶（前書き）

ちょっとだけシリアスかな？

幼馴染み、蘇る記憶

クラス代表戦が終わり、四月も下旬を向かえていた。さすがに、一夏もある程度ＩＳを操縦できるようになったかと思えば、・・・・

ズドォォォンッ！！！

地面に激突し、クレーターを作っていた。クラスメイトからはくすくす笑われ、一夏のハートに１００のダメージが入った。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「・・・・・すみません」

ＩＳを解除して、クレーターから出てきて、政志達のところに行くと、

「ハァ・・・・。お前何やっとんねん」

「君は新手の自殺志願者なの？」

「イッチーよ。急降下と急停止は基本中の基本だぜ」

「いっその事死ねばよかったのに」

「・・・・・すみません」

呆れた様子で、言いたいことを言われ放題の一夏。政志さんあなた

厳しすぎませんか？

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

腕を組んで、どこかご立腹の箒。クラス代表戦が終わってからは一夏は箒と二人でＩＳの練習をしている。

「ちょっと待て、箒。昨日ちょっと練習覗いて見たけど、まさかあの擬音語のことを言っているのか？」

アルは昨日の放課後、暇だったので二人の練習を覗いて見たところ箒が一夏に、

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、とする感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

などの誰が聞いても理解できないような説明をしていた。

「擬音語とは失礼だな。ちゃんと分かりやすく教えたぞ」

エッヘンと胸をはる箒を見て、「そりゃ地上に激突するわ」と思った一同は、一夏が可哀想に思えてきた。

「どうせ今日も放課後で練習するんだろ？お前がいいんなら俺らも練習見てやってもいいんだけど」

「ホントか？なら、頼むよ」

箒は二人きりになれる状況が失われ、ウゥ～と唸っていたが政志は無視した。

「あの～。私も一夏さんの訓練に参加させて頂けませんか？」

「うん。セシリアちゃんなら大歓迎だよ」

「じゃあ今日の放課後、第三アリーナに集合な」

「「「「了解　（や）（ですわ）！」」」」

「・・・・分かった」

未だに落ち込んでいた箒であった。

◇

「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

その日も夜。ＩＳ学園正面ゲート前に小柄な身体に似合わない大き

なボストンバッグを持った少女が立っていた。夜風に吹かれ、左右それぞれを高い位置で結んである綺麗な髪が揺れる。

「えーと、受付ってどこにあるんだけ・・・・・・」

ポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出すが、

「本校舎一階総合事務室・・・・・って、だからそれどこにあんのよ！」

紙に文句をぶちまけるが、当たり前のごとく返事は返ってこず、紙をポケットに突っ込みぐしゃりと音がしたが、気にしない。このことから彼女が大雑把な性格であることが分かる。

ボストンバッグを地面に置きその上にちょこんと座る。

「もうやだ・・・・・・帰ろうかな」

そう言うモノの、そういうわけには行かない。

ＩＳが使える男として幼馴染みがＴＶで放送された時は驚いたが、もっと驚いたのはさらにＩＳが使える男が４人いるとして放送された４人の内の１人を見て、彼女は持っていたコップを落としてしまったぐらいだ。

「あいつ、元気かな・・・・・」

昔彼女が日本にいた頃、彼女の家の前に空腹で倒れていた少年。その少年に酢豚を食べさせてあげて、そのまま一週間家に泊めさせてあげた。一週間だけだったけど、彼女にとっては忘れる事のできない大切な想い出。しばらくして、ただ座っているのも性に合わなか

ったのか、立ち上がってボストンバッグを持ちクテクと歩き出した。
すると、

「・・・だから・・・でな」

ふと、人の声が聞こえて視線を向けると、複数の生徒達がＩＳ訓練施設から出てくるのが見えた。

「（ちょうどいいや。場所聞こっと）」

声を掛けようとボストンバッグを肩に掛け走り出すと、

「飯や飯。もう、腹ペコペコやで」

お腹を抑え空腹であることを青髪の男が主張しているのを聞き、

「（この声、それにあの下手な関西弁・・・・・まさか！）」

「龍鳳。お前がこの前食ってた唐揚げ定食ウマかったか？」

「あぁ、あれか。まぁまぁってトコロやな」

「（いたーーー！！やっと会えたよぉ～！）」

六年ぶりの再会に心拍数が一気にあがる。気持ちを落ち着かせるために、スゥーハァースゥーハァーと深呼吸をする。しかしそれでも高鳴る気持ちは抑えきれず、髪を弄りだす。

「（だ、大丈夫だよね。だいたい六年ぶりぐらいだけど、覚えてくれてるよね。・・・・・・大丈夫、大丈夫。もし、分からなかっ

たら私が美人になってるからだよね！）」

思考を超ポジティブに切り替えいざ行かんとした時、黒髪と金髪の美女が目に入った。

「（誰、あの二人？）」

七人が楽しそうに話しをしているのを見ると、テンションは下がり、いらいらしてきた。

その後に、何とか受付にたどり着き、

「えぇと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音（ファン・リンイン）さん」

受付の女性はとても丁寧な挨拶をするが、少女鈴音は明かに不機嫌であり、そんな丁寧な挨拶など耳にはいってはいない。

「あの、龍凰・クシュリナーダって何組ですか？」

「龍凰？あぁ、あの子ね。彼なら一年一組、あなたは隣のクラスの二組よ」

「ふ～～ん。二組のクラス代表ってもう決まってるんですか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・・・・・聞いてどうするの？」

受付の人は鈴音のおかしな態度に疑問を抱いて聞いてみる。

「クラス代表・・・・・・・力ずくで譲ってもらおうと思って」

にっこりとしたその顔にはしかっりと血管が浮き上がっていた。

◇

「もう、織斑君達どこ～～」

今の政志達の状況を説明すると一夏のクラス代表就任パーティーを楽しんでいたら二年の黛薫子なる新聞部の副部長がやって来てなんだか面倒臭くなりそうだったので、一夏を置いて逃げようとしたところ、

「おい、お前ら！俺を置いて逃げんなよ！！」

「そうよ。あなた達にもインタビューしたいことあるんだから」

「ちぃっ、あのバカ・・・・。走るぞ！」

「おい政志、クリス呑気にジュースや飲んどる場合やないで！」

「え～～」

「仕方ねぇな」

そういって４人は走りだすが、後から一夏が付いてくる。

「イッチー、お前一人の犠牲で俺たちは助かるんだぞ！だから付いてくるな！！」

「お前はそこまで薄情な奴だったのかぁ！？」

「逃がさないわよ～」

声のする方を見ると黛先輩だけではなく何故か大勢の女子が廊下を走り追いかけてきていた。

「「「何か来たーーーー！！」」」

「メンドクセェ事になってきやがった。・・・・・クリス、こっちだ」

「了解だよ～」

「あっ、政志待て！」

十字の別れ道で政志はクリスと一夏の三人で右に曲がり、アルと龍鳳は左に曲がり、二手に別れて、話し冒頭に戻る。

政志達は寮の玄関前に着いたぐらいで後を向き、誰も追ってこないのを確認する。

「何とか巻いたな」

「そうだね」

「まったく、勘弁してくれよなってん？」

三人がそんなことを言っていると、突如某軽音楽部が演奏する「ＯＯＯ時間」が流れ一夏とクリスが政志の方を見る。

「悪ぃ、俺だ」

「「だろうな（ね）」」

そう言い、政志はポケットから携帯を出し、ディスプレイに出された名前を一度見て電話に出る。

「もしもし俺だ。・・・・・・・・・あぁ、みんなにも伝えておくよ。それから、例のアレ出来てるか？・・・・・・・・・分かった、来るときには連絡してくれよ。じゃあな」

「誰からだった？」

「『ななせ』からだ。準備ができ次第『ヴィンセント』と一緒にこっちにくるらしい」

「ヴィンスも来るの？会うの久しぶりだから楽しみだね」

「そうだな」

聞いたことの名前が飛び交う政志とクリスの会話についていけない一夏は何がなんだかサッパリ理解できないでいた。

「なぁ、その『ななせ』と『ヴィンセント』って誰なんだ？」

「ななせは俺たちの幼馴染みで、ヴィンセントはクリスの双子の弟だよ」

「弟ぉ！？クリス、お前。双子の弟なんていたのか？」

「うん、いたよ。ヴィンスは良い子で、ななせはとーっても美人なんだよ！」

「へぇ～。そいつは会うのが楽しみだな」

「消灯時間が近いから、そろそろ部屋に戻るか」

政志は携帯で時間を見て、部屋に戻ろうとして、クリスも後に続くが、

「なぁ、政志」

一夏に呼ばれたので振り返ると、一夏は真剣な顔をしてた。

「そろそろ教えてくれないか。ガンダムについて」

クラス代表戦が終わってから今日まで、その話題を振ることの無かった一夏だったが、先ほどの電話の相手はガンダムに関係していると感じ思い切って聞いてみた。政志、アル、龍鳳の三人がガンダムを持っているのは明かなのだが、一度も使っているところを見たことがなく、クリスもセシリアと戦って以来、政志達同様セラヴィーを起動させていない。

「ねぇ、一夏くんにならもう教えても」

「ダメだ」

「ッ！・・・・・・そんなに一夏くんが信用ならないの？」

「まだ、その時じゃないだけだ。一夏、・・・・・悪いけど今は言えねぇんだ。でも、時が来たら全て話す。俺たちのことも・・・・・・・ガンダムのことも」

「もういい、分かったよ。何か事情があるんだろ？だったら、お前が言う『その時』が来るまで我慢するさ」

いつもの様に笑う一夏に申し訳なさそうな顔をする政志とクリス。

「助かる」

「いいって。そろそろ部屋に戻ろうぜ。千冬姉に見つかったら何言われるか分かったもんじゃないからな」

「そ、そうだね。急ごうか」

一夏とクリスは早歩きで部屋に戻っていくが、政志は何処か浮かない顔で玄関から夜空を見ていた。

「ななせ、か」

しばらく顔を見ていない幼馴染みの名を口にする。昔のことを懐かしみ、一緒に遊んだことを思い出す。

【マサシには分からないだろうね】

「グッ！！」

突如、激しい頭痛が政志を襲った。右手で頭を押さえて、両膝と左手を床につきうずくまる。そこに、政志が付いてこないのに気付いた一夏が来て、政志の様子に驚く。

「政志ッ!?オイッ大丈夫かよ、オイッ!!」

いくら声を掛けても返事は帰ってこず、政志は苦しむだけであった。
そして、聞いてしまった。政志の今にも消えそうな音量で言った、
政志の一言を。

「ハァ、ハァ・・・・・・・・・俺・・・・は、

・・・

幼馴染み、蘇る記憶（後書き）

新キャラ登場の予感が・・・・・・

いつになることやら

中華娘と関西人モドキ（前書き）

家に帰ると玄関の扉が盗まれてました・・・・・・

「織斑くん、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

朝。席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。だが、俺の頭の中は昨日の夜の事でいっぱいだった。あの後、千冬姉が来て「お前は部屋に戻れ」の一言だけ残し、政志を何処かに連れて行った。部屋に戻ると、アルはもうすでに寝ていて俺もベッドに入った。朝になって起きてみると、いつも通りの政志がいて制服に着替えていた。俺は聞くか悩んだ。『美羽』と言う名前について。しかし、何故か聞いてはイケナイ気がした。聞いた瞬間何かが崩れる気がした。だから俺はそのことについて、いつかあいつから話してくれることを待つ。今の俺にはそれしか出来ないのだから。そんな事を考えてたら、脇腹に衝撃が走った。

◇

「グホォッ！ってアル！何すんだよ！？」

いきなり脇腹にライダーキックをお見舞いされた一夏は当然のようにキレる。

「さっきからクラス代表戦のことについて俺たちが話ししてたのに、お前がボーっとしてたからだよ」

「え、そうなのか？悪い、ちょっと考えごとしてたから」

「何や、もしかして・・・・・恋の悩みか！？」

「ちげーよ！！」

「でも、一夏くんにはクラスの代表として頑張って優勝してもらわないとね」

「クリス、本音を言ってみろ」

「学食デザートの半年フリーパスのために優勝してもらわないとね！！」

「「「だろうと思った（だろう思たわ）」」」

「でも、専用機持ってるのって、一組と四組だけだろ？正直余裕だろ」

「まあ、そうだけ」

「その情報、もう古いよ」

「「「「「ん？」」」」」

教室の入り口から声が聞こえたためそちらの方を見ると、小柄な少女が片膝を組んでドアにもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。悪いけどそう簡単には優勝させないから」

「お前、鈴か？」

「そうよ一夏。この中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。そんでもって」

「プッ、ハハハハハッ！鈴、何やその言葉使い。ゴッツイ似合うとらんで」

いきなり腹を抱えて笑う龍鳳に鈴音は顔を真っ赤にする。

「ちょ、何て事いうのよ！っていうか笑わないでよね！！」

「おお、やっと普通に戻ったか」

龍鳳は鈴音がいるドアまで行き、鈴音の前に立つ。

「久しぶりやな、鈴。お前よう俺のこと覚えとったなぁ」

「わ、忘れるわけないじゃない／／／／だって、私、龍鳳のこと・・・・」

鈴音の言いたいことを理解した、政志達は「おぉ！」っと見ていたが、

「それにしても、お前。あれから何年もたったいうのに、胸の大きさ変わってへんグホォッ！！」

鈴音は瞬時に右腕にＩＳを展開して龍鳳を殴りとばし、龍鳳は壁を突き破って外に飛んでいった。クラスメイトは「キャー」などの悲

鳴を上げていたが、政志達は「あれはお前が悪い」といった顔をしていた。

「龍鳳のバカ！朴念仁！犬に噛まれて死ね！！」

目に涙を浮かべながら鈴音はそう言って、自分のクラスに帰っていった。その様子を見ていた政志達は本当に鈴音が可哀想でしかたなかった。

「部分展開、かなり早かったな」

「あぁ。アレは結構強いぞ」

「それにしても龍鳳と凰さんって知り合いなのかな？」

「俺も鈴とは幼馴染みだけど、龍鳳の話なんて聞いたことねぇよ」

「俺たちもあの女と龍鳳が知り合いだなんて、今初めて知ったぞ」

「これは後であのアホに聞き出すとして、イッチー。今の女の子が二組にクラス代表ってことは戦う可能性があるんじゃね？」

「えーっ！あんなので殴られたら死んじまうよ」

「だよね～～」

殴られた本人のことなど完全に忘れて談笑をしていると、箒とセシリアが焦った顔をして来た。

「オイッ！さっき窓から飛んでいったの龍鳳じゃないのか！？」

「クリスさんもこんなところで呑気にしてる場合じゃありませんわ！」

「「「「あっ」」」」

セシリアのおかげで何とか思い出した４人。すると、アルと一夏とクリスは悲しそうな顔をして、アルが机を殴った。

「あの馬鹿野郎！勝手に逝くなって言ってただろが！」

「短い間だったけど、俺達・・・・分かり合えてたよな？」

「うぇ～ん、リュウホウ～～！ボクにアイス奢ってくれるって約束したじゃないか～～！！」

「勝手に殺すなーーーーっ！！」

教室の後のドアから全力で走ったのか、息が乱れ、汗をかいている龍鳳がいた。

「お前ら何勝手に俺が死んだみたいになっとんねん！！なんで箒やセシリアみたいに心配してくれへんのや！！それにクリス、アイスや奢らんでも俺たちの部屋の冷凍庫にはお前のアイスで一杯になってるやろ！！そもそもそんな約束しとらんわ！！」

「龍鳳。うるせぇぞ、少し落ち着け」

さすがにウルサくなってきたので龍鳳の突っ込みの嵐を止めんと政志が動いたが、

「政志ィィィィ!!お前は何俺の机の上に花と遺影置いとんねん!!っていうか、どこからそんなもん用意したんやぁぁぁ!!」

龍鳳の机は白い花でデコレーションされ真ん中には額に入れられた龍鳳の白黒の写真が置かれており、ノリの良いこのクラスは全員が合掌をしていた。そんなことをしていると千冬が教室に入ってきて

「お前達全員席に、・・・・・って何をしているんだ?」

千冬は龍鳳以外の生徒が合掌している光景に少し驚いたが、教室の壁に穴が開いていることに気付き、

「・・・・・・・誰だ?教室の壁に穴を開けた馬鹿者は」

「こいつです」

速攻で、政志が龍鳳を指差すのとクラスの全員が指差すのはほぼ同時であった。指を差された本人はかなりテンパっていた。

「ちょ、お前らなんでやねん!?俺どちらかと言うと被害者」

「クシュリナーダ」

「はい?」

呼ばれた龍鳳がそちらを振り向くと鬼の形相をしている千冬、いや魔神がいた。そして魔神は右腕を引き龍鳳に死刑宣告をした。

「もう一回逝って来い」

「グホォォォォ！！」

ドゴォ！！という音と共に顔面にパンチを食らった龍鳳は先ほどの穴からまた飛んでいった。

「俺は無実やぁぁぁぁぁぁっ！！」

龍鳳の叫びが消えるとまた千冬以外全員が合掌した。

『（アーメン）』

後から入ってきた山田先生が壁に開いた穴と、合掌をしている全員を見たときに「ヒィッ！」と言っていたが誰も気づかなかった。

◇

「取り敢えずお前は謝れ」

食堂で唐揚げを箸で掴みながら政志は朝の騒動でボロボロになった龍鳳に言った。ちなみに、政志は唐揚げ定食、一夏と箒は焼き魚定食、アルはグラタン、龍鳳がたこ焼き、クリスがホットケーキ、セ

シリアがナポリタンをトレーに乗せ大勢が座れるテーブルにいた。
「一体何が悪かったんやろ？」などと言った時は、本気で呆れる政志達であった。

「そうですわよ。あれは明かに相手に失礼ですわ」

「女性は身体のことを言われるのが嫌なんだぞ？」

女であるセシリアと箒が言っているんだから間違いないと、ナルホドと頷く龍鳳。

「胸のこと言うたんがアカンかったか。これは俺が悪いな」

「龍鳳ってアレだよな」

「うん。アレだよね」

「「鈍いよね」」

一夏とクリスが笑いながらそう言っているが、箒とセシリアは「お前が言うな！」と言いたそうな顔をしていた。すると、

「おい、龍鳳。例の彼女が来たぞ」

後を向いていたアルがそう言うので振り返ってみると、トレーにラーメンを乗せた鈴音が、誰もいない席を見つけるとそこに座り、ラーメンを食べ始めた。それを見た龍鳳は、

「ちょっと、行ってくるわ」

自分のまだ手を付けていない料理が乗ったトレーを持って鈴音のトコロに向かった。

「龍鳳の奴。好物のたこ焼き、一口も食ってなかったな」

「あぁ。なんだかんだで、ヤッパ気にしてたんだろ？」

「まったく。龍鳳もとんだ困ったちゃんだね」

「上手く仲直り出来ればいいんだけどな」

「だな」

「ですわね」

政志、アル、クリス、一夏、箒、セシリアはそう言い龍鳳の方に目をやった。

◇

「（あの馬鹿。久しぶりに会ったっていうのに、どうしてあんな事しか言えないの！）」

勢いよく食べるラーメンはスープがトレーの上に飛び散る。いくら大雑把といっても普段ならこんな事はしない。それほど、朝の龍鳳の一言に腹が立っていたのだ。

「（どうせなら、・・・美人になったとか、そういう事言って欲しかったな・・・・）」

ラーメンをすするスピードが落ちて彼女がシュンとなっているのが分かる。

「（ちょっと、やりすぎちゃったかな・・・・・）」

そんなことを考えていると、

「隣ええか？」

声のする方を向くとそこには、彼女の悩みの根元である男がいた。

「（龍鳳・・・・）別に、・・・好きにすれば」

「ほな、遠慮無く」

そう言って、龍鳳はトレーを置き鈴音の隣の席に座る。そして、たこ焼きをもぐもぐ食べ出し、鈴音もラーメンを食べる。両方とも喋らず沈黙が続いていたが、龍鳳が箸をトレーの上に置いて立ち上がり、鈴が座っている席の後に行き、後から両腕を鈴音の首に回し抱きしめた。

「ちょ、アンタいきなり／／／／」

「鈴」

いきなりの龍鳳の行動に真っ赤になり腕をどかそうとするが、耳に吐息が当たるぐらいの距離で龍鳳が喋りだしたので、一瞬身体がビクッとして腕をどかすのを止める。

「朝はすまんかった。久しぶりに会ったというのにアレは無いわな。ホンマにアホやで俺」

「・・・・・・・」

「（やっぱまだ怒ってるか・・・・ハァ、しゃあないなぁ）パクッ」

「っ！」

龍鳳が鈴音の耳をパクッっと口で銜えるとただでさえ赤かった鈴音の顔がさらに赤くなり、鈴音は龍鳳の腕をどかして立ち上がり、龍鳳に指を差して、

「あ、あああ、アンタねぇ！いきなり何すんのよ／／／／」

完全に動揺しており、指が震えている。それを見た龍鳳は、

「ぷっ、あはははははは」

「な、何が可笑しいのよ！？」

「何でもあらへんよ。やっぱ元気な時の鈴の方が可愛いな～って」

「え？」

突然可愛いと言われ少し驚く鈴音に、龍鳳は優しく微笑みながら、

「綺麗になったなぁ。鈴」

「！？」

龍鳳がそう言った瞬間、鈴音は下に俯き、身体が小刻みに震えだす。

「・・・・・・い・・・・・た・・」

「？何いっとるか聞こえヘンで」

「ずっと、・・・・逢いたかったーーー！！」

そう叫び大粒の涙を流しながら、鈴音は龍鳳の真正面から抱きついた。先ほどから周りが騒がしいがもう彼女の耳には何も聞こえない。

「両親が、離婚しちゃって、父さんが、居なくなって・・・・・・グスっ。・・・あんなに、仲・・・良かったのに・・・・・・・」

これには龍鳳も驚いた。一週間だけだったが鈴音の家にお世話になった時、快く自分を迎えてくれ、喧嘩なんてしなさそうなぐらいに仲の良い人達であった事は今も鮮明に覚えている。

「ほうか、あの人たちが・・・・・・」

「だか、ら・・・・・・寂し、かった・・・・・・」

龍鳳は今も泣いている鈴音の身体を優しく抱きしめ、頭をそっと撫で、耳元でそっと呟いた。

「今までよう辛抱したなぁ。お前のことやから泣くんも我慢しとったんやろ?どうせなら、溜め込んどったもん全部だしてまえや。な?」

「う、うぅ・・・うわぁぁぁぁぁん!!」

鈴音の中で何かが吹っ切れ、今まで泣けなかった分を泣き出す。

「寂しかった、寂しかったよぉぉぉぉ!!龍鳳の馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿ぁぁ!!」

ぽかぽかパンチをしてくる。そこにいたのは本当にただの一人の少女であった。

「あぁ、すまんかった。これからは俺がおるから安心せぇ」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」

周りでこの二人を見ていた人たちの中には鈴音に釣られて涙を流すものもいた。美少女と美少年が抱き合うこの光景は完全に何処かの映画のクライマックスに匹敵するほどである。

「まぁ、一件落着ってことで」

「めでたしめでたし」

「龍鳳、カッコイイね〜」

「あぁ。コレで仲直りできただろ？」

政志、アル、クリス、一夏は無事に事が運ばれたので一安心するが、箒とセシリアはというと・・・

「「（いいなぁ・・・）」」

完全に羨ましがっていた。結局この状況は鈴音が泣きやむまで続き、鈴音は泣きやむと同時に周りの視線が自分たちに集中しているのに気付き、顔を真っ赤にしてどこかに走り去っていった。

「あいつ何顔赤くしとんやろ？風邪でも引いたんか？」

《（うわ、鈍ッ！！！）》

良い雰囲気が台無しであった。その後、龍鳳は鈴音が残していったラーメンも片づけていたら授業に遅れて、魔王の怒りを再び買ってしまい、本日三度目となる地上へのダイブを行ったのはどうもいい話である。

「どうでもいいことあらへんわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「地上へのダイブ・・・・・・・・そうか！Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！の日向か！」

「違うわアホーーーー！！」

中華娘と関西人モドキ（後書き）

アニメのＩＳのシャルはどうしてあんなにカワイインダァァァァ！！！！

リアルにそう叫んでしまいました・・・・・・・

現れた亡霊（前書き）

やっちゃった感が半端ねぇ

っていうかこの小説。会話文ばっかりだけどゴメンね（キリッ）

現れた亡霊

あれから、鈴と政志達はすぐに仲良くなり名前で呼ぶようになっていたが、政志は目の前の光景に呆れていた。

「だから、どうしてラーメンにそんなに胡椒を入れるのよ！」

「別にええやろうが！そんなん俺の勝手やろ！！」

「テメェラァ！そんなしょうもねぇ事でいちいち喧嘩してんじゃねぇぞ！！」

「「金髪ウニ頭は黙ってろ！！」」

「あだとコラァァァ！！」

「ちょ、ちょっと三人とも落ち着きなよ」

「「「お子ちゃまはアイスでも食ってろ！！」」」

「うぅ～、セシリアちゃーん！」

「あ～クリスさん可哀想に。よしよし」

「クリストファー、お前も男ならシャキっとしろ！一夏も黙ってないであの三人を止めたらどうなんだ！？」

「いや・・・俺じゃ無理だろ」

こんなやりとりが毎日のように行われ、最終的には、

「騒がしいと思ったらまたお前達か！この馬鹿者共！！」

「ちぃっ、来やがったか・・・・・ずらかるぞ！」

《おう！》

千冬が来た瞬間、政志を残しトレーを持って全員退散するこのパターンが定着していた。

「やれやれ、懲りない馬鹿者共が・・・・お前は行かなくていいのか？」

「いや、まだ食ってるし」

ズズーっと肉うどんをすする政志の前には空になったどんぶりが大量に置かれていた。

「・・・・・・・・政志」

「ん？何だよ」

「あいつらはクラス代表戦のことを覚えているのか？」

「多分忘れてるだろうな。俺も忘れてたし」

どうでも良さそうに政志はそう言って箸を置き、うどんの汁をごくごくと飲みだした。その様子を千冬は呆れた顔でハァと溜息をついた。

「プハーッ。ご馳走様でした」

◇

放課後。一夏たちはＩＳの訓練の為に第三アリーナに向かっていた。この日から何故か二組のクラス代表である鈴も参加することになったが、全員気にしないことにした。

「なぁ、政志は？」

「さっき千冬姉に呼ばれてたけど、別にたいしたことじゃないだろ。それより、前から気になってたけど、鈴と龍鳳はどうやって知り合ったんだ？」

「そういえばそうだな。俺達も気になってたんだよなぁ」

「私も聞きたいですわ」

すると、鈴が悪戯っ子の様な顔をして一度龍鳳の方を見て、見られた龍鳳はその顔が何を表すのか理解して「言わんでええ！」とアイ

コンタクトを取ってきたが鈴はそれを無視して、

「それはね、私が学校から家に帰るとコイツがお腹をすかせて私の家の前に倒れてたのよ。それも朝から」

「おい、鈴！別にそんな事言わんでええやろ！」

「いいじゃない。事実なんだし。それで私が可哀想なこいつを拾って、一週間家に泊めてあげた。こんなトコかな」

ポンと肩に手を置かれたのを感じた龍鳳は、振り返ると哀れなものを見るような顔をしたアルがいた。

「龍鳳、お前。・・・・・・・・やっぱ馬鹿なんだな」

「うるさいわ、アホォ！そもそも俺があんな風になったんは全部政志のせいやぞ！！」

《え、そうなの（ですか）？》

「あいつが『ちょっとアニメイト行ってくる』とか言うて、一ヶ月近く帰って来んかったから俺が探しに行ったんやろが！！」

「あぁ、あの時か。思い出した」

「もしかしてだけど、その一ヶ月って・・・・・」

「多分・・・箒の道場に住み込んでいた頃だろうな。箒が転校した直後に鈴が転校してきてその一週間後ぐらいに政志が『向かえが来たから帰る』とか言って出て行ったからな」

「じゃあ一夏が言ってた凄い奴って政志のことなの！？」

「あぁ。政志のことだよ」

「不良を半殺しにしたり、熊を一撃で倒したり、車を素手で止めたりって」

「「「「「完全に政志だな（やな）（だね）」」」」」

「あ、あの方は本当に人間ですの？」

「普段はただのアニメオタクにしか見ねぇけどな」

そんな昔話などをしていると、アリーナについて更衣室でＩＳスーツに着替えてグラウンドに集合した。政志とアル、龍鳳、クリス、箒はそれぞれ学園の訓練用ＩＳを借りて訓練をしている。政志、龍鳳、箒が『打鉄』でアルとクリスが『ラファール・リヴァイヴ』である。

「ねぇ。自分で参加しといて言うのも何だけど。私って一夏と一緒に練習しちゃマズいんじゃないの？」

ハイ、マズいですよ。あなたたちクラス代表ですからね。これにはみんな気づいてあえて気にしなかっただけなのかと思いきや、

『あっ、そういえば』

駄目だコイツら会話になんねぇ。

「ほなけど、別に初戦で一夏と鈴が戦うわけやないんやし」

「それなんだけどな」

いつの間にか政志がいてどこか間が悪そうな顔をしてポリポリ頭をかいていた。

「あぁ、政志さん。どうしたんですの？」

「む、その紙なんだ？」

政志は持っていた紙を箒に言われてみんなに見えるように拡げた。全員がそれを食い入るように見る。そこには『クラス対抗戦日程表』の文字があり、下の方をよく見ると、

《・・・・・・・・》

まるで空気を読むかのように、一開戦の一夏の相手は鈴であった。

◇

試合当日。政志達は本当なら関係者以外立ち入り禁止のモニタールームで千冬と山田先生を交えて一夏と鈴の試合を見ていた。鈴のＩＳ『甲龍（シェンロン）』は一夏と同じく近接型のパワータイプであり、一夏も何とか雪片の間合いに入ろうとするが、そうする度に甲龍の武装である両肩に付けられた衝撃砲『龍咆』が炸裂する。正直一夏には厳しい試合であった。

「ねぇ、あの衝撃砲の名前って」

「言わんでええぞクリス。俺が一番突っ込みたいんや」

「お前ら馬鹿やってる場合じゃねぇぞ。イッチー頑張ってんだから」

モニターに映る一夏は必死に衝撃砲を避けていた。しかし、その瞳には何かを狙っているようにも見えた。すると、箒が不安そうな声で、

「なぁ、お前達はどうしたら一夏が勝てると思うか？」

「う～ん、せやなぁ。一夏が勝つんには、まずあのやっかいな衝撃砲をどないかせなな」

「そうだな。砲弾だけならともかく砲身も見えない」

「しかも、射角が無制限。一夏くんがもしこれを避けて近づいたとしても鈴ちゃん自体が強いからね」

「正直なところ、勝てるかどうかは一夏さん次第ですわね・・・・・」

みんなの意見を聞いていると一夏が勝てる確立が低いように聞こえて箒は顔を暗くするが、それを聞いていた政志は、

「俺は結構良い勝負だと思うけどな」

「政志？」

「私もそう思う」

「織斑先生も・・・・・、どうして二人ともそうお思いになるのですか？」

「簡単な話だ。白式には零落白夜がある」

「あぁ、零落白夜は俺が知ってる中で最強の攻撃力を誇っているといっていい」

「つまり一夏には勝機があるということか！！」

「まぁ、そういうことだな」

一夏にも僅かながら勝機があると分かった箒は明るい顔になり再びモニターの方を見る。しかし、箒とは反対に政志は何処か浮かない顔をしていた。それに気づいたアルは、

「どうしたんだ政志。浮かない顔して」

「別に。ただ、ちょっとな・・・・・・」

すると、モニターでは一夏が政志達の特訓で身につけた『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使用し鈴に近づいていっているその時だった。突如黄色い閃光に包まれて、モニターから爆音が聞こえたと同時に、アリーナ全体に衝撃が走った。アリーナの遮断シールドを貫通したのか、ステージ中央には黒煙がもくもくと上がるが煙が晴れても何もいないところから何かのビーム兵器が遮断シールドを破ったのだろう。

「何が起こったのですの！？」

「一夏達はどうなったんだ！？」

「ちょ、ちょっと待って下さい、今確認しますから！」

セシリアと箒にせかされモニターで確認する山田先生。モニターを拡大して遮断シールドを破ったビームが飛んできたであろう方を見ると、七つの機影が確認できた。

「「「！！」」」

その機影を見て箒、セシリア、山田先生の三人は驚く。その機体は顔も含めて全て装甲に覆われている『全身装甲（フル・スキン）』と呼ばれるものだった。

「山田先生。遮断シールドの再展開まで、あとどれくらいだ？」

「え～っと、あと最低でも2分はかかります！」

敵機はすぐそこまで来ており2分もしないうちにアリーナに進入されてしまう。そんな中、箒はあることに気づく、

「そういえば、政志達はどこ行ったんだ？」

◇

その頃、一夏と鈴は焦っていた。

【こちらに向かってくる七つの熱源を確認】

二人とものＩＳがそう警告を出し、遮断シールドに開いた穴からは、緑やら赤やら黒やらそれぞれ色とりどりの機体が現れ一夏達の前に停止する。

「鈴。お前、後どれぐらいエネルギー残ってる？」

「２００弱ってところ、そういうアンタは？」

「５０を切ってる。そろそろ限界だな」

すると、特徴的な円盤形バックパックを上半身に被せた緑色の機体がいきなり荷電粒子砲を撃ってきた。それを二人は避けようとしたが、

「ビームが曲がった!?」

直進していたビームは一夏の方へ曲がり、避けられないのか一夏は零落白夜を発動させた雪片で防ぐ。すると、

「エネルギーが!!」

白式のエネルギーが切れて強制解除された一夏は上空から落ちる。

「一夏ァ!!」

鈴は落下する一夏を地上ギリギリのところで助けてホッっとしていたら、

【三機の所属不明機からのロックを確認】

鈴の甲龍から警告が出された瞬間、

ズドォオオォン!!

「きゃぁぁぁぁ!!」

「鈴!!」

鈴は背後から集中砲火を浴びて、シールドエネルギーが0になったのかISが強制解除され、二人とも地上に落ちる。地上に落ちた二

人は上空をみると、青と赤と黒のＩＳが持っていたビームライフルから煙が上がっているところからあの三機が撃ってきたのが分かる。そして、七機全てが地上にゆっくりと降りて来る際に、彼らの声らしき会話が聞こえた。

「アルヴィス！勝手に攻撃するなとあれほど言ってただろ！！」

「別にいいじゃないかフラン。殺したわけじゃないんだから。ねぇアンジェロ」

「そうね。今回の目的は織斑一夏、並びに他の男四名とそのＩＳの回収でしょ？つまり、それ以外は殺しても良いって意味よね？二人もそうおもうでしょ、ミーナ、ハンナ」

「そうだね」

「それよりよぉ。あの小娘まだ死んでねぇじゃねぇかよ。エリス、もう良いだろう・・・殺しても」

「はぁ、やれやれ。まぁ、そろそろ好きにいいですよ。ジェニー、あなたも」

「殺戮殺戮殺戮！！」

会話から明かに危ない奴らだと理解した一夏と鈴であったが、二人には逃げようにも逃げ場所が無く相手はＩＳを装着している。ハッキリ言って絶望的であった。話の内容から自分はともかく、鈴は命が危ないと思いどうやって鈴を逃がそうかと考えていたら、先ほど鈴を撃った赤い機体のビームライフルの銃口が一夏たちの方に向けられた。

「取り敢えずよぉ、これでも食らっとけよ！」

トリガーが引かれるかと思ったその刹那、

ピキッ

ピキッ

バリィンッ！！

七機の後の観客席のバリアーが割れ、その音を聞き七機と一夏と鈴はそちらを見る。バリアーに開いた穴からは、

「なんとか間に合ったか」

「それにしても相変わらず無茶苦茶だな。政志」

「このバリアーって素手で割れるもんなんか？」

「多分・・・政志にしか出来ないと思うよ」

政志、アル、龍鳳、クリスが入ってきた。どうやら、内側から政志が素手で殴ってバリアーを壊したらしい。

「何だあのガキ共。殺しても良いか？」

「待てハンナ。あの４人は回収対象だ」

「わざわざ捕まりに来やがって、ご苦労なこった！！」

「殺戮殺戮殺戮！！」

七機は作戦の目的である政志達が来てくれたことに歓喜の声を上げるが、政志達はそんなことを全く気にせず、

「あの七機。軍のデータにあったガンダムもどきやな？」

「うん。報告によるとあの七機のせいで５００人近くの人たちが殺されてるって」

「確かカラミティのフランソワ・マーキュリー、フォビドゥンのアルヴィス・ネイビス、レイダーのジェニー・ヘンドリック、イージスのハンナ・メンフィス、デュエルのミーナ・メンフィス、ブリッツのアンジェロ・クライシス、バスターのエリスティン・ホー。多分七機とも有人機で本人が操縦してんだろうな。どうする、政志？」

「聞かなくても分かってんだろ？俺たちのダチに手ぇ出したんだ。その時点であいつらの人生終わってんだよ」

４人がそんな会話をしていると、

「幻聴か？あのガキ共俺たちを殺すとか言ってねぇか？」

「ギャハハハハハ！頭どっか逝ってんじゃないの？」

ハンナとアルヴィスはそう言って嘲笑うが、政志達は全く気にせず政志が七機に向かってビシッと指を差す。

「秘密結社『亡国機業（ファントム・タスク）』の構成員アンジェロ・クライシス、並びその他六名」

「テメェラは未登録の機動兵器での大量殺戮」

「及びＩＳ学園に対してのテロ行為。ほんでもって」

「ボクたちの友達を傷つけた」

「以上の罪によって、ここにいる地球連邦軍『三大将』アーノルド・ギアナ、龍鳳・クシュリナーダ、クリストファー・トールギスの同意の下、『元帥』である鈴木政志が貴様等に判決を言い渡す」

「死だ」

政志がそう宣告した瞬間、４人を光が包んだと思ったら、アルが緑の、龍鳳がオレンジの、クリスが白の装甲を身に纏い緑色の粒子を発していたが、政志は装甲も粒子も赤くそれを見た一夏は呟いた。

「赤い・・・・悪魔」

４人の機体を見たアンジェロ達は戸惑いを隠せなかった。

「ちょっと待てよ！あの機体、そしてあれはＧＮ粒子！？」

「間違いない、あれは太陽炉搭載型の・・・・ガンダムだっ！！」

「大将に元帥って、そんなの聞いてないよ！！」

「『深緑の狙撃手』、『茜色の閃光』、『白い魔王』。最も危険なのは、このオリジナルの太陽炉を搭載した三機を凌駕する疑似太陽炉搭載型のあの赤い機体『赤い悪魔』。いや・・・・・・・・・・・・『破壊神』！！」

政志達は久しぶりに機動させたのか手を握ったり開いたりする。そして、政志は大型の実体剣ＧＮバスターソードを、アルはＧＮスナイパーライフル、龍鳳はＧＮビームサーベル、クリスはＧＮバズーカを構える。

「アルケー、鈴木政志。目標を破壊する！」

「ケルディム、アーノルド・ギアナ。目標を狙い撃つ！」

「アリオス、龍鳳・クシュリナーダ。目標を迎撃する！」

「セラヴィー、クリストファー・トールギス。目標を撃滅する！」

こうして四機のガンダムがＩＳ学園に降臨した。

現れた亡霊（後書き）

みなさんの言いたいことは分かりますが、コチラも一言言っていいですか？

どうしてこうなったぁぁぁぁ！！

圧倒的過ぎる勝利（前書き）

ちょっと強すぎるかなぁ

特に政志・・・・・

圧倒的過ぎる勝利

私達はこの任務に就く際に一言だけ上司に言われていた。「万が一ガンダムに会ったら逃げろ」と。しかし、こちらもガンダムを元に作られたらしいＩＳに乗っている上に今回の任務は総勢七人投入される。だから「勝てないことも無いだろ？」と聞いた後に、ガンダムの資料を見せられた。ガンダムに搭載された太陽炉なるものから生成されるＧＮ粒子は、機体の推進力や姿勢制御に使われ、周囲に散布する事によって電波通信やレーダー機器を妨害する効果を発揮し、圧縮して射出する事でビーム兵器として火器にも転用できるらしい。ここまで、分かっているのにどうして作れないのか聞いてみたが、技術が違いすぎるらしい。最後にガンダムが行った戦闘の映像があるらしく、それを見せてもらった。機体が凄いだけなのかもしれないと心の何処かでそう思っていたのかもしれないが、そんな考えはすぐに消えた。

「う、・・・・・・・嘘だろ！？」

その映像には本部で新しく開発された『フラッグ』５００機相手に一方的な戦いをする四機のガンダムの姿があった。考えられない距離からの精密射撃を行う緑のガンダム。目に見えないスピードで動き回るオレンジ色のガンダム。圧倒的な火力で殲滅する白いガンダム。この三機でも私は鳥肌が立った。しかし、その三機以上に危険と感じ、目を釘付けにする機体があった。真っ赤な装甲に真っ赤なＧＮ粒子。動きが他の三機とはまるで違う。「あれを操縦しているのは人間ではない」と私は思った。バイザーで口元しか分からなかったが、その機体のパイロットは確かに大型の剣で敵機を切り裂くたびに笑っていた。まるで悪魔のように。その様子から、あの赤い機体は『赤い悪魔』。または『破壊神』と呼ばれているらしい・・・

・・・

◇

「全員逃げろ！実力が違いすぎる！」

カラミティのフランソワは資料で目の前の四機の強さを知っており、全員に撤退の指示を出す。今までならどんな相手でも逃げることなんて一度も無かった。しかし、あの四機。ガンダムが相手となれば話は別であった。

「チッ、仕方ねぇ。けど、どうせなら・・・・コイツらだけでも！」

イージスのハンナはビームライフルを再び一夏と鈴に向けてトリガーを引こうとした。

しかし、自分の両隣を風が通ったと思った瞬間、彼女の視界に首の無いバラバラに崩れ落ちる自分の姿が映った。それが彼女が見た最後の光景だった。一体何が起きたか分からなかった残りの六人は、バラバラになったハンナの姿と上空にいる一夏と鈴を抱えた政志と龍鳳を見てやっと理解した。あの一瞬でフランを殺して二人を回収したんだと。その回収された一夏と鈴も驚いていた。地上にいたはは

ずがいつの間にか政志と龍鳳に抱えられて上空にいるのだから。

「龍鳳、一夏を頼む。お前は二人の安全を最優先しろ」

「了解や」

政志に抱えられていた一夏は龍鳳に渡されている途中、下の方で先ほど鈴を撃った内の二機ブリッツとデュエルが「よくもフランを！」と叫びながらコチラにビームライフルの銃口を向けているが見えた。

「おいっ！狙われて」

「大丈夫や。俺たちには」

「最高の狙撃手がいる」

トリガーが引かれて、二つのビームが飛んでくるが、桃色の粒子ビームに二つとも『撃ち落と』された。政志達を撃ったアンジェロとミーナは粒子ビームが飛んで来た方を見るとＧＮスナイパーライフルを構えていたアルがいた。

「馬鹿な！ビームを撃ち落としたっていうの！？」

そんな風にアルの射撃に驚いていると、ガチャンッとクリスは六つの砲門を彼女らに向ける。それをみた六人は散開した。しかし、上には『破壊神』である政志がいてほぼ逃げ場がなく戸惑うがクリスはそんなのお構いなしに、

「フェイスバーストモード、圧縮粒子開放」

クリスの背中の黒い部分がスライドし顔を見せ、ＧＮ粒子の放出量が増大する。

「発射」

六つの砲門から放たれる巨大な粒子ビームはレイダーとバスターを飲み込み先ほど修復したアリーナの遮断シールドをも撃ち砕いた。ビームが撃ち終わった後にはレイダーとバスターの姿は無く、完全に消滅してしまった。殺されたのではなくこの世から消えてしまったのだ。

「あいつらぁ！ハンナだけでなく、ジェニーとエリスまで！！」

「止めろミーナ！私達じゃガンダムには勝てない。幸いにもさっきの砲撃で塞がってたシールドにも穴が開いたんだ。生きてさえいれば仇を討つチャンスなんていつでもある」

「くっ、・・・・分かったよ！」

フランは今にも飛びかかって行きそうなミーナの肩を掴んで何とか止めて全員でシールドの穴から逃げようと提案したその時、

「聞いてなかったのか？貴様等は全員ここで殺すって」

声が聞こえフランが振り向いた瞬間、赤い悪魔がこちらに向かって剣を振り降ろしていた。

ドガァァン！

「フラン！・・・・フランソワ・マーキュリー！！」

ミーナがフランの名前を叫ぶがそれが彼女に届くことはない。なぜなら彼女は、赤い悪魔である政志によって縦に真っ二つに切られて爆発しこの世を去ったのだから。

「よくも・・・・よくもフランをーーー！！」

アルヴィスはもう逃げ切れないと自棄になったのか、ただ仲間の仇を討とうとかは分からないが、フォビドゥンの武装である大鎌ニーズヘグで斬りかかろうと政志に突っ込む。そんなアルヴィスを見て政志はニタァと笑う。

「食い破れ、ファングゥ！！」

政志の叫びと共に両腰のバインダーからその名の通り爪のような形をした自立兵器ＧＮファングが六つ出てきた。

「ＢＴ兵器!?けど、このフォビドゥンにビーム兵器は効かないよ！！」

アルヴィスのフォビドゥンには対ビーム防御システムであるエネルギー偏向装甲『ゲシュマイディッヒ・パンツァー』はビームを曲げる能力があるのでアルヴィスはすぐさまファングからのビーム攻撃に備えるが、

「馬鹿がっ！！」

政志はファングの先端部に赤いビームサーベルを発生させ、矛先をアルヴィスに向ける。

ドドドドドッ！！

「グハッ！！」

六つの爪はアルヴィスを貫き、彼女はピクピク動いていたものの政志は刺さっていた全てのファングを抜いた。アルヴィスは地上に落下しファングが政志の両腰のバインダーに戻った瞬間、地上に激突し爆発した。

ドガァァァン！！

「（畜生畜生！残ったのは私とミーナの二人だけ・・・・・・どうせ死ぬなら、せめてこいつらだけでも！！）」

アンジェロはブリッツの武装である『ミラージュコロイド』を展開してセンサーにも視覚的にも反応しないようにして、両手に一夏と鈴を抱えている龍鳳の頭目掛けて左腕に装備された有線式ロケットアンカー『グレイプニール』を発射させ当たると思った直前に龍鳳は首を曲げてクローを避けた。

「（な、避けた！？こっちは見えないハズなのに！！）」

「アル。頼むわ」

「了解」

両手が塞がっていた龍鳳はアルにそう言い、アルはＧＮスナイパーライフルの銃口は誰もいないトコロに向けられた。

「狙い撃つ！！」

そうしてトリガーを引き、発射されたビームは見えない何かを貫きミラージュココロイドを解除されたアンジェロが姿を現した。アンジェロは胸を貫かれたのか穴が開いていて今にも爆発しそうだった。

「どう、して・・・私の姿は・・・ちゃん、と・・・見え、なくなってた・・・ハズ・・・」

「「勘だ（や）」」

ドガァァァン！！

アンジェロも死んで残りはデュエルのミーナだけになり、彼女は地上に降りて地面に手を着き、

「ゆ、許してくれ！頼むから命だけは！！」

必死に助けを請うミーナの前に政志が降り立つ。彼女を見るその目はまるでゴミを見る様な目をしており、それを見たミーナは「殺される」と思いＩＳを解除し生身の姿になる。緑の髪をポニーテールにした２０代であろうその女性の顔は涙で醜いものになっており、さすがに興がそがれたのか政志は彼女を背に歩き出した瞬間、

「このお人好しがぁぁぁぁぁ！！」

ミーナは瞬時にデュエルを起動させビームライフルを向けたがその引き金が引かれることはなかった。

「そんな事だろうと思ったよ」

歩き続ける政志の手にはいつの間にかＧＮバスターソードが握られており、彼女はそれで首と胴体を二つにされたのだ。

ドガァァァン！！

ミーナが死んだと同時に残っていた死体と共に彼女たちのＩＳは全て爆発した。おそらく情報が漏れるのを防ぐため、全員が死んだ時に爆発するように仕組まれていたのだろう。龍鳳に抱えられた一夏と鈴は地上に降ろしてもらい、政志達４人も制服に戻り二人の元に歩み寄る。

「一夏。これがお前が見たがってたガンダムの力だ」

「・・・・・・・・」

政志が話し掛けるものの一夏はあまりにも壮絶な出来事に何も話せないでいた。

「龍鳳・・・・あんた達は一体」

「鈴。お前の言いたいことは分かるけど、今はまぁ待ってくれや」

「さすがに、もう隠しきれないしね」

「どうせ姐さんにも呼び出されるだろうしな。なぁ、政志」

「あぁ、全部話すよ。・・・・・・・・・ガンダムについて」

圧倒的過ぎる勝利（後書き）

あれ？

そろそろラウラ出せるんじゃね？

白の思い、集いし場所は・・・・（前書き）

今回手抜き感が半端ネェ！！

白の思い、集いし場所は・・・・

その日の夜に政志達４人を含め、一夏、箒、セシリア、鈴、千冬、山田先生がＩＳ学園のとある一室に集まり席に着いていた。その部屋は机と椅子以外何も無い密室であった。襲われた鈴と一夏はともかく、戦闘をモニターで見ていただけの箒とセシリアは何故呼ばれているのか分からなそうな顔をしていた。そして、全員が揃ったのを見計らって千冬が口を開いた。

「今回この部屋に呼び出したのは他でも無い。今日の襲撃についてだ。しかしその前に、ガンダムについて知らない連中がいるようなので私が話そう。お前達、本当にいいのか？」

「構わねぇよ。ここにいるメンバーは俺たちが信用にたる奴らだ。それに今回のである程度情報が漏れていって俺たちの存在がバレるだろうし、遅かれ早かれいつかは話すつもりだったしな」

政志のその言葉を聞き箒とセシリアと鈴は「信用されてるんだ」と少し嬉しそうな顔をするが一夏だけは何処か怒っているようにも見えた。その一夏の様子に政志は気づいたが、あえて無視した。

「では私の知っている限りのガンダムについて全て話す。ガンダムとは一言で言えばＧＮドライヴ搭載型のＩＳと言ったほうがいいだろう。またガンダムは第０世代とも呼ばれる分類に当たり、篠ノ之束がＩＳを世界に発表する前から存在していたらしい」

「あの～、すみませんが、『ＧＮドライヴ』とは一体何なのですの？」

セシリアが申し訳なさそうに手をあげて聞いたことの無い単語について質問したのを千冬の代わりにクリスが説明する。

「ＧＮドライヴは『ＧＵＮＤＡＭ　ＮＵＣＬＥＵＳ　ＤＲＩＶＥ（ガンダムの中核のドライヴ）』の略で通称『太陽炉』とも呼ばれていて、重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させ、陽電子と光子を発生させることにより、莫大なエネルギーとＧＮ粒子を半永久的に生み出す、ガンダムの根幹をなす動力機関のことだよ」

「その『ＧＮ粒子』ってのも一体何なのよ？」

「ＧＮ粒子は機体の推進力や姿勢制御に使われたり、周囲に散布する事によって電波通信やレーダー機器を妨害する効果を発揮して、圧縮して射出する事でビーム兵器として火器にも転用できる、簡単に言えば万能なエネルギーやな。基本的には粒子の色は緑なんやけど」

「ちょっと待て。政志のは赤かったぞ」

「政志のアルケーに搭載されてるのは俺たちのとは違う量産可能な疑似太陽炉だからな。性能はオリジナルとほぼ同性能だけど活動時間に限界があるんだよ。ちなみにオリジナルの太陽炉は作るのに莫大な年月がかかるから今のところ存在するのは『五個』だけだな」

その後、政志達はガンダムについて色々と話した。シールドバリアーや絶対防御は存在しないとか、特に驚いたのは政志達４人が地球連邦のトップ４だと聞いた時だった。箒達は「さすがにそれは・・・」と信じられないような顔をしていた。そんな中、山田先生が、

「あの～。どうして、あなた達はそんなものを所持してるのか教え

てくれませんか？」

「ＧＮドライヴを、ガンダムを開発したのは俺たちの育て親朝倉海苑だからさ」

コレを聞いた箒とセシリアと鈴は政志達４人は昔からのただの幼馴染みだと思っていたが今の話を聞くところによると、彼らは実の親とは違う人物に育てられたんだと理解した。しかし、何故そんな危険な兵器を子どもに渡したのかが不思議でならない山田先生は、

「その育て親の人は今どこに」

「殺されたよ」

山田先生の質問を最後まで聞くことなくクリスが答えた。いつものクリスからは考えられないくらいの冷たい声に、セシリアは少し怯えていた。

「そこにいる箒ちゃんの実の姉、篠ノ之束のせいでお義父さんは殺されたんだよ」

「クリス止めろ」

「政志だって言ってたじゃないか！篠ノ之束がＩＳを世界に発表したせいで、ＩＳを上回る存在を知った国々がガンダムが世間に知られるのが怖くてお義父さんを殺したって！！全部あの女のせいじゃないか！！」

「クリス！その事に関しては何も言うなって言ってただろ！！」

「でも、でも・・・・！！」

アルが席を立ち上がってクリスを止めたが、クリスの目からは涙であふれておりそれを見た千冬は「今日はここまでにしよう」と言ってみんなが席を立って解散しようとして政志がドアから出て行こうとした時だった、それまで一言も喋っていないあの男が口を開いた。

「待てよ」

一夏のどこか怒りの籠もった呼び止めにみんなが動きを止めた。

「今日、俺たちを襲ってきた奴らって人が乗ってたんだろ？」

「あぁ、乗ってたで」

「じゃあ、お前達は・・・人を殺したのか？」

「そうだな」

政志はいつもの調子でそう答えるが、一夏の両拳はぐっと握られ肩が震えていた。

「どうして、人を殺して平気でいられるんだよ！！」

「ちょ、何言ってるのよ一夏！政志達は私達を助けてくれたじゃない！！」

「鈴、お前は目の前でアレを見て何とも思わないのかよ！」

「そ、それは・・・・」

鈴が一夏にそう言ったが今まで一夏がこんなにまで怒っているのを見たことが無くたじろいでしまうが、内心鈴も目の前で人が死ぬのを見て怖かったのか少し手が震えていた。それを見て龍鳳は鈴の肩に手を触れ「もうええ」と言って鈴を下がらせた。

「一夏。お前が俺たちのことをどう思おうが、俺たちにはどうでもいい話だ」

一夏は政志の真剣な眼差しを見つめ、その部屋にいる全員が静に話しを聞く。

「だけど、これだけは言っておくぞ。俺たちは大切なものを守るためならなんだってする。人を殺した罪なら、この腐った世界を変えたあとに受けるさ。そのために、世界を変えるために、俺たちはガンダムで戦う、戦い続ける。それだけだ」

アルと龍鳳とクリスは頷き、政志の言葉を聞いた一夏は考えた。同じ歳でいつも一緒にふざけ合ってるやつらがこんなにも重い覚悟をしているかと。自分の知っていた世界の小ささが情けないと思った。

一夏は俯いていた顔を上げた。その表情はいつものような清々しい顔であった。

「強いんだな。お前達は」

それを聞いた政志はフッと笑い、

「強くなんかねぇよ。でも弱いからこそ強くなれる。俺はそう思ってる」

「謙遜すんなよ。改めて、これからもよろしくな」

「あぁ、よろしくな」

お互いを理解した政志と一夏は握手を交わし、更に友情を深めた。
そこにはいつもの二人がいて、周りの空気も暗いものから、明るいものになっていた。政志は今の世界がこんな風に手を取り合って、分かり合える世界だったらどれほど良かったかと、改めて思った。

「（だから俺は破壊する。世界の歪みを！）」

その目には新たなる決意の光が見えた。

◇

―数日後―

◇

所変わってフランスのとある屋敷の玄関前。

「お嬢様。どうぞお乗り下さい」

黒いスーツを来たの使用人らしき男が目の前の濃い金髪の綺麗な顔立ちをした少女に話しかける。男は黒い高級車の後部座席のドアを開け車に乗るように催促する。

「お嬢様は止めてよ。僕は今『男』なんだから」

「申し訳ございません」

男は目の前の少女が気の毒で仕方がなかった。なにが嬉しくて性別を偽らねばならないのだろうか。そして、娘を利用してまで会社の経営危機を回避しようとしている自分達の雇い主に憤りを感じた。

『少年』は座席に座り、ドアを閉められた車は空港へ発車する。

「（どうして、僕はこんなことしているんだろう・・・・・）」

目指すは日本、ＩＳ学園。

◇

また所変わってとあるドイツ軍基地のヘリポート。そこでは左目に黒い眼帯をした数十名の女性が一人の長い銀髪の少女を見送っていた。少女がヘリに乗ると全員が敬礼をし、その少女が彼女らより上の階級であることが分かる。

「クラリッサ。しばらくの間、『シュヴァルツァ・ハーゼ』を任せるぞ」

「了解しました。隊長もお気を付けて」

「では行ってくる」

ヘリのドアを閉めヘリはプロペラを回し、ヘリポートを飛び立つ。少女はこれから向かう先にいる二人の男のことについて考えていた。

「（教官の顔に泥を塗った織斑一夏。そして、・・・・・・・・・『裏切り者』鈴木政志。私はお前達を決して許さない！）」

少女が向かう先は日本、ＩＳ学園。

◇

またまた所変わってとある地球連邦軍の技術研究室。その部屋は関係者以外立ち入り禁止のほか技術研究室と違い、数名の限られた人間にしか入室する事のできない部屋である。その部屋には茶髪のスタイル抜群の少女と白髪の少年がいて、白髪の少年に至っては某甘いもの大好き少年と同じ顔をしていた。

「ヴィンセント。必要のないデータと資料はもう処分した？」

「それならもうやったぜ。それより、ななせ。いつになったら政志兄貴のところに行けんだよ」

「もうしばらく待って。必要なデータと機材を纏めてるから」

そう言ってななせはキーボードをカチカチ押して、モニターのデータを纏める。そのデータにヴィンセントは目を引かれた。

「それが兄貴の新しい武装か」

「うん。ＧＮランチャーにＧＮバスターブレイド、さらに腰部のバインダーにＧＮコンデンサー内蔵の追加アーマーを付けることにでＧＮミサイルの増設」

「オイオイ、そんなに武装増やしたら粒子消費量がトンデモねぇことになるんじゃねぇのか？ただでさえアルケーには疑似太陽炉を三つ使ってんだから」

「確かにこれだけの武装をそのまま追加したら、機動性が落ちちゃう。でも、機動性の低下と粒子消費量を何とかするために『ダブルオー』の『ツインドライヴ・システム』を」

「アルケーに搭載するってのか？無茶苦茶だな、オイ」

「私も最初は反対したんだけど、政志がどうしてもって」

「相変わらずななせは兄貴にぞっこんだな」

「べ、別にそんなんじゃ無いんだから／／／／」

からかわれたななせは顔を真っ赤にして否定するがまったく説得力が感じられず、ヴィンセントはつまらなそうな顔をする。ななせは顔を赤くしつつもキーボードを打ち続ける。

「それよりも早く会いてぇな。兄貴達に」

「うん。そのためにも早く完成させないとね。おじさんが残していってくれた二基のＧＮドライヴとみんなの武装も」

そう言ってななせはモニターに『ヤークトアルケー』、『ＧＮライフルビット』、『ＧＮハンドミサイルユニット』のデータを映し出す。そして、彼女たちが向かうも日本、ＩＳ学園。

白の思い、集いし場所は・・・・（後書き）

やっとラウラとシャル出せた。

オリキャラについては又後書きか何かで設定出しますんで、多分・・・・・・・・・

嵐来たる（前書き）

今回、昨日投稿出来なかった分も合わせちゃったのでかなり長いです

後書きにアンケートがあるので、出来たら見て下さい

嵐来たる

「というわけでお引っ越しです」

「「「はい？」」」

部屋で政志と共にＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！なるアニメを見ていた一夏とアルだったが、いきなりの山田先生の訪問によって観賞会は一旦中止にして山田先生の訪問理由を聞いてみたところ、冒頭にもどる。ちなみにどこから持ち込んだのか政志達の部屋の壁には映画館とかでよく見るスクリーンがあった。

「山Ｐ？悪いけど主語が無ぇからなんのことか全くわかんねぇんだけど」

「あ、ハイっ。すみませんっ」

小動物のように慌てふためく、本当にこれで先生なのか？

「あのですね。部屋の調整が済んだので、三人の内の誰かが用意できた部屋に引っ越してもらおうと思ったんですが」

「「アル、お前が行け」」

「何でだよ！？」

二人部屋のトコロを三人で今まで住んでいたのだが、どうやら部屋が開いたらしく三人のうちの誰かがそちらに移らないといけないらしい。それを聞いた瞬間、政志と一夏はビシッとアルの方に指をさ

した。

「だって、お前床で寝てるから起きた時床にいられると正直邪魔」

「俺は純粋にこの部屋から出て行って欲しいだけだけど」

「まぁ、前からちょっと邪魔かなぁとは気にしてたけど・・・ってオイっ！イッチー、お前そんなに俺の事嫌いだったのか！？」

「あぁ」

「即答かよぉ！？それに政志、お前は何さっきから俺の荷物を運んでんだよ！？」

「山田先生。荷物運ぶの手伝ってください」

「はーい」

「無視すんなぁぁ！！」

アルの叫びは悲しくもスルーされ、結局アルが政志達の部屋から出て行くことになった。最後の荷物を運び終えた後、

「まぁなんだ。寂しくなったらいつでも遊びにこいよ」

「イッチー・・・・・。お前、俺に対して最近冷たくないか？」

「なんや。また騒いでんのか？」

「みんなして部屋の前でどうしたの？」

そこに龍鳳とクリスが通りかかり、政志達が集まっていた部屋を覗いてアルの荷物があるのに気づいた龍鳳はニヤリと笑い、アルの肩を掴み。

「寂しくなったら俺らの部屋にも来てええんやで」

「うるせぇよ！」

その後、アルは部屋にあるベッドを見て「やっとベッドで寝れる」とか思っていたが昨日まで三人で楽しく過ごしていたのが一人になったので若干寂しかった。

「あれっ、どうしてだろう?涙が出る」

念願のベッドに入って電気を消してＩＳ学園に来て初めて一人で過ごす夜。

「（あの後、奏ちゃんどうなったんだろ?）」

何気にＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ!にハマッていたアル。しかし、翌日には彼の寂しい夜が終わることなど、この時誰も創造していなかった・・・・・。

◇

翌日の朝。

「お前、今度クラナドのＤＶＤＢＯＸ奢れよな」

「奢る対象がデカすぎるだろ！」

昨日の夜アルは一人で何とか寝れたものの、いつもなら起こしてくれる政志と一夏がいないため寝坊してしまい、心配になった政志が向かえに行っていたらこうなり朝の本鈴がついさっき鳴ったばかりである。全力で廊下を走り何とか教室にたどり着きドアを開けると、

バシンッ！

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

《・・・・・・・・》

その瞬間教室の空気が死んだ。政志とアルにいたっては、友人である一夏が昨日まではいなかったはずの銀髪の美少女に平手打ちを食らわされたのだから、「え、何この修羅場？」と思ったが一夏を打

った少女に政志は見覚えがあり、向こうも政志達の存在に気付いたのか視線を政志達に向ける。

「あっ。ラウラ」

「鈴木・・・政志・・・・・。やはりこのクラスだったか」

「久しぶりだな。元気にしてたか？」

そう言って政志は未だにクラスが静まり返っている中、ラウラのトコロまで歩いて行き肩に手を置こうとした時、

バシンッ！

「私に触れるな。この『裏切り者』がっ！」

政志の手は払われ、明かに怒りを込めて政志を睨みつけるラウラ。そのラウラの発言を聞き、龍鳳とクリスは立ち上がり、アルも動いた。

「おいっ！政志が『裏切り者』ってどういうことやッ！」

「一夏くんを打ったのは見過ごしてあげたけど、さすがにコレは見過ごせないね」

「俺たちのダチを侮辱するなんてとんだ命知らずだなぁ。覚悟できてんのか？」

友達が勝手に『裏切り者』と呼ばれ怒りを露わにする三人。しかし、ラウラは動じずただ政志を睨み続けていた。この緊迫状態がいつま

で続くのやらと思っていたら、

「あー・・・・・ゴホンゴホン！ではＨＲを終える。各人はすぐに着替えて第二グラウンドへ集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩き千冬は行動を促す。アルと龍鳳とクリスと一夏は何処か腑に落ちない。というより腹を立てていたのだが、教室では女子が着替えるため男子は移動しなくてはならない。

「男子はデュノアの面倒を見てやれ。転校してばかりでいろいろと不便だろうからな」

「「・・・・・誰？」」

政志とアルは朝のＨＲに遅刻したため転校生のことなど何も知らず、教卓の方を見ると濃い金髪の『貴公子』と呼ぶに相応しい美少年がいるのに気づいた。しかし、政志は一人だけ何か納得したように、

「「（男？どうみてもアレ・・・・それにデュノアって確か・・・・・・あぁ、そういうことか）」」

ラウラの敵意は気になっていたが、そのまま教室に残っているわけにもいかず政志、一夏、アル、龍鳳、クリスは美少年の元へ向かった。

「え～と、君が織斑君で鈴木君にギアナ君にクシュリナーダ君にトールギス君だね？初めまして僕は」

「そんなことは後にしようぜ。さっさとしねぇと女子が着替え始め

ちまう」

アルは美少年の手を取り教室を出て政志達もその後を追う。

「ところでお前。名前何て言うの？」

「えっ／／／／ぼ、僕はシャルル、シャルル・デュノア。フランスから来たんだ」

一瞬、シャルルの様子がおかしいように感じ取ったがアルは「気のせいか」と無視した。

「あっ、転校生見ーッけ！」

「しかも他の男子もいるよ！」

各組各学年の女子がまるでアイドルでも見つけたかのように追いかけてくる。これに捕まったら授業に遅れるのは目に見えていると悟った政志達は更衣室まで走りだした。

「何でみんなあんなに騒いでるの？」

シャルルは状況が飲み込めないのか困惑顔で聞いてくる。

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「え？あ、そうだね・・・・」

どこか暗い表情になり、アルは「どうしたんだコイツ？」みたいな顔をするが、またもや彼らに面倒くさい状況が襲いかかった。

「逃がすな！もの共、出会え出会えぇ！」

どこの武家屋敷だよと突っ込みたくなるような叫びと共に女子の数が明らかに増え、廊下を埋め尽くしている。

「チィ、あの暇人共が！授業の準備でもしてろっての！」

「それより政志！この状況どうするんだよ！？」

「クリス。セラヴィーのハイパーバーストで全部ぶっ飛ばせ」

「何全員殺させようとしとるんや！」

「いくよ、セラヴィー！」

「「止んかーーッ！！」」

一夏とアルと龍鳳の魂の叫びで何とかクリスを止めたが、政志とクリスは「えー」と不満そうに言う。あの話以来、政志達は授業や日常でガンダムを使用するようになった。政志達曰く「隠すのが面倒くさい」らしい。

そんなこんなで何とか女子たちから逃げ切れ更衣室にたどり着いた政志達。

「まったく、よく懲りねぇよな」

「せやな」

「いつもあんな感じなの？」

「「「「「あぁ（うん）」」」」」

シャルルはさっきの騒動が日常茶飯事だと聞き苦笑いをする。そこにアルが何か思い出したかのように、

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺はアーノルド・ギアナ。俺の事はアルでいいぜ。こっちが鈴木政志に織斑一夏。んでこっちが龍鳳・クシュリナーダにクリストファー・トールギスだ」

「鈴木政志だ。よろしくな」

「一夏って呼んでくれ」

「これからは仲良くしていこうや」

「よろしくね。デュノアくん」

「うん。よろしくねアル、政志、一夏、龍鳳、クリス。僕のこともシャルルでいいよ」

「分かった。よろしくな、シャルル」

「それはそうと、さっさと着替えた方が良さそうやで」

話しに結構時間を取られて、それに気付きＩＳスーツに着替えるため服を脱ぎだす政志、一夏、アル、龍鳳、クリス。

「わあっ！？」

「「「「「？」」」」」

顔を両手で隠し、妙に恥ずかしがるシャルル。

「何や、忘れもんか？」

「いや、そうじゃないよ。そうじゃないんだけど・・・・・」

モジモジし始めて顔を赤らめるシャルルを見て、ロッカーと向き合い着替えを続けているアルはシャルルが何を言いたいのか理解したかのように、

「恥ずかしいなら、そう言えよ。向こう向いててやるから」

それを見た政志達もアルの真似をし着替え始めた。アルがこんな風に気の向いた行動をするのが珍しいのか政志達は少し微笑んでいた。

「あ、ありがとう。すぐに着替えるね」

「では、本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

《はい！》

今回は一組と二組がいるため人数はいつもの倍で、声も妙に気合いが入っている。ちなみに政志達は時間には間に合ったが千冬が「五分前集合だ」と言いだしたので遅そくなったのは一夏のせいにして、何とか一夏だけの犠牲ですんだ。

「今日は戦闘を実演してもらう。ちょうど格闘と射撃の上手い奴らがいることだしな。政志！ギアナ！前に出ろ」

そう言われ政志とアルは女子からの黄色い叫び声が飛び交う中、渋々前に出て行く。

「まさか、こんなところでお前と戦り合うとはな」

「今までの借り返させてもらうぞ、政志！」

二人はアルケーとケルディムを起動させ、千冬の試合開始の合図を待つ。ラウラとシャルルは二人のＩＳをまじまじと見ており、政志とアルは二人の視線に気づいたが敢えて気にせずにいた。

「では、はじめ！」

号令と共に二人は飛翔し、政志はバスターソードを右手で構え、アルはビームピストルを両手に構える。

「行くぜぇ！」

「来いよ、政志ぃ！」

政志は弾丸のような速さで突っ込みアルはビームピストルを連射し向かえ撃つが全て避けられ距離を縮められる。ビームピストルからスナイパーライフルに換装し、アルは前を向きながらフルスピードで後退しながら政志に狙いを定める。

「狙い撃つぜ！」

トリガーを引きビームは政志に向かい放たれるが、政志はスピードを落としバスターソードの腹で受け止める。そのままアルはライフルに腰部のミサイルを交ぜ段幕を張りつつ距離を取る。

「ちぃ、シールドビット！」

左肩と両膝にそれぞれ二基ずつ付いていたシールドビットが政志の周りに展開され、銃口が政志に向けられる。政志はミサイルとアルのライフルによる精密射撃で動きがとれずにいて、ビットからビームが放たれ決着が着いたと誰もが思ったが、

「ところがぎっちょん！」

アルケーの両脚爪先からビームサーベルが現れビットからのビームを足を巧みに使い全て叩き落とした。その後、バスターソードを仕舞い両手にビームサーベルを構え四つのビットを脚のサーベルと共に目にも止まらぬ速さで斬り落とした。政志はニヤリと笑みを浮かべアルの方を見る。

「惜しかったなぁ、アル」

「相変わらず化け物じみた動きしやがってッ！」

アルは高速で近づいてくる政志に対して、ライフルから再びピストルに変え応戦しようとしたが、

「そこまでだ！」

千冬の終了の合図と共に二人は動きを止め、地上におりＩＳを解除する。二人の戦闘を見ていた女子達からは拍手の嵐が起こり一夏と箒、セシリアなどの代表候補生はポカンとしており、二人のレベルの高さに驚く。

「前より射撃の腕上げたんじゃねぇか？結構ヤバかったぞ」

「よく言うぜ。ファング使って無かったくせに。それより戦闘の時に性格変わるのどうにかなんねぇのか？怖いんだけど」

「それ無理。あれ無意識でやってるから」

確かに、政志は戦闘になるとよく悪魔のように笑ったり普段言いそうにない事を口にするのだがどうやら本人は無意識でやっているらしく、そのせいで『赤い悪魔』やら『破壊神』などと物騒なあだ名

で呼ばれているのに気付いていないらしい。

「さきほど二人の戦闘を見てもらったが、諸君にはアレぐらいの動きを出来るようにしてもらう」

《（いや、さすがに無理だろ・・・）》

その場にいた千冬以外そう突っ込んだのであった。

授業が終わり、訓練用ＩＳを片づける男子六名。ＩＳは当たり前なんだが重く運ぶのに苦労するのだが政志だけはスラスラと運んでいたが、政志とは裏腹に力の無いシャルルは一人では運べずアルに手伝ってもらっていた。そんな二人の共同作業を政志は何故かニヤニヤしながら見ていたが、一夏と龍鳳とクリスは「またアニメのことでも考えてるんだろうなぁ」と心の中で思っていた。

「ごめんね。僕、みんなみたいに力無いから・・・」

「別に謝ることねぇよ。困った時はお互い様だろ？」

そう言いアルの無邪気な笑みにシャルルはクスッと可愛らしく笑い、それを見たアルは顔を赤くする。

「（待て待て待て、落ち着け俺！なんでちょっとドキッとしてんだよ！？俺にはそんな趣味は無いハズ！いや、実はそうなのか！？そうなのか！？どうなんだ俺ーーーっ！！）」

頭の中で「自分はホモではない」と必死に否定するアルをシャルルは不思議そうに見ていた。

「そこのホモ。さっさと運べや、ボケ」

「誰がホモだゴラァ！！」

全部運び終え、着替えに行こうとしたがシャルルは自機の調整があるからと言って一人だけ残った。その時のシャルルの顔が暗かったのには誰も気付かなかった・・・・・。

◇

昼休みになり、一夏に昼飯を一緒に食べないかと誘った箒だったが、

「・・・・・どういうことだ」

「何って、天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな・・・・・！」

箒が周りに目をやると、そこにはアルに龍鳳、クリス、セシリア、鈴、そしてシャルルがいた。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方が美味いだろ。それにシャルルは転校してきたばっかで右も左も分からないだろうし」

「そ、それはそうだが・・・・・」

ぐぬぬ・・・と何か言いたげに拳を握る箒。それを見ていたセシリアと鈴は箒が可哀想に見え、それを見かねたアルが「早く食べようぜ」と催促させアルとシャルルは購買のパンを、龍鳳は鈴に作ってもらった酢豚を、クリスはセシリアに作ってもらったサンドイッチを、一夏は箒に作ってもらった弁当を食べていたが、クリスの顔

が凄いことになっていたのは秘密である。

「そういえば政志はどうしたの？」

「政志やったら、用事があるとか言ってたで。」

「それよりクリス。お前また腕上げたんじゃねぇのか？」

弁当を食べた後にクリスが作ってきたというビスケットとクッキーを食べていたのだが、さすがに趣味が菓子作りなだけあってかなり美味しいらしく女子陣はレシピをクリスに問いただしていた。

「おい。あれ政志じゃねぇか？」

クッキーを片手に持ったアルが手すりの近くでそう言うためそこにいた全員がアルのトコロまで移動し、屋上から見える渡り廊下を見るとそこには確かに政志がいて、他にも一人小柄な女子がいるのが見えた。

「ッ！アイツ・・・！」

その女子を見た瞬間シャルルと鈴とセシリア以外の顔が険しくなり、箒がその少女の名前を呟く。

「ラウラ・・・・ボーデヴィッヒ」

「あの女一体何処から来たんだ？」

「確かドイツとか言っとったで」

「ドイツ・・・・・・あっ」

「どうしたのアル？」

ラウラが来た国を聞いて何か思い出したかのようなアルにシャルルが首をかしげて質問する。

「思い出したぜ。ドイツっていえば昔俺たちが連邦に入ってすぐ政志が研修に行った国だ！」

《えーーーー！？》

政志達は地球連邦に入る前に試験を受け、そのあまりにも高い身体能力を買われ上の階級を与えてもらえるようになったのだが、いきなり軍に入って任務にあたらせるわけにもいかないので、政志はドイツ、アルと龍鳳とクリスはロシアに研修へ行かされたのである。

「これで政志とあの娘が知り合いだってのにも合点がいくね」

「でも、それでは政志さんが『裏切り者』と呼ばれる理由にはなりませんわ」

そんな話をしていると政志とラウラの会話が僅かながら聞こえたので静にして黙って聞く事にした。

◇

時は少し遡り、授業が終わった後すぐに政志はラウラに「話がある」から渡り廊下に来い」と言われたため、別に断る理由も無かったので政志は昼休みに渡り廊下に向かった。政志が行くとラウラが手すりにもたれ掛かり腕を組んで待っていた。

「話って何だよ?」

「・・・・・・・・一つ、聞きたい事がある」

真剣な表情で政志を赤い瞳で見つめ、それを見て政志も真剣な表情になる。

「お前が『アロウズ』にいたというのは本当なのか?」

「お前・・・・・どこでそれを」

「いいから答えろ!!」

政志はそんな質問が来るとは思ってなかったようで、答えるか悩んだがラウラの凄まじい気迫に押されて答えないわけにもいかず、

「あぁ。俺は『アロウズ』にいた」

「ッ！やはり、そうか・・・・・・！」

「話はそれだけか。なら俺はもう行くぞ」

そう言って政志は歩きだしその場から立ち去る。ラウラは政志が見えなくなるまで彼の背中を涙を溜めた瞳で睨み続け、手を強く握りしめていた。

◇

「「「・・・・・・」」」

政志とラウラの会話を聞いた後、アルと龍鳳とクリスの三人は黙り込んで、一夏は聞いたことの無い単語に疑問を持った。

「なぁ、『アロウズ』って何だ？」

「僕もあまりよく知らないけど、確か地球連邦の中にある独立治安維持部隊のことだよね？」

「しかし、アロウズは二年前に反政府組織『カタロン』の弾圧後に解散したと聞いていたのだが」

「私も」

「私もですわ」

「でも、政志がそんなとこにいたなんてな」

「うん。ちょっと驚い」

「俺も驚いたよ。お前達に盗み聞きの趣味があるなんてな」

ビクッとして、ギギギと機械音を立てながら声のする方を向くと先ほどまで渡り廊下にいた政志がいた。すたすたと歩いてくるがその表情は少し何処か不機嫌にも見えた。すると、政志はアルと龍鳳とクリスの視線に気付き、

「アル、何処まで話した」

「いや、まだ何も」

「政志。話すって一体何を話すんだ？」

「俺が、俺たち４人がアロウズに入った理由とアロウズ無くなった本当の理由だ」

それを聞き、驚く一夏、箒、セシリア、鈴、シャルル。そんな五人を無視して政志は語り出す。

「まずお前達が知ってるアロウズだが、最初は地球連邦の番犬的な機能をはたしていたんだが、それは表だっての話。実際は連邦非加盟国や反政府組織の嫌疑がある者達を徹底して弾圧し、その所業を闇に葬ることを平然と行ってきていたんだ。それを見かねた俺たち４人は連邦の研修が終えた後、すぐにアロウズに入ったんだよ」

自分達の聞いていたのとは全く違う事実に唖然とする五人。そこで鈴が、

「で、でも、どうしてそんな部隊に入ったの？そんな危険な部隊に・・・」

「簡単な話や。大きな部隊を襲撃するんには相手が油断してる時が一番なんや。だから俺たちはアロウズに入隊して」

「ちょ、ちょっと待って！まさかアロウズが解散したのって」

「解散ていうより、俺たちが叩き潰したんだよ。二度と再結成出来ねぇようにな」

「アロウズは以前から連邦本部や他の国々が危険視していたからね。ボクたちはアロウズを徹底的に叩いた後、連邦本部にその事を報告しにいったんだよ」

「しかし、そんなことすぐには信じてくれないんじゃないのですか？」

「そう思った俺たちはアロウズの最高司令官であるホーマー・カタギリの身柄も手みやげに持って行ったんだ。それを見てアイツら俺たちを佐官にしてくれるって言ったんだけど俺が『それじゃ割に合わねぇ』って言ったら、今度は元帥に大将と連邦のトップ４が来て『何が欲しい金か?』とかほざきやがったから『あんたらの地位をよこせ』って言ってやったんだよ」

「で、どうなったんだ?」

「そりゃ向こうも『巫山戯るな!』言うて怒りだして、仕方ない思った俺たちはその４人がアロウズの悪政を支援するような動きをしていた証拠を見せつけてもまだ諦めんでどうしよかと思てたら政志が『ここで死ぬのとどっちが良い?』って殺気を全開にして言うた瞬間向こうも諦めたっちゅうこっちゃ」

《それ完全に脅しだからな!!》

「こうして俺たち４人は見事アロウズを倒して連邦のトップ４になったのでした」

「めでたしめでたし」

昔話の締めのように軽く言っているが内容はかなり重く一夏達も突っ込みたいがそれどころではなかった。政志たちがこの年齢で元帥やら大将になっているのに疑問を抱いていたがようやく分かったが一つだけ解決していない問題が残っていた。

「話はだいたい理解したけど、それがどうして政志がラウラに『裏切り者』って呼ばれるのとどう関係があるんだ?」

これには一夏だけでなく政志以外全員分からなかった。

「元帥になって知ったんだけどドイツ軍の何人かがアロウズに殺されてんだよ」

「でも、それって・・・・・」

「俺は研修の時にラウラとある約束をしてな。多分、その約束の内容が俺がアロウズに入ったのと関係してるんだろうな」

「その約束って何なの？」

「・・・・・・・」

政志は鈴の質問には答えず、黙ってそのまま屋上を後にした。その時の政志の背中からは悲しみが感じられたとその場にいた全員が語った。政志は歩きながらラウラと約束をした時のことを思いかえす。

◇

ドイツ軍での研修を終えた政志は連邦本部に帰還することになった。
そのため空港がある街まで汽車に乗って行こうと駅で待っていたのだが、何故かその日は政志以外誰もいなかった。

「アル達元気かな～」

その駅には汽車は2時間に一本の割合でしか通らず、政志はベンチに座って時間を弄んでいた。すると、駅に一人の少女が走り込んできて、

「政志ッ！」

「ラウラ・・・・お前、訓練はどうしたんだ？」

「それならクラリッサに言ってある」

エッヘンと胸を張って言うラウラに政志は溜息を吐いたが、ラウラは何処か寂しそうな顔になる。

「黙って行くなんて、・・・・水臭いぞ」

「そんなつもりねぇよ。それより立ってないで座ったらどうだ？」

政志はそう言い自分の開いてる隣の席を手で叩き、ラウラはそこにちょこんと座る。

「「・・・・・・・」」

何も喋る話題も無く沈黙が続き、そろそろ汽車が来る時間が近づい

てきた。それに気付いてか、

「どうして政志は、軍に入ろうと思ったんだ?」

ラウラのその質問に政志は何処か遠くを見るような顔をして答えだした。

「俺には、大切な人がいたんだけど・・・・・・そいつ、俺の目の前で死んだんだよ」

「え?」

「あの時、手を伸ばせば間に合ったんじゃないかって今でも後悔してる。そいつを失ってからは、俺は生きているのが嫌になったよ。守れなかった自分を殺したかった。でも、そんなことをしても死んだ人間が戻ってくるわけ。そんなこと考えてたら、そいつがよく言ってたことを思い出したんだよ。『世界中の人が幸せになって笑えるようになればいいなぁ』って。だから俺は、アイツが叶えれなかった夢を叶える。そんなとこかな」

ラウラは今まで聞きたかった政志の戦う理由を聞き、何処か嬉しい気持ちになる。そんなラウラは何か思いついたように、

「なぁ、政志。一つ約束してくれないか?」

「いいけど、何約束すんだよ」

「お前の力は織斑教官と同じ、いやそれ以上のものだ。だからその力で多くの人を救って欲しい」

「なんだそれ。約束の内にはいんねぇぞそれ」

「じゃあ、もう一つだけいいか？」

「どうぞ」

「もう二度と自分のことを嫌いだなんて言わないでくれ。もっと自分を大切にしろ」

政志はラウラの方を見ると、ラウラは軍人としてではなく一人の女の子として自分を見つめていた。それの顔に政志は少しドキッとしてしまうがバレないように目線をそらす。

「分かったよ。約束だな」

政志がそう言うとラウラは右手の小指を政志の方に突き出してきた。

「日本では約束をする時に『指切り』とやらをするのだろう？だったら」

「仕方ねぇなぁ」

政志は目の前の無垢な少女のために自分の小指を彼女の小指を絡め、見つめ合ってお互い微笑んで、

「指切りでんまん　嘘着いたら　スカットミサイル　飲～ます　指切った♪」

「・・・・・・」

「どうした?どこか違っていたか?」

「いや・・・・合ってるよ」

政志は「誰だよスカットミサイルって教えた奴」と心の中で突っ込み、間違えを指摘しようかとしたがなんだか可哀想なので止めた。そんなことをしている汽笛が鳴り、ラウラは悲しそうな顔をする。汽車は駅で止まり、政志は荷物を持って汽車に乗ろうとした。

「政志ッ!」

振り向くと、今にも泣きそうな顔でこちらを見ているラウラが走り寄ってきた。

「選別だ。これを持って行け」

「それって・・・・」

そう言ってラウラは左目に付けていた眼帯を外し、政志に渡す。眼帯はラウラの所属するＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』の証。そんな大事なものをもらって良いのか悩んだが、

「ありがとう。大切にするよ」

政志はそう言い眼帯を受け取り、ラウラの頭を撫でる。

「じゃあな。ラウラ」

「お前も元気でな。政志」

ドアが閉まり、汽車が発車する。ラウラは汽車が見えなくなるまで手を振り、その目には涙があふれていた。今までどんな辛いことがあって泣かなかった少女がこの日、初めて泣いた。

嵐来たる（後書き）

近々政志達の予備の機体を出そうと思うのですが、最後の一機が決まっていないので皆様のご意見を聞かせて下さい。あと出来たら誰がどの機体に乗るかも考えてくれたら幸いです。

?:ユニコーン

?:シナンジュ

?:クシャトリア

?:未定

A:政志

B:アル

C:龍鳳

D:クリス

アーノルド、シャルルの秘密を知る（前書き）

今回はアニメで大人気のあの話です

アーノルド、シャルルの秘密を知る

「ヒャッホォウ！ロンリーマン卒業だぜ！」

放課後になって部屋に帰るとアルの部屋にシャルルが入ることを知ったアルはピヨ～ン♪とどこかの某マリオさんのようなジャンプをして歓喜の声をあげ、シャルルはそれを見て笑っていた。

「ココアと緑茶どっちがいい？」

「じゃあ、緑茶で」

「ほい」

「ありがとう。僕は紅茶も好きだったけど、こっちも好きかな。何だか不思議な感じがして」

二人は食事まで暇だったので、アルが入れてきた緑茶で時間を潰していた。

「でも、意外だな。アルってどっちかって言えばコーヒーとかが好きそうなのに」

「確かにコーヒーも好きだけど、俺が持ってる緑茶とココアは龍鳳とクリスがくれたやつなんだ。あいつら買いすぎて余るから、いつも分けてくれるんだよ」

「そうなんだ。なんかアル達って本当仲がいいよね」

「そうかぁ？政志はアニオタだし、イッチーは唐変木だし、龍鳳は馬鹿だし、クリスは大の菓子好きだし」

「アハハハ。大変なんだね」

そんか感じで談笑しつつ、その中でシャルルの見せる柔らかい笑みに、男と分かっていてもドキッとしてしまうアルがいた。その後、シャワーの順番など部屋の事について決めていた。

「そういえば、いつもは放課後に一夏のＩＳの特訓に参加してるって聞いたけど、そうなの？」

「参加してるって言うより、俺たちがあいつらに教えてるって言った方が正しいけどな」

「じゃあ、僕も参加していいかな？アルに射撃を教えてもらいたいんだけど」

「俺で良かったらいいぜ。射撃には自信があるから」

「今日の授業で見たけどアルも政志も凄かったよ」

「でも政志にはなかなか勝てねぇんだよな～」

「まぁ、あんな動きされたらね・・・・・」

「ったく、どう鍛えたら全方向からの攻撃を捌けるようになるんだよ」

政志の身体能力に苦笑いするアルとシャルル。昨日の一人で寝たの

が余程寂しかったのか、やたらとテンションが高いアルをシャルルは笑いながら見ていた。

なんだかんだで放課後の練習にシャルルも加わることになった。

◇

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「言われてみればそうだな。武器の特性を把握してなかったら話になんねぇからな」

「そ、そうなのか？一応わかってるつもりだったんだんだが・・・・・」

土曜日。シャルルが転校してきてから、もう五日になる。ＩＳ学園の土曜の午後は完全に自由時間になっているから、放課後の特訓と違い他の生徒もそこそこ来ていた。とは言っても、練習している生徒よりも観客席側のいる生徒の数が圧倒的に多い。おそらくＩＳ学園の男子が全員集合しているのと政志達の機体を見るのが目的であろう。しかしその日に限って、アルとシャルルと一夏以外は全員用事でいなかった。アルはケルディム、一夏は白式、シャルルはラファール・リヴァイヴ・カスタム?を起動させていた。

「悪いなシャルル。俺たちこういうの無意識でやってるからどう教えていいか分からなくてな。お前がいてくれて助かったよ」

アルはシャルルの教え方の分かりやすさに関心していた。大体のことなら彼らだけでも教えられるのだが、細かいことになると

『こう、ずばーっとやってるから、がきんっ!どかんっ!という感じだ』

『なんとなく分かるでしょ?感覚よ感覚。・・・・・はぁ?なんでわかんないのよ。バカじゃないの?』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ５度傾けて、回避の時は後方へ２０度反転ですわ』

『こういうのは実際に身体で覚えた方が早ぇんだよ!』

『ほらほら、ちゃんと避けへんと当たってまうで!』

上から、箒、鈴、セシリア、アル、龍鳳。箒は相変わらず擬音語だ

けで何を言ってるか分からないので理解不能。鈴のもは「それで分かるのはあなただけですよ」と突っ込みが入る程のものでこれまた理解不能。セシリアのは理論的には間違ってないのだろうが細かすぎてこれまた理解不能。後の二人のは完全実践主義で避けるのに必死で理解する暇も無く、最後の頼みの綱である地球連邦の破壊神と白い魔王はというと、

『逝けよ、ファングゥ！』

『セラヴィー、圧縮粒子開放』

・・・・・・早い話、シャルルが来てくれなかったら一夏は近々死んでたと思う。

「いいよ全然。僕もアルに教えてもらってばかりじゃ悪いしね」

そんな風に三人で訓練をしていたら周りがざわつきだし、何事かと思いみんなが向いている方を見ると、専用機である『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開したラウラがいた。

「あれはドイツの第三世代型か？」

「でも、まだトライアル段階だって聞いてたけど・・・・」

ラウラはあの日政志と話をしていらい誰ともつるもうともせず、それどころか会話もしていない。まさに孤高の女子。そんな彼女が一夏の方に視線を向け、

「織斑一夏」

「・・・何だよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。戦う理由がねぇ」

「お前には無くても私にはある」

そう言われた一夏の顔が一瞬苦くなったのをアルは逃がさなかった。政志はともかく一夏がここまで目の敵にされている理由がどことなくアルには分かった。

「それにどうしても戦いたいっていうんなら、もうじき学年別トーナメントがあるだろ？それまで待てよ」

「そうか。ならば」

一夏には戦う気が無いと判断したラウラは意地でも戦わせようと右肩の大型レールカノンを一夏に向けて発射した。しかし、弾は一夏に当たる直前にシャルルのシールドで弾かれた。

「いきなり戦いをしかけるなんて、ドイツの人はずいぶんと沸点が低いんだね」

「貴様・・・」

シャルルは瞬時に両腕にアサルトカノンを展開しラウラに向ける。一夏とアルはシャルルの装備呼び出しの早さに目を見張った。

「（へぇ、なかなか早ぇじゃねぇか）」

「フランスの第2世代型ごときでこの私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第3世代型よりは動けるだろうからね」

そんな風にアルが関心していると、両者は見合って今にも戦い出しそうになり先手を打ったラウラの大型レールカノンが火を噴いた瞬間、

キュインッ！

「その辺にしておけよ。ドイツの暴犬さん」

アルのライフルから放たれた粒子ビームがラウラの実弾を掻き消した。それを見たラウラがカノンの砲身をアルに向けるが、いきなりカノンが爆発した。

「くっ、一体何が・・・・まさか貴様！」

「す、凄い・・・・」

「？」

一夏は理解していないが、アルは最初にラウラのカノンから放たれた弾を撃つのとほぼ同時にもう一度ライフルでラウラのカノンを撃ち抜いたのだ。あまりもの神業にシャルルも開いた口が塞がらずにいた。

「今日はもう止めだ。帰るぞ。一夏、シャルル」

アルはそういいケルディムを解除して歩き出し、それを見た一夏とシャルルもそれぞれのＩＳを解除してアルの後を追いかけた。その様子をラウラは苦虫を噛んだような顔で睨んでいた。

「あれが地球連邦大将アーノルド・ギアナ。『深緑の狙撃手』か・・・・・」

ラウラのＩＳスーツに戻り、その場を後にした。

◇

「まったく。いきなり撃ってくるなんて礼儀がなっちゃいねぇ」

「驚いた。アルの口から礼儀って言葉が出るなんてな」

「お前眉間に風穴開けるぞ」

二人はあの後、更衣室で着替えて寮に戻っていた。シャルルはと言うと部屋のシャワーを浴びると言っていたところアルが一緒に着替えを誘ってみたが、顔を真っ赤にして先に更衣室から出て行った。

「じゃあな」

「あぁ」

「ただいまーって、あれ？シャルルいねぇのか？」

アルは部屋に着いて一夏と分かれ部屋に入るが誰もいなかったが、シャワールームから響く水音に気付く。

「何だまだシャワー浴びてたのか。あっ、そういえばボディーソープ切らしてたっけ」

昨日シャルルがボディーソープが切れたと言ってたのを思い出して忘れないように予備のボディーソープを部屋の机の上に置いていたのだ。それを見てシャワーを浴びているシャルルが困ってるんじゃないかと思ったアルはシャワールームの前にある洗面所兼脱衣所のドアを開けると同時に前の方でもドアが開く音がした。

「ちょうど良かった。ボディーソープ、切れて・・・・・」

「あ、アル・・・・・・・・？」

「・・・・・・」

アルは自分の目を疑った。目の前にはシャルルの顔をした美少女がいてシャワーで濡れた身体が色っぽく余計にアルの脳内を混乱させた。

「（あれ？俺疲れてるのか・・・・・。確かにシャルルは可愛いと思うけど・・・・・ハッ！これはまさか俺がホモだから見える幻覚なのか！？）」

そんなアホなことを考えていると目の前のシャルル顔の女子がキャッと乙女の悲鳴を上げ胸を隠した。アルはそれでも目の前の現実が受け止めきれず、

「はいコレ。ったくシャルルはうっかりものだなぁ」

「あ、ありがとう・・・・・」

いつもの調子でボディーソープを差し出しシャルル顔の女子はお礼を言って恥ずかしがりながらも受け取った。そのままアルは何も言わずに脱衣所から出てドアを閉め深呼吸する。

「スー、ハー、スー、ハー・・・・・・・・・女、だと！」

ようやく現実を受け止めるアル。駄目だコイツ馬鹿だ。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

シャルルが脱衣室からジャージ姿で出てきたがもう隠す必要がないのか完全に女性特有の身体のラインがハッキリしていた。両方とも気まずく顔を真っ赤にさせ黙り込んでいる。

「あー、あー、あー。・・・・ちゃ、茶でも入れるか？」

「う、うん・・・・・」

何故か発生練習をした馬鹿が沈黙を破りお茶を入れにいった。お茶をいれた湯飲みを二つ持ってくるがプルプル震えており、今にも零しそうである。

「ほ、ほれ・・・・」

「あ、ありがとう」

シャルルがアルから湯飲みを受け取ろうとした時、偶々アルの手に触れてしまい何が恥ずかしいのか湯飲みを持っていた手を離してしまう。

「ホォアッチャー！！」

案の定、熱々のお茶はアルの手にかかり猛スピードで水道のところまで行き蛇口をひねって水で冷やした。そこにアルを心配したシャルルがやって来て、

「ご、ごめん、大丈夫!?ちょっと見せて!赤くなってる、本当にごめんね！」

そう謝りながらシャルルはアルの腕に抱きつき火傷の心配をする。抱きつかれている本人はシャルルの方向いた途端顔を赤くして天井を見上げた。

「シャ、シャルルさんっ！む、胸が、胸が当たってます！！」

「！！！」

自分の体制に気付いたシャルルはサッとアルから離れ腕で胸を隠すように自分を抱いた。いつもジャージの下に何かを着込んでいるのだが、今は谷間がダイレクトに見え、それも含めて完全に仕草が女の子になっているシャルルを見てアルの心臓のビートを刻む速さがだんだん上がっている。

「うぅ〜〜・・・・アルのえっち・・・・」

「待てい！！」

完全に変態だと思われていると思いこみ全力で否定するアルであった。

「ふぅ。やっと落ち着いたぜ。ところで」

今度はちゃんと湯飲みを受け取り、二人はベッドに座りお茶を飲んでいた。落ち着いたアルは真剣な表情になりシャルルの方を見る。

「なんで男のフリなんてしてたんだ?」

「それは、その・・・・・命令されたんだ、父に・・・・・」

「父って・・・・デュノア社の社長か?」

「うん・・・・そうだよ」

デュノア社といえば量産機ＩＳのシェアが世界第3位の大企業。その社長の実の娘を性別を偽らせてまでＩＳ学園に入れたのがアルには分からなかった。しかし、アルは思い出した。シャルルのＩＳが『第2世代型』であるということを。

「間違ってたら悪いけど、つまりお前は俺達みたいな男でＩＳが使える特異ケースと接触しやすくするために男装してたんだな。俺達の専用機のデータを盗むために」

「ッ！・・・・・よく、分かったね」

「やっぱりか」

いつもは頭が悪そうに見えるアルだがやる時はやる男である！

「うん。デュノア社は他の企業が第3世代を開発している中未だに第2世代止まりなんだ。そのせいで経営危機に陥って、それをどうにかしようと社長である父は」

「お前をここに送り込んだと。でもどうして実の娘を？」

アルは親の話になるとシャルルの表情が曇っているのに気付いたが敢えてその話題を振った。少しでもシャルルの力になれればと思ったアルの優しさからの行動である。

「僕はね、アル。愛人の娘なんだ」

「！？」

その言葉にアルは絶句する。目の前で知り合いが「自分は愛人の子

なんだ」と言ったら誰だってこんな風になる。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下がやって来たの。それで色々と検査をしたらＩＳ適正が高いことが分かって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットをすることになったんだ。でも、父に会ったのはたったの二回だけ。話をした時間も一時間にも満たないかな」

あはは、と愛想笑いをするシャルルだったが、その声は乾いていてちっとも笑っていなかった。それを聞いてたアルはようやくシャルルがここに来た全ての理由が分かり、表には出していないがアルはその親を今にも殺したいぐらいに憤りを感じていた。

「で、お前はどうするんだ」

「そうだね。アルにバレちゃったし、きっと本国に呼び出されるだろうね。その後はよくて牢屋入りかな」

「・・・・実の親でも、腐ってる奴はやっぱ腐ってるんだな」

普段の明るいアルからは考えられないくらいの冷え切った声だったのでシャルルは一瞬耳を疑った。

「俺の家族、全員死んでんだよ」

「ッ！・・・・・ど、どうして？」

「テロに巻き込まれてな。六人家族で両親が二人、弟が二人、妹が一人。その日、雨が降ってたけどデパートに出かけたんだよ。みんなで楽しく話ししながら、本当に幸せだった。でも、みんなで昼飯

食ってレストランを出たらいきなり店が揺れて、そこで俺は気を失ったんだ。んで、次に目を覚ましたら雨が身体に降り注いでいて、周りを見渡したら瓦礫の山で俺以外の人間は全員死亡。後で話しを聞いたら自爆テロだってさ。だから、親が生きているだけでも良いじゃねぇかって言おうとしたけど、どうもそうでもないらしいな」

「・・・・・・・」

アルの壮絶な過去を聞き言葉を無くすシャルル。そんなシャルルを見てアルはやれやれといった感じでベッドから立ち上がる。

「もう一度聞くけど、お前はどうするんだ、どうしたいんだ?俺は『お前』どうしたいかが聞きたい」

「僕は・・・・・・もっとみんなと、一緒にいたい。僕、ここにいたいよ!」

シャルルは目頭に涙を溜めながら今までにないぐらいの声を出しそれを聞いたアルはハァと溜息をついて、

「やっと言いやがったか。それがお前の本音だな?」

「うん」

「だったら俺が守ってやるよ。デュノア社だろうが何だろうがお前に危害を加える奴から守ってやるよ」

そう言ってアルはシャルルに手を差し伸べる。

「・・・いいの?」

「俺を誰だと思ってる？『深緑の狙撃手』アーノルド・ギアナだぞ」

「・・・・プッ、アハハハハハ！」

「なっ／／／／」

それを聞いたシャルルは笑いだし、アルは顔を赤くする。

「じゃあ、お願い・・・・しようかな／／／／」

シャルルも顔を赤くしながらアルの差し出された手を握り、二人はお互いの顔を見合って笑っていたら、突然部屋の入り口のドアが開いてアルがシャルルをベッドに隠そうとするが、

「何だ。もうバレたのか」

「「政志！」」

そこには政志がいてシャルルの女の子の姿を見ても全く動じず、いつもの感じの政志だった。

「バレたのかって、お前気付いてたのか？シャルルが女だって」

「いつから、気付いてたの？」

「初めて見た時にから気付いてたよ。どうしてここに来たかも。もちろん『勘』だけどな」

アルとシャルルは口がポカンと開いたまま目の前の男の推理力に驚

くしかなかった。実際に聞いてみようかと思ったがどうせ全部合ってるんだろうなと思った二人は聞くのを止めた。

「まぁ、俺もバラす気なんてさらさらないし、俺も協力させてもらうよ」

「悪い、助かる」

「ありがとう」

分かってはいたが、政志が協力してくれると言ってくれてホッとする二人。

しかし、

「そうそう、アル」

「何だよ」

「お前だけ本部に報告書提出してないから、呼び出し来てるぞ」

「ダーーッ、忘れてたーー！」

誰かこの馬鹿殺してくれ。

アーノルド、シャルルの秘密を知る（後書き）

次の話のことは思いつかねぇのに、ずっと先の話が思いつくって・・・・・・

ギャーーーーースッ

それとご意見に協力してくれた方ありがとうございます

アンケートはまだまだ続けるんでよろしくお願いします（キリッ）

激情する閃光と魔王　鎮めるは破壊神（前書き）

政志さん！

あんた強すぎるだろぉおおおおおおお！！

では、本編をどうぞぉぉ！

激情する閃光と魔王　鎮めるは破壊神

結局あの馬鹿は本部に呼び出しをくらい、ＩＳ学園に帰ってくるのは学年別トーナメントがある日の朝らしい。アルがいない間、シャルルの事を任された政志は大丈夫だと思うが念のためと出来るだけ行動を共にしていた。そして以前から政志達には知られていないが「学年別トーナメントで優勝したら男子の誰とでも交際できる」という噂が流れ、この噂の根元である箒は頭を抱えていた。

◇

「あら？」

「早いわね」

「てっきり、私が一番乗りだと思っていましたのに」

時は流れトーナメント前日の放課後。第三アリーナに鈴が一人でいたらそこにセシリアが来て、セシリアは自分より先に鈴がいたとこに意外そうな顔をしている。

「あたしはこれから明日の学年別トーナメント優勝に向けて調整に入るんだけど」

「私もまったく同じですわ」

二人は目に見えない火花を散らせる。決して仲は悪くは無いこの二人。だが、よく意見が食い違い揉めることがある。いつもなら龍鳳とクリスがその場を納めるのだが、その二人は今はいない。

「一日早いけど、この際どっちが上かハッキリさせるのも悪くないわね」

「よろしくてよ。どちらがより強く、より優雅であるかこの場で決着を付けて差し上げますわ」

二人はＩＳを起動させ、メインウェポンを構え対峙していた。そして今にも戦いだしそうになった瞬間、二人の間に超音速の砲弾が通った。二人は砲弾が飛んで来た方を見ると、漆黒の機体を纏いニヤニヤしながらこちらを見据えるあの少女がいた。

「クッ、ドイツ第三世代機『シュヴァルツェア・レーゲン』！」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・・」

目の前のディスプレイからラウラとそのＩＳのデータを読み取る。

「どういうつもり？いきなりブッ放すなんて、いい度胸してるじゃない？」

ラウラは鈴の怒声を無視して鈴とセシリアの機体をまじまじと見るとフッと鼻で笑い、

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。・・・・ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってるの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも共通言語をお持ちで無いようですから、あまり虐めるのは可哀想ですわよ」

ラウラの挑発的な物言いと全てを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、怒りもはけ口を言葉に見いだそうとするが、それも無駄な労力であった。

「貴様達のような者が私と同じ第三世代の専用機持ちとはな。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国は、よほど人材不足と見える」

ブツンと頭の中で何かが切れ最終安全装置を解除させる鈴とセシリ

ア。完全にキレている。

「この人は、スクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね」

ただでさえ怒りを露わにしている二人にラウラは油に火を注ぐかのように、

「フッ。二人がかりで来たらどうだ？あんな機体だけが優秀な雄に対して色気を使っている雌共に、この私が負けるものか」

「今、何て言った！？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたけど！」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて、その軽口二度と叩けないようにして差し上げますわ！」

それに対してラウラは笑みを浮かべ、右手をクイクイと動かし挑発する。

「とっとと来い」

「「上等！」」

「政志は今日どうするの？」

「そうだなぁ・・・・・暇だし、一夏の様子でも見に行くかな」

授業が終わり、そんな風に廊下を歩いていると後からばたばたと足音が聞こえ、

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって！」

隣を通りすぎる際に、そう言っていたのを聞いたシャルルは「誰だろう？」と思ったが、政志はすぐに走り出した。

「えっ？ちょ、政志待ってよ～」

シャルルも政志の後を追って走り出す。横に並び、政志の顔を見ると表情が険しかった。

「どうしたの？急に走り出して」

「明日はトーナメントなのに模擬戦なんてする奴いると思うか？それに代表候補生三人ときたら、俺にはあいつらしか思い浮かばない」

その頃第三アリーナでは、

「感情的で直線的、絵に描いたような愚か者だな」

セシリアと鈴はラウラの技能センスとシュヴァルツェア・レーゲンのＡＩＣ（慣性停止結界）に歯が立たず二人はボコボコにされ、勝負が付いているにもかかわらず攻撃し続けるラウラに堪忍袋の緒を切らした一夏がアリーナのバリアーを壊して乱入しラウラに斬りかかったがＡＩＣによって止められいる。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、有象無象の一つでしかない。消えろ！」

ガチャンと肩のレールカノンの接続部が回転し、一夏へと砲口を向ける。

「（くそっ）」

そう思った瞬間視界が揺れた。

「なっ！？」

オレンジ色の物体が目の前を通ったと思った瞬間、一夏とワイヤーブレードで縛っていたセシリアと鈴がいなくなっているのと全てのワイヤーが切れているのに気付いた。周りを見渡しても三人の姿が確認出来ないラウラは焦っていたが、

「どこ見とるんや？こっちやこっち」

声が聞こえた上空を見るとアリオスを起動させ、肩に一夏を担ぎ両手にセシリアと鈴を抱えている龍鳳の姿があった。それを見た瞬間カノンを上空に向け撃とうとしたが、センターがコチラに向かってくる熱源を感知し、ラウラはそれに従い避けると先ほどまでいた場所に極大の桃色のビームが通っていた。

「ちゃんと当たってくれないと困るんだけど？」

ビームが飛んできた方を見るとセラヴィーを起動させ全ての砲門をこちらに向けているクリスの姿があった。

「一夏。この二人ちょっと頼むで」

龍鳳はそう言って、抱えていた二人を一夏に渡す。その時、一夏が見た龍鳳とクリスの顔は今までになく冷え切っており何をしでかすか分からなかった。取り敢えず一夏は自分が開けたバリアーの穴に入り二人を座らせると同時にエネルギーが切れＩＳが解除された。

「う・・・・。一、夏・・・？」

「無様な姿を・・・お見せしましたわね・・」

「良かった。意識はあるようだな」

「一夏、セシリア、鈴、大丈夫か!?」

そこに箒が駆けつけ心配するが目立つような怪我をしていなかったためホッとする。一夏の方を見ると、一夏はアリーナの中にいる三人を見ていた。何か心配するような顔で見るものの、その心配の対象はラウラに対するものだとは彼らの表情を見ていない箒には分からなかった。

「ほう。次は貴様等が相手か?」

ラウラは目の前にいる龍鳳とクリスに対して虚勢を張るが、内心ではかなり焦っていた。この間のアルの力を見て、それと同等の力を持つ者を二人相手にしなければならないからである。

「まぁ、よくも俺らの仲間ボコボコにしてくれたなぁ。きっちりケジメは付けてもらうで」

「無抵抗な彼女たちをあれだけ傷つけたんだ。殺されても文句は言えないよね？」

殺気を全開にして今にもラウラを殺しそうな二人。しかし、両者に割って入る男がいた。

「龍鳳、クリス。アリオスとセラヴィーを解除しろ。今すぐにだ」

アルケーを装着した政志が二人に向かってそう言うが、怒りは収まらず、

「悪いけど、君の後にいる女を今すぐ殺すからどいてくれないかな！！」

「下手したら鈴もセシリアも死んでたかも知れへんのやぞ！？」

そう言われた政志は面倒臭そうな顔をして頭を掻いた後、二人を睨み付ける。

「今のお前らには何言っても無駄みてぇだな。少し頭冷やしてもらうぞ！！」

「「上等！！」」

政志はバインダーにあるファング１０機全て出しクリスに向かわせ、バスターソードで高速で向かってくる龍鳳に斬りかかるが避けられる。

「そんなもんが当たるとでも思とるんか！！」

「まさかっ！！」

政志はバスターソードから小回りの効くビームサーベルを両手に持ち、両脚爪先のサーベルも惜しみなく展開する。

「落とさせてもらうぜ、アリオスよぉ！！」

クリスはファングを相手に苦戦していたＧＮフィールドを張ってはいるがサーベルを展開したファングはフィールドを貫いてくるため、必然的に避けなければならないのだが機動性が低いセラヴィーでは限界があり、いつ被弾してもおかしくなかった。

「ちょこまかとっ！！」

小さなファングを発射の出が悪いセラヴィー特有の極大な粒子ビームで落とすのは困難であり、未だに一機も落とせないでいた。他の人間が操作しているファングなら落とせたかもしれないが、今操作しているのは政志なので一機一機があり得ないような動きをする。

「っ、そこだぁ！！」

ファングが一カ所に数機集まったのを見逃さなかったクリスはそこにバズーカを撃ち込むが散開され外れる。

「っ！しまっ」

一瞬の隙をつき、クリスの視界に入っていないファングは全てサー

ベルを展開させセラヴィーのＧＮフィールド発生装置を破壊し、ＧＮフィールドが解除された瞬間全てのファングから赤い粒子ビームが放たれクリスに降り注ぐ。

「グアアアアッ！」

セラヴィーの武器となる物は全て破壊され、装甲からも火花が散っている。ＩＳが強制解除されたクリスは気を失っておりその場に倒れた。

「クリスッ！政志、テメェ！！」

「やっとこれでお前との戦いに集中できる」

政志はファングを全てバインダーに戻し武器をサーベルからバスターソードに切り替え一旦静止した。龍鳳は目にも止まらぬ速さで政志の周りを飛び交い隙を伺う。

「（コイツゥ、全く隙があらへん！）」

「なぁ」

「？」

「そろそろ終わらせるぞ」

そう言った瞬間、政志の姿が消えた。龍鳳は驚いたが背後から殺気を感じ振り向いたらバスターソードを振り下ろしている政志がいた。

「なっ！？」

「ちょいさー！」

そのまま振り下ろされたバスターソードはアリオスの胸部の装甲だけを破壊し、破壊された胸部は爆発した。

「チィッ。だけど、まだや！まだ、やれるっ！」

爆発で後に吹き飛んだ龍鳳は機体から火花が散りつつも、体勢を立て直しサーベルとライフルを構える。しかし、それが悪あがきだとすぐに分かる。

「ファング」

いつの間にか自分の周りにファングが六機展開されていることに気づきビームが放たれ、回避行動をとろうとするが損傷したアリオスでは交わしきれずスラスターなどに被弾してしまう。それでも龍鳳はシールドで何とか防いでいたが、突然ビームが止み、目の前には拳を握る政志がいた。

「逝っちまいなぁ！」

龍鳳の腹に政志の拳がめり込み、その勢いで地上に激突する。砂煙が立ち上がり、龍鳳が落ちた場所を見るとクレーターが出来ており龍鳳はＩＳを強制解除され気を失っていた。それを確認した政志は地上に降り制服に戻る。

「さすがに、これで懲りただろ」

政志はクリスと龍鳳を肩に担ぎその場を後にしようするが、

「ま、待て！」

「あん？」

声のする方を振り向くとＩＳを解除したラウラがいて何処か申し訳なさそうな顔をしていた。溜息を吐き政志はラウラの方へ歩き出す。

「どうして私を助けたんだ？だって私は、イテッ！」

政志はラウラの額にデコピンをして相当痛いのか涙目になり、額を両手で押さえ政志を睨む。

「なっ、何をする！？」

「これでおあいこな。次からは気を付けろよ」

それだけ言って政志はラウラに背を向け歩き出す。ラウラは政志に何か声を掛けようとするが言葉が出ず、寂しい表情になりながらも政志とは反対方向に歩き出した。

◇

「すまん。頭に血ぃ昇ってもうてて」

「ごめんね。政志」

場所は保健室。あれから一時間が経ち日も沈みだし茜色の光が窓から差し込む。四つのベッドには打撲の治療を受け包帯を巻かれた龍鳳とクリスと鈴とセシリアがいた。他にも政志とシャルルと一夏と箒がいるが、

「俺がどれだけ、お前らの身体に傷をつけないように戦ったか分かってるのか？」

「「・・・ごめんなさい」」

顔には出てないが、明らかに怒っている政志に謝り込む龍鳳とクリス。それを見ている一夏達は苦笑いしている。さすがに見かねたのかシャルルが、

「もう反省してるようだし、許してあげたら？」

「「お願いしますｍ（＿＿）ｍ」」

「・・・分かったよ。だけど、次は無いと思えよ？」

「「ハイッ！」」

殺気を込めて確認を取り、即答する二人。その時一夏達は「政志は怒らせない方が良い」と心の中で思った。

「まぁ、『トランザム』使わなかっただけ、まだましか」

「トランザム？」

「そういえば言ってなかったね。『トランザム』っていうのは太陽炉に組み込まれたシステムで、機体に内蔵されてる内部に蓄積されている高濃度圧縮粒子を全面開放することで、スペックを3倍以上に上げることができるんだ」

「ほなけど、トランザムは大量のＧＮ粒子を消費するんや。そのせいで使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下する、簡単に言えば諸刃の剣やな」

「あれ以上、まだ強くなるのか！？」

「もはやチートだね・・・・・・」

唯でさえ圧倒的な力を持つ政志達の機体が更に強くなると聞き、驚

く箒とシャルル。

「にしても、セシリアと鈴、トーナメントに参加できないんだってな」

「ええ。さっき山田先生にそう言われましたの」

「せっかく明日のために頑張って特訓したのに・・・・」

一夏にそう言われ、口を尖らせ文句をたれるセシリアと鈴。しかし、二人のＩＳはダメージレベルがＣを超えており、修復に専念させないと、後々重大な欠陥が生じるらしい。なので二人は山田先生からトーナメント参加は許可できないと申告された。

「まったく。自分の機体はもっと大切にせなアカンで？」

「そうだよ。ＩＳは自分の分身なんだから」

「さっき、俺がちょっとアリオスとセラヴィー見てみたけど、しばらくは使い物になんねぇぞ」

「「えーーっ、何で！？」」

「死ぬのとどっちが良かった？」

「「すいません！ｍ（＿　＿）ｍ」」

頭を下げる速度がアリオス並の二人。

「その内にななせとヴィンセントが来るから。その時に直してもら

え」

「「了解！」」

完全に上下関係がはっきりしていた。

「ななせとヴィンセントって誰？」

「私も今初めてお聞きした名前ですわ」

「私も」

「私もだ」

聞いたことの無い名前に首を傾げるシャルルとセシリア、鈴、箒。

一夏は前に政志とクリスに聞いたので知っている。

「ななせは俺たちの幼馴染みの一人で連邦の技術局長兼中将でヴィンセントはクリスの双子の弟で連邦の技術副局長兼少将だ」

「「「「「「・・・・・えーーっ！！」」」」」」

政志と龍鳳とクリスは五人の驚きの声の大きさに耳を塞ぐ。

「技術局長兼中将って・・・・・」

「凄い人たちね・・・・・」

箒さん、鈴さん。あなた達の目の前にいる人たち、一応元帥と大将ですから・・・・。

「その人達はどのような方々なのですか？」

龍鳳の場合。

「ななせは普通にええ奴でヴィンセントは・・・・アホやな」

クリスの場合。

「ななせは美人で可愛くてヴィンスは格好良くてイイ子だよ」

そして政志の場合。

「二人の呼び名は、ななせが『黒い堕天使』でヴィンセントが『魔獣』だな」

結果。

「「「「「（どんな人なのか想像できない・・・・・」」」」」

「まぁ、実際に会ってみれば分かるさ」

「そうだね」

談笑していた政志達だったが、

ドドドドッ・・・・！

《？》

突如、地鳴りに聞こえる音が響き、だんだんと保健室に近づいている。

「嫌な予感がする・・・・」

政志の勘は良く当たる。でも、政志は「頼む、外れてくれ」と願うが、保健室のドアが猛スピードで開かれ、その勢いでドアが壊れる。

「鈴木君！」「織斑君！」「デュノア君！」「クシュリナーダ君！」「トールギス君！」

女子がドアから雪崩れ込んできて部屋が女子で埋め尽くされる。・・・・やっぱり当たった。

「何だよ、一体・・・・・・」

「「これだよ、これ！」」

政志がそんな風に頭を抱えていたら、数人の女子が緊急告知文が書かれた申込書を突き出してきた。政志は一人の女子から紙を受け取り読み上げる。

「え～っと。『明日開催される学年別トーナメントではより実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により組むものとする。締め切りは本日の消灯時間までとする』だって」

「というわけで、私と組もう！」

「駄目だよ。政志様とは私が組むんだから！」

どうして前日に仕様変更があったのかは分からないが、どうやら目の前の女子達は政志達男と組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫っているのだろう。しかし、

「俺、シャルルと組むから無理」

「俺も箒と組むから諦めてくれ」

「俺は怪我人やから無理や」

「ボクも無理かな」

それを聞いた女子達は「さっきの勢いはどこに行ったの？」と突っ込みたくなる程の低いテンションで保健室から出て行った。

◇

「さっきはありがとうね」

「何がだよ？」

寮に帰る道のりで、政志とシャルルは一緒に帰っていた。他の奴らはと言うと、病人組は今日は保健室で寝泊まりし、一夏と箒は二人でどこかに行ってしまった。

「保健室で僕をペアにしてくれたじゃない」

「あぁ、あれか。でも、どっちかって言うと俺じゃなくてアルの方が良かったろ？」

「え、え～～っ！？」

アルの名前を出した瞬間顔を赤くするシャルルに政志は更にちょっかいを加える。

「正直に言ってみろよ。誰にも言わねぇから」

「うぅ、政志のイジワル・・・・」

「やっぱりアルが良かったんだろ?」

「・・・うん／／／／」

本当ならこうしてシャルルの隣を歩いているのは政志じゃなくてアルなのだろうが、当の本人は馬鹿なため本部に呼び出しを食らっている。

「悪いな、あいつ馬鹿だから。でも、明日の朝には帰ってくるってよ」

「ほ、本当!!」

「あぁ、良かったな」

政志はそう言いながら、シャルルの頭を撫でる。撫でられてるシャルルは政志の手に何処か、暖かさと優しさを感じてクスッと笑う。

「なんだか政志って、みんなのお兄さんみたいだね」

「ガラに合わねぇよ」

「でも僕、政志みたいなお兄さんがいたらいいなぁって思うよ」

「そうしたらアルが俺の事を『義兄さん』って呼ぶことになるなぁ」

「え、それって・・・どういう、こと?／／／／」

「冗談だよ。冗談」

「うぅ～、もう政志のバカバカっ！」

政志はシャルルからポカポカパンチをお見舞いされるがどこか悪い気がしなかった。シャルルに『お兄さんだったいいなぁ』と言われどこか政志の心は温かかった。しかし、その反面でラウラの事も心配しており、どうしようかと悩んでいた。

「（まったく、メンドクセェ事になって来やがった・・・・）」

◇

学年別トーナメント当日。モニターにトーナメント表が映し出され一回戦の相手を見て、シャルルは開いた口が塞がらず、政志の顔が険しくなる。

一回戦の対戦相手はラウラ、そしてアルのペアだった。

激情する閃光と魔王　鎮めるは破壊神（後書き）

ア「今回俺の出番無かった・・・・・」

龍・ク「「ドンマイ」」

ア「うるせぇよ！政志にボコられてたくせに・・・・」

龍「しゃあないやろ！あんな化け物にどうやって勝てぇ言うんや！？」

ク「そうだ、そうだ！」

ア「俺は次回、その化け物と戦うんだぞ！！」

政「・・・・へぇ～、お前ら俺のことそんな風に思ってたんだ」

ア・龍・ク「ま、政志っ！」

政「なんなら、いますぐ殺してやるよ・・・・行けよ、ファングゥ！」

ア・龍・ク「ギャーーっ！！」

そろそろオリキャラ参戦です！！

破壊の神を舐めるなよｂｙ政志（前書き）

本格的にあの人の登場です

そしてあのガンダムがっ！？

本編をどうぞ！！

「・・・・・・何で？」

馬鹿（アル）は今日の朝に帰って来て学年別トーナメントがペアでの出場とシャルルから聞かされ、誰と組むのだろうかとワクワクさせていたのだが、その結果、

「・・・・・・・」

「（うわ～。めちゃくちゃ睨まれてるよ俺）」

選手の待機室ではアルとラウラの二人だけで殺気と発しながらラウラはアルを見ていた。アルとラウラ以外はペアを組んでおり、抽選をすることなく見事二人はペアになったのだ。正直言ってアルにとって一番組みたくない相手だった。

「・・・・・・おい」

「（あ、話しかけられた）何だよ？」

「私がデュノアとやる、お前は鈴木政志を押さえていろ」

「へぇ。てっきり、政志とやり合いたいと思ってたけどな」

アルはラウラが政志を目の敵にしていると思っていたので、彼女の口から『政志を押さえろ』などの言葉が出たことに少し驚いている。そして、試合の時間が来たのかブザーが鳴り響く。

「行くぞ」

「はいよ」

◇

数分前。

「今日はやけに人が多いね」

「そりゃ、他国の専用機やその操縦者を見ようと各国の代表やエー

ジェント、軍の関係者とかが来てるからな」

待機室のモニターで観客席を埋め尽くす人たちを見て驚き、政志が説明する。しかし、政志は言わなかったが、多くの人の目的は政志達とその機体なのだろう。ＩＳ学園襲撃事件の際に、彼らの機体と階級が世界に知れ渡ったのだ。世界最大規模の軍事組織地球連邦の元帥とその機体とくれば、誰でも一度は見ておきたいのだろう。

「それより、どうする？相手はボーデヴィッヒさんとアルだよ」

「俺が思うにあの馬鹿（アル）が作戦を考えるなんて思えねぇ」

「うん。僕もそう思う。けど、ボーデヴィッヒさんが作戦を考えるんなら、政志を狙ってくるんじゃないのかな？」

最近、金髪ウニ頭の扱いがヒドくなってる気がするのはどうでもいいとする。シャルルもアル同様、ラウラが政志を目の敵にしているものと思っていたのでこれには疑問を持つ。

「ラウラはそこまで馬鹿じゃない。多分、ラウラはシャルル、アルは俺を相手にするつもりだろうな」

「もしかして、また勘？」

「俺が知ってるラウラならそうするハズだ」

「ふ～ん。じゃあ、僕がボーデヴィッヒさんの相手をすればいいんだね」

「あぁ。任せた」

「分かった」

こうは言ったもののラウラは一年の女子の中では恐らく一番強いだろう。先日、セシリアと鈴の二人がかりでも歯が立たなかったのラウラを自分一人で相手にするのに多少不安があり、顔に出ていたのか政志がポンとシャルルの頭に手を置き、

「お前はいつも通りの戦いをしろ。他の事は気にするな」

ブザーが鳴り、政志は歩き出す。その政志を追うシャルルの顔には不安の色など消えていた。

「政志！この前の決着、ここで着けようぜ！」

「かかって来いよぉ！」

試合開始のブザーした瞬間、二人はメインウェポンを構え飛翔した。そしてシャルルは両腕にアサルトライフルを展開し、ラウラに向ける。

「ふん、世代差というものを教えてやろう」

「じゃあ、お言葉に甘えてご教授願おうかな！」

二挺のアサルトライフルから弾丸が放たれるがラウラは右手を突き出しＡＩＣでそれを止める。ラウラはワイヤーブレードを射出させシャルルに向かわせる。しかし、それを見た政志はアルのピストルの弾を避けながらＧＮ粒子をチャージさせ、赤く輝くバスターソードを振り下ろす。

「食いちぎれぇぇ！」

振り下ろされたバスターソードからは赤い波動が放たれワイヤーブレードを全て切り落とした。

「「何ィ！？」」

ラウラはもちろん、アルも驚きの声を上げた。政志はすぐにアルへの攻撃を再開するかのようにアルに斬りかかる。

「オイ、政志！さっきの奴完全に力技だろ！？」

「テメーの許可がいるのかよぉ！」

さっきの技は単純にＧＮ粒子を纏わせたバスターソードを力任せに振って出しただけ。しかし、そもそもアルケーにはこのような武装は付いていないため、完全に政志個人の力で出したものである。簡単に説明すればＧＮ粒子を纏った真空波と考えた方がいいだろう。

「くそっ、シールドビット！」

アルは全てのシールドビットを出しオールレンジ攻撃を仕掛けるが政志は顔色一つ変えず全て避ける。そこにスナイパーライフルを撃ち込もうとするが、政志は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使いアルの目の前にいきなり現れる。

「やらせると思ったか？」

銃身を右手で掴み握り潰して、スナイパーライフルは爆発する。それを見たアルは苦い顔をして腰部からミサイルを政志に撃ち込み、両者は爆発に包まれた。

「鈴木くん・・・本当に人間なんですか?」

「・・・一応そういうことにはなっている」

「俺ら・・・昨日あんなんと戦ったんやな・・・」

「・・・そう・・・だね」

「あんなのと戦ったら・・・即死しそう」

「そう・・・ですわね」

「あいつとはやりたくねぇ・・・」

「私も同感だ・・・」

もはやおなじみのモニタールーム。上から山田先生、千冬、龍鳳、クリス、鈴、セシリア、一夏、箒である。モニターに映る政志は笑いながらバスターソードを振るうため、完全に悪魔にしか見えない。誰もが、アルも十分に強いのだがそれをかき消すぐらいの戦闘をする政志に恐怖を覚えた。

「でも、アルも凄いで。政志相手にまだ持ちこたえとるんやから」

「そうだね。あの距離でのミサイルもアルらしいしね」

「ラウラとシャルルは・・・やっぱり、ラウラの方が一枚上手ね」

鈴はもう一つのモニターに映し出されている戦いに目を向けた。そ

こにはプラズマ刃と近接ブレードを交えているラウラとシャルルがいた。

「悔しいですけど、彼女の実力は本物ですわ」

昨日、ボコボコにやられた二人は彼女の強さを知っており、認めている。

「しかし、これはチーム戦だ個人の力だけでどうにかなるものでは・・・」

千冬はそう言おうとしたが、その考えをブチ壊す男が今戦ってるのに気付き、ハァと溜息を付く。すると、

「溜息なんてついてどうしたんですか?千冬さん」

声のする方を振り向くとそこにはＩＳ学園の白い制服を着た少女がいた。茶髪でスタイル抜群の彼女に見覚えのある者がいた。

「「ななせっ！」」

「久しぶりだね。二人とも」

龍鳳とクリスは久しぶりに再会したななせの元に掛け寄る。そして、オレンジ色の指輪と白いブレスレットを出し、

「「直して下さいっ！」」

頭を下げ涙目になり頼む二人を見たななせは両手腰に当て溜息を付く。

「もぉ、また壊したの？あれほど大事に使ってって、あれほど言ってるのに・・・」

困った顔で目の前の二人に呆れるななせに千冬が話しかける。

「琴吹。もう一人はどうした？」

「ヴィンセントなら明日こちらに着く予定です」

「分かった。それより、ここでは私のことは織斑先生と呼べ」

「わかりました」

龍鳳とクリスに頭を下げさせた少女の登場に他のメンツは唖然とする。それを見てななせは彼らの方を向き、

「初めまして。今日転校してきた、『琴吹（ことぶき）ななせ』です。よろしくお願いします」

「こいつが昨日言うてた、俺たちの幼馴染みのななせや」

「「「「・・・・・えーーっ！！」」」」

丁寧にお辞儀をする彼女を龍鳳が説明する。それを聞いた一夏達は『黒い堕天使』の異名を持つぐらいなので危ないやつかと思ってたが予想の斜め上をいくぐらいの真面目な彼女を見て驚きの声を上げる。

「ところで、・・・・政志とアルは？」

「今戦ってるよ」

そう聞いてきたななせにクリスがモニターを指さし答える。モニターには煙が晴れて二人も姿が序々に露わになり、完全に二人の姿が確認できたと思ったが、

【コイツで止めだぁぁぁ！】

そこには機体のあちこちから火花をあげ、ボロボロになっているアルに拳をたたき込む政志の姿があった。

「相変わらずだね。政志」

政志とのモニターでの再会を果たし微笑むななせであった。

「・・・グッ、あの野郎・・・あの距離で防ぎ、やがって・・・」

至近距離でのミサイル攻撃を政志はバスターソードの腹で防ぎ、結果的に爆発はアルにだけダメージを与えた。それだけに留まらず政志は爆煙の中、ファングでのビーム攻撃を行い全てアルに命中し、怯んでいたトコロに政志の右ストレートを食らって、今は地上に激突して動けずにいた。

「ちっ、やはり無理だったか！」

ラウラはアルが政志に倒されたのを見て顔に焦りの色を浮かべる。

「余所見なんて余裕だね！」

先ほどからシャルルは二挺のサブマシンガンで段幕をはりラウラはそれを避けていた。瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用したラウラはシャルルの死角に入りレールカノンを放つが、上空にいる政志がバスターソードをライフルモードにして弾丸を撃ち落とす。

「何！？」

「これはチーム戦なんだぜ？」

政志の方を睨みつけるが、その隙をシャルルが見逃すはずもなく、両腕にガトリングミサイル、両肩にミサイルポッド、両腰にミサイルランチャー、両太ももにニードルミサイルを展開させ全ての砲門をラウラに向ける。

「これで終わらせるよ！」

ガトリングミサイルのトリガーを引くと同時に全てのミサイルが発射される。それを見たラウラは避けきるのは無理と判断したのかＡ

ＩＣで全て止めようと両手を突き出す。

「「ハァァァァ！！」」

両者は一歩も引かず、シャルルは残弾が切れた瞬間に彼女の特技である高速切替（ラピッド・スイッチ）で瞬時に新しいミサイルを装填する。ラウラはただでさえ多量の集中力を使うＡＩＣを使い続け、そろそろ限界が近く表情が辛くなる。しかし、ストックが全て無くなり、シャルルのミサイル攻撃が止む。

「ハァハァ・・・どうやら、弾切れのようだな」

疲労の色を見せながらも勝ち誇ったようにラウラはそう言うが、それに対してシャルルはクスッと笑い、

「忘れたの？僕達は二人で戦ってるんだよ」

ハッとしたラウラは空を見上げるとそこには銃口をコチラに向ける赤い悪魔の姿があった。

「Ｇａｍｅ　ｏｖｅｒ」

赤い粒子ビームはＡＩＣで止められている一つのミサイルを撃ち抜き爆発させ、他のミサイルも誘爆した。大量のミサイルの爆発にラウラはＡＩＣを解除してしまい爆発がラウラを襲う。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

煙がラウラの周りを覆い、それを見た政志はシャルルの隣に降り立つ。

「なかなか良い動きしてたぜ、お前」

「そんなことないよ。政志の援護が無かったら負けてたよ」

「たまには自分を褒めても良いんじゃねぇか？」

「アル！」

二人の元にＩＳを解除したアルが歩いてきて二人に声を掛ける。アルを見てシャルルの顔が明るくなる。

「さすがに、アレを食らったんだ。俺たちの負けかな？」

アルが笑ってそう言った瞬間、政志に悪寒が走った。嫌な気配を感じた政志の顔は険しくなり、アルとシャルルも政志の様子がおかしいことに気づく。政志は気配がする方、未だに煙に包まれているラウラの方を睨み、二人もそちらの方に目をやる。

カチャッ

煙の中からは何かが歩く音が聞こえ、それがこちらに向かってくるのが分かる。煙が晴れ、その足音の正体が分かった時、政志とアル、シャルルは目を見開く。真っ黒な全身装甲（フル・スキン）の機体。

「何、あれ・・・・・？」

シャルルが驚いたのはこれが理由であるが、政志とアルは違った。背中のＧＮドライヴにやや肩が小さめの体型に装備されたＧＮソードとＧＮシールド。

「おいおい、マジかよ・・・・」

アルの苦虫を噛んだような顔に一筋の汗が流れる。そして、政志は殺気を全開にして今までに無いほどに怒りを露わにしていた。色は違えども、あの機体を、あの『ガンダム』を見間違えるハズがない。

「どうして、・・・・どうして、その姿をしている・・・」

何も喋らず歩き続けるその黒い全身装甲（フル・スキン）は

「答えろよ・・・・」

政志と初めて出会い

「・・・・・エクシアッ！」

政志が初めて乗ったガンダムに酷似していた。

破壊の神を舐めるなよｂｙ政志（後書き）

勢いでエクシア出しちゃった・・・・

ななせの元になったのは文学少女の『琴吹ななせ』です。分からない人は画像を検索して下さい。

細かいことはヴィンセントと一緒に上げます

黒い剣士（前書き）

何を思ったか分かりませんが、キャラ設定をここに載せます。

◇琴吹（ことぶき）ななせ◇

イメージ：『文学少女』の琴吹ななせ

髪：政志と同じ茶髪

瞳：髪と同じ茶色

好きなモノ：ホットケーキ、ペンギン、犬、友達

嫌いなモノ：ピーマン、虫、誰かの迷惑になること

趣味：家事

国：日本

備考：政志達の幼馴染みの一人で極度の意地っ張りで政志に好意をよせているが想いを未だに伝えられずにいる。政志と共に連邦軍に入る。

『ディアボロス』
パイロット：琴吹ななせ
～武装～
・ＧＮステルスフィールド－バックパックとサイドアーマーからＧＮ粒子を広域に最大散布し、レーダーなどを無効化する巨大なジャミングフィールドを形成する。スローネドライのものからさらに改良が加えられており、このフィールド内ではビームが拡散され、ＧＮファングのコントロールも途絶させる事が可能とされる。さらにフィールド領域も操作可能であり、やり方次第ではこちらだけビーム兵器を使用できるという運用法も可能。

・ＧＮバスターライフル－二挺装備されており、ななせがデータ採集用に作った『ウイングゼロ』のバスターライフルが元となっている。問題点であったエネルギーについては、ＧＮコンデンサーを搭載することにより改善されている。二挺のライフルを平行連結させることにより『ツインバスターライフル』になり、威力はバスターライフルの二倍以上にも達する。

・ＧＮハンドガン－自衛用として両腕に装着されている武装。銃身が折り畳み式になっている。

・ＧＮビームサーベル－ＧＮハンドガンの銃口からビーム刃を発生させる事でビームサーベルとしても使用可能。尚、３本分の威力がある。

・ＧＮファング－両腰部に3基ずつ格納されている。

疑似太陽炉搭載型のアルケーのバリエーション機で最初はスローネ・ドライと同じ戦闘支援や戦場支配を主眼を置いていたが、ＧＮバス

ターライフルとGNハンドガンの追加により前線でもアルケー並の戦闘が可能になった。機体名は開発時『アルケードライ』だったのだが、政志の提案で『ディアボロス』となった。カラーリングは黒。

では、本編をどうぞ！

黒い剣士

「（私は・・・負ける、のか・・・？）」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。戦うためだけに鉄の子宮から産み出された存在、遺伝子強化試験体Ｃ－００３７。

何も無い、ただの暗い闇の中に私はいた・・・・。

生まれてからはいつも戦いに勝利するための訓練をし、部隊の中で常にトップでいた。しかし、それはＩＳが世に出回るまでの話だ。私はすぐにＩＳ適正を上げるために左目にナノマシンを移植された。理論上は何も問題も無く、不適合も起きない、・・・・ハズだった。

私の左目はこの処置により金色に変色し、ナノマシンによる視覚や動体反射の強化が常に稼働し、制御出来ない状態だった。この『事故』により部隊の中で遅れをとり、ついには役立たず『出来損ない』の烙印を押された。生きてきた、それまでに積み重ねてきた何かが崩れていき、私はまた暗い闇に引きずりこまれた・・・・。

しかし、そんな闇から救ってくれた人がいた。

「ここ最近の成績が振るわないようだが、心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

織斑千冬。特別に何か訓練をするわけでもなく、あの人の言うことを忠実にこなしていたら、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨することができた。しかし、安堵は無く、何も感

じなかった。ただ自分の力が戻った、そんな風にしか思えなかった。私は常に強さと攻撃力を同一視していたが、その考えを変えさせられる男と出会った。

「今日から世話になる鈴木政志だ」

地球連邦からの研修員として政志が来た時は興味もなく、あまり気にしないでいた。ＩＳでの訓練をしている最中に政志が乱入してきて、素手のあいつに全員がやられたのは驚いた。その時私は聞いてみた、

「どうしてお前はそこまで強いんだ？」

その質問に政志はこう答えた。

「強くなんかねぇよ。ただ、強くなろうとしてるだけさ」

その言葉は私の中の何かを大きく変えた。それ以来、『鈴木政志』という人間に興味が持ち、政志とは常に共に行動をするようになった。そうしている中で私は政志が強い理由が何となく分かった。いつしか私は政志に尊敬とは違う感情を持つようになっていた。研修を終えた政志がドイツから旅立った後、それまでに悪行を行ってきたアロウズによる被害がドイツ軍にも出た。私は怒りを覚えたが、しばらくしてアロウズは解散したという情報が入った。あの部隊が解散するなど何か理由があると思った私はアロウズについて調べていると部隊員の名簿に政志の名前が載っているのを見てしまった。約束をやぶられた、裏切られた！私はそう思った・・・・。

「（私は、勝たなければならない！私を裏切ったアイツを倒すために、政志が教えてくれた強さを守るために私は、私は・・・・・・

！）」

ドクン

その時、私の奥底で何かがうごめく。

【・・・願うか？　・・・汝、自らの変革を望むか？　より強い力を欲するか？】

考えるまでもない問いに私は即答する。

「（よこせ、最強を超える無双の力を！）」

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ　・・・Ｄ．

Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ・・・Ｕｐｌｉｆｅ．

Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ・・・Ｃｌｅａｒ．

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》・・・ｂｏｏｔ．

《ＧＮ－００１　ＧＵＮＤＡＭ　ＥＸＩＡ》

I expel an aim.

Target is Suzuki Masashi.

◇

「どういうことやっ！何であいつがエクシアの格好しとるんや！？」

シュヴァルツェア・レーゲンだった黒い何かはラウラを包み込み黒いガンダムとなった。モニタールームでそれを見ていた龍鳳は怒鳴り声を上げる。一夏達は何が起こっているの理解できず、千冬も顔には出てないが内心かなり焦っていた。クリスとななせは龍鳳と同様に驚いており言葉が出ない。

「ねぇ、エクシアって一体・・・・・」

「エクシアは、ボクたちにとって大切な・・・想い出のつまったガンダムなんだよ」

鈴の問いにクリスが苦い表情で答える。その証拠にクリスも両手の拳を身体を震わせている。その様子を見ただけでどれだけの機体かというのが分かる。

「山田先生。すぐに観客の避難を」

「わ、分かりました」

千冬にそう言われて、山田先生がモニターの画面をいくつか映し出していく中で、ななせは観客席が映っているモニターに目をやると見覚えのある顔があった。

「（あの人達・・・何処かで・・・）」

◇

観客席では避難の指示が出ているなか、冷静に政志達がいるステージを見ている４人組がいた。その４人はスーツを着こなし、何処かの国のエージェントを思わせる格好をしていた。緑の髪にパーマをあててある女性、青い髪のセミロングにカチューシャで前髪を上げてある女性、金髪の短髪で目つきが鋭い女性、最後の一人は黒髪のツインテールの女性であった。

「やっぱりあの女。ＶＴシステムを使ったね」

「あの破壊神が相手なんだ。使わざるを得ないだろう」

「ど～でもいいけど～。私たちいつになったら突入するの～？」

「そうだぜ？俺はさっさと新しい装備を使ってみてぇんだよ」

「トリシャ、リゼルもう少しだけ待て。まだ隊長からの指示が来てないんだ」

黒髪のダルそうに喋る女性トリシャと金髪の女性リゼルは緑の髪の女性に注意される。

「そうは言うがよぉ、マーガレット。俺はお前ら三人みたいに新型の機体がもらえなくて、代わりに実験段階の『アグリッサ』で我慢してるんだ。それにあいつらはアルヴィス達を殺したんだぞ？」

「でも、僕はアルヴィス達が死んだのは彼女達が弱かったからだと思うよ」

「私も～ティファと同じで～。そう思う～」

「お前達、今は作戦に集中しろ。私達の任務を忘れたのか？」

「ちゃんと覚えてるよ。破壊神鈴木政志と太陽炉の回収を最優先にして、その後に隊長と副隊長の部隊が到着次第、ＩＳ学園の占拠だよね」

「そうだ。そのためにもあの黒いのには頑張ってもらわないとな」

青い髪の女性ティファが作戦内容を確認した後、緑の髪の女性マーガレットはニヤリと笑い再びステージに視線を移した。

◇

「（クソっ、何でよりにもよってエクシアなんだよっ！？）」

アルは目の前の黒いエクシアに対して心の中で怒りをぶつけた。背中のＧＮドライブの形をしたものからはＧＮ粒子は出ていないものの、それ以外はエクシアにしか見えなかった。黒いエクシアは先ほどから政志達に向かって歩み寄っており、シャルルとアルは構えるが、

「アル、シャルル・・・二人は逃げろ」

政志は二人の前に立ち塞ぎバスターソードを両手で構える。それを見たアルは、

「お前っ！まさか一人で戦おうなんて思ってねぇだろうなぁ！？」

「・・・あぁ」

黒いエクシアを睨んだままの政志にアルは溜息をついた。

「分かった。俺はこれ以上なにも言わねぇ。・・・・でも、お前のアルケーに搭載されてるのが疑似太陽炉だってことだけは忘れるなよ」

「ちょ、アルっ!?」

それだけ言って、アルはシャルルの手を引きステージから出るため走っていった。

「ちょ、待ってよ!政志はどうするの!?」

「あいつがああなったら、何を言っても無駄だ。それに」

「それに?」

「あれは、エクシアは政志が何とかしなくちゃならねぇもんだ。あいつが過去に打ち勝つためにも。・・・・まぁ、政志が負けるトコなんて想像できねぇから大丈夫だろ?」

アルはいつもの調子でそう言うのを聞きシャルルは少し安心する。そして彼女は思った。彼らの中にあるのは『信用』なんかじゃない『信頼』なんだと。

◇

「・・・・・・」

政志は自分に向かってくる黒いエクシアを未だに睨んでいた。

【政志っ！？聞こえる？】

【ななせか・・・どうした？】

プライベート・チャンネルからななせの声が聞こえて返事をする。

【その黒いエクシアなんだけど、多分ＶＴシステムを誰かが改悪し

たものだと思うの。エクシアの姿をしているのが何よりの証拠。そしてそのエクシアが再現する戦闘データの元になる人物は】

【俺・・・か】

【どこで情報が漏れたのかは今後調べるとして、今は目の前の敵に集中して！それにさっき、観客の中に亡国機業（ファントム・タスク）の構成員が４人確認できたの！】

【だろうな。こんなことするのはあいつらぐらいだしな】

【でも、軍の報告によると、いつもその４人の他に隊長格の３人がいるはずなんだけど見あたらなかった。つまり】

【どこかで待機してるか、今こちらに向かってるかのどちらか】

【私は隊長格を押さえるから、政志はそっちをお願いっ！】

【分かった。それとななせ】

【何？】

【面倒掛けて悪いな。来たばかりなのに、お前に戦わせることになって・・・】

【べ、別にそんなの気にしなくていいよ！／／／／じゃあ、気を付けて】

ななせとの通信を終えた政志はチラッ観客席を見るがななせが言っていた４人の姿は確認できなかった。先ほどと違いななせと会話し

たせいか落ち着きを戻した政志は状況を整理する。

「（こちらの動きに気付いて逃げたか、それとも何処かに隠れたか・・・・。取り敢えず今はコイツを何とかしねぇとな）」

さっきから一定の距離を保ったまま黒いエクシアは立ちつくしていた。まるでこちらが動くのを待っているかのように。

「（アルケーの粒子残量は六割弱。まぁ、なんとかなるか）」

政志はバスターソードを右手に持ち替え、左手にビームサーベルを握った。ジリッと両者の足に力を入れる音が鳴る。どちらも動かず、両者は相手の出方を伺っていたが、

「アルケー。鈴木政志、目標を駆逐する！」

政志が突っ込んだのを見て、黒いエクシアも政志に向かってＧＮソードを振るい、政志のバスターソードと交差させる。

今、赤い悪魔と黒い剣士の戦いが始まった。

黒い剣士（後書き）

マーガレットとティファとトリシャの機体は皆さんの予想通り、あの三機です。

隊長格の機体は今から考えます。

では・・・

襲い掛かる魔のトライアングル（前書き）

エクシアに続いて

あの機体が！！

本編をどうぞ！！

襲い掛かる魔のトライアングル

ガキンッ！

アリーナに金属同士がぶつかり合う音が響き渡る。

「エクシアに似てるのは、外見だけかよっ！」

政志は自分と鍔迫り合いをしている目の前の黒いエクシアに対して愚痴をこぼす。アルケーはガンダムの中でもトップクラスの格闘性能を誇っており、パワーで負けることはまず無い。しかし、目の前の黒いエクシアはアルケーと同等の性能を秘めており、政志達の知っているエクシアならアルケーに対して確実にパワー負けをする。やっかいなのはそれだけに留まらず、

「ファングッ！」

バインダーから6つのファングが飛び出し、至近距離でビームを放つが避けられる。そして、後に飛び一度距離を置いてGNソードをライフルモードにして全てのファングを落とすと同時に二基のビームダガーをファングが収納されているバインダーに投擲する。それを政志は両爪先に展開したビームサーベルで叩き落とすが、黒いエクシアは瞬時加速（イグニッション・ブースト）で政志に接近してGNソードを振りかぶる。

「やらせるかよぉ！」

政志は瞬時に両手にビームサーベルを展開しX字に構え、GNソードを受け止める。

「随分と俺の真似がウメェようだなぁ？だが、それだけじゃあ、破壊の神には勝てねぇぞぉ！！」

両腕にさらに力を加えてＧＮソードを弾き、黒いエクシアの腹部に蹴りを入れる。

ドゴォン！

蹴られたエクシアは音速の速さで壁に衝突するが、すぐに体勢を立て直しライフルで応戦してくる。政志はそれを避けながらエクシアに高速接近する中で残りのファング四基を全て射出させ、黒いエクシアの左右に二基ずつ展開させるがライフルで撃ち落とされる。それを見た政志は口元に笑みを浮かべ、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用して、瞬時に黒いエクシアの目の前に行き左手に持ったビームサーベルで右の横腹に斬りかかるが、右手に装備されたＧＮソードで防がる。

「そう来ると思ってたぜ！」

政志は右手を後に引き拳を握る。黒いエクシアは左手に装備されたＧＮシールドを構え、次に繰り出される攻撃に備えるが、

「どれだけ、俺の戦闘データを元に動こうが・・・」

政志は拳を開き、ＧＮシールドを掴む。シールドはギシギシと音を立てヒビが入る。

「テメェはテメェで・・・」

ヒビがＧＮシールド全体に広がりガキンッと音を出し割れ、政志はこの戦いを終わらせる一撃を放つため、再び拳を握る。

「俺は俺だぁぁ！！」

放たれた拳は黒いエクシアの胸部に撃ち込まれ、その衝撃で黒いエクシアの背後のアリーナに大きなヒビが入り、ヒビはアリーナの外の壁にまで広がる。

「破壊の神を舐めるなよ」

めり込んでいた拳を引くと黒いエクシアは砕け散って中からラウラが出てきた。眼帯が外れ両の目が露わになった顔は今にも泣きそうで捨てられた子犬にも見えた。

「ったく、なんて顔してやがる」

気を失い、前のめりに倒れてくるラウラを抱えてると同時に、ヒビが入っていた部分が轟音を立て崩れ落ちた。

「・・・やりすぎたか？」

アリーナの十分の一が崩壊しており、競技場から外が繋がっている。その光景に政志は苦笑いをするしかなかった。

◇

《・・・・・》

こちらは毎度おなじみのモニタールーム。そこにいる者全員が目を細めモニターに映し出された崩壊したアリーナの瓦礫に視線を釘付けにされている。もはや政志の破壊っぷりに呆れている。

「まぁ、勝ったんはいいんやけど・・・」

「龍鳳、それ以上言うな。突っ込んだら負けだぞ」

龍鳳が何とも言えない気持ちを言葉に出そうとしたが、気にしたら負けだと箒に注意される。するとドアが開きアルとシャルルが入ってきた。

「政志はどうなってる、って何じゃコリャ！！」

「うわ～凄いね・・・・・」

すぐに瓦礫の山に目が行き驚く。その叫び声に気付いた一夏と箒、鈴、セシリアがアルの方を向いて、

「「「「あ、負け犬」」」」

「うるせぇよ！」

怒鳴り返すアルにまぁまぁとシャルルが落ち着かせいたら、龍鳳とクリスが悲しい表情でアルに歩み寄り、アルの手を握り、

「よう生きて帰ってきたなぁ・・・」

「昨日の僕達の気持ち、分かったでしょ・・・」

「あぁ。あの悪魔とはしばらく戦いたくねぇよ・・・」

3人はお互い政志にボロボロにされたＩＳを見せ抱き合って泣き出した。一夏はそんなアホなやりとりを見てアハハと笑いモニターに目をやると観客席で何かが動いたのに気付く。

「なぁ、今何か見えなかったか？」

一夏のその言葉に全員がモニターに目をやる。

「何も見あたりませんが・・・」

「見間違えではないのか？」

「おかしいなぁ」

セシリア達は一夏の見間違えではないのかと思っていたが、千冬とアル、龍鳳、クリスの４人は真剣な目つきで観客席側が映し出されたモニターを見ていた。

「「「「！」」」」

４人は何かに気付くと険しい顔になり、アルは政志に通信を入れようとするが、

「おいっ、政志、政志っ！・・・・くそっ、繋がらねぇ！」

先ほどの政志の一撃で通信機器になにか不具合が起きたのか政志と通信がとれない。そのアルの慌てようにシャルルが話しかけようとした時、モニターに緑と青と黒の三機が映し出された。

◇

「やっぱり・・・今まで気配を消して隠れていたか」

「さすが破壊神。気付いていたのか？」

政志は観客席に突如現れた三機の全身装甲（フル・スキン）の方を見てそう言い、緑の機体のパイロットが自分たちの存在に気付いていた政志に関心する。

「あぁ、仲間から報告があってな。・・・もう一人はどうした？」

「何の～ことだか～トリシャわかんな～い」

ダルそうにしゃべる黒い機体のパイロットに少しイラッとする政志だったが、そんなことよりもななせの報告では４人いるハズなのに一人少ない。そんなことを考えていたら、青い機体の両肩のシールドが開きビームが発射され、政志はラウラを抱えたまま避ける。そうしたら他の二機もビームライフルで攻撃してきたので政志は舌打

ちし、回避行動を取る。

「（マズいな。こっちの粒子残量は残り・・・４割か。それにアレはカオス、アビス、ガイア、この間の七機とは比べ者になんねぇぞ）」

政志は戦おうにもラウラを抱えているため両腕が塞がっている。ファングもさきほどの戦いで全て破壊されてしまい攻撃する手がない。突破口を考えながら政志は避けるのに集中する。

「チョロチョロとっ！」

カオスの背中にある機動兵装ポッドが射出されビームの数が増える。しかし、政志は回避しつつ、避けるのが無理なものは爪先のビームサーベルで弾いていた。

「すごいね～。マ～ガレット～、ティファ～、援護お願～い」

ガイヤはビームライフルからビームサーベルに武装を切り替え政志に突っ込んでいった。

「いくよ～」

振り下ろされるサーベルを右足のサーベルで受け止めるが、そこにすかさずカオスの機動兵装ポッドのビームが飛んできて、距離を取る。

「なかなかのチームプレーじぇねぇか！」

政志は彼らの連携度の高さに焦りを覚える。一人一人の力は先ほど

の黒いエクシアには到底及ばないが、３人での連携の高さは今の状況には十分な驚異なのである。カオスとアビスのビームの雨を避けていたらガイアによるビームサーベルによる接近戦、ガイアの攻撃に避けても応戦してもそこにカオスのポッドによる奇襲。このままではいつ被弾するか分からないと感じた政志は一か八かの賭けに出る。

「そろそろ～キメるよ～」

「マーガレット！」

「あぁ、分かってる！」

ガイヤがサーベルを振り下ろし、アビスとカオスのビームが政志に当たると思った瞬間、

政志が消えた。

「「「なっ！？」」」

３人は驚き、ガイヤが周りを見渡している時、赤く輝く何かがガイヤの背後に回った。

「トリシャ、後だ！」

カオスの注意を聞き、振り向きながらサーベルを横薙に振るうが、赤い残像を残して、消えて、また背後に気配を感じて振り向くと赤く輝くアルケーを纏った政志がいて、右足のビームサーベルが首を狩ろうとしていたのでサーベルで防ぐものの、力負けして吹き飛ばされ壁に衝突する。

「くっ！」

「「トリシャ！」」

二人はガイアを吹き飛ばした政志に目を向けと先ほどまでと違い、機体が赤く輝いているのに気付く。政志は3人の攻撃が当たる寸前に『トランザム』を使用して回避したのだ。しかし、アルケーの疑似太陽炉に組み込まれてあるトランザムは緊急回避用。オリジナルの太陽炉に組み込まれていたトランザムをななせが解析して組み込んだものであって、まだ実戦で使えるものではないからだ。そのため政志は決着を急いでいた。

「光っただけで！」

アビスの全砲門からビームが発射されるが、直撃する前に残像を残し政志は消える。

「また消えた！？」

「ここだ」

斜め右から声が聞こえとっさにシールドを構えるがサーベルで切り裂かれ、右肩のシールドが爆発する。

「やらせない！」

止めをさそうとした政志だったが、いつのまにかステージの真ん中にいるカオスのビームライフルによって妨げられる。政志は攻撃対象をカオスに変えて、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使い観客席からカオスの元へと一

気に距離を詰める。

「これで終わりだぁ！」

政志は右足を振りかぶり爪先のサーベルでカオスの動体を真っ二つにしようとした。しかし、

「かかった！」

その叫びと共に地面の下から赤い物体が政志に体当たりをして政志を吹き飛ばす。体勢を崩した政志は突如現れた機体を見ると見覚えがあった。

「くそっ、『イナクト』のカスタム機か！」

亡国機業（ファントム・タクス）の主戦力の一つであるイナクトの下半身に大型の追加アーマーを施したものだと政志は思った。そこに、

「さっきのは～きいたよ～」

ガイヤが接近しており、サーベルは何とかかわせたが蹴りは避けれず当たってしまい蹌踉ける。

「ぐっ、しまっ」

「隙ありだよ！」

アビスのビームが蹌踉けていた政志に向かって放たれ、政志は抱えてあるラウラに当たらないように背を向け被弾する。慣性が乗ったまま地面にぶつかり、その衝撃でラウラを放してしまう。ラウラは

気を失ったまま転がり政志と離れてしまう。

「っ、ラウラ！」

政志は立ち上がろうとするが、政志の上にアーマーから六本のクローを展開したイナクトが覆い被さる。

「ハッハァ！捕まえたぁ！」

政志を囲んだ六本のクローからプラズマが発生し、体中に電流が走る。

「ぐあぁぁぁぁぁぁ！」

「どうだぁ？アグリッサのプラズマフィールドの味は？」

政志に襲いかかるプラズマフィールドは彼に苦痛の叫びをあげさせる。機体にではなく操縦者にダメージを与えるこのプラズマフィールドは、普通の人間に使用すれば五秒も持たず意識を手放すのだが政志にはまだ意識があった。しかし、一分後には、

「やっと気を失いやがったか？しぶてぇ奴め」

「・・・・・・」

政志は気を失ったのか、アルケーは解除されていた。

「こいつとその機体は回収するとして、その女はどうする？」

イナクトのパイロットは倒れているラウラに視線を向る。

「殺しちゃって～い～と思うよ～」

「そうだね。この娘には死んでもらった方が良いかもね」

「分かってる。最初からそのつもりだ」

カオスはそう言ってビームライフルの銃口をラウラに向ける。

「死ね」

ビームは放たれラウラに向かう。

しかし、

「止めろぉぉぉ！！」

突如現れた白いＩＳが瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使いラウラを拾ってその場を離れる。

「「「「何！？」」」」

ビームはラウラがいた地面に当たり小さなクレーターを作り、カオス、アビス、ガイア、イナクトはラウラを抱えた白いＩＳのパイロット、織斑一夏の出現に驚く。

「あれは織斑一夏・・・・。どうして此処に？」

「まぁ、いいじゃねぇかよマーガレット。捕獲対象がわざわざ捕ま

りに来てくれたんだ」

「手間が～省ける～」

「僕達４人から逃げられると思ってるのかな？」

確かに、今の一夏ではどうやってもこの４人に勝つどころか逃げることすら不可能に近い。しかし、一夏はそんなことを知っていながらもここに来なければならない理由があった。一夏は気を失っている政志の方を向き、息を吸い込み、

「政志ィ！いつまでも寝てんじゃねぇぞぉぉ！」

一夏の魂の叫びがアリーナに響き渡る。

「はっ、何を言い出すかと思えば。くだらねぇ事ほざきやがって」

イナクトはリニアライフルを一夏に向ける。

「てめぇのその機体もいただくぜ！」

ライフルのトリガーが引かれると思った瞬間

「うるせぇぞ。一夏」

キュインッ

「何ぃ！？」

イナクトのアグリッサの真上に突如現れた白と青の小型の戦闘機からビームが撃ち込まれ、イナクトは今にも爆発しそうなアグリッサを切り離した。爆発する寸前に戦闘機のような何かは政志の上を通り、政志はそれに捕まりそこから離れ、アグリッサは爆発する。

「な～に～、あれ～？」

「戦闘機・・・にしては小さすぎるね」

「せっかく捕まえてたのによぉ！」

ガイアとアビスとイナクトは乱入してきた戦闘機に対して疑問と怒りの言葉を述べた。戦闘機はそのまま政志を一夏のところまで連れて行き、政志が立ったのを確認すると上空に飛翔した。

「政志！」

「一夏。お前の叫び、しっかり聞こえたぜ。それと・・・・・ラウラを守ってくれて、ありがとな」

「気にスンなよ。俺たち友達だろ？」

「フッ。そうだな」

政志と一夏は互いに笑いながら話すが、そんなのに構ってられない者達がいた。

「鈴木政志。貴様、アグリッサのプラズマフィールドで気を失ってたのでは無かったのか？」

カオス、アビス、ガイア、イナクトは近くに集まり、政志と一夏の二人と対峙してカオスが政志に問いかけた。

「あぁ、アレか。あんなもんで俺がやられるとでも思ったのか？」

政志はニヤリと笑みを浮かべてそう答える。

「この、化け物がっ！」

イナクトは悪態を付くが、政志はそれを無視する。しかし、今の状況では明らかに政志達が不利である。

「で～も～。破壊神の～ガンダム～ボロボロだし～。生身の人間に～私たちが～負けるわけ～ないし～」

「そうだね。こっちが有利なことに変わりはないね」

それを聞いて、政志は、

「そうだな。アルケーも無理させたから修理が必要だし、一夏じゃお前らには勝てねぇし、絶体絶命だな・・・・・・・・・・って言うとでも思ったか？」

「「「「何？」」」」

自信満々にそう言う政志に一夏以外の全員が疑問に思う。「どう足掻いても、この状況を覆せるわけがない」と心の中で思う４人。政志はズボンのポケットから青い剣がついたネックレスを取り出す。

「カオスのマーガレット・キュラス、アビスのティファ・マイヤー、

ガイアのトリシャ・マルグリッド、イナクトのリゼル・アーセラル。
地球連邦軍元帥鈴木政志が貴様等に判決を言い渡す」

「死だ」

指をコチラに差してくる政志を見て、カオスとガイアはビームサーベルを、アビスはビームランスを、イナクトは大型ソニックブレイドを構える。先ほどの戦闘機が政志の背中に向かって来るのを見て一夏は政志から少し離れる。

「何をするつもりかは知らないが、無駄な足掻きだ！」

カオスの叫びと共に四機は政志に突っ込む。戦闘機がすぐそこまで来ているのを確認した政志は、迫ってくる四機を見据える。

「ドッキングセンサー！」

政志が青い光に包まれ戦闘機が変形して光に突っ込んだと思ったら、政志は消えていた。

「「「「・・・・」」」」

４人は政志が消えて青い閃光が走ってから動きが止まっていた。彼女らの後には先ほどの戦闘機と合体した両肩には緑色のＧＮ粒子を発生させるＧＮドライブがついている青いガンダムを纏った政志がいて、両手にはＧＮソード?が握られていた。

「冥土の土産に教えてやる。これが現存するどのガンダムをも凌駕する機体」

「『ダブルオーライザー』だ」

ドガァァァン！

カオス、アビス、ガイア、イナクトは爆発し煙を上げる。それを見た政志はＩＳを解除してダブルオーの待機状態であるネックレスを握りしめる。

「俺は、破壊する・・・世界の歪みを、全て破壊する！ガンダムと共に！」

『ダブルオーライザー』

変革を司る最強のガンダムが、物語を大きく変える。

襲い掛かる魔のトライアングル（後書き）

ダブルオーライザー出しちゃった・・・・

次回、ななせの実力が明らかに！

そして懐かしのあの機体が登場！

お楽しみに～～

ディアボロスはラテン語で『悪魔』（前書き）

これがななせの力じゃあああぁぁぁ！！

本編をどうぞ！！

ディアボロスはラテン語で『悪魔』

「隊長。先ほどからマーガレットと通信がとれません」

太平洋上空。ＩＳ学園に向かう者達がいた。

「任務は失敗、ということか？」

「恐らくは・・・」

「良し。我々はこのままＩＳ学園に進行する。さすがにマーガレット達と戦ったんだ・・・奴らも消耗しているはず。そこを突くぞ！」

《了解！》

十機のイナクトから気合いの入った返事が聞こえ、その十機を率いるのは先頭にいる隊長と呼ばれた者で、両肩に大きなバインダーがついた白い蝶のような全身装甲（フル・スキン）だった。その隊長の左右には隊長と色違いの赤いのと黒いのがいた。

「キュベレイが一機にキュベレイＭｋ－？が二機、イナクトが十機・・・か」

雲の上からセンサーで海上を移動している敵機の数を確認する。その者の機体はアルケーに似ており、疑似太陽炉特有の赤いＧＮ粒子が伺えた。

「出来ることなら一撃で墜としたいけど」

両手には醜く黒光りする巨大なライフルが握られており、ガチャンとライフルを平行連結させる。

「ＧＮツインバスターライフル。ターゲット、ロック」

銃口を海上を進行中の敵機に向ける。

「ディアボロス。琴吹ななせ、目標を殲滅する」

黒い堕天使から、全てを消し去る一撃が放たれた。

「センサーに熱源反応!?隊長、ラミアス、危ない!!」

集団は真上よりくる光に気付き、黒いキュベレイＭｋ－?がキュベレイと赤いキュベレイＭｋ－?を突き飛ばす。

「「フレアっ!!」」

突き飛ばされた二人が見たのは、巨大な光に黒いキュベレイＭｋ－?とイナクト十機が飲み込まれる光景だった。光はそのまま海に直撃し轟音を立て大きな水しぶきを上げる。二人は光が振ってきた上空を見ると、ゆっくりと降下してくるななせがいた。

「あいつがっ・・・あいつがフレアを、姉さんを!!」

「早まるな、ラミアス!」

自身の姉を殺された怒りで我を忘れたラミアスは目の前のななせに突っ込もうとするが、隊長が押さえ込む。

「隊長!しかし、あいつは・・・!」

「仇なら我々二人で取ればいいだろう?今は落ち着くんだ」

隊長の説得によりラミアスは静止した。すると隊長はななせに話掛け始めた。

「聞きたいことがある。どうして我々がここにいることが分かった?」

「勘・・・ていうのは冗談で、あなた達の通信にハッキングして場所を特定しただけ」

簡単に言うが通信のハッキングには時間がかかり、場所まで特定するには通信の電波を分析する必要があるこれもまた時間がかかるが、そもそもハッキングをした人の話し相手の場所を割り出すなど不可能なはず・・・・と二人はついさっきまでそう思っていた。

「・・・そうか。なら、貴様の名は?」

「地球連邦軍中将、琴吹ななせ」

「琴吹ななせ、それにその黒いガンダム・・・・・そうか!貴様が『黒い堕天使』かっ!!」

隊長の問い答えず、隊長とラミアスはそれを肯定の意味と受け取りフェイスアーマーの下では冷や汗を流す。亡国機業(ファントム・タクス)内ではガンダムは最も危険視されておりこんな言葉がある。

「『深緑の狙撃手』、『茜色の閃光』、『白い魔王』、『魔獣』に会ったら即刻逃げろ」

そして

「『破壊神』と『黒い堕天使』を見たら死んだと思え」

二人はこの言葉を思い出し、逃げるか迷ったが機体性能が違いすぎるのは熟知しており、

「ラミアス！我々が生き残るためには、ここで『黒い堕天使』を伐つしかない！」

「了解！」

二人はななせと戦うことを選んだようで、ななせは目を細めてそれを見る。

「悪いけど、あなた達を生かして帰すわけにはいかない」

「黙れ！行くぞ、ラミアス！」

「「ファンネルッ！」」

キュベレイと赤いキュベレイＭｋ－？の背後に搭載されたユニットから漏斗の形をした遠隔誘導攻撃端末『ファンネル』がそれぞれ十基射出され、計二十基のファンネルがななせに迫る。

「自立機動兵器・・・」

ファンネルを見てそう呟いたななせはディアボロスのバックパックとサイドアーマーを展開させる。そしてディアボロスの元となり、以前ななせが乗っていたスローネ・ドライから継承された最強のシステムが動き出す。

「ＧＮステルスフィールド、展開」

呪文のように口ずさむと、展開されたバックパックとサイドアーマーからおびただしい量のＧＮ粒子が流出し、まるで巨大な3対の翼をイメージさせられる。噴出するＧＮ粒子はななせを中心とした広範囲の空間を赤く染める。ななせが『黒い堕天使』と呼ばれる所以を知った隊長とラミアスだったが海に複数の何かが落ちる音が聞こえ、そちらを見ると、目を疑うような光景が広がっていた。

「「！！」」

キュベレイとキュベレイＭｋ－？の主力武装であるファンネルが次々と海に落ちいっているのだ。もちろん二人はその様な操作はしておらず、パニック状態に陥っていた。

「そんな、・・・ファンネルが！？」

「くそっ、一体どうして！？・・・・そうか、貴様の仕業かぁ！？」

「そう。このＧＮステルスフィールドはＧＮ粒子を広域に最大散布してレーダー、通信、センサーを無効化する巨大なジャミングフィールドの形成、更に遠隔操作の自立機動兵器、無人機の動きも封じる、ディアボロスの最強の武器」

そんな出鱈目なものが存在してたまるかと言いたい二人だが、目の前でそれが起きているのだから信じざるを得ないと。ならばと、二人は両腕に装備されているビームサーベルを展開して、白兵戦に持ち込もうとする。しかし、突如ビームサーベルが消失した。

「「なっ！？」」

「言い忘れたけど、このフィールド内のビームは拡散されて使い物にならなくなるから。それと」

ななせの両手にはいつの間にかバスターライフルが握られており、二人が状況を飲み込めない中連結され、ツインバスターライフルの銃口は二機を捉える。

「加減次第じゃ、私だけビーム兵器が使える」

ツインバスターライフルから放たれた極大のビームはキュベレイとキュベレイＭｋ－？を飲み込む破壊した。ビームが直撃する前にラミアスが最後に姉の名前を呼んでいたようにも聞こえたが、今のななせには彼女達に掛ける情けなど持ち合わせていなかった。

「私の大切な人は奪わせない。絶対に・・・・守ってみせる」

ななせはその言葉を見えない誰かにぶつけて、ＩＳ学園へと戻っていった。

血のように真っ赤なＧＮ粒子を散らしながら・・・・・

◇

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・・」

「・・・交際・・・無効・・・」

「・・・うわあああああんっ！」

「お願い！嘘だと言ってえええええ！」

トーナメントが中止になり『優勝したら男子と交際できる』という噂を真に受けていた女子が嘆き叫ぶ。学食はそんな馬鹿で埋まっていたが、隅っこのテーブルを覗いてみると、

「「「すいません！ｍ（＿＿）ｍ」」」

「・・・・・」

３人の男が１人の少女相手にガチの土下座をしている。周りの目など気にすることなくアルと龍鳳、クリスは機体の修理をお願いするが、ななえは顔には出てないがかなりご立腹のようだ。「あれ？昨日もこんなことなかったっけ？」と一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルはそれぞれのご飯を食べながら思った。

「前にも言ったよね？ガンダムは他の機体と違ってデリケートだから大切に扱ってって。どうして、私の言うこと聞いてくれないのかな？」

「いや、違うねん。これには深い訳が・・・」

「そ、そうだよ・・・ボク達は大切に扱って・・・たよ、ね？」

「クリス、頼むから話しを振らないでくれ。今にも泣きそうなんだから・・・」

「・・・死ぬ？」

「「「勘弁してください」」」

３人は完全に参っていて、いつになったら開放されるのか分からな

い状況だった。しかし、救世主が現れた！

「何やってんだお前ら？」

「政志！」

政志はトレーの上に乗ったフライドポテトをパクパク食べながら土下座をしている3人を見た。ななせは政志が来た瞬間、パァァと表情が一変して明るくなり政志の元に駆け寄る。

「ななせ、久しぶりだな。元気だったか？」

「うん。政志も元気そうで良かった」

ななせの変わりように理不尽さを感じ取る3人。政志はポケットからアルケーの待機状態である赤い十字架のネックレスを取り出す。

「悪いけど、アルケーの修理頼めるか？今日の戦闘で無理させちまって」

「分かった。任せて」

満面の笑みでそう答えアルケーを受け取った後、正座をしている3人になななせは目をむける。アル達はビクッとなり、ななせは溜息を付く。

「・・・今回だけだからね」

「「「あざーっす！」」」

3人はそれぞれの待機状態のガンダムをななせに渡して何とか修理してもらえることになった。

「それとコレ。頼まれてたの完成したよ」

ポケットから小さな箱を取り出して開けてみると中には5つの銀の指輪が入っており、それぞれに色が違う宝石の様なものが埋め込まれていた。それに興味を持ったのか一夏達も席を立ってななせを囲う。

「それは一体何ですの？」

「政志達の予備、というよりかは授業用兼訓練用の機体かな。設計理論は形以外普通のＩＳと同じでシールドエネルギーも絶対防御もちゃんとつけてあるよ」

「ちょっと待て！お前はＩＳのコアを作れるのか？」

「うん」

箒の質問に即答するななせ。現在、ＩＳのコアが作れるのは箒の実の姉篠ノ之束だけと言われており、そのせいで国から命を狙われたりするほどなのに目の前の少女は「え？そのぐらい出来るよ」みたいな顔で答えたので一夏、箒、鈴、セシリア、シャルルは内心かなり驚いている。しかし、政志達の幼馴染みだと思ったら何故か納得してしまう。

「えっと、青い石が埋め込まれてるのが『ウイングゼロ』で赤いのが『シナンジュ』、緑のが『クシャトリア』、白いのが『ユニコーン』、紫のが『エピオン』、好きなのを取って」

そう言われ、政志がユニコーン、アルがシナンジュ、龍鳳がエピオン、クリスがクシャトリアを、ななせは残ったウイングゼロを手に取り、五人は指にはめる。

「これでイッチーと安心して訓練できるぜ」

「せやな」

「俺はこいつでも殺す気でやるけどな」

「頼むから、それだけは止めてくれ！！」

どうやら、一夏の身の危険は去ってはくれないらしい・・・・・

◇

「た、助けてくれっ！命だけはっ！」

とある国のとある研究所。今そこにはその研究所の所長以外の人間は全て気を失い、もとい半殺しにされており、その犯人はＩＳ学園の制服を着ている白い髪の少年。しかし、彼の制服は血で赤く染まっていた。

「さっさと答えろ。どうやってガンダムと鈴木政志のデータを手に入れた？」

少年は所長の胸ぐらを掴んで壁に押し当てている。額には青筋が、翠色の瞳には殺気が込められていた。

「わ、我々は確かにＶＴシステムの研究はしていたものの、ガンダムのデータなど持っていないグフゥッ」

少年は所長の腹に膝蹴りを入れて、ポケットから拳銃を取り出し所長の眉間に押しつける。

「シュヴァルツェア・レーゲンのＶＴシステム・・・・あれはここで組み上げた物か？」

「わ、分かった！全部話すからっ、銃を降ろしてくれ！」

「いいから話せ。撃つぞ？」

「そうだよ！あんたの言う通り、あの機体のＶＴシステムには元々モンド・グロッソ優勝者のデータを積んでたんだ・・・・しかし、何者かが外部からあのシステムを書き換えたんだ！！まさか、ガンダムのデータが入っていたとは・・・・！」

少年は所長の目をじっと見て嘘を言っていないか確認する。弱い人間は死が迫った時には嘘をつく余裕など無いと言われており、目の前の男がそれを語っている。少年は所長が嘘をついていないと判断し、胸ぐらを掴んでいた手を放して、そのままその手で所長の顔を殴った。

「グヴォ！？」

所長の顔には少年の拳がめり込んでおり、拳を引くと所長の顔は陥没して血で真っ赤になっていた。

「収穫は無しか。けっ、くだらねぇ研究ばっかしやがって」

少年は所長に唾を吐きかけてその場を立ち去る。

「さてと、兄貴達のところに行こうかね」

戦いに飢えた『魔獣』はＩＳ学園を目指す。

ディアボロスはラテン語で『悪魔』（後書き）

強すぎる・・・よね・・

因みにおわかりだと思いますが、ななせが持ってきた予備の機体にはＧＮドライヴは搭載されていないのであしからず・・・

月明かりの道しるべ（前書き）

後書きに新キャラの設定載せます！

本編をどうぞ！！

寮の自室に帰ってきたアルはベッドに座ってシャルルと一緒に、先ほどななせから受け取った『シナンジュ』のデータを見ていた。

「この機体、アルに合ってないんじゃない？」

「俺もそう思ったぜ。どっちかというと、こいつは龍鳳に向いてる」

シナンジュにはビームサーベルにビームライフルなど淡白な武装が揃っていて全身に多数のスラスターを装備し、いかなる姿勢においても高い機動性を発揮できるようになっている。しかし、アルの得意分野は射撃であるため、シナンジュでは余りアルの力が発揮できないのだ。

「でも、アルならきっと上手く動かせるよ」

「まぁ・・・そう、だな／／／／」

シャルルが女と分かってからアルはシャルルと話をしていると時折顔を赤く視線を逸らす。シャルルはどうしたのかと思いアルの顔を覗き込む。

「大丈夫？顔が赤いけど」

「な、ななな何でもねぇよ！／／／／」

は吐息がかかるぐらいに近づいていたシャルルの顔を見て焦りまくる。シャルルは「変なの」と言って笑う。その笑顔にアルは見とれ

てしまい完全にシャルルの事を意識していた。

「（クッソォォ、こいつ可愛いすぎんだよ！男と二人きりでいるっていうのに無防備すぎだろ、オイッ！）」

表には出さないように心の中で叫び、隣の座っている美少女に突っ込みを入れるアーノルド君。バカの癖に初なんだね！

「あのね、アル。話が・・・あるんだ・・・」

「（落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け！）・・・言ってみろよ」

全力で心を落ち着かせ冷静さを取り戻したアル。この辺りはさすが大将と言ったところか・・・。シャルルは若干顔を赤くしながらアルを見つめる。

「うん。この前、アルが僕のこと『どんな奴からも守ってやる』って言ってくれた時・・・本当に、嬉しかった・・・。でね、一つ決めたんだ」

「へぇ、何を？」

「僕の在り方。アルが教えてくれたんだよ？」

「そうだったか？」

「そうだよ。ふふっ、アルって自分に関しては本当に鈍いよね。憎らしいくらいに」

「すいませんｍ（＿　＿）ｍ」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことをこれからシャルロットって呼んでくれる？二人だけのときでいいから」

「それって・・・」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「シャルロットか・・・・。良い名前だな」

「ありがとう、アル」

無邪気な笑顔でそう言ったシャルロットはアルの肩に身体を預けもたれ掛かる。アルも悪い気がしないのか何処か嬉しそうでありシャルロットの頭を撫でた。

「（お前といると『こんな日常を守っていきてぇ』って改めて思うよ）」

アルは指に填められた待機状態のシナンジュを見て決意する。

「（明日から俺もガチで頑張ろうかな？）」

しばらくして、二人は自分たちの状態に気付き顔を真っ赤にしたとさ・・・・。

◇

今日の戦いがあったアリーナの観客席に月明かりに照らされながら1人の少年が座っていた。掌には白い石が埋め込まれた指輪が乗っておりそれを見つめていた。

「・・・・・」

「ユニコーン・・・・か」

アルケーを修理に出している今、ユニコーンでしばらくは戦わなければならない。政志は今日の戦闘でアルケーに無理をさせたこと、

そして・・・・ダブルオーを使ってしまったことを悔やんでいた。

「まだまだ弱いな・・・・俺は・・・」

そう呟いていると足音が聞こえ誰かが近づいてくるが、その足音の持ち主が誰か政志には分かった。

「・・・ラウラか。ここは一応、立ち入り禁止なんだけど？」

「その言葉・・・そのままそっくりお前に返そう」

横を向くとラウラいて、ＩＳスーツの上にジャージの上着を羽織った格好をしていた。

「ホラよ」

政志はポケットから取り出した黒いレッグバンドを下投げでトスして、ラウラはそれを受け取る。

「これは・・・シュヴァルツェア・レーゲン!？いつの間に・・・・」

「お前が寝てる間に、勝手に予備パーツ使って直したんだが・・・余計なお節介だったか？」

「いや、助かる」

ラウラは一言だけお礼を言って政志の隣にちょこんと座る。

「全部、教官から聞いた・・・。今日あった事も、お前が・・・どうしてアロウズにいたかも・・・」

「・・・そっか。で、身体は大丈夫なのか？」

「あぁ、軽い打撲だけだ。大したことはない・・・って話を逸らすな」

「（チッ、バレたか）別にそらす気なんてねぇよ」

政志は今日の戦闘で黒いエクシアを纏ったラウラを全力で殴ったため心配していたが、本人が大丈夫だと言うのでホッと安心する。しかし、さりげなく話しを逸らしたつもりがラウラにはお見通しだった。

「それで、その・・・すまなかった」

「何がだよ？」

「お前のことを『裏切り者』と言ったりしたことだ！それと、それと・・・」

「？」

「今日、助けてくれて・・・ありがとう」

俯いてモジモジさせながらそう言うラウラを見て政志はクスッと笑ってしまう。こんなラウラを見るのが久しぶりだったため、どこか暖かい物を感じた。

「そ、それはそうとっ！」

バッとラウラは顔を上げて政志を見る。その顔は少し赤くなっていて、彼女の今の格好のせいもあり非常に色っぽく見えた。

「今日は負けてしまったが、次は絶対に勝つからな！」

「ハイハイ、分かった分かった」

頭を撫でながら適当に返事をする政志だが、ラウラの顔はますます赤くなる。

「子ども扱いするな！まったく・・・」

「じゃあ、どうしろと？」

少し機嫌を損ねてしまったと思いラウラにそう聞くと、ムゥと数秒悩みハッ思いついたような顔をしてはモジモジし始めるのサイクルを繰り返していた。政志が面白そうにそれを見ていたら、ラウラは右手の小指を突き出してきた。

「指切りだ」

「いいけど、今度は何を約束するんだ？」

「私はいつかお前を超えてみせる・・・絶対に」

ラウラの真剣な表情を見て政志は微笑みながら右手の小指を出す。

「いいぜ。破壊の神を超えれるものなら超えてみろ」

「ふん、上等だ」

二人は見つめ合いながら昔と同じように小指を絡め、あの呪文を唱える。

「「指切りでんまん　嘘着いたら　スカットミサイル　飲～ます　指切った♪」」

ラウラは満足したようで満面の笑みを浮かべて立ち上がり、二人は綺麗に丸みを帯びている月を月を眺める。

「オルコット達には明日にでも謝らないとな」

「そうだな。あいつらなら、すぐに許してくれるさ」

「・・・政志」

「あぁ？どうし」

政志は声を掛けられ横を向くと、ぐいっと胸倉を掴まれラウラに引き寄せられ、ラウラの顔が近づく。

「んっ！？」

「／／／／」

唇を柔らかい何かで塞がれ、一瞬何が起きたのか分からなかったが目の前にラウラの顔があったためキスされたんだと気付く。

「お、お前を私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！！」

指をさして宣言した後、ラウラは歩いてその場を去ろうとするが5、6歩歩いたところで止まり振り返る。

「私の初めてだからな。有り難く思え」

悪戯っぽい笑顔でそう言って再び歩き出した。

「・・・・・・」

ラウラが見えなくなったぐらいで政志は自分の唇に手を当てて、先ほどのキスの感触を思い出す。その後、ハァと溜息をついて月に視線を投げる。

「俺も初めてだったんだけどなぁ・・・・」

◇

「ええと、今日は転校生を紹介します」

次の日のＨＲで山田先生がどこか疲れたような顔でそう言うとクラスがざわめき出す。なにせ、このクラスにはすでに転校生が６人もいるのだから誰もがおかしいと思う。一部に人間を除いて・・・・。

「じゃあ、入って下さい」

「失礼します」

ドアが開くと金髪美少女が入ってくるが、それはクラスの誰もが知っている顔だった。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「その、ですね・・・。デュノア君は、デュノアさん、ということでした・・・」

《・・・・は?》

ぺこりと礼儀正しくスカート姿のシャルロットが礼をする。政志を除くクラス全員がぽかんとしている。数秒後、クラスの者達は正気を取り戻し始める。

「え?デュノア君って女・・・・?」

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「ってギアナ君!同室だから知らないってことは・・・」

「アル!テメェ見損なったで!」

「ボクはアルがそんな人だって前から気付いてたよ」

「アルも大変だなぁ」

「ちょっと待てよ!政志、ヘルプミー!」

「誰だお前?話かけるな」

「ノオオオオオ!!」

誰からも見放されたアルは嘆き叫ぶが魔神の出席簿クラッシャーを食らい撃沈し、それを見たクラスの者は静になる。

「で、ではもう1人転校生がいるので紹介しますので、入ってきて下さい」

「し、失礼・・・します」

開いたドアから、恥ずかしいのか少し顔を俯かせている茶髪の少女が入ってきた。その少女はトコトコと教卓の前まで歩いて顔を上げた。

「こ、琴吹ななせです！よろしくお願いしま、イタッ」

勢いよく頭を下げたななせは額を教卓にぶつけてしまい、「うぅ～」と唸りながら額を押さえる。その様子をみたクラスの女子はというと・・・

《か、可愛いーーーーっ！！》

「はうっ！？」

女子達は目をキラキラさせながらななせをガン見して、見られている本人は彼女らのテンションの上がりように少し怯む。それを見ていた政志、アル、龍鳳、クリスは幼馴染みがクラスに馴染めそうだと思って微笑む。しかし、４人は何か忘れている様な気がしていた。

「兄貴！ここにいましたかっ！！」

するとドアから少年が勢いよく入ってきて、その少年の顔を見てクラス全員が絶句する。

《トールギス君が二人！？》

「久しぶり～、元気だった？」

クラスが驚く中、クリスは少年に向かって手を振る。アルと龍鳳は

面倒臭そうな顔をしており、政志となせは顔をひくつかせていた。

「クリスッ！お前のその緩みかった顔をどうにかしろって前から言ってるだろうが！！」

「でも、双子なんだから似てるのはしょうがないよ」

《・・・・双子？》

「そうだ。俺はヴィンセント・トールギス。そこにいるクリストファー・トールギスの双子の弟だ！」

《えーーーーっ！！》

驚愕の事実を知ったクラスは朝だと言うのによく叫ぶ。

「そんなことはどうでもいい・・・兄貴っ！今こそ決着を付けましょう！！」

ヴィンスは一方的に指をさし政志に宣言する。すると、魔神が動いた。

「お前は隣の二組だろう。馬鹿者」

ドゴッとヴィンスの頭の上に出席簿クラッシャーを食らわせるが、踏踉けるものの撃沈しない。

「千冬姉の攻撃を食らってまだ正気を保っているなんて！」

「ただ者じゃないな！？」

一夏とラウラはヴィンスを見て驚きのあまり立ち上がってしまう。
ヴィンスは殴られた頭をさすりながら千冬を見る。

「どういうことですかい！？なんで俺が兄貴と一緒のクラぐふぉっ！！」

いつの間にかヴィンスの両サイドにいたアルと龍鳳は回し蹴りをヴィンスの脇腹に全力でお見舞いして、ヴィンスはいつぞやの龍鳳のように壁を突き抜けて外に飛んでいった。

「あの馬鹿がっ。面倒かけやがって」

「ホンマやで。違うクラスで助かったわ」

そんな風に話しているとガシッと二人の頭が何者かに捕まれ身体ごと持ち上げられる。メキメキと頭から危ない音が聞こえ二人は悶える。

「一つ聞くが、ＩＳ無しで空を飛んだことはあるか？」

魔神はそのまま二人を壁に開いた穴に投げて、どこぞのバイキンマンのように飛んでいった。全員が苦笑いする中、政志だけ顎に組んだ手を乗せて考え事をしていた。

「（バカとテストの召還獣のＯＶＡを買うか、買わないか・・・・）」

また、どうでもいいことを考えていた。

月明かりの道しるべ（後書き）

～オリキャラ設定～

◇ヴィンセント・トールギス◇

髪：髪の長さはクリスと同じだが、クリスと違い髪を纏めていない

瞳：翠色

好きなモノ：辛い食べ物、動物

嫌いなモノ：甘い食べ物、緩い人間、海

趣味：筋トレ

国：ロシア

容姿：上の上

備考：一匹狼にも見られるが本当は不器用なだけで優しいところがある。馬鹿。兄のクリスよりかは僅かに背が高く、目つきが鋭い。基本政志の言うことなら何でも聞く。しかし、ななせに好意を寄せているものの、ななせが政志が好きなのは知っているため時々政志に嫉妬することも・・・。

『レグナント』
パイロット：ヴィンセント・トールギス
～武装～
・大型ＧＮキャノン　一胸部に配置されておりＧＮフィールドの近似技術で、１本にまとめられた３本のビームが、互いに干渉することで発射後の軌道変更を可能としている。１本につき１２０度ずつをカバーしており、あらゆる方向へ、任意のタイミングで湾曲させることができる。

・ＧＮファング　一両腕部の指を分離して攻撃する無線式誘導兵器。内側にビーム砲を内蔵しており、高速移動しつつ全方位から攻撃を仕掛ける。腕部に接続したまま敵機を突き刺すクローとしても使用できる

・エグナーウィップ　一両腕部から射出される有線式の電磁アンカー。敵機をからめ取って電流を流し、パイロットに直接ダメージを与える。本機ではさらに子機が射出できるようになっており、ＧＮフィールドも突破可能。

・ＧＮマイクロミサイル　一両腕部に多数を内蔵している。

・対艦用ＧＮソード　一両肩の一基ずつ装備された超大型のＧＮソード。艦船を切り裂く威力を発揮する。

・ＧＮフィールド　一本機のは非常に強力で、セラヴィーのハイパーバーストですら無効化可能。

機体性能はアルケーとディアボロス並に高く圧倒的な戦闘が可能である。この機体は他の機体と比べると大型に見え、禍々しい両腕のクローで敵機を切り裂くためヴィンスは『魔獣』と呼ばれるようになった。

そろそろ臨海学校編が書けるぜ！！

目が覚めそうになった時のまどろみ延長ほど幸せなものは無い（前書き）

今回の話、ギャグ回にするつもりはなかったんですが・・・・・

とりあえず、本編をどうぞ！！

「ゴメンね、手伝ってもらっちゃって」

「別に気にすんなって」

放課後の廊下に赤い夕日が差し込む中、シャルロットとアルは歩いていた。ふたりともその手には今月の学校行事・臨海学校について書かれてプリントを持っていた。

「でも、良かったの？今日は政志達と出かける予定だったんでしょ？」

「お前・・・それ本気で言ってんのか？」

「え？」

アルはシャルロットの両手を掴み頭の上に回して壁に押しつける。持っていたプリントは床に落ちるが、今の二人にはそんなことはどうでもよかった。

「え、ちょっ、アル！？」

「お前がいけないんだぜ。こんな可愛い顔してるから」

両手を片手に掴み直して、もう片方の手でシャルロットの胸元のリボンを抜き取る。アルの目は真剣そのもので本気なんだとシャルロットも理解する。

「いいよ・・・アルの、好きにして・・・」

「言われなくても」

「アル・・・」

「シャルロット・・・」

愛し合う二人を遮る物など何も無く、夕日に照らされながら二人の唇と唇が・・・・

「・・・あれ？」

重ならなかった。

「もしかして・・・・夢？」

場所はＩＳ学園一年生寮の自室。鳥のさえずりが聞こえ時計の針は六時半を指しているからして、シャルロットは先ほどの出来事は夢だと気付く。

「（そうだよね。アルがあんなこと・・・・・）」

夢の内容を脳内再生したシャルロットはボッと顔を真っ赤にしてブンブンと首を横に振る。

「（うぅ～、何て夢見ちゃったんだろう・・・）」

先月の学年別トーナメントが終わった次の日には、女子としてＩＳ学園に通うことにしたので当然のごとく、部屋を変えられ今はアルとは別の部屋になっている。因みに現在アルはヴィンスと同室になっている。

「あれ？」

いつもなら隣のベッドで寝ているはずのルームメイトの姿がなく起きて何処かに行ったようではなく、最初からそのベッドを使った形跡が見あたらない。

「（・・・まあ、いいや。もうちょっと寝ようかな）」

もしかしたら夢の続きが見れるかもしれないと思い夢の内容を想像したらまたもや顔が爆発した。なにやってんだよシャルロットさん・・・・・。

カタカタカタッ

「（オリジナルの太陽炉と疑似太陽炉を一つの機体に搭載するのは、ちょっと無理があるかなぁ・・・）」

こんな朝っぱらからキーボードを鳴らしているのはななせだった。ベッドに座り膝の上に乗せたノートパソコンでアルケーのデータを見ていた。

「（ツインドライヴを搭載するのは良いんだけど、両脚の疑似太陽炉が問題・・・か）」

アルケーには背中に一基、両脚に二基、計三基の疑似太陽炉が搭載されており、背中にある疑似太陽炉を外して両肩に一基ずつオリジナルの太陽炉を搭載させるつもりだったのだが、そうした場合両脚の疑似太陽炉がツインドライヴの粒子同調率を下げてしまう可能性がある。まだ実際にアルケーに搭載してのマッチングテストを行っていない現段階でのこの問題は大きすぎる。アルケーのままならツインドライヴだけでも十分な戦闘を行えるのだが、『ヤークトアルケー』になるとツインドライヴだけではどうしても機動性が落ちてしまう。

「はぁ・・・・。政志に相談しようかな・・・？」

そう言ってななせは画面を変えて再びキーボードを打ち始めた。

「ん・・・・。ななせ、か・・・・？」

「ごめん、箒。起こしちゃった？」

キーボードを打つ音でルームメイトの箒が目を覚ましたと思いななせは申し訳なさそうな顔になる。

「いや、いつもこの時間帯には起きているから大丈夫だ。それより、何をしているんだ？」

完全に目を覚ました箒はベッドから降りてパソコンの画面を覗き込む。

「今考えてる新しい機体のためにみんなの戦闘データを纏めてたの。で、これがその機体」

そう言ってななせはその機体のデータを見せる。

「ユニコーン二号機『バンシィ』・・・」

「うん。政志が今使ってるユニコーンが試作機なら、バンシィは実戦機かな」

「・・・ななせ、一つ聞きたいことがあるのだが・・・」

「？」

突如暗い表情になった箒に疑問を持ったななせはパソコンの電源を切って画面を閉じた。

「お前は、・・・篠ノ之束を・・・姉さんのこと、どう思ってる?」

「・・・聞いちゃったんだね。その話・・・」

「あぁ、クリストファーから・・・聞いた」

「ごめんね。あの子時々、感情的になるところがあるから・・・。でも、本当はみんな分かってるんだよ?篠ノ之束さんが悪いんじゃないって・・・。あたしは、そう思ってる」

「そうか・・・ありがとう、ななせ」

優しくそう言ってくれたので、箒も心が暖まり表情が明るくなった。ななせは箒がいつも通りの表情になったので安心して、細く笑みを浮かべる。

「箒って・・・確か剣道の全国大会で優勝してたよね?」

「まぁ、そうだが・・・よく知っているな」

そんな中学の頃の話などななせにしたことなどなかったのにどうして知っているのか疑問の思った。

「ここに来る前に、全校生徒のデータは一通り目を通したから」

さらりと凄い事を言うね君は・・・。

「それでもし箒が迷惑じゃなかったら、あたしに剣道を教えて欲しいんだけど・・・」

「もちろん、全然構わないぞ。今から稽古に行くのだが一緒にどうだ？」

「うん、行く行く！」

その時のななせの無邪気な笑顔はとても愛らしかったと箒は語った・・・・。

コケーコココココッ！

「・・・・ん・・・・」

朝日が差し込み部屋を明るく染める。何故か木の枝に留まっている

鶏のけたましい鳴き声で少年は眠りから覚めようとする。

「（あと3時間・・・・）」

しかし、少年こと政志は起きない。それよりも今から3時間も寝てたら授業に遅れますよ！

「（むにゅ～・・・柔らかくて良い臭い・・・）」

政志は意外にも寝相があまり良いとは言いずらく、ベッドから落ちたり、頭に敷いていた枕を抱きかかえてたなんてことが時々あるぐらいだ。しかし、今日に限っては抱きかかえている物は枕では無いようだ。

「（肉・・・いただきます・・・）」

頭の中では肉を食べようとしている政志だが、現実ではかなり違った。しかし、頭の中での行動が現実の行動と連動していて政志は目の前の物にパクッとかぶりつく。

「ん・・・／／／／」

明らかに自分のものではない色っぽい女の声を聞いて政志は飛び起きて布団をめくると隣には顔を恥ずかしそうに赤くしてラウラがいた。そんなことはどうでもいい・・・いや、よくないのだが一番問題なのはラウラの格好で左目の眼帯と右太ももに着けてあるＩＳの待機状態のレッグバンドのみ、つまり全裸だ。

「あ、朝から大胆だな・・・胸に食いついてくるなんて・・・／／／／」

政志はすぐにラウラに布団をかけ直して背を向ける。

「（おかしい・・・どう考えてもおかしい。なんでラウラが俺の隣で裸でいるんだよ?それに、今のセリフからすると俺がラウラの胸に・・・・。あぁ、なるほどな・・・これは夢か。そうかそうか）」

自分にそう言い聞かせながら窓を開けてベランダに出てと、何故か木の枝に留まっている鶏と目が合うが無視した。そして、下に落ちないように設置されている小さな塀目掛けて頭を振りかぶり全力で額をぶつけた。

「・・・・・現実か」

塀は粉々に砕け散って地上に落ちる。下に誰かいたらどうするつもりだったんだよ、オイ。少し痛かったのか額を手でさすりながら部屋に入って隣のベッドを見ると布団ごと一夏の姿が見あたらない。どうやらラウラに排除されたんだと政志は推測した。

「なんでお前が俺のベッドにいるんだよって見せるな、隠せ隠せ！」

ハラリと布団が落ちてラウラの素肌が露わになり、政志は両目を手で覆う。

「夫婦とは互いに包み隠さぬものだと聞いているぞ?ましてお前は私の嫁」

「オイ、それを言ったの絶対にクラリッサだろ?」

「そうだが、よくわかったな」

「（アイツ・・・・殺す）」

政志が心の中でそう決意すると同時にドイツにいる本人は悪寒を感じていた。ラウラは政志の顔が少し赤くなっていることに気づき悪戯ッ子のような笑みを浮かべる・

「案外初なんだな。こんな格好をしている女がいたらそのまま襲」

最後まで言い切る前に政志はラウラを押し倒して両手を頭の両脇に置いて馬乗り状態になる。

「え、ちょっ！？」

「あまり俺をからかうなよ・・・じゃねぇと、本気で食っちまうぞ？」

戦っている時のように悪い笑みを浮かべる政志に対してラウラは真っ赤になり心臓が破裂するぐらいに血液のビートを刻んでいた。

時は少し遡る。

「本当に初心者と思えないぐらいの動きだったぞ」

「一応軍人だからね。ちょっと触るぐらいしかやってないんだけど」

朝の鍛錬を終えてシャワーを浴びた後、ななせと箒は政志と一夏を朝食に誘おうと二人の部屋に向かっていた。しかし・・・・

「い、一夏!?」

部屋の前には布団でくるまれその上に鎖を巻いて身動きがとれないようにされている一夏がいた。頭と足首しか出ていないのでかなり恥ずかしい格好になっていて、箒とななせはすぐに駆け寄る。

「一夏、起きろ!目を覚ませ!!」

「む・・・箒かってどうして俺はこんな状態なんだよ!?」

「私が知るか!!」

どうやら一夏が知らない間に部屋から放り出されたようで、ななせは誰がこんなことをしたのか考えていた。

「なんや、どうしたんや?」

「一夏くん、部屋の前で何してるの？」

「朝っぱらから何騒いでるのよ？」

「相変わらず落ち着きのない人達ですわね」

「ったく、なんだようるせぇな」

「みんな集まってどうしたの？」

「兄貴に何かあったのか！？」

騒ぎを聞いて龍鳳、クリス、鈴、セシリア、アル、シャルロット、ヴィンスが部屋の前に来たが、シャルロットだけはアルを見た瞬間顔を赤くしていた。

「イッチー・・・お前そんな趣味があったのか？」

「さすがにひくで」

「違うんだ！目が覚めたらこうなってたんだよ！！」

「じゃあ、誰がやったって言うのよ？」

全員が部屋の扉に視線を向けて、ななせがドアノブに手を掛けると鍵がかかってないのか扉が開いた。

「あれ？開いてるよ」

そういって扉を開けて中に入ると・・・・

「あまり俺をからかうなよ。じゃねぇと本気で食っちまうぞ？」

「・・・・・」

ななせの視界には全裸のラウラの上に馬乗りをしている政志が写った。どうみても政志がラウラを襲っているようにしか見えず絶句する。人の気配を感じ取ったのか政志は入り口の方を振り向くとななせと目があった。

「「・・・・・・」」

「ななせ、一体どうし・・・」

「ちょっと、何が起きて・・・・」

「こんなところで立ち止まっ・・・」

「まさか政志に何か・・・」

ななせに続いて部屋に入ってきた箒、鈴、セシリア、シャルロットはななせ同様絶句してしばらくして顔を真っ赤にする。

「さすが政志・・・大胆だね／／／／」

「まさに獣の王・・・ライオン／／／／」

シャルロットとセシリアはなんだかよく分からないを言っており、ななせは拳から血が出るんじゃないかというぐらいに手を握っていた。

「なんだ、なんかあったのゴヴァッ！」

アルがそう言って部屋に入ってこようとしたのを見てななせ以外の女子全員がアルを蹴り飛ばした。

「だ、男子は入っちゃ駄目なんだからね！」

「龍鳳、中に入ったら殺すわよ？」

「なんでやねん！？」

箒、セシリア、鈴、シャルロットは部屋に男子が入って来ないように食い止めており、その傍らでアルは泡を吐いて気絶していた。一方部屋の中では・・・・・

「まったく不作法なやつらだ。夫婦の寝室に勝手に入ってくるとは」

「夫婦ゥ！？」

火に油を注ぐようにラウラはそう言いい、ただでさえ真っ赤になっていたななせの顔が更に赤くなる。

「一応言っておくが、政志が私を押し倒したんだぞ？」

「ちょ、ラウラ！余計なこと・・・」

怒髪天にきたななせはどこから持ち出したのかバスターライフルを構え発射態勢に入っていた。その銃口はラウラに向いていた。

「どうせ、あんたが誑かしたんでしょうが！！」

「ふん。当てれるものなら当ててみろ」

ラウラはシーツを身体に巻いてベランダから逃げようとするが、ななせはそれに合わせてバスターライフルの銃口を変える。

「消えて無くなれぇぇぇぇぇ！！」

ななせの雄叫びと共にバスターライフルから閃光が放たれるもののラウラは間一髪のところでベランダから飛び降りてかわした。それを見たななせは舌打ちをして政志に視線を向ける。

「政志・・・・」

「・・・はい」

「こ、今度こんなことあったら許さないんだからねっ／／／／」

そう言って顔を真っ赤にさせたななせは不機嫌そうに鼻を鳴らして出て行った。

「・・・・・」

ベッドに座ったまま政志は見るも無惨にボロボロになった部屋を見る。

「ギャグ補正でなんとかなるよな？」

そう言って政志は制服に着替えて朝食を取りに部屋から出て行くと

すぐに部屋は元通りになっていた。

目が覚めそうになった時のまどろみ延長ほど幸せなものは無い（後書き）

やっちゃった感がハンパねぇっす・・・・

しかし、後悔はしない！！

次は軽く戦闘を入れるかもしれません

では次回もお楽しみに～～

一角獣、赤く輝く（前書き）

今回ちょっと内容が薄いかな？

遂にあの機体が暴れ出す！？

本編をどうぞ！！

一角獣、赤く輝く

「模擬戦をしよう」

《はぁ？》

学食で昼食をとっていた政志、アル、龍鳳、クリス、一夏、ヴィンス、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。そして、何故かアルは割り箸を十二本持っている。

「アル・・・一つ聞いていいかな？」

「どうぞ、シャルロット君」

「いきなりどうしたの？」

シャルロットはみんなが疑問に思っていた質問をするが、それを聞いたアル（馬鹿）はハァと溜息をする。

「忘れたのか？今日から政志がアリーナを使えるってことを」

皆さんは覚えているでしょうか？政志は学年別トーナメントの日にアリーナの中と外を繋げてしまったことを・・・・。さすがにそれを見逃す訳にはいかず千冬から政志に「お前はしばらくアリーナ使用禁止だ」と宣告をされてしまった。しかし今日、その禁止期間が終わったのだ。

「そこでだよ。俺たちの親睦を深めるのも兼ねて６対６の模擬戦をしようってわけだ」

「なんや、オモロそうやな」

「アルにしては良いこと思いつくね」

「まったくだぜ」

「・・・お前ら兄弟、いつか絶対に殺すからな」

それならと全員が参加することになった。しかし、チーム分けはどうするのかと全員が思ったがアルが手に持っている十二本の割り箸を見て納得がいった。

「へぇ～。その割り箸でチームを決めるってわけね？」

「アーノルドさんにしては準備がいいですわね」

「・・・もういいです」

セシリアに何気なくヒドいことを言われて凹んでいたアルの頭をシャルロットがよしよしと撫でていた。

「まぁ、取り敢えず引けばいいんだろ？」

「そうだな」

政志と一夏がそう言ってアルの持っている割り箸を掴むと残りのアル以外の全員が割り箸を掴んだ。

「（政志と同じチームよ、来い！）」

「（絶対政志と一緒のチームになるんだから！）」

「（一夏と同じ一夏と同じ一夏と同じ！）」

「（クリスさんと同じが！）」

「（引いてやろうじゃないの！）」

「（うぅ～。アルと一緒がいいなぁ・・・）」

ラウラ、ななせ、一夏、セシリア、鈴、シャルロット達の思いを乗せ、全員が割り箸を引っ張ってみると・・・・。

「「「「「え？」」」」」

くじの結果は赤チームがななせ、アル、龍鳳、クリス、一夏、ヴィンス。青チームが政志、ラウラ、箒、セシリア、鈴、シャルロット。その結果を見てラウラ以外の女子はしょんぼりしていた。逆に男子はというと・・・・。

「政志！今までの鬱憤を晴らさせてもらうぜ！」

「せやなボコボコにしたるで！」

「悪いけどこれ戦争なのよね」

「兄貴は俺が討つんだ・・・今日ここで！」

「俺のこの手が真っ赤に燃える！」

上からアル、龍鳳、クリス、ヴィンス、一夏。若干名キャラが崩壊しているが・・・気にしたら負けだな。

「ねぇ・・・このチーム編成こっちが不利すぎるんじゃないの？」

馬鹿共が騒いでいるとチームの振り分けに鈴が異を唱えた。よく考えると、いくら普通のＩＳと同じぐらいの性能にしているとは言え、赤チームのメンバーは地球連邦大将が３人と中将と少将が１人ずつ。どう考えても戦力差がありすぎる。

「そっちには政志がいるじゃねぇかよ」

「せやせや」

「でも、政志は今日初めてユニコーンを使うんだよ？」

アルと龍鳳はそう言うものの、ななせの言う通り政志は今日までななせにもらったユニコーンを一度も起動させていない。それに比べてアル達は授業や放課後の訓練でも使っていたため、やはり青チームの不利には変わりはないように思えたが・・・・

「じゃあ今日の放課後、第四アリーナに集合な」

意外と乗り気な政志はそう言って空になった丼を持って席から去っていった。

放課後。

「なかなか広いね～」

シャルロットは第四アリーナの広さに驚いていた。第四アリーナは集団戦闘訓練を目的に作られたアリーナであり普通のアリーナより広めにつくられている。使用する際には教師の許可が必要であるためか、政志達以外は誰もいなかった。

「ルールはどうするんだ？」

「もちろん、相手チームを全滅させるまで！」

アルからルールを聞いた政志は何故かニヤリと笑ったが誰も気付かなかった。両チームは相手チームに聞こえないぐらいに距離を置いて作戦会議を始めた。赤チームの場合・・・

ア「まぁ、当たり前と思うけど政志が問題だな」

ヴィ「アーノルドの言う通りだな。・・・ななせ、ユニコーンの性能について説明してくれねぇか？」

な「ユニコーンは一言で言うと万能機かな。前衛もこなせるし、後衛もこなせるし。武装はビームマグナム以外は気にしなくてもいいかな」

ク「ビームマグナムって何？」

な「ユニコーンの主力武器。１発が通常のビームライフル４発分の威力があって、掠っただけでシールドエネルギーが１００は持って行かれると思ってた方がいいよ」

一「なるほど・・・後何か気を付けることはないのか？」

な「機体が赤く光ったら絶対に距離を置くこと。これだけは覚えてて」

龍「赤く光ったらやな、了解や」

～以下省略～

青チームの場合・・・

政「ななせ以外の奴の機体についてはみんな知ってるよな？」

シャ「うん。アルのシナンジュは武装は淡白なものが揃ってるけど、全身にあるスラスラーがどんな体勢でも機動性の高い動きができるようになってるね」

セ「クリスさんのクシャトリヤはあの自立機動兵器が厄介ですわね。他にも高火力の装備が揃っていると見て間違いないと思いますわ」

鈴「龍鳳のエピオンは近接武器しかないけど加速度がハンパないから闇討ちには気を付けた方がいいわね」

箒「一夏の白式も近接武器しかないが一撃必殺の零落白夜が問題か・・・」

ラ「ヴィンセントの『デスサイズヘル』の武装はビームサイズだけだが機体がセンサーに映らないからな」

箒「政志。そう言えば、ななせの機体はどうなんだ？」

政「分かんねぇ。ＩＳの実習でもいつもパソコンでデータ解析してるからな。でも、あの六人の中で一番強いのはななせだってことだけは覚えておけよ」

～以下省略～

両チームの作戦会議が終了したようでそれぞれがＩＳを展開して位置につく。一夏、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラはそれぞれの専用機を使っており、箒は打鉄を借りている。アルのシナンジュは赤い装甲に背中の大型のスラスターが翼にも見える。龍鳳のエピオンの装甲はシナンジュのものよりも深い赤色で背中には龍のような翼があり左手には小型のシールドが装備されている。クリスのクシャトリヤは緑の装甲に両肩にある大型の四つのバインダーが特徴的であり他の機体よりも大型である。ヴィンセントのデスサイズヘルは見たまんま黒い死神としかいいようがない（べ、別に説明が面倒臭かった訳じゃないんだからね）。そこまでは全員が知っていたがななせの機体と政志の機体には全員が見入ってしまった。

「綺麗・・・」

「まるで天使だな・・・」

ななせのウイングゼロを見ての感想を述べるシャルロットとラウラ。ななせのウイングゼロはデスサイズヘルの正反対で背中には天使を思わせるような白い翼があり、ななせの美人顔もせいもあって余計に綺麗に見えてしまう。一方政志のユニコーンは・・・

「・・・何かシンプルだね」

「あぁ」

「クリス、一夏、それ以上言うなや。政志も多分気にしてるで」

全身真っ白な装甲に覆われているとしか言いようがないぐらいにシンプルだった。そこで、ななせがあることに気付く。

「ところで、開始の合図って誰が言うの？」

それを聞いた青チームはニヤリと悪い笑みを浮かべる。

「だったら俺が言ってやるよ」

「「「「「え？」」」」」

政志がそう言うと政志はビームマグナムを、セシリアはスターライトｍｋ？を、鈴は衝撃砲を、シャルロットはグレネードランチャーを、ラウラはレールカノンを構える。それを見て赤チームの全員が口をポカンと開ける。

「始め」

政志の試合開始の合図と共に青チームは構えていた武器を赤チーム目掛けてぶっ放した。それを見た赤チームは回避しようとするが反応が遅れた一夏は全部被弾してしまい白式のシールドエネルギーが一気に減少する。

「箒、今だ！」

「承知した！」

箒は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使って怯んでいる一夏に急接近する。

「お前、いつの間にそんなの使えるようになったんだ！？」

「この前ななせに教えてもらったんだ」

箒が瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使えることに驚く一夏にお構いなしに近接ブレードで右肩左脇腹にかけて斬りつける。それをモロに受けてしまった一夏はまずいと思い飛翔しようとするが・・・

「これで墜ちてもらうよ！」

いつの間にか一夏の背後に回り込んでいたシャルロットが自らの愛機の最強の武器を押しつける。６９口径のパイルバンカー。通称・盾殺し（シールド・ピアース）。第２世代最高クラスの威力を持つ武器が火を噴いた。

「うおぉ！？」

一夏はその勢いで地面に激突してクレーターを作りシールドエネルギーが０になった。それを見たシャルロットがふぅと一息いれていたら地面に自分の影を覆い尽くすような悪魔の翼の影が見えて振り向くとビームサイズを振り降ろそうとしているヴィンスがいた。

「まずは１人！」

「く、しまっ」

「ところがぎっちょん！」

ビームサイズがシャルロットに振り下ろされるギリギリのところで瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使った政志がその勢いでヴィンスにライダーキックを食らわせた。

「グホォッ」

蹴り飛ばされたヴィンスは壁に激突して仰向けに倒れて起きあがろうとするが、政志はもう一度瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使って接近してヴィンスの腹部にビームマグナムを押しつけた。

「逝っちまいなぁ！」

ゼロ距離だろうが何だろうが政志はお構いなしにトリガーを引いてビームマグナムを発射した。

ズキューーンッ！

「グハッ」

一発でシールドエネルギーの半分を持って行かれるほどの威力を有しており、衝撃でクレーターを作る。それほどの威力の物を政志はもう一度トリガーを引いて発射した。

ズキューーンッ！

ビームマグナムを二発食らってしまったヴィンスのデスサイズヘルのシールドエネルギーはさすがに０になってしまい、ＩＳが強制解

除されてしまった。試合開始僅か十秒で赤チームはすでに二人脱落してしまい一気に不利になった。

「あの野郎、マジかよ！？」

最初の奇襲で一夏がやられたのは仕方無かったが、ヴィンスまで一瞬でやられるとは思っていなかったアルは政志を見て額に一筋の汗を流す。政志の動きは完全にいつも通りで、今日初めて動かす機体を操縦しているとはとても思えなかった。

「一夏とヴィンセントを墜とした。予定通り箒とセシリアは龍鳳を、ラウラと鈴とシャルロットはななせを、アルとクリスは・・・・俺がやる」

「「「「「了解！」」」」」

政志はビームマグナムをアル達に向けて発射させ散開させた。それを見た箒達はすぐに指示通りの相手に攻撃を開始し始めた。

「どうしてあたしだけ3人がかりなの！？」

ななせはシャルロットのショットガンの散弾を避けながら3人に問いかける。

「作戦だしね」

「それにあんた強いらしいじゃない？」

「お前とは戦ってみたかったからな！」

ラウラは両手のプラズマ手刀で斬りかかるがななせはビームサーベルではじき返す。驚くラウラの腹部に蹴りを入れて吹っ飛ばす。

「はぁ、仕方ないなぁ・・・・・本気でいくよ?」

溜息をついたと思った瞬間、ななせの雰囲気が変わりラウラ、シャルロット、鈴はたじろぐ。そしてこの3人は知ることになる。『黒い堕天使』と呼ばれるななせの実力を・・・・・。

「ティアーズ!」

セシリアは龍鳳と斬り結んでいる箒の援護を行っていた。しかし、さすがは高機動戦を得意とするだけあってなかなか被弾しない。

「箒、なかなかやるやないか」

「どういたしましてだな!」

エピオンと打鉄のビームソードと近接ブレードがぶつかり合い火花が散る。ＩＳの戦闘においては圧倒的に龍鳳が有利なのだが、今使っているエピオンには近接武器しか搭載されておらず近接戦闘を得意とする箒にはなかなか決定打を与えれないでいた。

「（クソッ、さすがは全国最強なだけはあるで。それに・・・・）」

隙を見つけて箒に左手のヒートロッドで攻撃をしかけるものの・・・

「させませんわ！」

セシリアのスターライトｍｋ？のビームがヒートロッドの軌道を逸らし箒への攻撃を妨害する。

「セシリア、助かった」

「これくらいどうってことないですわ」

「（セシリアも最初の頃と比べると格段に強ぉなっとる。これはガチの本気で行かなアカンなぁ）」

龍鳳はビームソードを強く握り直して、再び二人に目掛けて斬りかかっていった。

「さあ、始めようぜ」

アルとクリスはどうやって目の前にいる破壊神を倒すか模索していた。アルのシナンジュはともかくクリスのクシャトリヤは一対多に特化した機体であり一体の敵を味方と一緒に戦うのは向いていない。下手したらクシャトリヤの主力武装であるファンネルが味方に被弾する恐れがあり、クリスはこの手の武装をまだ使えこなせておらず２４基あるファンネルの内正確に動かせるのは８基だけ。おそらく今のところ２４基全てを同時に使用できるのは政志となななせぐらいだろう。

「よくもまぁ上手い具合に分散させられたものだな」

「そうだね。正直最悪の状況だね」

これが戦場だったら死んでるよ、とクリスはから笑いをする。政志は両手にビームサーベルを構えて、アルもビームサーベルとシールドアックスを構える。

「行くぞ」

「来るな！」

高速で突っ込んできた政志はアルに目掛けてサーベルを振り下ろすがなんとかアルはそれをシナンジュの持ち前の高機動でよける。すかさずクリスは肩の四つのバインダーからファンネルを二基ずつ出して政志に向かわせる。

「（ファンネルか。・・・・クソっ、あっちがヤベェな）」

政志はななせの気配が変わったのを感じて本気を出したんだ気付くが、クリスのファンネルが迫ってきており、そこで政志はユニコーンのデータにあったあるシステムを思い出した。

「チッ、一気に片を付ける！」

【ＩＳ－Ｄ　発動】

突如ユニコーンの装甲の各部が展開されて、展開された部分が赤く発光し体格も一回り大きくなったと思ったらファンネルの動きが止まった。

「変形・・・した？」

「ったく、ななせのやつとんでもねぇもん作りやがって！」

二人の目に映るのはユニコーンのリミッター解除された姿『ユニコーン・デストロイモード』。破壊に目覚めた獣と破壊神が一つになった瞬間だった。

一角獣、赤く輝く（後書き）

デスサイズヘルファンのみなさんすみません

速攻でやられ役にさせてしまって・・・・

次回は政志とななせが戦う！？

またのお楽しみを！！

結局これかよ・・・・

「（ＩＳ－Ｄ（インフィニット・ストラトス－デストロイヤー）が発動した・・・じゃあ、余りアルとクリスも長く持たないかな？）」

ななせはユニコーンが変形したのを見て少し焦りを感じるが、すぐ目の前で鈴が双天牙月による斬撃を加えようとしていた。

「余所見なんて、えらく余裕じゃない！」

「そうでもないよ」

双天牙月が振り下ろされる直前にななせは片手に持っていたバスターライフルを瞬時に鈴に向けトリガーに指をかけると、危険を察知した鈴は斬撃を中断して体を反らして避けようとする。が、いつまでたっても発射される気配がない。

「なっ！？」

「甘い」

鈴が避けようとするのを予想していたななせは身体全体を回転させてもう片方に持っていたビームサーベルで斬りつける。しかし、二人の間にシャルロットが割り込んで鈴への攻撃をシールドで防ぐ。

「やるね、シャルロット」

「くっ、強いね・・・ななせ・・・！」

「シャルロット、鈴、離れろ！」

ななせとシャルロットが鍔迫り合いをしているとシャルロットが僅かに押されているを見たラウラはななせに向けて真上からレールカノンを発射する。シャルロットと鈴はラウラの声を聞き離れようとするが、ななせはビームサーベルを引いてバスターライフルに持ち替えながらシャルロットに回し蹴りを入れる。

「うぅっ！」

「キャアアア！」

蹴られたシャルロットは後にいた鈴にぶつかり、ななせは仰向けになると同時に両手に持っていたバスターライフルを連結させる。

「ななせ、貴様っ・・・！」

「ターゲット、ロック」

ツインバスターライフルが発射されそうなのを危険と感じたラウラはすぐさまレールカノンを放つ。

「遅い」

実弾が向かってきてもななせは慌てることなくトリガーを引いた。銃口の目と鼻の先にいた実弾は極大のビームによって蒸発し、ビームはそのままラウラに襲いかかる。

「「ラウラっ！」」

「（やられるっ・・・！）」

そう思った瞬間、赤い閃光が煌めいた。

「（？衝撃が・・・来ない・・・？）」

ラウラは目を閉じて身体の前で手を交差させて衝撃に備えていたが、それがなかなか来ない。不思議に思って目を開けてみるとそこには・・・

「ったく、何て威力なんだよ。Ｉフィールドごとシールドが蒸発したぞ？」

さっき砲撃を左手のシールドで防ぎ、痺れているのか左手をぷらぷら振っている政志がいた。

「「「政志！」」」

「・・・アルとクリスは？」

「あそこで寝てるぞ」

ななせの問いに政志は指を差し、そっちを見ると地面に出来たクレーターの中心で目を回して気を失っているアルとクリスがいた。

「このリミッター解除システム、なかなかよく出来てるじゃねぇか。・・・まっ、五分しかもたないっていうのが少し痛いが、そこは搭乗者しだいだな」

「その機体をそこまで乗りこなすなんて・・・さすが政志だね」

連結解除したバスターライフルからビームサーベルに持ち替えたななせは政志と同じ高さまで飛翔する。

「・・・ラウラ、鈴、シャルロット、お前らは龍鳳をやれ。箒とセシリアが墜とされた」

ななせの隣に並び立った龍鳳を見て政志はそう言い、地上では箒とセシリアが悔しそうな顔で龍鳳を睨んでいた。

「ななせ。こいつちょっと格闘に特化させやで」

「しょうがないじゃない。だって全部私と政志が乗りこなせるようにし・・・あ」

「おい、今のホンマか？」

「そ、そんなわけないよ！誰が政志のために作ったなんて・・・／／／」

「（こいつ・・・）」

顔を赤くさせて指をモジモジするななせを冷ややかな目で見る。どうして今回ななせが用意した機体がどれも癖が強いものばかりなのかが分かった龍鳳は溜息を付きつつも今の状況を整理する。

「（2対4か・・・結構キツいでこれ。まあ、政志が乗るんを想定して作った機体やから、アルとクリスが使いこなせてないのもしゃあないけど、いくらなんでもやられるの早すぎるで。それだけ政志が強いんやろうけど・・・）」

さすがは破壊神といったところか・・・。

「龍鳳」

「な、なんや・・・」

いつものななせからは感じられない戦う時によく聞く冷たい声。それを聞いてすこしヒヤッとしたが、その表情は獲物を見つけた獣のようにも見えた。

「政志とは私がやるから・・・手は出さないで」

「はっ、了解や！」

ななせは今まで政志と訓練などをしたことはあっても戦うようなこ

とは無かったため、一度は戦ってみたかったんだと龍鳳は推測して地上付近にいる鈴とシャルロットに向かっていった。

「ラウラ」

「あぁ、任せろ」

政志の指示に従い、ラウラは鈴とシャルロットに加勢しに行った。そうして上空には政志とななせだけになると同時にユニコーンの装甲が元に戻り、純白の機体に戻った。

「もう5分たったのか・・・案外早いな」

「ＮＴ－Ｄ無しで私、に勝つつもり？」

ななせは両手のビームサーベルを逆手に持ち直し不適な笑みを浮かべるが、政志も両手にビームサーベルを持ちハッと笑い返す。

「堕天使風情が・・・破壊の神に勝てると思うなよ？」

「悪いけど、勝たせてもらうから」

二人とも加速をつけるためか向き合ったまま後退してある程度離れたところで止まる。その顔に浮かべるのは戦いを楽しむ者の笑み。

「ユニコーン、鈴木政志」

「ウイングゼロ、琴吹ななせ」

「「出る（行きます）！」」

破壊神と黒い堕天使がぶつかり合う！

筈だったが・・・・・

「お前達！今すぐ試合を中止しろ！」

アリーナ内に女性の声が響き渡り皆が動きを止める。声のする方を向くと腕を組んだ千冬が額に青筋を浮かべてステージの真ん中に立っていた。全員が地上に降りてＩＳを解除して千冬の周りに集まるがかなりご立腹のようだ。

「もう、何やねん。ええトコやったのグホッ！」

龍鳳の頭に容赦のない拳が叩きこまれ沈む。千冬はやれやれと額に手を当てて呆れた顔で政志達を見る。

「お前達・・・周りをよく見ろ」

「一体何だよ。千冬ね・・・・」

《あ・・・・》

全員が振り返るりアリーナをよく見ると、ステージにはクレーターでボコボコになっており、観客席は政志のビームマグナムの流れ弾でシールドを突き抜け一部が崩壊しているやらでアリーナ全体が見るも無惨な姿になっていた。さすがにこれを見た一同は言葉を失い、背後に殺気を感じてギギギと機械音を立てながら振り向くと阿修羅がいた。

「罰として全アリーナの整備及び掃除をするように。それが終わるまで寮には帰さんからな。覚悟しておけ」

《・・・・・はい》

そう言って阿修羅はスタスタと去っていき重い空気が流れ、そこで

シャルロットとクリスがあることに気づく。

「あれ？アルがいないよ」

「ヴィンスも」

言われてみればと辺りを見渡しても金髪ウニ頭と不良白髪頭の姿が見えず一つに結論に至った。

《（あいつら逃げやがったな・・・》

「・・・ラウラ、手榴弾あるか？」

「あぁ」

ラウラはどこからかは知らないが手榴弾を取り出し政志に渡し、政志は野球のピッチャーのごとく大きく振りかぶって投げると、手榴弾は放物線を描きアリーナの外に飛んでいき着弾と共に爆発して馬鹿二人の悲鳴が聞こえた。それを聞いた一同は政志に向けてグッと親指を立てた。

「シャルロット、アルを拾って第三アリーナを頼む。ヴィンセントは・・・面倒臭いから放っておけ」

「うん、任せて」

「一夏と箒は第四アリーナ、クリスとセシリアは第二アリーナ、龍鳳と鈴は第一アリーナを頼む」

「「「「「分かった（はいよ）（うん）（分かりました）」」」」」

」」

「で、残りのメンバーでここの・・・だな」

「「分かった（うん）」」

政志の指示に従ってそれぞれが担当のアリーナに向かって行った。
余談だが、シャルロットがアルとヴィンスを見つけたとき二人とも黒こげで気絶していたらしいが、シャルロットはアルの足を掴んで引きずりながら連れて行ったらしい・・・政志の言う通りヴィンスを放置して・・・・。

～第二アリーナ～

「どうして私がこんなことを・・・」

セシリアとクリスは二人でゴミ箱のゴミの分別をしていた。何故かゴミ箱が一つしかなく可燃ゴミと不燃ゴミがまとめて捨てられており苦戦していた。

「ごめんね、セシリアちゃんにこんなことさせちゃって」

「そんな、クリスさんが謝ることではありませんわ」

「ありがとう、そう言ってくれると助かるよ」

「ハウッ／／／／」

クリスの１００カラットの笑顔に顔を赤くしてしまうセシリア。顔が赤くなったのを見て心配したクリスは自分の額とセシリアの額をくっつける。

「#$&&%&$%／／／／」

「う～ん。熱は無いみたいだけど・・・ってセシリアちゃん大丈夫!?」

いきなりのクリスの行動に頭がショートしたセシリアは煙を上げながら気を失った。

「ええと、ええと・・・そうだ!誰か、誰か・・・助けてください!」

某世界の中心で愛を叫ぶの名シーンを再現するクリス。やはり君も

馬鹿なんだね・・・・

～第四アリーナ～

「はあ、俺今日何もしてねぇんだけど・・・」

「あれは反応が遅れたお前が悪いんだ。仕方がないだろう」

一夏と箒は窓拭きをしており、一夏は今日の模擬戦で真っ先にやられて何もできなかったため落ち込んでいた。

「それにしても箒があそこまで強くなってるとはな。正直驚いたよ」

「そ、そうか・・・？」

「あぁ。俺も負けてられねぇな」

一夏ははにかみながらそう言って、誉められた箒は優しく微笑みながら一夏を見つめた。

「ふふっ。お前のために強くなったんだぞ？」

「え・・・？／／／／」

夕日の光が箒を照らし余りにも美しく見えて一夏は思わず見とれてしまう。それを見た箒は悪戯っ子のような笑みを浮かべながら次の窓を拭きにかかった。

～第一アリーナ～

「モウヤダ、メンドクサイ」

「待て待て待て待てぃ！片言で言うたら見逃してもらえると思ったら大間違いやで」

鈴と龍鳳はアリーナにある訓練用ＩＳの整備を行っており疲れた鈴が駄々をこね始めた。

「もう、別にこんなのぱぱっとやっちゃえばいいのよ！」

「アホ言うなや！・・・はぁ、分かった。後はやっとくからお前は休んどけ」

「そう言われると、なんだか罪悪感を感じるわね」

「ほなら手伝えや」

「え～・・・やだ」

「どっちやねん、ゴラァァァ！！」

怒った龍鳳が鈴を追いかけ回している最中に千冬に見つかり一撃を食らい撃沈したらしい。小学生か・・・・・・・

～第三アリーナ～

「アル、ちゃんと手を動かしてよ」

「はいよ～～」

シャルロットとアルは箒で観客席を掃除しており、掃除が好きではないアーノルド君はやる気がない。

「それにしても、ななせってあんなに強かったんだね」

「まぁな。俺が知ってる限り、政志と互角にやり合えるのは姐さん（千冬さん）とななせぐらいだからな。あのまま続けてたら結果はどうなってたか・・・・でも、政志は勝つんだろうな、きっと」

「うん。政志って本当に凄いよね」

シャルロットがそう言って政志を誉めるのを聞くとアルは少しムッとした顔になるがシャルロットは気づいていない。

「でも、アルも凄いと思うよ」

「え？」

「だって、いつもはやってない慣れない高機動戦を短期間であそこまで出来るようになるなんて尊敬しちゃうな」

笑顔でそう言われてアルは顔を赤くして目をそらし一呼吸いれて何か決心する。

「シャルロット」

「ん？どうしたの、アル」

「付き合ってくれ」

結局これかよ・・・・（後書き）

次回からは臨海学校編始められるかな・・・？

自分の文才の無さが怖いです

政「仕方ねぇだろ。お前馬鹿だし」

いきなり出てくるのやめませんか？

政「では次回もお楽しみに」

・・・・・無視・・・・・ですか？

デート・・・・だと？（前書き）

今回のラストには特別枠であのお方が登場します

知らない人は覚えてね

では、本編をどうぞ！！

デート・・・だと？

日曜に午前１０時。人気が賑わう商店街の通りをＩＳ学園の制服を着た金髪の少年と少女が並んで歩いていた。少年（馬鹿）はいつも通りの馬鹿みたいな顔をしているが、少女の方はどこか疲れているようにも見える。

「・・・・・」

「どうした？元気ねぇみたいだけど」

「何でもない・・・」

ぷいっと不機嫌に明後日の方を向くのはシャルロット・デュノア。そして、それを不思議そうに見るのはＩＳ学園が誇る金髪クソ野郎、アーノルド・ギアナ君だ！

「（今めちゃくちゃ馬鹿にされた気がするが・・・まぁ、いいか）」

先日のアルの「付き合ってくれ」発言をシャルロットは「恋人になる方の付き合う」と受け取っていたが現実は厳しいかな、アルは「買い物に付き合ってくれ」の意味で言ったらしい。その勘違いに気付いたシャルロットは顔を真っ赤にしていた。

「それより・・・何で僕だけ誘ったの？」

普通に考えると買い物ぐらいなら政志達男勢と来ると思うが、しかしシャルロットの乙女心はどうしても何かを期待してしまう。しかし・・・

「もうすぐ臨海学校だろ?でもお前、女子用の水着持ってねぇって言ってたじゃねぇか。俺も水着持ってなかったからついでにと思ってな」

誰でもいいからこの馬鹿殺せ。

「ついでに・・・・・・・まぁ、どうせそんなことだろうと思ったけどね」

「何か言ったか?」

「・・・・・」

呆れたシャルロットは歩く速度を上げてアルを置いていこうとする。ちょっと怒っているようだ。

「オイオイ、何怒ってんだよ」

さすがの鈍感なアルでもこれには気付いたようで声を掛ける。すると、シャルロットは立ち止まって頬を赤らめながら右手をアルに差し出した。

「ハイ。手を繋いでくれたら、許してあげる」

「いいぜ、ホラよ」

アルはすぐさまシャルロットの手を繋いで歩き出した。自分で言っておきながらもシャルロットはあまりにもすぐに手を繋いでくれたので少し驚いていたが・・・・

「知らねぇ街ではぐれたら大変だからな。しっかり掴まってろよ」

真顔でこれを言えるアルが時々凄いと思える。小学生じゃないんだから・・・・。

「うぅ・・・唐変木」

お気の毒に。

「心配になって来たものの・・・」

「ねぇ、アルのやつ手繋いでない？」

「私の目が確かなら繋いでますわね」

「アル・・・とうとう春が来たんだ」

「どうして泣く？」

自販機の影に隠れてコソコソする5人はラウラ、鈴、セシリア、ななせ、箒。シャルロットがアルと出かけると聞いて不安になって後を着けているのだ。二人の様子を見て完全に楽しんでいるようでななせは、幼馴染みの成長に感動していた。しかし、彼女達は通行人からしたら怪しいとしか言いようがなくジュースを買おうにも彼女達のせいで買えない人がいる。

「にしても・・・あれはデートなのか？」

「箒さん。アーノルドさんにそんな度胸があるとお思いなのですか？」

「しかし、二人とも楽しそうだぞ」

「むむむ。これは付いてきたかいがあったわね」

「二人がお店に入った。行くよ」

「「「「あぁ（分かった）（分かりました）」」」」

アルとシャルロットがデパートに入ったのを見て乙女五人は動き出した。

アルとシャルロットはデパートの水着フロアまでエレベーターに乗って向かっていたのだが、その様子をデパートの監視室にハッキングしてノートパソコンの画面で見ている馬鹿がいた。

「あの野郎、まさかここまで進んでいたとは・・・隅に置けんやつ

やで」

「どうします、兄貴。今すぐあいつの息の根を止めますか？」

「まぁ待て。慌てればことをし損じる」

「ここは慎重にいかないとね！」

「・・・なぁ、俺たち何をやってるんだ？」

「「「尾行だけど？」」」

どこから進入したのかデパートの倉庫の荷物の上に座っている龍鳳、ヴィンス、政志、クリス、一夏。服装は学園の制服ではなく黒いスーツに黒いサングラスをかけ、どこかのエージェントのような格好をしている。やる気満々の政志達と違い一夏はあまり乗り気じゃなかった。

「もう止めとこうぜ。バレたらどうするんだよ？」

「「「「証拠隠滅」」」」

「どうするつもりだよ・・・・」

「おいっ、二人なんか喋ってるようやで」

「ヴィンセント、音を拾え」

「分かりやした！」

キーボードを叩きエレベーターの非常電話のシステムにアクセスして二人の会話を盗聴する。

【なぁ、シャルロット】

【何かな?】

【シャルロットって名前六文字もあるだろ?だから、何か他に呼び名考えてもいいか?】

【(そんな理由で・・・)うん・・・いいよ】

【そうだなぁ・・・シャルなんてどうだ?】

【全然構わないよ】

《・・・・・》

「今すぐ、あの金髪鈍感クソ野郎を殺しに行くぞ。これ以上はシャルロットが気の毒で仕方がねぇ」

《了解だぁ!》

そう気合いを入れて倉庫から飛び出す5人(なんだかんだで乗せられている一夏)は倉庫から飛び出して水着売り場があるフロアに向かう。最後に倉庫を出た政志は扉を閉めて龍鳳達の後を追うとしたが、後ろから赤い髪に頭にヘアバンドを巻いている女の子が走ってくるのが見えた。よく見ると、その女の子を3人の柄の悪そうな男が追いかけているようで、女の子は政志を見ると助けを求めてか政志の後ろに隠れた。

「すみません、助けてください！」

「やっと追いついたぞ、嬢ちゃん」

女の子が政志の後ろに隠れているのを見た3人は政志の前で立ち止まり、金髪のモヒカン頭の男がニヤニヤしながら女の子に手を伸ばそうとする。しかし、政志はグラサンの下から哀れなものを見るような目をしながらその男の手首を掴んだ。

「なんだてめぇ・・・殺されてぇのか？」

モヒカンがそう言った瞬間、手首からボキッとあまりよろしくない音が聞こえた。

「あれ？」

手首から先の感覚が無くなりぶらんとなる。そして数秒後に激痛が走りようやく気づいた。手首の骨が折れたんだと・・・・・。

「ギャアアア！俺の、俺の手がああああ！」

床でのたうち回るモヒカンを余所に、残りの二人は口をポカンと開けたまま動こうとしない。政志はモヒカンに歩み寄り、そっと首を掴んだ。

「さっさと逃げねぇと・・・・・・・・次は首が折れるぞ？」

冷たい声でそう囁き、モヒカンは失禁しながら逃げ出して、残りの二人もその後を追って走り去った。

「はぁ・・・ったく面倒臭い連中がいたもんだな」

男達の慌てて逃げる姿を見ながら政志はそう呟き、今の世の中の現状に嘆く。すると、先ほどから視線を感じて振り向くと女の子がまじまじと政志の顔を見ていた。

「あの～・・・・サングラス、取ってくれませんか？」

「あぁ、いいぜ」

別に断る理由も無かった政志はサングラスを外すが、政志の素顔を見た女の子は目をキラキラさせる。

「やっぱり、政志さんだ！お久しぶりです。覚えてませんか？私です、五反田蘭です！」

「もしかして・・・・・蘭か？」

「はい、そうです！」

最初は誰だか分からなかったが、赤い髪と五反田という名字で政志は誰だか完全に思い出した。篠ノ之道場に住み込んでいた頃、散歩に出かけた政志は1人で公園で遊んでいた蘭に声を掛けてそこから二人は知り合いになったのだ。

「久しぶりだな。そういえば、弾は？」

「今日はお兄と一緒じゃないんですけど、さっきのようなことになるんだったら連れてきた方が良かったですよ」

「あぁ、今度からは気を付けろよ」

政志はそう言って蘭の頭を撫でるが、撫でられている蘭はほわわ～んと表情が緩み喜んでいる。政志に撫でられると何故かは分からないが癒されるらしい。手からマイナスイオンでも出ているのか？撫でるのを止めると蘭は残念そうな顔をするが、何か思い出したようでズボンのポケットからケータイを取り出した。

「アドレス、聞いていいですか？」

「あぁ、いいぜ」

政志もケータイを取り出して赤外線でアドレスを交換する。その後、蘭は助けてくれたお礼を言ってその場を去っていった。

「さてと、そろそろアルが殺されている頃か・・・・ん？」

階段で水着売り場がある階に行こうとするが、上から大勢の人が慌てて下りてくる。かなりの慌てようで何かから逃げているように見える。階段から人が下りきって静になったぐらいで、政志は溜息を付きながら階段を上りだした。

◇

時は少し遡る・・・・・・

「うわ～、水着ってこんなに種類があるのかよ？」

アルは水着売り場の水着の数に驚いていおり、その様子をシャルは

クスッと笑いながら自分の水着を選んでいた。ビキニやら競泳用やら様々な種類が揃っており、それを見ながらアルはあることを考える。

「（シャル・・・あの水着、着てくれねぇかなぁ）」

視線の先には露出度が高い白のマイクロビキニ。アルは脳内でそれを着たシャルを想像する。

【そんなに、見たいの？・・・アルのエッチ／／／／】

鼻血が出そうになるのを何とか堪える。『これ、着てくれね？』とアルは言うか言わないかで悩む。

「アルっ、ちょっとこっちに来て！」

顎に手を乗せ真面目？に考えていたアルをシャルが腕を引っ張り試着室に連れ込んだ。しっかりカーテンを締め、靴も外に出して。

「なんだよ、無理矢理」

「いやぁ、その・・・・・選んだ水着が似合うか、見てもらいたくて・・・」

どこか慌てているシャルに疑問を覚えるアル。知っていると思いますが、更衣室は二人で入るところじゃありませんよ？

「だからって、一緒に入る必要が何処に」

「しぃーーっ」

口元に人差し指を当て、静にしてとでも言いたそうなシャルはカーテンの隙間から外を覗くと・・・

「くそ、あいつら何処に消えたのよ」

「まさか、私たちの尾行に気付いた？」

鈴とセシリアが必死に二人のことを探しており、その後にいるラウラ、ななせ、箒は水着を眺めていた。

「これが全部水着か・・・この世にはこんなにも様々な水着があったのか」

「新しいの買おっかな～」

「こ、こんなヒモみたいな水着があるのか／／／／」

そんな５人に近寄る４人のグラサンをかけた黒いスーツ姿の男がいた。

「（あれって、どう見ても龍鳳とクリスと一夏とヴィンセントだよね？どうしてここに・・・・）」

シャルは当然のように４人の正体に気付いた。そして、龍鳳が鈴に話しかける。

「聞きたいことがあるんやけど、ちょっとええか？」

「はい、何ですか？」

「（気付いてない！？）」

別にグラサンをしてある以外特に何もしていないのにどうして龍鳳だと気付かないのかシャルは全力で突っ込んだ。気付かれないと思っている龍鳳にも問題があると思うが・・・って言うより青髪の関西弁でどうして気付かない？次はクリスがポケットから写真を取り出してセシリアに見せる。

「この写真の男を探してるんだけど・・・セシリアちゃん、知らない？」

「すみません、今私たちもその人を探していますの」

「（セシリアまで！？って今名前呼ばれたよね？どうして気付かないの！？）」

完全に突っ込みキャラになっているシャル。しかし、この状況になれば誰だって突っ込みを入れるだろう。いや、こんな状況には普通ならないのだが・・・。

「どうしたんですか？」

鈴とセシリアがスーツ姿の男達と話をしているの見てななせが首を傾げながら会話に参加した。

「（ななせ！ななせなら気付くよね！？）」

「この人たちがアルのこと探してるって」

「そうなんだ。あたし達も丁度今探しているんで一緒にどうですか？」

「（なんでーーーーー！？）」

その後、シャルはラウラと箒にも一瞬期待したが結局気付かず9人でアルとシャルを探すことになった。

「（見つかったら、絶対邪魔される）」

「どうしたんだよ、さっきから。誰か外にいるのか？」

「ふぇっ？あ、ええと・・・誰も居ないよっ！」

ずっとカーテンから外を覗いてシャルにさすがに何か思ったのか声を掛けるが、サッとカーテンを閉めて首を横に全力で振り否定する。

「何でもないから、いいから此処にいて！すぐに着替えるから」

「ちょっ、マジかよ！？」

シャルが制服を脱ぎだすのを見てアルはすぐに見ないように背中を向ける。

「（うぅ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう・・・・あぁ、もうやっちゃえ！）」

「（オイオイオイオイオイオイ、シャルは何を考えてるんだ！？）」

背後でしゅるりとリボンを抜く音が聞こえてガチで着替え始めたシャルに焦るアル。一瞬事故を装って振り向こうという考えが頭をよぎったが人間としてやってはいけないことだと自分に言い聞かせる。

「（マズい・・・確実にマズい！このままだと俺の理性が・・・ディストラクションするーーーっ！！）」

真剣にアルの脳内では崩壊へのカウントダウンが始まりだした。血管が破裂するんじゃないかと思うぐらいに心臓がドゴドゴ音を立てる。

「（あ～・・・・俺、死ぬかも・・・パトラッ～シュ）」

「もう、いいよ・・・」

幻覚が見え始めたぐらいでシャルがそういったのでゆっくり振り返って見ると、シャルが着ているのはセパレートとワンピースの中間の水着で鮮やかなイエローが元々彼女が持っている素材をより引き立てている。思わず見とれるアルだが、シャルはアルの視線を身体で感じて落ち着かなくなり指をもじもじさせながらアルの感想を待っている。しかし、何も言ってくれないので少し不安になる。

「変・・・・かな？」

上目使いでそう言うシャルの周りがキラキラしているように見えた・・・とアルは語った。

「な、ななな何言ってんだよ！凄く良い、マジで良い！！」

「そう？・・・・じゃあ、これにするねっ」

アルに褒めてもらったことでシャルは満足気に笑う。しかし、カーテンがいきなり開いてそこにいたのは・・・・

「「うわぁ！？」」

「ぎ、ぎぎギアナ君に、デュノアさんっ・・・・？」

「何をしている、バカ者が・・・」

パニック状態の山田先生と呆れた顔をした千冬がいた。

「いいですか。いくらクラスメイトといってもキチンとケジメは付けなければなりません」

「「すみません・・・・」」

制服に着替えさせられたシャルとアルは正座をさせられ山田先生にこってり説教を食らっている。そこで何かに気付いたのか千冬は後を向いて溜息を付く。

「そこの9人。そろそろ出てきたほうがいいんじゃないのか？」

ギクッと聞こえたあと柱の影から龍鳳、鈴、セシリア、クリス、ななせ、ラウラ、ヴィンス、一夏、箒が出てきた。よく9人も隠れてたな？

「何か視線を感じると思ったらお前らかよ・・・・政志はどうしたんだ？」

「あれ？そういえばどこ行ったんだろ」

どうせアニメショップにでも行ってるんだろと彼らは自己完結する。

「それよりアーノルドさんはこの方たちとどういった関係何ですの？」

「・・・・は?お前ら、ガチでそう言ってるなら病院に行ったほうがいいぞ」

「そこの男共サングラスを取れ。そうしないとこのバカ共は分からんようだからな」

千冬に言われて渋々とサングラスを取り、その顔を見た鈴、セシリア、ラウラ、箒、ななせは絶句した。

「「「「龍鳳（一夏）（クリスさん）（ヴィンセント）！?」」」」

うわ～、バカがいた。

「スゲェじゃねぇか。よく気付いたな、アーノルド」

「気付かれないと思っていたお前らがスゲェよ」

何故か誇らし気にそう言うヴィンセントに冷静に突っ込む。なんだかんだで山田先生も気付かなかったようだ。こうしてアルとシャルのデート?は終わりを告げた。

筈だったが・・・・・

「動くな！全員床に伏せろ！」

《？》

声が聞こえたレジの方を見ると、黒い目出し帽をかぶった全身真っ黒の男が7人いて、その手には銃やらナイフやら持っている物はバラバラだったが、全員の身体には余りにもベタすぎるアレが巻かれていた。

「爆弾？」

それを見た客達は男達の言ったことを無視して逃げ出す。しかし、恐怖の余りに逃げ出せない者もちらほらいて男達は水着売り場の店員らしき人の腕を掴んで引き寄せ、ナイフを首に当てる。

「一億だ！この女の命が欲しかったら一億もってこい！へたなことしようとしたら、この爆弾を爆発させるからなぁ！！」

厄介ごとに巻き込まれたＩＳ学園組は揃って溜息を付く。一応言う通りに黙って伏せているが、どうやって人質を助けようか考えていたが・・・・・

コツッ

「あぁ？」

コツッ

静まりかえっていたフロアに靴の音が響く。皆が音のする方を見るとそこにはセーラー服に身を包んだ少女がいて左肩には『ＳＳＳ』と書かれたワッペンが貼られてあり、肩にかかるぐらいの紫の綺麗な髪。そして黒いストッキングに頭には緑のリボンが付いたカチューシャを付けてあり、白いベレー帽まで被ってある。その少女の姿に一夏は口を開けて驚くがアルと龍鳳とクリスは呆れた表情になる。

「なんだてめぇは？死にてぇのか！？」

男達は自分たちに向かってくるその少女に拳銃を向けて威嚇するが少女は立ち止まり逆にクスッ笑う。

「唐突だけど、入隊してくれないかしら？」

その少女はアニメ『Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！』に出てくる死んだ

世界戦線のリーダー、『仲村ゆり』こと『ゆりっぺ』だった・・・・

デート・・・・だと？（後書き）

うわ～やっちゃった感ＭＡＸ

さて、ゆりっぺの実力は如何ほどの者か・・・・・・

次回もお楽しみに！

《入隊?》

ゆりっぺ?の発言にその場にいた誰もが（一部の人間を除く）が頭に?マークを浮かべた。

「はぁ・・・まったくこれだから素人は困るのよ」

理不尽にも自分の言っていることを理解出来ていない強盗達に呆れて、ゆりっぺは被っているベレー帽の中に手を突っ込んで刃渡り４００mmのサバイバルナイフを取り出す。どうやら彼女のベレー帽は四次元空間と繋がっているようだ。

「武器を捨てて投降しなさい。これは最終警告よ」

「『投降しなさい』だとよ、ガハハハハハッ!!」

サバイバルナイフを逆手に持ち強盗達を睨むが、バカを見るように笑い返される。ＩＳ学園組はというと・・・・・

「ちょっと、あれ助けなくていいの?あのままだと殺されちゃうわよ」

「あ～、それなら心配いらねぇよ・・・」

「どうして?」

「見てたら分かるよ・・・」

アルとクリスがそう言うのでＩＳ学園組はそのまま大人しく床に伏せていた。しかし、凶器を持った男７人に女子高生がナイフ１本で何が出来ようか？誰もがそう思っていた。その瞬間・・・・

ヒュンッ

「はいっ、終了～♪」

風を切るような音が聞こえただけで別に特に何かをしたようには見えなかったが、ゆりっぺはナイフをベレー帽の中に戻し背を向けて歩き出した。アルと龍鳳とクリスを除く客が彼女に『早く逃げろ』と目で訴える。しかし、いつまで経っても強盗達はゆりっぺに向かって発砲しないどころか微動だにしない。

「そいつらの後片づけ、よろしくね」

片手をひらひら振り呑気な声でそう言うと強盗達の拳銃やらナイフ、爆弾、服、目出し帽、ついでに髪の毛もバラバラになって床に落ち、男達も白目をむいて倒れる。開放された人質の店員はすぐさま歩み去っていく恩人に感謝の言葉を贈る。

「助けて頂いて、ありがとうございます！！」

深くお辞儀をして心に響いたのか歩みを止めてゆりっぺが振り返った。

「お礼なんていらないわよ。困っている人がいたら助けるなんて、当然でしょ？」

可愛くウインクするその姿に客の男共はときめいてしまう。

こうして事件は解決したのだった・・・・・・・

「さすがゆりっぺ。俺が見込んだだけのことはある」

「「「・・・・・・」」」

強盗が警察に連行された後、グラサンを外した政志が水着売り場にやって来て事件の詳細を聞くと、好きなアニメのキャラが良いことをしたのが嬉しいのかどこか誇らし気にそう言う。それを聞いていたアル、龍鳳、クリスはジト目で政志を見る。視線に気付いた政志は3人に『妙なことを言ったら・・・分かってるよな?』と殺気を込めてアイコンタクトを送る。ブンブン頭を縦に振る3人を一夏達は不思議そうに見ていた。

「それにしても、本当のいいんですか?水着をタダでいただいても」

「店員がそう言ってるんだ。遠慮してはかえって失礼だろう」

水着売り場が事件に巻き込んだお詫びとしてその場にいた一般客に1人1着水着をプレゼントしてくれることになった。申し訳なさそうに山田先生はしているが、その手には何着もの水着が握られている。あなた1人1着って店員が言っていたの聞いてましたか?

「政志〜、イッチ〜、早く行こうぜ」

女子と違いそんなに水着にこだわりの無い男連中はすぐに水着を選んで戴いた後、女子が選び終えるまで下の階の喫茶店で待つことにした。

「政志、一夏・・・ちょっとこっちに来い」

「分かった。・・・・アル、先に行っててくれ」

「へいへい」

千冬に呼ばれた政志と一夏は何かと思って行ってみると、その手には専用のハンガーにかけられた水着が二着あった。一つはセクシーな黒い水着、もう一つは機能性を重視した白い水着。どちらもビキニタイプのため、露出度はそれなりに高い。

「どっちが良いか俺たちに選べと」

「何で俺と政志なんですか?織斑先生?」

「あの男共の中ではお前達二人が一番マトモだと思ってな。それに今は就業中ではないから、名前でいい。私とお前はこの場ではただの姉弟だろう」

「わ、わかった」

「で、一夏、政志。どっちも水着がいいと思う?」

「(((これは・・・黒だな)))」

二人は黒がいいと思ったが、一夏はふと気が付いた。もしかしたら、黒い水着の方だとおかしな男が寄ってくるのでは、いや確実に寄ってくると。

「「黒/白かな」」

完全に意見が二つに割れる。政志と千冬は一夏の考えていることが

分かるのか苦笑いを浮かべる。

「黒の方か」

「いや、白の――――」

「うそをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐにわかる」

「それに余計な心配する必要ねぇだろ。だいたい、千冬がその辺にいる男になびくと思ってるのか？」

考えていたことが読まれて、少しだけ一夏は落ち込む。そんな一夏を無視して千冬は後をチラッと見て何を見たのか楽しそうに鼻で笑った。

「ところで政志」

「あ？何だよ」

「お前は彼女とかは作らないのか？」

ズゴッ！

突然の質問に政志は転けて壁に突っ込む。まさか千冬の口からそんな言葉が出てくるとは思って無かったのだろう。すぽっと壁から頭を抜いて元の体勢になる。

「・・・・何でいきなりそんなことを聞くんだ？」

「ただ聞いてみただけだ。そうだな・・・・ラウラなんかはどうだ？色々と問題はあるだろうが、あれで一途だし容姿も悪くない。それにキスした仲だろ？」

「ちょっと待てどうしてお前がそのことを知っている？」

「ふっ、たまたま見かけただけさ。で、どうなんだ？」

先ほどまで苦笑いしていたが、今は打って変わってしてやったり的な笑みを蓄えている。

「満更でもないか？」

「別に・・・まぁ、確かにラウラは可愛いと思うけど・・・」

そっち関連の話しにはあまり乗り気じゃない政志は渋りながらも答えて、そうかそうかと微笑みながら頷く千冬は二人が選んだ水着を持って行った。

時は少し遡る。

「（どれがいいのかさっぱりわからん）」

ただで水着がもらえると知ったラウラはどの水着にするか模索するが、一向に決まる気配がない。そもそも、こういうのには興味がない彼女に選択基準分かるハズがないのだ。箒、セシリア、鈴、ななせが楽しそうに選ぶ中、彼女は冷たい視線を色とりどりの水着に向けている。

「（まあ、泳げればなんでもいいだろう。あの水着は機能的に優れている。代わりのものは必要ないな）」

彼女が持っているのは世界遺産にまで認定されているＳＣＨＯＯＬ水着（名札付き）一着のみ。選ぶのを諦めたラウラはその場から立ち去ろうとしたら、多すぎて壁のようになっている水着の向こうから声が聞こえた。

「別に・・・まぁ、確かにラウラは可愛いと思うけど・・・」

完全な不意打ちにラウラの白い肌がボッと赤く染まる。心臓は今までに無いほどに速くなり、周囲のざわめきがあるにもかかわらず、はっきりと鼓動を耳で聞くことが出来た。

「／／／／」

政志とは多くの時間を過ごしてきた彼女だったが、彼の口から『可愛い』などと言われたことがなかった。いくらドイツの冷水と言われようがラウラも恋する乙女、取り乱すのも無理はない。

「（か、か、可愛い・・・？私が、可愛い・・・可愛い・・・）」

爆発するんじゃないかと思わせるぐらいに頭がショートしたラウラは、胸に手を当てて瞼をとじる。それは普段なら必要としない意識の集中方法で、コールする番号を何度も間違えながらラウラはＩＳのプライベート・チャンネルを開いた。

◇

同時刻、ドイツ国内軍施設。そこでは、ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

「何をしている！現時点で37秒の遅れだ！急げ！」

そう怒号を飛ばしているのは副隊長のクラリッサ・ハルフォーフ。部隊内では『頼れるお姉様』的なポジションにいるが、その実体は政志と同じくアニオタであり腐女子である。そんな彼女の専用機『シュヴァルツェア・ツヴァイク』に緊急暗号通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた。

「受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

【わ、私だ・・・・】

「ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

【あ、ああ・・・・。とても、重大な問題が発生している・・・・】

様子がおかしいラウラの声を聞き、ただごとではないと思ったクラリッサは訓練中の隊員にハンドサインで『訓練中止・緊急招集』を伝える。

「部隊を向かわせますか？」

【い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない・・・・】

「では？」

【クラリッサ。その、だな。わ、わ、私は、可愛い・・・・らいし、ぞ】

・・・・・・・・。

「はい？」

緊張が漂っていたところに間の抜けた声が聞こえた。クラリッサは意味不明な事態をどう返答したらいいか悩む。

【ま、ま、政志が、そう、言っていて、だな・・・・】

と、そこまで聞いてクラリッサは全て理解した。

「ああ、連邦軍の鈴木元帥のことですか」

【そ、そうだ。お前の言うところの『私の嫁』だ・・・・。クラリッサ、私はこういう場合、どうすべきなのだ？】

「そうですね・・・・。どのような状況で言われたのですか？」

【い、言われたというよりかは、政志がそう言っているのをたまたま聞いたんだ。おそらく、向こうは私がここにいるとは思ってないだろう】

「最高ですね！」

【そ、そうなのか？】

「はい。本人がいない場所で言われる褒め言葉に嘘はありません。それが鈴木元帥なら尚更です」

【そ、そうか・・・・！】

不安で暗かった声が、パァっと花が咲くように明るくなる。ちなみに、現在集めた隊員には、クラリッサがプライベート・チャンネルをしながら筆談で状況を伝えている。『隊長の片思いの相手に脈アリ』と書いた瞬間『おおおお～！』とその場にいた女子が盛り上がりを見せる。彼女たちは以前からラウラとはあまり人間関係がうまくいっていなかったのだが、先月のＶＴ事件の直後に政志のことについてクラリッサに相談を持ちかけたときから全てのわだかまりが解けて消えた。

その時の様子を簡単に説明すると・・・・

「やっぱり、鈴木元帥のことは誤解だったのですね」

「つまりこれから隊長は、本格的に鈴木元帥を落としにかかると？」

「そうらしい。元帥がここにいた時にそのことを隊長にこっそり聞いてみたら顔を赤くして自分からは何も言ってはくれなかった。しかしだな、今回、あの隊長が何て言ったと思う？あの隊長がだぞ？『ま、政志の気を引くには、どうしたらいい・・・・？』と言ったんだぞ！」

《きゃああ～っ！》

「だから私は真摯に伝えた！日本では自分の気に入った相手を『自分の嫁にする』という風習があるということを！」

「さすが副隊長！日本に詳しい！」

「当然だ。私は伊達や酔狂で日本の文化であるアニメや少女漫画を愛好しているわけではない！」

「か、かっこいい・・・・！」

「そんな素敵な副隊長が好きです！」

「でも、可愛くなった隊長はもっと好きです！」

「そうだろう！私もそうだ！ああっ、どうして本国にいるときにもっと心を通わせあわなかったのだろうか！」

「副隊長！私も日本のアニメを見てみたいです！」

「アニメは凄いぞ！知らないだろうが、鈴木元帥は私以上にアニメを愛しておられる方で、定期的にお薦めのアニメを送っていただいているのだぞ！」

「まさか、連邦の破壊神まで虜にするとは・・・・！」

「よし。部隊員諸君、現時刻を持って訓練を終了する！今すぐブルーレイの再生機を持って会議室に集合だ！先日、届いた『コード・ギアス』を見るぞ！」

《はい、副隊長（おねえさま）！》

・・・・こんな感じである。さすがは日本のアニメといったところか、こんな離れたところにまで浸透して流行らせるとは・・・・。っていうか政志はアニメのことになると何でもするんだね。

【そ、それで、だな。今、その、水着売り場なのだが・・・】

「ほう、水着！そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？」

【あ、ああ、学園指定の水着だが――――――】

「何を馬鹿なことを！」

【！？】

「たしか、ＩＳ学園は旧型スクール水着でしたよね。それも悪くはない。悪くはないでしょう。だがしかし、元帥から直接聞いたのですが――――――」

『出来ることなら、スクール水着を考えた奴を殺したい・・・・』

【なっ、そこまで・・・・！？】

「どうやら、あの地肌を隠すようなデザインと幼女向けのアイテムだということで嫌っているらしいです」

【な、ならば・・・・どうする？】

「フッ、私に秘策があります」

目をキュピーンと光らせるのはいいが、前回ラウラに間違った知識（日本では自分の気に入った相手を『自分の嫁にする』）を吹き込んだのが政志にバレたため、アニメグッズの替わりに爆弾が送られたらしい。今回もその二の舞にならなければいいが・・・・・。

死んだ世界戦線リーダー・・・・だと!?（後書き）

さて始まりました臨海学校編！

なんでゆりっぺがあの場にいたのか。分かる人は分かりますよね！一話前の話で蘭を出したのは今後の話で蘭がストーリーに食い込んで来る可能性があるからです。

さて、アルケーには無事ツインドライヴが積めたのか、そしてあの天才博士の登場に政志達はどう反応するのか・・・・

次回をお楽しみに！！

夏だ！海だ！鈍感だァ！！（前書き）

最近、投稿が不安定になってきました。

早くもスランプかな？

では、本編をどうぞ！！

夏だ！海だ！鈍感だァ！！

「海海海海海海海海海海・・・・海ィ！」

トンネルを抜けたバスの中であり得ないぐらいにハイテンションになるアル。臨海学校初日、天気は快晴、白い砂浜に、日光を反射して星のように輝く海面。泳ぐには絶好の条件が揃っていた。

「まあ、ちょっと落ち着きなよ」

「フッ、そうだな。ここで体力を消費しては泳ぐ時に全力を出せねぇからな」

「そうだね・・・」

アルの隣の席に座っているシャルが苦笑いをする。その左手首には銀色のブレスレットが填められている。先日、アルが買い物に付き合ってくれたお礼にとプレゼントしてあげた物だ。時々それを見てはニヤついているのが多くの人間に目撃されている。

「あいつは小学生か・・・・？」

「しょうがないよ・・・・あれがアルなんだから」

通路を挟んでアル達の席の反対側に座っている政志となぜか幼馴染みに呆れた視線を向けていた。一息ついて政志の目は真剣になる。

「話しは変わるんだけど、俺のアルケー・・・・・どうなった？」

「一応オリジナルの太陽炉は搭載したんだけど、両脚の疑似太陽炉との併用が上手くいかないんだ」

「オリジナルの方の機体制御に回して、疑似太陽炉の方を武装に回したらどうなんだ？」

「それもやってみたけど、駄目だった・・・でも、臨海学校中には何とかしてみるよ」

アルと龍鳳とクリスのガンダムはとっくの昔に修理を終えて持ち主の所に返されているが、アルケーだけは政志の手元にはない。つまり、今政志が持っている機体はユニコーン一機だけである。

「ワリィけど頼む。いつ亡国企業（ファントム・タクス）が襲ってくるか分からねぇからな」

「うん、それより・・・今更なんだけど、本当に良かったの？」

「何がだよ」

「ダブルオー・・・手放しちゃって――」

「いいんだよ。あれは、俺が持つには勿体ねぇ・・・」

窓から見える海に視線を移す政志だったが、ななせにはその表情が何処か寂しそうに見えた。

◇

バスを走らせ宿泊先の旅館・花月荘についた一行はそれぞれの部屋に荷物を置きに行き、男子の部屋割りは『政志、アル、一夏』と『龍鳳、クリス、ヴィンス』といった感じになった。夕方までの自由時間、海で過ごすことにした6人は水着に着替えるために更衣室のある別館まで足を運んでいた。

《・・・・・・》

のだったが、途中で道ばたにウサミミが生えているを目撃してしま

い歩みを止める。どう考えても怪しすぎる状況に全員がジト目になる。しかも『引っ張って下さい』と張り紙がはってある。

「もしかして、これって――」

「一夏、１００パーお前の想像通りだ」

一夏と政志はウサミミの持ち主に心当たりがあった。こんなことをするのは箒の実の姉のあの人しかいない・・・。見てしまった以上無視するわけにもいかず、一夏は張り紙の指示どうり引っ張った。

「のわっ！？」

どうやらウサミミの先に持ち主がいると思ったのか全力で引っ張ったが、その先には何も付いてはおらず、力の余った一夏は盛大にすっころぶ。普通は地面に人が埋まっているわけがないのだが、相手が相手なので、もしかしたらと考えてしまったようだ。

「何やってるんだよ、イッチー」

「一夏、お前・・・ウサミミが好きだったのか？」

「え～～。ヴィンス知らなかったの？一夏くんがウサミミ好きなの」

「勝手に捏造するなよ！」

「男子全員集まって・・・ってどうしたの？」

「また何かやらかしたのか？」

「あぁ、ななせにラウラか。一夏がウサミミをやな――――」

キィィィィン・・・・。

龍鳳の言葉を遮るように何かが高速で接近する音が聞こえ、音をする方に目を向けようとすると、政志はななせとラウラの首根っこを軽く引っ張って自分の後に下がらせた。

ドガ――――――――ン！

「「「「「のべっ！？」」」」」

謎の飛行物体は盛大に地面に突き刺さり、その衝撃で政志とその後にいるラウラとななせ以外は先ほどの一夏のようにすっころんだ。

「に、にんじん？」

物体の外見がどこからどう見ても人参にしか見えず、制作者のセンスを疑ってしまう。

「あっはっはっは！引っかかったね、いっくん、まーしー！」

「いや、俺は引っかかってねぇよ・・・・」

パカッと真っ二つに割れた人参の中から笑いながら両手でピースサインをする女性が現れた。言っておくが『いっくん』は一夏のことで、『まーしー』は政志のことである。

「むむむっ。君たちは・・・・」

何やら珍妙なものを見るかのようにアル、龍鳳、クリス、ななせを見る。見られている側はキョトンとしている。そりゃ、不思議の国のアリスが着てそうな青と白のワンピースに一夏が持っていたウサミミを装備した女性を見たら誰だってそうなるわな。ふむふむと何か自己完結した彼女はななせに向かって白いＵＳＢメモリを投げる。

「先生からの預かり物、返すね♪」

ウィンクをされるななせだが何がなんだかサッパリ分からないようで、取り敢えずと頷く。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん、おひさだね。本当に久しいねー。あれ？まーしーは挨拶してくれなー――」

「久しぶり」

言い切る前に即答する政志の顔は何処か面倒臭そうだ。

「も～、相変わらずツンデレさんだなぁ、まーしーは」

「箒ならあっちだ」

「むっ、よく私の用件が分かったね～。箒ちゃん探知機もこっちを指してるし、さすがはまーしーといったところかな？じゃあねまーしーにいっくんとその愉快な仲間達、また後でね！」

すったったーと猛スピードで政志が指を指していた方向に走り去っていった。ちなみに箒ちゃん探知機＝ウサミミである。

「政志?今の人ってもしかして・・・・・」

「箒の姉の、篠ノ之束だ」

・・・・・・・。

《ハァ!?》

「おいおい、アレが天才の中の天才と呼ばれてる人かよ・・・・・」

「研究のしすぎで頭の何本かネジ飛んどるで、絶対」

「ファッションセンスを疑うぜ」

「あれが姉とは、箒も大変だな」

「で、でも・・・悪い人ではなさそうだよ」

アル、龍鳳、ヴィンス、ラウラ、ななせは稀代の科学者があんな無茶苦茶な人間だとは思ってなかったようだったが、クリスだけは未だに束が走り去っていった方を睨んでいた。

「クリス、お前・・・・」

「ん?どうしたの政志?」

それに気付いた政志は話しかけようとしが、いつも通りの柔らかな表情に戻っていたクリスに何も聞きだそうとはしなかった。

「いや、何でもねぇ。それより、そのメモリ何なんだ？」

「『先生からの預かり物』って言ってたけど・・・・取り敢えず、後で確認してみる」

８人は着替えのために別館に向かったが、最後尾にいたクリスが束が去っていった方向をもう一度見たのには、誰も気付かなかった・・・・。

◇

男子６は水着に着替えて砂浜へと一歩を踏み出した。辺りを見渡すとほぼ女生徒ばかりで男の姿もちらほら見えたが関係者以外立ち入り禁止の今いるということは旅館の関係者だろう。準備体操を終えて何をするか考えていた政志だったがアルがビシッと指を指してきた。

「政志！どっちがデカいの捕れるか勝負だぁ！」

「ハッ、いいだろう。俺に勝とうなんざ８億年早ぇんだよ！」

全力で海に飛び込んでいく政志とアルは、完全に虫取りのノリでテンションが上がっている小学生にしか見えない。ヴィンスは泳げないため木陰で寝ることにして、残りの３人は別にすることがないため海に向かおうとすると、

「りゅ、う、ほっ～～～！」

いきなり鈴の龍鳳の背中に飛びついてそのまま駆け上がっていって肩車の体勢になるが、声が聞こえた時点で何となく予想していたの

か龍鳳は大して驚いていなかった。

「相変わらず背が高いわね。ちょっとした監視塔になれるわよ、あんた」

「監視塔って人間ですらないで・・・・。それより、早う降りろや」

オレンジと白のタンキニタイプの水着を着た鈴に降りるように言うがその気が無いらしい。

「別にいいでしょ。ケチなこと言わないの」

「そうは言うてもやな、だってお前なんだかんだで体重の頸椎が砕けるっ！！」

「誰の体重が重いってぇ！？」

最後まで言い切る前に、鈴は龍鳳にジャーマン・スープレックス・ホールドを決める。それを見ている一夏とクリスは顔を自業自得だと言いたそうだった。解放された龍鳳の首が変な方向に曲がっていたがあえて突っ込まなかった。

「テメェ、俺を殺す気かぁ！！」

「デリカシーが無さすぎるのよ、アンタは！」

曲がった首を何とか自分で元に戻した龍鳳は身に覚えのない仕打ちを受けたことで鈴に食ってかかる。

「この際や、白黒ハッキリつけようやないか！」

「それじゃあ、あのブイまで競争よ！負けたら駅前の『@クルーズ』のパフェ奢んなさいよ！」

「どうせ勝つんは俺や！ほえ面かかせ――――」

「よーい、ドン！」

言うや否や鈴音は海に飛び込みブイに向かって泳ぎ始めた。説明しておくが『@クルーズ』のパフェは一番安くて１５００円である。

「くそっ、卑怯やで！」

こうして不毛な戦いが始まったのだった。

「楽しそうだな・・・・」

「そうだね・・・・」

ブイに向かって楽しそうに泳いでいく二人を見る一夏とクリス。今度こそはと海に向かっていこうとするが、

「あっ、あのっ、クリスさんっ！」

そう言って二人の元にやって来たのはセシリアだった。その手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。セシリアが着ている水着はというと鮮やかなブルーのビキニ。こしに巻かれたパレオが優雅で彼女のモデルなみの資質を引き出している。思わず見とれてしまったクリスの視線に、恥ずかしいのか少し顔が赤くなる。

「ど、どうしたの?セシリアちゃん」

「せ、背中はサンオイルが塗れませんから、クリスさんにお願いしたいのですが・・・よろしくて?」

「うん。いいよ」

「ほ、本当ですか!?で、ではあちらで・・・」

そのままクリスはセシリアの後に着いていってとうとう一夏一人になった。やれやれと溜息を付いて光輝く海に目を向ける。

「(本当に綺麗だよなぁ。太陽も良い具合の光を出して何か黒い物体がグホッ!)」

心地よい陽の光を浴びていた一夏に黒い物体、もといクロマグロが飛んできて腹に直撃して押し倒される。

「ぷはっ。こいつならさすがに負けることはってイッチーがマグロの下敷きにぃぃぃ!!」

マグロを海から投擲したアルは海から顔出し、投げた方向を見ると一夏がマグロに押しつぶされているを見てすぐに砂浜に上がり一夏を救出した。

「大丈夫か、イッチー!?」

「な、何とか・・・・」

疲れた感じでそう答え、隣でビチビチ跳ねるマグロに目を向ける。

「お前、コレ素手で捕ったのか？」

「ああ、これぐらいなら朝飯前だ。さてと、政志は何を捕ってくるかなってん？」

海面が少し盛り上がるのを見ていると、そこから巨大な水柱が立ち上がった。

「「うおおおおっ！？　な、何だぁ！？」」

驚く一夏とアル大量のショッパい水飛沫をかけながら、水柱を立てたであろう者はズンと音を立てて砂浜に着地した。

「この勝負、俺の勝ちだ！」

「「ちょっと待てい！！」」

二人が突っ込みたくなるのも当然。いや、アルのマグロでもあり得なかったが、政志が捕ってきたものは、

「シャーーーーッ！」

「「何でホオジロザメ捕まえてきてんだよ！？」」

政志の肩担がれている生きたままの鮫が一夏とアルに威嚇していた。どうやって捕まえたのかが非常に気になる二人だったが、政志だからということで納得した。

「もう用は済んだから、さようなラーーーっ！！」

勝負に勝ったことを確認した政志は鮫の尻尾を掴んでジャイアントスイングで海の方に放り投げた。ピカーンと光ながら飛んでいく鮫にアルと一夏は心の中で合掌する。

「ちっ、鮫が相手じゃ勝てるわけねぇだろ。お前も仲間の所にお帰り」

政志が鮫を海に帰した？のを見てアルもマグロを海に戻してあげた。少し惜しそうに政志がしていたのは秘密である。

「あ、政志にアルに一夏。ここにいたんだ」

「3人とも探したんだよ」

ふと、呼ばれたので声のする方を向いてみるとそこにはななせとシャルと・・・。

「ん？何だそのバスタオルお化けは」

「新手のミイラか？」

シャルは前にアルが選んだ水着で髪型はいつもと違い後の髪を三つ編みに纏めている。ななせは紫に白い水玉模様のビキニの上に白い半袖のパーカーを羽織っている。しかし、二人の隣にはなんだか奇天烈な存在が二体いた。バスタオル数枚で頭から膝下まで覆いつくしている。アルは誰なのか分かったようでフッと鼻で笑う。さすがは深緑の狙撃手、侮れない・・・・。

「大丈夫だって、どこもおかしなとこなんてないよ」

「そ、それは私が決めることであって、お前が決めることではない・・・・」

「こ、こんな恥ずかしい姿を見せられるハズがないだろう・・・・」

「もー。二人とも可愛いのに」

「・・・・ラウラ？」

「こっちは箒か？」

聞き覚えのある声を聞いてい政志と一夏は一瞬で誰なのかが分かった。しかし、二人とも声にいつもの覇気が感じられず弱々しく聞こえる。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、見てもらわないと」

「ま、待て私にも心の準備というものがあってだな・・・・」

「さっきからそう言ってるけど二人とも全然出てこないじゃない。せっかくシャルと一緒に水着選んだり色々手伝ってあげたのに」

「そ、そう言われてもだな・・・・」

一向にバスタオルを脱ぐ気配が感じられず、ななせとシャルはアイコンタクトを取り合い強行手段に出ることにした。

「うーん。二人が出てこないんなら僕とななせでアル達と遊んじゃ

おっかな～」

「うん、そうしよっか。政志、アル、一夏、行こっ」

「「な、何っ！」」

そう言うなり、ななせは政志の手を取り、シャルはアルの手を取る。
一夏には手招きで付いてくるようにサインを送り、３人を波打ち際へと誘う。

「ま、待てっ」

「私達も行くぞ！」

「「その格好で～？」」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

「もう、どうにでもなれっ！」

ばばばっとバスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラと箒が陽の光の下で露わになる。

「わ、笑いたければ、笑うがいい・・・・！」

「ど、どうせ似合ってないのだろう・・・・！」

ラウラの水着はふんだんにレースがあしらわれたもので、一見するとそれは大人の下着に見えなくはない。いつもと違い伸ばしたままの髪は左右に一対のアップテールにしている。箒の水着はというと、

彼女なら絶対に着なさそうな白いビキニ。縁に黒のラインが入っておりかなりセクシーなものとなっている。

「おかしなとこなんてないよねって政志？」

何も言わずにラウラの前に立って顎に手を当てしばらく考えごとをする。

「この髪型、誰がセットしたんだ？」

「え？僕だけど、どうかしたの？」

「悪いけど、ちょっと弄るぞ」

政志はラウラのアップテールを一度解いていつもの状態にして頭の左右を交互に見た後、全体の髪を右サイドに持って行って纏める。

「へぇ、そっちの方が似合ってるね」

「サイドポニーは思いつかなかったなぁ」

勝手に髪型を変えられたラウラは何が起こっているか分からず戸惑っていると政志と目が合う。

「うん。やっぱこっちの方がラウラに似合ってて、普通に可愛いぞ。なあ、一夏」

「そうだな。箒も良く似合ってるぞ」

それを聞いた瞬間、二人の顔は真っ赤にして、そのまま何処かへと

脱兎の如く走り去っていった。シャルはしょうがないといった感じで二人を追いていき、ななせも追いかけようとするが、

「ま、政志？その、あたしの水着・・・・似合ってる、かな？」

「あぁ。お前も十分綺麗だよ」

「あ、ありがとう・・・・／／／／」

顔を赤くして満足そうな笑みを浮かべてシャルの後を追いかけていった。

「で、結局なんだったんだ？」

「さあ？俺に聞くなよ」

「ガチでそれを言えるお前達が怖いよ・・・・・」

本気で分かっていない二人に呆れていると、海から鈴をおんぶしている龍鳳が上がってきたのが見えた。

「どうしたんだよお前ら？」

「鈴がちょっと溺れてもうてな。別に大したことはない」

「大丈夫ですの！？」

二人の姿を見たセシリアが駆けつけて来て鈴に声を掛ける。その後からクリスも付いてきたが右頬に紅葉マークがありそこを撫でていたので、何となく理由が分かった一同は敢えてそのことについては

触れなかった。

「だ、大丈夫よ。ちょっと海水飲んじゃっただけだから」

「あちらに私のパラソルがあるのでその下でお休みになっては？」

「あ、ありがとう。じゃあ、ちょっと、向こうで休んでくるから・・・」

大したことなかったようで龍鳳の背中から降りた鈴はセシリアに連れられて行った。その顔はおんぶされていたことが恥ずかしかったのかほのかの赤みを帯びていた。

「鈴のやつ、足でも攣ったのか？」

「準備体操しとらんかったみたいやったからな。称がない奴やで」

「で、これからどうする？」

「ななせ達はどっか行っちまったしな。一旦ヴィンセントの所に行って、その後みんなの分のジュースでも買って待ってるか」

「うん、それがいいね」

政志の意見に全員が賛成して、５人は取り敢えず未だに木陰で寝ているヴィンセントの元へと向かった。

◇

「あいつら、どこにいるんだよ？」

「せっかく買ってきてやったのにな」

「持ってるの俺だけどな・・・・」

アルは12人分のジュースを一人で抱えている。理由は簡単、ジャンケンに負けたからである。

「取り敢えず、セシリアちゃんの所に行こうよ。鈴ちゃんもいると思うし」

「まあ、そうだな・・・・って」

「何や、オモロイもんでも見つけたんか？」

「いや・・・イラッとするもんを見つけちまったよ」

政志の視線の先にはセシリアのパラソルの下にはななせ、ラウラ、箒、セシリア、鈴、シャルロットがいたのだが・・・・

「ねぇねぇ。せっかく可愛いのに、こんなところにいないであっちで遊ぼうよ」

「・・・・結構です」

「そんなつれないこといわないでさ。ね？」

ななせ達の前には６人の男、ということは旅館の従業員がいて、俗に言う『ナンパ』をしており、ななせ以外の女子はガン無視で冷たい目で男達を見ていた。

「別に彼氏がいるわけでもないんだろ～？」

「あなた方には関係ありません・・・・」

「おっ。その冷たい態度もしかしてツンデレってやつ？アハハ可愛い～」

さすがにイラッとしたのかラウラが動こうとするがななせが手で制する。『暴力沙汰はマズい』と目で訴えられて、ラウラは仕方なく下がる。

「俺たちこう見えてもドッジボール得意だから、手とり足とり教えてあげゲボッ！」

喋っていた一人の男の腹にビーチボールが命中してむせる。当たっ

たボールは跳ね返り茶髪の男の掌の上に落ちる。

「な、なんだテメェラ!?」

「あんたらドッジボール上手いんだってなぁ?じゃあ俺たちとやんねぇか?」

「ま、政志っ?」

ボールを投げつけた男の正体は政志でその後にはアル、龍鳳、クリス、一夏、ヴィンスがいる。

「はっ、上等だガキ共。こっちは全国のドッジボール大会で優勝したことが――」

「「「「「それがどうした?」」」」」

「「「「「「はぁ?」」」」」」

「たかが日本一位で粋がってんじゃねぇよ。・・・これだけは言っておくぞ!俺たちのドッヂは」

「「「「「「天を突くドッジだぁ!!」」」」」」

《・・・・・》

こうして、『ナンパ男6人』VS『バカ6人』の戦いが始まった。

夏だ！海だ！鈍感だァ！！（後書き）

束から渡されたメモリの中身は？

ナンパ男達の運命は？

そして箒の専用機も登場か？

様々な謎がうごめくなか闇のゲームが始まる

～次回～

『ワサビとメモリと王様ゲーム』

お楽しみに！！

禁断の闇のゲーム（前書き）

ＩＳのアニメも次で最終回なんですね・・・・

長いようで短かった１クール。ＯＶＡか二期はやりそうな気が・・・・

とりあえず、本編をどうぞ！！

禁断の闇のゲーム

木の棒で砂浜にドッジのラインを引いて一同はコートに入った。外野は1人からのスタートで政志チームからはアルがいき両チームが戦闘態勢に入る他にもコートの周りには騒ぎを聞きつけた女生徒が集まっており、完全にお祭り状態である。ボールは危ないからとビーチボールを使用すること提案したものの、その際にナンパチームから批判を受けたが、政志が『その歳で死にたくねぇだろ？』と不気味な笑みを浮かべながらそう言って脅し気味で強制的に承認させた。政志さん・・・・あなた何をするつもりですか？

「大丈夫かしら？・・・・あいつら」

「多分・・・・・ね」

一方、砂浜に座ってナンパの対象になっていた、ななせ、ラウラ、箒、鈴、セシリア、シャルロットは今にも始まろうとしている試合について語っていた。相手は自称全国大会優勝チームと言っていたが彼女達にとって心配なのは・・・・

「手加減はすると思うけど、心配だね」

「「「「「「「（あの従業員の人達・・・・・）」」」」」」」

と、溜息をつきながら死人がでないことを祈る乙女達であった。

「ヴィンセント。ジャンプボール頼む」

「了解ッス！」

コートの真ん中に立って向き合うヴィンスとナンパ組の背の高い男。１８０はあるだろう身長に比べてヴィンスの身長は１６５ぐらいである。どう見ても不利なのだが、余裕綽々とあくびをする目の前の白髪頭の少年に長身の男は苛つく。ボールトスはその辺にいた女生徒が行うことになった。

「いくよ～。とりゃっ」

女生徒こと布仏本音（のほとけほんね）は暑苦しいキツネの着ぐるみのような水着？を着たままボールをトスした。ボールは天高く上げられ重力に従い高さ5メートルぐらいのところで地上に落下し始めた。それを見たヴィンスは膝を曲げてあろう事か、そのままジャンプした。

「バカがっ。届くわけ――――」

『無い』と言いたかったのだろうが、自分の身長の倍以上の高さを

跳躍する目の前の少年を見て言葉を失う。

「クリスっ！」

「ＯＫ！」

と、ヴィンスはボールを勢いよく手で叩き落としてクリスの元へ飛んでいく。ボールを受け取ったクリスは取り敢えずふわっと放物線を描かせてアルにパスする。

「狙い撃つぜっ！」

受け取る動作と投げる動作をほぼ同時にこなして猛スピードで投げられたボールは避けられて誰にも当たることはなかった。しかし、

ガシッ！

と片手で掴む男がいた。

「・・・・・・」

無言のままニヤリと笑う政志を見て本能的に危険と感じたのか全力で外野のラインぎりぎりまで下がる。政志が大きく振りかぶったのを見てゴクリと唾を飲み、ボールを投げたと思った瞬間――消えた。

ドゴーーッン！

・・・・・・ガシッ。

《へ？》

いきなりナンパ組の内野にいた一人が吹っ飛びそのまま海にダイブインした。跳ね返ったであろうボールを投げた本人が再び片手で掴む。政志のことを知らない者は全員口がポカンと開いたまま塞がらない。逆に知っている者はあちゃーと頭を抱えている。そもそもビーチボールで『ドゴーーッン！』何て音は普通出ないので悪しからず・・・・。

「おい。あれ死んだんやないか？」

「さすがにビーチボールじゃ人はしなねぇだろ？」

「政志がボール持った時点でこうなるとは思ってたけど・・・・」

「でも、本人は結構楽しんでるみたいだよ？」

政志に聞こえないようにコソコソ話している龍鳳、ヴィンス、一夏、クリス。さきほどアウト？になった男は白目を剥いたまま海に浮かんでいる。正直かなり怖い。

「次は本気で投げるか・・・・」

信じられない言葉を吐きながら、未だに驚いている相手チームに破壊神は容赦なく攻撃を再開しようとしていた。先ほどとは違いコートの半分ぐらいから少し加速してラインぎりぎりで振りかぶり踏み込んだのだが、この時に浜辺全体が揺れたのは気のせいだと信じたい。

バゴーーーーンッ！

ボールが当たった男は吹っ飛んでいくのはいいが先ほどの男と違い、腹の辺りからゴキッとなにやら良くない音が聞こえ龍鳳と鈴が競争に使っていたブイの上に着陸した。

《・・・・・・》

ナンパ組の内野には先ほど飛んでいった男が立っていた場所にボロボロに裂けた元ビーチボールがあった。

「あ～あ、こりゃ使いものになんねぇな。換えのボールでも用意するか」

ナンパ組がガタガタ震え始め危ない汗がだらだら流れ出したところでアルがヒラヒラになったボールを摘んでわざとらしく言うと、ヒイッ！と情けない声を上げながら砂浜から逃げて行った。

「さすが兄貴、お見事っ！」

「前から凄いと思ってたけど、ここまでとはな・・・」

「何にしてもや、勝ったことには変わりはないやろ？」

「コレに懲りてナンパなんて止めりゃいいけどな」

「勝つのは当然だよ！ねっ、政志」

「あぁ、何せ俺たちのドッジは」

「「「「「「天を突くドッジだぁ！！」」」」」」

拳を高らかに上げる6人に周りの女生徒は拍手を送るが、

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

ななせ、ラウラ、箒、鈴、セシリア、シャルロットは呆れた視線を送っていた。

◇

自由時間が終わって夕食の時間になり浴衣に着替えた後、一行は大宴会場で豪華な夕飯を楽しんでいた。そんな中、アルはワサビを乗せ醤油を付けた刺身をゴクリと唾を飲んで口に運ぶ。

「う、うまいっ！」

てっててーとＢＧＭが流れそうな顔になるのを右隣に座っていたシャルは不思議そうに見ていた。

「さすが本わさ。恐るべし・・・・」

「本わさ？」

「ああ、シャルは知らねぇのか。本わさって言うのは、ええと、確か・・・本日の、和三ぼ――」

「本物のわさびをおろしたもののことだよ、シャルるん」

アルの左隣に座っていたクリスが教えてあげた。アルが言おうとしていたのが『本日の和三盆』でないことを祈りたい。本日のって何だよ、というより和三盆はわさびですらない！

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食に付いてるのって・・・・」

「あれは練りわさ。えーと、ワサビダイコンとかセイヨウワサビだ

ったかな。それを着色したり、合成して見た目と色に似せてあるやつだよ」

「ふぅん。じゃあこれが本当のわさびなんだ？」

「うん。でも最近では練りわさもおいしくなってきてるから、店によっては本わさと練りわさを混ぜて出してる店もあるよ」

「へぇ、よく知ってるじゃねぇか」

「物知りなんだね、クリスは。はむ」

「「えっ？」」

恐らく今の説明で『本わさ＝おいしい』という式が頭の中で成立したシャルはわさびの山をひょいと箸で食べた。

「っ～～～～～！！」

案の定、鼻を押さえて涙目になり、アルとクリスはシャルの珍プレーに驚く。

「な、何で食べちゃったの？」

「お、おい。シャル大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ・・・・・。ふ、風味があって、おいひぃよ～～・・・・」

「ったく。どこまで優等生なんだよ、お前は」

ホレと、アルはお茶を差し出して受け取ったシャルはごくごくと飲む。何やってんだか・・・・。

「っ・・・・ぅ・・・・」

ちなみにクリスの左隣ではセシリアが喘いでおり、一向に食事が進んでいない。

「大丈夫?正座が無理ならテーブル席に移動したらどう?」

テーブル席では正座が苦手な外国籍の生徒などが食事を取っている。その中で政志とヴィンスが茶碗を山のように積んでいたのは見間違いであってほしい。

「へ、平気ですわ・・・・。この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい・・・・」

「席?」

「「クリス、女の子には色々あるんだよ」」

「そうなの?」

「そうなの／そうなんだよ」

クエスチョンマークを頭の上に浮かべて首を傾げる無垢なクリスに、声をそろえてアルとシャルが助言する。

「ほえ〜。知らなかった」

「ぅ、ぐ・・・・・くぅ・・・・・」

端から見たら可哀想だが、何を言っても移動しなさそうなセシリアをどうにかしようと考えていたクリスだったが、何か思いついたのかピコーンッ！と頭の上で電球が光った。

「そうだ。セシリアちゃん、そんなにキツいのならボクが食べさせてあげようか？」

と、クリスが言った瞬間、目をキラキラさせながら凄い勢いでセシリアが食いついてきた。

「それは本当ですの！？た、食べさせてくれるというのは・・・・！」

「うん。だってせっかくの料理を残しちゃったら勿体無いでしょ？」

「そ、そうですわね！では――」

と言って箸を渡そうとしたがすでにクリスが自分の箸で刺身を掴んでいつでも食べれる状態になっていた。対応の早さに少し驚いているセシリアに、またもや首を傾げる。

「あれ？もしかして、わさび多い方が良かった？」

「い、いえっ。そういうわけではありませんわ・・・・」

「じゃあ、あ～ん」

「あ、あ～ん／／／／」

パクリと刺身を一口で食べ、刺身の歯応えやら味、わさびの辛みやらが口の中に広がるが、嬉しさと恥ずかしさやらでセシリアはそれを感じる事は出来なかった。

「どう、おいしい？」

「は、はひ。おいひいれふ／／／／」

柔らかな笑顔でそう問われて、まともな返事を返すことが出来ずにセシリアは顔を真っ赤にさせる。そんなセシリアの態度にまたも首を傾げながら、クリスは次の料理をセシリアに食べさせてあげようとしたが、ここで問題が起きた。

「セシリア、ズルーイ！」

「クリス君に食べさせてもらってる～！」

「むしろ私がトールギス君に食べさせてあげたいぐらいなのに～！」

他の女子に見つかり騒がしくなる。まあ、並んで座っているので見つからない方がおかしいけど。

「おいおい。食事の時ぐらい静にしろよな。ぱくっ」

「全くだ。ぱくっ」

「何当然の如く俺の刺身食ってんだよ！？」

騒ぎを静めに来た政志とヴィンスだったが二人ともご飯を片手にアルの刺身を食べていた。

「まあ・・・鈴木君がそう言うのならしかたないけど・・・」

「もー。今回だけだよっ、セシリア」

大人しく諦めてくれた女子を見てセシリアはほっと胸を撫で下ろす。

「「もぐもぐ、ぱくぱく」」

「俺の飯が無くなるーーーーっ!!」

◇

露天風呂から出た後、とある畳がしいてある部屋で政志、アル、一夏、龍鳳、クリス、ヴィンス、ななせ、ラウラ、箒、鈴、セシリア、シャルと１２人の男女が中心にざるが置かれている円上のテーブルを囲んで座っていた。全員が真剣な目をしており何が起ころうとしているのか検討できな――

「王様ゲームっ！！」↑アル

《イエーーーイッ！！》↑残り全員

称もないことだった。

「クリス、ルールの説明を頼む！」

「ＯＫ。ここに１番から１１番までの数字と王と書かれたくじがあります」

そう言って、クリスは手に握っていた１１枚の数字が書かれたくじ

を入れて、最後に王様のくじをみんなに見せてざるに入れた。

「この王様のくじを引いた人は他の番号を引いた人に命令ができます。例えば、『1番が2番に肩を揉む』とか『3番が4番にしっぺをする』とか。そして、王様の命令は」

《絶対！！》

いつもの彼らならこんな風にテンションが上がることは無いと思うのだが、修学旅行のノリでこうなったのだろう。

「ほなら始めるで！」

全員が一言一言に気合いが入っている。一体王様になって何を命令しようと言うのだろうか？

「よし。テメェラ、覚悟はいいか？」

全員が取ったのをアルが確認して、遂に一回目の戦いが始まる・・・・

「せーーのーーっ！」

《王様だーれだっ！！》

全員がくじを開き、その中を確認すると窓が風に当たって少し揺れる。

「やったー、ボクだぁ！！」

王様以外の者は全員畳に手を着いたり、テーブルに俯せたり、血を吐いていたりしている。

「早速行くよ！そうだね～・・・・。じゃあ、2番と6番と7番と11番が千冬さんに『好きです。付き合って下さい♪』って告ってくる！」

どうやら番号が当たっていたのはアル、龍鳳、一夏、ヴィンスだったらしくズ～ンと畳に両手を付いている。

「「「「貴様ぁーーっ！！」」」」

「何て命令をするんだぁ！そんなことしたら完全に誤解されちまうだろうがぁ！？」

「何で俺が実の姉に告白しなきゃなんねぇんだよ！？」

「双子の弟にこんな命令をして恥ずかしくないのか！？」

「せやせや！こんなん不名誉すぎるわ！！」

目を血走らせながら全力で命令から逃げようとするが、そうは問屋は降ろさなかった。

「もー、駄目だよヴィンセント。さっきクリスが説明したばかりでしょ」↑ななせ

「そうだぞ４人共」↑箒

《王様の命令は！》↑残りの８人

「「「「絶対っ！！」」」」

血が出るほど歯を食いしばる４人はダーッと走り部屋から出て行った。

「うぅ・・・・ぐすん・・・」

「俺は・・・・シスコンじゃ・・・・・無いのに・・・・・」

「復讐・・・してやる・・・・・！」

「俺の・・・・意志じゃ、無いんだ・・・・・」

数分後。部屋に帰ってきた４人の首には『私は教師をからかったことを反省します』と書かれたプレートを掛けられており体中がボロボロになっていた。上から龍鳳、一夏、ヴィンス、アル。

「うぅ・・・二回戦・・・・行くでぇぇ！！」

「「「おーーっ！！」」」

よほど悔しかったのか血涙が流れているのは気のせいだろうか？

「せーーのーーっ！」↑龍鳳

《王様だーれだっ！！》

・・・・・・。

「あっ、僕だね」

今回はシャルが王様のようで、その他の者は（略）

「じゃあ・・・・８番が３番の、ほっぺのチューを♪」

「ほ、本当かっ！」

どうやら３番は箒らしく、何を考えてか顔を赤くして一夏の方を見つめる。

「い、一夏の・・・くじの番号は、８番・・・だな？」

「箒・・・」

持っているくじをだんだん開いていき、それを見ている箒の顔はパァと明るくなっていくが、

「俺のくじ4番だけど」

「へ？」

トントンと肩を叩かれそちらを向くと8と書かれたくじを持っている鈴がいた。

「うぅ・・・・・」

ガーンという音がぴったり似合うぐらいに落ち込む箒を見て鈴が微笑む。

「いらっしゃい、箒・・・・」

「そうか・・・そういう少しエッチなのもアリなのだな。・・・・だったら、もう容赦はしないぞ！」

何とか立ち直った箒はさっきのが余程ショックだったのか、怒りのあまり目がガチになっている。

「普通、女はそういうのを嫌がるんだけどな・・・・」

政志さんの言う通りなのだが、何を言っても今の彼女の耳には何も聞こえない。

「行くぞぉーーー！せーーのーーっ！」↑箒

《王様だーれだっ！！》

・・・・・・。

「私ですわ！！」

三回目はセシリアが王様のようで、その（略）

「そうですわね～・・・・４番が８番に、５番が１０番に愛の告白を」

「「えーーーっ！！」」

声をそろえて嫌がるのは４のくじを持つ鈴と、５のくじを持つアルだった。

「（う～。８番が龍鳳だったら、どうするのよ！？いや、これはチ

ャンスかも・・・・どうせなら思い切って！）」

ちなみにアルも似たような事を考えていた。

「「シャル（龍鳳）のくじは何ば――――」」

「「そのクダリはさっきやったからな」」

政志とラウラは１０と８のくじを持っており、それを見たアルと鈴はドラえもんが未来に帰った後ののび太並に落ち込んでいた。シャルと龍鳳がうらやましそうに政志とラウラを見ていたのは気のせいか？

「仕方・・・・ないか・・・・・」

「そうね・・・・・・」

みんなが見守るなか鈴とアルは深呼吸をして気合いを入れ、ラウラと政志の肩を掴む。

「「好きです（だ）！付き合ってく――――」」

「「嫌。無理」」

・・・・・・・。

同姓相手に嫌々告白したあげく速攻で振られた二人は屍状態になっていた。だんだん肌の色が青白く、って本当に大丈夫なのだろうか。突っ込みどころ満載のままとうとう最後の戦いになり全員が目を光らせる（いつの間にかアルと鈴が復活していたがスルーの方向で）。

「これが・・・・ラストだァーーーーっ!!」↑アル

「せーーのーーっ!」↑鈴

《王様だーれだっ!!》

・・・・・・。

「ついに・・・・ついに、この時が来たァーーーーっ!!」

号泣しながら喜ぶアルが今回王様の（略）

「さてと、何番にしようかな♪」

悪意に満ちた笑みを浮かべながら全員の顔を見渡す。アルは今回二度も不本意な告白をさせられており、恨みが募りに募っているよう

で何を命令するのか怖くなる。

「決めたぜ！1番と11番が・・・・・ポッキーゲーム！！」

どこから取り出したのかポッキーを突き出すアルを見て『ベタなの来たね』と心の中で思った者が数名いた。

「で、誰なんだよ。1番と11番の奴」

「・・・・あたし・・・・だけど・・・・」

恥ずかしそうにしながら11のくじをみんなに見せて、相手が誰なのかが分からず不安そうにしていたななせだったが、

「・・・・・」

「あっ。政志が1番だぁ」

「おいおい、マジかよ！！」

「でかしたで、アル！！」

最後の最後で大物二人のポッキーゲームが見れることでテンションが上がる一同だったが、ラウラとヴィンスは心中穏やかでは無かった。

「（な、何だぁ！？この殺気は！？）」

アルは背後から殺気が送られているのを感じたが、振り向いた瞬間殺されそうだったので誰かは分からなかったようだ。

「ちっ。やりゃいいんだろ、やりゃ？」

ポッキーを咥えた政志はそのままななせの方を向く、恥ずかしそうだが何処か嬉しそうにもとれる表情でパクッとポッキーの反対側を咥えた。

「ポッキーゲーム、スタート！」

全員に見守られながら政志とななせはポッキーを噛り出した。ポリポリと美少年と美少女が向き合ってポッキーを食べている光景は非常に絵になる。

「（うぅ、どうしよう・・・・。政志の顔がこんな近くに・・・・・。このままキスなんかしちゃったら・・・・）」

ぼんっと顔を爆発させながらも噛り続けて、そろそろ両者の唇が重なりそうになる。全員が手に汗握りながら見ており、本人達はというとななせの顔は非常に危ないほど赤く染まっており、目の焦点があってない。政志はななせほどではないが少し顔を赤くして緊張している。そしてついに唇が当たりそうになったところで、

ポキッ

あ～あと落胆する声も聞こえるがほっとする者もおり、ななせは折れた瞬間残念そうな顔をしていた。

「（あとちょっとだったのに・・・・。そういえば、政志ってあたしのことどう思ってるんだろう・・・・？）」

政志はもぐもぐと無表情でポッキーを食べており、何を考えているかは分からなかった。

「そういえば、ななせ」

「ふぇ？な、なななな何？」

今６回『な』って言いました。

「今日もらったメモリの中身、見てみようぜ」

「もらったって、誰から？」

「そうかお前ら、あの時いなかったもんな。束さんがくれたんだよ」

「姉さんが！？」

「箒のお姉さんってことは・・・・あの篠ノ之博士のこと！？でも、どうして・・・・」

「その話しは置いといて・・・・よいしょっと。取りあえず見てみよっか」

くじの入ったざるを退かしてそこに持参していたノーパソを置く。そして今日束にもらって白いメモリを差し込んで中身を読み取る。何だ何だとその場にいた全員が画面をのぞき込み、ある程度解析出来たのか『なるほど・・・・』とななせが呟く。

「どうやら、量子化した何かが入ってるみたい。中身は・・・・」

カタカタとキーボードを弾く姿は連邦の技術局長なんだと改めて実感させられる。ななせのノーパソには常に量子化してデータに変換してある機材が多くインストールされており、ガンダムの予備パーツも疑似太陽炉もいくつかはいっている。最大容量はガンダム１０機分でななせはその量子化したデータを使ってメンテナンスやら修理が出来るらしいが、世界中を探してもこんなことが出来る人間はそうそういないだろう。

「パスワード・・・か」

「４桁の数字って、これまた厄介だな・・・・」

「うん。しかもこれ、パスワードを解析できないようになってるし、しかも3回間違えるとデータが全部消えるようにプログラムされてる」

「そんな無茶苦茶な・・・・・」

全員が頭を抱えるなか政志は冷静にあることを考えていた。

「（落ち着け。束がこんな訳の分からないものを渡すはずがない。思い出せあのとき束は何て言ってた・・・・・）」

【先生からの預かり物、返すね♪】

「（先生？あの身内以外全然相手にしないあいつに先生と呼ばせる人間で俺たちの知り合いと来たら・・・・・まさかっ！いや、でも・・・そうなると４桁の番号は・・・・）」

手を力強く握りしめている政志に違和感を覚えたラウラだったが、

何て声を掛けたらいいか分からずその場では黙っていた。

「ななせ・・・・今から俺が言う番号を入力しろ」

「え?う、うん。何ば――」

「０１０１」

「えっ?」

「多分・・・それで開くはずだ」

言われた番号を入力すると画面に『ロック解除』の文字が浮かび上がりデータが映し出される。

《っ!!》

そのデータを見て政志以外の全員の時が止まった。何故なら――

◇

海岸の岩の上で鼻歌を歌いながら星を眺めているのは某国のアリスこと篠ノ之束である。足をパタパタさせてどこか機嫌が良さそうにも見える。

「～～♪～～♪」

「あ～あ。結局今日は箒ちゃんに会えなかったな～。せっかく『紅椿』持ってきてあげたのに。まあ、いいかな。頼まれてた物渡したし、みんな驚いてるだろうな～。何せあのメモリの中身は」

「オリジナルの太陽炉だからね」

禁断の闇のゲーム（後書き）

どうして束がＧＮドライヴを？

政志のアルケーは？

暴走した３機とは？

様々な謎がうごめくなか箒の紅椿が起動する

～次回～

『福音と竜王とブラックウォーグレイモン』

お楽しみに！！

抱える過去、起動しないアルケー（前書き）

今回、長い割には手抜き感がなんとも・・・・

眠気と戦いながら書いたものですから誤字があっても気にしないで下さいｍ（＿＿）ｍ

では、本編をどうぞ！！

抱える過去、起動しないアルケー

誰しもが画面に映し出されている『ＧＵＮＤＡＭ　ＮＵＣＬＥＵＳ　ＤＲＩＶＥ』の文字に釘付けになる。政志はそれを見て神妙な顔で『やはりな・・・・』と一言だけ言って部屋から出て行った。

「どうして・・・ＧＮドライヴが二基も・・・・！？」

「しかもこれ、オリジナルの太陽炉じゃねぇかよ・・・・！」

「まさか、束さんが作ったのか・・・・？」

「それは絶対有り得へん。オリジナルの太陽炉を作れるん死んだオトンだけや」

疑問が疑問を生み続ける中でななせはどうして政志が４桁のパスワードを『一発』で当てれたかを考えていた。これはさすがに『勘で当てた』の一言で終わらせることが出来ず、しかも番号を言っている時の政志の様子が少しおかしかったところから何らかしたの確信があって言ったものだとななせは推測した。

「（０１０１・・・・一体何の番号・・・・？）」

そんな風に考えていたら不意に一夏がこんなことを言い出した。

「それにしても政志、パスワードよく分かったよな。俺の場合、０１０１っていったら『元旦』くらいしか思いつかないないけどな」

「（元旦・・・・１月１日・・・・まさかっ！？『ＧＮドライブ』、

『先生からの預かり物』、『1月1日』・・・・そういうことか）」
溜息を付いてノーパソの電源を切って折りたたむ。えっ？と周りから驚きの声が漏れるがメモリを抜き取り握りしめる。

「どうしたんだ、ななせ？・・・・もしかして、何か分かったのか！？」

《えっ！？》

「うん・・・・多分だけど・・・・・」

部屋を出た政志は旅館の渡り廊下に座ってそこから星を見上げていた。7月にしては冷たい風が政志に当たり虫の鳴き声しか聞こえない空間に足を踏み入れる者がいるのに政志は気付いた。

「クリスか・・・・何のよ――――」

「『０１０１』ってさぁ。・・・・・1月1日のことだよね？」

「気付いてたのか・・・・・」

「君の顔を見た瞬間、そんなことだろうと思ったよ」

よいしょとクリスは政志の隣に座る。声色はいつも通りでニコニコしているのだが、目が笑っていなかった。

「それにしても驚いたよ。政志があの篠ノ之束と知り合いだなんてね」

「別に。箒ん家の道場で世話になった時に少しな・・・・」

「ふ～ん・・・。今からボクが言うのはただの推測だから気にしなくていいよ」

クリスは立ち上がってスリッパのまま芝生に足を踏み入れた。どこか楽しそうにも見えるが政志は顔を合わそうとせず俯く。

「あの天才の篠ノ之束に先生と呼ばせる人間でボク達の知り合いときたら、この時点でだいたい誰かは予想出来たけど、確信は持てなかった・・・。でも、政志が言った数字とメモリの中身と君の様子から分かったことが2つ。おそらく篠ノ之束はお義父さん、いや『朝倉海苑』の教え子か何かにあたる存在なんじゃないかな?それに篠ノ之束と千冬さんは親しい同級生だったらしいしね。そう考えるとお義父さんが死んだすぐに千冬さんがボク達のところに来たのも頷ける。いくら良い人だからと言って見ず知らずの人の子どもの面倒を見ると思う?何よりの証拠が、篠ノ之束が今日渡したGNドライヴ。多分、自分が命を狙われていると知ったお義父さんは教え子の、世間から逃げ回っている篠ノ之束に開発途中のGNドライヴに自動生成機能を積んだ状態で託したと思う。そして、それがつい最近完成した。これが1つ目だけど、どこか間違ってるかな?」

「・・・・・」

「多分ななせも、今頃『ここまで』は話してるだろうね。そして2つ目は0101。いや、1月1日。お義父さんが大事なGNドライヴのパスワードにするぐらいの日付と言ったら一つだけ・・・・・。これって『美羽(みう)』の誕生日だよね?」

「っ・・・・!」

『美羽』という名前を聞いた途端に政志の表情が険しくなりクリスを睨み付ける。殺気に似たものを感じつつもクリスは喋り続ける。

「君があんな顔になるぐらいのことには彼女が絶対に絡んでくる・・・・。一応確認するけど政志はまだ引きずってるの?美羽が死んだこ――――」

「それ以上言うなっ!!」

言い切る前に、政志がクリスの胸倉を掴み今にも殺しかねないぐらいの殺気を放っている。それに負けずとクリスも睨み返す。

「言わずにはいられないね!君がまだあのことについて何か隠してるのはボクもアルも龍鳳もななせもみんな気付いてるんだ!なのに君は未だに教えてくれない!そんなにボク達が信じられないの!?」

「それは違うっ!!ただ・・・!ただっ・・・」

声が弱々しく掠れるぐらいに小さくなりクリスの胸倉を放す。そして渡り廊下に上がって歩き出す。

「政志っ!」

「・・・悪かったな、ムキになって。けど・・・・これだけは言っておくぞ。俺は、言わないんじゃない、『言えない』んだ・・・・」

立ち止まって、そう言った政志はそのまま歩いていった。その背中からはいつもの彼の、破壊神の面影など微塵も無かった。やれやれといった感じではだけた胸元を直し一呼吸ついた後、政志が歩いていった方の反対側にある柱に目を向ける。

「いい加減出てきたらどう?ラウラちゃん」

「・・・よく気付いたものだな」

数秒後、柱の影から渋々ラウラが出て来る。表情は重く、隠れていたのがバレたからという理由からではないのは明かである。

「まあね。でも、政志は気付いてなかったようだけど・・・・」

ふぁ~と呑気に欠伸をしながら廊下に上がってパンパンと叩き、土を落として部屋に戻ろうとするが、ラウラが何か言いたそうにしているのが視界に入った。

「これだけは言っておくよ」

「えっ?」

「政志が抱えてるものは・・・・重いよ?」

それだけ伝えてクリスはその場から去っていった。一人になったラウラは冷たい風が吹くなか夜空を見上げ考える。愛する者のために、

自分が何が出来るのかを・・・・。

◇

合宿二日目の朝。昨日の重い雰囲気は無くなっており、政志もクリスと普通に会話していた。朝食後、一般生徒のＩＳ訓練用のビーチとは反対側にある岩場に専用機持ちのメンバーが集まっていたのだが、

「よし。専用機持ちは全員揃ったな？」

ジャージ姿の千冬が確認をとるがその際に鈴があることに気付く。

「ちょっと待って下さい。箒は専用機を持ってないでしょ？」

「そ、それは・・・・」

一般生徒である箒がこの場にいるのに疑問を持つのは当然で、箒は箒で何か言いたそうでもある。

「私から説明しよう。実はだな――――」

「や～～～っほ～～～～～！」

岩場の崖の上から声が聞こえたと思ったら、その声の持ち主は陽の光を浴びながら千冬目掛けて飛び降りた。

「ち～～ちゃ～～ん！」

自分に向かってくる某国のアリスをアイアインクローでキャッチして溜息をつく。

「やーやー久しぶりだね、ちーちゃん！さーさー、はぐはぐしよう！そして愛を確かめ――――」

「五月蠅いぞ、束」

ギギギと頭を掴む音が少し離れている政志達にも聞こえ引きつった笑みを浮かべる。

「うんうん、相変わらず容赦のないアイアンクローだね～！」

千冬の手を振り解き、政志達の顔を見渡していくうちに箒を見つけマッハで駆け寄る。

「久しぶりだね～箒ちゃ～ん。何年ぶりかな～？」

「は、はぁ・・・・久しぶりです・・・・」

実の姉を避けている箒に久しぶりの再会でか妙にテンションが上がっている（テンションが高いのはいつものことか？）おり一人で盛り上がりだしたので、それに見かねた千冬が声を掛ける。

「おい束。自己紹介くらいしろ」

「えーっ！めんどくさいな～」

自己紹介って面倒臭くなるものなのだろうか？いや、なる人はなるのだろう。実際にいるんだし・・・・。

「私が天才の束さんだよ～。ハロ～、終わり～！」

「「早っ！」」

あまりにも簡潔するぎ自己紹介に突っ込みを入れてしまったアルと龍鳳とヴィンス。その他のメンバーは服装から色々突っ込みどころが多すぎる彼女を見て目が点になっていた。それを見て満足気な顔をしながら、空に指を指す。

「さあ、大空を御覧あれぇ！！」

キィィィィン・・・・。

と、何処かで聞いたような何かが高速で接近する音が聞こえると空

から銀色の箱的な物が落ちてきて大きな音を立てながら岩に突き刺さる。

「じゃじゃーーん。これが箒ちゃんの専用機こと『紅椿』！」

束が指パッチンをすると銀色の箱が量子化して中から赤いＩＳが姿を現す。それを見て一同があることを思った。

《（見た目アルケーと若干被ってね？）》

首を傾げる一同を無視して束が機体の説明を始める。

「この機体はね～、全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製だよ～。何たって紅椿はこの天才束さんが作った『第四世代型ＩＳ』なんだよ～」

「第四世代・・・・！？」

「各国で、やっと第三世代型の試験機が出来た段階ですわよ・・・・！」

「それをもう・・・・！？」

「そこはホレ？天才束さんだから」

ラウラ、セシリア、シャルは目の前の天才の爆弾発言に耳を疑う。政志、ななせ、アル、龍鳳、クリス、ヴィンスは『へ～』と関心していると同時に『最後の言葉が無かったらなぁ・・・・』と残念そうに見ていた。

「さぁ箒ちゃん。今からフィッティングとパーソラナイズを始めよっか？」

「・・・・はい」

心の底から楽しそうにディスプレイを空中に広げる束とは対照的に無表情な箒。束が高速で指を動かしフィッティングするのななせは顎に手を当てて観察している。

「（速い・・・・。やっぱりこの人おじさんの・・・・。）」

「ほいっと。フィッティング終了～♪パーソラナイズは自動的にやってくれるからちょっと待っててね。え～と、ななせちゃーん」

「え？あ、はいっ・・・・？」

急に呼ばれたななせは声が裏返ってしまい、束が面白そうなものを見る目で近寄ってくる。

「昨日渡したもの、見てくれたかな？」

「は、はい。見ました・・・・」

「うんうん。じゃあ、あのＧＮドライヴをどうするのか教えてくれないかな？」

「ええと・・・・分かりました。これなんですが・・・・」

教えるか教えないか悩んだななせだったが育て親の教え子で太陽炉を渡してくれた人なら大丈夫だろうと持ってきていたノーパソでデ

ータを見せる。

「ほぇ～。オリジナルの太陽炉を『四基』も使った機体か～」

「はい。粒子生産量を二乗化するツインドライヴだけで十分だと思ったけど、使い手が使い手なんで妥協出来なくて・・・・」

「格闘性能を向上しつつも殲滅戦も可能とした機体『ヤークトアルケー』か～。面白いね」

「あ、ありがとうございます・・・・」

「じゃあ一応実際に起動させた方がいいね。これだけ複雑だと、なおさらね。おーいっ、まーしー！」

「あぁ？」

箒の紅椿を見ていた政志はスタスタと歩いて二人の元に行くななせに待機状態のアルケーを渡される。

「昨日渡されたやつを使ったのか？」

「うん。下手に持て余すより、政志に使ってもらった方が安心だし。何より、これでアルケーの問題も解決したし」

「さっそくだけど起動してみよ。実はガンダムを生で見るの初めてなんだ～」

目をキラキラさせてせかす束を見て政志は渋々了承する。学年別トーナメント以来身につけてなかったネックレスに懐かしいものを覚

え起動させようとするが、

「・・・・・あれ？」

「どうしたの～？」

「・・・・起動・・・・・しねぇんだけど・・・・」

「そ、そんな・・・！だってデータ上何処も不具合は無かったし、計算上ちゃんと起動するはずだよ？」

「ちょっち詳しいデータ見せてくれるかな？」

直ぐさま詳細なデータの画面を映し出して束に見せるが、う～んと唸りを上げる。

「どこもおかしなところは、見あたらないね～」

結局起動しない原因が見つからず、とりあえずアルケーに関しては保留となった。紅椿のパーソラナイズが終えたようなのを聞いて全員がそちらに注目する。

「そんじゃあ試運転も兼ねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ、試してみます」

箒は目を閉じて言われたとおりイメージする。空に飛び立つ自分の姿を・・・・。すると、凄まじい速さで飛翔する紅椿を見て代表候補生達がその速さに口をあんぐりさせる。

「へぇ～。速いじゃねぇか」

「アリオスにも劣らんスピードやで」

紅椿の動きを目で追っているのは連邦軍組だけであり素直に感想を述べる政志と龍鳳。雲の上を箒が滑空していると、オープン・チャネルで束が語りかけてきた。

「どうどう?箒ちゃんが思ってる以上に動くでしょ?」

【ええ・・・まあ】

「じゃあ刀使ってみてよ。右のが『雨月』、左のが『空裂』ね。武器特性のデータを送るよ～ん」

データを読み取った後に、二本の刀を腰から抜き取る。

「じゃあ早速、これ撃ち落としてみようか?」

は～いっと十六連装ミサイルポットをコールして、全てのミサイルが吐き出される。初めてにしてはやりすぎなのではと心配した政志達であったがどうやらいらぬ心配だったようで、箒は右脇下に構えた空裂の切っ先で円を描くように振り抜き、赤い帯状のレーザーを展開させる。箒の周囲に帯状に広がったエネルギーは全てのミサイルを撃墜した。

「どうやら近接戦を中心とした万能機といったところだね」

「箒自信もなかなかやるけどな」

あまりにも機体性能が高い紅椿に代表候補生達は唖然としている。
箒はみんなと戦える力を手にいれ、左手に持った空裂を見つめる。
自分だけの専用機を。

「やれる！この紅椿なら！」

そんな時であった。

「た、大変です！織斑先生っ！！」

いつにもまして慌てている山田先生の顔はガチで焦っており、千冬に通信端末を渡す。

「特命任務レベルA。現時刻より対策を始めたれたし・・・・」

この千冬が受け取った任務が、今後の物語の大きな分岐点になるなどと、誰が気付けようか・・・・？

◇

いきなりの千冬の指示によって訓練は中止になり、一般生徒は部屋での待機を命じられているが、専用機持ち組は、本来は宴会か何かに使う広い部屋に集合させられている。教師陣と政志達の中心に空中投影のディスプレイが浮かび上がっている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ、イスラエルの共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ、『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と『千年竜王（キングギドラ）』が軍の制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

状況が理解出来ていない一夏以外の代表候補組はそれを聞いて顔を険しくさせる。一方連邦組は慣れているのかいつも通りの表情でヴィンスに至っては欠伸をしている。それはそれで問題だと思うが・・・。

「その後、衛星による追跡の結果、福音と竜王はここから2キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、今作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」

「つまり、その二機を俺たちで止めりゃいいんだろ？」

一夏が混乱しており、理解してなさそうだったので政志が補足説明

のつもりでそう言う。そして本格的に作戦会議が始まってすぐにセシリアが真っ先に挙手した。

「目標ＩＳ二機の詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。だが、しかし決して口外するな。情報が漏洩しは場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

「すまないが琴吹。説明を頼む」

コクリと頷いてノーパソのキーボードを高速で弾き出すと、座敷の中央に映っていた空中投影ディスプレイに二機のスペックが一枚ずつ映し出され、その内の一枚が巨大化する。

「ますはこの『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』だけど、広域殲滅を目的とした特殊射撃型、攻撃と機動の両方に特化したＩＳでセシリアのブルー・ティアーズ同様にオールレンジ攻撃が可能になってる。特殊武装、及び格闘性能は今のところ不明。そして現在この機体は超音速飛行を続けてるから、アプローチは一回が限界だと考えておいた方がいいと思う。そして『千年竜王（キングギドラ）』だけど、正直福音よりこっちがやっかいだね。竜王にはＩＳ初の３つのコアを使う『トライコアシステム』が搭載されてて、機体性能が軍用ＩＳの域を明かに超えてる。このＩＳは対単体、そして対集団に対応できる全距離対応型で武装は一つしかないけど一撃でもまとも食らったら多分墜ちちゃうね」

「・・・この『ヤタノカガミ』とは何なんだ？」

ディスプレイに映っていた竜王のデータを見てラウラはななせに尋

ねる。

「この『ヤタノカガミ』は竜王の黄金色の装甲のことで、ナノスケールのビーム回折格子層と超微細プラズマ臨界制御層から成る鏡面装甲で、敵のビームをそのまま相手に跳ね返すことが可能になってる。仮装シミュレートの結果、私のウイングゼロのツインバスターライフルの直撃にも耐えれることが分かった。それだけにとどまらず、常に自分の周りに全攻撃を防ぐエネルギーシールドを展開してるみたい」

全員がその説明を聞いて竜王のあまりにも高すぎる防御性能を聞いて固まる。ビームをそのまま反射すると言うだけでも厄介なのだが、その上にさらにシールドがあると言うのだ。ぶっちゃけるとちょっとした要塞。そんな中、静かな部屋に政志、アル、龍鳳、クリス、ななせ、ヴィンスの携帯から同じ着信音が鳴り響き、それを聞いた瞬間6人の顔が厳しくなる。その着信音は緊急暗号通信が届いた時に鳴るように設定してあり、それぞれが内容を見ると政志が舌打ちをした。その様子から事態が悪化しかねないことが起きているのを理解した一夏達は静に政志の説明に耳を傾けた。

「たった今、このこの周辺にいる連邦の将官クラス全員にアメリカ軍からの要請が入った。ついさっき、正確に言えば福音と竜王の暴走に乗じて、アメリカ軍基地の最深部で冷凍捕縛されていた『ＧＤ』最後の一機、『漆黒の竜戦士（ジェラック・ヴォルグレイシス）』が逃げたそうだ」

《ＧＤ？》

初めて聞く単語に代表候補組は首を傾げる。

「ＧＤ（ジェノサイド・ディザスター）はＩＳのコアに様々な遺伝子情報を組み込み超高性能のＡＩ

を搭載した、簡単に言うと・・・・『生きたＩＳ』のことだ」

『生きたＩＳ』など聞いたことがないと言った顔をして驚く代表候補生達であったがそれでも政志は説明を続ける。

「多くの軍との共同開発で産み出されたＧＤはその余りにも高すぎる戦闘能力からすぐに生産禁止と廃棄処分を言い渡された。だが、貴重な恐竜の遺伝子を組み込んだ漆黒だけはデータ収集のために残していたんだ。本来ＧＤは独立して状況に合わせて進化するようにプログラムされていて一度ぐらいの進化なら頷けるが、漆黒だけは特別であいつはすでに二度の進化していている。そして、最悪なことに逃げ出す際には三度目の進化を遂げ、ＧＤの最終形態・・・・『究極体』になったらしい」

完全に別次元の話しをされて、全員が静まり返る中、鈴が口を開いた。

「でも、それがどうして政志達に・・・・？」

「衛生の追跡結果によると、漆黒はこの島に一直線で向かってきているらしいんや。しかも、到着時刻は福音と竜王と同じ五十分後」

「漆黒の戦闘能力は究極体になったことで格段に上がってるはずだから、頼めるのがボク達しかいないってことだろうね」

「となると・・・・この三機の相手を誰がするかって話しになるんだよな」

超音速飛行を続けている福音、福音ほどでは無いにしろ超音速飛行を続けている絶対的な防御力を持つ竜王、そして戦闘能力未知数の

漆黒。どの機体に誰を当たらせるか誰もがう～んと悩みに悩んでいた。そんな中、溜息を付きながら政志が立ち上がった。

「俺が漆黒を墜とす。・・・・正直、そっちの方がてっとり早ぇだろ？」

「はぁ？政志何言って――――」

「確かに、そうだね」

「ななせ！？」

政志の突然の案に反対する龍鳳だったがななせが乗っかってきた。

「戦闘力未知数の漆黒をこの中で確実に墜とせる人がいるとしたら政志ぐらいだろうね。そうなると竜王の相手は・・・・」

「兄貴を除いてあのシールドを突破しつつ本体に物理攻撃を与えれるのは俺の『レグナント』だけだろ？」

自信満々にヴィンスがそう言いななせはコクリと静に肯定する。となると、最後に残った福音の相手は・・・・

「一夏・・・お前が福音を墜とせ。セシリア、確かブルー・ティアーズの強化パッケージに強襲用高機動パッケージがあったよな？それで一夏を福音の元まで運んでやってくれ」

「はい。『ストライク・ガンナー』ですわね。超高感度ハイパーセンサーもついていますから問題ありませんわ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！そう言う奴の相手って、俺なんかよりも龍鳳の方が適任なんじゃないのか！？」

「ボクもそう思ったけど、もし何かあった時にすぐに駆けつけれて最善の対応がとれるのは龍鳳しかいなからね。それにアリオスには零落白夜みたいな決定打となる武装が無いし・・・・」

「だけど・・・・」

「嫌なら嫌ってさっさと言えよ？」

面倒臭そうに頭を掻きながら政志が唐突に口を開く。

「はっきり言うと、これは俺たち軍人の仕事だ。下手に中途半端な覚悟でやられても死ぬだけだ」

アルケーが無いのに戦いに赴く政志は全く臆した様子は無くいつもの力強い眼差しを一夏に向けていた。その目を見て、一夏は一呼吸ついて気合いを入れ直した。

「・・・あぁ、やってやる。俺が、やってみせる」

顔つきが変わった一夏を見て政志はやれやれといった感じの表情になり、具体的な作戦内容を説明しようとした時、

「その作戦はちょ～っと待ったなのだよ～！」

場違いすぎる暢気な声が座敷に響いた。全員がその声の発生源、天井を見上げる。そこには、

≪（うわぁ・・・・また出たよ・・・・・）≫

どうやって侵入したのか天上から首が生えており、とうっというかけ声と共に座敷に降りてきた。

「も～、こういう時は断然紅椿の出番なんだってばぁ～」

天才かつ問題児の篠ノ之束の登場に頭を抱える千冬であった・・・・。

◇

同時刻。太平洋上空に超音速で政志達の元に向かう黒い機体があった。竜のような頭には左右に角が生えており後からは黄色い鬣のような物が伺える。背中には翼のような盾ブレイブシールド、両腕には巨大な鉤爪ドラモンキラーが装着されている。まさに戦うための存在、竜人と呼ぶに相応しい姿である。

「（俺は一体、何のために生まれてきたんだ・・・・。戦うために生み出されたというのにどうして、『心』なんてものがあるんだ・・・？それを知るためにも強い奴と、あいつと戦わなければならない・・・・）」

「（破壊神、鈴木政志と・・・・！）」

抱える過去、起動しないアルケー（後書き）

どうしてアルケーが起動しないのか？

初陣する箒の心境とは？

漆黒の強さとは？

様々な謎がうごめくなか奴らが再び動き出す

～次回～

『驕りと乱入と沈む破壊神』

お楽しみに！！

初陣の紅、墜ちる白　亡霊再び（前書き）

今回からあのシリーズからあの二機が登場します。

そして、次回も・・・・・

とりあえず、本編をどうぞ！！

初陣の紅、墜ちる白　亡霊再び

「作戦開始まであと僅かだ。全員準備しろ」

時刻は十一時半。昨日同様陽の光が砂浜を照らすが、そこには水着で遊ぶ者の姿は見えず代わりに佇む影が六つ確認できる。政志、一夏、箒、アル、龍鳳、ヴィンスであるが、何故セシリアではなく箒がいるのかというと、

『箒ちゃんの紅椿は即時万能対応機の展開装甲（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）だからパッケージなんか無くても超高速機動が出来るんだよ～。ぶいぶい～』

だそうです。なので一夏を福音の元まで運ぶ役をセシリアから箒に交代して、政志とヴィンスが単騎で漆黒と竜王を墜とすことには変わりはないが、龍鳳はアリオスでどの事態にも対応出来るように政志、一夏、箒、ヴィンスの４人と少し離れた地点で待機。アルはケルディムで砂浜からスナイパーライフルでの援護射撃。その他のメンバーは待機となっている。政志は起動しない首に掛けたアルケーを一度掌に乗せて見つめた後、号令をかける。残りの五人はお互い見合ったあと小さく頷き、それぞれのＩＳを展開させる。

「壊（や）るぞ、ユニコーン」

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「狩るぞ、レグナント」

「翔るぞ、アリオス」

「狙うぜ、ケルディム」

6人はＩＳを纏いそれと同時にＰＩＣにより浮遊するが、その中で一夏と箒は初めて見るヴィンスのレグナントに少し驚く。クリスのセラヴィーも巨体の分類に入るがレグナントのそれはセラヴィーを超え目を見張らせる。そして、特徴的な両肩の超大型ＧＮソードと両腕のクローが目を見張はらせ、機体色の紫が禍々しさに拍車を掛けている。

「箒。お前はこれが初陣となるが、一夏を頼むぞ」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦の性質上、一夏を運ぶことに関しては全て箒に任せることになる。しかし、いつもより声に喜色が見える箒にその他のメンバーは少し不安を覚えていた。

「いいか、箒。これは訓練じゃない。十分注意をして取り組――」

「むろん、分かっているさ。ふふっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「・・・なんだか楽しそうだな？やっと専用機を持てたからか？」

「えっ・・・？私はいつも通りだ。一夏こそ作戦には冷静にあたることだ」

「分かってるよ・・・・」

「「「「「・・・・・」」」」」

一夏と箒の会話を聞いて少し眉をよせる政志、アル、龍鳳、ヴィンス。今の箒は気分が高揚しており、これから戦いに赴く者の態度では無い。何を言っても無駄だと感じた政志は箒以外のメンバーにチャンネルを開く。

【一夏。どうやら箒は浮かれてるようだ。お前がサポートしてやれ。龍鳳は一夏と箒寄りの地点で待機。アルは俺とヴィンセントのことはいいから二人を重点的に援護しろ】

【【【了解】】】

【ヴィンセントもそれでいいな?】

【あぁ、俺は全然構わねぇっすよ】

【でも、いいのか?そんなことをしたら、もし政志とヴィンセントに何かあった時――】

【俺と兄貴は軍人だ。一般人のお前達に下手に怪我されたくねぇんだよ】

「行くぞ、作戦開始だ!」

政志の合図と共に政志、一夏、箒、龍鳳、ヴィンスの五人が飛翔した。箒は一夏を背に乗せて、政志、龍鳳、ヴィンスは自力で目標高度の五百メートルにまで一気に到達し、それぞれが目指す空域に向

けて高速で移動し始める。

「行ったか・・・・。さてと、俺もやりますかね？」

５人が見えなくなったぐらいでアルはスナイパーライフルを手に持って構える。その銃口が向けられたのは不安の種である一夏と箒が向かって行った方向だった。

◇

「（漆黒のやつ、動きを止めてやがる・・・・。一体何が目的だ？）」

皆と分かれた後、暫時衛生から漆黒の位置情報を見ると止まっているので政志は不思議に思う。先ほどまで超音速飛行を続けていたのに政志が動き出した途端に止まったのだ。

【政志、ちょっといい？】

プライベート・チャンネルからななせの声が聞こえたのでそちらに耳を傾ける。

「あぁ、どうした？」

【やっぱり政志じゃなくてあたしが漆黒の相手をした方が良かった

んじゃない?今の政志にはアルケーが無いんだから・・・・】

「ったく、そんなことか・・・・。安心しろ、ＩＳ－Ｄですぐにケリを着ける。それに、得体の知れない相手に女を行かせるのは俺の性分が許さねぇんでな」

【はぁ・・・分かった。無理だけはしないでね?】

「当たり前だ。俺が墜ちるとでも?」

【ふふっ、そうだね。じゃあそろそろ目標と接触するから切るね】

「分かった」

チャンネルを切った後、黒い竜人の様な機体が空中に停滞しているのが見えた。その姿を見て政志は思った。『どこのデジタルな世界のモンスターだよ・・・・』と。しかし、初めて見るＤＧの究極体からは並々ならぬ気配を感じて政志の顔が強者を見つけた時の獰猛なものになる。ある程度の距離を置いて政志は漆黒と同じ視線で静止する。無言のまま睨み合っていると漆黒から機械とは思えない人間の男の声が聞こえる。

「お前が破壊神、鈴木政志か?」

「・・・あぁ、俺が鈴木政志だ。よく知ってるじゃねぇか」

ＡＩを積んでいるのは知ってはいたが、まさか言葉を発するとは思っていなかったので少し驚き返答に僅かな空白ができた。

「お前が世界で最も強いことは知っている。俺は、そんなお前と戦

うためにここへ来た」

「世界最強ねぇ・・・・。そのためにわざわざこんなとこまで来たのか？」

「そうだ。最強であるお前と戦えば俺の存在する意味が理解出来る。そう思って俺はここまで来たんだ。だから・・・・俺と戦え、鈴木政志！」

漆黒は鉤爪ドラモンキラーを政志に向ける。自分と戦う理由を聞いた政志は小刻みに肩を震わせ始め、漆黒は不思議そうに黄色い瞳で見ていると、突然政志が声を上げて笑い出した。

「アハハハハハッ！いいぜ、上等だぁ！俺もテメェみたいな強ぇやつと戦いたかったとこなんでなぁ！！」

【ＩＳ－Ｄ　発動】

歓喜の声を上げながら、ユニコーンは各部の装甲が展開され赤く発行しデストロイモードとなる。背部に展開された二本のビームサーベルを両手で抜き取り力強く握りしめ、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を発動させ、漆黒に向けて突っ込んだ。

「ユニコーン。鈴木政志、目標を駆逐する！」

◇

一番最初に政志が離れていき、その数秒後にヴィンスも離れていった。超音速飛行をしているため、すぐにヴィンスの姿もすぐに黒い

点になる。

「暫時衛星リンク確立・・・・情報照合完了。目標の現在位置を確認。・・・・一夏、一気に行くぞ！」

「あぁ！」

一夏が雪片の柄を握る手の力を強めると、暫時衛星から目標の情報を照合させた箒が紅椿を加速させる。加速と同時に展開された脚部と背部装甲は展開装甲の名に相応しく、箒は更に加速して遂に二人のハイパーセンサーが目標の姿を捕捉した。そのＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』はその名に相応しく全身の装甲が銀に輝いており、日光のせいで更に輝きを増していた。何よりも異質なのは、頭部から生えた一対の巨大な翼。それは大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムらしい。

「加速するぞ！目標との接触は十秒後だ！一夏、集中しろ！」

「分かってる！」

箒の声が聞こえた時点で、一夏は意識を握った雪片と、目の前を飛翔している福音に集中させていた。零落白夜を発動させ、雪片は輝きを増していく。福音と二人の距離は見る間に縮まる。

「うおおおっ！！」

福音が攻撃範囲内に入った瞬間、一夏は瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使用して、福音に向けて突っ込んだ。雪片の輝く刃が福音に触れた、と一夏が確信した刹那、福音は最高速度のまま体勢を反転、後退する形で二人と相対する。突然、福音が反転したことに一夏は面食らうが、引くに

は遅すぎるのでそのまま福音へと突撃した。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘（シルバー・ベル）》、稼働開始」

機械音声がオープン・チャネルで聞こえると、福音は身体を一回転させて一夏が振るう雪片をヒラリと避ける。一夏は再びも雪片を振るが、全てを紙一重で避けられ、零落白夜発動限界が迫っていることに焦りを覚えて大振りの一撃を出してしまが、その隙を逃すほど、福音は優しくはない。頭部から生えた大型スラスター、それの装甲の一部が開き、そこから砲口が覗く。

「「！！」」

「Ｌａ・・・♪」

甲高いマシンボイスを放ち、攻撃を繰り出そうとする。しかし、桃色の粒子ビームの飛来により、それを回避するため福音は攻撃を中断する。

「この方角は・・・・」

一夏と箒がビームの飛んできた方向を見ているとプライベート・チャンネルから平然とした声が放たれた。

【おいおい手間掛けさせんなよな】

「「アル（アーノルド）！」」

【俺が援護するから、お前達はさっさと福音を墜とせ】

◇

「そろそろか・・・・」

目標の予測通過ポイントでヴィンスは宙に浮いたまま待っていた。そこは高度五百の高所、数秒後にそこでヴィンスは『千年竜王（キングギドラ）』と接触する筈だ。すると、センサーで超音速で向かってくる黄金に輝く機影を補足した。ヴィンスのレグナントと同じぐらいの巨体に背部には羽のような大型のスラスター、両肩には竜の頭を模した砲門が装備されている。常時展開されているという球体のエネルギーシールドが視認できた。情報通りの姿であることを確認したヴィンスは胸部の装甲をスライドさせ大型ＧＮキャノンの砲身の発射態勢に入る。

「一発デカいの食らわせてやるぜっ！」

深紅の粒子ビームが竜王に向けて発射させるが、竜王は避けようともせずそのまま直進する。ビームは竜王のシールドに弾かれ、海に逸れて大きな水飛沫を上げる。攻撃を受け停止した竜王は両肩の竜頭を開かせてそこから稲妻のような引力光線を吐かせ、ヴィンスに向かうが、

「なかなかの防御力じゃねぇかよ。でもなぁ・・・・」

ヴィンスは全身を覆うほどのＧＮフィールドを展開させてそれを防ぎ、それた引力光線は先ほどと同じように海に逸れて大きな水飛沫を上げる。

「俺のレグナントのＧＮフィールドは、全機体の中でも最高クラスだ！行け、ファングッ！」

雄叫びと共に両腕のファング十基を全て射出させる。十基のファングは竜王の周りに展開されビームによるオールレンジ攻撃を行うが、シールドにより反射される。ヴィンスは右肩の超大型ＧＮソードを竜王に向けてラグビーの選手の如く瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用して突進する。シールドとソードがぶつかり合い火花を散らせ、徐々にシールドにヒビが入っていく。

「うおおおおおっ！！」

雄叫びと共にブースターの力を強めていき、ヒビがシールド全体に広がっていきガラスの如く割れた。そのままをソードを本体に突き刺そうとしたが、竜王の両の手でソードを捕まれ阻まれる。

「ちぃっ・・・」

口の中で小さく悪態を吐いていると竜王の図太い脚から蹴りがヴィンスの胸部目掛けて放たれるが、瞬時に両手を胸の前でクロスすることで防ぐ。ヴィンスは高速で後退しながら両腕部のＧＮミサイルを数発撃って牽制する。しかし、新たに形成されたシールドのせいで本体に命中することはなかった。

「（こいつは長期戦になりそうだな・・・・。思ってたよりも厄介な相手だぜ。）」

ファングを全て帰還させ竜王を睨み合いながら模索しているとオープン・チャンネルからアルの焦り気の混じった声が聞こえてきた。

【一夏が福音に墜とされた！作戦は一旦中止、全員撤退だっ！！】

「あのバカがっ！何やってんだよ！？」

報告を聞いた瞬間、ヴィンスは苦い顔しながらミサイルを再び発射し弾幕を張りながら竜王から離れて、撤退しようとしたとき、真上からヴィンス目掛けて緑色のビームが振ってきた。とっさに展開したＧＮフィールドで何とか防げたもののヴィンスはビームが飛んできた真上の方を目を細めて見つめる。そこには蒼い翼に純白の体躯のＩＳがヴィンスを見下ろしており、右手には先ほど放ったであろうビームライフルが握られている。

「（ガンダムタイプ・・・・！）お前、何者だ！」

機体のパイロットの顔はバイザー型ハイパーセンサーに覆われて口元しか出ていないが、嘲笑の形を取っているのが分かる。

「私は『Ｍ（エム）』。悪いが少し相手をしてもらうぞ。私と、この『フリーダム』の」

◇

アルの援護もあり二人は福音に攻撃をしかけるがなかなか当たらず、一夏のシールドエネルギーが限界に近づいてきた。

「La・・・♪」

再び甲高いマシンボイスが響き、大型スラスターから光弾を放とうとするが、そこにアルがビームを撃ち込むものの、さすがに学習したのか今度はビームをかわしながら全方位へと一斉射撃を始めた。

「くそっ・・・だが、押し切る！！」

迫り来る無数の光弾の雨をかわしながら、箒は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用して迫撃をかける。そして・・・福音に隙が出来た。

「一夏！」

「うおおおっ！！！」

一夏は咆哮を上げて突っ込んでいく。福音へではなく、直下海面へと。瞬間加速（イグニッション・ブースト）と零落白夜を同時に発動させて、この海域にはいないはずの船へと向かっていた光弾を切り裂く。

「何をしている！？　折角のチャンスを・・・！」

「船がいるんだ！　この海域は先生達が封鎖してる筈なのに・・・・！」

「くっ、密漁船か・・・・！！」

悔しげに歯噛みすると、一夏の手の中で輝いていた雪片から急速に光が失われていき捌き切れなかった光弾が船へと向かうがアルの狙撃によってかき消される。ほっ胸を撫で下ろすものの、今の一夏はエネルギー切れ、つまり福音を墜とすチャンスを失い、作戦の要も無くしたと言う事だ。

「馬鹿者！　犯罪者など庇ってどうする！　そんな連中放って――」

「箒！！」

怒鳴っていたところを逆に怒鳴り返され、箒は身体を竦ませる。

「何馬鹿なこといってるんだよ！　力を手にしたら、弱い人のことが見えなくなるなんて・・・・らしくない、全然お前らしくないぞ箒・・・・」

「わ、私は・・・・」

動揺を隠しきれず、箒は手で顔を覆う。その時、福音は一斉射撃状態へと入っていた。しかも、照準してるのは他でもない・・・・箒。

「箒ぃぃぃぃっっっ！！！！！」

雪片を投げ捨て、一夏は全てのエネルギーを使って、箒へと瞬間加速（イグニッション・ブースト）した。

（頼む！　白式！　頼む！！）

スローモーションになった視界の端で福音から光弾が放たれ、次の瞬間、一夏は箒と福音の間に割り込んで、箒を護るように両腕を広げる。刹那に響く何十発もの爆裂音。箒の視界を黒煙が埋め尽くした。

「い、一夏？」

恐る恐る箒が声をかけると黒煙は晴れていき、装甲をずたずたにされた一夏が姿を現した。装甲を失った部分の肌は焼かれ、血が流れ出ている。ぎこちない動作で振り向くと、一夏は箒の無傷を確認して満足そうに笑った。そして、目を虚ろにさせてゆっくりと落下を始める。

◇

「今のところ箒は大丈夫そうだけど、イッチーの方が危なっかしくて見てらんねぇぞ」

砂浜ではアルが片膝を着いてスナイパーライフルのスコープを介して一夏と箒の戦闘を見ていた。先ほどから福音が攻撃しようとする度に威嚇射撃を行っているのだが、焦りからか一夏の動きがあまり良くない。おそらく零落白夜のシールドエネルギーを大幅に消費する性質から早期決着を狙っているのだろう。しかし、それが仇となり隙が生まれだしている。そこは箒とアルがカバーしているものの政志の勘は良く当たるため箒がいつしくじるかわたったもんじゃない。そして遂にアルの射撃パターンが読まれたのか、福音は回避行動をとりながら大型スラスターから全方位へと一斉射撃を開始した。

「さすがにパターンが読まれたか。・・・・おっ。箒の奴なかなかやるじゃねぇか」

スコープには初陣にしては良い動きをする箒の姿が映り、福音の光弾を避けながら迫撃をかけていたのだが、

「あぁ？イッチーのやつ何やってんだよ・・・・・ってそういうことかよ」

隙が出来たのに福音の元へ行かなかった一夏の行動を理解したアルは、一夏が捌ききれなかった光弾を撃ち落とした。しかしその後、一夏と箒が何やら揉め合ったようで、福音が隙だらけの箒に一斉射撃を行おうとしていた。慌ててアルが援護射撃をしようとした瞬間、福音が自分とアルの斜線軸上に箒が入るように移動した。

「あの野郎、余計なことをっ・・・・！これじゃあ箒に当たっちまうだろうがっ！！」

放たれた光弾と箒の間に一夏が割り込んで両腕を広げて箒に被弾するのを防ぐ。何十発もの光弾が直撃し黒煙が晴れると同時に一夏がゆっくりと落下し始めた。それを見たアルは歯を食いしばらせた後に政志、龍鳳、ヴィンスにチャンネルを開く。

「一夏が福音に墜とされた！作戦は一旦中止、全員撤退だっ！！」

アルはそのまま福音に銃口を向けていると、さっきまで静かだった砂浜がさらに静かすに寒気を感じた。直感でスナイパーライフルを身体ごと真横に向けると灰色の機体が大型のビームライフルをアルに向けていた。

「へぇ～。気配消してたつもりなのによく気付いたじゃない。さすがは深緑の狙撃手といったところかな？」

緊張感の無い若い女の声がバイザーで隠れていない口から発せられる。その女が纏っているＩＳは背中に大型スラスターが装備していて、大型スラスターには十一個のビットが装備されている。今までの敵とは比べものにならないことを瞬時に感じ取り苦い顔になる。

「そんなに警戒しなくていいよ。じっとしてくれてたらアンタにも『島』にも攻撃しないから」

この一言で反撃しようにも出来ない状況になった。島への攻撃、それはつまり学園の一般生徒を人質にとられているのと同じである。額に冷や汗を一筋流し、一瞬の隙を見逃さないように全神経を集中させる。

「・・・・一体何が目的だ?」

「目的だなんて、大それたものじゃないよ。ただ、ガンダムとそのパイロットを見に来ただけ。これはホントだから安心して」

「じゃあ一つ聞く。・・・・テメェは誰だ?」

「ウチ?ウチは『プロヴィデンス』のパイロットの『K(ケー)』だよ。よろしく♪ってん?通信が入ったからちょっと待ってね」

Kは誰かとの通信をし始めるがビームライフルを向けたままでアルはそのまま黙って待っていた。数秒後通信を終えたのかKは溜息を吐きながらビームライフルを下ろした。

「ごめん。ちょっと予定が変わったから帰るね」

「俺が簡単に逃がすと思って――――」

「アンタはここでのんびりしてていいの?さっきウチの仲間が」

「破壊神を墜としたって」

初陣の紅、墜ちる白　亡霊再び（後書き）

政志が墜ちた？

新たな強敵の実力とは？

残りのメンバーはどう動く？

様々な謎がうごめくなか黒い堕天使が暴れ出す

～次回～

『衝撃と後悔とガイアフォース』

お楽しみに！！

衝撃と自由と正義と天帝（前書き）

フリーダムとプロヴィデンス出しちゃったね

今回は同作品からあの二機も！！

では、本編をどうぞ！！

衝撃と自由と正義と天帝

「（一夏と箒のやつ、まだ福音墜とせてないんか？）」

とある空域で待機していた龍鳳は一夏と箒から予定時刻を過ぎても福音を墜としたという報告が入ってこずにいたため少し不安がっていたところにアルからの通信が入った。

【一夏が福音に墜とされた！作戦は一旦中止、全員撤退だっ！！】

「はぁ！？ホンマっ、しゃあない奴やであのアホはっ！！」

報告を聞いた瞬間、龍鳳は一夏と箒の元へ超音速飛行を開始しようとしたが、目の前を背部にフライトユニットを装備した赤い機体を纏った少女が立ちふさがっていた。直ぐさま敵機と判断した龍鳳はサーベルを握りしめ、いつでも斬りかかれるように構える。

「お前・・・何者や？」

「・・・この子は『ジャスティス』」

この子とはおそらく少女が纏っている機体のことなのだろうと龍鳳は理解するが、聞きたいのはそんなことじゃない。

「いや、俺が聞いとるんはお前のことなんやけど？」

「・・・『R（アール）』」

「で、そのRさんは俺に何のようや？」

敵の目的を知ることは重要だが、簡単に答えるとは思ってはいないが一応聞いてたらRは頭を横に振って否定のサインを出した。

「・・・ただ、散歩してただけ」

・・・・・・。

予想の遙か斜め上を行く答えが返ってきて一瞬『からかってるだけなのでは?』と疑い、口元以外バイザーで隠れており表情が読めなかったが、声色からして嘘を言っているようにも見えなかった。

「ええと・・・ほなら何で俺に近寄ってきたんや?」

「・・・こんにちは」

・・・・・・。

「・・・こ、こんにちは」

またもは訳の分からない答えが返ってきて龍鳳は困惑するが礼儀として挨拶を返した。敵意が無く、今までの発言からして『散歩をしていて偶然人を見かけたので挨拶をしにきただけなのでは?』と考え、まさかと思って聞いてみた。

「もしかして、それ言いに来ただけ・・・・?」

「・・・・(コクリ)」

肯定の意味の頷きを見せて、龍鳳に何とも言えないやるせなさが襲

う。他にも色々聞き出せそうだったので聞こうとしたら、

「・・・・早く、急いだ方が良い」

Rは一夏達がいる方に指を差す。当初の目的を思い出した龍鳳は舌打ちをしながらRのことを放置して超音速飛行を始める。

「（何やねんアイツは!?無駄に時間を消費してもたやないか!くそっ、こうなったら・・・・）トランザムッ!!」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

一秒でも早く二人の元へと向かうために龍鳳はトランザムを発動させる。赤く輝くアリオスは超音速飛行を超えるスピードで空を駆け抜ける。トランザムを使用して数秒後にセンサーで一夏を抱えている箒に光弾を放つ福音の姿を確認できた。

「（間に合えっ!間に合えや、アリオスっ!!）」

更に加速して限界ギリギリのスピードに機体が軋む音がするが、そんなのに構わず龍鳳は飛行を続ける。光弾が二人の目の前まで迫っていて、箒は一夏を庇うように背を向け目を閉じるが、その瞬間赤い閃光と共に二人が消えた。

「危なかったで、マジで・・・・!おいっ!一夏、箒しっかりしろ!・・・・くそが!!」

何とか光弾が直撃する前に二人を救出することが出来たが両脇に抱えた二人からは返事がしない。箒はただ気絶しているようだったが、一夏は重傷で装甲を失った部分からは血が流れ出ていた。一刻も早

く治療をさせるために龍鳳は島に帰還しようとするが、福音も逃がすまいと龍鳳の背後から光弾を発射する。しかし、今のアリオスのスピードは光弾よりも早いため被弾するはずがない。追っても無駄だと察した福音は点になった龍鳳を見据えるのだった。

◇

時は少し遡る。

「うおおおおお！！」

「はあああああ！！」

ユニコーンのビームサーベルと漆黒のドラモンキラーがぶつかり合

う度に火花が散り大気が揺れる。埒があかないと感じた政志は一旦距離を置いて右手にビームマグナムを展開する。高速で動き回る漆黒に狙いを定めトリガーを引き、轟音を立てながらビームは漆黒に向かうが背中のブレイブシールドを両手で組み合わせて正六角形の盾にしそれでビームを防ぐ。ビームライフル四発分の威力があるビームマグナムをいとも簡単に防がれるが、元々当てにしてなかったように政志はすぐにビームマグナムからビームサーベルに持ち直す。

「ブラックトルネード！！」

漆黒は両の手のドラモンキラーを頭の上で合わせて竜巻のように高速回転して真上から政志に襲いかかる。政志はとっさに頭の上にビームサーベルをX字に構える。ブラックトルネードとサーベルの接触部分に尋常ではない程の火花が迸り、だんだんと政志が押されていく。

「そんなものでは俺は止められはしない！！」

回転する速度をさらに上げて、政志はそれに対抗しようとサーベルを握る力を強めていたが、強すぎる衝撃にサーベルの柄の部分が耐えきれずヒビが入り、そして遂に砕けた。

「ちぃっ！！」

ブラックトルネードを受け止めるものが無くなり、直撃を避けようととっさに体を逸らすが、胸部の装甲が抉られてしまった。回転しながらUターンした漆黒は今度は真下から政志に向かってくる。超音速で迫ってくる攻撃に対して体を捻って避けようとするが漆黒はブラックトルネードの軌道を僅かにずらして政志の顔に目掛けて突き進む。政志はとっさに右手にシールドを手に取り、顔の前で構え

るが、接触した瞬間、シールドが粉々に砕ける。しかし、僅かばかりの時間が出来て頭を少しそらすが完全には避けきれず頭部の左側を少しかすめてしまう。

「くそが・・・・！！」

頭から流れ出る血で左目がまともに開けれず、余計に状況が悪化する。政志の斜め上あたりで回転を止めた漆黒は両の手の間に小さな赤いエネルギー弾が形成され、そのまま両手を右脇下に振りかぶる。

「ガイアフォース！」

両の手を振り抜くと、その間にあった赤いエネルギー弾が発射され政志に向かう。後退されることによって避けられたエネルギー弾は海へ直撃し赤いエネルギーが小さなドーム状に広がり、その威力の高さに政志は呆れる。振り返ると漆黒はすでに次のエネルギー弾を用意してあり、いつでも放てるようにしていた。

「「・・・・」」

両者は無言で睨み合った。時間にして数秒ほどの空白の後、二人同時に動き出す。政志は高速で漆黒に突っ込みながら両腕に装備されてあるビームサーベルを展開する。対して、漆黒は両腕を振りかぶりながら用意していたエネルギー弾を更に巨大化させる。

「ガイア・・・・フォース！！」

巨大なエネルギー弾が放たれると同時に政志は左腕を前に突き出す。エネルギー弾とサーベルの先端が触れ合うと拮抗することなくサーベルは飲み込まれていきエネルギー弾が大きく爆ぜた。黒煙が辺り

を覆い漆黒はさきほど政志がいた場所を冷たい目で見る。

「破壊神といっても所詮は人間か・・・・何っ!?」

センサーに生体反応を示し黒煙の中から瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用した政志が猛スピードで突っ込んで来る。その姿は無傷とはほど遠く、左上半身の装甲は失われ火傷を負った肉体が露わになり、左腕に至っては皮膚が焼ただれていた。

「うおおおおお!!」

右腕を真上に振りかぶり漆黒に斬りかかろうとする。対応が遅れた漆黒はドラモンキラーで防ごうと頭上で構えた刹那、破壊神が笑った。

「こいつで・・・・!!」

右足でドラモンキラーを下から蹴り上げ、漆黒を守る物が無くなりそのまま政志は右腕を振り下ろす。

「終わりだあああああ!!」

「すみませんが、あなたにはここで墜ちてもらいます」

冷たい女の声が聞こえた瞬間、右脇腹が急激に熱くなるのを感じて右腕のサーベルは漆黒の頭上で止めてしまった。政志は自分の腹部を見ると右脇腹からビームサーベルが生えている。漆黒は何が起きているのか理解できず固まっており、政志は咳と共に口から血を吐く。視界が掠れるなか政志は横目で自分の背後を見ると、そこには白と青を主体とした装甲に背部には赤い6枚の翼を備えたスラスターがいくつか付いている。表情はバイザーで隠れて分からない。女がサーベルを抜くと刺されていた所から血が溢れ、政志は重力にしたがい海に落下し始める。

「私は『インパルス』のパイロットの『A（エース）』。またいずれ何処かで・・・・」

意識を手放す前にそれだけを最後に聞き取り、政志は背中に強烈な

衝撃を感じて、冷たい海の中へと水没していった。それを見ていた漆黒はふつふつと怒りが沸き上がりAを睨む。

「貴様っ・・・・！どうして勝負の邪魔をしたぁ！？」

右手のドラモンキラーでAを突き刺そうとするが、いきなり現れた赤い機体の繰り出す蹴りを胸部に食らい漆黒は後に吹き飛ばされる。その様子を見ていたAは溜息をつく。

「R。余計な手出しは無用です」

「・・・・（コクリ）」

「まあ、そこがあなたのいいところなんですけど・・・・」

Rは無言のまま頷き、AがRの隣に移動して頭を撫でる。そのまま二人でその場を後にしようとするが、漆黒が逃がすはずも無く、巨大なガイアフォースを放とうとする。

「逃がすと、思っているのか？」

「・・・・M、K。お願いします」

後を向いたままAがそう言うと、何かを感じた漆黒はガイアフォースを撃つのをやめて急上昇する。すると漆黒のいた場所に緑色のビームが全方向から計27本発射されており、そのビームを放ったであろう円錐状の大型の自立兵器『ドラグーン』三基はプロヴィデンスの大型スラスターに戻っていく。

「あれを避けるなんて、さすがはDGの究極体といったところかな

？」

Kはそのまま右手に持ったビームライフルで漆黒を狙うが、漆黒は小型のガイアフォースをK目掛けて投げる。しかし、ガイアフォースは五つの閃光によってかき消される。

「助かったよM。サンキュー♪」

「思ってもいないことを言うな」

Kが手をブンブン振る先には、翼に高出力ビーム砲を収納して、腰部のレールガンをマウントしているMがいた。４対１という状況になっても漆黒は怯むようすをみせようとせず新たな攻撃を繰り出そうとした時、Aがあることを漆黒に伝えた。すると、漆黒は動きを止めて、４人を睨み付ける。

「・・・それは本当なのだろうな？」

「私があなたに嘘を言っても何のメリットも無いのが証拠です。では、失礼します」

そう言ってはAは背部のユニットのブースターから火を逆せその場を去っていき、その後をM、K、Rがついて行った。

「・・・・・」

静になった空域で漆黒は無言のまま政志が墜落した海面を見据える。その瞳には何が映っているのかは誰にも分からない・・・・・。

◇

「・・・・」

旅館の一室。そこには夕日の光が差し込み部屋を茜色に染め上げている。布団に横たわっている一夏の腕には点滴の管が繋がれいて三時間も目を覚ましていない。その少年の側に正座している箒はもうずっと前から項垂れ続けていた。髪を結んでいたリボンは龍鳳が彼女を脇に抱えた時に外れ、箒の顔を覆い隠すように垂れ下がっている。そして、箒が目を覚ますとさらに悪いアルから報告が入った。

『政志が未確認の敵に墜とされた』

この報告を聞いた瞬間ななせは崩れ落ちて意識を失い今は別の部屋で横になっている。他のメンバーも最初は信じられなかったようだ

が、ユニコーンの反応が完全にロストしている。千冬が指揮する捜索班が反応がロストした海域を中心に捜索しようとしたが、丁度その空域に漆黒が停滞しているために近づけないのだ。アル達が接触した未確認の敵は最低でも４機。僅かだが実際に戦ったヴィンス曰く、今までの敵とは比べ物にならないらしい。四機の内の一機と接触したアルもそう語っている。その四機もまだ近くにいる可能性があるため、正直言って状況は最高に最悪だ。

「私の・・・・所為だ・・・・・」

強く握りしめた拳の上に目から零れ出る熱い涙が落ちる。悔やんでも悔やんでも悔やみきれない。自分の所為で、力の強さを見誤った所為で愛する人を傷づけてしまったのだ。彼女が背負っている後悔は大きすぎる。更に拳を強く握り締めたその時、扉が開けられ龍鳳が部屋の中に入ってきた。

「一夏・・・・まだ目を覚まさへんのか？」

未だに目を覚まさない親友に視線はいつもの龍鳳からは考えられないほど悲しみを含んでいた。箒は黙ったまま小さく頷く。

「すまん。・・・・俺らが不甲斐ないせぇで」

「・・・・そんなことはないさ。お前が来てくれなかったら私と一夏は・・・・・」

ふっと鼻で自虐的に笑った龍鳳は入ってきた扉に向かって歩き出す。

「俺がいうのも何やけど。今のお前を一夏が見たら・・・・どう思うだろうな？」

ほななと手を振りながら部屋を後にする。先ほどの龍鳳の言葉が頭から離れず箒は歯を食いしばり、自分が情けなくなる。

「今の私に・・・何が出来るというのだ・・・・？」

答える相手がいない質問が部屋に響き、部屋が再び悲しみに包まれる。

◇

「政志・・・・」

夕日が砂浜と海面を一色に染め上げている。砂浜にはラウラ一人し

かいなくて、冷たい風が彼女の銀髪を靡かせる。

『政志が墜ちた』

このことはななせ同様彼女にも正気を保てないほどの衝撃を与えた。
しかし、皆に心配を掛けまいと零れ落ちそうになる涙をなんとか堪え皆の前では平然を装っていた。実はラウラは政志が墜ちたという報告が
入り千冬が自室待機を命じてからずっと砂浜にいる。政志の反応をロストしたであろうポイントの方角を見ては政志の名前を呟く。さっきからこれのくり返しである。

「（約束したのに・・・・）」

【私はいつかお前を超えてみせる・・・絶対に】

【いいぜ。破壊の神を超えれるものなら超えてみろ】

学年別トーナメントがあったあの日の夜に交わしたあの約束を思い出す。指切りに使った右手の小指を見つめていると懐かしくなる。
そんな風に干渉に浸っていると政志の声が後から聞こえた。

「俺がそんな簡単に死ぬわけねぇだろ？」

バッと振り返るが後にも誰おらず、気のせいかと思い再び海を見つめだした。

「（そうだな。お前が誰かも分からないようなやつに墜とされるはずがない）」

さきほど聞こえた言葉の意味をゆっくり頭の中で噛み締めていると今までこうしていたのが馬鹿馬鹿しくなった。自嘲気味に笑い旅館に戻ろうとすると俯いたまま砂浜を歩く箒の姿が見えた。さっきまで自分を見ているようでラウラはそのまま放っておくことが出来ず箒に話しかける。

「お前はまだ落ち込んでいるのか？そんなことをしても一夏は目を覚まさないぞ」

声が聞こえそちらを向くとケロっとしたラウラが見えて箒は一瞬戸惑う。どうしてお前は大切な人が墜とされたというのにそんな表情でいられるのかと。そんなことでも考えているのだろうとラウラは感じ取り溜息を付く。

「あんたまだ悲劇のヒロインでいるつもり？　馬鹿じゃないの？」

声のする方を見ると鈴とシャルとセシリアがいて箒が鈴音を睨むが、そんな物は何処吹く風と言った感じで受け流して、鈴音はラウラを見た。

「あんたは立ち直ったようね。偉い偉い」

「バカにするな。私を誰だと思っている？」

「おーおー楽しそうなことしてんじゃねぇか？」

緊張感のないいつもの馬鹿まるだしのあの男の声が聞こえそちらを見るとアルと龍鳳とクリスとヴィンスがいた。

「行くんでしょ？ならボク達も誘ってよね」

「せやせや。俺ら仲間やろ?抜け駆けとか寂しいことすなや」

「そうと決まればさっさと行こうぜ。俺は今すぐにでもアイツらをボコボコにしてぇんだから」

「そうは言いましても、作戦は・・・・」

作戦という言葉が出ると一同が忘れてた的な顔になり、お互いの顔を見合っていると、政志が墜ちたという報告を聞いて倒れた彼女がきた。

「作戦内容は福音と竜王と漆黒を速攻で叩きのめして政志を回収する。至って簡単でしょ?」

「ななせ、お前・・・・。まあ、ええやろ。今の俺たちにはぴったりの作戦やな」

いつものななせからは考えられないような雑な作戦内容に全員が呆れた笑みを浮かべる。

「三機の位置はあたしがさっき調べてみんなの機体に位置情報を送っておいたよ。どうやら三機とも動きを止めてて福音と竜王はほぼ同位置にいるみたい」

「なるほどね。セシリアちゃん、シャルるん、ラウラちゃん、鈴々の強化パッケージのインストールはどれ位で終わる?」

「何時でも大丈夫ですわ」

「僕もいつでもいけるよ」

「そんなものとっくの昔に終えている」

「あたしも準備ＯＫよ」

４人の返事にクリスはそっか、と返し、最後に全員が箒を見る。

「あとは箒だけだよ？」

「わ、私は・・・・」

頭に包帯が巻かれた一夏の姿が浮かび上がり不安になる。出来ることなら箒だって一夏の仇を取りたいのだ。しかし・・・・

「もう・・・ＩＳは使わな――」

パシンッ

乾いた音が砂浜に響く。ななせが箒の頬をぶったのだ。まさかななせにぶたれると思っていなかった箒は少し怯えながらもななせの顔を見ると呆れを超えて怒りになっていた。そして、砂浜に倒れこんだ箒の胸倉を掴んだ。

「いい加減にしなさいよ。悔しくて、苦しいのは箒だけじゃないんだから。あたしだって政志が墜ちたって聞いたときは・・・潰されそうになった。でもそれは、そう思うことは、政志を信じてないってことになるの！だからあたしは今ここにいる！福音も竜王も漆黒も、未確認の敵も全部倒す！！」

ゆっくりと胸倉から手を放したななせはいつもの優しい表情に戻り箒に手を差し伸べる。

「箒はどうしたいの？このままじゃ、嫌だよね？」

箒の目が大きく見開かれ、ななせの手を取り立ち上がった。そして、その瞳にある物が浮かぶ。決意という名の、並みならぬ覚悟が。

「私は・・・・戦う。戦って勝つ！今度こそは負けはしない！！」

「分かった。それじゃあ真面目に作戦会議でもしようか？」

「結局作戦今から考えるのかよ・・・・・」

「べ、別にいいでしょ！もう・・・・」

ぷいっと拗ねるななせを見て笑いが起きる。そして笑いが収まったぐらいで作戦会議が始まった。敵に勝つための、みんなで無事に帰るための作戦を立てるために・・・・。

◇

「ったく。何処なんだよここは・・・・」

政志は気が付いたら白い砂浜にいて取り敢えずと歩き出した。心地よい潮風が吹くもののどうしたらいいか分からず溜息を付いていると、見覚えのある男の姿が見えた。

「「あっ」」

その男、一夏と目が合い声が重なる。

「政志?何でこんな所に?」

「俺が聞きてぇよ。お前こそ何でいるんだよ？」

「さぁ？　気が付いたらここにいたんだよなぁ・・・。何処だここ？」

「知るかよ・・・あぁ？」

二人して頭を掻きながら周囲を見回していると、歌声が聞こえてきた。

「～。～♪　～♪」

とても綺麗で、とても元気がいい、とても透き通った歌声。その歌声が妙に気になり、二人は歌声が聞こえる方へと目を向ける。

「ラ、ラ～♪ララ♪」

そこには歌を踊るように歌う少女がいた。波打ち際で爪先を濡らしながら、白い髪を輝かせて、本当に楽しそうに歌っている。一夏は近くにあった流木へと座り、政志はその場に腰を下ろした。何故か、その少女に声をかけようとは思わず、二人は無言でその歌を聴き続けた。

◇

海上二百メートル。そこで静止していた『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』と『千年竜王（キングギドラ）』はまるで胎児のようにうずくまっていた。不意に二機が顔を上げ少し上昇すると、二機がいた場所に禍々しい光が通っていった。

「・・・・外したか」

そこにはガチャンとＧＮツインバスターライフルの連結を解除して二挺のＧＮバスターライフルに戻すななせがいた。その隣には龍鳳、クリス、シャル、鈴、セシリア、箒がそれぞれのメインウェポンを構えている。そして、福音と竜王が光弾と引力光線を７人に向かって放つ。

「みんな、行くよっ！」

《了解！》

７人は散開して回避すると同時にななせはファングを射出した。

「ディアボロス。琴吹ななせ・・・・行きます！！」

赤いＧＮ粒子を撒き散らし黒い堕天使は戦場を舞い踊る。その姿は誰もが見とれるほど美しかった・・・・。

衝撃と自由と正義と天帝（後書き）

福音と竜王が第二形態移行？

政志を圧倒した漆黒に勝てるのか？

そして、政志と一夏は何処に？

さまざまな謎がうごめくなか革新を司るあの機体が目覚める

～次回～

『覚醒と進化と大乱闘』

お楽しみに！！

革新する黒い雨（前書き）

アニメとうとう終わっちゃいましたね・・・・

でも思ってたより戦闘シーンが良かったので満足です！！

それでは本編をどうぞ！！

「・・・・・」

漆黒は未だに海を見つめ続けていた。ピクリとも動くことなくただじっとしている。

【直にあなたを滅ぼす者がここに来ます】

不意にＡの言っていたことを思い出した。漆黒は政志（強者）と戦うことが目的でここまで来たのだが今その対象は海の中にいる。しかし、自らを倒せる者がいるとすればその相手も強者であると考えた漆黒はその者が来るのを待っていた。

「（俺を滅ぼす者か・・・・）」

すると何かを感じ取った漆黒はゴミでも払うかのように右手を振るうと砲弾が直撃して大爆発を起こす。センサーで砲弾が飛んできた方角を見ると五キロ離れた場所で黒いＩＳが浮いていた。

「データ照合開始・・・・ドイツの第３世代型ＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』か。話しにならんな」

データを見るなりそう言って漆黒はラウラの元へ飛行する。一方、砲撃パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンを纏うラウラは自分に向かってくる漆黒に砲撃を続けていた。

「（敵接近まであと四千・・・・三千・・・・くっ！予想よりも早

い！）」

あっという間に距離が千メートルを切り、漆黒がラウラへと迫る。砲撃は漆黒に命中するもののスピードを緩めるどころか傷一つ負っていない。

「化け物め・・・・！」

漆黒は三百メートル地点からブラックトルネードを使いさらに加速する。回避行動を取ろうにも今のシュヴァルツェア・レーゲンは砲戦仕様となっているため機動性が低下していて上手くとれない。黒い竜巻がラウラに襲いかかろうとしたとき、ラウラはにやりと口元を歪めた

「ヴィンセントッ！！」

ブラックトルネードの先端がラウラに当たりそうになったとき突然真上から垂直に降りてきた大型の機体により弾かれる。瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用したヴィンスの強襲だ。回転を止めた漆黒はヴィンスにガイアフォースを放とうとするが六基の緑色のビットが周囲に展開されているのに気付く。ビットから放たれたビームを漆黒はドラモンキラーで全て弾くが、真下から熱源を察知し咄嗟に体を後にそらすとビームが体のラインギリギリを通過していった。

「ちぃっ！アレを避けるか・・・・！」

海面すれすれの所でアルは仰向けになってスナイパーライフルを漆黒に向けていた。新装備の六基の『ＧＮライフルビット』を呼び戻しながらミサイルを発射する。それに合わせてヴィンスも両腕からマイクロミサイルを発射する。二人から放たれたミサイルは漆黒を

囲うように進む。その場から離脱しようとsたが、頭に砲弾が当たり大爆発する。煙に包まれた漆黒にミサイルが次々と命中していき何十回も爆発音が一帯に鳴り響く。

「（これで無傷だったら・・・・）」

少しずつ煙が晴れていき、一つの影が露わになる。

「深緑の狙撃手に魔獣・・・お前達はこの程度か？」

完全に煙が晴れるとそこには傷を一つも負っていない漆黒の姿があった。焦りを感じつつもアルはライフルビットとシールドビットを全て射出し全方向からのオールレンジ攻撃を行うが漆黒は避けようともせず全て直撃する。しかし、

「貴様等3人合わせても破壊神にはほど遠いな」

これまた無傷。漆黒がアルに向かって急降下するのを見たヴィンスはマズいと思い胸部からＧＮキャノンを発射する。漆黒はくるりと回転して自分に向かってくる大型のビームと向き合いブレイブシールドで防ぎ、ヴィンスに向かってガイアフォースを放つ。

「ガイアフォース！」

ヴィンスはＧＮフィールドを展開してガイアフォースを受け止めようとするが、余りにも衝撃で体の節々が悲鳴を上げる。何とか防ぎきって安堵につかろうとしたが、信じがたいものを見てしまう。

「ガイア・・・・フォース！」

漆黒は再びガイアフォースを放ってきたのだ。先ほどからアルとラウラが放つのを阻止しようと砲撃や狙撃を行っていたが全く通用せず放たれてしまう。再びＧＮフィールドとガイアフォースがぶつかり合う。

「（粒子残量が・・・・！）」

ＧＮフィールドを展開するには莫大なＧＮ粒子を消耗する。タダでさえ燃費があまり良くないレグナントなのにＧＮフィールドを多用しすぎるとすぐにＧＮ粒子が底をつく。粒子残量が減っていくと同時にＧＮフィールドの強度も落ちていく。あと少しでガイアフォースを防ぎれると思ったところで、ＧＮフィールドを維持するだけのＧＮ粒子が無くなり消滅した。ＧＮフィールドで防いでいたためガイアフォースはある程度威力が弱まっていたがそれでも直撃すればただではすまない。ガイアフォースと装甲がぶつかる直前に九基のシールドビットが割り込んだ。しかし、シールドビットとガイアフォースが触れ合った瞬間大爆発が起きヴィンスは黒煙に包まれた。

「ヴィンセ――――」

「どこを見ている」

アルの目の前に急に漆黒が現れドラモンキラーの付いた右腕を突き出した。反射的にアルはスナイパーライフルの腹で受け止めるが、一秒も足らずで砕け散る。しかし、アルにとっては『一秒』で十分だった。

「トランザム」

不適な笑みを浮かべるとアルの腹部を貫こうとしていたドラモンキ

ラーは空を突いた。漆黒は何が起きたか分からなかったがセンサーでアルがいる方を見ると機体が赤く輝いていた。機体性能が三倍にまで上がったケルディムは超音速飛行をも可能としており残像が一筋の赤い線にも見える。ななせに頼んで追加してもらったビームサーベルを両袖から抜き取り漆黒へと突っ込む。

「そうだ・・・・！そうこなくては、戦い甲斐が無い！！」

歓喜の声を上げながら漆黒は両肩に振り下ろされたビームサーベルを両腕のドラモンキラーで防ぐ。両者は火花を散らせながら鍔迫り合いをする。どちらも一歩も譲らず気配が無くいつまで続くのかと思っていると漆黒がドラモンキラーを引いて後退して、二人の間にビームサイズが振り下ろされた。

「てめぇ・・・・よくも俺のレグナントをよくも！」

ヴィンスはあの黒煙の中で戦闘継続が無理になったレグナントを解除してデスサイズヘルに切り替えたのだ。センサーに反応しないデスサイズヘルなのだが漆黒は気配を感じて後退して避けたらしい。漆黒と睨み合うアルとヴィンスの元へ駆け寄り両腕のプラズマ手刀を展開する。今のシュヴァルツェア・レーゲンはパッケージを解除して普段の姿になっている。砲弾を当てても効かないなら近接戦闘をしかけるしかないと考えたのだ。

「俺を倒したければ死にものぐるいで来るんだなぁ！！」

漆黒はガイアフォースを放つ体勢に入り、アル、ヴィンス、ラウラの3人は一丸となり突っ込む。

「いくぞおおおお！！」

「「応！！」」

こうして第二ラウンドが開始された。

◇

ななせ達七人が考えた作戦は面倒な竜王を後回しにして先に福音を墜とすという至って簡単なものだ。

「ファングっ！」

腰のバインダーから射出されたファングは福音へと向かう。赤い粒子ビームが放たれるが福音はそれを全てかわしてお返しと言わんばかりになせに一斉射撃状を行おうとするが、

「そんな暇、俺がやると思うとるんか！」

持ち前の高機動で背後に回り込んだ龍鳳の両腕には新装備の『ＧＮハンドミサイルコンテナ』が取り付けられている。それを福音に向けて左右に３門ずつ、計６門の発射口からミサイルが一門から一発ずつ発射される。しかし、その間に竜王が割り込み常時展開されているシールドに当たり爆発する。両肩の竜頭から引力光線が龍鳳に走る。

「ちっ、セシリア！！」

舌打ちをしながら龍鳳は急上昇すると上空からセシリアが急降下して福音に向けた全長２メートルのレーザーライフル『スターダスト・シューター』のトリガーを引く。閃光は福音の頭部に命中し少し怯んでいる所にななせがビームサーベルを振るって左大型スラスターを両断する。切断部分が火花を散らして爆発した。

「鈴！シャルロット！」

「「了解！！」」

片方の大型スラスターを失って体勢を崩した福音にアサルトカノンと炎を纏った衝撃弾、熱殻拡散衝撃弾を放つ。砲撃が続く中、竜王の両肩の竜頭が鈴とシャルに引力光線を吐き出そうとしているところにＧＮフィールドを展開したクリスが体当たりをする。

「ボクがいるのを忘れないでよね！！」

両者を守る光の壁がぶつかりセラヴィーの六つの砲口が光を放ち始

め、竜王の竜頭がクリスに向けられる。同時にクリスと竜王が攻撃をしてGNフィールドとエネルギーシールドに防がれながら、その反動でお互い後に吹き飛ばされて距離をとるが、竜王の背後に龍鳳がぴったり貼り付き両腕のミサイルコンテナをシールドに押し当てる。

「さすがにセラヴィーの砲撃を受けた後にゼロ距離で撃ち込んだら、その鬱陶しいシールドも壊れるやろ!!」

両腕のミサイルコンテナから次々とミサイルが発射されるがゼロ距離で撃ち込んでいるためコンテナも衝撃に耐えきれず各門に一発ずつミサイルを残したところで爆発する。その刹那シールドが砕け散って竜王を守るものが無くなる。そして福音に浴びせられていた砲撃が止み、各部から火花を散らせた福音が黒煙の中から姿を現した。

「「「「「「筺!!／ななせ!!」」」」」」

「「分かった!!」」

両腕にビームサーベルを展開したななせと雨月と空裂を構えた筺は瞬間加速（イグニッション・ブースト）を発動させ竜王と福音までの距離を一気に詰める。

「「はあああああ!!」」

筺は福音の残っていた右大型スラスターに雨月を突き刺しレーザーを放出すると内側から膨張して爆ぜた。飛行の手段を失って海へと墜ちていく福音に筺はとどめと言わんばかりに空裂を振るいエネルギー刃をぶつけてそのまま福音は海中に沈んでいった。ななせは交差させたビームサーベルを広げるように竜王の両肩の竜頭を切り捨てる。

「ファング！」

射出されたファング六基はサーベルを展開して竜王の背部のスラスターを貫き穴を開けていきボロボロになったところで爆発し、福音と同じように海に落下していき巨大な水飛沫を上げる。

『勝った』

と誰もが思ったがその瞬間銀色の球体と黄金の球体が海から浮上した。ななせ、箒、龍鳳、クリス、セシリア、シャル、鈴が目を見開きその球体を見ているとピキっと卵の殻の如くヒビが入り砕けた。

「まさか・・・・第二形態移行（セカンド・シフト）・・・・？」

銀色の球体から現れた福音は破壊されたスラスターの替わりにエネルギーの翼を生やしていた。そして黄金の球体から現れた竜王は、

「くそが！あり得へんやろ・・・・！！」

破壊されたスラスターの替わりに黄金のエネルギーの巨翼を生やし、さっきまであった両腕が無くなっている。切り落とされた両肩の竜頭からはエネルギーで再生された竜頭が生えており、バイザーで覆われていた顔があったところから機械の竜頭が生えていた。奇妙なことにそのどの首も長く伸びていて生物のようにくねくね動いている。常時展開されていた半透明だったシールドには紫電が走っていた。この二機を見て七人の瞳は絶望に染まっているかと思いきや・・・

「どうすんの？あれ」

「一旦引くのもありじゃないかな？」

「それはそれで癪ですわね」

「同じく。ボクもここまで引くのは嫌だね」

オープンチャンネルで交わされる会話はいつも通りの声色である。
誰もがこの状況での撤退を望んでおらず、そんな一同を見ていたななせが頬を緩ませる。

「今更撤退しても何も変わらへんし、やるだけやったるか？」

「ふっ、そうだな・・・。ななせ」

「分かってる。みんなの気持ちが一緒なら、やることは一つだけ・・・」

すぅと息を深く吸い込み声を張り上げる。

「いくぞおおお！！」

「「「「「「応！！」」」」」」

偶然にもこの時アルとヴィンスとラウラも同じように叫び突っ込んでいき、同じ海で、同時に二つの戦いが再開する。

◇

「おらぁ！！」

アルの右手に持ったビームサーベルによる斬撃を漆黒は左のドラモンキラーで弾く。すかさず反対の手に持ったビームサーベルによる刺突が眉間に迫るがもう片方のドラモンキラーで同じように弾く。両手を弾かれたアルは少し体勢を崩すもののすぐに立て直して両手のビームサーベルを真上から振り下ろすが、またもドラモンキラーで防がれる。

「ラウラ！ヴィンセント！」

アルがそう叫ぶと、漆黒の両サイドから瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使ったラウラとヴィンスが急接近する。それに気付いた漆黒はアルの腹部に蹴りを入れその場所から後退する。攻撃対象がいなくなり衝突を防ぐためにラウラとヴィンスは急停止するが、アルも含めて3人はほぼ一カ所の集中してしまい危険を感じる。

「ガイアフォース！！」

放たれたガイアフォースを見て3人は苦い顔をしながら上下左右に散開して避ける。ガイアフォースは遠く3人から数百メートルほど離れた海面へと直撃した。その瞬間、紅色のエネルギーがドーム状に広がり、周囲を染め上げていった。そんな馬鹿げた威力にラウラとヴィンスは唖然とするが、アルは赤い残像を残しながら瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使い漆黒に迫る。

「おおおおお！！」

しかし、漆黒の僅か手前でケルディムの赤い光が消え元の緑色の装甲に戻りスピードが急激に落ちる。トランザムの発動限界時間が来たのだ。舌打ちをしているアルに向けて漆黒はサマーソルトを脇腹に決めて両の手を頭の上に合わせブラックトルネードの体勢に入る。

「どうやらここまでのようだな・・・・。ブラックトルネード！」

未だに吹き飛ばされているアルへと標準を合わせた黒い竜巻が迫る。

「あの馬鹿がっ！！」

ビームサイズを投げ捨て、ヴィンス全てのエネルギーを使って、アルへと瞬間加速（イグニッション・ブースト）した。ヴィンスがアルを突き飛ばすことで直撃コースは避けれたが、回転が更に加速して竜巻が巨大化する。ブラックトルネードの外側に二人は掠めてしまい、装甲をずたずたにされた二人は海に墜ちた。

「アーノルド！ヴィンセント！貴様よくもっ・・・・！！」

激情したラウラは全てのワイヤーブレードを漆黒に向けて射出するが、全てドラモンキラーで切り落とされる。漆黒はラウラに向けて突っ込んでいくがラウラの眼帯に気付き急停止する。両手のドラモンキラーを下ろし自分と向き合う漆黒にラウラはプラズマ刃を構える。

「その眼帯とその機体・・・・そうか。お前、ドイツの『遺伝子強化素体(アドヴァンスド)』・・・・ラウラ・ボーデヴィッヒか」

「・・・・それがどうした。貴様には関係無――――」

「俺と同じように闘うためだけにこの世に生を受けたお前に聞きたいことがある。・・・・・何故、俺達には心がある・・・・・・？」

「何・・・・・？」

「俺は他のＤＧと違い心を持ってしまった。しかし、そのせいで自分の在り方や存在理由などを無意識に考えてしまう・・・・。同類のＤＧが処分されるたび何故か俺のコアが痛み出す。これが心の所為だというのなら俺は心を捨て、戦うだけの兵器となる！貴様もそうだろ――――・・・・何が可笑しい！？」

ラウラがくすくすと笑っているのを見て漆黒が怒号を上げるが、それでもラウラは笑い続ける。

「あ～・・・・すまない。余りにも子どもじみた考えに遂笑ってしまった」

「何だと！？」

「どうして心があるなど、そんなこと考えたことも無い。それに私とお前を一緒にするな。今の私には戦う以外にも存在する理由がある」

「それは一体何だ・・・・！」

「守るためだ。仲間を・・・・愛する者を！！」

「そんなもの・・・・俺には必要ない！！ガイアフォース！！」

突如放たれたガイアフォースをラウラはＡＩＣで止めようとするが防ぎきれず直撃する。ある程度はシールドバリアーでダメージを軽減したものの絶対防御が作動してシュヴァルツェア・レーゲンのエネルギー残量がゼロになる。ＩＳを解除されたラウラは頭から海に真っ逆さまに落下する。

「（私は・・・・負けられない！）」

絶望的な状況で左目の眼帯が外れ金色の瞳が露わになるが、その目はまだ諦めていない。

「（約束したんだ・・・・いつか政志に勝つと！だから、私は・・・・私は・・・・！）」

「負けるものかあああああ！！」

その刹那、ラウラを緑色の粒子が包み込んだ。

「っ！？」

立ち去ろうとしていた漆黒は突如センサーが増幅するエネルギー反応を記したので振り返ると海面ギリギリのところに肩から膨大な粒子を放出させている機体があった。

「何だ・・・あの機体は！？」

ラウラが金と赤の瞳を開くと身に覚えの無い機体を纏っていて、一瞬戸惑ったがよく見ると自分の両肩から緑色の粒子が放出されいる

のに気付く。

「はぁ・・・どうせこれも政志（あいつ）の仕業だろうな。・・・・まあいい、今は漆黒（やつ）を倒すことが先決だ」

かっと見開かれたオッドアイは漆黒を睨み、両腰に装備されてある二基の実体剣の柄を連結させて双刀の刀にする。

【ツインドライヴ正常稼働】

【オーライザー異常無し】

【ダブルオーライザー　システムオールグリーン】

「ダブルオーライザー。ラウラ・ボーデヴィッヒ、目標を駆逐する！！」

最強のガンダムを身に纏って、ラウラは再び漆黒に戦いを挑む。

革新する黒い雨（後書き）

どうしてラウラがダブルオーを？

第二形態移行を終えた福音と竜王に勝てるのか？

そしてあの四機がまた？

さまざまな謎がうごめくなか戦いの終わりが見え始める

～次回～

『雪羅と決着と赤い少女』

お楽しみに！！

各種設定2（前書き）

ダブルオーライザー、ラウラが使っちゃったけど・・・まぁいいよね！

この設定には若干ネタバレ?的なものが少し含まれているので了承してください

各種設定2

『ダブルオーライザー』
パイロット：ラウラ・ボーデヴィッヒ（元：鈴木政志）
～武装～
・ＧＮソード？　―　長めの実体剣。左右の腰に計2基を装備する。2本の柄を連結させた双刀の剣として使用できるほか、銃口から大型のビームサーベルを発生させることもできる。二つの銃口を持つライフルモードでは、通常の射撃のほか、バルカンなど、状況に応じて様々な攻撃を行なうことが可能となっている。火器としては標準的なサイズだが、ツインドライヴの高出力によって、大型砲にも匹敵する威力と射程を発揮する。

・ＧＮビームサーベル　―　腰背部に2基を装備する。投擲用のビームダガーとしても使用される。

・ＧＮシールド　―　先端に伸縮式のブレードを内蔵した専用シールド。2枚を連結させた大型シールド、両肩に1枚ずつ装着した形態の他、両腕に1枚ずつ装着して斬撃に使用することもできる。

・ライザーソード　―　トランザムを起動させることで使用可能となる特大ビームサーベル。使用時には、両肩のバインダーとＧＮソード？2基を機体前方に向け、発動形態をとる必要がある。

ダブルオーとオーライザーがドッキングした最強のガンダム。2基の太陽炉を同調稼動させることで、粒子生成量を2倍ではなく2乗化するという「ツインドライヴシステム」を初めて搭載した機体である。トランザムを起動させた状態させた際には、機体の「量子化」や、ＧＮ粒子を媒介に人々の意識を感応させるなど、未知の現象も

可能となっている。トランザム状態のダブルオーライザーは全く別次元のＭＳへと変化することから、「トランザムライザー」という別名で呼ばれる。

学年別トーナメントの際にラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのコアの損傷がヒドく修復が難しかったため、ダブルオー自体を無理矢理移植した。そのせいか機体色の白い部分が黒くなっており、シュヴァルツェア・レーゲンのＡＩＣも使用可能となっている。

『ヤークトアルケー』
パイロット：鈴木政志
～武装～
・ＧＮバスターソード　－　背部左側に２本マウントされている大型の実体剣。刀身部にＧＮ粒子をチャージし、攻撃する瞬間に放出する事で実体剣とビームサーベルの特性を併せ持たせているが、政志はこれをＧＮ粒子を纏った真空波として放つことがある。

・ＧＮバスターブレイド　－　２本のバスターソードを連結させた両刃の大型の実体剣。この状態になると刀身がスライドされ１．５倍になり、刀身全体にＧＮ粒子をチャージさせることで、振り下ろす際に巨大なビームの斬撃を放つことが出来る

・ＧＮビームサーベル　－　両脚爪先に固定装備されており、蹴り技と連動した奇襲攻撃が可能。

・ＧＮファング　－　２基追加されたため、腰部のＧＮコンテナに計１２基格納されている

・ＧＮランチャー　―　背部右側に１門装備されているビーム砲で、トランザムシステムを起動させれば高威力のＧＮハイメガランチャーとなる。

・ＧＮミサイル　―　腰部のＧＮコンテナの外部に１２基装備されている実弾兵器。

アルケーに追加装備を取り付けた機体で「ツインドライヴ」を搭載している。両肩に一基ずつ、腰部の追加アーマーに二基、計四基のオリジナルの太陽炉が使用されている。性能はアルケーより格段に上がっておりトランザム状態ではダブルオーライザーと同じように「量子化」を可能になっている。重量の増加によって元の機体に比べ運動性が大幅に低下してすると思われていたが「ツインドライヴ」を搭載させることで解消させるどころか、運動性が大幅に上昇した。

機体と操縦者のシンクロ率が１００％を越えると緑色のＧＮ粒子が黒へと変色する。元々はＧＮステルスフィールドを搭載させるつもりだったが、政志の『そういう面倒なのヤダ』という意見で結局搭載されることは無かった。

各種設定2（後書き）

自分明日からアパートに引っ越すので、ネットを繋いだりと次回の投稿が遅くなるのでそのつもりでいてください。

一週間も空くようなら大家さんをハイパーフルボッコにしますｗｗｗ

俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！（前書き）

非常に遅くなって申し訳ありません

そのせいか今回の話は無駄に長くなっているのでご了承ください

では本編をどうぞ！！

「ブハッ！死ぬかと思ったぞ・・・・！」

海に墜ちたアルは海中で意識を取り戻して海面まで上がってきた。
夏と言っても夜の海水は冷たく人体の体温を下げるには十分な温度である。胸部が冷たいのを感じたアルはその部分を触ってみると装甲が失われて肌が露出していた。

「掠っただけでこの威力かよ・・・・ってあれ？ヴィンセントはどこだ？」

もしヴィンスが突き飛ばしてくれなかったらと思いゾッとしていると、あることを思い出した。

「ヤッベ！そういやあいつ金槌だった！！」

『そういうことは忘れるなよ』と突っ込みを入れられても文句が言えないアルは息を深く吸ってヴィンスを救出すべく冷たい海の中へ潜っていった。上空では黒と黒がぶつかり合っていることになど気付かず・・・・。

◇

「あたしと龍鳳とクリスは竜王を、他のメンバーは福音を！」

覇気のこもったななせの指示に無言で従い、箒と鈴、セシリア、シ

ヤルは福音へと視線を向ける。

「箒！」

「あぁ、分かっている！」

鈴は箒の背中に乗り両手に持った双天牙月を握りしめ、紅椿の展開装甲が開き高機動モードへと移行する。高速で福音に接近しながら熱殻拡散衝撃砲を撃ち込む。砲弾は福音に直撃して黒煙を上げ、その中に箒の背中から飛び降りた鈴がセンサーを頼りに福音に真上から斬りかかる。

「ここで、墜とす！」

双天牙月を振り下ろしたときの風圧で黒煙が吹き飛び福音の姿が視認できるようになる。鈴が勝利を確信していたその瞬間、ぱしっと乾いた音が聞こえると同時に双天牙月が進まなくなった。

「そんな・・・・！」

二本の双天牙月は福音の手で鷲掴みにされており、目の前の光景に鈴の表情が驚愕の色に染まる。そんな事などお構いなしに頭部から生えた光輝くエネルギーの翼が鈴を包み込みエネルギー弾雨を零距離でお見舞いする。

「鈴！よくもっ・・・・・！」

「龍鳳！気持ちは分かるけど、今は目の前の敵に集中して！」

ズタボロにされて海に墜ちる鈴を見て福音に飛びかかろうとする龍

鳳をクリスが止める。舌打ちをしながらも竜王と向かい直した龍鳳に溜息をついていたクリスだったが、両手両足からの瞬時加速（イグニッション・ブースト）で爆発加速を得た福音が一気にセシリアとの距離を詰めるが視界に入った。

「くっ！？」

長身の銃は接近戦に弱く、一旦距離を取って銃口を向けようとしたが、その砲身を真横に蹴られてしまう。そして次に待っていたのは両翼からの一斉射撃。何の抵抗も出来ないままセシリアはエネルギー弾を全て受け止めてしまい海へと沈んだ。

「あいつ・・・・殺す！」

「クリス！お前がさっき俺に言うたこと思い出せ！」

そんなやりとりが繰り広げられる中、シャルがショットガン二丁による近接射撃を背中に浴びせる。福音が一瞬姿勢を崩したようにも見えたが、すぐさま敵機に対して『銀の鐘（シルバー・ベル）』による反撃を開始した。

「悪いけど、そのくらいじゃこの『ガーデン・カーテン』は落とせないよ！」

リヴァイヴ専用防御パッケージのエネルギーシールドと物理シールドで福音の弾雨を防ぐ。防御の間にシャルは得意の『高速切替（ラピッド・スイッチ）』でアサルトカノンを呼び出し弾雨が止んだのを見計らって反撃を開始しようとしていた。しかし、福音は両翼からのエメルギーを頭上に収束させ、そこから極大のエネルギー砲が放たれた。

「それは・・・・ちょっと無理かな！」

『ガーデン・カーテン』の物理シールドが全て破壊されて、シャルの身体をも吹き飛ばした。あっという間に三人がやられ福音の相手をする者が箒1人だけになったを見たななせは険しい表情になりながらも冷静に指示を出す。

「龍鳳！こっちはあたしとクリスでなんとかするから箒のサポートを！」

「合点！」

ななせは竜王に両手に持ったバスターライフルのうちの右手に持っている方を向けて放つ。しかし、ビームは常時展開だったはずのシールドをすり抜けた。一同が驚くなか、竜王の黄金の装甲に当たったビームはそのままななせに跳ね返ってくる。しかも、シールドに走っていた紫電を纏わせるというおまけ付きだ。苦い顔になりながらもななせはビームをヒラリとかわし今の竜王の情報を整理する。

「（あれが竜王の特殊装甲『ヤタノカガミ』・・・。初めて見るけど、思ってたよりも厄介だね。多分、第二形態（セカンドモード）になってからは常時展開だったシールドをＯＮ・ＯＦＦできるように・・・それともビームだけをすり抜けるようになってるの・・・？）」

そんな風に打開策を考えていると、竜王が巨翼を広げて天を仰ぎ口を開いた。

「「「ギャゴオオオオオオ！！」」」

三つの口から咆吼が迸り大気が、海が震え、様々な森羅万象の副産物に恐怖を与える。その場にいた全員が動きを止めてしまい、福音

もバイザー越しで竜王に視線を向けていた。特になな せ、龍鳳、クリスはこれによく似た気迫を放つ者を知っており目を見開く。

「（どっかで感じたことがあると思とったら・・・・）」

「（これって・・・・）」

「（政志のと・・・・同じだ！）」

一瞬だけだが、竜王の姿がアルケーを纏った政志と重なる。彼らにとっては政志とは絶対的な最強の存在。それと同じぐらいの気迫を持つ竜王に恐怖に似た何かを覚えるのは必然であるが、ななせだけは違った。両手のバスターライフルを握り直して獲物を見付けた猛獣の目つきになる。

「（久しぶりだな・・・・こんな気持ちになるのは！）」

ななせは金属音を立てながらツインバスターライフルを竜王に向け、センサーの中心に竜王を入れてロック・オンする。クリスは竜王の操縦者のことを考えて止めようか悩んだが、実際にこの状況ではそうするしかなく、必ずしも操縦者を殺めてしまうと決まったわけではなく、ここはななせに任せることにした。

「ＧＮツインバスターライフル・・・・発射！」

ななせがトリガーを引くと同時に竜王の三つの口から強化された引力光線が吐き出された。三つの稲妻は一つに纏まりツインバスターライフルの照射ビームとぶつかり合う。金色と深紅の光のぶつかり合いは辺り一面を光に変え、両者の中間地点で大きな爆発を起こした。爆風で一同が怯む中、ななせはバスターライフルを腰部に戻し

て両腕に装備されているビームサーベルを展開して竜王に突っ込む。羅刹を思わせる鬼迫を放つななせに向けて竜王は先ほどと同威力の引力光線で迎撃を行う。それをななせは一切スピードを緩めることなく引力光線をすれすれでかわしてバリアーまで接近して右腕を突き出す。バリアーとサーベルの先端が触れ合って火花が迸る。ななせはその間にディスプレイを広げ竜王のエネルギーの流通を見る。

「（真ん中の頭から大量のエネルギーが放出されてる。・・・・つまり、あれがバリアーの発生源！）」

ディスプレイを閉じてすぐ、左腕に展開されてあるビームサーベルを右腕で刺してある所に打突する。サーベルを一点に集中することでバリアーに段々とヒビが入る。これはディアボロスのビームサーベルが通常のものより三倍の威力があるからできることだ。そして、ななせは両腕に入れる力を更に強める。

「はあああああっ！！」

ヒビが一気に広がりバリアーがガラスのように砕ける。しかし、バリアーはすぐさま再生成されようとするが、生成しきる前にななせはバリアーの内側に潜り込む。竜王は懐に潜り込んできた敵に対して三つの首から引力光線を吐き出そうと口を開けるが、その瞬間ななせはふふっと小さく笑った。

「ファング！」

射出された六つのファングはサーベルを展開して二手に分かれる。そして左右の口に突っ込ませると同時にななせは両腕のサーベル刃を消してハンドガンを中央の口の中に押しみビームを連射させる。口内で起きる爆発は行き場の無く喉元から上が膨張する。また左右

の首に突っ込ませたファングからもビームを発射させると中央の首と同じ状態になる。そして大きくふくれあがり、遂には爆発を起こして竜王の三つの首の真ん中から上が消失する。発生源が消えたためかバリアーも消滅してななせは動かなくなった竜王から一旦距離を置く。するとそこに箒が心配そうな顔をしてななせの元へ駆け寄る。

「ななせお前、大丈夫なのか？」

「まあ、何とか。ちょっと無茶しちゃったけど」

そういって黒こげになった両腕のハンドガンを箒に見せる。ファングも先ほどの攻撃で爆発してしまい今のななせの武器はバスターライフルだけになった。龍鳳とクリスは宙に浮いて静止している福音と竜王に対して警戒を続けていた。

「なあ、あれ攻撃してええんか？」

「ん～・・・別にいいんじゃない？そうしないと終わる気配がしないし」

ほうやなっと言って龍鳳は両手のビームサーベルからビーム刃を展開した刹那、福音が咆えた。

「キアアアア・・・・！！」

一同の視線がそっちに向くなか、福音の咆吼に答えるように竜王が動き出した。巨翼が広げられ、頭を失った首の断面に黄金のエネルギーが集まり、あっという間に首が再生される。真ん中の首は破壊される前と違い左右と同じエネルギーで形成されている。よく見る

とバリアーは張ってないようだ。振り出しとまでは言わないが状況は再び悪化したのには変わりはない。ななせ達は冷や汗を掻きながらも福音と竜王と睨み合う。

「（これはちょっとマズイかな・・・・？）」

二機は一斉に動き出してななせ達に高速で突っ込む。しかし・・・・その間を巨大な紅い球体が通過する。誰もが球体が飛んできた方向に目をやると二つの黒い影が高速でぶつかり合い火花を散らしていた。ななせ達はセンサーを使って二つの影を見た。

「あれは・・・・漆黒（ジェラック）の竜戦士（ヴォルグレイシス）！」

「もう一つは・・・・え？どうしてっ！？」

「どないなっとんねん！確かあれは政志が持っとったはずやろ！？」

ななせはどこか遠い目で二つの黒い影、漆黒とダブルオーを纏ったラウラを見ていた。

「ダブルオー・・・・。とうとう起動させちゃったんだね・・・・」

◇

「ガイアフォース！」

漆黒はガイアフォースを放つがラウラに当たることは無かった。シュヴァルツェア・レーゲンと比べものにならない出力を持つダブルオーライザーをラウラはもう戦えるぐらいにまで乗りこなしていた。

ラウラはすんなりと三段階瞬時加速（トリプル・イグニッション）を使用して、連結を解除したGNソード?を交差して漆黒に斬りかかる。しかし、漆黒はそれをドラモンキラーで弾くがこれまで感じたことのないダブルオーライザーの重みのある一撃一撃に焦りが生まれる。

「（どういうことだ！あの破壊神でもここまでの力は無かった。機体性能だけでこれだけの力が出せるとは・・・・！）」

一方ラウラもあまりにも高すぎるダブルオーライザーの機体性能に驚きを感じていた。GNソード?をライフルモードにしてビームを撃ってみたらクリスのセラヴィー並の威力を有しているは、スピードは桁外れだはと無茶苦茶な性能である。

「（勝てる・・・・！このダブルオーライザーなら、誰にも負けない！！）」

体中に力が漲り無意識に口元を歪めてしまう。先ほどからラウラと漆黒は何度も切り結んでいるが、完全に漆黒の方が力負けしているのが分かる。しかし、それでもラウラは未だに漆黒に決定打をたたき込めないでいた。

「ウオオオオオ！」

高速で漆黒はラウラに向かいドラモンキラーを振り下ろすが、今のラウラにはそれがスローモーションで見える。ラウラは眼帯を外したことにより動体視力、視覚解像度等を数倍に上げる『ヴォーダン・オージェ（オーディンの瞳）』の封印を解いている。それに加えてダブルオーライザーの機動性もあって避けることなど造作もない。ドラモンキラーは空を切り、瞬時にラウラは漆黒の横に回り込み腹部にサッカーボールキックを入れる。装甲に破片を散らせながら漆

黒は遠くへ吹き飛び海に直撃した。巨大な水柱が上がるのが見えたラウラはそこへ向かう途中で６つの機影を確認してその内の４機に見覚えがあった。

「（あれは・・・ななせ達か？）」

視線の先には戦闘を行ってるななせ達が見えて、銀と金のＩＳが見えたがそれが福音と竜王だとすぐに分かった。データとは違う姿をしてたが、頭が冴えているためか二機が第二形態移行（セカンド・シフト）を行ったんだとすぐに理解した。するとオープンチャンネルから龍鳳の声が聞こえてきた。

「おいラウラ！何でお前がその機体に乗っとんねん！」

「そんなことを私が知りたいぐらいだ。あとで政志にでも聞いておけ！」

ラウラは再び三段階瞬時加速（トリプル・イグニッション）を使い、引力光線を放とうとしている竜王の懐に一瞬で潜り込む。

「何て加速力だ・・・・！？」

箒は福音と鍔迫り合いをしながら、ダブルオーライザーの加速力を見て驚きの声をあげる。そしてラウラは両手のＧＮソード？の柄を連結させて双頭刃にする。銃口から大型のビームサーベルを発生させて右脇下から振り抜き竜王の首を三本とも切り落とす。しかし、すぐさま切断面にエネルギーが集まり再生するのを見て舌打ちをしながら竜王の腹部に蹴って距離を取る。一方、箒は格闘戦を繰り広げており徐々に出力が上がる紅椿に福音が押され始める。

「これで、終わりだ！！」

箒は雨月の打突で決着をつけようとする。が、その瞬間――

キュゥゥゥン・・・・。

「そんなっ！？こんなところで！！」

紅椿のエネルギーが底を着き、その隙を福音は見逃すことなく右腕で箒の首を掴む。そしてゆっくりとその翼が箒を包んでいく。

「「箒っ！！」」

すぐさまラウラとななせは箒を助けようとする。しかし、海中から戻ってきた漆黒と竜王が二人の行く手を阻む。

「あの程度で俺がやられるとでも思ったか？」

「「「ギャゴオオオオ！！」」」

どう考えても素直に通してくれるはずがなく、険しい顔になりながら龍鳳とクリスに『箒を頼む』とアイコンタクトを送る。龍鳳とクリスはアイコンタクトを見る前から動き出しており、龍鳳は高速で箒の元へ向かい、クリスは両手に持っているＧＮバズーカ？の標準を福音に合わせる。だが突如、二人の背筋に悪寒が走り、龍鳳はその場で急停止して、クリスは真上に向けてＧＮバズーカ？を放つ。すると龍鳳の目の前を上から赤いＩＳはＵターンして来て龍鳳と同じ目線の位置で静止する。龍鳳はその赤いＩＳに見覚えがあり、鋭い目つきで睨み付ける。

「お前は・・・・R！」

数時間前に会った彼女を忘れるはずが無く、敵と呑気に話をしてしまったことを思い出していた。ジャスティスを纏ったRは無言でシールドがついていない方の手に持っている双頭刃のビームサーベル『アンビデクストラス・ハルバード』を構える。

「・・・・行かせない」

クリスの放った桃色の閃光は夕闇を照らし、蒼い翼を持ったISを映し出す。そのISは両手にビームサーベルを構えてクリスへと突っ込む。それをクリスは両肩、両膝のGNキャノンで迎え撃つ。

「クアッドキャノン、発射！」

四門の同時斉射を避けた敵機はビームサーベルをクリスの両肩目掛けて振り下ろす。クリスはGNバズーカ?を後腰に戻してビームサーベルを両手に握った。頭上で構えたビームサーベルは振り下ろされたビームサーベルと交差する。するとオープンチャンネルから女の声が聞こえてくる。

「ほう？やるじゃないか。さすがは白い魔王と言ったところか」

「その機体は・・・・君がヴィンスが言ってたMだね？どうしてこんなことを・・・・！」

「とある人物に、『ある物』をとってくるように頼まれてな。そのために、貴様等の存在は邪魔だ」

「（ある物・・・・？）なんだかよく分からないけど！」

クリスはセラヴィーの出力を上げてMとフリーダムを押し返す。力負けしたMは後ろに吹き飛ばされる。体勢を立て直して再びビームサーベルを構えるMを見てクリスはやれやれといった顔になる。

「はあ・・・・。ボク、あんまり格闘戦得意じゃないんだけどな～」

しょうがないね、と溜息混じりに言うと両肩両膝のGNキャノンの砲口部から腕が現れ、その手にはビームサーベルが握られている。

「じゃっ、軽く死合おうか？」

「・・・・！」

砲撃特化のセラヴィーが六刀流となった。そして、クリスはニヤリと獰猛な笑みを浮かべ、その表情にMは恐怖を感じた。

「ボク達に・・・・二度と手を出せないようにね」

◇

ざぁ・・・・ざざん・・・・・。

（・・・・あぁ？）

砂浜に座り込んでいた政志はある異変に気付いた。それは流木に座っていた一夏も同じらしく、二人は揃って波打ち際へと視線を向ける。何時の間にか、波打ち際で歌っていた少女の歌が終わっていた。踊るのも止めて、少女は空を見上げている。

「どうかしたのか？」

不思議に思って少女へと近づく一夏だが、それでも少女は一夏の方に振り返ろうとせず、空を見上げ続けている。二人も視線を空へと向けると、少女の声が耳に届いた。

「呼んでる・・・・行かなきゃ」

「「？」」

視線を空から少女へと戻そうとするが、二人の目の前にいたはずの少女の姿は見当たらない。掻き消したかのように、忽然と消えた。残っているのは波の音のみ。

「あの女の子・・・・どこに行ったんだ？」

「さぁな」

二人して首を傾げ、一夏が流木の上に再び座ろうとすると、海の方から声が聞こえた。

「力を欲しますか？」

二人が声のする方に視線を向けると一人の女性が膝下までを海の中に沈めて立っていた。その女性は白銀に輝く甲冑を身に纏い、大きな大剣を自らの前に立てて両手を預けている。目を隠すガードで顔は下半分しか見えない。

「力を欲しますか？」

「・・・・一夏。お前に聞いてるみたいだぞ」

「えっ、俺？」

再び同じ質問を投げかけて来たとき、女性の視線が一夏に向いている気がした政志はその質問を問われているのが一夏だと思った。

「力、か・・・・・。難しい事聞くな」

ざぁ・・・・ざざん・・・・・と波の音だけが砂浜に響く。

「そうだな・・・・・。友達を・・・・仲間を守るためかな」

「仲間を・・・・」

「あぁ、仲間をな。世の中って色々と闘わないといけないだろ？不条理なこととか、道理のない暴力とか。そう言う物から、俺は仲間を守りたいんだ。この世界で一緒に闘う、仲間を」

「そうですか・・・・」

大剣を携えた女性はそう答えて静かに頷く。政志は一夏の答えを聞いてくすくす笑っていた。

「お前らしくていいんじゃねぇか？まっ、今のお前じゃ難しいだろうがな」

「分かってる。そのために・・・俺は強くなろうとしているんだ」

「良い心懸けだな。その気持ちを忘れずにいれたら、守りたいもの守れるようになるさ」

政志の言葉に一夏はハハハと照れくさそうに頭を掻く。

「だったら、行かなきゃね」

また後ろから声をかけられた。二人が振り返ると、さっきまで歌っていた少女がそこにいた。人懐っこく、無邪気な笑顔を浮かべて一夏を見つめている。

「ほら、ね？」

少女は一夏の手を取り、にこりと微笑む。照れくさくなりながらも一夏が頷くと、彼の視界を真っ白な光が埋め尽くしていく。目の前の光景が序々にぼやけていき、白い騎士の女性についてあることを思った。

「（そういえば・・・あの女の人、誰かに似てたな）」

その刹那、その空間から一夏が消えた。

◇

福音の翼の輝きが更に増して零距離射撃の秒読みが開始される中、
箒はただただある人の事を想った。

「い、ちか・・・・一夏・・・・・」

愛おしい人の名を口にし、箒は覚悟を決めて瞼を閉じた。その刹那、

「!?」

福音は箒を掴んでいた手を離した。いきなりのことに混乱しながら、
箒は目を開いた。目の前では、強力な荷電粒子砲が直撃して吹き飛
ぶ福音の姿が。荷電粒子砲の発生源を見て、箒の目尻に涙が浮かぶ。

「あ、・・・・あ、あっ・・・・・」

「仲間は、だれ1人としてやらせねぇっ!!!」

涙で滲んだ視界に映ったのは白く、輝きを放つ機体。白式第二形態・
雪羅を纏った一夏がいた。

「い、一夏っ!?　一夏なんだな!?」

「おう、待たせたな」

慌てて一夏の元へと飛んでいく箒。今にも泣きそう、と言うか泣い
ている箒を撫でながら、一夏は優しい笑顔を浮かべる。

「よかった・・・・本当に、よかった・・・・・」

「心配かけた。もう、大丈夫だ」

「し、心配など・・・・・！」

慌てて目元を拭っている箒に一夏はある物を渡す。

「り、リボン？」

「あぁ。誕生日、おめでとう」

七月七日。偶然か必然かそれとも神の悪戯か、今日は箒の誕生日だ。今一夏が手にしているリボンは臨海学校の前に、アルとシャルの後を付けた時にこっそり買っておいたのだ。最も、こんな戦場のど真ん中で渡すことになろうとは、一夏も思いもしなかっただろう・・・。

「せっかくだし、使ってくれよそれ」

「・・・・あぁ」

「じゃ、行ってくる。なんだか色々と厄介なことになってるみたいだしな」

言うなり、一夏はこちらへと向かってきていた福音に急加速、真っ正面からぶつかり合った。

「昼間の借りを返させてもらうぞ！」

「（あっちは何とか大丈夫みたいだね）」

ななせは一夏と箒の二人を見てホッと安堵の息を出す。いきなり一夏が現れたことに少し驚いたが、箒が助かったのでそんな細かいことは気にしないことにした。

「「「ギャゴオオオオオ！！」」」

三つのエネルギーの首をくねらせて乱雑に引力光線を放つ。どこを狙っているのか分からない攻撃になせが当たるはずもなく、ななせはそれを哀れんだ目で見る。

「あんたも・・・苦しみから解放してあげる」

両目を閉じて大きく深呼吸をして目を見開き、鋭い視線を竜王に向けてＧＮバスターライフルを平行連結させた。そして、次になせの口から出た単語はガンダムの諸刃の剣となるあのシステムの名だった。

「トランザム」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

ディアボロスの黒い装甲が赤い輝きを放ち始める。ＧＮツインバスターライフルを向けられているのに気付いたのか竜王は三つの口をななせに向けてエネルギーを収束させていく。竜王の口の前に巨大な金色のエネルギー弾が生まれる。ＧＮツインバスターライフルも同様に銃口に深紅の光を放ち始め、ななせはフルチャージが完了したのを確認してトリガーを引く。

「目標を・・・・殲滅する！」

ＧＮツインバスターライフルから極大の粒子ビームが発射されると同時に竜王もエネルギー弾を放った。両者の最大の攻撃は最初は均衡していたものの、じわじわと黄金が深紅に浸食されていく。そして遂に、黄金が完全に赤に飲み込まれた。しかし、まだ安心は出来ない。粒子ビームはそのまま竜王の腹部に直撃するが、黄金の装甲を貫くことは無かった。

『ヤタノカガミ』

これがある限り、竜王にビーム兵器は通用しない。が、今回ばかりはそうもいかなかった。本来ならすぐに跳ね返せるビームが跳ね返せないでいた。その理由は極めて簡単なものだった。

『あまりにも膨大な熱量にシステムが対応できない』

ただ、それだけ・・・・。黄金の装甲は体積された熱によって赤い光が生じる。竜王のエネルギーの首と翼は消失して、装甲全体に赤い光が広がっていく。ななせがビームの照射を止めると同時にトランザムが終了したのか、ディアボロスの装甲が元の黒色に戻ってい

た。

「伊達に黒い堕天使と呼ばれていないからね。この程度じゃ、あたしとディアボロスは」

「墜とせないよ」

強さを感じさせる笑みを浮かべながらそう言うと、竜王の装甲の赤い輝きが一気にまして轟音を上げながら爆発を起こした。爆発で生じた黒煙の中からＩＳ装甲を失った操縦者が海へと落下し始めた。

「あっ」

二挺のバスターライフルを腰に収納したななせはトランザムを使用したため機体性能が低下しているディアボロスに鞭を打って加速する。何とか海面ギリギリで操縦者をキャッチした。

「加勢したいのは山々なんだけど・・・この状況じゃ無理かな？」

腕には気を失っている竜王の操縦者が眠っており、ディアボロスの粒子残量も残り極僅かで戦闘をするのは難しい状態であった。ここ

になせの脱落が決定した。

◇

「はあああっっっ！！！」

一夏が振り抜いた雪片を、福音はひらりとかわす。一夏は慌てることなく雪片を戻し、左手の新装備、雪羅（せつら）で福音を追った。白式が第二形態に移行したことで現れた雪羅は、状況に応じて幾つかのタイプへと切り換えられるらしい。一夏のイメージに応えるように、雪羅の先からエネルギーの爪が伸びて福音を斬り裂いた。シールドエネルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音の装甲を削っている。更なる追撃をかけようとした瞬間、

ドガァァァァン！！！

凄まじい轟音が周囲に響き渡った。何事かと思って振り返ると、視線の先では黒煙の中で星屑のようにキラキラと竜王の装甲が散っており、それをななせが見つめていた。

「ななせの奴、あんな化け物を1人で倒したのか！？」

ななせの戦闘能力に驚いていると福音が光弾を放ち一夏を襲う。

「何度も喰らってたまるか！！」

光弾を避けようとはせず、一夏は雪羅を前に突き出して福音へと飛ぶ。

【雪羅、シールドモードへ切替。相殺防御を開始】

甲高い音を立てて左腕の雪羅が変化する。変化した雪羅は光の膜を広げ、福音の光弾を全て消していった。雪羅が作り出したシールド、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。当然エネルギーの消耗は激しいが、攻撃を無力化出来る以上、圧倒的に一夏の方が有利だ。福音には実弾装備が搭載されていないのだから。

「行くぞ福音！！」

更に、二機だったウィングスラスターは四機に増えて、二段階瞬間加速（ダブル・イグニッション）を可能としていた。複雑な動きをする福音にも追いつける。

【状況変化。最大攻撃力を使用する】

機械音声で告げると、福音は羽ばたかせていた翼を身体に巻き付けた。嫌な予感が一夏を襲う。その予感は的中して翼が回転しながら一斉に開き、全方位へ嵐のようにエネルギーの弾雨を降らせる。

「くっ・・・・！だけど、負けるわけにはいかねぇ！」

一夏は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作りだして、再び福音へと飛び込んでいった。

「（一夏が駆けつけてくれた・・・！）」

それは嬉しいを飛び越えていた。心が熱くなる、熱を撒き散らしながら躍動する。福音を圧倒する二人の姿を見て、箒は強く願った。

「（私は共に闘いたい。一夏の背を守りたい！）」

箒の想いに応えるように、紅椿の展開装甲から紅の粒子に混ざって金色の粒子が溢れ始めた。

「これは・・・！」

ハイパーセンサーに映し出された紅椿のステータス画面で、エネルギーが急速に回復していくことが分かる。

【絢爛舞踏（けいらんぶとう）、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築・・・完了】

項目に映し出されているのはワンオフ・アビリティーの文字。

「（まだやれるのか？）」

応えるように、紅の粒子と金色の粒子は数を増していく。

「（ならば行くぞ、紅椿！！）」

一夏から受け取ったリボンで髪を結び、箒は福音へと向かった。

「ぜらあああっ！！！」

一夏が零落白夜で福音の翼を斬る。しかし、両の翼を斬るのは至難の業で、またしても二撃目を回避されてしまう。そうしている間に失った翼は再度構築されて復元されて、一夏にエネルギー弾の嵐が降り注ぐ。

【エネルギー残量二十％。予測稼働時間、三分】

「（まずいっ！このままじゃ・・・・）」

リミッターなしの軍用ＩＳの底なしのエネルギー量と自機の活動限界を比べ、じわじわと裂傷感が生まれる。

「一夏！！」

「箒！？　お前、ダメージは」

「そんなことはいい！　これを受け取れ！」

箒、紅椿の手が白式の装甲に触れた瞬間、一夏の身体を電流のような衝撃と、炎のような熱が走って視界を揺らした。

「な、何！？エネルギーが・・・・回復！？箒、これは――――」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

一夏は雪片弐型に意識を集中させて巨大な光の刃を形成して、それを両手で振るった。

「うおおおおっ！」

福音は一夏の横薙ぎ縦軸一回転して回避すると光の翼を広げて一夏へと向ける。しかし、

「箒！」

「任せろ！」

一夏へと向けられた翼と共にもう一方の翼を、紅椿の二刀による斬撃で切り落とす。

「逃がすかぁぁっ！」

さらに脚部展開装を解放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った。予想外の一撃に大きく体勢を崩した福音に、一夏は最後の一突きを繰りだそうとするが、福音の身体から生えた翼全てから一斉射撃が行われる。が、突如周囲の空間が赤い粒子で染まるとエネルギー弾が消えていき、突然の事態に一夏は戸惑う。

「なっ！？これは一体――」

「一夏、いいから早くトドメを！」

一夏が声をした方を向くと、そこには背中から三対の深紅のＧＮ粒子で形成された翼を生やし、ステルスフィールドを展開していたな

なせがいた。

「ディアボロスの粒子残量も限界に近いんだから、急いで！」

「なんだか知らないが、分かった！」

全ブースターを最大出力まで上げた一夏は再び福音に突っ込んでいき、福音の胴体に零落白夜の刃を突き立てた。

「おおおおっ！！」

エネルギー刃特有の手応えを感じながら一夏は雪片を押しつけ続ける。福音は抵抗しようと一夏ののど笛を掴むが、その瞬間銀色のＩＳは動きを停止して、アーマーを失った操縦者が海に墜ちるのを箒が受け止めた。ななせもステスルフィールドを解いて元の夕闇に戻る。

「こっちは何とか終わったな」

「ああ・・・・やっと――――」

ドガァァァァン！！！！！！

「「！？」」

戦いに勝利した二人の耳に爆音が聞こえ、そちらに目を向けると同時に・・・・黒いＩＳが海に沈んでいった。

◇

ラウラと漆黒の戦いにも決着の色が見え始めてきた。

「はあああああっ！」

「ぐうっ！」

圧倒的な力を持つダブルオーライザーを前にＧＤの究極体は押され始めた。ラウラの振り下ろすＧＮソード?を防ごうとドラモンキラーを構えても、力を相殺しきれず弾かれてしまう。体勢を立て直した漆黒は両腕のドラモンキラーを頭上で合わせて、連邦の破壊神を追いつめたあの技をラウラに繰り出した。

「ブラック、トルネードォォォ！！」

今までにないぐらいに高速回転をした黒い竜巻は巨大なものとなる。しかし、ラウラはそれを見ても全く動じることはなくＧＮソード?を連結させた双頭刃『ＧＮツインランス』を握る力を強める。近づいてくる漆黒に向かってラウラはＧＮ粒子を放出しながら突っ込んでいく。

「ここは」

左に横回転しながらラウラは黒い竜巻に向けて水平斬りを叩き込む。

「私の距離だ！」

振り抜かれたＧＮツインランスは漆黒のブレイブシールドを砕き、音速の速さで吹き飛ばす。その隙をラウラが見逃すはずがなく三段階瞬時加速（トリプル・イグニッション）で漆黒に駆けていく。吹き飛ばされながらもＧＮツインランスを振り下ろされるのを見た漆黒はドラモンキラーを構えるが、

突如目の色を変えてドラモンキラーの構えを解いた。

「なっ！？」

いきなりの行動にラウラは困惑したがすでに振り下ろされた斬撃を止めることはできず、漆黒の右肩から左脇腹にかけてＧＮツインランスの刃が駆け抜ける。漆黒は苦しみながらもドラモンキラーのクローが着いていない甲の部分でラウラを右側へと押しのける。すると、ラウラがいたその場所に赤と青の荷電粒子砲が通過していき漆黒に直撃する。

「くっ！」

ラウラは海へと落下していく漆黒に手を掴もうとするが緑色のビームがそれを阻み漆黒は水柱をあげながら海中に沈んでいった。キッと鋭い視線でビームが飛来してきた方を睨むと、大型のビーム砲を二門持った白と黒と緑のＩＳと大型のビームライフルを肩に担ぐように持っている灰色のＩＳがいた。

「そのガンダム・・・・力ずくでも渡してもらいますよ」

「そういうことだから、恨まないでよね」

白と黒と緑のＩＳの装甲の序々に変わっていき赤と白になる。色だけならともかく、それと同時に両手で持っていたビーム砲が消えていて、替わりに背中に二本の対艦刀が装備されていて、よく見ると背部のスラスターも替わっている。

「行きますよＫ。油断したら死にますよ」

「そんなこと分かってるってば。それに、Aはウチが簡単にやられるとでも思ってるわけ？」

ソードインパルスを纏ったAは両手で背中からレーザー対艦刀『エクスカリバー』を抜き取り、Kはプロヴィデンスの背部ユニットからドラグーンを射出させ、衝撃と天帝が黒き革新の剣に襲いかかる。

◇

一夏が光りに包まれると同時に騎士の女性と少女も姿を消して、その空間に政志だけが取り残されていた。

「・・・・」

しばらくして、立ち上がった政志は無言のまま瞳を数秒閉じて何かを考えた後、瞼を上げると目の前には真っ赤な風景が広がっていた。先ほどの砂浜とはほど遠く、何もない・・・ただの赤い空間。政志は辺りを一通り見渡した後、今まで閉じていた口を開いた。

「いい加減に出てきたらどうなんだ？」

少し呆れを含ませながらそう言うと、背後から足音が聞こえ始めた。

「な～んだ。やっぱり分かってたんだね」

悪戯気を感じさせるその声の持ち主を見ようと振り向くと、１人の少女が歩いていた。少女は先ほど一夏がいた時に見た白い少女と似ていたが、決定的に違うものがあった。簡単に説明すると白い少女の白い部分が全て血のような真っ赤に染まっていた。その姿に政志はどこか親近感を覚えていると少女はいつの間にか政志の目の前に

いた。赤い少女は政志の顔をまじまじと見ながら小さな口から言葉を紡ぎ出す。

「何か聞きたいことがあるんだろうけど、その前に私の質問に答えてくれるかな？」

「・・・・分かった」

「じゃあ質問です。あなたが戦うのは世界を変えるためですよね？」

「あぁ」

「では、その世界を変えるためなら」

「愛する人を殺せますか？」

俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！（後書き）

千冬「突然だが問題だ。『そうまとう』について説明しろ」

琴吹ななせの答え
「江戸時代に登場した周り灯籠で、馬の影絵が走っているように見えることから名付けられました。また、臨死体験をした人が見る一生の体験の再現現象を文学的表現として走馬灯と呼びます」

千冬「さすがと言ったところか。１００点だな」

龍鳳・クシュリナーダの答え
「江戸時代の中期に中岡藩主『相馬備中ノ守（そうまびっちゅうのかみ）』が発明した照明器具で藩主の名を取って『相馬灯』と名付けられたんや」

千冬「何だ？その見てきたかのような嘘は・・・・」

アーノルド・ギアナの答え
「とても良く切れます」

千冬「『そうまとう』を刀の一種だと思っている時点で間違いだ。小学校からやり直せ」

鈴木政志とクリストファー・トールギスの答え
「「聖剣エクスカリバー」」

千冬「いい加減『そうまとう』を刀の一種と思うのは止めろ！！」

織村一夏の答え
「雪片弐型」

千冬「・・・・織村とギアナは後で補習室に来るように」

～次回～

『復活とチートと変態仮面』

お楽しみに！！

Ｒｅｔｕｒｎ　Ｔｈｅ　Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ（前書き）

今回とうとうあの変態仮面をモデルとしたキャラが登場します

やってしまった感はありますが、後悔はしない！

では、本編をどうぞ！！

「答えはＮＯだ」

政志は質問に対して何の迷いも無く即答し、少女はその答えに少しだけ眉を寄せる。

「あなたは世界より愛する人を選ぶ――」

「それは違うな」

「？」

理解しかねるその言葉に少女が首を傾げる。それを見た政志はやれやれと言った感じで少女を見下ろしながら自らの決意を語った。

「俺は世界も、大事な仲間も・・・・何一つやらせねぇ。それが傲慢なのは分かってる。だがな、これが俺の、俺たちの覚悟だ。もう何も喪失いたくない・・・・だから俺は戦い続けるんだよ。そのために必要なんだ」

「お前の力が」

「・・・・そう言うと思った」

赤い少女は溜息混じりそう呟きながら政志に背を向けて歩き出して、政志と三メートル離れたぐらいで立ち止まった。

「機体全体にオリジナルの太陽炉が中々馴染まなかった・・・・。これがあなたが聞きたかった答えだよ」

「ななせは何も問題が無いって言ってたぞ？」

「理屈じゃない・・・・とでも言っておこうかな。それにしてもオリジナルの太陽炉なんて久しぶりだよ。それも四基だなんて、全く無茶するよね」

そう答えながら振り返った少女の表情には悪戯気が含まれていた。すると政志の視界を黒い光が覆っていき、この空間との別れなのだと理解する。

「じゃあ、妹達によろしくね」

少女のその言葉と共に政志は意識を手放した。その時の赤い少女は政志にとって思い出深いあの機体を纏っていた。

それはまるで――――青い剣士。

◇

ガギンッと金属音を立てながらダブルオーライザーのＧＮソード？とソードインパルスのエクスカリバーが交わり、火花を散らしながら鍔迫り合いをする。

「まさか、あなたがそのガンダムを持っていたとは予想外でした」

「何故ダブルオーを狙う、亡国機業（ファントム・タクス）！」

「正確に言えば、私達が欲しいのは『ツインドライブシステム』です。予想では破壊神が所持していると思っていたのですが・・・・まあ良いでしょう」

「まさか、政志を墜としたというのは――」

「私ですが。何か？」

それを聞いたラウラの中で何かが弾けて、ＧＮ粒子の放出量が上がってＡを押し飛ばす。殺気を全開にして体勢を崩しているＡに斬りかかる。

「貴様ーーーーっ！！」

しかし、バイザーで隠れていて口元しか見えないが、その形が僅かながら三日月を象ったのにラウラは気付いた。嫌な予感がして、咄

嗟にＧＮフィールドを周囲に展開すると、いつの間にか自分の周りを包囲していたドラグーンからビームが放たれた。

「あ～あ、防がれちゃった。まあ、それぐらいしてくれないと戦い甲斐がないんだけどね」

「くっ！」

ドラグーン全十一基からなる計四十三門のビーム砲によるオールレンジ攻撃がラウラに降りかかる。ＧＮフィールドといえども衝撃までは防げず、装甲が軋み出す。ある程度ビームを撃ったドラグーンはエネルギー供給のためにプロヴィデンスの背部ユニットに帰還する。それを見計らってラウラはＧＮフィールドを解除して、再びＧＮソード?を握る力を強めてＡに向かって三段階瞬時加速（トリプル・イグニッション）を使用しようとする。が、突如脳に激痛が走った。

「くそっ！これ・・・・は」

ラウラは『ヴォーダン・オージェ』の不適合により制御が出来ないと理由もあって左目に眼帯をしていた。それを外しての戦闘は動体視力、視覚解像度等を数倍に上げるなどの圧倒的なアドバンテージを得ることが可能である。しかし、今のラウラはそれを常時発動させているため当然の如く、脳には負担がかかる。しかも、今回はダブルオーライザーの反応に無意識に合わせていたため、その負担も大きいものとなっていた。

「これだから失敗作は・・・・」

誰にも聞こえないように呟いたＡはＫに目配せで指示をだす。それを見たＫは『はいはい』と言った感じで大型ビームライフルの銃口

を頭を抱えて苦しむラウラに向ける。

「バイバ～イ♪」

唇の端を吊り上げて指にかけたトリガーを引こうとした。その刹那

――――

ゴゴゴゴゴゴッ！！

《！？》

轟音を響かせながら大気が振動して、海がうねりをあげ始める。戦闘を行っていた者達は静止して周囲を見渡し、この現象の発生源を探していると、

ズガァァァァン！！！！！

凄まじい轟音が周囲に響き渡った。その場にいた誰もがギョッとして振り返ると、視線の先では海中から天を貫くほどに立ち上る巨大な黒い光の柱がある。序々に光が消えていくと中から赤いＩＳが姿を現し始める。

特徴的な長い四肢に真っ赤な装甲。腰部には増設された大きな追加アーマー。そしてその追加アーマーと両肩から黒い粒子が流れ出てる。

「ったく腹にビームサーベル刺しやがって・・・・さすがの俺でも痛かったぞ」

少しくせのある茶髪に金と赤のオッドアイ。その姿を見たラウラとななせの視界が涙で歪む。

「これ以上俺の仲間に手ぇ出すっつうんなら、テメェら纏めてブチ壊すぞ?まっ、答えは聞いてねぇけどなあ!」

本来の粒子色とはことなる漆黒のＧＮ粒子を撒き散らす、破壊の神が乗るのに相応しいガンダム。『ヤークトアルケー』を纏い、獰猛な笑みを浮かべる政志がそこにいた。

政志の鬼迫を当てられたM、R、Kはバイザーの下で一筋の汗を流していた。そのなか、Aだけは今の状況を冷静に分析している。

「（やはり生きていましたか。ここまではあの方の予想通りですが・・・）」

アルケーから出るGN粒子に着目する。

「（あのGN粒子は一体・・・・？）」

ハッキリ言って異常である。彼女の知り得る中で黒いGN粒子など見たことがない。・・・正確に言うのならこの場にいる者全員がそんなものなど見たことがなかった。それは政志とて同然である。状況が好ましく無いのは目に見えておりAは退却命令を出そうとする。

「M、R、K！ここは撤退しま――」

しかし、その指示は突如目の前に現れた両手にバスターソードを持った赤い影によって妨げられる。

「ところがぎっちょん！」

「なっ！（あの距離を一瞬で！？）」

自分に向かって振り下ろされる二本のバスターソードをAはエクスカリバーで受け止めるが、GN粒子の放出量が上がると同時にエクスカリバーが両断された。右肩の新装備のGNランチャーに光が収束し始め、砲口がAに向けられる。

「逝っちまいなぁ！」

しかし、粒子ビームが放たれる直前に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使ったKがAを抱えてその場から離れた。放たれた真っ赤な粒子ビームは黒い雷を纏っているようにも見えた。ラウラは近くまで来ている政志に頭を片手で押さえながらも声を掛ける。

「政志・・・お前・・・・」

「言いたいことが山ほどあるのは分かるが、後にしろ。それと」

ホレ、と言って政志が投げた黒い何かをラウラキャッチした。

「それ着けてジッとしてろ。すぐに終わらせる」

それだけ告げて政志はラウラに背を向けて、AとKに視線を移した。ラウラの手に握られているのは昔に政志に渡した黒い眼帯。嬉しさのあまりに頬を緩めながらも左目にそれを着けたラウラは政志の背中を見る。いつも自分を守ってくれる、大きな背中を・・・・。

「で、どうするの？これから」

「まだ死にたくありませんからね。全力で逃げましょう」

Kのおかげで何とかGNランチャーから逃れたAは改めて撤退を指示する。しかし、政志が『はい、どうぞ』と逃がしてくれるはずがなく再びGNランチャーの標準を二人に合わせる。

「これでも食らいなよっ！」

危険を感じたKは全てのドラグーンを政志に向かわせ、それを見た政志はすぐさま腰部の追加アーマーから六基のファングを射出した。ドラグーンから放たれるビームをファングの精密操作で回避させる。ビーム砲門の数なら圧倒的にドラグーンの方が有利なのだが、一基も落とせない。

「へぇ、なかなかやるじゃねぇか」

ファングもビームを放つがドラグーンを落とせないでいた。それを見た政志は感心したような顔をしながら、残りのファングを射出する。ファングに向ける意識を更に高めると、動きが急変して計十二基のファングの先端からサーベルが展開された。そして、複雑な軌道を描きながら次々とドラグーンを貫いていく。

「ちょっ、嘘でしょ！？」

全てのドラグーンが破壊されて驚くなか、政志が二人に向かう。AとKの危険を察知したMとRは政志を左右から挟み撃ちにしようと瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使って奇襲を掛ける。

「「はあああああっ！！」」

両サイドから振り下ろされるビームサーベルを政志はバスターソードを構えて難無く受け止める。どれだけスラスターの出力をあげようが政志はビクともしない。圧倒的するぎる力の前に口元が歪む二人を政志は鼻で笑い、ファングを二基ずつ射出させてビームを放った。赤い粒子ビームを受けてフリーダムとジャスティスの腹部の装甲が爆壊する。

「M、R！」

爆発で吹き飛ぶ二人をAとKが受け止める。一カ所に集まった四人に政志は右手に持ったバスターソードの切っ先を向ける。

「一応聞くが、投降する気は無いか？」

「「「「・・・・・」」」」

最終警告を受けても四人は沈黙を続けており、少し残念そうな顔をした政志はバスターソードにGN粒子をチャージする。両手に握られたバスターソードが振るわれると、深紅のビーム刃が放たれた。

しかし、

「悪いが、助太刀させてもらうぞ！」

その言葉が周囲に響くと同時に、A達の前に現れた黒と赤のISが

振るうオレンジ色のビームサーベルによってビーム刃が弾かれた。
いきなりの出現したこのＩＳを見た政志達は言葉を失った。

フラッグに似た外見に、両腰の鞘にも見えるサイドバインダー。両肘と両肩にある突起のついた装甲と足の裏に半楕円形。肩には、その上に半楕円形の装甲が付いており、胸の部分に剣道で使う胴の様なものがある。そして背中の中央の白い突起物からは赤みを帯びたオレンジ色の粒子を放出していた。それは見間違いようがない、ガンダムの核となる粒子。

「ＧＮ、粒子・・・・！？」

ななせの驚嘆の声が聞こえたのか、そのＩＳの操縦者がななせの方を見る。その者はＡ達と違ってバイザーではなく、どういうわけか武将が着けてそうな仮面をしている。潮風がオレンジの髪を揺らし、口を開いた。

「初めましてだな、黒い堕天使。そして地球連邦と各国の代表候補生諸君」

《（男！？）》

最初に聞いた時はそのＩＳに目がいって声色など気にしなかったが、改めて聞くと男の声だと気付いた。ななせを見た後、ラウラ、クリス、龍鳳、箒へと視線を移して最後に政志を見つめる。

「単刀直入に言おう。今回は我々を見逃してもらえないだろうか？」

圧倒的な有利な状況でそんなことを許すはずがなく、龍鳳がその仮面男に食ってかかる。

「何アホみたいなことぬかしとんねん！そんなことするはずーーー」

「あぁ、分かった」

「政志！？」

「その聡明な判断に感謝する。お前達、直ちに帰還するぞ」

仮面男はA達にそう告げると政志に背を向けて飛行を開始して、その後をA達がついて行く。これにはさすがの龍鳳とクリスも黙ってはいられず政志に問いただす。

「おいっ！何であいつらをみすみす逃がすんや！？あいつらは敵やぞ！？」

「殺せとまでは言わないけど、あの仮面の男だけでも捕まえても良かったんじゃないの？」

二人のもっともな言葉を聞いた政志は仮面の男が去っていった方角を見据えていた。

「お前らは気付かなかったのか？あの男の力量に・・・・」

「「え？」」

「政志の言うとおり、あのまま戦闘を続けてたら・・・・どっちもただでは無事では済まなかったと思う」

あの仮面の男にそれほどの実力があるとは思えないが、政志となな

せが今までにないぐらい真剣な表情で言うので信じるしかない。そんな緊迫した空間に、あの馬鹿が現れた。

「お～い。みんな無事か、ってあれ・・・・何かあったのか？」

「どう考えても、何かあったのに決まってんだろ。馬鹿かお前は」

声にする方に目を向けるとそこには自機をぼろぼろにして海水を浴びてずぶ濡れになったアルとヴィンスがいた。よく見ると鈴達も無事なようだ。長かった戦いがようやく終わり、帰還しようとした。その時だった――――

ズガァァァァン！！！！！

《！？》

大きな水しぶきを上げながら、海中から全身がショートしてヒビの入った装甲から火花を散らす黒いＩＳが飛び出してきた。そのＩＳを見た一同は表情を険しくさせた。

「お前は・・・・」

政志が目を細めて見据えるその先には、今日自分達と戦闘を行った漆黒の竜戦士（ジェラック・ヴォルグレイシス）が蹌踉けながらもドラモンキラーを構えていた。

「たた・・・・かえ・・・・・。俺と・・・・・戦え！」

弱々しく言葉を発するところを見るともう限界なのが分かる。両腕を空に掲げて赤いエネルギー弾を形成していく。しかし、それは政志達が知る中でも最も巨大なガイアフォースだった。

「もしかして、あれって結構まずい？」

「正直に言うと・・・・滅茶苦茶ヤバイぞ」

漆黒を初めて見るシャルの質問にアルが答える。あれだけ巨大なものが直撃したら、即死すること間違い無し。かと言って回避して、海に着弾させると生徒達がいる島にも被害が及ぶ可能性がある。そうしようもない状況にクリスがＧＮバズーカ？の砲門を漆黒に向ける。

「だったら、撃たれる前に撃っちゃえば良い話でしょ？」

ぶっちゃけた話、それが一番てっとり早いのだ。が、クリスの砲撃を政志がバスターソードで制す。その行動の意味を理解したクリスは呆れた表情を浮かべながらＧＮバズーカ？を降ろした。二人のやり取りを見た一同は政志が何をやろうとしているのかすぐに分かった。

「あいつは俺目当てでここまで来たんだ。だから・・・・俺がケジメをつける！」

政志は両手に持ったＧＮバスターソードの刀身の背と背を連結させる。ガチャンと金属音をあげながら刀身がスライドして巨大な実体剣『ＧＮバスターブレイド』にすると同時に、漆黒は限界まで威力を上げたエネルギー球を投げた。

「ガイア・・・・フォーーーース！！」

迫りくる攻撃に政志は全く動じずにいた。柄の部分からＧＮ粒子が

供給されて刀身全体が粒子ビームと同じ色に染まり、右肩後ろに大きく振りかぶる。皆が固唾を飲んで見守る中、全てを破壊する紅の刃が振り下ろされた。

「デストラクション・・・・」

「ブレイカー」

放たれた極大のビーム刃はガイアフォースとぶつかり合いながら、衝撃波を起こし、その真下の海面を大きく凹ませる。そして序々に混じり合って、

ドガァァァァン！！！！！

爆発は放った持ち主すらも飲み込む光を生み出した。ドームのように広がり、他の人物から見たそれは、地上に出来た太陽に見えたという。

「「・・・・」」

光が消えると赤と黒は無言のまま立ち尽くしていた。そして数秒後

に・・・黒が海に落下し始めた。アル達は心の中でガッツポーズをするが、ラウラだけはどこか浮かない顔をしている。重力に従いながら、漆黒は自身の被害を確認していた。

「（機体損傷率８７％、戦闘不可能・・・・完全に俺の負けだな）」

自虐的に鼻で笑いつつ、自らの死期を悟る。

「（とうとう俺が心を持った理由は最後まで分からなかったか・・・・。しかし、破壊神と戦えただけでも良しとするか）」

後は海に落ちて沈むだけ。それで漆黒は最期を迎える・・・・はずだった。

「お前・・・・それで良いのか？」

その言葉を耳にした漆黒は右腕を何かに掴まれたのを感じた。落下している身体は海面ギリギリで止まっており、腕を引っ張られて肩に掛けられる。そして顔を横に向けるとそこには、

「すず・・・・き・・・・まさ・・・・し」

「お前、俺に聞いたよな？どうして心があるのかって」

「・・・・あぁ」

「そういう面倒な答えは自分で見つけ出せ。必死に藻掻きながらな。それに心があるのも悪くねぇぞ？」

政志はニカっと笑いながらそう言うと、漆黒の中で暖かい何かが生

まれた。そして、それが心から発せられていると気付く。

「（これが・・・・心というものか・・・・・。なら、確かに）」

『悪くないな』

満足気な顔した漆黒の身体が光に包まれると、次の瞬間には恐竜的なモフモフしたヌイグルミになっていた。これが漆黒の竜戦士（ジェラック・ヴォルグレイシス）の待機状態である。そして夕闇の空に月が見え始め、皆の方を向いた政志は戦いの終わりを告げる。

「じゃあ、帰るとしますか」

《おう！／うん！／はい！／だな》

十二人の少年と少女はその場を後にした。

今回の戦いで得たのは、新たな力と――――新たな謎。この謎こそが、物語を大きく動かすことなど

誰も知りはしない・・・・

Ｒｅｔｕｒｎ Ｔｈｅ Ｄｅｓｔｒｏｙｅｒ（後書き）

◇予告◇

「なしてえええええ！？」

「どうして、アルケーに生体再生が出来たと思う？」

「お前になら任せれると思った・・・それだけだ」

「私は御覧の通りの軍人だ」

「もうじき会いに行くからね」

「それ・・・俺のなんだけど」

～次回～

『月夜と謎と動き出した闇』

お楽しみに！！

守り抜いた日常（前書き）

思ってたより長くなりそうなので二回にわけます

では、本編をどうぞ！！

「作戦完了・・・と言いたい所だが、貴様等は独断行動により重大な違反を犯した。学園に戻ったら反省文の提出と特別訓練を用意してやるからそのつもりでいろ」

「・・・はい」

激戦を終えた戦士達の帰還は冷たいものだった。腕組みをして待っていた千冬を見た瞬間、政志はそれなりの罰を受けるものだと思っていた。が、今回は珍しく政志の予想は外れる。一夏達は大広間で正座させられていたが連邦軍組にはそれが課せられなかった。1人を除いて。

「なぁ・・・・千冬」

「何だ、政志」

「俺達は説教無しでいいのか?」

「お前達には軍の要請があったのだろう?それで反省文や特別訓練は酷という物だろう」

「じゃあ何で俺だけ正座させられてるの!?」

一夏達に混じって正座させられているアルが千冬に訴えかける。政志はちらっ、と横で正座をさせられている仲間を見た。少なくとも三十分は正座を続けさせられていて、セシリアの顔は真っ赤から真っ青へと変色している。意識が飛ぶ危険信号にも見えた。

「・・・・ついでだ」

「なしてえええええ!?」

余りにも理不尽すぎる扱いに叫びを上げながらずっこける。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろその辺で・・・・。け、怪我人もいますし、ね?」

さっきから山田先生がわたふたしながら千冬を宥めている。救急箱やら水分補給パックを持ってきたりと忙しない。怒り心頭の千冬は仕方ないといった顔で説教を終わらせて、山田先生は急いで指示を出し始めた。

「で、では、一度休憩してから診断をしましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね・・・・あっ!だ、男女別ですよ!分かってますか、織斑君、ギアナ君、ヴィンセント君!?」

「「「(何で俺たちだけ・・・・)」」」

男子六人は大広間の出口に向かいながら水分補給パックを手に取って飲むと、健康を考慮してかぬるめの温度だった。

「ってて・・・・。うわぁ、口の中切れてるな」

「イッチー。そういうときはこれを飲め」

どこから取り出したのか、アルは黒い液体が入ったペットボトルを渡す。受け取った一夏はキャップを開けて飲む直前に龍鳳にアイコ

ンタクトを送る。

「（龍鳳、頼む！）」

「（任せとけ！）」

龍鳳はアルの背後に持ち前にスピードで回り込んで両脇に腕を通してホールドする。

「テメェ何のつもグボッ！？」

開いてる口にペットボトルの飲み口を突っ込んで黒い液体を流し込む。すると、アルは畳の上でのたうち始めた。

「ギャーーーっ！！し、染みるゥゥゥゥ！！」

「どう見ても怪しすぎるだろ、これ」

クリスはアルが飲まされたものが何か気になって、一夏に握られているペットボトルをヒョイと奪いとるとゴクゴクと男らしく一気飲みをする。

「ぷは～っ。あれ？これって、わさび・・・醤、油・・・・ドサッ」

「「クリスウウウウッ！！」」

馬鹿をやっている四人を尻目に、政志とヴィンスはせっせと大広間から出て行こうとするが無言で千冬が睨んでいることに気付いた。

「・・・・何すか、織斑先生？」

また説教でもされるのかと思い一同は身構えるが、その口からは予想外の言葉が出てきた。

「・・・・しかしまぁ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

《へ？》

まさかの労いの言葉に、十人は間抜けな声を出す。政志とななせは顔を見合わせて、素直になれない千冬にやれやれといった感じで溜息をつく。照れているのか、すぐに背を向けて表情が見えないようにする。

「「「「「・・・・・・」」」」」

ふと、男子六人はななせを除く五人の女子に睨まれているのに気付く。それを見たななせも顔を赤くさせて睨みだす。

「あの・・・・そろそろ女子の診察を始めるので、その・・・・」

「「「「「とっとと出てけ！」」」」」

すぐさま一夏と龍鳳は大広間から飛び出して、政志とヴィンスは、アルとクリスを引きずりながら、その後に続いた。ぴしゃりと襖を閉じた後、床にべたりと座った政志を除く五人は、同じタイミングで溜息を吐く。

「・・・・なぁ、みんな」

「「「「？」」」」

「俺たちは・・・・仲間を守れたんだよな？」

俺と――――白式は。

それを聞いたアルと龍鳳、クリスとヴィンスは顔を一度見合わせて、ニッと笑みを浮かべる。その笑みの意味を理解できない一夏を見た政志は、自らが背を預けている襖を親指で指す。

『箒って胸大きいね』

『そんな事はない。ななせの方が大きいんじゃないか？』

『『・・・・・』』

『ラウラも鈴もそんな顔してどうしたの？』

『そうですわよ。箒さんとななせさんの胸を凝視して』

『せ、セシリア！しーっ、しーっ！』

『『『・・・・あっ』』』

『で、でも大きくてもあまり良いことないよ？肩とか凝るだけだし』

『『巨乳は全員そう言うわーーーーっ！！』』

ギャースカと襖の向こうから聞こえる騒がしい音が聞こえてくる。

この声が、彼女たちの他愛のない会話こそ、二人が守りたかったもの。

「何が来ようが俺たちは、ただ守るだけ。・・・・それで十分だろ？」

一夏、アル、龍鳳、クリス、ヴィンスは政志のその言葉に頷き、六人はしっかりと拳をぶつけ合った。今日の戦いで守れたことへの祝福と、男の友情を確かめ合うかのように。

◇

ざぁ・・・・ざざん・・・・・。

「あなたと過ごした記憶が、水晶のように光ってる。濡れぬよう上を向いた、旅立ちは怖くない」

波の音と共に紡ぎ出される歌はとても綺麗で透き通っていた。満天の星空の下で、岩の上に座って少女は歌う。

「銀河に集う星たちが、変わらぬ火を放つように、リーベの唄を奏でよう、悠久の竪琴で。遙ｋ・・・・誰？」

自分に近づく気配を感じたななせが振り向くと、

「歌・・・・上手いんだな」

「ラウラ・・・・」

ななせと同じく水着姿になったラウラがいた。髪型は自分で何とかしたのか、サイドテールにしている。裸足でいるため、足の裏を岩で切らないようにゆっくりと歩き、ななせと背中合わせになるように座った。二人は月夜を見上げ、お互いの表情が伺えないでいると、

ななせが徐ろに口を開く。

「ダブルオーのこと、聞きに来たんでしょ？」

「・・・・あぁ」

ラウラは気になってしょうがなかった・・・・。世界最高峰のガンダムの中でも、特にダブルオーライザーは異端機であることなど、一目見ただけで誰でも理解できる。そんな代物を、どうして自分が有していたのかが。

「政志に聞いても、答えてくれる気がしないからな」

「ははっ、そうだね。政志、意外と頑固だから」

「それで・・・・どうして私のシュヴァルツェア・レーゲンに、ガンダムが組み込まれていたんだ？」

「学年別トーナメントの時、ＶＴシステムが暴走したよね？それを止めるために政志、ちょっと本気出して・・・・シュヴァルツェア・レーゲンのコアを酷く損傷させちゃったの」

「えっ？」

「あたしと政志は、二人で何とか直そうとしたんだけど、さすがにどうしようもなくて・・・・。そこで政志が提案したのが『二つのＩＳの強制結合』。実はというと、あたしは反対だったんだよ？・・・・政志がダブルオーを手放すのに」

「・・・・」

表情を曇らせながらラウラは、ななせの話を聞いていた。あの暴走のせいで、そんなことになっていたのを知らずにいたのが情けなく、心をどんよりとさせる。夜空から海に視線を移したななせは、呆れながらも頬を緩める。

「やっぱり、本人に聞いた方がいいよ。丁度、そこにいるし」

背中を合わせるのを止めたラウラは、ななせが海に向かって指を指しているのに気づき、その先に顔を向けるとていると、

「ふうっ・・・・」

海面から人の頭が出てきた。その者は首を振って海水を飛び散らした後、ラウラとななせの視線に気付き、海から上がる。

「何やってんだ、お前ら？」

「「それはこっちのセリフ（だ）」」

濡れた前髪を掻き上げる政志に、二人はアリオス並の速さで突っ込む。食事の後、何処かに行くのが見えたが、どうやらずっと泳いでいたようだ。漆黒とＡにボロボロにされた身体は何故か治っており、むしろいつもより調子が良いらしい。

「別に、ただ泳いでただけだよ。じゃあ、俺は戻るから、お前らも出来るだけ早く――――」

「政志っ！」

爪先を旅館に向けて帰ろうとする政志に、ラウラが声を上げて呼び止めるが、予想以上に大きな声を出してしまったことに、おどおどし始める。

「いや・・・その、だな・・・・」

「（はぁ・・・・何やってんだか）」

それを見かねたななせは、仕方なく助け船を出した。

「いい加減教えてあげたら？」

「何をだ・・・・？」

「分かってるくせに、良く言うよ」

「・・・ちっ。言えばいいんだろ、言えば」

さすがに観念したのか、政志は面倒臭そうに振り返り、ラウラと目を合わせる。見つめられたラウラは顔を赤くしてしまい、視線を逸らそうか考えたが、政志の真剣な瞳を前にしてそれをが出来なかった。

「ダブルオーをシュヴァルツェア・レーゲンに突っ込んだ理由が聞きたいんだろ？」

「・・・・（コクリ）」

無言で肯定の意味が含まれた小さな頷きに、政志はやれやれといった顔をする。

「お前になら任せれると思った・・・・それだけだ」

「へ？」

予想外の答えにラウラは目が点になり、それだけ伝えた政志は再び二人に背を向けて歩き出した。しかし、

「・・・・ファング」

足を止めて、大きな岩場に顔を向けていたと思ったら、いきなりアルケーを展開してファングを射出した。しかも、十二基全てを。

ドガァァァァァン！！

十二本の粒子ビームを受けた岩は、爆壊して煙を上げる。唐突すぎる政志の行動に驚くが、煙の中から飛翔する５つの影を見て、その行動の意味を理解した。

「政志ィィィ！お前、俺たちを殺すつもりかぁ！！」

「さっきの攻撃、ガチやったやろ！？」

「そうよそうよ！死んだらどうするつもりよぉ！」

「避けたから無事ですみましたけど、鈴さんの言う通りですわ！」

「・・・だから覗きなんて止めようって言ったのに」

何とか九死に一生を得た五人こと、アル、龍鳳、鈴、セシリア、シ

ャルは各々の意見を主張する。発言からしてシャルは、あまり乗り気では無かったみたいである。

「俺がこそこそされるの嫌いだって知ってるだろ？」

「「「「だからって殺そうとする奴があるかーーーっ！！」」」」

「ったく、一々うるせぇ奴らだなぁ。・・・そうだ。お前らもケルディムとアリオス展開してるし、俺がちょっと揉んでやるよ」

ニヤリと口端を吊り上げながら、政志は左肩からバスターソードを二本抜き取る。今のアルケーから放出されているＧＮ粒子はオリジナルの太陽炉特有の緑色である。漆黒との戦闘を終え、帰還している際に、いきなり黒から緑に変わったのだが、機体自体に何の支障が無かったため気にとめなかった。

「望むところだ！いつまでもやられっぱなしでいると思ったら大間違いだぜ！！」

「一丁ここで何とかせな、この先ずっとオチに使われそうな気がするしな！！」

「「おう！！」」

「もお、みんなしょうがないなぁ・・・・」

アル達もメインウェポンを構えて戦闘態勢に入る。なんだかんだで、これにはシャルも乗り気らしい。

「一対五は、フェアじゃないと思うよ？」

「ふっ、だな」

政志の両隣に立ったラウラとななせはダブルオーライザーとディアボロスを起動させる。それを見たアル達はダラダラと汗を流し始めた。

「ちょ、ラウラっ！あんたシュヴァルツェア・レーゲン使いなさいよ！」

「勝手にダブルオーが起動したんだ。私の意志では無い」

「くっ！よくもそんな見え透いた嘘を・・・・」

ディアボロスとツインドライヴを積んだアルケーとダブルオーを相手にするなど命がいくらあっても足りない。ななせに至ってはＧＮツインバスターライフルを構えている。

「ヤークトアルケー」

「ディアボロス」

「ダブルオーライザー」

「「「目標を破壊（殲滅）（駆逐）する」」」

「「「「「戦略的撤退ーーーっ！！」」」」」

アル達はフルスピードで政志達から逃げ出した。綺麗な月明りと星明りに照らされながら、遠目から見たらワンサイドゲームにしか見

えない鬼ごっこが始まった。もっとも、捕まったら命の保証は出来ないが・・・・。

◇

時は少し遡り、一夏は箒に呼び出されて砂浜へと来ていた。

「んで箒、話って何だよ？」

一夏に問われ、水着姿の箒は指をもじもじさせる。当然、一夏も水着だ。話をするのを逡巡していた箒だが、意を決して一夏の瞳を見据えた。

「一夏、まず最初に、助けてくれてありがとう」

「助け？　・・・あぁ、あの時か。そんな礼を言う事でもないだろ。仲間を助けるのは当たり前なんだから。話って、それだけか？」

「え？あ、あぁ、それと・・・私のせいで、お前にケガをさせてしまって・・・すまない・・・」

「なんだ、そんなことか。それならもう大丈夫だって言っているだろ？」

ホラ見ろと言わんばかりに一夏は福音から攻撃を受けた背中を見せる。一夏の傷も政志と同じく、目が覚めた時には無くなっていたようだ。本当に傷跡が残っていないのか、まじまじと全身を見た後、ホッと胸を撫で下ろす。

「そうか、それならいいんだが・・・」

まだ何か言いたいことがある箒。長いこと押し黙っているが、一夏は押し黙って箒が話すのを待っている。再び指をもじもじさせて、

頬を真っ赤にしながら一夏を見た。

「い、一夏？その、えっと、あの・・・・／／／／」

「一体何なん――」

次の瞬間、一夏は言葉を失喪った。箒は目を閉じて唇をやや上方向に向けて突き出して、一夏がそれに答えてくれるのを待っていた。

「#$%&’（）～＝＾¥@：！！？？」

「・・・・・」

顔を四次元的に変化させた一夏は、改めて箒の顔を見ると、とても綺麗で心を奪われそうになった。箒の行動を理解した一夏は、静かに深呼吸して、箒の肩に触れる。一瞬だけ箒の身体が強張るが、改めて身を預けてきた。月夜の下で二人は吸い込まれるように近づいていく・・・・。

「箒・・・・・」

「一夏・・・・・」

キュイイインッ！！

「「・・・・ん？」」

キスが成立しようとした刹那、二人の額の間を桃色の閃光が過ぎ去り・・・・。

ドガァァァァン！！

――――大爆発を起こした。

「「・・・・・」」

粉々に砕けた岩をポカンと口を開けたまま二人は見ていた。原因となった閃光が飛来してきた方向を向くと、

『死ぬ死ぬ！これはマジで死ぬって！っていうか何で、お前は俺を狙ってくるんだよ！？龍鳳の方にも行けよっ！！』

『あいつなら、さっき俺が海の藻屑にしてやったぞ？』

『龍鳳おおおお！！』

アルがトランザムを使って政志から逃げていた。よく見たら、ななせ達も同じようなことをしている。ことの根源を理解した箒は肩をぷるぷるとふるわせ始めた。

「そうか・・・・そうかそうか、そうかあああああ！！」

一世一代のチャンスを邪魔された大和撫子は紅椿を展開させて武力介入を開始した。やれやれと溜息を吐きながらも、一夏も白式を起動させようとしたが、あることに気付く。

「（・・・・あれ？クリスとヴィンセントは何処に行ったんだ？）」

頭角を現せしは、鬼神と死神（前書き）

駄文になっちゃけどいいよね？

答えは聞いていない！

では、本編をどうぞ！！

頭角を現せしは、鬼神と死神

アル達が臨死体験をしてる同時刻。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めて四十二パーセントかぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった紅椿の戦闘データを眺めながら、篠ノ之束は無邪気に微笑む。今の彼女は岬の柵に腰を掛けた状態で足をぶらぶら揺らしている。その柵の下はには海が広がっており、高さは三十メートルぐらいはある。もし落ちてしまったら無事では済まないだろうが、それでも彼女は表情を全く変えない。そして、一枚ディスプレイを呼び出すと、そこには白式第二形態が福音と戦闘を行っていた。

「は～。それにしても白式には驚かされるなぁ。まさか、操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー００一にして、『幻騎士』と同じ初の実戦投入機、お前が心血を注いだ内の一機に、な」

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

深森から姿を現した千冬は、夜の夜と同化するかのような漆黒のスーツに身を包んでいる。二人の会話は互いに背を向けて行われている。それは、お互いがどんな顔をしているかが、見なくても分かる

からだ。そんな確かな信頼が、二人の間にはあった。

「ところでちーちゃん、この束さんにも分からないことがあります。それは一体なんでしょう？」

「・・・お前にも分からないことが、私に分かるとは思えんがな」

「どうして、アルケーに生体再生が出来たと思う？」

「さあな・・・・。私が聞きたいぐらいだ」

「私達が知る中で、先生が最初に作ったガンダムは『エクシア』、『デュナメス』、『キュリオス』、『ヴァーチェ』の四機。今はそれぞれの後継機にコアを移植されてるよね？」

束の言う通り、最初に製造されたガンダムのコアは実際にその後継機に使われている。ある機体を除いて・・・・・。

「先生の思い入れのある『エクシア』になら、生体再生システムが組み込まれても不思議じゃないんだけど・・・・そうなるとダブルオーにエクシアのコアが移植されてるから矛盾が生まれるんだぁ」

「残念だけど、それは違いますよ」

「「？」」

第三者の介入に、二人は声のする方に視線だけを向ける。白い髪を後ろで纏めて、幼さが残っている顔、地球連邦軍大将が一人、クリストファー・トールギス。

「だって最初のエクシアのコアは今、アルケーに使われてるんだから」

クリスは『最初の』というところを強調する。千冬は『ホゥ』と納得するが、それで新たな疑問が生まれる。

「では、ダブルオーに使われているコアは何なんだ？」

「あれは・・・・エクシアの、二番目のコアですね」

「二番目、だと？」

「そう、二番目。あの時は、政志が『ツヴァイ』で、ななせが『ドライ』、アルが『デュナメス』、龍鳳が『キュリオス』、ボクが『ヴァーチェ』。そして・・・・・・・・・美羽が『エクシア』に乗ってたんだ」

「「・・・・！」」

『美羽』という名前が聞いた瞬間、二人は目を見開き顔色を変えた。今では、視線だけでなくクリスに顔を向けている。

「美羽ちゃんって、確か先生の・・・・・」

「あぁ、実の娘だ・・・・」

『三年前に死んだがな』

政志が彼女を名前に以上に反応するのは、これが原因でもある。今は亡き千冬と束の恩師である『朝倉海苑』に、小さい頃の様々な理由で拾われた政志、ななせ、アル、龍鳳、クリスは彼の娘の美羽と同じ家で育てられた。その中でも、最初に拾われた政志は特に美羽と仲が良く、彼女が死んだ時の政志は、生きる屍と言われてもおかしくは無かった。それが今になって尚、心の奥底で痼りとなっているのだ。

「「「・・・・・」」」

気まずい辺りに漂い、三人の顔が暗くなる。すると、そんな空間に侵入してくる者がいた。その少年の顔は、クリスと瓜二つだった。しかし、その表情は険しく、鋭い空気を纏っている。

「ヴィンス・・・。どうしたのこんなところに?」

「お前、それ本気で言ってんのか?」

クリスの双子の弟のヴィンスは、ズボンのポケットから黒い何かを取り出し、束に向ける。

「今回の暴走事故を引き起こしたのは、この女だって・・・分かってんだろ?自分の妹を華々しくデビューさせるためにな!」

ガチン!と最終安全装置を外して、トリガーを引けばいいだけにする。束は自身にピストルの銃口が向けられているのにもかかわらず、全く動じずにいた。そして、

パァンッ!

銃声が響き渡り、木の枝に止まっていた鳥が一斉に飛び立っていく。しかし、弾丸が束に当たることは無かった。何故なら、トリガーが引かれた瞬間、束を庇った者がいたからだ。

「何で邪魔をする・・・クリス」

白いIS学園の制服が、血で赤く染まっていく。その出血源は心臓が位置する場所。顔を青白くさせた千冬はすぐさまクリスの元に駆け寄るが、

「ダメだよ、ヴィンス。お義父さんが死んでから、この人は影からボク達を見守ってくれてたんだから」

普通の人間なら即死しているはずが、クリスはぴんぴんしていた。運良く心臓を外れていたとしても、尋常じゃない出血の中、立っていること自体あり得ないのだ。クリスは千冬と束が自分を見て唖然としているのに気付いた。

「そういえば、二人は知らなかったね。ボクの身体のこと」

そう言って、クリスは制服の上着を脱ぎ、銃弾を受けた場所を二人に見せる。すると、

「そんな、馬鹿な・・・・！」

傷口が塞がっていた。そして、二人が驚く中、ぺっと口から小さな鉛を吐き出した。それはヴィンスが放った弾丸だ。

「・・・それが、君の先生に拾われた理由なんだね？」

「そうだよ。この化け物みたい身体のせいでボクは――――」

「クリストファーっ！」

ヴィンスの大声がクリスの言葉を遮った。どかどかとクリスの元に歩いていくと自分が着ていた制服をクリスに羽織らせて、血まみれになったクリスの制服を強引に奪った。

「その話を俺の前でするのは止めてくれ・・・・頼む」

「そうだったね。ごめんごめん」

ヴィンスの弱々しい声とは裏腹に、クリスはいつもの明るい笑顔で謝りの一言を送る。そうして、二人は千冬と束の顔を見ること無く、森の闇へ歩み始めた。姿が完全に消えた後も、千冬は二人が歩いていった方を向いている。重たい空気が流れる中、口を開いたのは束だった。

「ねぇ・・・・ちーちゃん」

「・・・・何だ」

「あの子達、今でも十分重いものを背負ってるっていうのに・・・・こんなのを見ちゃって大丈夫なのかなぁ？」

束はディスプレイを呼び出して、千冬に見せる。そこに映っているのは、政志と向き合う仮面の男がいた。

「とうとう出てきてしまったな・・・・太陽炉を搭載した機体が」

「でも、どうやってＧＮドライヴを製造したと思う？あれは私でも作るの無理な代物なのに」

「私が知ってる中で、あれを生み出せるのは先生となな―――・・・・いや、もう１人いるな。しかし、もしそうだとしたら、あいつらが歩む運命（みち）は・・・・」

「まさに、地獄だね・・・・」

一陣の風が二人の間を駆け抜けていく。それは心地悪く、悪魔の息吹にも似たものだった。辺りを覆う闇のように、これからの政志達の運命（みち）が黒く染まらないようにしてみせる、と千冬は心の中で誓ったのであった。

翌朝、一同はＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たっていた。十時を過ぎた辺りで作業は終了、全員がクラス別のバスに乗り込む。

「二人共、何だか燃え尽きてるけど・・・・何かあったの？」

「星が・・・・見えるぜ・・・・・」

「あれが、オニオン座か・・・・・」

「まずいな・・・・殺り過ぎて、馬鹿を進行させちまったか？」

指定された座席に座っているアルと龍鳳は全身を真っ白にさせて口

から魂のようなものが漏れている。かなり危険な状態だが、ギャグ補正で何とかなるだろう、と放っておいた。

「・・・・あっ」

バスの窓から外を眺めていた政志は、何かを見付けたのか窓を開けて、そこから飛び降りていった。いきなりの行動に隣に座っていたシャルが声を上げる。

「えっ、政志？もうすぐバス出発するよ！？」

「先に行ってろ、後で追いつく」

それだけ告げて、政志は森の向こうへと走っていった。何事かと、クリスと生き返ったアルと龍鳳が政志の走っていった方を見て目を細める。

「・・・・そういうことか」

「あいつも物好きやなぁ」

「ははっ、そうだね」

勝手に自己完結させた三人は政志同様に窓から跳び降りて、政志が走っていった方角へと足を進めた。

「クリスさん、どにに行くのですか！？」

「ちょっと待ってよ、アル！」

「俺達も行くか？」

「私は構わないが、ななせはどうする・・・・って、ななせ？」

「ななせなら、ラウラとさっきバスから降りていったぞ？」

何が何だかよく分からないまま、セシリア、シャル、一夏、箒はバスから降りて、アル達の後を追いかけていった。鈴とヴィンスが乗った二組のバスは、すでに出発しているため、ここにはいない。数秒後にバスに乗ってきた、山田先生と千冬が生徒達の点呼をとると十人足りないことに気付き、それが政志達だと瞬時に理解する。

「お、織斑先生！どうするんです、もう出発時刻は過ぎてますよ・・・？」

毎度のごとく、山田先生は慌てふためき、千冬は腕を組んで溜息を吐く。やれやれと言った顔をしているところからして、こうなることを予想していたようにも伺える。

「後、十分だけ待つ。それで来なかったら、走って帰らせるさ」

ストンと座席に座って千冬は待つ。丁度政志達が十分後に帰ってくるとも知らずに・・・・。

森の中に大きく広がる広場に、一機の全体が黒く塗りつぶされたヘリが止まっていた。軍服に身を包んだ屈強な男達が、おしゃれな青いカジュアルスーツを着た二人の女性を囲んでヘリへと歩んでいる。二人の女性の内の一人が抱えている腕の中には、特殊なクリスタルのケースがある。その中でペタンと脱力して座っているのは待機状態の漆黒の竜戦士（ジェラック・ヴォルグレイシス）だ。

「・・・・」

漆黒は沈黙を続けながら、これからの自分の処遇を考えていた。脱走したことで、より厳重に拘束され、モルモットにされるのだろう。しかも、政志との戦闘データが記録されているメモリは、ＩＳ研究者からしたら喉から手が出る程のものだ。最悪の場合、バラバラに

されるかもしれない。そんな事を考えている間にも、集団はヘリの乗口に足をかけようとしていた。しかしそれは、とある人物の介入によって中断されることになる。

「君は、確か・・・・」

「通りすがりの破壊神、とでも言っておこうか？」

ケースを持っていた、金髪の女性、『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の操縦者、ナターシャ・ファイルス。彼女がこちらに悠々と向かってくる政志に気付いた。

「茶髪に赤と金のオッドアイ・・・・そっか、君があの『紅蓮の破壊神（クリムゾン・デストロイヤー）』ね？」

紫の髪の女性がそう言うと、男達がざわめき出して政志に向かって敬礼する。いつの間にか、『紅蓮』のなどと形容詞がつけられグレードアップしているのを知った政志は、呆れながら頭を掻く。

「まあ、そういうことになってるらしいな。それより、身体の方は大丈夫なのか？『千年竜王（キングギドラ）』の操縦者、カリアナ・スレイプニル」

「ハハッ、まあね。でも堕天使ちゃんが手加減してくれてたみたいだから、軽い火傷程度で済んだよ。・・・・ところで、私達に何か用があるんじゃないの？」

「そーそー。忘れ物を取りに来たんだよ」

右腕をそっと上げて人差し指を漆黒の入っているケースに向ける。

「それ・・・・・・・・・」

「俺のなんだけど」

《・・・・・・・・・・はい？》

目の前の少年の言ってることが理解できず、思考がフリーズする。政志はナターシャ達があまりにも間抜けな声を出したので、呆れて溜息を吐く。・・・・今思うと、政志ってよく溜息付くよね？

「聞こえなかったのか？そいつは、『俺の』だって言ったんだよ」

当たり前のようにそう言われても、『はい、どうぞ』と渡す訳にもいかず、男達が困っていると、ナターシャとカリアナがクスクスと口から笑い声を漏らし始めた。

「面白いね、君。連邦の元帥閣下の御命令だけど・・・・どうする、ナタル？」

「それは聞いておかないと、連邦と戦争になったら私達米軍といえ

ども、すぐに負けちゃうからね」

態とらしくそう言いながら、ケースにパスワードを入力してロックを解除する。男達はナターシャとカリアナの行為に目を見開くが、二人はそんなことなどお構いなしにケースから漆黒を取り出した。

「・・・・」

漆黒は政志と目が合っても、口を開くことはない。受け取った政志は、ひょいと漆黒を右肩に乗せて、満足気な表情になる。そんな一人の少年と一機のGDを見送りながら、ナターシャ達はヘリに乗り込んだ。

「それじゃ、白いナイトさんによろしくね」

「今でカッコイイけど、次に会う時はもっと素敵な男性になっててね」

プロペラが回り始めて、風圧で草が横倒しになる。窓から手をヒラヒラと振って去っていく二人を、政志と漆黒はヘリが黒い点になるまで見ていた。すると、漆黒がようやく口を開いた。

「お前は、俺を一体どうするつもりだ?連邦のモルモットにでもするのか?」

「そんなつまんねぇことを、俺がするとでも思ってんのか?」

「それもそうだな」

「ところで、これからお前の事なんて呼べばいいんだ?漆黒の竜戦(ジェラック・ヴォルグレイシス)

士は長いし・・・・」

「ふんっ。勝手になんとでも呼べばいい」

「そうか・・・じゃあ、お前今日から『ロシナンテ』な」

ＫｉｎＫｉ　Ｋｉｄｓの堂本　剛が出ていたドラマに、よく似た名前の犬がいたのは気のせいだろうか？

「・・・悪くはないな」

漆黒、もといロシナンテはその名前を気に入ったのか、ご機嫌なようだ。二人の後ろから多くの足音が聞こえて、振り返ると、こちらに向かってくるアル達がいた。

「お前の説明するのメンドクセェんだけど」

「じゃあ、引き取るな・・・・」

悪態をつかれながら、新たな仲間の説明をするために、政志は驚いた顔をしている皆の元へ歩き出した。彼らを照らす日輪はロシナンテを歓迎するかのように輝いてたと、誰かは語ったとさ・・・。

とある施設の暗い廊下を歩く影が一つある。日本風の濃い緑色の羽織を身につけ、武将のような仮面を付けた男だ。曲がり角から、二人の女性が出てきて、その仮面の男の進行を妨げる。

「私に一体何のようかな？」

「とぼけんじゃねぇぞブレイド！昨日勝手に『スレイヤーズ』を動かしやがって！！」

「スレイヤーズ？あぁ、彼女達のことか。無事に帰還したのだ、文句を言われる筋合いは無いが？」

粗野な言動が目立つ美女に、ブレイドは胸倉を捕まれる。それに全く動じず、自信に満ちた目をするが、それが彼女の神経を逆撫でさせる。

「お前等は一体何なんだよ!?」

「私は御覧の通りの軍人だ」

「そういうわけわかんねえとこがムカつくんだよ!!」

「私には報告すべきことがあるので失礼するぞ、ミス・オータム」

優しく腕を払ったブレイドは丁寧にお辞儀をして歩き始めた。オータムと呼ばれた美女は額に青筋を立てながら腰からナイフを抜く。

「あの野郎、今日という今日は・・・・!」

「やめなさい、オータム。あなたじゃ彼には敵わないわ」

「スコール・・・・」

今にもブレイドに斬りかかろうとしていたオータムを、もう1人の金髪の美女スコールが止めた。

「もう忘れたわけではないでしょ?私、あなた、A、M、R、Kが同時にかかっていったのに、ブレイドとそのIS『マスラオ』に掠り傷一つ負わせられなかったことを」

「でも、あの2人は、スレイヤーズの体から勝手にナノマシンを取り除くわ、GNドライヴを作れるわ、もう無茶苦茶だらけだぜ!?」

「それでも、私達にとって有益な情報を提供してくれていることに変わりはないわ。そのおかげで、イナクトからフラッグ、今ではガンダムタイプまで製造出来るようになったわ」

「・・・そうだけどよ・・・」

「今は様子を伺っていればいいわ。それに・・・・下手に『死神』の怒りを買ってしまったら、命は無いでしょうしね・・・・」

オータムとスコールと分かれたブレイドは、しばらく歩き続けて、

とある部屋の前で足を止めた。いつものように、ノックもせずに堂々とドアノブに手を掛け、部屋の中へと入っていった。その部屋は様々な機材で埋め尽くされていて、研究室にも見えなくはない。中央に位置する大きなモニターの画面を眺めていた白衣の女性は、視線をモニターからブレイドに移した途端に顔をしかめた。

「・・・・いつになったらあなたはノックを覚えるのかしら？」

「ふっ。そう思うなら鍵を付ければいいだろう。もっとも私が壊さないような頑丈なモノをだが？」

「はいはい、そんなことはいいから。さっさと報告済ませてくれない？」

白衣の女性がどうでもいいようにあしらい、本題に入ると、ブレイドは顔を険しくした。

「一言だけで説明するのなら、まさに好敵手といって過言ではない。それと、私のマスラオを見た彼らの反応は君の予想通りだったよ」

「ふふっ、そうだろうね。全部マスラオを通して見てたから、面白かったわ」

白衣の女性が楽しそうに一回転すると、白衣がスカートのように舞う。再びモニターに目をやって、コンソールを弾きだすと四つの機体のデータが映し出される。

「それにしても、アリスのインパルスと、恋（れん）のジャスティスって特に目立った特徴が無いのがあれなのよ。マドカのフリーダムと輝火（かがほ）のプロヴィデンスは自信作なんだけど・・・・」

「すでに強化プランを立てているというのに、どの口がそんなことを言うんだ？」

「まあ、そうなんだけどね」

再びコンソールを弾くと、先ほどの物とは違う四機のデータに変わり、ブレイドはホゥと興味津々の眼差しでそれを見る。

「『デスティニー』、『ストライクフリーダム』、『インフィニットジャスティス』、『レジェンド』か・・・。どれも中々の機体に見えるが？」

「GNドライヴ無しのガンダムタイプの中でも最強と言ってもいいレベルにしたわ。このぐらいにでもしないと相手にならないから」

『ガンダムにはね』

そう言って次に映し出したのは、戦闘を行っているヤークトアルケーとダブルオーライザーの二機。何を隠そう、ダブルオーを奪ってくるようにアリス達スレイヤーズに頼んだのは彼女なのだ。彼女は今、黒いGN粒子を放出さているアルケーを纏った政志を凝視している。

「もうじき会いに行くからね」

ふふふ、と女性は小さな笑い声を唇の間から漏らす。そんな口元を左手で隠そうとするが、隠しきれず口の両端がはみ出ている。左手の白と紫のブレスレットが、モニターの光で乱反射して映し出す彼女の笑みは、命を刈り取る『死神』にも見えた・・・。

頭角を現せしは、鬼神と死神（後書き）

やっと臨海学校編終わりましたよ

色々とおかしなところがあると思いますが、そこは作者の文才の無さに免除してください

次からは夏休み編かな？

お楽しみに！！

次章予告。夏休み編（前書き）

思いついたのを大雑把に書いたので、気にしないでください。

それとこの作品のＯＰ的なものを作るとした場合、良い曲があったら感想に返事を下さい。お待ちしてます。

ある作品から、とある二人の貸し出し許可を頂いたので！！

では、どうぞ！！

次章予告。夏休み編

政志達は馬鹿をやりながらも夏休みを平和に過ごしていた。そんな彼らの前に、一人の赤い美少女が現れる。

「お前・・・・人間か？」

「それが初対面の相手に対して言う台詞かよ・・・・」

勘違いで戦う羽目になった政志は美少女とそのＩＳ『バルディッシュトライワイト（黄昏の黒斧）』の強さに圧倒されてアルケーを起動させるが、戦いの最中でツインドライヴに不具合が生じて動かなくなる。

「おいおい、マジかよ・・・・！」

しかし、そこに駆け付けた一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、そしてラウラの六人を見た途端に、顔色を変えた美少女は何かを考えてある結論に至る。

「私の名前は夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）。この世界と酷似した並行世界から来た者だ」

《・・・・・・・・・・・・はい？》

「お前達に、私とこの世界に来た月光夜明（げっこうよあけ）という男を助けるため、力を貸しもらいたい」

太陽の頼みに政志達は顔を見合わせるが、彼らの中では答えはすでに決まっていた。

「丁度、アニメの放送が延期になって暇していたところだ。俺達でいいのなら、いくらでも力貸してやんよ」

「それで、その人は今何処にいるの？」

「夜明は今、ある軍事組織の本部に収容されている。その組織の名は」

「『地球連邦軍』」

太平洋のど真ん中に位置する連邦の本部へと赴いた政志達は、夜明が収容されている部屋に向かおうとするが、亡国機業（ファントム・タクス）の襲撃に合う。

「フォビドゥン、カラミティ、レイダーだと！？」

「亡霊共が・・・・地獄から舞い戻って来たかっ！」

連邦軍は応戦するものの、敵の圧倒的な数を前に押され始める。そんな中、政志はあることを思いついた。

「・・・・その夜明ってやつは、強んだろ？」

「あぁ、私を惚れさせたあいつは・・・・誰よりも強いさ」

「じゃあ、そいつにも手伝ってもらったら良くないか？」

《・・・・・・・・・・・・・・あっ》

収容所から開放された銀髪銀眼の少年、月光夜明は頭を掻きながら状況を把握して、ＩＳ『レイジングウィング（不屈の翼）』を展開する。

「何だかよくわかんねぇが・・・俺の仲間に手は出させねぇぞ！！」

夜明の協力があって、何とか亡国機業（ファントム・タクス）を撃退した政志達と夜明はすぐに打ち解けていった。しかし、

「お前、俺と同類やろ・・・・・？」

「ということはお前も・・・・・・・・・闘うための存在に変えられた人間か」

次々と明らかになる過去。それと平行して破壊神の血族も姿を現す。

「久しぶりね、お兄ちゃん」

「お久しぶりです、兄さん」

《兄さんんんんんん!?》

「・・・そうだよ。茜（あかね）と天空（そら）は俺の妹だよ」

そして、『破壊神の再来』とも言われる少女の正体とは?

「この音楽キチが・・・今まで何処ほっつき歩いた?」

「オタクのクソ兄貴にだけは言われたくないね。行くよ、バンシィ!」

【【ＩＳ－Ｄ　発動】】

白き一角獣と黒き百獣の王がぶつかり、ダブルオーのトランザムを発動させれず、苦悩に明け暮れていたラウラに太陽が導きを与える。

「違う世界とはいえ、やはり本質は同じなんだな」

夜明と太陽を交えて更に日常が混沌と化しているなか、またもや襲撃を受けるがそれは予想外の人物によるものだった。

「俺の行く手を阻む者は全て排除する・・・それが俺の天の道だ」

「あんた誰だよ?」

「逢沢帝（あいざわみかど）。コアナンバー０００のＩＳ、『幻騎士』を持つ男だ」

「俺達・・・いつになったら、あっちに帰れるんだぁ？」

「さあな」

元の世界にいる仲間を想い、帰える手立てを考える最中、地球が危機にさらされる。

《超巨大隕石だとおおおおお!!??》

一同の前に映されたディスプレイに隕石のデータを誰もが見つめる。

「それが地球に迫ってるって言うのですか!?」

「もし、直撃したら・・・・どうなるの?」

「どう考えても・・・・木っ端微塵になるだろうね」

鈴とセシリア、シャルが各々の感想を述べている横で、夜明は頭を掻きながらディスプレイを覗き込んでいる太陽を見た。

「ふ~ん・・・どう見る、太陽?」

「普通に潰せるだろ。お前とレイジングウィングなら」

「つうわけど、俺がぶっ壊して来るわ」

「・・・お前は本当に馬鹿だな」

「政志?」

「それを言うのなら『俺が』じゃなくて、『俺達が』だろ?」

世界中に降り注ぐ大、中、小の隕石を地球を守ろうと多くの仲間が砕いていく。しかし、その奥から更に巨大な隕石が現れる。

「ＧＮツインバスターライフル・・・・発射っ！」

「ハイパーバーストモード。圧縮粒子、完全解放！」

「ファイナルエリシオン！」

「スターライト・フルバースト！」

そして、赤と黒に変革の兆しが見え始める。

「「トランザム、ライザァァァァァ！！」」

「お兄ちゃんは・・・・優しすぎるのよ」

「ボクは化け物なんだよ。死にたくても死ねないね」

「お前は変われ。お前がお前であるために」

「いつになったら・・・・！俺はあいつから解放されるんだよっ！！」

「だって、マサシはあたしの犬だもの」

「あの二人は・・・・純粋種となり得る器だと言うのかっ！？」

「おいおい、マジかよ・・・・！」

「俺とアルケーに出来なかったことが、今までにあったか？」

「いつかまた会おうぜ」

「ダチ公」

青春するなら夏休みだよね！（前書き）

徹夜でＤＶＤ見てたら体調を崩してしまいました。

八月？に発売のヤークトアルケーのガンプラが楽しみで仕方がありません！

では、本編をどうぞ！！

時は流れて、クソ暑い日差しが照り出す八月になっていた。外では蝉が短い命を無駄にしないよう、懸命に鳴いている。寮の廊下で、ある人物の部屋へと向かっていた鈴は、テクテクと歩くロシナンテを見付けて、すれ違い間際にしゃがみ込む。

「ロシナンテ、お手」

「・・・・・」

どうやら、この中華娘はロシナンテと犬を同視しているようだ。手を出されたロシナンテは、嫌々ながらも手を置いた。そのモフモフとした触り心地に、鈴の目が『ほわわ～ん』と緩み出す。

「（またか・・・・）」

因みに、ロシナンテは最新型のａｉｂｏということになっているため、廊下を歩いていても怪しまれない。しかし、戦闘時の姿とは似ても似つかない待機状態は、女子の心を擽るには持ってこいである。廊下で誰かとすれ違う度に、撫でられたり、抱きつかれたり、お持ち帰りされそうになったりと苦難を強いられていたが、最近ではセンサーを使って人通りが少ない道を利用している。

「・・・・もういいか？」

「うん、ありがと♪」

ロシナンテが手を離すように催促すると、鈴は満足気な笑みを浮か

べて再び歩き出した。しかし、ロシナンテから貰った癒しは数秒後に消える事となる。

「あっつぅ・・・・」

鈴はこの日本の暑い夏が大嫌いだ。それも・・・・『クソ』が付くぐらいに。

「（あいつ、これで部屋にいなかったら死刑よ、死刑！それもエッグ～イやつで！）」

理不尽な怒りの炎を燃やしてダラダラ歩いていると、目的の部屋の前に着いた。すぐにノックで部屋の主を呼び出そうとするが、一行に返事が返ってこない。そこでドアノブに手を掛けると、鍵が掛かっていないのか回った。『もしや居留守でも使われたのでは？』と思った鈴の鈴の怒りは、その勘違いと暑さからくるイライラが同調して、ツインドライブの如く二乗化されていく。

「ちょっと龍鳳っ！あんたいるなら返事しなさいよね！！」

勢い良く開けられたドアは、衝撃に耐えきれず外れてしまう。そんなことなど眼中にない鈴は、部屋の中を見渡すが、本当に誰もいない。部屋の隅には全ての段が埋まっている本棚と、お菓子の袋が大量に入っているダンボール。龍鳳とクリスの趣味が一目で分かる。思っていたよりも整頓されていて、感心するが、この部屋に来た本来の目的を思い出してシュンとなる。

「（どこ行ってるのよ・・・・）龍鳳の馬鹿・・・・」

「人の部屋に勝手に入っておいて馬鹿は無いやろ、馬鹿は」

いきなり背後から声を掛けられて、驚きの余りツインテールが逆立つ。ゆっくり後ろを向くと本を片手に、ドアがあった所に背中を預けている龍鳳がいた。髪は暑さ故に首の後ろで纏めて、顔には眼鏡を掛けている。いつもとは違う知的なその姿にドキッとしてしまう。

「え、えと・・・・そ、そうよ！何であんた部屋にいないのよ！このクソ暑い中、ここに来るまでどれだけ大変だったと思ってるの！？」

「すまんすまん。ちょっと散歩行っとって部屋空けてたんや」

無茶苦茶なことを言われているにも関わらず、龍鳳にしては珍しく素直に謝った。読んでいた本を閉じて、ベッドの上に置くと、食器棚へと褄先を向ける。

「何、してるの・・・・？」

「どうせなんか用が合って来たんやろ？客人を持て成すぐらいの常識は、一応俺にもあるで」

ガラス製の綺麗なグラスをテーブルにおいて、エヘンッと胸を張る。その子供じみた仕草に微笑ませられながらも、鈴はベッドに腰掛けて台所に行っている龍鳳を待つ。

「（龍鳳ってなんか・・・・いい匂いがするわよね・・・・）」

ベッドからは妙に心拍数が上がる匂いがして、それがベッドの持ち主のものだとすぐに分かった。

「おーい鈴。何か飲みたいもんでもあるか？」

「冷たかったら何でもいいわよ」

「じゃあ『キャラメルミルクＤＸ』と『砂糖たっぷりロイヤルミルクティー』と『甘さ１２０％ミルクココア』と『飲むタイプのチョコレート』と――」

「糖尿棒になるわーーーっ！！」

「ったく、文句があるんならクリスに言えや。ほならコーラでええか？」

「あるのなら最初からいいなさいよ・・・・」

ペットボトルからグラスへとコーラが注がれて、炭酸特有の音が部屋に響く。ドアが外れて廊下から中が丸見えなのだが、それでも炭酸の音と蝉の鳴き声しか聞こえない。現在、ＩＳ学園は夏休みのため、半分以上の学生が祖国へと帰っている。その為、寮に人気がなく静かなのだ。何故か妙に気まずくなった鈴は何か話題を出そうと話を振る。

「あ、あんた達って、ずっと学園にいるけどいいの？だって将官クラスと元帥がいなくなったら軍としてあまり機能しないでしょ」

「あーそれなら大丈夫や。重要な報告書とはこっちに送ってもらっとるし、本部には優秀な奴らがおるから問題無いねん」

「ふーん、そうなんｄ――」

ドガァァァァン！！！

突如聞こえてきた爆音に鈴はベッドから立ち上がって身構えるが、龍鳳は何事もなかったかのようにコーラを啜り飲んでいる。理由は至って簡単、最近この時間帯になると毎度のごとく聞こえてくるから慣れてしまったのだ。グラスから口を離した龍鳳は、溜息を吐いて、未だに警戒している鈴に声を掛ける。

「安心しろ鈴。いつものアレや、アレ」

「えっ？・・・あぁ、アレね。やるのはいいんだけど、その内使用禁止になるわよ・・・アレ」

二人は窓から爆音がした方角を見るとアリーナから煙りが上がっていた。そして、その中から黒いＩＳが二機出てきて、ぶつかり合っては火花を散らしている。二人が言っているアレとはラウラとなせのガンダムを使用しての訓練のことである。毎日のごとくアリーナをボロボロにしては、爆音を当然のごとく上げている。しかし、それはまだマシな方だ。

「昨日はアレに政志とロシナンテも混ざって、アリーナ全壊させてもたからなぁ」

「でも、ななせがあんなに積極的にやるなんて、正直意外だった」

「嬉しいんやろ？政志以外で、自分と対等に模擬戦が出来る相手ができて」

「・・・そっか。じゃあ、少しぐらい、はしゃいじゃっても良いかもね」

（※ここから先の会話はＬさんとＮさんによるものです）

「機体性能だけで倒せるほど、あたしは弱くないよ？」

「ほざけっ！今日こそは決着を着けてやる！」

「なら、もう二度と政志のベッドに潜り込めないようにしてあげる！」

「お前もやりたければ、やれば良いだろう？もっとも、出来るとは到底思えんがな！」

「そ、そんなこと・・・やりたいわけないでしょっ！／／／／」

「顔を真っ赤にして言っても説得力がないが？」

「なっ！？／／／／・・・もう怒った！ＧＮツインバスターライ

フル、発射！」

「何のこれしきっ！」

ドガァァァァン！！！

またもやアリーナを瓦礫の山にさせてしまったこの二人が、千冬に怒られたのは言うまでもない。

「それはそうと・・・・結局俺に何の用があるんや？」

龍鳳のその言葉で当初の目的をハッと思い出した鈴は、顔を赤くさせながらも、ポケットの中を探って、二枚の紙切れを掴む。

「龍鳳、あんた夏休みにどこか出かける予定とかって無いの？」

「ほうやな～・・・・盆に軍の仕事があるぐらい、か」

因みに龍鳳の言う軍の仕事とは一度本部に戻って、そこから各地の連邦の支部を視察に行くと言うものなのだが、政志だけにはそれが無い。・・・・正確に言えば、『新しく放送されるアニメをじっくり見たい』などと勝手すぎる理由で、自分だけ本部に戻らなくても良いように裏で操作したのだ。それを知ったアル達は政志に問いつめるが、赤い革ジャンを着た刑事の如く、『俺に質問するなぁ！』と一喝されてしまったため、アル達は政志抜きで本部に帰還することになった。

「朝起きて、飯食って、本読んで、アルか一夏かを弄って、ほんでまた飯食って、本読んで、飯食って、風呂入って、本読んで、寝る。これが俺の夏休みの過ごし方やな」

「何回本読めば気が済むのよ・・・・」

「しゃあないやろ！読みたかった本、メッチャ溜まっとんやから！」

「ったく、しょうがないわねぇ。あんたのその乏しい夏休みに、この私が花を咲かせてあげるわよ」

「・・・・何や腹立つ言い方やけど、一応聞くだけ聞いとくわ」

『食い付いてきたーーーっ！！』と心の中で歓喜の声を上げた鈴は続けて計画通りに事を運ぶ。

「ん」

「何やそれ？」

鈴が取り出したチケットとしげしげと見つめる龍鳳。

「あんた知らないの？　今月出来たばかりのウォーターワールドのチケットよ。言っておくけど、前売り券は今月分が完売、当日券は開演二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「ほお、それは凄いやんけ。で、いつ行くんや？」

「（ホント感動のないやつね。これを手に入れるのにあたしがどれだけ苦労したと――ってあれ？）ええと・・・い、行くの？」

「せっかく誘ってくれとるのに、断るわけないやろ？それに泳ぐん好きやし」

「そ、そう。ならいいんだけど・・・・」

声が小さくなる鈴だったが、内心踊り狂う程に喜んでいた。どうやって龍鳳を誘うか夜遅くまで悩んでいた鈴にとって、龍鳳がすぐにＯＫを出してくれた事は、良い意味で予想外だった。

「（っと駄目駄目。ここで焦ってことをし損じたら、元も子もないわ。あと少しで勝利を獲得するんだから、それまでの我慢よ、凰鈴

音！）ま。あんたを誘うなんてあたしぐらいしかいないんだから、感謝しなさいよ」

つい調子に乗ってしまった鈴は龍鳳の額をチケットでペチペチと叩く。やれやれといった感じで、龍鳳は溜息を吐きながら引き出しの中に仕舞ってあった財布を取り出した。

「で、なんぼや？」

「二千五百円」

「はいはい二千五百円な。ホレ」

しかし、龍鳳が鈴に渡したのは五千円札だった。

「お釣りなら持ってないわよ？後でいいなら――」

「俺とお前の分やらから、釣りはいらへん」

「へ？」

「女と出かけるいうのに、女に金払わせるんはあんまり好きやないんや。せやから、釣りはいらん」

龍鳳は財布を引き出しに仕舞って、釣りを貰えないようにする。そんな不器用な優しさに鈴は自然と頬を緩ませながら、ポケットにそっと五千円札を入れた。

「聞いてなかったけど、いつ行くんや？」

「明日の土曜日」

「えらい急やな。まあええわ。どこで待ち合わせはゲート前で、十時ぐらいで構へんか？」

「それで良いわよ」

グラスに入っていたコーラを一気に飲み干して、部屋から出て行こうとしたが、龍鳳に声を掛けられて足を止める。

「鈴。明日、楽しみにしとるで」

「ふ、ふんっ！そ、それより、明日遅れて来たらただじゃおかないんだからね！」

いきなりの不意打ちに顔を赤くさせて、それだけを言い残し廊下に出た。スキップに近い足取りで自分の部屋にその姿を見れば、機嫌が良いのが馬鹿（アル）でも分かる。

「（ふふふふっ。楽しみだって言われちゃった♪これは急いで明日の準備しないとっ！）」

そんな超ご機嫌な鈴と遭遇してしまったロシナンテが抱きつかれたのは、災難としか言いようがない。

「さて、やっと戻ってこれましたわ」

ＩＳ学園の正面ゲート前で、白いロールスイスから降りたセシリアは気分を高揚させながらそう言った。

「（やはり、想い人とは同じ空の下にいたいものですし・・・・）」

セシリアは名家の跡継ぎであり、代表候補生であるため、祖国イギリスでの仕事は多かった。しかし、それもやっと終わって、ようやく日本に戻ってきたのだ。

「お嬢様」

呼ばれて振り向くと、セシリアの幼馴染みでもあり専属のメイドでもあるチェルシーが微笑を浮かべて控えていた。

「どうかされたのですか？」

「い、いえ、何でもなくてよ」

「そうですか。それでは、お荷物の方は私どもがお部屋まで運んでおきますね」

そう言ってチェルシーはもう1人のメイドと一緒に荷物を運び始める。

「（さてと、私は――――）」

「早速、クリストファー様に会いに行かれますか？」

「ちぇ、チェルシー！？荷物を運びに行ったのではなかったの？」

「恥ずかしながらも、お嬢様に一つ確認しておかなければならないことを失念してまして、戻って参りました」

「そ、そう。それで、確認とは？」

「あの白いレースの下着はクリストファー様用ですか？」

「・・・・・・・・・・え？」

「派手すぎる下着は却って逆効果になると思われます」

「あ、あの、あれは・・・・」

そんな口をどもらせるセシリアの背後に、『糖尿病？何それ？美味しいの？』をモットーとする例の少年が現れた。

「あっ、セシリアちゃんだ～」

どきぃっ！？

「（こ、この声はクリスさん？どうしてここに・・・も、もしかして私の出迎えに！？）」

心臓が張り裂けそうなぐらいにドキドキと胸が高鳴り、動揺しているのがバレないように冷静さを装ってゆっくりと振り返る。

「クリスさん、一週間ぶりですわね。ごきげんよう」

「うんうん、久しぶりだね。今みんな自分の国に帰ってたりして人が少なくて、寂しかったよ。ところで、そのメイドさんは誰？」

「お初お目にかかります。私、セシリアお嬢様にお仕えしているチェルシー・ブランケットと申します。以後、見知りおきを」

「これはこれは。どうもご丁寧に」

笑顔で丁寧なお辞儀を互いに交わして頭を上げる。

「そっか。この前、セシリアちゃんが言ってたメイドさんって、あなたのことでしたか。初めまして、クリストファー・トールギスです」

「あなたがクリストファー様でしたか。白い魔王の噂はかねがね耳

にしております。・・・・時に、ご無礼ながらお伺いしたいのですが、お嬢様は私のことを何と？」

「ええと確か、とても良く気が利いて、優秀で、優しくて・・・・美人だって言ってました」

「まあ」

チェルシーはにっこりと優しさで人を包み込むような笑みを浮かべる。今までクリスに一度も美人なんて言われたことの無いセシリアはやきもちを焼いており、それを見たチェルシーが微笑んだ。

「私もクリストファー様のお話はよくお嬢様から耳にしております」

「へ～そうなんですかぁ。それでボクのことは何て言ってました？」

「（あああああっ！お願いだからその話の内容だけは言わないでチェルシー！！）」

セシリアの心の叫びが届いたのか、今度は動揺を感じ取ったようで、チェルシーはさっきよりも茶目っ気のある笑みを浮かべる。そして、ゆっくりと人差し指を唇に持って行く。

「それは・・・・女同士の秘密、です」

「セシリアちゃん・・・・何で怒ってるの？」

「・・・怒ってませんわ」

場所は変わって学園の食堂に隣接するカフェ。冷暖房完備で、そこいらの喫茶店なんて目じゃないくらいの本格的なもので、クリスは政志達と良く来ている。そのためちょっとした常連になっていて、注文をしなくても、スイーツなどを持ってきてくれるのだ。

「絶対怒ってるよぉ・・・・」

「・・・怒ってませんわ」

先ほどからむすっとしたふてくされ顔で、注文したアイス・カフェラテをつまらなさそうにかき回す。クリスはそんなセシリアを見て

困ったように溜息を吐いた後、目の前にあるモンブランとティラミスを交互に食べる。

「そうそう、実はお菓子の懸賞でこんなのが当たったんだけど・・・・」

クリスは口でフォークを咥えながら、ポケットの中から二枚の紙切れを取り出して、それをセシリアに見せた。

「セシリアちゃん」

「・・・・はい」

「ここに行かない？」

「・・・・はい？」

翌日の十時。ウォーターワールド前で二組の男女が見知った顔を見つけて、互いに目をぱちくりさせる。

「「「「・・・・・・・・・何で？」」」」

龍鳳、鈴、クリス、セシリア。この四人の訪問によって、楽しいウォーターワールドが混沌（カオス）と化す。

青春するなら夏休みだよね！（後書き）

「幻のゴールデン・ヨーグルト・・・・！」

「これは負けるわけにはいかへんなぁ」

「ちょっと手加減しなさいよっ！」

「それは反則じゃなくて？」

「言っとくが俺たちは」

「最初から最後まで」

「「クライマックスやで（だよ）！！」」

～次回～

『水着とポロリとドッキング』

お楽しみに！！

一般人相手に本気出すなよ・・・・（前書き）

ＯＰのアンケート続けてるので、感想でお答えいただけるとありがたいです！

どうして仮面ライダーＷって面白いんだろうか？

では、本編をどうぞ！！

一般人相手に本気出すなよ・・・・

「つまり、お前らはクリスが当てた懸賞でここに来たっちゅうわけか」

「えへへ～、凄いでしょ？これぞ努力の賜物だよ」

場所はウォーターワールド内の喫茶店、そこで龍鳳とクリスは談笑をしていた。しかし、そんな二人の隣に座っている鈴とセシリアは、互いに睨み合っている。

「（折角二人っきりで遊べると思ってたのに・・・どうしてあんた今日来たのよ！）」

「（それはこっちの台詞ですわ！）」

火花を散らせる二人の周りには近より難い空気が漂っており、他の客が奇怪な目で見ていた。が、そんなのに気付かないのが龍鳳とクリスの凄いところだ。

「うぅ、ここのコーヒー苦いよ～」

「じゃあ頼むなや。ほら、砂糖でも入れとけ」

「うん・・・・」

少しでも大人っぽくしようと見栄を張って苦手なコーヒーを注文したが、やはり口に合わなかったらしく、龍鳳に言われて大量の砂糖を入れて何とか飲み干した。遠目から見たら兄弟にも見えなくもな

いやり取りを、セシリアと鈴は溜息を吐きながら見ていた。

「お互い・・・・苦労しますわね」

「・・・・そうね」

今度は視線を向けて、二度目の溜息を吐く。苦労の源である関西弁と甘党の二人はナプキンで作った紙飛行機を飛ばして、見事ゴミ箱に着地した。それを見届けた二人は無邪気にガッツポーズする。

「「良しっ！」」

「「・・・・・」」

鈴とセシリアは心中穏やかでは無い。好きな人と二人だけでデートと思って来てみたら、知った顔に会って遊びだし始めした。セシリアに至っては誘われたということもあって、落ち込みようがハンパ無い。今となっては気合いの入った格好が痛々しく思える。

「「（帰ろっかなぁ・・・・）」」

そんな風に憂鬱になっていると、園内に放送が流れ始めた。

【では！本日のメインイベント！　水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！　参加を希望する方は十二時までにフロントへとお届けください！】

特に興味も無く聞き流していたが、その後の言葉でぴーんと耳を立てた。

【優勝賞品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！】

「「（これだ！！）」」

当然の如く食いついたセシリアと鈴は、クリスと龍鳳にペアを組みよう頼もうとしたが、

【二位の賞品は限定生産の幻のゴールデン・ヨーグルト、超人気ブランドのチェーンブレスレットをプレゼント！】

その瞬間、一陣の風が吹くと同時にクリスと龍鳳の姿が消えた。

「それでは！　第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんが開始の宣言をしながら大きくジャンプした。着て

いる水着が大胆なビキニということもあってか、会場から歓声と拍手が巻き起こる。参加者は一組を除いて全員女性ということもあって、観客のテンションは上がり続けている。唯一の男のペアである龍鳳とクリスの視線はずっと賞品に向いていおり、目がガチである。

「（幻のゴールデン・ヨーグルトを、こんなところで拝めることになるなんて・・・・）」

「（あのブランドのメタルは全て揃えとると思てたのに、取りこぼしがあったとは・・・・）」

「龍鳳！」

「クリス！」

「「（ヨーグルト／メタルのために）今こそ、二人の力を一つに！！」」

想いは一つでは無かった・・・・・。

「では皆さん！　参加者に今一度大きな拍手を！！」

司会の声と共に再び響く拍手。レース参加者は手を上げたりお辞儀をしたりと何らかの反応を示しているが、その中で一切の反応を示していないペアが龍鳳とクリス以外にも、もう一組いた。そのペアは黙々と柔軟運動をしている。

「「・・・」」

誰でも予測出来ると思うが、鈴音とセシリアだ。最初は龍鳳とクリ

スが一緒に出ると知って怒り心頭だったが、『それならこちらにも考えがある』とペアを組み、今は気分をシフトさせてもうすぐ始まる障害物レースに集中している。無論、この二人の目もガチである。目的はただ一つ・・・・。

「優勝賞品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、頑張ってください！」

この優勝賞品だ。二人は作戦を練っている龍鳳とクリスに視線を向けながら勝手な妄想を膨らませて、むふふふと笑みを漏らしていた。

「（クソが付くぐらい鈍感な龍鳳と言えども、若い男女二人で南国の島に行けば・・・・）」

「（夏は人を変えると言いますし、夏休み最後の思い出ということでなら・・・・）」

ふと、二人の目線が合う。

「えへっ」

「あはっ」

「（セシリアからは、適当に考えて奪いましょう）」

「（鈴さんからは、他の物で譲って貰いましょう）」

笑みの下で腹黒い計画を立てながら、二人は柔軟を終えた。

「では！再度ルール説明をします！」

司会のお姉さんの説明は長くなりそうなので、簡単に説明します。

『プールの真ん中に浮いている島に渡ってフラッグを取る』

・・・以上です！

「さあ！いよいよレース開始です！位置について～、よ～い・・・・」

パァンッ！と乾いた競技用ピストルの音が響き、参加者二十六名十三組が一斉に駆けだした。と思ったが、一組だけスタートしないペアがいた。

「「・・・・・」」

龍鳳とクリスだ。二人の視線の先には、妨害をしかけてきたペアをジャンプでかわして、序でにプールへと叩き落としながら先へと進む鈴とセシリアがいる。この『妨害ＯＫ』なレースでは、軍隊を同じ訓練を受けてきた二人が俄然有利なのである。それなら本物の軍人である龍鳳とクリスの方が圧倒的なのでは？と思うが、二人の目的は二位になること。決して優勝することではない。だから、『優勝が目的の鈴とセシリアが邪魔者を排除したころで、自分達は楽してもう一つのフラッグを取ればいい』という魂胆である。しかし、

「「（これはちょっと・・・・）」」

只でさえ男が出場しているというのに何もしないで突っ立ってるだけとなると、女性の水着が目的で見に来た男性の観客からの視線が厳しくなるのも頷ける。逆に女性客が二人の美少年に向ける目はま

さに『眼福！』といわんばかりだ。さすがに男達からの視線が鬱陶しくなってきたのか、二人は左右それぞれに男だけに殺気を送る。

「（いい加減にせぇへんと殺すぞ？）」

「（ボク達を怒らせるのは、死ぬのと一緒だよ？）」

連邦軍大将である二人の殺気を受けた男性客は顔を蒼白にしていく。だが、二人にとっては手加減している方なのだから恐ろしいったりゃありゃしない。

「そろそろ動きますかね」

「せやな、あの二人も結構しんどそうやしな」

最年少ペアの鈴とセシリアの二人は自分達に向かってくるペアを難無くプールへと突き落とす大立ち回りを演じて注目を集めたせいで、妨害上等な過激ペアが二人を集中して妨害し始めた。さすがにキツくなって来ただろうと思い加勢しようかと思った瞬間、会場に歓喜の声が響き渡った。

「あれはちょっと・・・・」

「やり過ぎ・・・・だよね？」

鈴音とセシリアはラリアットを仕掛けてきた妨害ペアを素早い動き一閃して、プールに叩き落した。そまでは良かったのだが、その際に水着を奪って妨害ペアが落ちた反対側の観客席に丸めて放り込んだのだ。これを悪魔の所行と言わず、何と呼べばいいのだろうか？ともあれ、計画通りに鈴とセシリアは優勝への道を直進しており、

しめしめと身体を解していた。が、その計画は突如崩れることとなる。

「ええっと・・・・非常に申し訳無いのですが、ゴールの島にフラッグを一本立て忘れたので、二位の賞品を優勝者に回すことにします」

「「なん・・・・だと!?」」

司会のその説明を聞いた瞬間、龍鳳とクリスは目の色を変えてゴールの島を睨みだした。

「龍鳳・・・・」

「分かっとる。ここは一丁」

「「ドッキングだぁ!!」」

クリスは高く回転ジャンプしながら龍鳳の肩に着地した。俗に言う肩車になっただけだが、その真の力を会場にいる者は目の当たりにすることとなる。肩車の下になっている龍鳳が膝を曲げた瞬間――

一気にゴール手前の島まで跳んだ。

《・・・・・・・へ?》

あまりにも人間離れした跳躍力を見せつけられた一同は口をポカン

と開けている。自分の力を見せびらかすようなことは好きではない龍鳳だが、今はそれどころではない。二人が着地した衝撃に耐えきれず、その島にいたマッチョ・ウーマンペアがプールに落ちた。

「ちょ、ちょっとあんた！本気出してんじゃないわよ！」

「危うくこちらも落ちるところでしたわ！」

その島には鈴とセシリアもいたが、何とか衝撃に耐えきった。これで、優勝に最も近いペアが二組揃い、両組睨み合う。状況からして、空に浮いている島に一番早く辿りつける可能性があるのは、長身の龍鳳に肩車しているクリスだ。それも含めて、どうしたら勝てるか考えていた鈴にある策が浮かび上がる。

「（これしか無いかな）セシリア、顔借りるわよ！」

「え？」

声が聞こえた方を向いた瞬間、セシリアの視界に入ったのは鈴の足・・・・の裏。

「ぶべぇっ！！」

女の子としては決して上げたくない声を出して、セシリアは全力で顔を踏まれた。

「「せ、セシリア（ちゃん）を踏み台にした！？」」

バランスを崩してセシリアは数メートル下のプールへと落下、数メートル級の水柱を上げる。そんな光景に驚かされている間にも、鈴

はゴールへ向かい宙を飛んでいる。

「不味い・・・・っ！」

危機を感じたクリスはノーモーションで跳躍するが、フラッグは今にも鈴に取られようとしていた。

「（あと少し！）」

と思っていたが、緑色の物体がフラッグをプールのに落とした。しかし、その物体に鈴は見覚えがあり、ゴールの島に着地した後、その物体が帰還した方を向くとクリャトリヤを展開して宙に浮いてるクリスがいた。

「ボクのヨーグルトはやらせない！」

「はっ、やってやろうじゃないの！」

鈴も甲龍を展開させて臨戦態勢に入る。嫌な予感がビンビンした龍鳳がせっせとその場から離れていると、地獄から奴が甦った。

「ふ、ふ、ふふふふ・・・・」

誰もが凍りつくような笑い声。龍鳳が不味い、と思った瞬間、プールからさっきの数倍の大きさの水柱が出来上がった。

「今日という今日は許しませんわ！私の、私の顔を・・・・よくも足で！！」

ブルー・ティアーズを展開して、鈴へと向かっていった。

「ななぁっ!?何と、三人はＩＳ学園の生徒のようです！　まさかこの大会で三機のＩＳを見れるとは思っていませんでした！・・・・あれ、でも、ルール的にはどうなんでしょう・・・・？」

「姉ちゃんそんなこと言うてる場合やないで。あー観客の皆さん？今ちょっと混沌（カオス）な状況になっとるから、さっさと避難した方がええで？」

司会のお姉さんからマイクを奪いとり、それだけ言うと龍鳳は視線を再び三馬鹿に戻した。

「ファンネル！」

「ティアーズ！」

「多すぎるわよ！」

ファンネルとビット、計十二基の自立兵器を射出する二人に対して、鈴はスラスターを巧みに使って複雑な機動を描く鈴。ホゥと評価していた龍鳳だったが、後ろから誰かに頭を掴まれた。ギシギシと頭蓋骨が軋む音がして、振り向こうにも振り向けないでいたが、次に聞こえた声でそれが誰だか一瞬で分かった。

「随分楽しそうなことしてるじゃない」

その者は龍鳳をゴミでも捨てるかのように、ポイっとプールへと投げ捨てた。突如上がった水飛沫に気を取られて、三人は一旦戦闘を止めてそちらを見ると、プール際で腕を組み仁王立ちする少女がいた。それを見たクリスは汗をだらだら流し始めて、鈴とセシリアは

どこかで見た気がするその顔を思いだそうとしていた。

「クリストファー君？あなたが何か面倒事を起こすと、全部あたしに苦情が来ることは知ってるはず何だけど・・・・これはどういうことかしら？」

視線の先には三人の戦闘でボロボロになったプールと、一部が割れている天窓。ＩＳ三機を前にして堂々としている少女を見て、鈴とセシリアはやっと思い出した。

「ああっ！あんた、あの時の・・・・！」

「デパートで強盗を倒した・・・誰でしたっけ？」

「そういえば言ってなかったわね。あたしは『ゆり』。みんなは親しみを込めて『ゆりっぺ』と呼ぶわ」

ハット帽を被り、何処ぞの風の街にいる探偵のような格好をしたゆりはそう言った。何が何だか分からず戸惑う鈴とセシリアだったが、ゆりが三人に向けた右手に持っている物を見てさらに驚かされる。

「「ビームマグナムゥ！？」」

「おい！お前ちょっとやりすゴベェ！！」

「あんたは黙ってなさい」

プールから上がってこようとしていた龍鳳はゆりの蹴りによって、再びプールに叩き込まれた。喋る暇さえ与えないところは鬼としか言いようがない。

「え、ちょ、止めてよ政――――」

「うっさい、黙れ、死ね。そうそう、ついでにあなた達もね」

「「・・・・・・・へ？」」

そして、無慈悲にもトリガーは引かれて、馬鹿げた威力のビームは三人を飲み込んでいった。

「「「ギヤアアアアア！！」」」

「とにかく！こういったことは金輪際！絶対にしないで下さいね！」

「「「はい・・・・」」」

あの後、四人はウォーターワールドの事務室に呼び出された。暴れ回ったクリス、鈴、セシリアの三人は司会のお姉さんにこってり絞られて、シュンと小さくなっている。ゆりはＩＳが強制解除されるまでビームマグナムを連発し続けて、一発も外すことなく三人を撃沈させた。そして司会のお姉さんに『これで壊れたところ直して』と小切手を渡して姿を消しのだ。

「まあ、あの子が修理代を出してくれたから良かったものの・・・・」

「「「すみません・・・・・」」」

「すまんな姉ちゃん。こいつらアホやから」

「あなたはいいのよ。避難の指示出してくれたし、寧ろ感謝したいぐらいよ」

『感謝』というキーワードを聞いた瞬間、龍鳳は悪い笑みを浮かべてお姉さんの両手を握って見つめだした。

「だったら・・・一つお願いしてもエエか？」

「え？え、ええ・・・い、良いわよ／／／／」

年下と言えども、龍鳳の容姿はそこいらのモデル以上のものであり、そんな男に見つめられたお姉さんは頬を紅潮させる。

「賞品のメタル、くれへんか？」

「う、うん・・・・分かった・・・・」

目的の物(ブツ)が手に入ることになった龍鳳は押し目も無くガッツポーズをする。それをクリが羨ましい目で見ていたが、お姉さんに睨まれて一蹴される光景は、クリスが童顔であるせいか少し可哀想に見えた。

「今日は色々と迷惑掛けてすまんかったなぁ。ほな、俺たちはこれで失礼するで」

「「「すみませんでした・・・・」」」

何とか許して貰って、四人は事務室を後にした。当たり前だが、龍鳳以外の三人の足取りは非っ常に重い。さすがに見かねた龍鳳はやれやれと呆れながらこう言った。

「しゃあないやつらやなぁ・・・・クリス、今から@クルーズ行って何か奢ってやるけん元気出せや。お前ら二人にも、何か奢ってやるけど・・・・来るか？」

「行く行く！行きます行きます！！」

「・・・・期間限定の一番高いパフェ」

「・・・・財布が空っぽになっても知りませんわよ」

「はいはい。好きなだけ食わしたるわ」

クリスはテンションをローからハイに変えて元気を取り戻した。そ

れならばと、鈴とセシリアも気分を切り替えて、気色満面の笑みで龍鳳とクリスの腕を取る。夕日に照らされて出来た四人の影は長く長く伸び、その後ろ姿は一夏を楽しむカップルにも見えなくも無かった。

一般人相手に本気出すなよ・・・・（後書き）

「楽し、そうだね・・・・」

「金髪（ブロンド）に銀髪（プラチナ）、茶髪（ブラウン）・・・・？」

「ななせは可愛いんだから、そう言うこと言っちゃダメだよ」

「バイトしない！？」

「うぅ・・・恥ずかしいよ、この格好」

「僕と同じ声？」

「「（どうしてこうなった・・・・）」」

～次回～

『服と買い物とツンデレと――』

お楽しみに！！

女性の買い物は基本的に長い（前書き）

早くオリ話書きたい～

っていうかこの小説オリキャラ多すぎじゃね？

では、本編をどうぞ

女性の買い物は基本的に長い

「ハァ～イ♪元気してた？」

どうして・・・あんたは、あたしの前に現れるの！

「決まってるじゃない。私とあんたは二人で一人なんだから♪」

止めてよ・・・・そんな作り笑い・・・・。

「あはっ、バレた？正直疲れるのよね～。この表情続けるの」

今度は・・・何の用？

「そんな怖い顔しないでよ♪三年前にあの女が死んだ時は喜んでたじゃない」

そ、そんなことは無い！あたしは、喜んでなんかいなかった！！

「うふふっ、あんた本当嘘ばっかね。前から心の底から憎んでたんでしょ？政志といつも一緒にいたあの女のこと」

ち、違うの・・・・あたしはただ・・・・。

「まあ、いいわ。どうせその内ハッキリするだろうしね」

それは、どういう意味・・・・。

「あんたがどんな顔するのかが楽しみだわ♪あのラウラって女が死

んだら――――」

もう止めて！！もう・・・・出て来ないで・・・・！

「分かった分かった。そんなに言うのなら、もう出てこないわよ。・・・・でも、これだけは忘れないでよね。本当のあんたが、ドス黒い心を持った、汚い女だってことをね！！」

止め・・・・て、よ・・・・！

「あははははっ、あはははははははははははははっ！！！！！！」

止めてエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！

バッとベッドから起き上がると息が荒れており、びっしょりと大量の汗をかいていた。

「また、見ちゃったんだね。あの夢・・・・」

部屋を見渡して、箒がいないことを確認してホッとする。こんなところを見られていたら心配を掛けさせることになるからだ。ななせはシャワーで汗を流して着替えた後、朝食を摂るため食堂へと向かった。

「（ホットケーキでも食べようかな？）」

朝食のメニューが決まり食堂に入ると、朝食を摂っているシャルとラウラの姿が目に入った。しかし、ラウラは何故かマカロニを先端に通したフォークを持ち上げて、それをシャルが拍手していた。

「お早う。シャル、ラウラ」

「お早う、ななせ」

「お前にしては来るのが遅かったな。体調でも悪いのか？」

「ちょっと寝坊しただけだから、心配することないよ。・・・・で、二人は何してたの？」

「私がフォークにマカロニを通しているシャルロットを見て真似てみたら、案外面白くてな。お前もやるか？」

ドヤ顔でそう言いながら、ラウラはななせにフォークを差し出す。
ななせは事の元凶であるシャルを引きつった笑みを浮かべながら見た。

「・・・・・」

「（ちょ、ななせ!?そんな可哀想なものを見る目で見ないでよ!）」

シャルは自分に向けられているのが、痛々しいものを見るような目だったので、アイコンタクトで嘆きを訴えた。ななせはそれを理解した上で口にしたのが、次の言葉である。

「シャルって・・・面白い、よね」

ガーン!とショックを受けて、シャルは真っ白になった。

「あはは・・・。僕って、面白いんだ・・・」

しっかりしてください。

ななせが朝食のホットケーキを持って来るころには、何とかシャルは立ち直っていた。適量のマーガリンと蜂蜜を乗せて、幸せそうにモフモフ食べていると、シャルが何か思い出したかのように話しかけてきた。

「そうだ。ななせ、今日買い物行かない？」

「買い物？」

「うん。ラウラ、私服とかパジャマ持ってないから、それを買いに行こうと思ってね。良かったら一緒にどう？」

軍の仕事は全て終わらせており（金髪馬鹿だけは終わらせていない）、特にこれと言った用事も無い。それに、折角の友達からのお誘いなのだ。友達を大事にするのを心懸けているななせが断るハズがない。

「じゃあ、お言葉に甘えようかな？」

「分かった。なら、十時くらいに出ようと思ってるんだけど」

「せっかくだし政志（よめ）も誘っていこう。うむ、私はいい亭主になるな」

「政志なら、今日アルと出かけるって言ってたよ？」

「・・・・・何・・・・・だと！？」

しっかりしてください。

十時過ぎにバス停に行くとと偶然にもバスが通りかかって、三人はそのまま乗り込んだ。因みに、ラウラだけは制服である。最初は軍服で行こうとしていたから、まだマシになった方だろう。シャルとななせはちゃんと私服を着ている。シャルは淡い水色を加えた白いワンピース。涼しさと軽快さを醸し出している。ななせは赤いダメージジーンズに、無地の白いTシャツ、頭にサングラスを掛けている。似合ってはいるのだが、何か違う気がして仕方がない。

「ななせって、そういう服が好きなの？」

「そうじゃないけど、軍の仕事があって買いに行く暇が無かったから」

『ああ、なるほど』とシャルは納得し頷く。

「それに、あたしに可愛い服とか似合わないし・・・・」

シュンとなって自虐的に言うものの、シャルはその言葉に少しムカッとしていた。ななせは男性から、女性からも見ても美人で可愛いのは一目で分かるぐらいの逸材だ。バスの中の乗客も、三人がバスに乗ってからずっとななせを見ている。そんな女性が『可愛い服とか似合わない』とか言うならば、それは嫌味に聞こえるだろう。

「もお、ななせは可愛いんだから、そんなこと言っちゃダメだよ」

「あたしは、可愛くなんか――――」

まだそんなことを言おうとしているのに勘づき、シャルは奥の手を使うことにした。

「政志はななせが可愛い方が喜ぶんじゃないかな～」

「え、ちょっ！？・・・・・・そうなの？」

「うん、絶対そうだよ。政志も男の子なんだから。・・・・そうだ！ラウラの服を買うついでに、ななせの服も買おうよ」

「え、でも――――」

「買おうね？」

「・・・・はい」

この時は、黒い堕天使と恐れられているななせと言えども、シャルに勝てなかった。そんなことをしている間にも、バスは目的地へと到着した。一方ラウラは、バスの窓から街を眺めて・・・・。

「（ＩＳは比類無き世界最強の力だ。しかし、戦争は個人の力だけでは決まらな・・・いや、例外が一人いるな・・・・。仕方ない、もう一度・・・・）」

『戦争時化の市街戦シミュレーション』をしていた・・・・。

他の乗客と共にバスから降りた三人は、駅前のデパートへと入り、七階のフロアーに行くことにした。

「『サード・サーフィス』か」

「ちょっと変わった名前だね」

「結構、人気のあるお店みたいだよ。ほら、女の子もいっぱいいるし」

そう言われて店内を見渡すと、確かに女子高生・女子中学生が多くいる。セール中ということもあり、結構騒々しかった。しかし・・・・。

「・・・・・」

ばさり、と客に手渡すはずの紙袋が店長の手からすり抜けて落ちる。

「金髪（ブロンド）に銀髪（プラチナ）、茶髪（ブラウン）・・・・？」

金髪と銀髪ならともかく、茶髪なら何処にでもいると思うが、ななせの容姿はそんな連中と比べては失礼なほどのものだ。それ故に、店長は言葉を失った。店長の異変に気付き、他の店員と客も三人に視線を移して魅了されたかのように呟き始める。

「お人形さんみたい・・・・」

「映画の撮影・・・・・？」

「・・・・ユリ、お客さんをお願い・・・・・」

店長は三人の方へと視線を向けたまま、ふらふらと歩いて行く。それはまるで、何かに魅了されて虜にされたかのように。

「え、ちょっと、あ、私は？ていうか、服・・・・落ちたままだし・・・・」

文句を言おうとしていた女性客もまた、ななせと二人に見とれて言葉を失う。

「ど、どんな服をお探しで？」

見るからに緊張していて、店長の声が上擦っている。それはサマースーツを着こなしている人とは思えない様子だった。

「えっと、取り敢ずこの二人に似合う服を探しているんですが、何かいいのありますか？」

「こ、こちらの銀髪の方と茶髪の方ですね！すぐに用意するので少々お待ち下さい！」

それだけ言い残して、店長は颯爽と店の奥へと駆けていった。なんだか嫌な予感がしたラウラとななせは、こっそり店から抜け出そうとしたが、何者かにガシッ！と肩を掴まれた。

「二人とも、どこに行くのかな？」

ギギギと首を後ろに回して振り向くと、笑顔なのだが目が笑っていないシャルがいた。逆にそのニコニコ顔が非常に怖い。気迫を当てられてた二人は、冷や汗を流しながら何か言い訳しようとするが、

「どこに行くのかな？」

「いや、これは、その――」

「ど・こ・に・行・く・の・か・な？」

「「・・・・・すみません」」

観念したラウラとななせはシャルに首根っこを掴まれて、試着室へとズルズル引きずられていった。その光景は少しシュールだった、と店員は語ったとか語らなかったとか・・・・。

「・・・・・」

試着室へと入ったラウラは、シャルたちが選んだ『クール系』の服と見つめ合っていた。

「（どうせなら、可愛いのが良かったのにな。それなら政志も褒めて・・・・・）」

（※ここからは妄想になります）

『ラウラ、その服可愛いな』

『可愛いのは服だけか？』

『そんなの、お前が一番可愛いに決まってんだろ』

『ば、馬鹿者・・・・／／／／』

『お前が悪いんだぞ。こんなに可愛い顔してるから・・・・』

『政志・・・・』

『ラウラ・・・・』

（この先は皆さんのご想像にお任せします）

「・・・・・／／／／」

・・・・妄想を終了させたラウラは顔を真っ赤にさせて沈黙する。

「い、いや、その、なんだ・・・・そんなにうまくいくとは思わな

いが、しかし・・・・」

しかし、可能性はゼロではない。

「どう、ラウラ。着替えた？」

ドアの向こうからシャルが声を掛けてきて、ラウラはドアを開ける。

「あれ？どうして着替えてないの？」

「シャルロット」

「う、うん。えと、もしかして気に入らなかった？」

「いや、そうではない。そうではないのだが・・・・」

ラウラにしては珍しく歯切れの悪い物言いに、シャルは首を傾げる。

「も、もう少し、可愛いのがいいな・・・・」

照れくさそうに言うラウラがあまりにも女の子らしく、シャルは一瞬ポカンとしてしまうが、すぐに持ち直して力強く頷いた。

「う、うん！可愛いのがいいんだね！？すぐ見繕うから待ってて！」

怖いぐらいに熱が入ったシャルは、凄い勢いで店員が用意したであろう服の山を物色し始めた。

「任せといてね！絶対に良いの選んで見せるから！」

「あ、あまり派手なのは困るぞ」

「大丈夫だいじょーぶ！もう、任せちゃってよ！」

「わ、分かった」

普段はおとなしいシャルに強引に来られると、ラウラとしては従うほか無い。

「（しかし、私よりかは確実にセンスが良いだろうし、特に問題はないか・・・・）」

それから二十分後、着替え終わったラウラが試着室を出ると、店内の全員が息を飲んだ。

「うわ～、スッゴイ綺麗・・・・」

「お人形さんみたい・・・・」

店内にいる全員から視線を受けて、さすがのラウラも照れくさそうにする。今ラウラが着ているのは肩が露出した黒いワンピース。部分部分にあしらわれたフリルが可愛らしく、ミニよりのスカートが彼女の素質を引き立てて、まさに妖精のようだ。自分の見立てた服が似合っていて、喜んでいたシャルだったが、ここであることに気づいた。

「（あれ？ななせ、まだ着替えているのかな？）」

ななせが試着室に入ってから、すでに三十分近くが経過している。しかし、一向に出てくる気配が無い。心配になったシャルは、なな

せがいる試着室のドアを開けて中を見ると、

「なんだぁ。着替えてたのなら、出てくればいいのに」

「でも・・・・」

「良いから良いから！ホラホラ！」

ななせはすでに着替えていたらしく、シャルが腕を引っ張って強引に試着室から連れ出すが、それは店内の全員が再び息を飲むことになる。

「天使（エンジェル）・・・・？」

その言葉が今のななせにはピッタリだった。今ななせが着ているのは真っ白なドレスタイプのワンピース。ウエストからはさっと流れるようなドレープと頭のコサージュが華やかさを演出している。

「ねぇ・・・・これって私服、なの？」

ななせは少し俯きながら横目で自分が着ている服をチョイスしたシャルに問いかける。確かに、私服にしては派手さが高く、どちらかと言えばパーティーなどに着るものだ。しかし、返って来た答えは、

「大丈夫だよ！凄く似合ってて可愛いから！」

理屈じゃなかった。

服を買った後、三人はオープンテラスのカフェでランチをとっていた。すると、シャルが隣の女性に気が付くと、何か悩み事があるようで深々と深淵の色が見える溜息を吐いている。性格上、そんな人を放って置けないシャルは女性に話しかけた。

「あの、どうかしましたか？」

「え？――――――！？」

女性は三人を見るなり、イスを倒すぐらい物凄い勢いで立ち上がった。そしてそのままシャルの手を握る。

「あ、あなた達！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「「・・・・・・え？」」」

そんなこんなでバイトをすることになった店は、女は使用人の格好、男は執事の格好で接客をするという、いわゆるメイド喫茶だ。何故かシャルは執事服を着ているが・・・。どうやら、店員がいきなり辞めて人手が足りなく、今日は本社から視察が来て重要な日らしい。それは困るということで急遽一日だけバイトを雇うことにしたのだ。

「本当に助かったわ。何とか辞めちゃった五人の穴を埋めれて」

「「「五人？」」」

「そうよ。一緒に働くのだから、自己紹介ぐらいした方が良いかもね。二人共～、ちょっとこっち来て～」

女性が店の奥に向かって呼びかけると、扉が開いてメイド服を着た二人の少女が入ってきた。一人は肩までかかった紫の髪に、緑の瞳。そして、もう一人は小柄で、ラウラのように長い銀の髪を有しており、瞳の色は金。

「じゃあ紹介するわね。この二人があなた達と働いてもらう」

「『仲村ゆり』さんと『立花奏（たちばなかなで）』さんよ」

女性の買い物は基本的に長い（後書き）

「女装じゃねぇ、コスプレだ！」

「水だ。飲め」

「今こそ、お前の力が必要なんだよ」

「全員動くんじゃねぇ！」

「ガードスキル・ハンドソニック」

「たった今、あなた達に死亡フラグが立ったわ」

～次回～

『コスプレと強盗と冥土さん』

お楽しみに！！

店内が混沌と化しているのは、お前達のせいだからな（前書き）

ゴールデンウィークか・・・・

バソコンと向き合うことしか出来ない俺に何をしろと？

では、本編をどうぞ！！

店内が混沌と化しているのは、お前達のせいだからな

時は遡って、昨日の夜。

「俺に女装しろだと！？」

「女装じゃなくてコスプレな」

アルが叫ぶのも無理はない。いきなり呼び出されたと思ったら、『明日大会に出るぞ』と一方的に告げられた。イベント事なら何でもござれのアルは最初は乗り気だったが、その大会と言うのは、

「どうして俺がお前とコスプレ大会なんかに出なきゃなんねぇんだよ！？」

「安心しろ。もう参加登録は済ましてある」

「正気か貴様ーーーっ！！」

「勝手に登録したのは悪いと思ってるけど（嘘）、ちゃんとした理由があるんだ」

政志はポケットに手を入れて、中から取り出した一枚の紙を政志はアルに渡した。政志の真剣な表情からしてただ事ではないと勝手に解釈したアルは、紙に書かれてある内容を読み出した。

「第三十七回コスプレコンテスト。コスプレをしているのなら多人数での出場も可。優勝賞品は世界でたった一つしか存在しないガ〇プラ、『７７分の１ア〇ケーガ〇ダム（純金製）』・・・・」

「というわけだから頼むぞ」

「どういうわけじゃゴラアアアア！！そんなもんのためにコスプレするなんて絶対に嫌だからな！！」

「しょうがねぇ奴だな、お前は。これやるから考え直せ」

舌打ちをしながら再びポケットから取り出したのは、何かが入っているであろう封筒。そこから一枚の写真を取り出して渡すと、アルの目の色が急変した。

「お、おおお、お前、こ、これをどこで手に入れたんだよ！？」

そこにはパジャマ姿ですやすやと眠るシャルが写っていた。しかも、胸元がはだけて若干谷間が見えている。写真をガン見しているアルの鼻から、一筋の血が流れ出す。

「お前が素直に承諾するとは思わなかったから、予め裏ルートで入手していたんだよ」

裏ルートってなんだよ、と突っ込みを入れたいが今のアルにはそんな余裕は皆無だ。

「で、どうする？出るのか、出ないのか」

「・・・出させていただきます」

こうして、写真で買収されたアルは大会に出ることとなった。しかし、鼻血を出しながら土下座をする姿はあまりにも惨めだったと目

撃者は語る。

そして翌日。会場に向かう途中にあった公園で女装（コスプレ）した二人だったが、

「この服装、このキャラに合ってないだろ・・・・」

政志は『仲村ゆり』、アルは『立花奏』になっている。しかし、学園物のキャラのはずなのに政志は風の街にいる探偵、そしてアルがその相棒の格好をしていた。

「あたし好きなのよ、仮面ライダーW」

政志はすでに仲村ゆりになりきっており、言葉遣いが変わっている。自分もキャラに合わせないと文句を言われそうな気がしたアルも仕方なしに立花奏を演じることにした。

「これからどうするの？まだコンテストまでは時間があるわ」

「それもそうね。じゃあ、取りあえずお昼にしましょう」

因みにこの二人、声も姿も完璧に真似ている。そのため、三百六十度誰がどう見ても女子にしか見えない。身長は？と思うが、それは彼らのスキルで何とかしたのだろう。

「あれって、ゆりっぺじゃね？」

「天使ちゃんマジ天使！」

通行人がこの二人とすれ違うと、元ネタを知っている人も知らない人も見入ってしまう。話し掛ける人もいたが、二人は適切な対応をした。

「あなた・・・もしかして、天使ですか！？」

「あたしは天使なんかじゃないわ」

会場へ向かう途中で、ゆりがウォーターワールドに入っていった数分後に、ビームの発射音が聞こえてきたのは気のせいだろうか？ゆりが戻ってきて再び歩き出していると、何か困り果てている女性を見付けて、見過ごす訳にもいかずに二人が話し掛けると、

「バイトしない！？」

奏が『どうする？』とアイコンタクトを送ってきたが、必死に頼む姿を見せられて断ることも出来ずに承諾することにした。

そして、今に至る。

「あたしは仲村ゆり。よろしくね」

「立花奏。よろしく」

ゆりと奏はシャル、ラウラ、ななせの三人を前にして動揺することなく自己紹介する。どこか見覚えのある（なかったら問題だけどな）ゆりの顔を三人はまじまじと見ているとようやく思い出した。

「君は確か、デパートの時の・・・・」

「あのナイフ一本で強盗を殲滅した女か」

「殲滅はしてないからね」

シャル、ラウラ、ななせに正体が気づかれなかったので、ゆりと奏は内心ホッとしている。バレた時のことを考えると面倒なことになるのは間違いない。特にアルは最近みんなから馬鹿と認識されているので、その上『変態』とまで呼ばれるようになったら生きていけないのだ。何とか第一の危機を乗り越えたゆりと奏は、三人と共に働きだしたのだった。では、その働きぶりはというと・・・・。

「お待たせいたしました。紅茶の客様は？」

「は、はい」

自分の方が年上だというのに、緊張した面持ちでシャルに答える女性客。紅茶とコーヒーをそれぞれの客に差し出す前に、この店の『とあるサービス』の要不要を訊ねた。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで！」

「わ、私もたっぷりで！」

いつもならノンシュガーノンミルク派の二人だが、今回だけ目の前の美形執事に奉仕してもらいたいという一心でそう答えたのだ。お嬢様方、改めお客様の注文を受け、その内心を知ってか、シャルは柔らかな笑みを浮かべた。

「かしこまりました。それでは、失礼いたします」

白く美しい指でスプーンをそっと握り、砂糖とミルクを加えたカップを静かにかき混ぜる。時折聞こえる、かちゃかちゃ響く音でさえ心地良く聞こえる。

「お待たせいたしました」

「あ、ありがとう・・・・」

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出し下さい。お嬢様」

綺麗なお辞儀を返して、シャルは別の客がいるテーブルへと向かおうとするが、やたらと熱い視線を感じたのでそちらを向くと、

「立花さん・・・・？」

視線の主である奏はトレーを抱えたまま突っ立っていた。ただジ～っとシャルを見つめたまま。

「ええと・・・・何か僕の顔に付いてますか？」

「・・・・いいえ。何も付いてないわ」

奏はそれだけ告げると注文を待っているテーブルへ歩いていった。何だったんだろう？とシャルは首を傾げる。何故奏がシャルを見つめていたかというと、

「（執事服も可愛いなぁ）」

こんなことを考えていたからだ。その頃、ラウラは・・・・。

「水だ。飲め」

無茶苦茶だ。何を思ってか水の入ったコップを勢いよくテーブルに置く（叩きつけている）。そもそもラウラに接客をさせようというのが間違いだと思う。

「こ、個性的だね。もっと君のことよく知りたく――」

話を聞きかずオーダーを取ることもなく、ラウラはカウンターへと向かって何かを告げる。少しして、出されたコーヒーを持ってきた。

「飲め」

さっきよりも優しく（そうしないとソーサーが割れるので）カップをテーブルに置く。それでも強く置いたのに変わりはなく、中身は零れる。

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは・・・・」

「何だと?客でないのなら出ていけ」

今なら断言出来る。こいつには接客は絶対に無理だ。それでもと男性客はラウラと少しでも会話しようと萎縮しながら探りを入れるが、今回は相手が悪すぎた。

「ほ、ほら、コーヒーにもキリマンジャロとかモカとか――――」

言葉を遮るように、ラウラは全く笑っていない目のまま、その顔に嘲笑を浮かべた。

「はっ。貴様ら凡夫に違いが分かると?」

「いや、その・・・・すみません・・・・・」

奉仕されるはずの客がメイド服を着た少女に謝る光景は至ってシュールである。完全に心が折れた男性客は小さくなりながらもコーヒーを啜った。

「飲んだら出てい頭蓋がメキメキと剣呑な音をぉ！！」

「すみませ～ん。この子ちょっと馬鹿なんで♪」

ラウラをアイアンクローの刑に処しているのは、天使の様な笑顔を浮かべているゆりだ。しかし、額には青筋を立てており、中身が政志であるため腕の力は半端無い。現にラウラの体が片手で持ち上げられている。

「ちょ、仲村さん、何してるの！？」

注文を受け取ったななせの視界に放置しておけない光景が入ったため、ゆりを止めようと駆け寄るが、

「ふぇ？」

何もない所で躓き、そのまま前のめりになって、べちゃっと倒れた。何とも間抜けな転け方をしたななせは床に打ち付けた鼻を押さえながら、起きあがる。

「うぅ、痛ひほお・・・・」

そんな無茶苦茶なメイド達に対しての客の反応は意外なものだった。

「あ、あの子、超いい・・・・」

「罵られたいっ、見下されたいっ、差別されたいぃっ！」

「僕の頭にも、その柔らかな手で痛みという快感を！」

「コレが萌えという奴なのか・・・・！」

「お持ち帰りしてぇ！」

店員も店員なら、客も客で馬鹿ばかりである。

「い、いい加減放してくれーーーっ！！」

「ご注文はお決まりですか♪」

「はにゃが、はにゃが痛ひ・・・・」

「・・・・何だか、凄いことになってるね・・・・」

「・・・・そうね」

シャルと奏が呆れた視線を送って、他の客とスタッフが見て見ぬふりをしていたのは言うまでもない・・・・。そんなこんなで働きだして二時間が経過しようとした時、事件が起こった。

「全員動くんじゃねぇ！」

突然、扉が蹴破られて三人の男が雪崩れ込んできた。一瞬、何が起きたのか理解できない店内の皆様だったが、次の瞬間に響いた銃声で悲鳴が上がった。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねぇ！静かにしろ！」

「・・・また、メンドウな事になってきたわね」

頭を掻きながらゆりっぺ口調で口癖を政志（ゆり）は吐く。アンケートを取れば、誰もが強盗だと答えるような格好をした男達の手にはハンドガン、ショットガン、サブマシンガンが握られている。一人の男が背中に下げているバックから何枚か紙幣が飛び出しているところから推測すると、銀行を襲った後の逃走中だったのだろう。

「あー、犯人一味に次ぐ。君たちは完全に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返すーーー」

「随分とベタな対応ね」

「そうね」

駅前と言うこともあってか、警察の対応は異常なまで早く、店外は多くの警官やパトカーで包囲されていた。そんな何処にでもありそうな対応に溜息を吐きつつ、シャルとラウラとなせは目で合図を送り合い、それぞれの行動に移ろうとしたが、三人よりも早く動いた者が二人いた。

「何だ、お前ら。大人しくしてろって言ってるのが聞こえなかったのか？」

リーダーの男が、店内で強盗以外で立っている二人の少女、ゆりと奏へと視線を向ける。二人は男達が持っている銃を一瞬だけ見てから視線から外した。

「一つ、良いことを教えてあげるわ」

「あん？」

「たった今、あなた達に死亡フラグが立ったわ」

言っていることが理解できずにいる男達に構わず、ゆりと奏はメイド服に手を掛けてバッと脱いだ。すると、ゆりは腕章が付いたセーラー服、奏はブレザーといったどこかの学生服に着替えていた。何人かの男性客は見覚えのある二人を見て唖然とする中、ゆりは何処からとりだしたのか、白いベレー帽を被った。

「さてと、害虫の駆除でも始めましょう。奏ちゃん」

「ええ、分かってるわ。ゆり」

この状況下で銃を持っている自分たちに刃向かおうをしている二人に馬鹿にしたような視線を送った。少し苛っとしたゆりはベレー帽に手を突っ込み、中から武器を取り出した。が、それを見た店内の人間は目が点になる。

《へ？》

デパートの時みたいにサバイバルナイフを出すのだろうと予想していたシャル、ラウラ、ななせだったが、今回は違う。身の丈を超える槍の穂先に斧頭、その反対側に突起がある。俗にいうハルバートというポールウェポンだ。重々しさを感じる武器をゆりは軽々しく片手で持って肩に掛ける。

「ちょっと待て！それ明らかに帽子の中に収まるサイズじゃないだろ！？」

リーダーの男が店内の全員を代弁して突っ込みを入れた。あれで本気で斬りかかってこられたらと思うと、全身から冷や汗が流れ出る。

「あたしに質問しないで。奏ちゃん、やっちゃって」

奏はコクンと小さく頷くき、左腕を胸の前で構える。

「ガードスキル・・・・ハンドソニック」

小さな口から言葉が発せられると同時に、左腕の袖に粒子が集まり刃物が実体化した。いきなりのトンデモ技に店内の人間がまたも驚かされる。そして、ヒュンと風を切る音が聞こえると奏の姿が消えて、強盗達が辺りを見渡して探していると、後ろから声が聞こえた。

「守護の刃エターナルセイバー」

中学二年生でも和か洋かで統一させるというのに、痛々しさがＭＡＸの技名を口する。すると、強盗達が持っていた銃が瞬く間にバラバラになって床に落ちる。

「「「ほえ!?」」」

間抜けな声を出して下を向いていた強盗達が顔を上げて視界に入ったのは、仮面ライダー顔負けの蹴りをお見舞いする茶髪と銀髪のメイドと金髪の執事だった。リーダー以外の二人は窓硝子を突き破って外に叩き出され、リーダーは店内の壁に叩きつけられる。

「へぇ。中々やるじゃない」

関心したようにゆりは三人にウインクする。それにシャル、ラウラ、ななせは親指を立てて応える。すると、ゆりが何かに気づいたのか、悪い笑みを浮かべながらリーダーの元へと歩み出した。

「あなた、面白いもの持ってるわね」

気を失っていたリーダーはゆりに声を掛けられたことによって意識を取り戻し、目の前にいるハルバートを持った少女を見て慌てふためく。

「な、何だよ・・・俺を捕まえようってのか！ポリに捕まってムショにぶち込まれるぐらいなら――――」

「そのお腹に巻いているプラスチック爆弾で全部ぶっ飛ばす？」

「ど、どうしてそれをっ！？」

「火薬の臭いがしたのよ。それもプラスチック爆弾特有の臭いがね」

全部言い当てられたリーダーは革ジャンを左右に広げて、腹に巻いてある結構な威力がありそうなプラスチック爆弾を見せつける。手には起爆装置が握られており、どこまでもベタな行動に四つの溜息が漏れる。

「うわ～・・・・」

「諦めが悪いな」

「ここまでベタだと、ある意味関心するよ・・・・」

「そうね」

シャルとラウラ、ななせ、奏が再びリーダーの気を失わせようと身構えた刹那、ゆりが動き出した。

「お、おい、ちょっと待て！もしかしてそれを振り下ろそうなんて考えてないよな！？」

リーダーの前ではゆりが両手で持ったハルバートを背中の後ろまで振りかぶっていた。『さすがに、それはやらないだろう・・・・』と全員は思っていたが、ゆり（政志）はそんな甘い人間ではなかった。

「レッツ殺戮ターイム♪」

無慈悲にもゆりはハルバートを振り下ろした。

かに見えたが、ハルバートはリーダーの顔面をスレスレで通り、大

きな音を立てて床にめり込んだ。軽く九死に一生を体験したリーダーは口から泡を吐いて、体をピクピクさせている。

「次こんなことをしたら、本気で殺すわよ」

可愛らしい顔からは考えられない台詞を吐きながら、気を失ったリーダーから起爆装置を奪い取る。それを軽く握り潰したゆりは、面倒な事になる前に颯爽と立ち去った。その後に奏が付いていき店内に沈黙が走る。そんな中、ゆりの後ろ姿を見てるななせだけは優しい笑みを浮かべていた。

「そういうところは相変わらずだね、政志」

その呟きは周囲の雑音に溶け込んでいき、誰も聞き取ることは出来なかった。

「「？」」

ななせの顔を見たラウラとシャルがその笑みの意味を理解して、ゆりと奏の正体に気付く日が来るのかは、誰にもわからない。

店内が混沌と化しているのは、お前達のせいだからな（後書き）

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「・・・お腹空いた」

「買い物行こ～よ～」

「もう勝手にしてよ・・・・」

「今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！」

「お姉様は、私が殺します。必ず、この手で・・・・」

～次回～

『休日と年頃と存在価値』

お楽しみに！！

とある機業の殺害者達（スレイヤーズ）（前書き）

今回はちょっとした閑話ですね

では、本編をどうぞ！！

とある機業の殺害者達（スレイヤーズ）

『スレイヤーズ』

秘密結社『亡国企業（ファントム・タスク）』に存在する四人の少女で構成されている精鋭部隊。彼女らはどんな任務も着実にこなし、必要とあらば人を殺めることすら躊躇わない。今日はそんな彼女らの私生活を覗いてみるとしよう。

「「「「「・・・・・」」」」」

卓袱台を囲むように三人の少女と一人の男が座っている。何やら真剣な表情で数秒睨み合い、そして動き出した。

「行くよみんな・・・・８のフォーカード！」

金の瞳に肩までかかった黄緑の髪。その左側に鈴の付いたリボンを巻いている少女。スレイヤーズが一人、Kこと輝火（かがほ）。

「・・・スペードとハートのフルハウス」

青い瞳に褐色の肌。やや短めの赤い髪に二本の触覚のようなアホ毛を生やしている少女。スレイヤーズが一人、Rこと恋（れん）

「今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！」

何故ここにいるのか突っ込みたくなる、変態武士仮面ことブレイド。

「普通にストレートフラッシュって言えばいいのに・・・」

呆れながら、四人と離れた椅子に座って本を読んでいる少女。スレイヤーズが一人、Mことマドカ。

「残念ながら、私はロイヤルストレートフラッシュです」

腰まで伸びた黒髪に、頭の両サイドから一本ずつ細い三つ編みを携えている。右目は青く、左目には赤い眼帯を付けいる少女。スレイヤーズのリーダーのまとめ役、Aことアリス。

「げぇっ、またぁ！？」

今日のスレイヤーズは特に任務もなく暇だったので、ブレイドを誘ってトランプでポーカーをやっていた。因みに、アリスが十連続で一位を納めて、輝火が十連続で最下位を飾っている。

「むっ。そろそろ鍛錬の時間か・・・・。すまないが、私はこれで失礼する」

時計を見たブレイドは、申し訳なさそうに立ち上がって部屋から退室した。

「ブレイドって本当に良い人だよね～。優しいし、強いし」

「あれで変態なのが致命的ですがね」

さらりとアリスはブレイドの痛い所を突く。しかし、それが彼の良いところでもあるので何とも言えない。

「・・・ブレイドは、良い人。ドクターも、ちょっと怖いけど、良い人」

「ドクターか・・・・。確かにあの人には色々と世話になってるけど・・・正直、謎が多すぎる」

マドカは読んでいた本を閉じて、三人の側に歩み寄る。ドクターは彼女達の体から監視用のナノマシンを取り除いたり、専用のＩＳを用意したりと彼女達にとっては恩人にあたる存在だが、それでもマドカはドクターをあまり信用してないようだ。

「ん～、そう言われればそうだけど・・・今のところウチらには何の問題も無いんだから、別に良いんじゃない？誰にでも隠し事の一つや二つはあるって言うし」

「・・・・・（コクリ）」

「・・・・そんな考えしかない、あなた達が羨ましいわ」

輝火と恋の呑気な答えにマドカは溜息を吐く。いつも頭の中が平和なこの二人からまともな意見を聞こうとしたのが間違いだったと後悔する。

「兎に角、彼女が我々にとって有益な存在であることには変わりません。それに、あれが『良い人』という分類に入ることは間違いないでしょうし」

アリスのその言葉にマドカ、恋、輝火は同意の意を示す。

「まぁ辛気くさい話しは此処までにして、折角の休みです。久しぶりに四人で何処か出かけませんか？」

明るい声色でアリスがそう言うと輝火の顔が一気に明るくなる。四人の中でも一番活発で女の子らしい彼女にとって、皆と出かけることは楽しみの一つなのだ。

「ハイハイッ！ウチは買い物行きたいです！」

「・・・・恋、お腹空いた」

完全に乗り気の輝火と恋にマドカはまたもや溜息を吐く。輝火と恋がはしゃぎ、マドカがそれに振り回され、アリスが纏める。これがスレイヤーズ内での関係である。

「すぐ部屋に戻って用意してくるから！行こっ、恋！」

「・・・・・（コクリ）」

腕を引っ張られて、恋は輝火と共に部屋から出て行った。そんな二人を微笑みながら見送ったアリスも出掛ける準備をしようとしたが、マドカが神妙な目を自分に向けているのに気付いた。

「どうかしました？」

「別に・・・。アリスが出掛けようなんて言うのが珍しくてね。ちょっと驚いてただけ」

「私も年頃の女の子なのですから、偶にはこういうこともしたくなりますよ」

クスッと可愛らしい笑顔からは、とてもじゃないが人を殺めるような部隊のリーダーをしているとは思えない。マドカもやれやれといった感じで準備を始める。だが、それを見て背を向けたアリスの表情には先ほどの笑顔は無かった。

「・・・・・」

今の彼女の表情にあるのは憎しみをも超えた殺意。首に掛けているロケットを開けて、中にある写真を見つめる。そこに写っているのは自分がこの世に生まれてくる原因となった一人の少女がいた。口元が邪笑に歪み、三日月を形取る。

「（あなたは、必ずこの手で殺します・・・・）」

「（お姉様）」

とある機業の殺害者達（スレイヤーズ）（後書き）

「お前ってななせのこと好きなのか？」

「兄が弟の幸せを願うのは当然だよ」

「こうやって二人で出掛けるのは初めてだね」

「私は・・・・魅力的では無いのかな・・・・」

「ななせはボクとアルにとって初恋の相手だからね」

「今日こそ、俺の思いを伝えてやるよ！」

～次回～

『恋と度胸と夏祭り』

お楽しみに！！

各種設定3＋α

どもっす、ＥＸＴＲＥＭＥっす。人気はイマイチですが、何とか『不屈の翼』とのコラボまであと少しとなりました。正直、この話しは突拍子に考えたものなので、今では若干後悔・・・・。ですが、折角キャラの貸し出し許可を貰ったので、全力で励みたいと思います！こんな駄文でも楽しみにして頂いている読者様のために頑張らせていただきます！！

政志「メンドクセェけど、進行役は俺がやるからな。まずは、機関について大まかな説明をするぞ」

地球連邦軍
どの国にも属さない軍事機関。悪政を働く者がいれば即刻排除され、常に『正義と平和』を掲げている。規模はあまり大きくないものの、戦力がずば抜けているため誰も手が出せない。本部は太平洋の人口の島に位置しており、島の四方位にはハイパーメガ粒子砲が配備されている。また、島全体をシールドバリアーで覆うこともできる。

アルカディアス
連邦軍附属の教育機関。小等部から中等部まであり、卒業した後はそのまま連邦軍に入るのも良し、ＩＳ学園に行くのも良し、基本的に自由である。総合成績七位以内の者は『ロイヤルナイツ』と呼ばれ、他の生徒から一目置かれている。また、本人達の希望で軍の作戦に参加することも可能である。

鴻上ファウンデーション
連邦（どちらかと言えば政志達）を支援する謎の巨大財団。会長の鴻上光生（こうがみこうせい）は人当たりが良く、常に抑揚をつけた異様なテンションの口調で喋る。「誕生」に至上の価値を見出しており、記念日や誕生日など、何かにつけてバースデーケーキを作成し贈呈してくる。

政志「次は新キャラとそのＩＳだ。・・・言っておくけど、全員馬鹿だからな」

◇橘茜（たちばなあかね）◇
髪：茶髪
瞳：紫
歳：１４
好きなモノ：可愛いもの
嫌いなモノ：ハッキリしない人
容姿：とあるの御坂美琴
性格：勝気だが、友人からは「優しすぎる」と評されている。苛立つことがあればすぐに蹴りを入れる。
備考：本名は『鈴木茜』で政志の実の妹。目にはカラーコンタクトを入れており、外すと政志同様金と赤のオッドアイ。少しでも兄の力になろうと、政志には内緒でアルカディアスに入った。ロイヤルナイツの第三位。

◇桜田天空（さくらだそら）◇
髪：薄い桃色
瞳：緑

歳：１４
好きなモノ：スイカ、ひよこ、にわとり、こけし
嫌いなモノ：特になし
容姿：そらのおとしもののイカロス
性格：一般常識が完全に欠如しており、天然ボケ。コメディとシリアスの両面において危険な因子を持っている。
備考：本名は『鈴木天空』で政志の実の妹。茜同様、カラーコンタクトでオッドアイを隠している。ロイヤルナイツの四位。

◇山本真海（やまもとまさみ）◇
髪：紅
瞳：金と赤のオッドアイ
歳：１４
好きなモノ：音楽、うどん
嫌いなモノ：音楽と仲間を悪く言う人
容姿：Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！の岩沢さん
性格：クールでもの静。若干天然ボケで周囲に流されやすい。
備考：本名は『鈴木真海』で政志の実の妹。茜と天空と違い、一人だけオッドアイをカラーコンタクトで隠していない。サボり癖が多く砂浜に行って持ち前のギターで演奏している。ロイヤルナイツの第一位。

専用ＩＳ『バンシィ』
～武装～
・ビームマグナム×１
・ビームサーベル×４

・ハイパーバズーカ×１
・シールド×１
・ビーム・ガトリングガン×２
備考：ユニコーン二号機として作られ、武装は一号機と同じ。しかし、一号機の戦闘データを元に作られたため、機動性は一号機を遙かに上回る。機体カラーは黒でＩＳ－Ｄ時には装甲が展開して金色の光を放つ。

◇シエル・マスクアード◇
髪：濃いピンク
瞳：緑
歳：１８
容姿：劇場版ＯＯのフェルト・グレイス
備考：連邦軍所属で階級は大佐。政志達が本部を留守にしている間、軍の大まかな仕事は彼女が行ってくれており、政志達のお姉さん的存在。

◇ルーシィ・パーカー◇
髪：薄い紫
瞳：赤
歳：２０
容姿：ＯＯのアニュー・リターナー
備考：連邦軍所属で階級は大佐。シエルとは仲が良い。ジンクス部隊の隊長でもあり、アルカディアスの学園長も担っている。

◇逢沢帝（あいざわみかど）◇

髪：濃い茶色で長さは肩に掛かるか掛からないな。髪型は左に自然に髪が流れてる感じ。

瞳：漆黒

性別：男

歳：２４

容姿：上の上

性格：いつもクールで冷静沈着。内面は仲間思いだがたまに抜けている。

備考：千冬や束の元同級生。白騎士事件では千冬の裏で活躍したが、そのまま姿をくらますが、旅を続けている時に、千冬に呼び出され、ドイツに向かう途中、無許可でドイツの領域に入ってしまい、政志達と遭遇し戦闘（ドイツ留学時）、その後政志達と知り合いとなるがラウラからはあまり好かれていない。政志達がアロウズに入隊と同時に行方不明となる（実は束とＩＳ弄りに没頭して一緒に過ごしてした）。

専用ＩＳ『幻騎士（げんきし）』

第一世代型ＩＳ

機体色：蒼

～武装～

・スプラッシャー×２－両腕に内蔵されているビームサブマシンガン

・ミラージュソニック×１０－両手の全指先から展開されるビームクロー

・ストライザー×１０－十枚羽のウイングスラスターから射出される自立ビーム砲台。片方に五基ずつ装備されており、ファングのようにサーベルを展開させることも可能

備考：束が白騎士より前に作った幻のＩＳ。性能は自分で弄ったりしたおかげで第四世代並となっている。拡張領域がとても広く、四種類のパッケージを有している。近接の『炎帝』、遠距離の『狙撃』、火力の『撲殺』、高機動の『幻影』とそれぞれの武装に換装することでガンダム並の性能となる。帝曰く『ガンダム殺しの機体』

近接追加武装～炎帝～
換装時に機体色が赤に変色
・ダイダロス？×２－両肩に一本ずつ装備される大型実体剣
・ダイダロス？×４－両腰に二本ずつ装備される中型実体剣
・ダイダロス？×４－両脹ら脛に二本ずつ装備される小型実体剣。主に投擲に使用される
・イクシオン×２－両手の掌に装備される輻射波動機構
・高出力小型スラスター－背中に換装されて取り付けられる

遠距離追加武装～狙撃～
換装時に機体色が緑に変色
・ガーディアンビット×１６－背中のストライザーから換装される自立シールド。片方に八基ずつ装備され、自機や僚機の周りに展開する
・イーグル－左肩に装備されるスナイパーライフル
・スキュラ－左肩に装備されるビーム砲台
・メラゾーマ×２－両腰に一基ずつ装備される小型連射型ビームマグナム。ユニコーンのビームマグナムと違い連射が可能になっているが威力はビームライフルの二倍となっている

火力追加武装～撲殺～
換装時に機体色が白に変色
・エクセリオンブレイカー×２－両肩に一基ずつ装備される大型キャノン砲台。展開させたスラスターから光を集めることでエネルギ

ーを砲身にチャージすることによってディアボロスのＧＮツインバスターライフル並の威力のあるビームを放つことができる。チャージ無しでも撃てるが威力が極端に下がり、チャージには３０秒かかる。また、一撃必殺武器のため反動が大きい
・デスペラード×２―両腰に一基ずつ装備されるレールガン
・プルート―胸部に装備されるビーム砲

高機動追加武装～幻影～
換装時に機体色が黒に変色
・超高出力小型スラスター―アリオス並の高機動戦を可能にしつつも飛行時に一切の音を出さない
・ディーヴァ―発動させると機体周辺を光化学迷彩で覆い、センサーにも反応しなくなる
・ダイダロス？×４―両脹ら脛に二本ずつ装備される小型実体剣。主に投擲に使用される

政志「それにしてもこの作品やたらと人気無いよな」

アル「コラーーーー！！いきなり何てこと言うんだあっ！！作者も作者で頑張ってんだぞ！！」

龍鳳「せやせや。作者の駄文は今に始まったことやないで」

クリス「でも、龍鳳。この作品ボク達を含めてオリキャラがすでに２０人以上出てるよ？」

一同《何・・・・だと・・・・・》

ヴィンス「増やしすぎたら俺みたいに後悔されるパターンになるぞ」

政志「安心しろ。いらなくなったオリキャラには死んでもらうから」

一同《何・・・・だと・・・・・！》（本日二回目）

政志「まぁ、冗談はさておき」

アル「冗談かよ！？」

政志「作者としては、人気キャラ投票がやりたいらしいけど・・・・どうする？」

一同《いや、無理無理》

政志「だが、俺はそんな無理を押し通す！」

アル「正気か貴様！？」

龍鳳「誰が投票してくれる言うんや！！」

クリス「一位が一票だけとか悲惨な結果になるのは目に見えてるよ」

一夏「俺も止めておいた方が――」

オリキャラ一同《原作キャラは黙ってろ！！》

一夏「・・・・ごめん」

政志「仕方ねぇ、ならこうするぞ。この小説で好きなキャラを三人選んで、一番好きなのが三ポイント、二番目に好きなのが二ポイント、三番目に好きなのが一ポイントと言った感じだ」

ななせ「どこかでこういうの見たことがあるのは気のせいかな？」

政志「一位と二位のキャラは特別番外編を書くぞ」

ななせ「ごめん気のせいじゃなかった。完全にパクリだね」

政志「誰でも感想を書けるようにしたから、ご協力よろしく頼むぞ」

ななせ「それではこれからも『ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＜～紅蓮の破壊神～』をよろしくお願いします！」

各種設定3＋α（後書き）

次回はちゃんと本編書きますので

恋と度胸と夏祭り（前編）（前書き）

人気投票はしばらく受け付けているんで、ドンドン投票してください！！

では、本編をどうぞ！！

恋と度胸と夏祭り（前編）

「ハァ・・・・」

何処か浮かない顔で溜息を零すのはヴィンセント・トールギス。さっきからベッドの上で仰向けになり携帯の画面を見つめ続けており、かれこれ一時間は経過している。

「いつになったら、ななせに好きって言えるんだよ・・・・」

「へぇ、お前ってななせのことが好きなのか？」

「そうだよ、何か文句あんのか。・・・・って何でお前らがここにいるんだよ！？」

声が聞こえた方に飛び起きながら向くと、一夏とクリスがいた。その際に携帯が手から滑り落ちてしまい、クリスに拾われてしまう。慌てて画面を見られる前に奪い取ろうと試みるが、時既に遅し・・・・。

「うわ～。待ち受け画面相変わらず、ななせのままなんだね」

「か、返してくれよーっ！！」

いつもの鋭い気配は一切見受けられず、恥ずかしさで顔を真っ赤にしてヴィンスの目には涙が浮かぶ。一夏が携帯を覗き込むとそこには、軍服に身を包み笑顔を見せているななせが写っていた。一年以上好きな女の子の写真を待ち受けにしているヴィンスは一途としか言いようがない。ヴィンスの意外な一面を垣間見た一夏はポンと肩

に手を乗せる。

「お前も、案外初なんだな」

「どういう意味だよ・・・・！」

再び携帯を一夏から受け取ったクリスはデータフォルダを閲覧していると、さすがに目に余るものを見つけてしまった。

「・・・・ヴィンス、この『ななせ』って名前のファイルは何・・・・？」

「――――っ！？」

ファイルを開けて中を見ると、最初から最後までななせの写真で埋まっており、中には際どいものもあった。クリスと一夏は引きつった笑みを浮かべ、携帯からヴィンスへと視線を移すと、両目からボロボロと涙を流していた。

「「・・・・・」」

物凄い罪悪感に襲われたクリスと一夏が、ヴィンスに何か声を掛けようとした途端、

「・・・・て・・・・き・・・・ん・・・・」

ヴィンスの口から微かに声が漏れるが、小さすぎて聞き取れない。しかし、次の瞬間何を言っていたのかが分かった。

「だって、ななせが好きだもんっ！！しょうがないじゃんかーーー

ーーっ！！！！」

「「――――っ！？」」

叫び声を上げながら、ベッドの上で手足をばたばたさせる姿は駄々をこねる子どもにしか見えない。一夏はおろか、双子の兄のクリスでさえこんなヴィンスを見るのは初めてだったのでどう対処したらいいか分からなかった。それでも、二人の考えていることは同じだった。これはかなり重傷だと。

一夏とクリスが宥め始めて十分経過したところで、ようやくヴィンスは落ち着きを取り戻した。とは言っても顔は未だに赤く、目頭が濡れている。

「・・・・俺は、ななせのことが好きなんだよ・・・・」

「「？」」

何の前触れもなくギリギリ聞き取れる音量で喋り出したヴィンス。
クリスと一夏は黙ってそれを聞くことにした。

「・・・ななせって、兄貴のことが好きだろ？・・・・でも、俺なんかじゃ、兄貴には到底勝てっこないし・・・・」

初めて会った時から今まで想いを寄せてきた相手には好きな相手がおり、それが自分の尊敬する人物だということで完全に弱気になっている。こういう話を誰にもしたことがなかったためか、不安が溜まりに溜まっていて今吐き出しているのだろう。でも・・・・。

「それは違うよ、ヴィンス。確かに、ななせはずっと政志のことが好きだし、政志が相手じゃ厳しいかもしれないけど・・・・」

「けど？」

「ヴィンスはヴィンスなんだから、自分に自信を持って良いんだよ？それに最後まで諦めなかったら、好きって想いもきっとななせに伝わるよ」

ニコっと笑いながらそう言うクリスも一人の兄なんだと一夏は思った。それを聞いたヴィンスもいつもの表情に戻っていき、バッと立ち上がった。

「ありがとよ、クリス！お前のおかげで吹っ切れたぜ！！」

「何が吹っ切れたんだ？」

この部屋のもう一人の持ち主であるアルが帰ってきて、何やら宣誓しているヴィンスに首を傾げる。とりあえずクリスがアルに状況を説明した。

「あ～、なるへそね。・・・・それなら、俺に良い案があるぜ？」

「あ、あのアルに良い案だと！？」

「イッチー、お前いつか殺すからな・・・・。それで俺が耳にした情報によると、今日ななせは箒の実家に行ってるらしいんだよ」

「あっ。そういえば、篠ノ之神社で祭りがあるの今日だったな」

「それだよ、それ。それを今回の作戦に使うんだよ」

「どういうこと？」

「だからな。今日祭りがある場所には箒とななせがいます。そこに、偶然。ぐ・う・ぜ・ん、イッチーとヴィンセントが行きました。さて、これから求められる答えは何でしょうか？」

「「？」」

全く検討がつかない問題に悩まされていた一夏とヴィンスだったが、クリスが勢いよく手を挙げた。

「先生ェ！ボク分かりましたっ！」

「はい、クリストファー君どうぞ！」

「つまり、今日の祭りを一夏くんとヴィンスを、箒ちゃんとななせと一緒に回らせようってことだよね！」

「イグザクトリー、その通りだよ！！ハッハッハッハ！！」

馬鹿が馬鹿みたいに笑うと本当に馬鹿にしか見えない。つまり、二人っきりで祭りを回らせて、そのままくっつけちゃおうという魂胆だ。

「ちょっと待て！何で俺も混ざってんだよ！？」

「この際、二人もくっつけちゃった方が面白いかなって♪」

一夏の突っ込みをクリスは笑顔で受け流す。いつの間にか、サポートする側からされる側になっているのに気付いたが、もうこの二人を止めることは出来ない。

「じゃあボク達、色々と準備してくるね！」

「こいつは面白いことになりそうだぜ！」

アルとクリスは嵐のように部屋から飛び出して行った。協力してくれるのはありがたいのだが、何だか嫌な予感がしたヴィンスは後悔の溜息を吐く。

「ところで一夏」

「何だよ」

「お前って箒のことが好きなのか？」

「ブホォッ!!・・・お、お前いきなり何てこと言うんだ!?」

「俺もゲロってやったんだ。お前のも知っといて良いだろ?」

仕返しと言わんばかりに悪戯な笑みを浮かべたヴィンスは一夏に問いつめる。一夏も観念したのかベッドに腰掛けて話し始めた。

「正直なところ・・・良く分からないんだよ。俺にとって箒は今でも幼馴染みだ。でも、それとは違う何かでもある・・・」

「つまり、それが恋かどうか分からないってことか?」

「そうだろうな・・・」

「良く分からねぇけど・・・俺は決めたぞ?今日こそ絶対にななせに告白するってなっ!!」

拳をグッと握りしめ、決意を新たにするヴィンスを一夏は何処か羨ましそうに見ていた。自分の気持ちを理解して実行する・・・。そのやり方が一夏には分からない。臨海学校のあの夜から抱いているこのもやもやの正体が分からない。

「・・・・・」

悩んでいても始まらないので、取り敢えず今は目の前の一途な友達を目的地まで連れて行くことを先決させたのであった。

「ここがそうなのか？」

「あぁ、ここが篠ノ之神社。箒が転校する前に住んでいた所だ」

目的地に着いた二人は、神社の境内へと足を運んだ。初めてみる日本の神社に興味を持ったのか、ヴィンスは先ほどから辺りをキョロキョロ見渡している。こういうところは兄のクリスそっくりである。そして、境内にあるお守りを販売している店で今回のターゲットを発見した。

「い、いいい、一夏!?な、何故ここに!?」

「ここで夏祭りがあるのを思い出してな。それで、ヴィンセントと一緒に来たんだよ」

一夏の隣に立っているヴィンスに目を向けると先ほどから店の中を見ながらそわそわしてている。それを見た箒にはヴィンスがここに来た理由が何となく分かった。

「（以前からそうではないかと鈴が言っていたが、本当にななせのことが好きだったとはな・・・・）んんっ！！ななせー、こっちに来てくれないか？」

咳払いをして落ち着きを取り戻した箒は、ヴィンスに助け船を出してやろうとななせを呼ぶ。ななせの名前が出た瞬間、ヴィンスの体がビクッと跳ね上がったのは気のせいだろうか？

「箒、あたしに何か用？」

「！！」

店の奥から姿を現したななせは箒同様、巫女服を着ている。至ってシンプルなのだが、今のヴィンスを刺激するには十分過ぎた。

「あれっ？ヴィンセントと一夏・・・・どうして、ここに？」

「にゃ、にゃんでもにゃい！！にゃんでもないから！！い、いいい一夏がくりゅっていったから、つ、付いてきた、だけだかりゃ！！！！」

尋常なまでに動揺したヴィンスはソニックブームが生じるほどの速さで首を横に振る。顔を真っ赤にしているところを見たら、どうしてここにいるかなど分かるはずなのだが、悲しいことに、ななせもかなり鈍かった。

「ふ～ん。そうなんだ」

完全に信じ切っているななせに一夏と箒は、ヴィンスに強く生きてほしいと願った。現在の関係を纏めるとコンナ感じ。

『政志（オタａｎｄ鈍し）↑ななせ（どじっ娘ａｎｄ鈍し）↑ヴィンセント（馬鹿）』

「まあまあ、箒ちゃん、ななせちゃん。一体どうしたの？・・・・・ああ」

騒ぎを聞きつけてきた箒の叔母、雪子さんは箒とななせ、一夏とヴィンスを交互に見た後、何なやら得心したのか、頭上で豆電球を光らせる。

「箒ちゃん、ななせちゃん、あとは私がやるから、夏祭りに行ってきなさいな」

「でも、まだ店の手伝いが・・・・」

「二人には十分手伝ってもらったからいいのよ。浴衣は私が用意しとくから、シャワーで汗を流しておいで」

箒とななせに喋る暇もなく、雪子さんは二人の体を母屋まで強引に押していく。そして、去り際に向いて一夏とヴィンスに言った。

「ちょっとだけ待っててね。彼女を待つのも彼氏の役目よ」

「「え？」」

一夏と箒にウインクを送った雪子さんは、そのまま箒とななせと一緒にいなくなる。どうしたものかなーと思った一夏はヴィンスに話しかけようとしたが、

「（どどどどどうしよう!?彼氏って俺のことだよな!?そうしたら彼女って誰だ!?箒か!いや、箒は一夏のものだし・・・・となるとななせなのか!!ななせなのか!!・・・・俺はどうしたらいいんだあああああ!!!!!）」

ものっそいテンパっていた。

「（教えてくれェ!!レグナントオオオオオオ!!!!）」

「良かったね。一夏が来てくれて」

「そ、それはそうだが・・・・」

ざぱーんと二人はお湯を頭からかぶった。湯船に初めて浸かるななせは気持ち良さげだが、箒はお湯ではない何かにのぼせて顔を赤くしている。

「だあああっ！」

「！？」

ざぱーん！と桶に張った満杯のお湯を再び頭被る箒の顔は更に赤くなっていた。どうせまた脳内で美化された一夏とイチャイチャしていたのだろう。

「ど、どうしたの？そんな大変な声だして・・・・」

「な、何でも無いっ！何でも無いぞっ！」

説得力ゼロの言い訳になせは溜息を吐いた後に、箒の頭にペシッとチョップをお見舞いした。あいてっ！？と声をだして叩かれた頭を押さえる箒になせは話しかける。

「あたしと箒は友達だよ。悩み事があるならいつでも相談に乗るんだからね？」

「ななせ・・・・」

「やっぱり、一夏のことで悩んでるの？」

「・・・・あぁ」

「・・・・一夏なら、大丈夫だと思うけどなぁ」

「ど、どうしてだ？」

「だって、こんなに箒に想ってもらってるし、それに・・・・」

「それに？」

「一夏も、箒のこと好きだと思うよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

目の前の少女の言っていることが理解できない箒はきょとんとした目になり口を開けている。そんな反応が面白いのか、ななせはクスクスと小さく笑い出した。

「ど、どうして、そ、そう思うんだ・・・・！？」

「フィーリング。つまり、勘かな」

「勘って・・・・」

思わぬ理由に拍子抜けする箒。しかし、もしそうだとしたらと思うと顔を更に赤くして、心臓の鼓動が急激に早くなる。

「（も、ももも、もし、一夏が私のことが好きだとしたら、そ、それは――――）」

「両思いになるね」

「な、何で考えていることが分かった!?」

「勘だよ。か・ん」

「・・・・・／／／／」

恥ずかしいのを隠そうと、箒は湯船の中に潜水する。再びクスクス笑いながら、恋する乙女を見たななせは浴室から出て行った。そして、ふと鏡に映った自分を見つめ合っている内に自然と笑顔が消えていき、切ない表情へと変わっていく。

「・・・・政志・・・・」

堕天使の唇から零れた最愛の人間の名は、時間と共に空気に溶けていった。まるで、彼女の想いが届くのを拒むかのように・・・・。

浴衣に着替えた箒となななせは、一夏とヴィンスと合流した後、二組に分かれることにした。もちろん、一夏と箒、ヴィンスとななせと言った具合にだ。しかし、その二組を見守る者がいた。

「イチゴとメロンですね？ちょっと待ってくださいね～」

かき氷の屋台を営む白髪頭の童顔の少年は注文を受け取ると、左耳につけてあるインカムのスイッチを入れる。

「こちらエンドレス・ホワイト。目標が二手に分かれた」

【こちらスカル・グリーン。目標1と目標2を補足した】

「くれぐれも目標には気付かれないように」

【了解。これより作戦行動に入る】

「了解。暫くしたら、こちらも合流する・・・・・（カチッ）。お待たせしました！イチゴとメロンです！」

通信を終えた途端に声色が戻った屋台主ことクリスはお客に向かって１００カラットの笑顔を振りまく。

「（待っててね、ヴィンス！君の恋はボクが成就させてあげるから！！）」

・・・・もう、好きにしてください。

恋と度胸と夏祭り（中編）（前書き）

今回で終わらせなかった・・・・

人気投票まだまだやってるんでドンドン投票してください！

では、本編をどうぞ！！

「そういえば、二人でこうして歩くの初めてだね」

「・・・・そうだな」

ななせに話しかけられて、いつものようにクールぶった口調で返答するが、内心はかなりテンパっていた。今、ななせが着ている浴衣は緋色の生地に朝顔が咲き誇っている。所々に広がっている金の波紋が些か派手に見えるが、ななせはそれを見事に着こなしている。そのせいでヴィンスの体の中のアドレナリンの分泌速度が急上昇してロクにしゃべれない。

「そ、その浴衣・・・・似合ってる、な」

「そう？ありがとう」

ドキューン！とピストルで撃ち抜かれる音がヴィンス内で響き渡った。それぐらいになせの笑顔は今のヴィンスにとって致命傷を負うほどのものなのだ。その証拠に上を向いて鼻血が出るのを防いでいる。

「？」

しかし、その行為の意味を全く理解できないのが、ななせクオリティーだ。現に今、首を傾げている。悲しいことに、この少女もある意味馬鹿なのだ。

「（俺、ごんなので告白でぎるのがな・・・・？）」

どうでもいいから、さっさと鼻血止めろ。

「（ふにゅ？そういえば俺は何時ななせに告白したらいいんだ？）」

全力で鼻血を吸い込むことで、何とか鼻血が出そうなのを隠したヴィンスはどのタイミングで想いを伝えるかを悩んでいた。完全に告白することした考えていなかったようで、時と場所などは頭に入っていなかったようだ。今更だが、どうやらコイツも馬鹿らしい。そんなこんなで二人は屋台の間を歩いていると、やたらと人が集まっている店を見つけたので寄ってみることにした。

「お、多すぎない？」

「一体何の店だよ・・・・・」

人混みをかき分けてようやく店の前までたどり着くと、大量の鳩が店の中が見えなくなるぐらいに留まっていた。

「「・・・・・」」

訳の分からない光景に二人の目が点になる。しかし、大量の鳩が二人が来た途端に一斉に飛び立っていき、店の中が露わになった。店の主は３０代ぐらいの男性で何処ぞのマフィアのような格好をしている。その男性から放たれている空気はただ者ではなく、俯いていたその顔が上がって二人と目があった。

「いらっしゃい」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべるまでは百歩譲って、百歩譲って許

そう。しかし、問題はそこでは無かった。

「ななせ、お前気付いたか？」

「うん。この店、射的の銃があるのに景品が一つも置いてない。正直、怪しすぎる」

そう、この射的屋？には銃があるのに撃つべき対象物がないのだ。しかも、その銃も銃で実戦で使われてそうなガチっぽいやつばかりである。

「おい、ヴィンセント。こりゃ一体何だよ？」

「嫌な予感がするのは私だけか？」

知った声が聞こえた方を振り向くと、人混みの中から一夏と箒が出てきて、誰もが抱くであろう疑問を口にした。

「どう考えても、１００パーろくでもねぇことだろ――」

【ピーンポーンパーンポーン♪】

《？？》

店の柱にぶら下げられているマイクから突如放送音が流れてきて、全員が耳を傾ける。

【もしもしー、皆さん聞こえますかー？聞こえても、聞こえなくても返事してねー】

「・・・・なぁ、この声って・・・・・」

「絶対に、あの甘党小動物だろうな・・・・」

聞き覚えのある幼さを感じさせる声の持ち主が分かった一夏とヴィンスだったが、箒となな せは気付いていないのか、放送を黙って聞いていた。

【えーっと、今回の夏祭りには皆さんにより一層楽しんで貰おうと思って、プロの夜店屋さんを呼んでみましたー】

プロの夜店屋とは恐らく、マフィアみたいなおっさんのことだろう。確かに、何かしらのプロであろう風格が漂っている。

【ルールは簡単。そこにあるコルク銃でサバイバルゲームをしてもらって、最後まで生き残った一人に豪華景品をプレゼントー！】

「豪華景品？」

なな せがそんなことを口にすると、射的屋のおっさん（テキ屋のおっさん）は足下に置いてあったアタッシュケースを持ち上げて、中を全員に見えるように開くと、

【現生一千万だよ～！】

・・・・・・・・。

《何ーーーーっ！！！！》

ケースの中には皺の無い、真っ新な万札が敷き詰められており、全

員の目を釘付けにする。

「なるほど、夢さえも買える金額だな！」

「うほっうほっ！」

「よっしゃー！借金返済してやらぁ！」

「「（祭りに来る暇があるなら働けよっ！！）」」

客は目の色を変えて叫び声を上げ始める。一夏とヴィンスは3番目の人間に、心の中で全力の突っ込みを入れた。

「・・・・どうする？」

「あのクリスが一枚噛んでるとなると、ロクなことじゃねぇのは確かだろうな。なら無理に参加することも――」

「何だか楽しそう。あたし、参加してみようかな？」

「「（ななせっ！？）」」

「「（一千万あれば、一夏と旅行に行って・・・・それから、それから・・・・）」」

「「（箒ィィィィィィ！！）」」

乗り気ななせと妄想トリップしている箒。止めるのも難だと思った二人は溜息を吐きながら仕方なく参加することにした。まず射撃のための銃を選ぶ段階で四人は、手軽なハンドガンを手に取った。

他にも、マシンガンやら火力の高そうなものがあったのだが、金に目が眩んだ客が真っ先に持っていったのだ。金の力、恐るべし・・・・。

【皆さ～ん。銃はもう持ちましたか～？】

気が付けば、祭りに来ていた客のみならず、屋台を出していた者まで参加している。金の力、恐るべし・・・・！

【それじゃあ、サバイバルゲーム・・・・始め～！】

開始の合図が聞こえたと同時に一夏とヴィンスに向かってコルクの雨が降り注ぐ。実は、始めの『は』が聞こえた時点で、一夏とヴィンス以外の参加者は散開していたのだ。二人は何とか身を屈めることで避けることに成功した。二人の頭上ではコルクが飛び交い、戦場と化している。

「くそっ！一夏、ひとまず何処かに隠れるぞ！」

「わ、分かった！」

二人は匍匐前進をしながら林の中へと入っていくが、その途中で草むらから骨と皮だけの老婆が飛び出してきた。その両手にはハンドガンが握られている。

「何処行こうってんだい、一坊！！」

「こ、公民館のお婆さん！！足が痛いの直ったのか！？」

「一千万のためなら、痛みなんぞ吹っ飛んだわーーっ！！」

公民館のお婆さんは発狂しなが乱射し始め、二人は全力で逃げ出した。

「待たんか一坊ぉぉぉ！！そんな白髪頭の老人を人質に取るような子に育てた覚えはないぞーーー！！」

「育てられた覚えはねぇよ！！」

「それと、俺のこの髪は生まれつきだァァァ！！」

しかし、二人の行く手を阻む者が更に現れ始める。

「一坊、覚悟ォォォォ！！」

「八百屋のおばさん！？」

「ホラホラァ、逃がすかぁ！！」

「魚屋のアンちゃん！？」

前後と左を囲まれた二人は、逃亡ルートで右方向へ向かって走り出す。後ろから追ってくる三人が撃つコルクを奇跡的に避けながら逃げる一夏とヴィンス。

「あらあら、二人共大変ねぇ」

「Ｉ　ｋｉｓｓ　ｙｏｕ！」

「ちょっと待て！！箒の叔母さんは分かるが、もう一人の奴誰だよ

！？」

「俺に聞くなぁぁぁぁ！！」

雪子さんと頭に赤いバンダナを巻いた謎の男も加わり、五人の追っ手から逃げていた二人は木の陰に隠れた。居場所がバレていないようだったので、一息付こうとしたが、

「甘いわぁぁぁぁ！！」

再び草むらから飛び出してきた公民館のお婆さんは、アクロバティックな動きをしながら二人に銃を向ける。正直、結構怖い。

「撃ゥゥゥゥちとったりィィィィ！！」

やられる、と思った瞬間、お婆さんの額がコルクで撃ち抜かれた。

「ドベェッ！！」

「お婆さん！？」

「Ｉ　ｋｉｓｓ　ｙｏｕ！」

「結局誰だよ、お前！？」

お婆さんだけではなく、バンダナの男まで撃たれて気を失う。

「っち、狙撃手（スナイパー）か！」

残った追っ手の三人は一夏とヴィンスがもたれ掛かっていた木に背

を向けて、身構える。しかし、次の瞬間、周りの木に何かが当たる音がしたと思ったら、追っ手の三人の頭が撃ち抜かれた。

「ヴィンセント・・・・これってまさか！」

「コルクの弾での跳弾、しかもこの精密さ。こんなことが出来るのはあいつしかいねぇ・・・・」

「これぐらい楽勝楽勝♪」

一夏とヴィンスの予想通り、二人がいる場所からかなり離れた木の上からアルがスナイパーライフルのスコープで二人を覗いていた（ドヤ顔で）。

【こちらエンドレス・ホワイト。そちらの状況は？】

「こちらスカル・グリーン。先ほど、目標に近づく敵を排除した」

「ＯＫ♪ありがとね～」

何時の間にか、木の下にクリスがいて直接声が聞こえてきた。アルは溜息を吐きながら、スコープから目を外して、視線をクリスに向ける

「で、これからどうするんだ？あいつらから優勝者を出すのが目的じゃないだろ？」

「んー、そうだねぇ・・・・。ボク、ちょっとヴィンスと二人っきりで話しがしたいんだけど、どうにかならない？」

「へぇー、奇遇だなぁ。俺もイッチーとちょっと話しがしたかったところだ。そうなると・・・・お前はポイントＥ１０に行け。そこにヴィンセントを誘導する」

「分かった」

クリスはてってーと指示されたポイントへと歩いていき、アルはスナイパーライフルにコルクではないものを装填した。

「さてと、狙い撃たせてもらうぜ！」

「まさかアルまで来てるとは、一体何が目的なんだよ・・・・？」

「さあな。取りあえず、兄貴と龍鳳がいないだけまだマシだ」

「いたらどうなるんだ？」

「おそらく・・・・何人か死傷者が出る」

「・・・・・」

あいつら何やらかすつもりだよ、と心の中で突っ込みを入れる一夏はヴィンスと共に辺りが静かになるまで隠れることにした。とは言っても、先ほどの木の根元に座っているだけだが。

「もう帰ろうか、って一夏っ！」

「な、何だぁっ！？」

魔獣の勘で何かを察知したヴィンスは一夏を突飛ばし自らも木から離れた。すると、二人が背を預けていた木が爆発して木っ端微塵に吹っ飛んだ。ヴィンスには見えたのだ。目の前の木で弾かれた弾丸

が飛んできたのを。こんなことが出来る馬鹿はただ一人。

「くそっ！アーノルドの奴俺らを殺す気か！？」

悪態を付きつつもヴィンスは全力で走りだして、一夏も後に続き、走れば走るほど周りの木が吹っ飛んでいく。あの馬鹿は環境問題という単語の意味を知らないのだろうか？そうやって二人で逃げ回っていると、今まで両サイドの木が爆発していたのが、今度は目の前の木が爆発した。

「（何を考えてんだよ、あの馬鹿共は・・・・）一夏、二手に分かれるぞ」

「お、おうっ！」

このままでは埒があかないと思ったヴィンスは一夏に分かれるよう指示を出す。一夏は黙ってヴィンスに従って、右へ曲がっていきそのまま走り去って行った。それを見届けたヴィンスは立ち止まって、近くにある木に視線を投げ掛けた。

「・・・俺にバレないとでも思ってんのかよ？」

すると、数秒後に木の裏からあの小動物がニコニコしながら出てきた。

「そんなことないよ。ここまではボクの計画通り。でも、誘導してくれたアルも凄いけどね」

「どうせ、俺に何か言うことでもあるんだろう？だったらさっさと――――」

「ななせはね・・・・ボクとアルにとって、初恋の相手なんだよ」

「・・・・・マジ？」

「うん、マジだよ」

にっこり笑われなが言われてもどう反応したらいいか分からずヴィンスは困惑する。が、クリスはお構い無しに話しを続ける。

「何で好きになったかって言われると、可愛いっていうのもあるけど・・・・一番の理由は、やっぱり優しいところかな。ヴィンスもそうでしょ？」

「・・・・まぁ、そうだけど・・・・・」

「うんうん。正直なのは良いことだよ。でね、結局ボクが何を言いたいかっていうと・・・・」

二人の間に冷たい風が吹いて髪をなびかせ、クリスの表情が少し悲しくなる。

「後悔だけは、してほしくないんだ・・・・」

「？」

「ボクとアルは、ななせが政志のこと好きだって聞いて諦めちゃったんだ・・・・。だから、ヴィンスには最後まで諦めないで、悔いが残らないようにしてほしいんだよ。たとえ、結果がどうなっても・・・・だから・・・・頑張って！応援してるから！」

いつもの馬鹿騒ぎをしているクリスはそこにはおらず、今いるのは弟を心配する一人の兄がいるだけ。フンッと鼻をいこらせながら言うクリスにヴィンスは呆れを混ぜた笑みを浮かべる。

「あぁ、任せとけ！今日こそ俺は――」

「こんなところにいたんだ。やっと見付けたよ」

「「・・・・・・・・・・え？」」

シンクロした双子は声が聞こえた方へ首を回わす。そこには、対戦車用ほどの大きさのＭ６１ガトリングガン（のコルク銃？）を二人に向けている笑顔の琴吹さんがいた。その後ろには死体（敗者）の山が築き上げられている。

「駄目だよ？ちゃんとゲームに参加しないと」

浴衣とガトリングガンの組み合わせはシュール以外の何ものでもないが、黒い堕天使と恐れられているだけのことはあり、あまり違和感はない。

「ちょ、落ち着けってななせ！俺はお前に、って撃ってくんなよ！！」

「何でボクまでこんな目に！？」

ななせは双子に向かって乱射しながら追いかける。悪い子ではない。悪い子ではないのだが、やはり悲しいことに、この少女も馬鹿なのだ。

「あはははは！逃げちゃ駄目だよ～」

「「無茶言うなあぁぁ！！」」

・・・ご愁傷様。

恋と度胸と夏祭り（後編）（前書き）

正直、この分才のなさで恋愛系を書くのは大変でござんす・・・・

人気投票まだまだやってるんでドンドン投票してください！

次回から男より漢らしいあの美少女が登場します！

では、本編をどうぞ！！

恋と度胸と夏祭り（後編）

「ハァ、ハァ・・・ここまで来れば十分だろ」

ヴィンスと分かれた後、全力で走り続けていた一夏は、体力的な問題で足を止めて地面に座り込む。空を仰ぐと星がきらきらと光っている。

「キレイな星空だな～」

「ホントホント。これで良い女がいれば最高なのにな」

「・・・・・どうしてお前がここにいる」

一夏はいつのまにか隣に座っていたアル（おっさんみたいなこと言うなよ）に冷静に突っ込みを入れる。

「まあまあ、そんな細かいこと気になさんなって」

「（さっきお前のせいで死にかけたけどな・・・・）」

「今日は天気が良いのか、星が良く見える見える」

芝生の上で仰向けになって寝ころんだアルは星空を見上げる。その表情は無邪気な子供のそれで、一夏もつられて笑ってしまう。

「・・・・なぁ、イッチー」

「何だよ」

「男は・・・ケジメをつける生き物だと思わねぇか？」

「えっ？」

訳の分からない質問で頭上に？マークを浮かべるがそれはすぐに消えた。アルの纏う空気が突如鋭く変わり、言葉に凄みがあったからだ。額に一筋の冷や汗を掻いた一夏は言葉の意味をゆっくりと考え始めた。しかし、いくら考えてもどういうことだかさっぱりで、見かねたアルは溜息を吐きながら立ち上がって一夏を見据えた。

「そろそろ気付けよ。あいつの気持ちに」

「だから、あいつって誰だよ・・・？」

「・・・そうか。そういえばお前も底なしの馬鹿だったな・・・。つい忘れてたよ」

身体中の空気を全て出してるんじゃないかと思わせるぐらいの大きな溜息を吐いたアルは一夏に背を向けて歩き出した。

「おい、それ一体どういう意味だ」

何だか腑に落ちない一夏はアルの肩を掴むが、その掴んでいた手を掴み返された。しかも、かなりの力で。ゆっくり振り返ったアルの表情は普段からは考えられないぐらいに冷たく、背筋に悪寒が走った。

「鈍感もここまでくると腹が立つな。お前がダチじゃなかったら本気で殴ってるぞ」

「くっ・・・・！」

アルに掴まれていた手を何とか振りほどくが、手首から先が痺れている。それほどアルが怒っているのだと一夏には分かったが理由までも理解することは出来ない。

「最近思ったんだけど、箒ってホント哀れだよなぁ」

アルの視線は一夏に向けられているが、冷たい表情から人を馬鹿にするような表情に切り替わった。

「姉のせいで転校に転校を繰り返して、ようやく再会できたお前がこれではなぁ？」

アルの話を聞いていると自然と拳に力が入り、ミシミシと音を立て始める。

「今のあいつの専用機だって、姉のお情けで手にしたようなもんだしな」

ふつふつと湧き上がる感情。

「あいつから姉を取ったら・・・・一体何が残るんだろうな？」

即ちそれは・・・・『怒り』

「アーノルドォォォォ！！」

一夏の拳がアルの右頬を捉える。殴られたアルは微動だにすること

なく無表情のままだ。殴ることに慣れていない拳はズキズキと痛むはずだが、怒りによって感じない。

「もう一度あいつを馬鹿にしてみろ！いくら友達でも・・・・絶対に許さねぇぞっ！！」

感情をむき出しにしている一夏の叫びは辺りに響き渡り、僅かだが息が乱れている。

「何そこまでムキになってんだよ。お前にとってのあいつはそんなに大事存在なのか？」

「そうだよ！俺にとってあいつは、あいつは・・・・！」

その先の言葉が口から出せない。もう気付いている、気付いてしまった想いを、中々言葉に出来ない。それが、悔しくて、情けなくてしょうがない。アルはそんな一夏に再び溜息をぶつける。

「そっから先は・・・・そこにいるやつに言ってやれよ」

「えっ？」

アルの視線の先に一夏が身体を向けると、

「ほう・・・・き・・・・・？」

「・・・・・」

若干俯き気味の箒がいた。やれやれ言った感じでアルは一夏にオープンチャンネルを使って話しかける。

【ここまでお膳立てしてやったんだ。まっ、精々受け止めてやれよ。あいつの気持ちってやつをな】

それだけ告げたアルは二人を残して闇の中へと歩みだした。一夏と箒はアルを見送ることなく正面を向き合い、何時間も続くようにも思える沈黙が流れ二人だけの空間が出来る。

「「・・・・・」」

とうとう意を決したのか、俯いていた顔を上げた箒が一夏を見つめ、その顔は今までになく赤く染まっている。

「い、一夏！私は、その・・・・お前の――――」

「箒」

「ふぇ？」

一世一代の告白の最中に話しかけられた箒から間抜けな声が漏れる。一夏の瞳は真剣だが、優しさが含まれており、箒は目を逸らすことが出来なかった。

「箒・・・・。実は俺にも、お前に伝えたいことがあるんだ」

「な、何だ・・・・？」

「あぁ。ようやく気付いたんだけど、俺・・・・・」

「ったく、ようやく素直になりやがったか」

距離をとった木の陰から、二人を眺めるアルの表情から微笑みが零れる。なんとか上手くことが運び終えて帰ろうとしたが、

「意外だな。わざわざお前があんなことするなんて」

「・・・盗み見とは趣味が悪いじゃねぇか。深緑の狙撃手さんよ？」

ヒューと口笛を吹きながらアル（・・）が木の上から真正面に降り立った。それを見たアル？は、右手で顎の下を、左手で頭を掴むと、べりべりっ、ばさっ、と顔につけていた薄いマスクみたいな特殊メイクと、ツンツンうに頭の金髪を取った。中身はというと・・・・

「そういうお前は、今日ＤＶＤを買いに行ったんじゃなかったのか？政志」

「別に。急にこの祭りのこと思い出してきただけだ。深い意味なんてねぇよ」

「その割には、俺のやろうとしてたことを代わりにやってくれたけど？」

ニヤニヤしながら詰め寄るアルを鼻で一蹴した政志は、再び一夏と箒に向ける。

「とりあえず、一件落着ってところか」

「そうみたいだな。んにしても、どうして俺らの周りには馬鹿しかいないんだよ？」

「別に良いんじゃねぇのか。俺はそういうの、むしろ好きだけど？」

「ふっ、違いねぇ」

歩き出した政志とアルの反対方向では、月明かりに照らされた二人の唇がくっ付いていたとさ。

めでたし、めでたし。

どうでもいいことを語ると、結局サバイバルゲームはななせが優勝して、ヴィンスは告白出来なかった。

「次こそは・・・・・次こそは!!」

魔獣の恋の物語は、続くのだろうか?それは誰にも（作者にも）分からない・・・・。

ちゃんちゃん♪

恋と度胸と夏祭り（後編）（後書き）

「お前・・・・人間か？」

「初対面の相手に言う台詞がそれかよ・・・・」

「このバルディッシュトライワイト（黄昏の黒斧）を甘く見てもらっては困るな」

「近距離特化の武装に変えやがったか・・・・・」

「バルディッシュトワイライト　？？ソード、夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）」

「ヤークトアルケー、鈴木政志」

「「目標を駆逐（破壊）する！！」」

～次回～

『コラボと最強とクライマックス？』

お楽しみに！！

深紅の死神ＶＳ紅蓮の破壊神（前書き）

今回から本格的にコラボが始まります。

戦闘を書くのは久しぶりなんでなんとも言えないところがあると思いますが、見逃してください・・・・

では、本編をどうぞ!!

真夏の夜の海は月の光を反射して鮮やかに輝く。特に、太平洋のど真ん中と来ると人気も無く静か――

「ったく、一体どうなってんだ？」

「さあな・・・・。それよりこれからどうするんだ？」

かと思いきや、そうでもなかった。

「とりあえず、ＩＳ学園に行く。もしかしたら、『あいつら』も来てるかもしんねぇし」

「つまり、『あいつら』が学園の存在を知ったら、そっちに向かうと？」

「そういうこった」

会話を交わしながら海上を飛行するのは、ＩＳを纏った二人の少年少女。少年の方は銀髪銀眼に白いＩＳ。少女は紅髪紅眼に黒いＩＳ。どちらも現実離れした顔立ちで、歳は１５ぐらい。実はこの二人、現在ある組織に追われているのだが、その理由は後ほど語ることにしよう。現に今、彼らの隣を桃色のビームが通っていった。

「・・・太陽。お前は先に行ってろ」

「まさかと思って一応聞いておくが、一人であいつらの相手をしようだなんて思って無いだろうな？」

太陽と呼ばれた少女は、少年の言葉に若干眉を寄せる。二人の後を追うのは機影は五つ。しかも、十機の小隊を引き連れている。少年はそれらを相手取ろうというのだ。

「確かに、お前と『レイジングウイング』が負けるとは――」

「違ぇよ」

「？」

「ちっとばっか話してくるだけだよ。だから、お前は先に行ってろ」

「・・・・・分かった」

これ以上何を言っても聞かないだろう、と諦めを含んだ溜息を吐いた太陽は、空中で停滞する少年を残して目的の地へと向かった。

ＩＳ学園がある・・・・日本へと。

「どうしてアニメは原作を超えれねぇんだよ・・・・」

真夏の真昼間。寮の近くの木の下で仰向けになりながら携帯でアニメを見ている政志は内心穏やかではない。連邦本部へと帰還するのを止めてまで見ようとしてたアニメが制作会社のせいで放送中止になったからだ。そして現在、全力で不貞腐れている。

「俺も本部に帰ろっかなぁ・・・・」

ななせ、アル、龍鳳、クリス、ヴィンスが本部に帰還して二日が経った。政志以外で残っている男子の一夏は、あの夏祭りの夜以来箒とラブラブ。ロシナンテは政志達の部屋に篭りっきり。はっきり言うと暇でしょうがないのだ。この後どうしようかと考えていた時、ななせから電話が掛かってきた。アニメ鑑賞を一旦中止されたことによって少しイラッとしたが、無視するわけにもいかずに電話に出る。

「・・・・俺だ」

【政志?ええと、あたしだけど・・・・何で不機嫌なの?】

「別に・・・・。それより、何か用があってかけてきたんだろ?」

【う、うん。実は昨日の夜、『アルカディアス』の敷地内に怪しい男女二人組みがいるってルーシィさんから連絡があったの】

『アルカディアス』は地球連邦本部と隣接する教育機関。そこまで侵入出来る人間がいたことに政志は関心する。

「怪しい二人組みねぇ・・・・で、そいつらどうなったんだ?」

【男性は本部にいるけど、女性には・・・・】

「逃げられたか・・・・」

【ごめん・・・・。でも、男性の人の話によると、その女性はＩＳ

学園に向かってるらしいの】

「・・・・その女の特徴は？」

【確か、ＩＳ学園の制服を着てる紅い髪と紅い眼をした綺麗な人だよ。歳はあたし達と同じぐらいかな？】

「ふ～ん。それって・・・・・・」

「こいつのことか？」

バサバサッと辺りの木に止まっていた鳥が殺気を察知して飛び立つ。横に向けた視線の先には、殺気を放ったであろう少女が立っていた。シャギーが入ったセミロングの髪。瞳も髪と同じく烈火の如く燃えるような真紅。誰もが見惚れるような顔に、すらっとした細い長身に不釣合いな大きな胸。

【もしかしてそこにいるの？だったら――】

「ボコボコにしてでも捕まえりゃ良いんだろ？分かってるよ」

【えっ？ちょ、政ｓ――】

強引に電話を切った政志は立ち上がって少女と向き合う。学園の女生徒全員の顔を覚えているわけでもないが、こんな殺気を出せる者がいるなら忘れるはずがない。一目見ただけで、ななせが言っていた人物だと分かった。数十秒間、両者は睨み合って異質の空間が出来る。誰も立ち入ることが出来ない、重みのある空間。そんな空気の中で頭を掻いている政志に、少女が初めて口を開いた。

「お前・・・人間か？」

「（初対面の人間に対して言う台詞がそれかよ・・・）そう言うお前は、色々と身体弄られてるみてぇじゃねぇか？」

獣のような目付きでニヤリと笑う政志に、少女の殺気はさらに膨れ上がる。初見で自分の身体のことを見破った男に危険以外のものを感じない。

「・・・よく分かったな」

「俺のダチに似たようなやつがいるんだよ」

声色を変えることなく政志は語りかけるが、一瞬たりとも少女の視線を逸らすことはない。逸らした瞬間、下手したら殺られる。そう本能がそう告げているからだ。

「一つ聞くが、お前は何者だ・・・・？」

「この学園の生徒だ。そういうお前はどうなんだよ」

「奇遇だな・・・・。私もこの学園の生徒だ」

これ以上の会話は無意味と悟った二人はそれぞれのＩＳを展開させる。展開された互いのＩＳを見た二人の眉間に少し皺が寄る。

「（あの緑色の粒子、やはりあいつらの仲間か・・・・）」

政志はヤークトになる以前のアルケーを展開させている。今のアルケーにはツインドライヴのためのオリジナルの太陽路が両肩に一基ずつ搭載されており、武装は全て元のままだ。

「（近接寄りの万能機ってところか・・・・）」

一方、少女のＩＳは線が細い、黒を基調とした装甲。左手には大型ビームサーベル、右手には装甲と一体化した折り畳み式の実体剣の柄から銃口が覗いている。両肩からは投擲用のビームトマホークの柄が突き出し、腰部には敵を捕らえるためのアンカーが装備されている。そして、何よりも目を引くのは背中部分に装備された飛行ユニット。身体の半分ほどの大きさがあるそれは、少女の背を守るように背中に装備されている。

「場所・・・・変えてもいいか？」

「・・・・あぁ」

少女が二つ返事すると、二人は一番近くにあるアリーナへと向かった。その最中、二人は同じ内容のことを考えるが、今は頭の片隅にしまうことにした。アリーナのフィールドに降り立った二人はそれぞれのメインウェポンを構えて戦闘態勢に入る。

「「・・・・・」」

両者は無言で睨み合った。時間にして数秒ほどの空白の後、二人同時に動き出す。右手にバスターソードを持った政志は高速で少女に突っ込む。対して、少女は政志を迎え撃つため左手の高出力大型ビームサーベル、オールデリートを右から横薙ぎに振るい、鍔元から大量の紫電と共に超高密度のビーム刃が溢れ出す。真上から振り下ろされたバスターソードとオールデリートがぶつかり合い、衝撃でフィールドに巨大なクレーターを生み出す。

「腕は中々だが、機体性能はこっちの方が上みてぇだなぁ！」

狂喜に似た声を上げる政志のバスターソードが序々にオールデリートを押していく。少女は一瞬顔を苦くした後、右腕の大型ビームガンブレード、ライオンハートの銃口を政志の腹部に向ける。その光景が視界に入った政志は、左脚のビームサーベルを展開させて銃口目掛けて蹴り上げる。しかし、桃色のビーム刃が銃口を捉える瞬間、折畳まれていたブレードが展開されて、ビーム刃を受け止める。

「お婆ちゃんが言っていた。『機体性能が勝利への絶対条件ではない』と！」

「はっ、同感だぁ！」

二人はそれぞれの武器を引っ込め、後退して距離を取る。それと同

時に政志はバインダーから十基のファングを射出させて、オールレンジ攻撃を行う。全方向からの攻撃に少女は左腕に装備されたシールドを四つに分離させる。シールドを形成していた四つのビット、フィン・ファンネルは三角錐状に少女を囲み、それぞれを頂点にしたエネルギーシールドを発生させて放たれたビームを全て防ぐ。が、ビームとシールドの間に起きる閃光が、視界を一瞬にも満たない時間奪われ、その僅かな間に破壊神は目の前まで迫っていた。

「こいつでお陀仏！」

主人公とは思えない台詞を吐きながら、政志は両手で持ったバスターソードをシールドに振り下ろす。本能が彼女を動かしたのか、シールドがあるにも関わらず、頭上でオールデリートとライオンハートを交差させる。案の定、振り下ろされたバスターソードはシールドを切り裂いて、二本の剣と＊字に交わる。

「そろそろ本気出した方がいいんじゃねぇのか？」

「お前も、私と『バルディッシュトライワイト（黄昏の黒斧）』を舐めるなよ」

オールデリートとライオンハートの交差を解いた少女は縦に後ろ回転して、踵に付いてある小型ビームサーベル、グリフォンが踵落としと共に政志の頭上に迫る。トリッキーな攻撃に少し反応が遅れたのか、首を右に曲げて避けようとしたが避けきれず、僅かに切られた右頬から一筋の血が流れる。そのお返しと言わんばかりに、バスターソードを左手だけで持ちな直して右手で拳を作り終えた瞬間、容赦なく少女の腹に叩き込んだ。

「・・・・っ！！」

高速で吹き飛ばされた少女はアリーナの壁にぶつかり、砂煙に包まれる。そこに射出したままのファングからビームを放ち、更に砂煙は大きくなり、アリーナが爆発で振動する。オーバーキルにも見え、勝負が着いたかと思うがそうではなかった。

「あの状況で瞬時にシールドを展開するとはな」

煙が晴れると、口から一筋の血を流した少女が出てきて、その周りには政志の言った通り、シールドが張られている。

「（このままでは埒があかないか・・・・）」

フィン・ファンネルを左腕に戻した少女は目の前に数十枚に及ぶウィンドウを広げる。絶好のチャンスだが政志は決して攻撃しない。おそらく少女にもそれが分かっているのだろう。政志がファングをバインダーに戻すと同時に、少女の作業は終了した。

【パスワード認証　バルディッシュトワイライト　??ソード展開】

マシンボイスが響くと同時に少女が纏っていた装甲が輝き、変形を始めた。背中を守るように装備されていた背部ユニットが球状に変形し、左手のオールデリート、右手のライオンハートも同様の変形を遂げる。三つの球体は太陽の周囲を高速で旋回し始め、形を変えていった。オールデリートとライオンハートは片刃の大型ビームブレードに変形、背部ユニットは十一の小型ソードビットへ姿を変える。

「近距離特化の武装に変えやがったか・・・・」

率直な意見を述べる間にも別の武装へと変形したオールデリートとライオンハート、背部ユニットは定位置に装備される。二振りの大型ビームブレードは両肩に。十一のソードビットは両腕、腰、両膝、爪先、踵に。その数合計十三。

「そういや、名前聞いてなかったな・・・・。俺は鈴木政志。そっちは？」

唐突な自己紹介に少女は口元を僅かに緩めて答える。

「夕暮。夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）だ」

「太陽か・・・・。良い名前じゃねぇか」

「そりゃどうも」

ついさっきまで死闘を繰り広げていたとは思えない、他愛も無い会話が交わされるが、それもすぐに消えて、再び殺伐とした空気がアリーナを覆いつくす。

「テメェみたいなのが相手なら、本気で暴れられる」

【Ａｒｃｈｅ（アルケー）　Ｕｐｇｒａｄｅ（アップグレード）】

こちらもマシンボイスが響くと同時に装甲が輝き、一瞬で姿を変えた。ＧＮドライヴが二基搭載された腰部の大型アーマーに左肩の二本のＧＮバスターソード、右肩のＧＮランチャー。これがアルケーの強化形体、ヤークトアルケーの姿だ。政志がこれを纏うのは臨海学校以来である。それを見た太陽は特に驚いた様子も見せず、ヒューと口笛を吹く。

「さぁ、第二ラウンドといこうじゃねぇか」

「ふっ、望むところだ」

獰猛な笑みを浮かべる政志に太陽は応える。そして、政志は両手にバスターソードを、太陽は両手に大型ビームブレード、アロンダイトを構える。

「バルディッシュトワイライト　??ソード、夕暮太陽」

「ヤークトアルケー、鈴木政志」

「「目標を駆逐（破壊）する!!」」

今ここに、世界を越えた近接戦闘最強同士の闘いが始まる。

深紅の死神ＶＳ紅蓮の破壊神（後書き）

「お前、シュヴァルツェア・レーゲンはどうした？」

「誰だお前？」

「あたしは保護してって言おうとしてたんだけど・・・・」

「またメンドクセェことになってきやがった」

「並行世界ィィィィ！？」

「すみません、救急車一台お願いします」

「お前らも来るか？連邦軍本部」

～次回～

『カツ丼と異世界と急転直下』

お楽しみに！！

これでも大真面目なんです（前書き）

人気投票まだまだ続けてるんでドンドン投票してください。

っていうか現在二位が3人もいるので是非ともお願いしますｍ（＿）ｍ

では、本編をどうぞ！！

これでも大真面目なんです

政志と太陽が戦闘を始める少し前。

【ボコボコにしてでも捕まえりゃ良いんだろ？分かってるよ】

「えっ？ちょ、政志！？違うその人は――――切れちゃった・・・・」

最後まで話しを聞かずに切った自分達のトップに溜息を吐く。あの言いようだと本気でボコボコにしかねない。しかし、電源が切られており携帯に出ない。

「どうしよう・・・・」

一人部屋の中を歩き回って何か良い案が無いのか考えていると、ドアをノックする音が聞こえて来たので足を止めて入室の許可を出す。すると、濃いピンクのショートカットヘアーの女性が入ってきた。

「シエルさん・・・・」

「さっきアル達が支部に着いたって報告しに来たんだけど・・・・何かあったの？」

「あの、実は・・・・」

情けなさを感じながらも、自分ではどうにもならないと思ったななせは自分達の頼りになるお姉さん、シエル・マスクアードに事情を話した。

「それは、確かに問題だね・・・・」

「はい・・・・」

顔を引き攣らせるシエルにななせは何とも言えない申し訳ない表情をする。話を最後まで聞いてもらえなかったせいで死人が出ましたなんて洒落にならない。そこでシエルはななせに誰も思いつきいそうな考えを教える。

「誰か、学園の友達に頼んでみたらいいんじゃないかな?でも、政志を止めれそうな人なんて・・・・」

確かに政志が暴れているとなるとそれを止める者がいる。しかし、そんな力を持つ者など今の学園には、

「そういえば、一人だけいます!」

ピコーンと頭上に豆電球を光らせたななせはその人物へと連絡を取ろうと携帯を取り出して電話帳を開く。その人物とは・・・・。

「さっきから騒々しいと思ったらそういうことか・・・・」

ななせから連絡を受けたラウラは寮の窓から飛び降りながらシュヴァルツェア・レーゲンを展開させる。向かうは、先ほどから轟音が聞こえてくるアリーナ。

「シュヴァルツェア・レーゲン、モードGへ移行」

【Ａｐｐｒｏｖａｌ　Ｃｏｄｅ（コード承認）・Ｗａｋｅｕｐ　ＯＯ－Ｒｉｓｅｒ】

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲が光に包まれるとダブルオーライザーへ姿を変える。

「ダブルオーライザー、ラウラ・ボーデヴィッヒ。目標へ飛翔する」

両肩のＧＮドライブから∞の形をした光の軌跡を残しながら、ラウラは学園を駆け抜ける。ツインドライヴによって得られる出力のおかげであっと言う間にアリーナに着いたラウラが見たのは、ヤークトアルケーを纏った政志と黒いＩＳを纏った少女が武器を構えて見合っているところだった。

「バルディッシュトワイライト　??ソード、夕暮太陽」

「ヤークトアルケー、鈴木政志」

「「目標を駆逐（破壊）する！！」」

予想通り二人は、互いの相手に向かって高速で突っ込む。ラウラは瞬時に右手に持ったＧＮソード?を両者の間に向けてビームを放った。

「「！」」

政志と太陽は迫ってくるビームを感じたのか急停止して、ビームが飛来した方を向く。

「ヤークトまで起動させて・・・学園を更地にするつもりか?」

溜息交じりにそう言うラウラはフィールドに降り立ち、政志はやれやれと言った感じでバスターソードを左肩に戻す。

「俺がちょっと戦っただけでそういうこと言うのやめてくんねぇか?」

「そのちょっとでこの間アリーナを消し飛ばしたのはどこのどいつだ・・・・」

呆れながらも二人は会話を交わす。しかし、太陽はそれを眼を点にして見ていた。オマケに口もポカンと開けて。

「ラウラ、お前・・・・シュヴァルツェア・レーゲンはどうした?」

いきなり話しかけられてラウラは政志との会話に水を差されて少し不機嫌な顔つきになる。

「嫁との会話を邪魔するとは、礼儀を知らん奴だな。そもそも、貴

様は誰だ？」

初対面の相手を貴様と呼ぶお前も礼儀知らないだろ、と政志は突っ込みを入れたいが何とか喉元で堪える。一方、太陽は信じられないようなものでも見るかのような目をして眉を寄せる。

「お前、私が分からないのか・・・・？」

「当たり前だ。初めて会う人間のことを知っているわけがないだろう」

「初めて、だと・・・・！？」

話からすると太陽はラウラと知り合いみたいだが、ラウラにとっては初対面。二人とも嘘を言っているようには見えず、完全に会話が噛み合っていない二人を見ていた政志はある可能性を考えるが、それはさすがにないだろうと自己完結する。

「またメンドクセェことになってきやがったぜ」

その呟きと共にＩＳを解除した政志は二人を引き連れて寮に向かうのであった。

「夕暮太陽・・・・初めて耳にする名前ですわね」

「やはりそうか・・・・・」

寮の廊下をラウラ、一夏、箒、鈴、セシリア、シャルが歩いていた。
ラウラに呼び出された五人もどうやら太陽のことを知らないらしい。

「ねぇ。その人、政志と互角に戦ったってホントなの・・・・・？」

「実際に見てはいないがそうらしい。未だに信じられないがな・・・・」

「知り合いにそんな人がいたら、絶対に忘れないと思うよ？」

「だよなぁ・・・・・」

「それで、その人はどこにいるんだ？」

「政志と一夏の部屋にいる。今頃、政志が色々と聞きだしているだろう」

ラウラのこの言葉を聞いた瞬間、五人の頭である式が出来た。

『軍人＋尋問＝拷問』

「「「「「・・・・・」」」」」

そんなアホなことを考える五人は冷や汗を掻きつつも政志と一夏の部屋の前に着いた。そして、扉を開けて中に入ると、

「政志。このヒレ肉はどこで仕入れたんだ？」

「それは機密事項だぜ。太陽？」

何故かもきゅもきゅカツ丼を食っていた。しかも、仲良く名前で呼び合って。

「「「「「・・・・・」」」」」

それだけなら良かった。しかし、二人の他にいたロシナンテが突っ込んでくださいと言わんばかりのことをしていた。

『俺はこの街を守っていく。仮面ライダーとして・・・・・。見ててくれよ・・・なぁ？フィリップ・・・』

目をウルウルさせながらWの四十八話を見ていた。確かに泣ける話だったとは思うが、何かが違う。そうは思わずにはいられない光景だった。すると、カツ丼を食べ終えた太陽が部屋に入ってきた六人に気付いた。

「一夏、箒、シャル、セシリア、鈴音・・・・・！」

「「「「「・・・・・誰？」」」」」

これが初めて会った人に対しての普通の反応である。太陽は自分のことが分からなかったのがショックだったのか少し表情が曇る。これで政志はあの可能性に確信を持ち始めた。

「・・・太陽。もう一度聞くが、お前と『月光夜明』ってやつは気が付いた時には、見知らぬ土地にいたんだよな？」

「あぁ。目が覚める前の記憶は曖昧だがな・・・・」

「それで、お前が知っている限り、ＩＳ学園の男は一夏とその夜明ってやつの二人だけ。しかも連邦軍なんて組織の存在も知らない。けど、この学園と一夏達については寸分の狂いもなしに知っている。これは俗に言う・・・・」

「次元漂流者ってやつだな」

・・・・・・・。

「「「「「「何、そのヲタクワード？」」」」」」

アニメの見すぎで遂に頭がいかれたのかと思ってしまう。真顔で『次元漂流者ってやつだな』と言われると誰でも『救急車呼んでやろうか？』みたいな顔になるだろう。

「簡単に言えば次元の迷子だ。単語から想像つくだろ普通」

「そんな単語がポッと出る政志が凄いよ・・・・」

シャルの的確な突っ込みに誰もが頷く。今まで色んな世間離れしてきたものを見てきたが、それはさすがヲタクの妄想だろうと思っていたが、

「なるほど、並行世界と呼ばれるあれか」

まさかのロシナンテが食いついてきた。さすが生きたＩＳと言われているだけのことはあり物知りである。そして誰も要求してもいないのに語りだした。

「並行世界。つまりパラレルワールドと呼ばれるものはある世界（時空）から分岐し、それに並行して存在する別世界（時空）のことだ。また、『四次元世界』、『異世界』、『異界』、『魔界』などとは違い、我々の宇宙と同一の次元を持っている・・・・つまり、夕暮太陽はこの世界と酷似した並行世界から来た可能性が高い。そういうことだろう？」

割り込む余地すら与えないマシンガントークに政志と太陽以外は圧倒されるが、ここで鈴が一番の疑問を口にした。

「・・・・も、もし、そうだとしても、どうやって来たって言うのよ!?」

「確かに、鈴の言う通りそこが問題何だよ。手段が分かんねぇと帰すことも出来ねぇからな」

この言いようだと、政志の中ではすでに太陽は別世界から来たことになっているようだ。しかし、それでも中々信じようとしない一夏達であった。そんな中、ラウラは顎に手を当ててふむふむと頷く。

「いや、私も政志の言うとおりだと思うぞ」

「ラウラさん、それはどういう理由でして?」

「よく考えてみろ。この世界で政志に単独で戦いを挑む人間がいると思うか?」

「「「「いや、絶対いない」」」」

一瞬で太陽が次元漂流者であると皆が納得した。その後、簡単な自己紹介をしてから、この世界にあって太陽がいた世界にないものを説明した。大まかなものを上げると、『ＧＮドライヴ』、『ガンダム』、『地球連邦』、そして『ＧＮドライヴに関する人間』、つまり・・・・・政志達だ。

「（別世界とはいえ、こいつらがもう一人いると思ったら・・・・コエェな・・・・）」

そんなこと一夏は考えたが口に出したら洒落にならないので、胸の奥に仕舞い込んだ。事情を知っているためかラウラ達はすぐに太陽達と馴染み話をしていると、太陽の口から『月光夜明』の名前が出たので、興味を持った政志が、

「その夜明ってやつはどんな奴なんだ？」

その問いに太陽は十秒ぐらい考え込んだ後、口を開いた。

「一言で言うなら、自由な奴だな」

「自由？」

「あぁ。風のように自由で飄々としてて、雲みたいに掴み所がなく、悪戯や人をからかうのが好きで、色んな人間にに悪戯をしてたな・・・。でも、人の心の動きに敏感で、人の支えになるのが上手。決める時は決める、自分の大切な物は絶対に貫く。それが私の愛する男、月光夜明だ」

一瞬だけアルに似てると思った政志だったが、あの馬鹿と一緒にするのは失礼だと考え直した。夜明のことを語る太陽は優しい表情で夜明という人物を心から愛してると分かった。しかし、

「問題があるとすれば、人の心には敏感なくせに、女心に対しては異常なまでに疎いところだ。本当に嬉しくなるような事を言ってくれたかと思えば、デリカシーが欠片も感じられない事を平気で言ってくる。ぶっちゃけると、あいつほど女心を掴んで、女心を弄べる男はそういないぞ・・・・」

その話をし始めた太陽からは物理的に干渉出来そうな黒い何かが漏れていた。苦労しているんだなぁ、と一夏と箒は同情するが、ラウラ、シャル、鈴、セシリアには太陽の気持ちが何となく分かった。その証拠に、

「それが本当なら男の風上にもおけねぇやつだな」

人事のように呟く政志にラウラは地球の裏側まで届くぐらいの溜息を吐くのであった。

「あっ、そういえば・・・・」

何か思い出した政志はポケットから携帯を取り出す。ボタンを押して着信履歴の一番上にある人物に電話をかけた。すると、

【人の話は最後まで聞こうよ・・・・】

ものっそく怒っているななせの声が聞こえてきた。

「途中で切ったことなら謝るから、機嫌直せって」

【・・・・分かった】

小学生の如くむくれるななせに溜息を吐こうとしたが、今回は自分に非があるということで我慢する。

「で、さっき何て言おうとしたんだ?」

【そこにいる、夕暮さんを保護して本部に連れて来て欲しいんだけど】

「どうやって？」

【もうすぐそっちに迎えが来ると思うから。じゃあ、お願いね】

「はいよ」

二つ返事をして電話を切った政志は太陽と向き合いこれからの処遇を告げる。

「太陽。お前には保護って形で俺と一緒に本部に来てもらう」

「そこには夜明もいるのか？」

「あぁ。そうらしいぜ」

政志から夜明の身の安全を聞いた太陽はホッと一息付く。そんな太陽を見た政志が不意に窓の外に目をやると、

「迎えってこれのことかよ・・・・」

黒いヘリコプターが窓のそばに浮いていた。政志の呟きが聞こえた一同も外を見てヘリの存在に気付いたが、それと同時に驚いたことがあった。

「このヘリ、もしかして無音機（サイレント）！？」

「凄い・・・・初めて見た・・・・」

プロペラを回しているにも関わらず全く音を出さないヘリとその技

術に口をあんぐりと開ける。ヘリの操縦席の窓が開くと中から二十歳ぐらいの女性が薄い紫の髪を靡かせながら顔を覗かせた。

「お久しぶりですね。政志」

「ルーシィ。たかが迎えに、大佐のお前が来るなよ・・・・」

「元帥閣下のお迎えに下の者を出すわけにはいきませんよ。それにあなたに会いたかったというのも理由の一つですしね」

ニコッと優しい笑みを浮かべるルーシィに政志は頭を掻きながら窓に足を掛けてヘリに飛び乗ろうとするが、一旦止めて一夏達の方を向いた。

「明日にはアル達も帰ってくるけど、前らも来――」

「「「「全力で行きますっ！」」」」

鼻をいこらせながら勢いよく手を上げるラウラ、アル、鈴、セシリアに苦笑する政志であった。

とある研究室。そこでは白衣を着た女性が細い指でコンソールを弾きながらディスプレイを見ていた。

「～～♪」

彼女から漏れる鼻歌は一人しかいない研究室に響き渡る。今の彼女の首には白い十字架の付いたネックレスが掛けられており、左腕のブレスレットが白と赤に変わっている。

「ふふふっ。これを見たらどういう反応するかしら」

邪笑の先には金色に輝く巨大な機体。他にも赤いＩＳと茜色のＩＳ。そして・・・・

「ちゃんと分からせないとね。『マサシ』はあたしのものだってことを」

青い・・・・剣士。

これでも大真面目なんです（後書き）

「元帥が帰ってきた・・・・だと！？」

「お前が噂の月光夜明か」

「つうわけだから、よろしく頼むわ」

「亡霊共が・・・・地獄から迷い出たか」

「うわあああああああああああぁぁぁぁぁ！！！！」

「言っとくが俺の魂（つばさ）は不屈（レイジング）だぜ？」

～次回～

『歓迎と奇襲と過去からの訪問者』

お楽しみに！！

本部到着　襲い掛かる過去の破壊神（前書き）

近々、人気投票の発表をしますのでそのつもりでいてください。

では、本編をどうぞ！！

本部到着　襲い掛かる過去の破壊神

「俺が元帥になる前は本部は街中にあったんだけど、『軍の施設が街中にあったら迷惑じゃね？』ってことで人気のない太平洋の人工島に移したんだよ。んで、今本部にいるのは俺達が選抜した奴らばっかだから不安がることはねぇぞ・・・全員馬鹿だけどな」

太平洋上空を飛行するヘリの中で、一夏達は政志から本部について話をしていた。特に最後の『全員馬鹿』の部分には不思議と納得するところがあった。連邦のトップ４である政志達を見ればそれが良く分かる。つまり、馬鹿の下につく者も馬鹿だということだ。

「その中に私も入ってるのですか？」

「当たり前だ。うちの軍でやっていける奴がまともなわけないだろ」

「それもそうですね」

ヘリの操縦桿を握るルーシィは苦笑しながら答えた。こんな美人で優しそうなお姉さんが政志サイドの人間だとはとても思えず、一夏達は意外そうな顔をする。

「言い忘れてたけど、本部で何があっても気にすんなよ。突っ込みどころが多すぎて疲れるから」

「・・・例えば？」

「人が死にかけたり、壁が吹っ飛んだり、ミサイルが飛んできたり、言い出したらキリがねぇな・・・ルーシィ、最近何かあったか？」

「そうですねぇ・・・・。ご飯のおかずを取り合って喧嘩していた大尉と少佐を、私がボコボコにしました」

「「「「「「・・・・・」」」」」」

『おいおい。何だいそのユニークなジョークは?』と笑って誤魔化したかったが、冗談で言っているようでもなかった。

「他には、この間帰ってきたアルが間違えて自軍のヘリを撃ち落したぐらいです」

今更ながら付いて来たことを後悔し始めた一同であった。

「ここが、連邦の本部・・・・」

「広いね・・・・」

ヘリの窓から見える景色を見にセシリアとシャルは唖然とする。人工の島と言っても本部とその他の施設がある程度だと思っていたが違った。本部と思われる建物の反対側には大きな森があり砂浜もある。どこからどう見ても人工の島には見えなかった。

「政志、そろそろ着きますよ」

「あいよ。それじゃ全員、降りる準備しろよ」

ルーシィの言うとおり、数分もしない内にルーシィは操縦するヘリはヘリポートに着陸した。政志達がヘリから降りると、ヘリに向かって歩いてくる者がいた。

「お帰り、政志。みんなも来たんだね」

黒い軍服を着たななせは政志達を笑顔で出迎えた。こうして軍服姿のななせを見ると本当に中将なんだと思い知らされる。

「あぁ、ただいま。・・・・で、そいつが例のやつか」

政志はななせの後ろにいる銀髪銀眼のＩＳ学園の制服を着ている少年に目を向ける。すると、少年の存在に気付いた太陽が少年に歩み寄った。

「夜明・・・・。私がいなくて寂しくなかったか？一人でも寝れたか？」

「ガキか俺は・・・・」

どこのオカンだよ、と突っ込を入れたくなりながら頭を掻く少年は政志の視線に気付いたのか政志と向き合う。

「あんたがここのトップか・・・・。俺は月光夜明（げっこうよあけ）。よろしく頼むぜ」

「・・・・あぁ。俺がここで元帥やってる鈴木政志だ」

政志と夜明は握手を交わすが、政志は夜明をまじまじと見ていた。特に眼を・・・・。

【ななせ・・・・。お前、こいつと戦ったか？】

いきなりプライベートチャンネルから政志の声が聞こえてきてビックリしたが、質問の意味を理解したななせは真剣な声で答えた。

【ちょっとだけどね・・・・あの時はアル達がいたからなんとかなったけど、あたし一人じゃ負けてたかも・・・・】

【へぇー、それは興味深ェな。何なら今すぐ――――】

【お願いだから止めて】

【・・・・冗談に決まってんだろ？】

チャンネルを切って握手を解いた政志は、呆れた顔をしているななせから赤い軍服を受け取ると制服の上から羽織った。一陣の風で髪と軍服をなびかせ政志は一夏達の方に振り返る。

「俺の軍にようこそ。手厚く歓迎するぜ」

誇らしげに浮かべる笑顔に一夏達もつられて頬を緩めてしまう。これは楽しい夏休みになると思いながら、ヘリポートから数分歩いて本部であろう高層ビルの中に入った。その瞬間、建物内が熱気に包まれた。

「元帥が、帰ってきた・・・だと!?」

「しかも、女の子を連れてやがるぜぞ!」

「軍の仕事ほったらかして遊びに行ってたのかよ!」

「良い女!ウホッ、ウホッ!」

「ガンホー!ガンホー!」

玄関ホールにいた人間が騒ぎ出すと、階段やエレベーターから人間がわんさかわんさか沸いてきた。あまりにも高いテンションに一夏達は引いてしまうが、ここで政志が言っていたことを思い出した。

『全員馬鹿だけどな』

その意味をようやく理解したのであった。さすがに鬱陶しくなった政志は元帥の権力を振りかざす。

「お前ら全員給料八割カットな」

《それだけは勘弁してくだせぇーーーっ!!》

悲鳴に似た声を上げると脱兎の如く走り去って行った。それを見た政志は情けない気持ちになりながら額に手を当てて極大の溜息を吐く。

「あれでも、やる時はやるやつらなんだよ・・・・」

「まぁ、何だ・・・頑張れ」

昨日の夜からここにいる夜明は彼らの滅茶苦茶さを知っていたので、政志が気苦労しているのが何となく分かった。慣れているのか、すぐに立ち直った政志は頭を?きながら一夏達に視線を向けた。

「そいじゃま、とりあえず部屋に案内するわ。ルーシィ、この人数分の部屋空いてるか?」

「多分大丈夫だと思います。使ってない部屋なら多くありますし」

ルーシィがそう言ってのけたその時、警告アラートが建物内、いや・・・島中に響いた。

「シエル、何があった?」

アラートが聞こえた瞬間、政志は通信用のディスプレイを広げて、シエルに繋げた。画面に映ったシエルは政志が帰って来ていたことに少し驚いていたようだったが、すぐに真剣な表情へとシフトした。

【はい。本部の衛星がここから１０キロ離れた地点で真直ぐこちらに向かう機体を確認。亡国(ファントム)のイナクトとフラッグ、計５００の無人機を捕捉。それ以外にも確認出来た機体の映像を出します】

淡々と冷静に語るシエルの隣に１３枚のディスプレイが浮かび上がる。そこに映っていた機体には誰もが見覚えがあった。

「あれは・・・・バスターにブリッツ、デュエルとイージスまで！？」

実際に襲われた一夏と鈴は顔を険しくする。他にも、ななせが倒したキュベレイと黒と赤のキュベレイＭｋ－？と政志が倒したカオス、アビス、ガイア。そして、

「カラミティ、フォビドゥン、レイダー・・・・」

「こっちの世界にもいやがんのかよ・・・・」

ディスプレイに映った三機を見て、太陽と夜明は舌打ちをする。元の世界で一度戦ったことのある二人にとって、この再会は胸糞悪いものだった。

「なら、ハイパーメガ粒子砲の使用を許可する。それで奴らを一掃しろ」

『ハイパーメガ粒子砲』

直径１０ｍに及ぶエネルギーコンデンサを含めると全長３０ｍ、口径１０ｍの超大型攻撃兵器。その一撃はディアボロスのツインバスターライフル（トランザム時）の３倍にも及ぶ。何を思ってかは知らないが、政志はこれを島の四方位に配置している。

「うわぁ・・・・絶対オーバーキルだろ、これ」

連邦が最強と呼ばれる理由の一つである圧倒的な殲滅力。ディスプレイに映ったそれに夜明は若干引いている。一同が見つめる中、粒子砲の砲口に光が集まり出す。数秒後、チャージ完了をシエルが告げると同時に、政志は無表情のまま指示を出す。

「ハイパーメガ粒子砲・・・・・・発射」

砲口から発射された光はディスプレイを光で塗りつぶし敵機へ直進する。閃光が敵機を焼き払って終わり。誰もがそう思いながら、空に群がる敵機が映ったディスプレイに視線を向けていた。・・・・しかし、突如海から現れた黄金に輝く二つの巨大な物体が、極大のビームとぶつかり合い周囲に拡散する。そのせいで撃墜出来た数は５０機にも満たなかった。だが、今の政志達にはそんなことなどどうでも良かった。問題はその物体が放つ赤みがかかったオレンジ色の光。臨海学校の時に現れた仮面の男のＩＳにも使われていたＧＮドライヴから放出されるＧＮ粒子。ななせは目を細めて睨み付けて、政志はギリギリと音が鳴るぐらいに拳に力を入れる。

「ＧＮドライヴを七基も使ってやがるのかよ・・・・」

角度を変えて映し出した機体の後ろには確かにＧＮドライヴであろう突起物が七基搭載されていた。何かに気付いたななせは政志が見ていた画面を拡大させた。拡大された黄金の装甲には機体の名前であろう英語が刻まれている。

「『Ａｌｖａｔｏｒｅ（アルヴァトーレ）』・・・・？」

二機のアルヴァトーレはハイパーメガ粒子砲を防いだＧＮフィールドを解除させる。その間に何者かと通信を終えたルーシィは外に向

かって走り出す。

「私は今から部隊を率いて迎撃にあたります！」

「・・・ちょっと待て」

政志に呼び止められたルーシィは足を止めて振り返る。一同がその言葉に疑問を持つ中、政志は画面に映る海を睨んでいた。

「何かいやがるな・・・・」

「あぁ・・・・」

ディスプレイを見ていた夜明と太陽は険しい表情でそう呟くと、海から三つ影が飛び出した。水飛沫と共にオレンジのＧＮ粒子を散らせるその三機を見た夜明と太陽を除く一同が目を見開く。その刹那、

「ふざけやがって・・・・！！！」

怒気を孕んだ男性の声を聞き取ると、背筋が凍る程の寒気を感じた。恐る恐る声がした方を向くと、政志が睨んだだけで人が殺せるぐらいの目付きをしていた。無意識で発せられている殺気は空間を一別しており、今の政志にはこの言葉が良く似合う。

『化け物』

無言のまま政志は外へと歩き出し、その意味を理解したななせが強張りながらも政志の前に回りこんで行く手を阻む。

「政志、落ち着いて！気持ちは分かるけど冷静に――――」

「ざけたこと言ってんじゃねぇぞ!!」

「――――っ!?」

「これが落ち着いていられるかよ・・・・っ!!あの三機は・・・・俺が乗ってた機体だぞっ!!!!!」

声を荒げる政志が指差す先のディスプレイの中では二機のアルヴァトーレの隣を飛行する三機のガンダムがいた。政志が初めて操縦した『エクシア』。エクシアの次の操縦した『スローネツヴァイ』。そして、今の専用機である『アルケー』。かつて破壊神の愛機が今、全身装甲（フルスキン）の無人機となって襲い掛かろうとしている。

「どうしても、許せねぇんだよ・・・・!!本物じゃねぇって分かってても・・・・姿形だけでも・・・・アルケーを、ツヴァイを・・・・エクシアをこんなふざけたことに使うやつらが許せねぇんだよっ!!!!・・・・だから、俺があいつらを破壊する!!ガンダムを、俺達の大事なもんを馬鹿にするあいつらをなぁ!!!!」

「政志・・・・」

目の前のななせに怒号を吐き出す政志は完全に『政志』ではなかった。今にも泣きそうな、悲しい表情のななせを押しのけた政志は待機状態のアルケーを握り締めて起動させようとする。しかし、

「格好良いとでも思ってんのか?そんな一人善がり」

物理的に重量感がある空間でただ一人平然と政志に話かける者がいた。足を止めて振り返った政志は、その声の持ち主、夜明を睨み付

ける。

「部外者は引っ込んでろ。食い殺すぞ・・・・？」

「えーえー俺は確かに部外者ですよ。でも、今のお前を行かせるわけにはいかねぇなぁ」

「俺が死ぬとでも言いてぇのかよ・・・・！」

「あぁ、死ぬね。１００パー死ぬ」

「そうか・・・・なら、テメェから殺してやるよ！！」

ブチ切れた政志がアルケーを起動させようとしているのを察知したななせは、政志を止めようとした刹那・・・・銀の髪が駆け抜けた。そして、突き出された拳が政志の頬を捉えた。

「いい加減にしろ・・・・っ！！それでも、お前は『鈴木政志』か！！」

胸倉を掴んで政志を見上げるラウラはひどく悲しく、目頭が潤んでいる。政志は掴まれている腕を払おうとしたが、何故か身体が動かなかった。

「どうしてお前は・・・・いつも一人で全部抱え込もうとするんだ・・・・？そんなに、私が頼りにならないのか・・・・？もう少し・・・・私を頼ってくれ・・・・」

弱弱しくも心に響くラウラの言葉を政志だけではなく全員が黙って聞いていた。いつも自分より他人を優先して自分を犠牲にする政志

をひどく不憫に思っていたラウラにとって、今の政志は見過ごせなかった。今政志を行かせたら夜明の言うとおり死んでしまうと確信が持てたからだ。

「・・・・・」

胸元で小刻みに震えて俯く少女を見た政志は瞳を閉じた後、溜息を吐いた。

「（ホント馬鹿だな・・・・俺も）ラウラ、顔上げろ」

「・・・・？」

変わっている政志の声を聞いたラウラが顔を上げると、優しい金と赤のオッドアイで自分を見つめるいつもの政志がいた。

「ありがとよ、ラウラ。お前のおかげで目が覚めた」

「政志・・・・」

「何て顔してんだよ。折角の可愛い顔が台無しだぞ？」

ポケットからハンカチを出した政志はラウラの目元をそっと拭くき、ラウラは『可愛い』と言われたことによって顔を爆発させる。こんな時でもアホな政志は何でラウラが顔を赤くしているのか分からず首を傾げて周囲はそれに溜息を吐いた。

「（お前はこっちでも苦労してるんだな・・・・）」

特に太陽の視線が重かった。

「ルーシィ。お前は部隊を率いてざ雑魚共を始末しろ」

「了解です！」

「シエル。島の防衛システムをレベル7にして対応。一機たりとも島に入れるな！」

【了解！】

元帥の顔つきになった政志は指示を出した後、右からななせ、箒、一夏、シャル、太陽、夜明、鈴、セシリア、そしてラウラへと見回した。八人共同じ表情をしており、政志には彼らが何を考えているのか大体分かった。

「いいのか？ななせはともかく、他のやつらには関係無ぇことだぞ？」

一応聞いてみるが・・・・

「愚問だな。嫁のピンチに駆けつけるのは夫の務めだ」

「困ってるときはお互い様でしょ？」

「僕達は仲間なんだから、もっと頼ってもいいんだよ？」

「友の危機は己の危機ですわ」

「俺達が何て言うか分かってるくせに、そんなこと聞くなよな」

「ふっ、だな」

ラウラ、鈴、シャル、セシリア、一夏、箒が呆れた顔でそう答えた。
そして・・・・

「あれが相手なら、俺も心置きなく暴れられる」

黒いぬいぐるみが喋った。

「ロシナンテ・・・お前付いてきてたのか？」

「その言葉、意外と胸に刺さったぞ・・・・」

少しションボリしているロシナンテを尻目に政志は夜明と太陽を見る。

「お前らはどうするんだ？この世界の人間でもねぇのに・・・・」

その問いに二人は顔を合わせて笑いあうと再び政志に目を向けた。

「ついさっき知り合ったと言っても、私にとってお前も仲間だ」

「それに、どうするかなんて最初っから決まってんだよ。なんせ俺達は・・・・」

「・・・・・」

本部に向かって直進するアルケーは無人機であるが故に言葉を発することはない。このアルケーとツヴァイ、エクシアは学園トーナメントの時と同様に政志の戦闘データが詰まれている上に、前回と違い太陽炉を積んでいる。この世界でこの三機を相手に出来るのは同じガンダムのみ。そう『この世界』では・・・・。

「こいつが俺の相手か・・・・。つか、これがＩＳなのか未だに疑問だぜ」

アルケーの前に白いＩＳを纏った銀髪の少年が立ちはだかる。他のＩＳに比べて線が細く、背中からは展開された二対の推進翼（スラスター）があり、その間から溢れ出す光が蒼銀の翼を形成する。アルケーはその少年を敵と見なしたのかバスターソードを構える。

「やる気満々かよ・・・。いいぜ、相手になってやんよ。だけどこれだけは言っておくぞ」

右手に持った高出力ビームサーベル、スラーライザーの切っ先をアルケーに向ける少年が浮かべている笑顔は、獣じみており、誇り高さまで感じさせられる。

「俺の魂（つばさ）は・・・・・不屈（レイジング）だぜ？」

赤い悪魔を討伐せんと、月光夜明と不屈の翼（レイウジングウイング）が空を舞う。

本部到着　襲い掛かる過去の破壊神（後書き）

「これがＧＮフィールドと言うやつか・・・・」

「破壊神は政志一人で十分だっ！」

「闇に・・・沈め」

「この程度じゃ、俺と不屈の翼（レイジングウイング）は墜とせねぇぞ」

「政志の敵は、あたしが全部倒す・・・・！」

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

「ただいま～・・・・って、何かあったのか？」

～次回～

『仲間と
友情と
怒りの剣』

お楽しみに！！

連邦本部攻防戦（前編）（前書き）

緋弾のアリアを見てから、理子をモデルにしたオリキャラを出したいと思う自分がいる・・・・・

では、本編をどうぞ！！

連邦本部攻防戦（前編）

「エクシア・・・・」

両腕のハンドガンの銃口からビーム刃を展開したななせは目の前の青い剣士を睨み付けている。そこからは、いつもの軟らかい表情など一切見受けられず殺意しか感じられない。

「あんた達がいると、政志が笑えないの・・・・」

今のななせの頭の中には愛しき者を苦しめる元凶を排除することのみ。

「あたしの大好きな政志が笑えないの・・・・」

もう二度と政志が悲しみに歪まないように、彼女は黒い堕天使となった。

「政志が笑顔でいられるなら・・・・あたしは、悪魔で構わないっ!!」

悪魔の名を冠するガンダムを纏った少女は青い剣士に戦いを挑む。

「ディアボロス、琴吹ななせ!目標を殲滅する!!」

空を駆け抜ける無数の白いＩＳ、名を『ジンクス』と言う。連邦の技術局長ななせが開発した量産型の擬似太陽炉を搭載した機体だ。性能はガンダムには劣るが、各国の第三世代よりかは優秀である。それが次々とイナクトとフラッグを墜としていている。そんな中、黒と茜の機体が太刀を交えていた。

「確かに、戦い方が政志と同じだな・・・・」

太陽の呟きは目の前のツヴァイに投げられた。無表情のまま、太陽は両手に持ったアロンダイトを引いてツヴァイの腹部に蹴りを入れる。無人機であるツヴァイは痛みを感じることは無いが、吹き飛びはする。しかし、ただで吹き飛ぶ訳は無く、両腰のバインダーから射出された四基のファングが太陽を襲う。

「だが・・・実力は本人とは程遠い」

フッと鼻で笑いながら太陽は自分に向かってくるファングを、爪先に装備備されたビーム刃展開状態のソードビットで全て切り裂いた。真っ二つにされたファングは海へと落下する際に爆発し、ツヴァイ

は左腕のハンドガンの銃口を太陽に向けながら突っ込む。ハンドガンから放たれたビームを、太陽が難なくアロンダイトで切り裂いていると瞬時加速（イグニッション・ブースト）で迫ってくるツヴァイが目に入った。

「・・・こちらも遊んでる暇は無いんでな。そろそろ決めさせてもらうぞ・・・・」

自分に向かって振り下ろされるバスターソードを避けながら、太陽は腕時計のようなツールを展開して左腕に装備する。無人機であるため空気が読めないツヴァイはハンドガンで太陽を狙い撃つが、やはり当たらない。ビームが自分の両隣を通過している隙に太陽がツールの操作を完了すると、マシンボイスが周囲に響いた。

【Ｍｏｄｅ（モード） Ｅｘｃｅｅｄ（イクシード） Ｓｔａｎｄｂｙ ＯＫ. Ａｒｅ ｙｏｕ ｒｅａｄｙ?】

太陽がツールのボタンを押すとバシュッ、とバルディッシュトワイライトの展開装甲から圧縮空気が漏れる音がした。スライド展開するのではなく、僅かに太陽の身体から装甲が浮いている。

「キャストオフ」

【Ｃａｓｔ ｏｆｆ】

太陽がキーワードを口にすると、勢い良くバルディッシュトワイライトの装甲がパージされた。吹き飛んだ黒い装甲がツヴァイに当って怯ませる。今の太陽は纏っているのは極限まで薄くなった紅の装甲。その姿はほとんど人間と変わりなく、再び圧縮空気が漏れると胸部装甲が二つに展開されて肩の定位置に収まる。

【Ｃｈａｎｇｅ　Ｅｘｃｅｅｄ】

胸の真ん中には露出されたバルディッシュトワイライトの装甲が、彼女の名のように日輪の如く輝やいている。

【Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ】

「総て・・・振り切るぜ」

太陽が両手のアロンダイトを上へと放り投げた瞬間、ツヴァイのセンサーから太陽の反応が消失した。そして、衝撃が走ると同時にツヴァイの装甲が次々に弾け飛んでいき、回避行動を取ろうにも全身に走る衝撃がそれを許さない。ギギギと音を立てながらツヴァイが首を横に向けると、一瞬だけ組んだ両手を自分に向かって振り下ろす太陽が確認出来た。両手を叩き込まれた頭は粉砕されて、残った本体が海上に直進する。が、ツヴァイが海に落ちる前に先回りした太陽は脚を振り上げ、ツヴァイを蹴り上げる。上空へと打ち上げられたツヴァイの周囲に紅い円錐状のエネルギー『クリムゾンジャベリン』が数十個現れ、全ての先端がツヴァイに向いていた。装甲がボロボロになり、コアが剥き出しになったツヴァイに視線を送っていた太陽の姿が消える。刹那、目視さえ出来ない速さの太陽が全てのクリムゾンジャベリンをツヴァイに打ち込んで姿を消した。

【３・・・２・・・１・・・】

「絶望がお前の・・・ゴールだ」

【Ｔｉｍｅ　ｏｕｔ】

ツヴァイが大爆発すると共に、オレンジ色のＧＮ粒子が華を咲かせ

た。

「まるで空飛ぶ戦艦だな・・・・」

間近でアルバトーレを見て感想を述べるラウラは今、アルヴァトーレから放たれる無数のビームを絶賛回避中である。ヴィンスのレグナントより一回り大きい巨体はラウラの言うとおり、ちょっとした戦艦にも見える。ＧＮフィールドに対抗できるＧＮ粒子を纏った実体剣を装備している機体を持つラウラと政志が一機ずつアルヴァトーレを相手することになったが、ラウラにとってＧＮフィールド持ちの相手と戦うのはこれが初めて。

「やはり、ななせの言うとおりビームは効かないか・・・・」

ＧＮソード?から放たれたビームは予想通り粒子の壁に防がれる。

ならばと、ＧＮソード?を握り直したラウラは三段階加速（トリプル・イグニッション）でアルヴァトーレの懐に潜り込んで、大型ＧＮキャノン砲台に向かってＧＮソード?を突き出す。その瞬間、アルヴァトーレの右側から巨大なアーム、ＧＮクローが伸びて、ＧＮソード?を掴んだ。ＧＮクローの力が強く、ＧＮソード?を押しても引いてもビクともしないため、もう一本の手に持ったＧＮソード?でアームの部分を切り裂こうとしたが、逆サイドから伸びたＧＮクローに掴まれてしまった。

「くそ・・・っ!!」

ラウラは悩んだ。どうにかしてＧＮソード?をアームから引き離すか、それともＧＮソード?を諦めてビームサーベルで本体を切り裂くか。そうこう考えている間にもＧＮソード?はミシミシと音を立てて今にも砕けようとしていた。仕方ないと諦めたラウラがＧＮソード?を手離そうとした刹那、二本のアームが本体から切り離された。赤いガンダムが来るのと同時に。

「何手こずってんだよ、お前は」

その言葉と共に切断部分から火花を散らすアルヴァトーレは突然の来訪者の蹴りによって海に沈められた。

「政志・・・どうして、お前がここにいる?」

「どうしてって、俺が相手してたもう一機を倒したからに決まってんだろ」

「・・・どうやって?」

「出会って即効真っ二つ」

顔を引きつらせながら聞いた自分が馬鹿だったとラウラは思った。
現在進行形で苦労している相手を目の前の少年は一撃で倒したと言いやがった。溜息を吐いたラウラは、呆れた表情からむくれた表情にシフトして口を3の字に尖らせる。

「別に助けなど必要なかったのに・・・・」

政志に情けないところを見せてしまったことを何とか誤魔化そうとするが、政志はハイハイと適当に足払う。

「じゃあ俺は他の奴の援護に回るから、お前はあいつの相手をしてくれ」

視線の先では海面が盛り上がって、黄金の機体が浮上する。やはりアームを失って蹴りを入れられた程度では破壊することまでは出来なかったようだ。政志はアルヴァトーレにGNソード?をを構えているラウラに背を向けて、仲間の援護に向かう前にあることを思い出しラウラの方に振り返った。

「ラウラ、人のこと言えた義理じゃねぇが・・・・少しは俺にも頼れよ」

不覚にも、ラウラは顔を真っ赤に染めてしまう。ラウラがドキドキしていることを知ってか知らずか、政志は小さく微笑んで見せた。

「本当なら俺が相手してもいいんだけど、どっかの誰かさんに頼れって言われたからな。早速お言葉に甘えさせてもらうぜ?」

「あ、当たり前だ!ここは私に任せて、お前は早く行け」

そう怒鳴られた政志はツインドライヴ特有の∞字の軌跡を残しながら、そこから去って行った。政志に頼られたことで嬉しくなって軽くトリップしかけるが、すぐ意識を目の前で大型ＧＮキャノンを自分に向けるアルヴァトーレに集中させる。

「さっきのような失態はもうしない・・・・。政志の期待に応えるためにも、お前は私が沈める！ダブルオーライザー、ラウラ・ボーデヴィッヒ！目標を駆逐する！！」

ＧＮソード?を強く握りしめたラウラはアルヴァトーレへと突っ込んで行った。

ラウラと別かれた政志は何となく不安な一夏達の元へと向かう。今の政志は無表情だが瞳は怒りに燃えおり、ラウラ達の前では何とか

堪えていたものの、やはりどうにも我慢出来ないものがあった。そのせいでななせに八つ当たりしてしまった自分が情けなく思える。

「後で、ななせに謝らねぇとな・・・・」

目に入ったイナクトとフラッグを左肩のＧＮランチャーで撃ち落してながら飛行していると、何かを察知したのか、政志は左肩からバスターソードを抜き取って真横に薙ぎ払った。バスターソードが掻き消したのは緑色のビーム。

「四機とはいえ、俺に戦いを挑むとは良い度胸だな」

ビームが飛来した方向には、臨海学校の時に襲撃してきたフォースインパルス、フリーダム、ジャスティス、プロヴィデンスの四機がいた。しかし、あの時と違い今は顔も装甲で覆われ、全身装甲（フルスキン）となっている。普段の政志ならこれを見るとセンサーで生体反応があるか確認するが、今回それをしなかった。

「覚悟しろよ。今の俺は・・・・自分を抑え切れねぇ」

行き場の無い怒りの矛先を向ける政志は、悪魔のよう歯を剥き出しにして笑う。四機から放たれるビームを避けながら二本のバスターソードを合身させてバスターブレイドにする。柄を両手で握り、刀身全体に桃色の粒子ビームを纏わせた政志の姿が霞んだと同時に、四機の懐に一瞬で入った。ノーモーションで最高速度に達する程の瞬時加速（イグニッション・ブースト）、『零段階加速（ゼロ・イグニッション）』はＩＳの戦闘において最強の技法と言って過言ではない。止まっていた敵がいきなり目の前に来られたら余程の腕の持ち主でないと対応できないだろう。例え出来たとしても、政志は敵を破壊する。

「デストラクション・・・・ブレイカー」

横一線に振るわれたバスターブレイドから放たれた極大のビーム刃は四機だけでなく、その後ろにいた数十機のイナクトとフラッグを飲み込んでいった。塵すら残さない一撃で消滅した四機が無人機だったかは最中ではないが、何故か政志には無人機であると思えた。こんな時にも、いつもの勘が働く自分に向かって政志は自嘲の笑みを浮かべる。

「そろそろ加減覚えねぇと、味方まで殺しちまいそうだな・・・・。やっぱ俺が一人で出た方が良かったんじゃねぇのか？」

その呟きは周りの戦闘音に掻き消され、連結を解除したバスターソードを両手に握った政志は仲間の元へ飛翔するのであった。

連邦本部攻防戦（後編）（前書き）

連邦の軍服は、なのはＳＴの機動六課をイメージしてください。

今回、ある二人が色々と大変なことになりますが、生暖かい目で見守ってください。

では、本編をどうぞ！！

連邦本部攻防戦（後編）

アルケーの右前腕にマウントされてあるライフルモードのバスターソードから茜色のビームが放たれる。一面にばら撒くように放たれたビームの弾幕。だが、無数のビームは二対の推進翼（スラスター）から発生している蒼銀の翼、月光の翼（ムーンライトウィング）によって生み出された夜明の残像を撃ち抜くだけ。

「下手な鉄砲は数撃っても当たらねぇんだぜ？」

夜明のレイジングウィングは第四世代から進化した代五世代のＩＳ、『搭乗者の想いに応える異端機』だ。夜明の精神力で形成された月光の翼（ムーンライトウィング）がレイジングウィングの機動力の全てを担い、その他のエネルギーが全て武装の方に回されている。即ち、レイジングウィングは圧倒的な機動力と攻撃力を持ったＩＳだということだ。瞬時加速（イグニッション・ブースト）をするアルケーはマウントされていたバスターソードを腕から滑らせ、そのまま夜明の頭上に振り下ろす。

「パワーだけは半端ねぇからタチが悪い・・・・」

スターライザーで受け止めるが、柄から伝わる衝撃が出力の大きさを物語る。アルケーはビームサーベルを展開させた両爪先をバック転の要領で夜明の股目掛けて蹴り上げる。生命的にも、金的にも危険を察知した夜明は月光の翼（ムーンライトウィング）を羽ばたかせ、後方に下がって二本のビーム刃をかわした。

「男の急所を狙う行儀の悪い足には、お灸を据えねぇとな」

背部に装備された荷電粒子砲、スタードライブの砲門が逆さになっ

て爪先が天に向いているアルケーの両脚に向けられる。スタードライブから放たれた荷電粒子砲がアルケーの両脚を飲み込む寸前にアルケーは真下に向かって瞬間加速（イグニッション・ブースト）することによって回避した。高速で海に突っ込んだため大きな水飛沫を上がる。一見理解不能な行動にも思えるが、

「次で決めさせて貰うぞ」

アルケーが突っ込んだ海面を見据えながら夜明は腹部のプラズマ砲、スターライト・ブレイザーのロックを外す。すると、海中が少し盛り上がったと思った瞬間、アルケーが高速で夜明に突っ込んでいく。アルケーの周りに展開された十基のファングとバスターソードの矛先は夜明に向けられ貫こうとしている。だが、夜明の腹部から目が眩むほどの輝きが溢れ始め、エネルギー供給の終わりを告げる。

「スターライト・ブレイザー・・・・！」

放たれた蒼いプラズマの柱は、目の前まで迫っていたアルケーとその周りに展開していたファングを飲み込み跡形もなく消し飛ばした。指示された敵を倒した夜明は、とりあえずイナクトとフラッグを墜とし始めた。

「はあああああっ！！」

ラウラは切り裂く。目の前の黄金の装甲をＧＮソード？でただ切り裂く。近接戦闘用の武装を失った今のアルヴァトーレにとって懐に入られることは破壊されるのと同じこと。装甲を切り裂いている内にＧＮフィールドの発生装置を破壊したのか、フィールドが解除されている。大型キャノンも、側面のビーム砲台も全て失ったアルヴァトーレは、装備されてある六基のファングを射出して背後からラウラを襲わせる。

「私を・・・なめるなぁっ！！」

自らの背後に迫るファングをセンサーに頼ることなく感じ取ったラウラは上段回し蹴りで全て破壊する。全ての武装を潰された今のアルヴァトーレはただの空飛ぶ屑鉄。

「これで、終わりだ・・・・！」

後方へ下がりながらオーライザーから八基のＧＮマイクロミサイルが吐き出された。全てのミサイルは複雑な軌道を描き、ついにはアルヴァトーレを捉えた。爆風と黒煙が広がり、無数の黄金の破片が海へと墜ちていく。それを見届け勝利を確信したラウラの肩から一気に力が抜ける。しかし、黒煙の中から飛来したビームが再びラウラ

を動かせた。

「何・・・・だと・・・・・」

驚愕に染まったラウラの前に黒煙から黄金の装甲を纏った一機のＩＳが姿を現した。背中にはＧＮドライヴが配備されており、最大の特徴は背部に接続された一対の大型ウイング。アルヴァトーレはただの強化パーツでしかなく、本体であるこの機体の名はアルヴァアロン。一瞬、アルヴァトーレを倒した政志が何故このことを自分に伝えなかったのか考えたが、今になって思うと・・・・。

『出会って即効真っ二つ～』

「・・・・・」

政志の倒し方に問題があった。おそらく、政志は何も知らないままアルヴァトーレを中にいるアルヴァアロンごと斬ったのであろう。舌打ちを鳴らしたラウラはライフルモードにしたＧＮソード?からビームを放つ。しかし、

「ＧＮフィールド・・・・」

アルヴァトーレと同じく、機体全周に展開されたＧＮフィールドがビームを弾く。左手にビームライフル、右手にビームサーベルを持ったアルヴァアロンが動き出す前にラウラはバッと左目の眼帯をむしり捨てる。目の前の敵を前に、自然と金と紅のオッドアイが細くなる。その刹那、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使用したアルヴァアロンが一気に距離を詰めてきて、ビームサーベルを振り下ろした。反射速度の上がったラウラは即座にＧＮソード?を振るい、ビームサーベルとＧＮソード?が火花を散らす。アルヴァアロンは、ラウラに押され始め

るコンマ一秒前にラウラの腹部に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「がはっ・・・・！」

蹴りこまれた肺から空気が全て吐き出され息が出来なくなる。何とか呼吸のリズムを取り戻し態勢を立て直したラウラが見たのは、ビームライフルのビームを前方に向けられた背部ウイングの間で圧縮しているアルヴァアロンだった。圧縮開放され放たれた大出力ビームは容易くラウラを飲み込むぐらいの極大さを誇っている。避けられない、とラウラは悟る。が、それでも・・・・。

「私は、託されたんだ・・・・！想いを・・・・ガンダムと共にっ！」

彼女は決して諦めない。そんな想いに応えるかのように、センサーにあるシステムが使用可能であること告げる文字が浮かび上がる。今まで使用出来なかったのが今になって使用できるようになったことを疑問に思うことも無く、ラウラは最強の力を発動させる。

「トランザムッ！！」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

ダブルオーライザーの機体色が、青と黒の装甲が赤く輝き、膨大なＧＮ粒子が周囲に広がっていった。この時ラウラは知らなかった。このトランザムによって起きる現象を・・・・。

「ちょこまかちょこまかと・・・・さっさと墜ちなさいよ！」

無茶苦茶なことを言う鈴の双天牙月がレイダーを襲う。だが、レイダーは瞬時に高機動形態に変形してその場から一時離脱する。鈴の真上で旋回したレイダーの口部から高出力エネルギー砲、ツォーンが火を吹いた。雨の如く降り注ぐビームの雨を鈴は腕を頭上で交差することで何とか防ぐが、大量のシールドエネルギーが持っていかれる。自分に迫ってくるレイダーに向けて衝撃砲で迎撃するが、虚しくも不可視の弾丸は空を切る。

「やばっ・・・・！！」

すぐ真上では通常形態になったレイダーがワイヤーで繋がれた金属球、ミョルニルを叩き付けようとしている。まともに受けたらエネルギーが根こそぎ食い尽くされそうな一撃を、一か八か鈴は双天牙月で防ごうと試みる。しかし、鈴には防ぎ切れる気がしなかった。

「（龍鳳・・・・！）」

鈴は両目を閉じて来るべく衝撃に備えるが、いつまで経ってもそれは来ない。恐る恐るゆっくり目を開けていくと、ミョルニルを振りかぶったレイダーが動きを止めていた。胸からビーム刃を生やして。

「ホンマ、急いで来て正解やったで」

聞き覚えのある下手糞な関西弁が聞こえると同時に、ビーム刃を引き抜かれたレイダーは火花を散らしながら海へと墜ちていき爆発した。ビームサーベルを持っていない方の手で、前髪を掻き揚げる少年の顔を見た鈴は惚けそうになるが、何とか堪えた。

「りゅ、龍鳳！あんた支部に行ってたんじゃないの！？」

「何や、いきなり藪から棒に・・・・。俺はただお前らが本部来るん聞いて、仕事すっぽかして来ただけや」

「（ちゃんと働きなさいよ・・・・）それにしても来るの早すぎでしょ！？」

「スピードだけが俺の取り柄やからな・・・・。こんぐらい朝飯前やで！」

当たり前のようにドヤ顔で言ってはいるが、今回龍鳳達四人が訪問した支部があるのはオーストラリア。ぶっちゃけ、無茶苦茶遠い。いくら速いだけが取り柄と言ってもこんな短時間で帰ってこれるわけは無いのだが、突っ込みを入れるだけ無駄と判断した鈴は溜息を吐く。

「鈴。一応言うとくけど、怪我だけは――」

突如、緑色の粒子がばら撒かれると、龍鳳は目を見開きながら鈴に背を向ける。

「どうかしたの？」

背を向けたまま動かない龍鳳に鈴は話しかけるが中々返事が返ってはこない。十秒が経過したぐらいだろうか、龍鳳が口を開いた。鈴の方を振り向くこともせず。

「何でもねぇよ。テメェはそこら辺の雑魚で狩ってろ」

「え？う、うん・・・・」

関西弁でなくなり言葉遣いが変わったことに鈴は困惑したが、その言葉に自然と身体が従い、鈴は龍鳳を残してその場から離れていった。

「量子がこっちに向かって加速してきやがる。ったく・・・・おちおち寝てもいらんねぇぜ」

顔つきが変わり、獰猛な笑みを浮かべる龍鳳の視線の遥か先ではトランザムを起動したラウラが交戦している。ハハハハハッ、と笑う今の彼は明らかに普段とは違う。周囲では戦闘が繰り広げられている中、動きを止めている龍鳳に誰も近づこうとはしない。彼が纏っているオーラは危険しか感じない。しかし、そんな彼に近づく者が一人だけいた。

「おっ。龍鳳、お前帰ってきてたのか？」

昨日夜、本部に保護されて龍鳳達と面識があった夜明が背後から声を掛ける。ゆっくり振り向いた龍鳳の顔を見た夜明は自然と目を細める。

「テメェ強そうだな・・・・。ちっとばっか俺様の相手しろよ」

夜明が知っている限り、龍鳳は関西弁で、お世辞にも優しい顔つきをしているわけではなかったが、今程危なし気な笑みを浮かべるような人間でもない。何より違ったのが、目だ。深紅の瞳は髪と同じ青になっている。そんな龍鳳を見たら誰でもこう言ってしまうだろう。

「お前・・・・誰だ?」

その質問に答えることもなく、鼻で笑った龍鳳はビームサーベルで両手に持ち夜明に斬りかかる。

「何ほざいてんだ?俺様は俺様に決まってんだろぉ!!」

狂気の叫びが周囲に木霊する。

トランザムを起動させたことによって、ラウラは未知の領域を体感していた。アルヴァアロンの放った代出力ビームを高速飛行で回避した後には赤い残像が残る。

『負ける気がしない』

自然とそんな言葉が口から漏れて、ＧＮソード?を握る力を強める。ジグザグな軌道を描きながら接近するラウラを、アルヴァアロンは両手に持ったビームライフルで迎え撃つ。動体視力、視覚解像度等を数倍に上げる『ヴォーダン・オージェ（オーディンの瞳）』と『トランザム』。この二つを発動させている今のラウラにビームが当たることなどありえない。アルヴァアロンは両手のビームライフルを上に投げ捨ててビームサーベルで両断した。爆発がラウラに視界を一瞬だけ奪い、アルヴァアロンを見失う。すぐに金の左目がアルヴァアロンの軌道をコマ送りで追いかけるが途中で途絶えてしまう。左目にヴォーダン・オージェがあるのを知ってか知らずか、アルヴァアロンはラウラの右側に回り込みビームサーベルを突き出した。

「ダブルオォォォ！！」

ラウラの叫びと連動しＧＮ粒子の放出量が上がったが、虚しくもサーベルはラウラの胸を貫いた。しかし、その瞬間・・・・・・・・・ダブルオーと共に、ラウラの身体が光の粒となって消えた。センサーからの反応もロストしてアルヴァアロンは動きを止めるが、その

背後では光の粒が集まりだしている。瞬く間に、光の粒はＧＮソード?を振りかぶるラウラを形成した。センサーに反応がありアルヴァアロンはＧＮフィールドを展開しながら振り向くが、アルヴァアロンの右胸をＧＮソード?が貫く。

「私は戦い続ける！」

もう一本の手にあるＧＮソード?を今度は左胸に突き刺す。すると、貫かれた部分から火花が迸りアルヴァトーレのＧＮフィールドが消失した。

「例えどんな敵が来ようと・・・・」

アルヴァトーレは手に持ったビームサーベルでラウラを切り裂こうとする。だが、腰からビームサーベルを抜き取ったラウラはビーム刃を展開して、アルヴァアロンの両肩に突き刺し、両腕の回路を断って動きを止める。

「仲間を、愛する者を苦しめる歪みを・・・・私が断ち切るっ！！」

最後にラウラは胸に刺していたＧＮソード?を抜き取って連結させる。銃口からビームサーベルを発生させたＧＮツインランスを右脇下から一気に振り抜き、ビーム刃はアルヴァアロンの腹部を通っていった。

「闇に沈め・・・・」

その言葉が始動キーだったのか、アルヴァアロンの胴体がスライドしていき、完全に二つに分かれた瞬間、爆発と共に朱色の華が咲いた。爆風が銀の髪を靡かせる。今度こそ完全に破壊できたことを確

認したラウラは溜息を吐きながら、肩の力を抜く。ダブルオーライザーの輝きも序々に消えていき、元の黒と青の装甲に戻った。戦いには勝ったラウラだったが、一つ不可解なことがあった。どうして自らの身体が機体ごと量子化したかだ。

「ツインドライブと関係しているのか・・・・？」

世界を変革しえる力を、ラウラは確実に物にしていっている。彼女がダブルオーの力を使いこなす日は、案外近いのかも知れない・・・・。

「ははははははぁ！！どうした？避けてばっかいねぇで攻撃してこいよぉ！！」

「くそっ！一体どうなってやがる・・・・！」

ビームマシンガンの弾幕を避けながら、夜明は舌打ちをする。狂気を孕んだ笑い声を叫びながら龍鳳は夜明に向けて瞬時加速（イグニッション・ブースト）する。高機動力のある二機の戦闘中に残るのは残像ではなく一筋の線。この二人による高機動戦は次元を一別していた。

「龍鳳・・・・！そろそろいい加減にしろよ！！」

自らに振り下ろされるビームサーベルをひらりとかわした夜明は龍鳳の腹部へと蹴りを入れる。しかし、

「・・・いいぜ！そうでなきゃ面白くねぇ！！」

返ってきたのは痛みによる嗚咽ではなく、歓喜の叫び。今の龍鳳は完全に戦闘狂と化していた。吹き飛ばされた龍鳳は態勢が崩れた状態で再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）して夜明に突っ込む。危険すぎる目の前の男に夜明はスターライザーを振るうか悩んだが、そうしないと自分が殺される気がした。

「仕方ねぇか・・・・」

自らに迫ってくる龍鳳を迎え撃とうと夜明がスターライザーを構えた、その時だった。横から、二人の間に巨大な桃色の閃光が通っていき二人は静止した。

「久しぶりだなぁ。破壊神さんよぉ？」

バスターブレイドを両手に握る政志は、危険な笑みを浮かべる龍鳳を睨み付ける。

「ブルーノート・・・・。てめぇ、まだ龍鳳の中にいやがったのか？」

「前にも言っただろ？俺と龍鳳は二人で一人の最強の超兵・・・・。切っても切れねぇ仲なんだよ」

話の内容に全く付いていけない夜明を尻目に、二人はそれぞれの武器を構えて戦闘態勢に入る。両者が互いの隙を伺い睨みあっていると、急に龍鳳がビームサーベルを降ろして舌打ちをする。

「そろそろ限界か・・・・。今度やり合う時があったら、お前の喉元を掻き切ってやるから楽しみにしてろよ、破壊神！ハハハハハッ！！」

笑い声が聞こえなくなると、すうぅっと龍鳳の瞳が青から深紅に戻っていく。

「あれ？政志に夜明・・・・お前ら二人何してんねん？」

「・・・・・・・・・は？」

余りもの変わりように夜明は口をポカンと開けて唖然とする。顔つきも、口調も、いつもの龍鳳に戻った。

「何言ってんだよ。お前がボーっと突っ立っていたから、心配して声掛けただけだろうが」

先ほどの出来事が無かったかのように話しかける政志を見た夜明は、余計なことは言わない方がいいと判断した。なぜなら、龍鳳と話をしている政志がチラ目でそう訴えているからだ。

「（厄介な世界に来たもんだな。全く・・・・）」

溜息を吐きながらバリバリ頭を掻く夜明はこの世界でも苦労することを予感した。戦闘音が止み静かに鳴った空に、茜色の夕陽が覗きこむ。

「「ッシャアアアアアアアアア！！！！」」

《・・・・イエエエエエエイ！！》

大ホールのステージで二人の男が歌を歌い切ると歓声が沸き起こる。

「よ〜っし！じゃあ次の曲は」

「何もしてねぇお前らが何で一番盛り上がってんだ？」

「「ギャアアアア！！頭蓋骨がメキメキと逞しい音をぉぉぉぉ！！」」

政志にアイアンクローを食らうアルとクリスは激痛のあまりマイクを手放す。戦いは本部の圧勝で、怪我人も一人も出ることがなかった。支部から帰ってきたアルとクリスがそれを聞いた瞬間、

『だったら今日は無礼講じゃあぁぁぁ！！』

『飲んで騒いでお祭りだあぁぁぁ！！』

とか言い出したのが始まりで、馬鹿な本部の人間がそれに便乗して今本部は混沌と化している。酒が入っている者もおり、拳銃を持って暴れだしたり、殴りあったりしているのを政志が巡回して暴力的に止めている。そして、その中でも一番イラっとしたのが、目の前の馬鹿共である。

「この騒ぎの経費と修理代はお前らの給料から引いておくからな」

「「それだけは御勘弁をーーーーっ！！」」

ははは、と土下座をするアルとクリスを一夏達は腹を抱えて笑いながら見ている。やれやれと言った感じで政志がステージから降りると二人は懲りずに歌いだしたので、政志はこれが終わった後でアルとクリスをボコボコにすることを心の中で決めた。一夏達がいるテーブルに向おうと思った政志だったが、ふと部屋の片隅に目をやる

と何処か浮かない顔で壁にもたれるななせがいた。

「何心気臭い顔してんだよ、お前は」

「政志・・・・」

声を掛けられて顔を上げると政志がいたので、視線を横にそらした。戦いを終えて帰還してからずっとこの調子である。どうしたらいいか分からなかった政志がう～んと頭を捻らせるとピコーンと豆電球が光った。そして、何を思ったのか、

「おりゃ♪」

頬っぺたを引っ張った。

「ちょ、まはひぃ（政志）！？いらいってはーーっ（痛いってばーーっ）！！」

ななせは涙目になりながらポカポカ政志にぐるぐるパンチをお見舞いする。頃合を見計らった政志が頬っぺたから手を放すと、引っ張られたところが若干赤くなっていた。う～、とうねりながらななせは頬っぺたを両手で押さえる。

「もおっ！いきなり何――」

「やっと元気になったか」

「え？」

「あの馬鹿共じゃねぇけど、こういう時ぐらい考え事するの止めと

けよ。お前がそんな表情だと、心配するやつらがいるんだからな」

そう言った政志はななせの手を取って連れて行こうとするが、政志と手を繋いでることを意識したななせは顔を赤くしてバッと手を放してしまった。

「ご、ごめん・・・・・っ！でも、あの、その・・・・」

政志に不愉快な思いをさせてしまったと思ったななせは俯いて服のスカートを掴んでもじもじさせる。その行動の意味を理解してか、しないでかは分からないが、政志はポンとななせの頭の上に手を置いた。

「悪かったな。今日、お前に当たっちまって・・・・」

「・・・・いいよ別に。あたし、気にしてないから・・・・／／／」

俯いているためななせの顔が赤くなっていることになど、政志は気付かず（気付いたとしても何で赤くなっているかは分からないだろうが・・・・）そのままななせに話かける。

「何を悩んでるのかは知らねぇが、お前の近くには俺達がいることを忘れんなよ。助けを求められたら、すぐに駆け付ける仲間がいるってことを」

それだけ告げた政志は一夏達がいるテーブルへと足を運び出した。顔を上げたななせの顔は未だに赤かったが、優しい笑顔が零れており、政志の後を軽い足のりで追いかけた。

「ホント。政志は優し過ぎるんだから・・・・」

第一回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）＋α（前書き）

テストなんか、消えてなくなれェェェェェ！！！

第一回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）＋α

政志「第一回。『ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞～紅蓮の破壊神～』人気キャラクター投票結果発表」

一同《シャアアアアア！！》

ゴゴゴゴゴゴ・・・・ッ！！

政志「熱気で空間が軋んでやがる・・・・。司会はこの俺、一応主人公の鈴木政志・・・・と見せかけて、困った時のアーノルド君がします」

ななせ「見せかける必要絶対になかったよね？」

アル「よっしゃあ！よく分かんねぇけど、ここは俺に任せろ！！」

龍鳳「協力してくれた九人の方々には感謝してるで！」

クリス「正直、九人も協力してくれるとは思わなかったよ」

アル「じゃあ早速行くぜ野郎共！！まず第六位は一票のこの二人！恋する魔獣、ヴィンセント・トールギスと実力未知数の乙女、橘茜！」

クリス「ヴィンス～。折角票入れて貰ったんだから、もっと喜ばないと」

ヴィンス「いや、確かに嬉しいけど・・・・未登場キャラと一緒の

順位ってどうよ？」

龍鳳「票が入っただけでもありがたい思えや。あそこ見てみい、空気が死んどるで」

０票組《（ズーン・・・・・）》

ヴィンス「・・・・ごめん」

アル「分かれば、いいんだ・・・・」

ななせ「茜だけど、未登場キャラと言うことでコメントは控えさせてもらうね。でも、代わりに手紙預かってるよ」

『べ、別に嬉しくなんかないんだからね／／／／』

一同《・・・・・》

クリス「何？このベタ過ぎるツンデレキャラ・・・・」

政志「突っ込んだら負けだ。気にしねぇで次行ってくれ」

龍鳳「次は五票を獲得して五位になったのはこの二人！成層圏の向こう側まで狙い撃つ馬鹿、アーノルド・ギアナと糖尿病をも支配する甘党小動物、クリストファー・トールギス！！」

アル「こういう時ぐらい馬鹿扱いするの止めてくれよ・・・・」

政志「どうでもいいから早くコメントしろ、金髪クソ野郎」

アル「己は鬼かっ!?・・・・まぁいいや。龍鳳に負けたのはあれだけど、投票してくれてありがとな。俺はこれからも、狙い撃つぜ!」

ななせ「クリスも一言何か言ってね」

クリス「投票してくれたみんな、どうもありがとう～♪ボクはこれからも美味しいお菓子食べ続けるから!」

龍鳳「その宣言ここでやる必要絶対無いやろ・・・・」

アル「段々盛り上がって来たな。このまま次の発表行くぜ!六票を獲得して第四位になったのはこいつ!空を駆け抜ける速さは光をも超える男、龍鳳・クシュリナーダ!」

龍鳳「うぃ～っす」

政志「それじゃ龍鳳、一言よろしく」

龍鳳「せやなぁ・・・・正直、アル達に勝てるとは思わん勝ったわ」

クリス「なんで?」

龍鳳「よう考えてみい。俺の特徴言うたら関西弁以外無いやろ」

アル「そうだね」

龍鳳「お前に即答されたら滅茶苦茶腹立つんやけど・・・・。とりあえず、俺に投票してくれてありがとうな」

クリス「遂にいよいよ！ＢＥＳＴ３の発表が来たよ！！」

アル「七票で第三位！原作キャラで唯一ランクインしたのはこいつ！」

『貴様のその歪み、この私が断ち切るっ！！』

龍鳳「黒の革新者、ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

ラウラ「どうして私は政志と同じ順位じゃないんだ？」

政志「ラウラ・・・お前の後ろにいる奴らを見ても同じことが言えるか？」

０票組《（ズーン・・・・・）》

ラウラ「・・・すまん」

ななせ「それはいいとして、今の心境は？」

ラウラ「原作キャラで三位になれるとは思っていなかったが、一応礼は言っておくぞ。後、近い将来私の名前は鈴木・ラウラ・ボーデヴィッヒになる」

ななせ「ならないからっ！」

クリス「それじゃあ、第二位の発表～！」

龍鳳「三位と一票差の八票を獲得したのは！」

『悪魔でも構わない！それで守りたい物が守れるならっ！！』

アル「連邦最強の女！黒い堕天使、琴吹ななせ！！」

ななせ「あ、ありがとう・・・・っ」

クリス「二位に輝いた感想をよろしく～！」

ななせ「ええと、その・・・・。こ、これからも頑張るので、よろしくお願いしますっ！」

龍鳳「これでななせは特別番外編に出るん確定やな」

アル「そんななせと一緒に特別番外編に出るのは、一位に輝いたこの小説の主人公！」

ラウラ「獲得票は圧倒的な二十一票！」

クリス「アニヲタだけど、その強さは最早神クラス！」

龍鳳「皆を束ねる破壊の権化！」

『破壊の力・・・・・！その身に刻めっ！！』

ななせ「触れるものは全て破壊する！紅蓮の破壊神、鈴木政志！！」

政志「・・・・あぁ、俺か」

一同《軽すぎるわーーーっ！！》

ラウラ「政志。一言コメントを頼む」

政志「まさか俺が一位になるとは・・・・世も末だな（チラッ）」

０票組《何で一瞬だけこっち向いたんだよ!!??》

政志「冗談はここまでにして、えーと確か・・・・三、四話先で俺となながせがメインの特別番外編やるから楽しみにしてくれよ」

ななせ「ＩＳとは関係無い学園物らしいから、あたし達の同級生になりたい人がいたら感想に書いてね」

政志「また人気投票やるから、そん時はまた協力してくれよ」

恐らく本編で登場するであろう機体の大雑把な説明

『バーサーディアボロス』
～武装～
・ＧＮステルスフィールド
・ＧＮファング×８－腰部の追加アーマーに格納されている
・ＧＮハンドガン（ＧＮビームサーベル）×２－自衛用として両腕に装着されている武装。銃身が折り畳み式になっている。
・ＧＮバスターライフル？－以前のバスターライフルより砲身が長くなったが威力も１．５倍に上がっている。銃口からはビームサーベルも発生することが出来、トランザム時には擬似ライザーソードにもなる。
・ＧＮブレイド×４－腰部の追加アーマーの外部に二本ずつ装備されている実体剣。また、柄の部分が可動式のアームとなっている。
・ＧＮフィールド
ディアボロスに追加装備を取り付けた機体。ヤークトアルケー同様、全距離に対してより強化された。

『シリウス』
～武装～
・ＧＮファング×１４－腰部のバインダーに7基ずつ格納されてい

る。

・ＧＮビームサーベル×２－腰の後ろに装備されている。

・ＧＮフィールド

・ＧＮランチャー－背部右側に１門装備されているビーム砲。ＧＮ粒子をチャージすることで、ＧＮメガランチャーとなる。

・ＧＮアルテミス×８－背中の推進翼（ウィング・スラスター）に装備されてある永久追尾ビーム砲弾。左右に四門ずつ配置されている。

スローネアインの発展型。形状はアルケーとディアボロスと酷似しているが、カラーリングの白と背中にある一対の推進翼が天使を思わせる。

『アポロニアシリウス』

～武装～

・ＧＮファング×１８－腰部の追加アーマーに格納されている。

・ＧＮランチャー×２－背部の左右に１門ずづ装備されているビーム砲。トランザム時はＧＮハイメガランチャーになる。

・ＧＮアルテミス×１６－背中の推進翼（ウィング・スラスター）が二対になったことにより、砲門の数が倍になった。

・ＧＮビームサーベル×２－腰の後ろに装備されている。

・ＧＮフィールド

・ＧＮソード×２－両腕に装備されている小型シールドと大剣、そしてＧＮビームライフルを組み合わせた複合兵装。射撃時は刀身を折り畳みライフルモードへと変形する

シリウスに追加装備を取り付けた機体。このスローネ発展型シリーズの中で、一番機体のスペックが高いと言っても過言ではない。

第一回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）＋α（後書き）

「ヘルス、ヘルスミー！」

「お前等・・・それでもＩＳの操縦者か？」

「このまま放置したら、やがて世界が滅びるかも・・・・！」

「あいつを殺して世界を守れーーーっ！！」

「・・・・・（石化）」

「政志ィィ！！しっかしろしろォォォォ！！！」

～次回～

『増殖と
カサカサと
人類の存亡を賭けた戦い！！』

お楽しみに！！

本部壊滅へのカウントダウン（前編）（前書き）

今回の話。正直言って、メチャクチャしょうも無いです

では、本編をどうぞ！！

本部壊滅へのカウントダウン（前編）

『動物兵器』というものをご存知だろうか？古来から人間は戦争において様々な動物を、その特性を活かして使用してきた。馬を騎乗用、あるいは戦車として利用したものが最も代表的な例であり、インドやカルタゴの将軍ハンニバルが象を使用したことも有名である。このように人間と一体となって戦う以外にも、輸送、通信手段、索敵、あるいは動物単体で攻撃をしかけるなどの様々な用途で動物は使用されてきた。

今回の話は、人間の手によって改造されたある動物が・・・いや、ある虫がもたらした悪夢のお話。

ドヤ騒ぎがあった次の朝。深夜に放送されたアニメをＹＯＵＴＵＢ

Eに上がってないか政志は探していた。

「さっさと上げろよこの野郎・・・・！」

目の前のパソコンに向かってキレる政志だったが、これはこれで楽しんでいる。キレてキレてを繰り返して、アップされた動画を一番最初に見た時が最高にテンションが上がるようだ。そして、ページの更新を続けているとようやくお目当てのアニメがアップされているのを見つけた政志はニヤリと笑う。カーソールを再生の所に持っていき、マウスのボタンをクリックしようと思ったその時だった。

「「政志！！助けてえええぇぇぇぇ！！！」」

突如、部屋のドアを蹴り開けて（破壊して）、ななせと龍鳳はが息を荒げながら入ってきた。それに続くかのように、

「政志ーーっ！！あ、あれは一体何なんだよ！？」

「あんなのがいるのか、この軍には！？」

後から来た一夏と箒も、ななせと龍鳳同様涙目になっている。折角良い所だったのに、邪魔された政志はイラっとするが、一夏と箒は兎も角、ななせと龍鳳がここまで怯えているのには余程の理由があるのだと思った政志は少し真剣な目つきになる。

「取りあえず、一体何があったか話してろ」

そして、返って来たのは、

「「「「ゴキブリだよ、ゴキブリ！！」」」」

・・・・・。

『何だゴキブリかよ』

と普通の男ならそう言うが破壊の神はそうでもなかった。

「（@Π@;）」

目を見開き、口を開けたまま持っていたマウスを落としてしまう。額に一筋の汗をながしながら、政志はゴクリと唾を飲み込み、それを四人はジト目で見ていた。

「もしかしてだけど・・・お前ってゴキブリ苦手なのか？」

唐突に一夏がそう言った途端に、ピタリと政志の動きが止まった。その状態が十秒ぐらい続き、龍鳳はまさかと思いながらもある実験をすることにした。

「あっ。あんなところにゴキブリが」

シュンッと風切り音が聞こえたと思ったら、政志の姿が視界から消えた。ＣＰ９顔負けの剃に一夏と箒はビックリする。ななせと言った本人の龍鳳は部屋の外の廊下に目をやっている。その先には、

「（（（（（（；゜Д゜））））））」

ガクブルッてる政志がいた。

「・・・ねぇ。政志ってゴキブリ苦手だったっけ？」

「俺が知っとるわけないやろ。俺も虫は苦手な方やけど、ここまでは酷うないで」

体育座り状態の政志は顔色を蒼白にしている。小さい頃からの付き合いであるななせと龍鳳も、こんな政志を見るのが初めてのようで困惑していた。

「んにしても。箒は女やから分かるけど、一夏もゴキブリが苦手やったとは知らんかったで」

「違ぇよ！俺達が見たのは――――」

一夏が言いかけた途中で、カサカサ音が廊下の向こうから聞こえて来た。五人がそちらに目を向けるとある物体を見つけてしまい、

「「「「アアアアアアアアアアア！！！！！」」」」

ななせ達は絶叫した。そして政志は・・・・

「（Ｏ＿Ｏ）」

石化していた。

「・・・・つまり、お前らはゴキブリが怖くて逃げ出してきたのか？」

「全く情けないね～。それでも皆ＩＳの操縦者？」

呆れながら言うアルとクリスはココアを啜ってた。ななせ、龍鳳、一夏、箒は顔を青ざめており、政志は未だに石化している。因みに、龍鳳と一夏がここまで運んできた。

「あのな・・・・人はどんな建物に住んだって、そりゃ気づかないうちにゴキブリと一緒に暮らしているもんなんだぜ？」

「小学生じゃないんだから、ゴキブリぐらいで騒がないでよね」

空になったカップを机の上に置いたアルとクリスは、よっこいしょと立ち上がった。因みに、二人の手には新聞紙が握られている。

「じゃあ、ボク達がゴキブリ退治してくるから」

「いい加減シャキッとしやがれ。特にそこの石化してるやつ」

やれやれと言った感じで二人が部屋から出て行こうとした瞬間、ななせ達は二人の背中を見て青ざめる。

「・・・・アーノルド、クリストファー・・・・後ろ」

箒の声に、アルとクリスが後ろを振り向く。そこには・・・・

「「キシャアアアアアッ！！」」

人間サイズのゴキブリが二人の背中にくっ付いていた。

「「ピギャアアアアァァァァァァァ！！！！」」

悪夢のような光景に、二人は血相を変えて部屋から飛び出して行った。ななせ達も二人を追いかけるように逃げる。政志をちゃんと忘れずに。

そして、行き着いたのはヴィンセントの部屋。そこには、ヴィンセント、ラウラ、鈴、セシリア、シャル、夜明、太陽も存在して顔を青ざめている。何故そこに集まったかと言うと、自分達も巨大ゴキブリを目撃して、慌ててヴィンセントの部屋に逃げ込んだのだ。そこには巨大ゴキブリが一匹も存在せず、扉は男子連中が強く閉めている。

「な・・・何なのよ、今の巨大なゴキブリ！」

「通常のゴキブリってあんなにまで大きくなるものなんですか！？」

「そんな訳あるか！実際のゴキブリは大きくても人間の手ぐらいの大きさだぞ！あんな巨大なゴキブリはあり得ん！」

鈴、セシリア、ラウラは一体何なのか理解出来ず声を荒げる。しかし、それは他の面子にも言えたことである。

「何なんだこのカオスな状況は・・・・っ！」

「この軍マトモじゃないもんが多すぎだろ！」

「来るんじゃなかったよぉ・・・・」

「夢か？これは夢なのか！？夢なら覚めろやゴラァァァ！！」

太陽、夜明、シャル、ヴィンセントも同じような反応をした。全員が取り乱している中、本部全体に放送が流れる。

【緊急事態発生！本部内にいる全軍員に伝えます！】

「シエルさん？」

【昨日の夜、化学研究室から一匹の実験動物が逃げ出したようで、現在増殖しているとのことです！】

《それ絶対あのゴキブリのことだろ！！？？つかゴキブリの研究なんかすんなぁぁぁぁ！！！》

【研究員の話によると、その実験体は全て肉食で最初の女王が死なない限り無限に増え続けるようです！】

《何イイイイィィィィ！！！》

【しかもその女王は通常サイズのゴキブリとのことです！】

《何イイイイィィィィ！！！》

絶対絶命過ぐる。あの化け物ゴキブリの中から普通のゴキブリを探し出すなど、どう考えても無理ゲーだ。そんな風に皆が絶望していたら、終わったと思った放送が再び流れた。

【たった今新しい情報が入りました！どうやら殺すと他の仲間を呼ぶようなので、間違っても殺すのだけは避けてください！それと、女王が死ぬと他の固体は全て死ぬらしいので、見つけ次第何がなんで殺してください！！】

「見つけ次第って・・・・。普通のゴキブリと一緒のやつをどやって見つけろと・・・・？」

【最後に、女王の体全体は赤いようです！！】

それを最後に放送が切れると、シャルが何かを気づいて指を刺す。

「ねぇ・・・あのゴキブリって、なんか赤いけど？」

シャルがそう言うと、ななせ達はシャルの指を刺した所に注目する。そこには、普通サイズの全体が赤い奇妙なゴキブリがいた。そして、アル、ヴィンス、夜明、太陽は眼を光らせて瞬時にＩＳを展開する。

「「「「死ねーーーーっ！！」」」」

スナイパーライフル、ファング、ウィングスター、ライオンハートから同時にビームを放つが、女王はそれを華麗に避けて隙間の穴から入り込んで逃げ出す。

「さっきのが女王だー！逃がすんじゃねぞぇー！」

「あいつを殺して平和を勝ち取るんだ！行くぞ野郎共ーー！！」

《オオオオォォォォォ！！！》

ななせ達は扉を開けて隣に逃げ込んだ女王を追うかのようにこの部屋を後にした。しかし、この時彼女たちは忘れていた。政志が未だに石化していたことを・・・・。

本部壊滅へのカウントダウン（後編）（前書き）

今更だけど、何でこの話を書いたのか分からん・・・・

では、本編をどうぞ！！

本部壊滅へのカウントダウン（後編）

研究室から逃げ出した肉食ゴキブリ。無限に増え続ける奴等を止めるには通常サイズの女王ゴキブリを殺すしかない。一行は勢いよく女王を探していたが、そう上手く見つかるはずもなく目の前の悪夢から逃げていた。

「ギャアアアアアアア！！」

「こっち来んなあああああ！！」

「勘弁してェェェェェェェ！！」

「もうヤダアアアアアア！！」

ななせ、龍鳳、鈴、シャルは涙を流しながら全力疾走で巨大ゴキブリから逃げている。

「いやあああああああ！！」

「無理ゲー過ぐる無理ゲー過ぐる無理ゲー過ぐるゥゥゥゥ！！」

「クソッ、こうなったら・・・・！アル、お前の出番だ！！」

「アホか貴様っ！！それ絶対囮のことだろ！？」

違う場所でもセシリア、夜明、太陽、アルは追いかけてくる巨大ゴキブリから全力疾走で逃げている。この相手はななせ達が今まで戦ってきた敵の中でも最悪であった。ゴキブリに慣れていない以上、

女はとにかくゴキブリが大の苦手である。これだけは、いくら力があっても変わることはない。しかし、またまた違う場所ではラウラとクリスがダブルオーライザーとセラヴィーを纏って巨大ゴキブリを返り討ちにしていた。

「邪魔だぁーーーーー！」

「どけぇーーーーーー！」

2人とも女王を探すのに必死であった。しかし、決してを殺してはならない。シエルの情報では、巨大ゴキブリは肉食であるが、殺すと仲間を呼ぶと言う大変な事が起こるらしいのである。だから2人はあくまで殺さず吹飛ばして気絶させる程度にしている。

「クリストファー！そっちはどうだ！？」

「だめ！全然見つからない！とりあえず二手に分かれよう！」

「分かった！」

2人は左右に分かれて女王を探すのであった。

一方、ヴィンセントは一匹の巨大ゴキブリを集中して攻撃しまくっていた。レグナントを展開しているが、ビーム兵器は使用しないで打撃攻撃をしている。それは殺してはいけないと言う理由があるからだ。

「この害虫がっ！！」

ヴィンセントの蹴りが炸裂して巨大ゴキブリが吹っ飛ぶと、一夏と箒がＩＳを展開した状態で近づいてきた。

「ヴィンセント、無事だったか！？」

「当たり前だ。ゴキブリに殺されるなんて嫌過ぎるだろ」

「そういえば、政志はどうしたんだ？」

「「あっ」」

ヴィンセントと一夏が声を揃えた瞬間、気絶していた巨大ゴキブリがベエッ、と口からゲロと一緒に赤い何かを吐き出した。

「「「・・・・・え？」」」

それは政志が着ていた軍服だった。これを見たヴィンセント、一夏、箒の3人は・・・・

「兄貴ィィィィィィィ!!!」

「お前、よくも政志をっ!!!」

「出せ!口から出せェェェェ!!!」

3人は思いっきり蹴り、雪片、雨月と空裂で思いっきり攻撃をしまくって殺しだす。巨大ゴキブリは悲鳴を上げてしまって絶叫して息絶えた。

「思い知ったかゴラァ!」

「政志・・・・仇は取ったぞ!」

「・・・今更だが、殺したらまずいんじゃないのか?」

「「あっ・・・・・」」

思わず声が出て再び2人の声が重なりあう。そして後ろを恐れながらゆっくりと見ると・・・・そこには大量の地面が見えないほどに埋め尽くされた巨大ゴキブリの群れがヴィンセント達に近づいて来ていた。

「っつう訳だからヨロシク」

「いやー、悪いな。ついカッとなっちまって」

「これが若気の至りと言うものか・・・・」

《どアホーーーーーーーーーーー!!（激怒）》

謝罪する3人になせ、アル、龍鳳、クリス、ラウラ、鈴、セシリア、シャル、夜明、太陽は涙を流して怒鳴り出す。

「それより、政志さんが捕食されたというのは本当なのですか!?」

「アホかっ!いくら石化しとる言うても、政志がゴキブリにやられるわけないやろ!!」

「んなことよりどうすんだよ!!これじゃ女王を探す所じゃないぞ!!」

「仕方ない！ゴキブリごと建物を吹き飛ばすしか・・・・」

「「「「「止めんかーーーーーっ！！！」」」」」

上からセシリア、龍鳳、夜明、ラウラで、ラウラの危ない発言に連邦軍サイドのななせ、アル、龍鳳、クリス、ヴィンスが額に青筋を浮かべて突っ込む。この眼帯少女は放って置いたらガチでやりかねない。その証拠に両肩からのＧＮ粒子の放出量が上がっている。一同は連邦本部会議室に集まって大量の巨大ゴキブリを駆除している。しかし、ＩＳを使っているにも関わらず一向に減る気配がない。確かにトランザムやらを使えば纏めて駆除できるかも知れないが、そうしたら建物が崩壊する危険性がある。今でも衝撃に耐え切れなかった右側の壁が崩壊して更に巨大ゴキブリが湧いてきた。

「どうすんだよコレ！！倒しても倒してキリが無・・・・・ああああ！！」

夜明の視界に入ったのは更に勢い良く多く現れた巨大ゴキブリが共食いし始めた光景であった。

「いやあああああああああ！！とととと・・・・共食いィィィィィ！？」

壮絶過ぎる光景を目の当たりにしたシャルは絶叫して気絶する。それに続くかのように、ななせ、セシリア、鈴、ついでに虫が苦手な龍鳳も気絶して倒れる。

「おいぃぃぃ！！このタイミングで気絶すんなぁぁぁ！！」

アルが気絶したシャル達に声をかけるが、目を覚ます気配は皆無で

あった。そんな中、体力的に限界が来た箒は今にも倒れそうで、弱弱しくも二本の刀を構えていた。

「くっ・・・・こんなところで・・・・・！」

そんな箒に巨大ゴキブリ達が容赦なく襲い掛かると、箒の前に現れた一夏が雪片を振るった。

「うおおおおおおお！！」

雄たけびと共に薙ぎ払われた巨大ゴキブリ達は絶命して動かなくなる。そして一夏は力強く睨み付けた。

「俺の女に手に近づくな！箒は何が何でも、俺の手で守ってみせる！！」

「一夏・・・・／／／／」

「箒・・・・」

「こんな状況でイチャつくなぁぁぁぁぁ！！！」

見詰め合う一夏と箒に渾身の突っ込みを入れたアルの息が更に上がる。他のメンバーも息が上がっており弱音も吐き始めていた。

「あーだめだ。終わった臭ぇ・・・・・」

「軽く千匹は殺したはずなんだがな・・・・・」

「絶体絶命のピンチってやつかよ・・・・っ！」

ヴィンセント、太陽、アルは次々と巨大ゴキブリを駆除していってるが、減る気配が一向に無く寧ろ増えている気がした。

「ちぃ・・・・如何すれば良いんだ！」

徐々に絶望に近づいてきたその瞬間であった。

「ここかぁ・・・・死神のパーティ会場は？」

声が聞こえると共に背筋がゾクっとする。恐る恐る声が聞こえた方を向くと、アルケーを展開している政志がいた。だが、目が虚ろで焦点が合っておらず、ここで全員が思った。

『ヤバイ・・・・』

政志は自分に向かってる巨大ゴキブリに向かってバスターソードで薙ぎ払う。すると、口元が危なしげに歪み笑い出した。

「最高に気持ちが良いぜ！！マジで堪んねぇぞォ！！！」

「・・・・あいつ、一体どうしたんだよ？」

「恐らく・・・・恐怖が一周して、政志の頭をおかしくしたんだろう」

夜明の問いに太陽が冷静に解説する中、政志は十二基のファングで次々とゴキブリを串刺しにしていた。

「ファングファングファングファングファングファングフ

ァングファングファングファングゥゥゥゥゥ！！！！」

《・・・・・・》

悪鬼と化した政志を前に全員の口が開かない。確かに手伝ってくれるのは有難いが、そのうち自分達にも襲い掛かってきそうな気がした。だが、何もしなかったら自分達が捕食されるので、政志と共に巨大ゴキブリを駆除するのであった。

「でも、明日へと進まなきゃならない～♪」

本部がある建物から離れた砂浜で一人の少女がギターを弾きながら歌を口ずさんでいた。セーラー服を着た少女の隣には食べてる途中のカップうどんがあった。

「うん。良いフレーズだね」

どうやら少女は作詞していたようで、良い具合のフレーズに満足したのかギターをケースの中に入れてカップうどんを啜り始めた。すると、本部がある方向から爆音が聞こえたのでそちらを向くと桃色のビームが空に向かって伸びているのが見えた。

「あの粒子ビーム・・・・そうか。ななせ達が帰って来たのか」

すると、彼女の携帯から着信音が流れたので電話に出ると、向こうから少女の怒声が聞こえてきた。

【ちょっと!あんた今どこにいるのよ!?】

「別に。いつもの場所だけど?」

【あんたって本当・・・・まあいいわ。さっき学園長から連絡があって、午後からＩＳ学園の代表候補生の人達が来るらしいから、第一位のあんたは来るようにだってさ】

「ＯＫ。丁度キリが良い所で終わったから、私も戻るよ」

そう言って会話を終えた少女は携帯をポケットに戻して、うどんを再び啜り始めた。満足そうに完食すると、一本の割り箸をヒュンッと森の中に投げつけた。

「どうして本部には馬鹿しかいないんだろうね」

割り箸は森の中の一本の木に刺さっていた。体が妙に赤いゴキブリごと・・・・。

「さてと、戻るとしようか」

ギターケースと空になったカップうどんを手に少女が立ち上がると、潮風が少女の赤い髪を靡かせた。

「今日ぐらいにバレそうだな・・・・あの馬鹿兄貴に」

赤と金の瞳が、煙が上がる本部を見据える。

本部壊滅へのカウントダウン（後編）（後書き）

「連邦付属の教育機関ねぇ・・・・」

「予想通り馬鹿ばっかだな」

「素晴らしいィィィ！！君達はまさに欲望の塊だっ！！」

「茜（あかね）、天空（そら）、久しぶりだね」

「い、一夏さん！？」

「おいコラ。何でテメェらがここにいるんだよ？」

～次回～

『後輩と
妹と
アホなところは似てしまう』

お楽しみに！！

良い所も悪い所も、妹は兄に似る（前書き）

戦闘描きたかったんですが、さっさと今章を終わらせて次章を書きたいという自分がいたので、悩んだ末書きませんでした。

では、本編をどうぞ！！

良い所も悪い所も、妹は兄に似る

時は午後。巨大ゴキブリの死骸を部下に撤去させている間、政志、アル、龍鳳、クリス、そして夜明と太陽は元帥室の大型モニターを眺めていた。

『こうして会うのは久しぶりだなぁ、諸君ッ！！』

目の前の異様なテンションが高いおっさんに夜明と太陽は唖然とするが、政志達は慣れているのか平然としている。

「会長さん、相変わらずテンション高いねぇ」

『はっはっはぁっ！それは褒め言葉として受け取って置くよ、クリストファー君！！』

一々声を張り上げて喋るおっさんの名前は鴻上光生（こうがみこうせい）。彼は政志達が連邦を手中に収めてから、何故か積極的に連邦を支援するようになった。今回彼に連絡を取ったのは他でもない、夜明と太陽のことだ。

『残念だが、さすがにこの私も世界を越える術は知らないなぁ！！』

「そっか・・・悪かったな、無茶なこと聞いてもうて」

『別に構わないよ！君達の用件なら何でも聞いて上げるさ！！何だって君達は類まれ無い欲望の塊だからねっ！！！』

「・・・それは喜んで良いのか？」

政志の突っ込みに反応する訳でもなく、鴻上はモニターから姿を消した。溜息を吐いた政志は少し困った表情で夜明と太陽へと視線を移した。

「聞いての通り、これで・・・・」

「私達の世界に帰る道は途絶えたか・・・・」

政志達は夜明と太陽が元の世界に返れる方法を調べるだけ調べたが有益な情報は一つも得られなかった。そもそも『並行世界へ行く！』なんて方法があるのがおかしいのだが・・・・。

「せめて、どうやってこっちに来たかを思い出せたらな・・・・」

「何で思い出せないだよ？」

「いや・・・思い出そうとしてるんだが・・・・」

「「「「だが？」」」」

「「思い出してはいけない気がする・・・・」」

顔色を悪くしてそういう夜明と太陽に、何があったんだよと突っ込みを入れたかったがが喉元で何とか飲み込む。この時、政志だけは薄々感付いていた。百パー仕様も無いことで来たのに違いないと。

「そうえいば、あいつら何処行ったんや？」

「イッチー達のことか？確かななせがアルカディアスに連れて行くとか言ってたけど」

「・・・・アルカディアスって何だっけ？」

「「おいゴラ元帥」」

アホ過ぎるトップ４の会話を見ていた夜明と太陽はこいつらに任せてもいいのか不安になってきた。だって・・・・。

「ちょ、政志！それボクが食べようと思ってたのに～！」

「お婆ちゃんが言っていた。食事の時間は天使が舞い降りる時間だと・・・・・」

「それ絶対関係無いからな！」

「クリスッ！何でたこ焼きが無いねん！！」

目の前でクリスが用意した菓子を巡って争っていた。

「太陽・・・・俺達帰れるのか？」

「頼る相手を間違えたかもな・・・・」

馬鹿四人組に聞こえないように会話する夜明と太陽の表情から後悔の色が垣間見えた。四人は既に菓子を平らげ人生ゲームを広げている。・・・・つか仕事しなくていいのかよ。結局六人は人生ゲームを始めて今はクリスの番だ。

「アルカディアスで思い出したんだけど、あの噂聞いた？」

「あぁ、あれだろ。通った後には血の雨が降るっていう『鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）』。滅茶苦茶強いらし・・・・何で『首が吹っ飛んでスタートに戻る』なんてマスがあるんだよ！？」

「うるさいわ負け犬・・・・って俺もスタートに戻るやとぉ！！」

「おい政志！この人生ゲームやり直しが多すぎるだろ！！」

「五分の一の確率でスタートに戻るって・・・・」

「どうでもいいけど、そいつ何て名前だ？・・・・あっ、『道端で金塊を拾う』」

「「「これ作ったやつ呼んで来いやアアアァァァァァァっ！！！」」」

額に青筋を浮かべるブチ切れるアル、龍鳳、夜明の３人であった。

「ここが連邦付属の教育機関か・・・・」

「何か思ってたより普通ね」

「何を想像してたのかは敢えて聞かないから・・・・」

一夏と鈴の意見にななせは苦笑する。一夏、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラの六人はななせに連れられ廊下を歩いていた。この六人、来たは良いものをすることが無かった。なので、学園長であるルーシィに呼ばれて、未来の後輩が輩出されるであろうアルカディアスへと足を運んだのだ。そして今、ＩＳ学園に進学が決まっている者がいる学長室に向かっている。

「つまり、次期後輩に向けて何かアドバイスをしろと？」

「別にそういうのじゃなくて。単に、今から仲良くなっててもいいんじゃないかなって思っただけだよ」

そんなこんな話をしていると学長室の前に着いた。話によれば今から会う四人の内の三人はななせの友達らしい。それを聞いたラウラ達が、内心ホッとしたのは言うまでも無い。ななせがドアをノックして、その後に続くように六人は中に入った。中には窓際にある学長が座るであろう椅子にルーシィが腰掛けており、部屋の真ん中にあるソファーに三人の少女が座っていた。

「茜（あかね）、天空（そら）、久しぶりだね」

ななせの声に反応した茶髪の少女と薄い桃色の髪の少女が立ち上がった。

「ななせ先輩／ななせさん、お久しぶりです」

勝気で元気そうな少女、茜とどこかボーっとしている少女、天空は礼儀正しくななせに向かってお辞儀した。どちらも整った綺麗な顔をしており、何処かのお嬢様にも見えなくも無い。二人が挨拶をするのを見たもう一人の赤みがかかった茶髪にヘアバンドを付けている少女も立ち上がって挨拶をする。

「琴吹中将。初めまして、五反田蘭です。よろしくお願いしま――」

「蘭!?あんた何でここにいるのよ!?」

「り、鈴さん!?それに一夏さんまで!!」

「お前、聖マリアンヌ女学院で生徒会長やってたんじゃなかったのか!?」

まさか過ぎる再会に一夏、鈴、蘭は驚きの声を上げる。彼女、五反田蘭は一夏達の幼馴染、五反田弾の妹であり最近までは一夏の言う通り有名な私立の女子校に通っていた。そんな彼女が連邦の近くの学校にいるのだから驚くのも無理はない。

「いや、そのまぁ・・・色々ありまして」

頬をピンク色に染めた蘭は指もじもじさせ始めた。その行動を見た女性陣はどうして彼女がここにいるのかが大体分かったが敢えて口

には出さなかった。すると、ここでななせがあることに気付いた。

「ルーシィさん。さっきから真海（まさみ）の姿が見えないんですけど？」

「ええと、彼女ならもうじき来るはずなんですが・・・・」

ルーシィは苦笑しながらチラっと視線を茜に向けて、茜は溜息を吐くことで応えた。そのやり取りを見ていた一夏達は首を傾げて何が何だか分からなかったが、次の瞬間後ろから澄んだ声が聞こえてきた。

「悪いんだけど、ちょっと通らせてくんない？」

声の持ち主であろう少女はギターケースを肩にかけたまま、一夏達の間を潜り抜けて部屋に入った。肩までかかった赤い髪に茜と天空同様、整った綺麗な顔立ち。まさにクールビューディーを体現したような少女だった。

「相変わらず自由だね、真海は」

「ななせ、久しぶり」

ギターケースを部屋の片隅に置いた真海がななせに向き合った瞬間、一夏達の視線は真海の赤と金のオッドアイに行った。

「学園長。いつもの理由で遅れました」

「真海・・・・私はあれを遅刻の理由として認めた覚えはないんですが？」

「天空、ちょっと席寄ってくんない？」

呆れた口調で質問するルーシィを華麗にスルーする真海を、一夏達は誰かに似てる気がした。しかし、誰だかは分からず終いで、取り合えず部屋にいた全員がソファーに座った（ソファーデカ過ぎだろ）。

「皆さんにはこちらの四人を紹介したいと思います。では、まず茜からお願いします」

「分かりました。あたしはロイヤルナイツ第三位、橘茜（たちばなあかね）。よろしくお願いします」

「私はロイヤルナイツ第四位の桜田天空（さくらだそら）です。よろしくお願いします」

「私はロイヤルナイツ第七位の五反田蘭です。よろしくお願いします」

「・・・・・」

ルーシィに言われた通り、茜、天空、蘭は自己紹介をしていくが、何時になっても真海は俯いて黙ったまま。どうしたんだろ、と一夏達は思いながら真海を見ていたら、彼女の頭上にピコーンを豆電球が光った。懐からメモ帳とペンを取り出した真海を見て、ななせ、ルーシィ、茜、蘭は溜息を吐く。

「あのー・・・・真海？」

「ん？・・・・ああ、ごめん。良いフレーズが浮かんだからつい」

ななせに注意された真海は思い浮かんだフレーズを書き取った後、懐に仕舞った。やはり、一夏達にはこういうのを何処かで見たことがあったが、詳しいことまでは思い出せなかった。

「私はロイヤルナイツ第一位の山本真海（やまもとまさみ）。よろしく」

目上の者に対する物言いではないのだが、不思議と怒りが湧いてこなかった。そう感じさせる魅力的なものが真海にはあったからだ。

「じゃあ今度は一夏た――」

「いいよ、ななせ。私達この人達のこと知ってるから」

ななせが一夏達に自己紹介をしてもらおうと思ったが、真海が途中で口を挟んだ。すると、自己紹介以外に対してリアクションをしなかった天空が口を開いた。

「男性で始めてＩＳ学園に入学した織斑一夏。篠ノ乃博士の妹、篠ノ乃箒。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。中国の代表候補生、凰鈴音。フランスの代表候補生、シャルロット・デュノア。そして」

「ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・でしょ？」

事前に調べていたのか天空と茜は正確に六人の名前を言い当てた。一夏、箒、セシリア、鈴、シャルは驚いた顔をするが、ラウラだけは目をすぅっと細めて天空と茜の顔を見ていた。特に目を。

「ところで、何で蘭はここにいるんだよ？」

「ええと・・・・それは――――」

「俺が紹介したんだよ」

声が聞こえてきた方を振り向くと、肩にロシナンテを乗せた政志がドアにもたれ掛かってた。それを見た真海、茜、天空、茜の反応が・・・・。

「「「「兄貴／お兄ちゃん!?／兄さん／政志さん!?」」」」

その刹那、ななせ、ラウラ、一夏、箒、鈴、セシリア、シャル、ルーシィの時が止まった。

「・・・・ちょっと待って三人とも・・・・。今、政志のこと『お兄ちゃん』って言わなかった?」

顔を引きつらせたななせの質問に政志は面倒臭そうに頭を掻きながら答えた。

「あぁ、そうだ。そこにいる真海と茜と天空は・・・・俺の実の妹だよ」

・・・・・・・。

「「「「「「「「「「エエエエ

「お前に妹がいるなんて初めて聞いたぞ！？」

「それに三人の苗字ばらばらで、あんたのと違うじゃない！？」

「真海さんは兎も角、茜さんと天空さんの目の色が違うじゃないですか！？」

一夏、鈴、セシリアの三人がど豪い顔で政志に詰め寄った。こうなるのが予想出来ていた政志は溜息を吐いて一つ一つ質問に答えていく。

「確かに俺は妹がいるなんて一度も言ったことがねぇよ。そして、こいつらの今の苗字はどうせ適当に考えた偽名で、目に関してはカラコンでも入れてるんだろ？」

淡々と政志がそう言うと、茜と天空は目を二指でなぞった。すると、指先に政志が言った通りレンズが乗っており、二人の赤と金のオッドアイが現れた。

「流石お兄ちゃん。よく気付いたわ――」

「ルーシィ。この三人、元帥特権で退学にしてくれ」

「ちょっと待んかいゴラァァァ！！」

顔面に向かって放たれた茜のライダーキックを政志はスラリと避ける。ライダーキックはそのまま直進して廊下の壁を粉砕した。それを見たななせ達は自然と納得出来た。

『政志の妹に間違いない』

「何であたし達を退学にするのよ!?」

「なら逆に質問してやろう。何でお前等がここにいるんだ?カラコンは兎も角、偽名まで使って」

「そ、それは・・・・」

何時に無く真剣な表情の政志に茜だけでなくその場にいた者全員がたじろいでしまう。真海と茜、天空の三人は元々普通の中学に通っていたのだ。それを偽名まで使って内緒でアルカディアスに編入したのだから、政志が怒るのも無理は無い気がするものの・・・・。

「政志、一つ聞いていいか?」

この重い空気の中、ラウラが口を開いた。ラウラもラウラで真剣な表情だったので、政志とラウラ以外の者はゴクリと唾を飲み込んだ。しかし、内容は仕様も無かった。

「近い将来、この三人が私の義妹になるのだな?」

ズサーーーッ!!とギャグ漫画のようにラウラを覗く全員が扱けた。慌てて立ち上がった茜がプルプルと振るわせながら、ラウラに指を差す。

「ちょちょちょちょ、あなた、お兄ちゃんと・・・・ど、どういう関係なの!?」

「夫婦だ」

「「「「夫婦ゥ!?!?」」」」

真に受けた茜と真海、蘭、ルーシィが目を見開かせながら又もや驚嘆する。政志がジト目でラウラを見るとエッヘンと胸を張っている。これ以上ことが面倒臭くならないように否定しようとしたが、天空の一言でさらに状況が悪化した。

「兄さんと義姉さんはいつ結婚したのですか?」

「そうよ!何で妹のあたし達を呼ばなかったのよ!!」

「何か一曲歌いたかったなぁ・・・・・」

「政志さんが・・・そんな・・・・」

「言ってくれれば、連邦全員でお祝いしましたのに」

「違うからね!?政志はラウラとそんなんじゃないからね!?」

完全に信じ切っている天空、茜、真海、蘭、ルーシィになせが否定の突っ込みを入れるが全く効果無し。ことの発端であるラウラは、

「義姉さんか・・・いい気分だな」

感傷に浸っていた。

「あのなぁ・・・お前等そろそろ落ち着けよ」

政志はこの馬鹿過ぎる連中に日本海よりも深い溜息を吐く。

「俺とラウラはお前等が考えてるような関係でも無ぇ・・・・っていうか俺まだ十五歳だからな」

「「「「「あっ」」」」」

政志が日本の結婚適齢に達していないことにようやく気付いた五人。出来ることなら殴りたいが何とか堪えた政志は話を元に戻そうとしたが、何だかどうでもよくなってきた。

「とりあえず、お前等三人が勝手にここに入ったことに関してはもう何も言わねぇ。どうせ俺に言えない理由でもあったんだろ？」

黙り込んで返事を返さない真海、茜、天空を見た政志はそれを肯定の意と取った。

「ルーシィ・・・・家の馬鹿な妹達をよろしく頼むぞ」

それだけ告げた政志はロシナンテと共に部屋を後にした。数秒後、やれやれと言った感じでななせが政志の後を追うように部屋を出て、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルもその後に続く。しかし、ラウラだけは部屋に残って真海、茜、天空を見つめていた。

「ボーデヴィッヒさん・・・・だっけ？私達に何か用――」

「どうして言ってやらなかったんだ」

「・・・・何のことですか？」

いきなりのラウラの質問に真海と茜は怪訝な顔つきになるが、天空

は無表情のままシラを切ろうとする。だが、ラウラには分かっていた。

「お前達がここに入ったのは、あいつの・・・・政志の力になりたかったからだろ？」

「「「！？」」」

三人の驚いた反応を見たラウラは満足げな顔をする。蘭は何のことかサッパリのようだが、ルーシィは理解していたようで、ニコッと微笑んでいる。

「・・・・何で分かったんだ？」

踵を返して部屋から出て行こうとしていたラウラに真海が声を掛けると、ラウラは振り返って誇らしげにこう言った。

「ただの勘だ」

その言葉に、茜、天空、蘭、ルーシィが口をポカーンと開けている中、真海だけはラウラが部屋を出て行った後を興味深そうな表情で見ていた。

「ななせの他にも兄貴の嫁候補がいたとは・・・・。こいつは面白いことになってきた」

変なところが兄に似た真海さんであった。

良い所も悪い所も、妹は兄に似る（後書き）

「別にいいよ。鈴木のこと、嫌いだもん」

「どうやったら本人の前であんなことが言えるんだ？」

「おい政志。何でお前さっきから琴吹に睨まれてるんだ？」

「また亡国工業のやつらが攻めてきたか・・・・ハイパーフルボッコ決定だなこりゃ」

「ななせは可愛いんだから、笑顔でいればいいんだよ」

「家の生徒に手ぇ出すとは良い度胸じゃねぇか」

「今年こそ、鈴木と仲良くなるんだからっ！！」

～次回～

『特別番外編』

お楽しみ！！

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（前編）』（前書き）

『ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼』から月光夜明と夕暮太陽

『ＩＳ　インフィニット・ストラトス　騎士と道化の夢』から遊佐秋水

『インフィニット・ストラトス　幼馴染と親友と学園で』から神代宙と雅智花

上記の作品から計四人がゲストとして参加しております。

キャラの貸し出し、誠にありがとうございました。

では、特別番外編どうぞ！！

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（前編）』

ここは私立無限成層高校、通称無限校。段々と温かくなってきた五月の梅雨頃、突然降って来た雨のよって外は薄暗い。放課後。とある教室に八人の女子が雨が止むまで少し待とうと言いながら、どうでもいい話をしていた。

「ねえ、ななせって誰が好きなの？」

そんな中、突然鈴がそんなことを言い出したのでななせの心臓が跳ね上がった。他の女子も興味津々のようでニヤニヤしながらななせに視線を移す。

「いい加減吐いたらどうなんだ。私達は全員話したのに、お前だけまだ聞いてないんだぞ？」

箒にそう言われたななせの胃がぎゅっと縮まる。

「・・・・あたしは」

渇いた小さな声が零れる。恋する乙女であるななせにも好きな相手はいるのだが、何て言うか彼女は・・・・。

「好きな奴なんていないよ」

素直じゃ無かった。それを聞いた一同はやはりと言った感じになるが、ななせの告白はまだ終わっていなかった。

「嫌いな奴ならいるけど・・・・」

「それは、一体誰ですの？」

セシリアにそう聞かれたななせは顔をがちがちにこわばらせ、その名前を口にした。

「鈴木政志」

それを聞いた瞬間、意外な人物の名前が出たことに目を丸くして、一部の女子は溜息を吐いた。

「そうかなぁ？鈴木君って確かに見た目はちょっと怖いけど、嫌われるような人じゃないと思うけど」

「人当たりも良くていつも男子の中心にいるし、頼れるお兄さんみたいな感じ？」

「ヲタクなのがあれだけどな」

「兎に角嫌いなの。いっつもアニメばっか見てて、何考えてるか分からないし・・・・正直気持ち悪い」

シャル、鈴、箒の言葉を全面否定するかのようになななせは嫌々しく言葉を紡ぎだす。その時、ガラッと音がして教室の引き戸が開いた。そこに立っていた人物を見て、ななせの喉元が息で詰まる。

「ん？あぁ、悪い。邪魔しちまったか」

絶賛話題中の鈴木政志その人であった。本人登場によって女子勢がこそこそと目をそらしているのを不思議そうに見ていた政志の後ろ

から二人の男子が出てきた。

「おい、政志。さっさとプレイヤー取って来いよ。アル達待たせてんだから」

「つうか。いい加減に学校でアニメ見るの止めろよな」

頭を掻きながら面倒臭そうに言っている夜明と呆れたように尤もなことを言っているのは宙。二人に即された政志は自分の机まで歩いていき、プレイヤーを鞄の中にしまう。

「じゃあな」

それだけ告げた政志は手をヒラヒラ振りながら夜明と宙を連れて教室を後にした。三人の姿が視界から消えると、女子勢から安堵の息が漏れる。

「あ、焦りましたわ・・・・」

「鈴木君、僕達の話聞こえてたかな?」

「そうだとしたら、あんなに堂々と入ってはこれないだろう」

「・・・・」

セシリア、シャル、箒が会話する中、ななせは唇を噛んだまま黙っていた。そんな彼女を見たラウラが、

「安心しろ、ななせ。鈴木は聞いていないぞ」

と、明るく肩を叩いた。ふんっ、と鼻を鳴らせたななせは俯きながらぼそっと言った。

「別にいいよ。嫌いなやつに聞かれても、平気だもん」

「なぁ、お前どうして琴吹に睨まれてたんだ？」

政志、夜明、宙が階段を降りていたら、ふと夜明がそんなことを政志に聞いた。夜明が見た限り、政志はず～っとななせに睨まれていた。

「知るかよ。俺が聞きてぇぐらいだ」

「知らないって・・・お前と琴吹って生徒会の副会長だろ？」

「宙、前にも言っただろ?俺はあいつと違って楯無に無理やり入れられたんだって」

「あれには腹抱えて笑っちまったぞ。立候補もしてないお前が当選してたんだからな」

夜明が懐かしそうにそう言うと政志は溜息を吐きながら米神を抑える。不幸にも、無双乙女こと更識楯無に気に入られた政志は勝手に生徒会に入れられてしまったのだ。

「でも、お前ってあんまり仕事してないよな?」

「はぁ?バリバリやってるだろ、害虫駆除」

「確かに、やってるな・・・・」

「・・・あぁ。ついでに俺達も・・・・」

ここでの害虫駆除は無限校に悪影響を及ぼす者をボコボコにすることである。どう考えても副会長がすることではないのだが、政志達がこの仕事をし始めてから校内から不良と思しき生徒が減ったのだ。この九人だけに。

「あっ。政志達が来たよ」

「やっと来たか。ったく何してたんだよ?」

「プレイヤー取りに行くって言ってたけどな・・・・」

「言うてやんなや秋水。この馬鹿の脳味噌はスプーン一杯分ぐらい

しか無いんやから」

「俺達も案外似たり寄ったりだと思うぜ？」

「それに俺も入ってるのか？」

下駄箱に付くと六人組みが廊下に座って集っていた。クリス、アル、秋水、龍鳳、ヴィンセント、一夏は政志達が来ると腰を上げて傘を手に持つ。男子生徒の中でこの九人だけが学ランの前を全開にしており、下に着ているTシャツは色取り取り。正直、ぱっと見不良にしか見えない。基本的に無限校は服装の規則に関しては特に縛りは無いのだが、政志がとある度が過ぎた不良をフルボッコにしてから、他の男子生徒は自然と学ランのボタンを全てとめるようになったのだ。間違えられて病院送りにされないように。

「待たせちまって悪ぃな」

「ったく、いいから早くマック行こうぜ？腹減ったんだから」

「アルってそんなにマック好きだっけ？」

「アッキー・・・この俺ほどのマック好きはこの学校にはそうそういないぜ？」

規模の小さい自慢をする馬鹿を無視して一同は靴に履き替えた。外に出ると雨が降っており九人はそれぞれ傘を差す。

「んじゃ、馬鹿のお望み通りマックにでも行くか。勿論、アルの奢りでな」

「「「「「「「「賛成～」」」」」」」」

「コラァ、政志ィ！！お前等に食わせたら財布の中身が全部吹っ飛ぶわーーっ！！！」

「行くぞ野郎共ッ！！」

「「「「「「「「「よっしゃあああああああ！！」」」」」」」」」

「・・・・もういいッス」

この日、アルの財布からお金と言うものが全て消えた。

一方なな せ達は、雨が中々止まないので渋々傘を差して帰ることにした。帰宅中にも、再びどうでもいい話をしながら十分近く歩いて

いると、公園前の分かれ道で一旦止まった

「私達はこっちだからな」

「じゃあ、また明日」

家の方向が違うラウラ、箒、セシリア、鈴、シャルはそこでななせ達と分かれた。視界から完全にラウラ達が消えた途端にななせは傘を差したまましゃがみこんだ。

「太陽、智花・・・・。あたし、もう駄目・・・・」

俯いたななせから弱弱しい声を聞いた二人は溜息を吐いた。

「全く、何であんなこと言ってしまったんだ?」

「素直じゃ無いのも、ここまできたら病気に近いね・・・・」

腕を組んで呆れた視線でななせを見下ろす太陽と顔を引きつらせる智花。

「どうしよう・・・・。鈴木に、嫌われちゃったかな・・・・?」

「あれで好感を持つのは馬鹿(アル)ぐらいだろうな」

「少なくとも、鈴木君は心地よく思ってないと思うよ?」

超特大の溜息を吐いたななせは重い腰を上げる。その表情は後悔で曇っており、とぼとぼと四歩ほど歩いた。

「鈴木が生徒会に入れられると知ってお前も副会長になったのに、未だに進展が無いとはどういうことだ？」

「それは・・・・」

「まぁ、本人を前にしたら素直になれないのは分からないこともないけど・・・・」

「ハッキリ言って、ななせのは酷過ぎる」

ななせのライフポイントが零になった。

「とりあえず、私達は今まで通りお前を応援するから、頑張ってくれよ？」

「・・・でも、どうしたらいいの・・・・？」

「前から言ってるでしょ？ななせは可愛いんだから、笑顔でいればいいんだよ」

「そうかなぁ・・・・」

「お前が素直になるのかならないかで、鈴木との仲が決まるのを忘れるな」

「じゃあね、ななせ。また明日」

「うん・・・・また明日」

ショボンとなったななせを置いて太陽と智花は自らの家へと歩いて

行った。一人残ったななせは家に帰ろうとせず、公園の屋根があるベンチに腰を降ろした。

「違うの・・・・あたしは、鈴木のことが好きなだけなの・・・・」

彼女の初恋は入学式の日に始まった。美人でスタイルのいいななせは、柄の悪い三年の男共に目を付けられた。

『ね～ね～、君可愛いね～。もしかして一人？』

『入学してばっかだと知らないことも多いだろうから、手取り足取り教えてあげるよ』

『べ、別に結構です・・・・っ！』

廊下でななせは六人の男に囲まれていて周囲にも人もいたのだが、見て見ぬ振りをしていた。もうここまで話せばこの後どうなるのかは想像出来るだろう。ここであの破壊神が通りかかったのだ。

『人が気持ち良くアニメ見てんだから静かにしろよ』

『ぶぎゃっ！』

『ぴぎっ！』

『ぐヴェっ！』

『どぼっ！』

『ぼはっ！』

『ひでぶっ！』

携帯に繋いでいたイヤホンを外した政志は六人を容赦なく窓の外に蹴り飛ばした。周りの生徒が悲鳴を上がるが、政志は気にしなかった。突然過ぎる出来事にななせは唖然とするが、政志が歩き出したのを見るとハッと意識を取り戻した。一言お礼を言おうとしたが、政志は再びイヤホンを耳に付けており声を掛け辛かった。しかし、そんな彼に勇敢にも近づく者がいた。

『おい政志。早く帰ろグベホォォォォ！！！』

肩を触れられた瞬間、政志は金髪の男に全力の蹴りをお見舞いした。金髪馬鹿ことアーノルド君は壁をぶち破って外に吐き出された。

『気のせいか・・・星が見えるぜ・・・・』

初めて会ったななせですら、アルが馬鹿だと分かった。

「今になって思うと、ベタな惚れ方しちゃったな・・・・」

まるで何処ぞのヒーローみたいな政志を好きになった自分に自嘲の笑みを浮かべる。政志が生徒会に入ると知ったななせは少しでも仲良くなろうと自身も生徒会に入った。しかし、政志は生徒会に顔を出さず、友達と不良をボコボコにしていた。漸く出来た繋がりも簡単に切れてしまった。そして、念願叶って二年で同じクラスになったのは良かったが、休み時間は男友達と話をしているか、アニメを見ているかで話すことすら出来ない。いや、話掛けれないと言った方が正しいだろう。それでも何度か話掛けようとしたが、全て失敗に終わっている。しかし・・・・。

「でも、太陽と智花が応援してくれてるし・・・・頑張らなくっちゃ」

恋する乙女の力は底知れず、諦めると言う言葉を知らない。

「明日こそ、鈴木と仲良くなるんだからっ」

バッと立ち上がったななせの表情には気合が入っており、戦士のそれを纏っていた。

「まずは今まで睨んできたこととか謝ったほうがいいかな?」

早速色々と策を練りだしたななせは修学旅行を楽しみにしている子どもにも見える。しかし、公園を出た瞬間、彼女の元にトラブルが転がり込んだ。

「お前、無限校の琴吹ななせだな?」

嫌な予感がしつつも振り返ると、灰色のブレザータイプの制服に身を包んだ女性がおり、その周りには同じ制服を着た柄の悪そうな男が数人いた。

「あなた・・・・誰?」

「そりゃ知らないのも当然だよなぁ!亡国工業高校副会長のオータム様って言えば分かるかぁっ!?」

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（前編）』（後書き）

一話で収まりきらなかっただと・・・・！？

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（中編）』（前書き）

二部で収まりきらなかっただと・・・・！？次こそ決着を付けてやる！！

本当にすみませんｍ（＿＿）ｍ

では、特別番外編をどうぞ！！

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（中編）』

亡国工業高校はこの町の不良の八割を占めている。無限校の生徒も割上げやら虐めで被害を受けていたのだが、政志が副会長になってからは急減した。しかし、その代わり政志が不良達の目の仇にされるようになったのだ。本人曰く、気にしてないようだが・・・・。

「あたしに・・・・何か用ですか？」

そんな危険な学校の副会長に話しかけられたのだ。何か用があるはずなのだろうが聞かずにはいられなかった。

「大有りに決まってんだろ！お前んとこの鈴木に、私達の生徒が何人やられたと思ってんだぁ！？」

オータムは蛇のような邪悪な表情でななせに怒声を浴びせる。この瞬間、体の細胞が『逃げろ』と警告してきたのでオータム達に傘を投げつけて走り出した。

「この・・・・っ！糞餓鬼がぁぁ！！」

視界を一瞬だけ奪われて、ななせが逃げたのに気付くのに反応が遅れてしまったオータム達は、ド豪い形相でななせを追いかけ始めたのだった。そんな顔で追いかけられたら嫌でも捕まるわけにもいかず、ななせは無我夢中で走る。

「もう勘弁してよ・・・・・っ！！」

そんな願いを聞き受けるはずも無く、鬼ごっこは続くのであった。

「今月分の小遣いが・・・・一瞬で消えた・・・・」

財布を逆さにしても埃一つ出てこない。その財布の持ち主のアルは口から魂が抜け出しており真っ白に燃え尽きていた。

「ったく。たかがマック奢ったぐらいで情けない顔してんじゃねぇぞ。もきゅもきゅ」

「ホントホント。もきゅもきゅ」

「もきゅもきゅもきゅもきゅもきゅもきゅ」

「お前らは食い過ぎなんだよォォォォォ！！！」

店内で食べただけでは物足りず、持ち帰りの分までアルの金で買ったハンバーガーを夜明、宙、政志が頬張っていた。夜明と宙は自重して十個ぐらいなのだが、政志に至っては・・・・。

「政志・・・お前が五十個も注文したせいで、俺がアルに金を貸すことになったんだぞ？」

情けないことに、政志の五十個がアルの財布に留めを差し、金が足りなかったので秋水に借りたのだ。遠慮という言葉を知らない政志は清々しい表情で次々とハンバーガーを食べていた。

「お婆ちゃんが言っていた。男はクールであるべき・・・・沸騰したお湯は蒸発するだけだってな」

「それ全く関係あらへんからな・・・・」

龍鳳の突っ込みに賛同するかのように夜明、宙、秋水、一夏、アル、クリス、ヴィンセントは苦笑する。

「で、これからどうするの？」

「いつもみたいにゲーセンで良いんじゃねえのか？一人貧乏人がいるけど」

「また金貸そうか？」

「そこまでして遊ぼうとは思わねぇよ・・・・」

トホホとほろり涙を流すアルを諸悪の根源である政志はもきゅもきゅさせながら見ていた。罪悪感の欠片も感じられない満足げな表情

にイラッとしたが、返り討ちにされるのがオチなのでアルは拳をフルフル震わせている。

「じゃあ今日はここでお開きとしますかって政志？」

流石にこれ以上アルに借金をさせるのも可哀想なので夜明がそう言いったのだが、政志は立ち止まって皆が歩いている方向とは逆の方向を向いていた。

「悪ぃ・・・・用事思い出したから先に帰っててくれ」

申し訳なさそうにそう告げた政志は器用にも右手で傘と鞄と紙袋を持ち、左手でハンバーガーを食べながら歩き始めた。

「またメンドクセェことになってきやがった」

溜息を吐いた視線の先では、大勢の亡国工業の生徒が走っていた。

それもド豪い形相で・・・・。

「こ、ここまで来れば大丈夫だよね・・・・？」

何とかオータム達を振り切ったななせは人気の無い河川敷の鉄橋下で雨宿りをしていた。体は汗と雨でべっちょり濡れており、すぐにでも帰りたかったがオータム達に見つかったら何をされるか分からない。なので外が暗くなるまで待つことにした。

「どうしてこんなことになっちゃったんだろ・・・・」

壁にもたれ掛かって灰色の天井を見上げる。折角明日から頑張ろうとしてたのにいきなり出鼻を挫かれた感ＭＡＸな今の状況を不運と言わずに何と言えばいいのだろうか？寂しさを紛らわせるために携帯のフォルダを開きコッソリ撮った政志の写真を見つめるが、時間が経てば経つほどそれも虚しくなって来る。

「鈴木・・・・」

携帯を両手で握りしめてボソリと呟いたと同時にジャリッと誰かが近づいてくる音がした。

「手間取らせやがって、ようやく見つけたぞ？」

足音の持ち主であるオータム達はニヤニヤと笑みを浮かべながら歩み寄り、ななせはすぐに反対方向へ逃げようしたが、

「おおっと、もう逃がさねぇぞ」

パチンと指を鳴らす音が響くと反対方向のみならず、わらわらと大勢の亡国工業の制服を着た柄の悪い男が現れた。必死で逃げ道を探すが一面に広がる男たちのせいで完全に袋の鼠と化していた。

「・・・あたしをどうしてようっていうの？」

この状況化でも聞かずにはいられなかったななせがそう言うと、オータムはもうななせが逃げられないと分かってか余裕の笑みでななせを見下した。

「簡単な話だ。鈴木と同じ無限校の副会長であるお前を餌に、あいつを誘き寄せようっていうだけだ」

「・・・呼んでどうするつもり？」

「そんなの決まってんだろ？もう二度と家の生徒に手を出せないように叩き潰すのさ。そうすりゃ、以前のように私達は好き勝手出来るってわけ何だよっ！」

「でも、残念だったね・・・・。あたしなんかじゃ鈴木は来ないよ？」

「ハッ。ならお前には、今まで鈴木にやられたやつらの慰め物になってもらうだけだ」

オータムが口元を三日月に歪めると男達は舌を舐めずり出した。何をされるのか理解したななせはゆっくりと近づいてくる男達に対して恐怖を抱く。涙目になりながら足を震わせるななせに男達の下衆い視線が注がれる。

「こ、来ないで・・・・っ」

後ずさりして背中に当たったコンクリートの壁が妙に冷たく思えた。必死に絞り出された小さな悲鳴を無視してゲヘヘと下品に笑う男がななせの胸に手を伸ばしたその時。

「どうやらゴミは死ななきゃ治らねえようだなぁ？」

次の瞬間、凄まじい音が周囲に響いて、ななせに触れようとした男が壁から吹き飛んだ。男はそのまま仲間の頭上を通り越し、川へと叩きつけられる。

「・・・・な、何だ!?」

額から血を流し川に流される男を唖然とした表情で見ていた亡国工業の者達は、慌ててななせが背を預けている壁に視線を向けた。するとどういうわけか、壁から赤い傘が生えていた。ななせが自分の真横から生えている傘を恐る恐る見ていると、傘が引っ込んでいく。訳が分からない状況に困惑していると沈黙をブチ破るが如く、傘が生えていた隣の壁がぶっ飛んだ。

「ゴヴェッ！」

「グヘェッ！」

壁の破片は亡国工業の者達を襲い、ななせ以外の人間は壁から距離を取る。

「前にも忠告したはずだ・・・・。家の生徒には手ぇ出すなって」

分厚いコンクリの壁に穴を開けた張本人がつかつかと入ってくる。右手には鞄、左手には先ほど壁から生えていた赤い傘が握られていた。この状況には不釣合いな格好だが、その者の顔を見た亡国工業の者たちは背筋が凍った。

「鈴・・・木？」

ななせに弱弱しく呼ばれた無限校副会長こと、破壊神、鈴木政志はななせをチラリと横目で見た後、すぐに亡国工業の連中に視線を移す。

「死にたい奴は掛かって来い。言っておくが、今の俺は・・・・もう自分を抑えられねぇぞ！」

触れると死が訪れそうな空気を纏った政志に亡国工業の男達は泡を吹いて卒倒し始めた。数秒後には１００近くいた男達は全て地面とキスしており、立っているのオータムだけだった。

「お、おいテメェら！しっかりしやがれ・・・・っ！」

声を張り上げてはいるが政志の殺気に耐えて立っているのがやっとであった。そんなオータムに向かって政志は歩を進める。

「く、来るな・・・・っ！」

オータムは声を震わせながら後ろに下がろうとするが、倒れている男に躓いて仰向けに倒れてしまう。すぐに立ち上がって逃げようとするが体が動かなかった。

「今度また琴吹に手ぇだしてみろ。生まれてきたことを後悔する破目になるぞ?」

冷たい怒りの篭った瞳に睨まれたオータムはガチガチ震えながら首を上下に振る。それを確認した政志は踵を返してななせの方を向いた。大量の屍（死んでないけど）の上に立っている政志と目が合ったななせは体をビクッと跳ね上げてしまう。そういう反応に慣れているのか、政志は大してショックを受けるわけでもなくななせの元へ歩み寄った。

「・・・大丈夫か?」

「う、うん・・・平気」

変なことをされていないのを確認した政志はホッと一息つくが、ななせの服がびしょ濡れになっているのに気付き、傘と鞄を置いて自分着ていた学ランをななせに羽織らせた。いきなりのことでななせは顔を赤くさせるが学ランのおかげで体だけでなく心も温かくなるのを感じた。

「お前の家ってこの近くか?」

「別に、そんなに遠いわけでもないけど・・・近くも、ない」

こんなときですら素直に遠いと言えない自分を情けなく思ったななせだったが、

「なら、俺ん家近いから服乾かしてくか?そのままだと風邪引いちまうだろうし」

「・・・・・・・・・ふぇ？」

言っている意味が理解出来ず、思わず間抜けな声を出してしまう。今日この日までマトモに話すらしたことのない好きな相手に家に招待されたのだ。思考が停止するのも無理はない。

「どうする？やっぱ止めと――――」

「まだ行かないなんて言ってないでしょ！！」

「・・・・何怒ってんだよ？」

「べ、別に怒ってなんかないよ・・・・っ／／／／／」

顔を赤らめて言っているが全く説得力がない。この会話の遣り取りで、ななせの性格が何となく分かった政志は見えないようにクスッと笑った。政志は家に案内するため傘を差して鉄橋の下から出るがいつまで経ってもななせが付いて来ない。

「ごめん、その・・・・あたし、傘が・・・・・」

オータム達から逃げる際に傘を投げつけてしまったため今の彼女の手元には傘が無い。申し訳なさそうに俯くななせに溜息を吐いた政志は鉄橋の下に戻った。

「ったく、無いなら無いって言えよな」

ほら、と自分が持っていた傘をななせに手渡した。

「でも、そうしたら鈴木が・・・・」

「いいよ別に。それより早く行こうぜ」

濡れることをあまり気にしない政志は右手に持った鞄を肩に掛け、雨が降り注ぐ鉄橋の外へと歩き出す。ななせは手に持った傘と政志の背中を交互に見た後、深呼吸をして意を決した表情で政志へと駆け寄った。そして、自分と政志の頭上で傘を差した。

「こ、これには深い意味とかないんだから・・・・／／／／」

「・・・分かったよ。なら、俺が傘持つから」

頬をピンク色に染めたななせから傘を受け取った政志はななせと相合傘をして帰宅するのであった。しかし、そんな二人の背中を睨み付ける者がいた。

「あの野郎・・・・！私に恥かかせやがって！」

政志が遠くに行っていつもの調子を取り戻したオータムだ。顔に似合わず汚い言葉を吐きながら懐から携帯を取り出し電話を掛ける。その相手は・・・・。

「スコール、私だ。悪いが作戦は失敗しちまった」

今回のこのななせを人質にとるのを考えたのは亡国工業高校会長のスコールその人だ。

【別に気にしなくていいわ。鈴木政志が来るのは想定外だったし・・・・】

「どうして、あいつが来たこと知ってんだ？」

「どうしてって、ここから二人が歩いていくのが見えるもの」

電話と同じ声が背後から聞こえて振り返ると、金髪の綺麗な女性、オータムが立っており、その後ろには二百近い亡国工業の生徒が控えていた。

「大丈夫？見たところ手ひどくやられたようだけど」

「私は大丈夫だ。でも、こいつらが・・・・」

オータムの視線の先には未だに白目で気絶している男達。これを見ただけで政志の恐ろしさが分かるはずなのだが、スコールは違った。

「安心しなさい。仇は討つわ」

「でも、どうやって・・・・」

「私が何の策も無しで来ると思った？」

スコールが意味深な笑みを浮かべると、彼女の後ろからサングラスを掛けた四人の女生徒が出てきた。

「なぁんだ、副会長やられちゃってんじゃん。だから最初からウチらに任せとけば良かったのに」

「輝火の言う通り、こいつらだけで鈴木に勝てるはずがない」

「・・・・恋達だったら、勝てた」

「お久しぶりです、副会長」

輝火、マドカ、恋、アリス。亡国工業高校一年のこの四人組はスレイヤーズと呼ばれる亡国工業が誇る最強の戦力である。つい最近までは暴行事件を起して停学処分になっていたのだが・・・・。

「K、M、R、A・・・・！てめぇらいつのまに学校に戻ってきたんだ！？」

「本日をもって停学期間が終了しました」

亡国工業の全戦力が揃ったことを聞いたオータムは邪悪な笑みを遠くの政志となせに向ける。

「待ってろよ、鈴木政志！さっきの借りをすぐ返してやるぜ！！」

「行くわよ、皆！鈴木を倒して、私達が最強だということを思い知らせてやるのよ！！」

《応！！！》

勢い付いた亡国工業の生徒達は政志となせに向かって走り出そうとした。しかし、その刹那鉄橋の上から八つの影が降りてきて、オータム達の前に立ち塞がった。いきなり上から人が飛び降りてきたことにも驚いたが、何よりも驚いたのがその面子だった。

「月光夜明、神代宙、遊佐秋水、織斑一夏、アーノルド・ギアナ、龍鳳・クシュリナーダ、トールギス兄弟だと！？どうしてここにいるんだ！！」

「残念ながら、私達もいるぞ」

声が聞こえた瞬間、壁が吹き飛んで政志が空けた穴とは別の穴が出来上がっていた。その穴から出てきた人物を見た瞬間、マドカ達の表情が強張った。

「夕暮太陽・・・・っ！」

しかし、出てきたのは太陽だけでなく他にも六人の女性がいた。

「雅智花、ラウラ・ボーデヴィッヒ、篠ノ乃箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア・・・・」

「無限校の強者がこれほど集まるとは・・・・」

「別にいいじゃん。面白くなってきたし」

「・・・・敵、全員倒す」

思いがけない者達の登場にマドカ、アリス、輝火、恋は身構える。

「私の大事な親友に手を出したんだ・・・・お前達の命じゃ償いきれないぞ」

ゴキバキと女性の指の関節からは聞きたくない音を鳴らす太陽に、賛同するように智花、ラウラ、箒、セシリア、鈴、シャルは亡国工業の連中を睨み付ける。それを見た夜明達は顔を見合わせながらニッと笑う。

「今日でケリ着けようぜ、亡国工業！！さあ、おｍ――――」

≪お前達の罪を数えろ！！！≫

「・・・・・これって新手の虐めじゃね？」

台詞を盗られ、一人しょぼくれるアルを他所に夜明達は亡国工業達に向かって突っ込んでいくのであった。

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（中編）』（後書き）

どうでもいいですけど、次章予告（ネタバレ多少含む）を書くか悩んでます

本編の内容を思い出してもらう意味を兼ねて特別番外編の次に投稿しようと思っているのですが、どうでしょう？

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（後編）』（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ありません

なんせこの番外編、ノープランで書いたので・・・・

では、本編をどうぞ！！

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（後編）』

とうとう始まってしまった無限校と亡国工業との血戦。しかし、１５ｖｓ２００ｏｖｅｒにも関わらず無限校勢は圧倒的な強さを見せていた。

（※ここからは血肉が飛び散るシーンが多いので、音声のみでお楽しみください）

「ハハハハハーッ！超兵復活といこうぜぇ！！」

「何で人格変わってんグビャアアアア！！！」

「高濃度圧縮粒子、完全開放！！」

「何か丸いエネルギー弾がああああああああ！！！」

「行けよ、ファング！！」

「ふぎゃあああああああああ！！！」

「トランザムバーストッ！！」

「何で人の体が量子化してんドベシィィィィィィィ！！！」

「これが私の全力全壊！スターライト・ブレイカァァァァァァァァ！！！」

「なのは様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「くっ！まさかここまでの強さとは・・・・！今日は退くわ！戦略的撤退よ！！」

数分にして１５０以上の亡国工業の者達が屍（死んでないけどね）と化した。それに比べて無限校の者達は掠り傷すら負っておらず、余りにも分が悪いと判断したスコールは動ける者を引きつれて河川敷から走り去って行った。

「どうして弱いくせに掛かってくるかね」

「そりゃ馬鹿だからじゃねぇのか？」

「もお、あいつらのせいでビショ濡れじゃない」

「怪我するよりかは幾分マシだよ」

宙、ヴィンセント、鈴、シャルが逃げ行く亡国工業の連中を見て感想を述べる。

「んにしても、政志があんな風にキレるところ初めて見たぞ」

ふと、一夏がそんなことを言った。今まで無限校の生徒が亡国工業の生徒に虐められているのを何度か助けたりしたことはあったが、今日のように殺気を発してまで怒るようなことは無かった。

「イッチー、お前知らないのか？」

目を覚まそうとしている亡国工業の生徒に蹴りを入れるアルの表情は呆れていた。その彼が持っている財布が何故か分厚くなっているのは気のせいだと信じたい。

「おいアル。それ言うたら政志に殺されるぞ？」

何か言おうとしているアルを龍鳳が止めようとするが、ヲタク全開の政志に知られたくない秘密でもあったかを一夏達は思い出す。しかし、これといって思い当たるものがない。

「別にいいんじゃない？本人達にバレなかったらいいだけだし」

「お前ら、さっきから何三人だけで盛り上がってんだ？」

「あのね。実は～」

笑顔全開のクリスにその場にいた者全員が耳を傾けるのであった。

一方、政志とななせは。

「「・・・・・」」

喋れよ、と突っ込みが入れたくなるぐらいに会話が無かった。ななせは相合傘をしていることにより、嬉し恥ずかしで顔を赤らめて黙り込んでいる。しかし、余りにも長い沈黙に気まずさを感じたななせは政志に話しかけようとするが、つい自虐的な考えが浮かんでしまう。

「（でも、さっきから鈴木喋らないし・・・・。もしかしてあたしなんかと一緒の傘使うの嫌なのかな・・・・・？）」

そんな風にななせがシュンとなっていると政志が足を止める。ななせも足を止めて横を向くと一軒の家が建っていた。

「俺の家ここなんだ。少し狭いかもしんねぇけど我慢してくれよ？」

住居者が狭いなどと言っているが『鈴木』と札が付いた家は三階建てで奥行きもかなりある。ぶっちゃけ滅茶苦茶デカイ家だった。屋根で傘を畳んだ政志が玄関の鍵を開けようとすると、

「ちっ。真海の奴鍵閉めるの忘れやがる。ったく仕様が無ぇ奴だな」

「・・・真海って、誰？」

「ああ、俺の妹だよ。他にもいるんだけど、今頃学校で部活やってんだろ」

「へぇ・・・そうなんだ」

ななせはほっとして胸に当てていた手を撫で下ろす。知らない女性の名前が出てきたので一瞬焦ったが、妹と知って安心した。家の中に入ったななせは、政志が出してくれたスリッパに履き替える。

「（よ、よく考えたら・・・あたし、男の人の家に来るの初めて・・・）」

今更そんなことを考え始めたななせの心拍数は急激に上がり出した。自分の後ろにいる女性がそんな状態になっていることになど気付かず政志は廊下の奥にある部屋を指差す。

「あそこの部屋に洗濯機があって、その奥が風呂場になってる。タオルは棚に積んであるやつ使ってくれ」

「う、うん。ありがと・・・・」

ななせから学ランを返して貰った政志は廊下のすぐ隣にある部屋へと入って行った。一人廊下に取り残されたななせは緊張しながらも奥の部屋へと入ると、そこには政志が言ってた通り脱衣所と洗濯機があった。

「（ここで鈴木も、着替えてるんだよね？）」

そんなアホな事を考えながら洗濯機を操作する。この際、ななせは後々面倒なことになるミスを犯したのだが、妄想にふけこんでいる彼女がそれに気付くはずも無かった。服だけだけでなく体まで濡れていたので、肌寒さを感じていたななせはすぐに風呂場に入ってシャワーを浴び始めた。

「ふぅ～っ」

何故かいつにも増してシャワーが心地よく感じる。熱めのお湯を浴びたななせの体の芯は早く温まりきって風呂場から出た。棚の上に積み上げられているタオルで頭を拭き、後何分ぐらいで乾燥が終わるのかを見たら、

『残り１８０分』

「・・・・・・・・・えっ？」

そんなクソ長い時間に設定した覚えは無く、すぐに停止させようと

操作するが、

『残り３６０分』

倍になった。完全にお手上げ状態になり政志を呼ぼうか考えたが、今の自分はタオル一枚しか身に付けていない。

「・・・・どうしよう」

何とかならないかと辺りを見渡すと部屋の片隅に洗濯籠があった。

「何も着ないよりかは、マシだよね・・・・？」

ゴクリと唾を飲んだなせは洗濯籠に手を伸ばすのであった。

「まさかダンブルドアが死ぬとは・・・・」

ソファーに腰掛けた政志は緑茶片手に『ハリー・○ッターと謎○のプリンス』を大型プラズマテレビで見ていた。因みに、この作品を見るのはこれで7回目。政志の場合、一度ハマると同じ作品を何度でも見てしまうのだ。それがアニメだともっと酷くなるのだが・・・。

「最終章は夜明達でも誘って見に行こうかなぁ・・・・ん?」

後ろのドアがガチャッと音を立てるが耳に入る。ななせが入って来たのだとは分かったが服が乾燥するには速過ぎる気もした。

「す、鈴木・・・・?あの、その・・・・」

完全にななせだと分かったが、何故か声がどもっている。不思議に思ってお茶をズズーッと啜りながら後ろを向いた瞬間、政志は噴き出した。それもそのはず、今のななせが着ているのはYシャツ一枚(実は政志の)だけ。俗世間で、裸Yシャツと評されるものだった。

「ちょ、お前っ!何てカッコしてんだよ!?」

「し、仕方無いじゃないっ!洗濯機の使い方が分からなかったんだから!!」

どこのエロゲーだよ、と心の中で突っ込んだ政志は顔を赤らめながら視線を逸らす。Yシャツの太ももら辺を掴んでモジモジさせる姿は非常に愛らしく年頃の男子には刺激的過ぎた。

「使い方が分からなかったって・・・・。じゃあ俺がやってくるか

ら、ちょっと待ってろ」

溜息を吐いた政志はソファーから立ち上がって洗濯機がある部屋に向かおうとする。ななせから視線を逸らしたまま政志はななせの脇を通って廊下に出ようとするが、その際ななせにシャツの裾を握られた。頭上に?を浮かべながら政志がチラリとななせもこちらを見ており熱でもあるんじゃないかと思わせるぐらい顔全体が紅潮していた。

「で、出来たら・・・・一人にしないで、欲しい・・・・／／／／」

上目遣いでそんなことを言われたら断るわけにもいかず、政志は黙ってソファーに戻った。

「「・・・・・」」

何とも言えない気まずさが空間を支配する。ななせは壁にもたれかかったままで、一向に口を開く気配が無かったので政志が声を掛けた。

「琴吹。そこに立ってないで座・・・・そのまま座るのは止めろ！」

政志は自分の真向かいに座ろうとするななせを全力で止めた。何故って?角度的に危ないからさ。

「えっ、どうして?」

「そりゃあ・・・・」

言った瞬間しばかれそうな気配をＮＴ的な感覚で感じた政志は喉元

まで出ていた言葉を飲み込んだ。

「い、いいからっ！」

「・・・分かった。じゃ、じゃあ・・・／／／／」

何を思ってか、真向かいに座っていたななせさんはトコトコと歩いて政志の隣に座った。確かに政志は『そのまま座るな』とは言ったが、意味が違う。目のやりどころに困った政志は視線をテレビに移す。テレビを見る政志の目は真剣そのもの。そんな政志を見たななせは、今まで疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「・・・ねぇ、一つ聞いていい？」

「別にいいけど。何だよ？」

「・・・どうして鈴木って、アニメが好きなの？」

授業中にもアニメを見ている（注意しても止めないので教師側は諦めている）政志はアキバを支配しているのではないかと噂されるされるほど。友達と話すとき以外、ずっとプレイヤーか携帯とにらみ合っている政志に一度聞いてみたかったのだ。質問をされた政志は誇らしげに笑いながらこう答えた。

「面白いから」

「でも、ヲタクって世間じゃ――」

「嫌われもんだな。だけど・・・俺は自分を偽ってまで、他人に合わせたくはねぇんだよ」

「自分を偽る・・・・？」

「考えてみろよ。たった一度しかない人生を、周りの目を気にして退屈なもんにするなんて馬鹿らしいだろ？」

何とも自由な考えただが、納得できるものが多々ある。その自由さが彼の魅力であり、自分もそれに惹かれたのだと改めて思った。ここでななせは意を決してもう一つ質問をする。

「もう一つだけ聞きたいことがあるんだけど・・・・」

「言ってみろよ」

「どうして、あたしを助けてくれたの？」

「それはあん時にも言っただろ。家の生徒がやられるのを黙って――」

「この前鈴木が無限校の生徒を助けてるところ見たけど、今日みたいに怒ってはなかったよ？」

「・・・・・」

ななせのその質問を最後に政志は黙り込む。バツが悪そうな顔をななせはジ～ッと見つめており、緑茶を一気に飲み干した政志は少し呆れた表情になりながら口を開いた。

「お前って、案外鈍いんだな」

「・・・それ、どういう意味？」

何が鈍いか検討も付かないななせは眉を細める。その反応を見た政志は地球のコアにも届きそうな深い溜息を吐いた。

「あのなぁ。ただ服を乾かすって理由だけで女を家に招くと思うか？」

「ううん。思わない」

「・・・まさか、ここまで鈍いとは」

「さっきから何なの？それよりあたしの質問に――――んっ！？」

ななせが最後まで言い切ることはなかった。何故なら、言葉を発する口を塞がれたからだ。目の前の男の口によって。

「！？！？！？」

現在進行している状況が全く把握出来ないななせを他所に政志はゆっくりと唇を離した。その真直ぐな瞳をななせはただ見つめるしかなかった。

「琴吹・・・。俺はお前のことが好きだ」

とても短く簡単な告白。しかし、その言葉はななせの心にゆっくりと染み渡って行く。すると、彼女が来ているＹシャツに水滴が落ち始めた。

「・・・何で泣いてんだよ？」

ポロポロと両目から流す涙は、頬を蔦ってシャツを濡らしていく。
何か泣かせるようなことでも言ってしまったのかと思った政志の顔に少し曇りが掛かる。しかし・・・・。

「だって、夢だったもん・・・・」

かすかに聞こえる小さく掠れた声に政志は耳を傾ける。

「鈴木と、両思いになるのが・・・・ずっと夢だったから・・・・」

この日が来るのをあの日からずっと願っていた。時には友人に相談したり、時には疑心暗鬼になったり、夢が叶うまでの道のりは決して安易なものではなかった。それが漸く今ここで・・・・。

「あたしも、鈴木のことが好き・・・・。初めて会った時から、ずっと」

自分の気持ちを伝えたななせを拭いって今出来る最高の笑みを浮かべる。その笑顔に吸い込まれるように政志は自分の額とななせの額をくっ付ける。

「俺もだよ・・・・」

二人ともクスッと笑い、自然と手を近づけてそっと握り合う。そして再び口付けを交わそうとするが、次の瞬間。

「馬鹿ッ！押すなっ――――ドギャアッ！！」

ドアが開いて大量の見に覚えのある者共が流れ込んで来た。そして、

政志と目が合った瞬間大量の汗を流し出す。

「よう糞野郎共・・・・。そんなに地獄に行きたいのか？」

背中に阿修羅や八岐大蛇やら危険極まりないものが見える政志は指の関節をゴキバキならしながらドアへと歩いていく。

「落ち着け政志、これは違うんだって！全部夜明に脅されたことなんだよ！！」

「ちょっと待てアル！俺は寧ろ止めた方が良いって言ったんだぞ！？」

「夜明、もう諦めろや。俺達全員死亡フラグが立っとるで」

「それにしても、政志が琴吹のことが好きだったとは・・・・知らなかったぜ」

「俺は大体気付いてたけど？」

「兄貴って裸Ｙシャツが好きだったんすか」

「それを早速琴吹ちゃんにさせてるところが凄いよね～」

「そんな悠長に話してる場合じゃないぞ！？」

アル、夜明、龍鳳、宙、秋水、ヴィンセント、クリス、一夏は瞬時に立ち上がって家の外へと走り出した。それを見た政志はニタァと危なしげな笑みを浮かべた後、下駄箱から釘バットを二本取り出して八人を追いかけ始めた。

「死ぬのと殺されるの、どっちが良イイィィィィィ!?」

≪どっちとも願いさげじゃあああああああ!!!!!≫

雨の中を元気に走り回る馬鹿共の叫びは家の中まで響き、ななせは苦笑する。すると、玄関とは反対側のい廊下からななせの親友達が出てきた。

「なんだ、結局上手く行ったじゃないか」

「良かったね、ななせ。鈴木君と両想いで」

「流石はななせ。手を出すのが早いな」

「ラウラ・・・・それ多分意味違うよ?」

「鈴木のこと、好きなら好きってちゃんと教えてなさいよね」

「ホントですわ」

「いいじゃないか。終わり良ければ全て良しと言うだろう?」

太陽、智花、ラウラ、シャル、鈴、セシリア、箒はニヤニヤと笑みを浮かべる。

「み、みんなどこから聞いてたの・・・・?」

「『で、出来たら・・・・一人にしないで、欲しい・・・・／／／／』からだ」

「それってほぼ全部じゃん・・・・」

恥ずかしさから俯くななせに目をキラキラさせた鈴とセシリアが顔を近づける。

「ところで、ななせは鈴木のどこが好きなの!?」

「そのあたりを教えてください!参考にしますので!」

何をどう参考にするのか突っ込みたくなるが、その質問にななせは微笑みを蓄えて答えた。

「こ、これで終わったと思うなよ!俺が死んでも、第四、第五の俺がっ・・・・!!」

「どこの魔王だよ」

ハイパーフルボッコにされた一夏達は山のように積み上げられており、政志はその上に座っている。やれやれと山から降りた政志は家へと向かって歩き出し、その後に立ち上がった一夏達が続いた。一夏が見た政志の横顔はどこか清々しく、嬉しそうだった。

「政志って、琴吹のどこが好きなんだ?」

ふとそんなことを思い聞いてみると、政志はニッと笑いながら答えた。

「「俺（あたし）がななせ（政志）の何処が好きかって?そんなの決まってんだろ（るよ）」」

「「全部さ（だよ）」」

特別番外編『ツンデレちゃんとヲタッキー（後編）』（後書き）

ようやく次から本編が書けるよ～

キャラの貸し出し、ありがとうございました！

次章予告。黙示録編（前書き）

黙示録ってどういう意味？まあいっか。

次章予告書くのか悩んだ結果書いちゃいました。

今なら言えることが一つだけあります。

次章・・・・滅茶苦茶重いです！

次章予告。黙示録編

遂に姿を現した生徒会長、更識楯無。彼女の無双っぷりに振り回されながらも、政志達は学園際を迎えた。

「ご奉仕喫茶って・・・・正気の沙汰とは思えねぇな」

「男に接客されて嬉しがる奴やおらんやろ普通・・・・」

「何で女子のメイド姿って癒されるんだろう・・・・」

「アル、そろそろ自重した方がいいよ？」

何だかんだで楽しんでいる彼らだったが、

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる六人の王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という死地に少女達が舞い踊る！」

「「「「「「誰かあの馬鹿捕まえろーーッ！！」」」」」」

完全にカオスと化した『灰被り姫（シンデレラ）』。迫り来る乙女達から逃げ切るものの、トラブルはすぐに転がり込む。

「『亡国機業』が一人、オータム様って言えば分かるかぁっ！？」

「くそっ・・・・！」

アラクネを駆るオータムに追い込まれる一夏。しかし、そのピンチ

は『破壊神の再来』によって救われる。

「家の兄貴の友達を、見捨てるわけにはいかないね」

「まさか、お前・・・・鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）か！？」

ロイヤルナイツ第一位、鈴木真海がオータムの前に立ちはだかり、黒き百獣の王を纏う。

「悪魔と相乗りする勇気・・・・お前にはあるか？」

圧倒的な真海を前に逃走するオータムをラウラとセシリアが包囲するが、新たな力を得たＡとＫが現れる。そして、その戦いの最中でラウラはＡの素顔を見て言葉を失う。

「貴様は一体・・・・」

「あなたのせいで、私が生まれることに・・・・苦しむことになったんだ！！」

さまざまな思いが交差したその日、傷ついて倒れている政志、アル、龍鳳、クリスが発見され一同は戸惑う。そんな中、翌日新たな転校生が二人来ることなった。だが、その内の一人を見た途端にななせは表情を凍らせる。

「ど、どうして・・・・だってあの時・・・・・」

「久しぶりに会った幼馴染に、その言い方はヒドイんじゃない？」

新たな転校生を一夏達やクラスの者達は心地よく受け入れるが、ラ

ウラだけは違った。そして、一向に目を覚まさない政志達を置いて次々と仲間達が倒れていく。

「覚悟だけで勝てるほど勝負は甘くないぞ、少年！」

「これがアインの発展型、シリウスの力よ」

とうとう、最後まで無事に残ったのはラウラ、シャル、鈴、セシリアの四人だけ。

「ななせ達でも勝てなかった相手に、どうやって勝てばいいのよっ！！」

「僕達の力じゃ・・・・彼女達に勝てない」

「私達に、何が出来ますの・・・・？」

「・・・・」

最強の敵を前に絶望的な状況に陥った彼女達は、未だに目覚めない愛する者を前に・・・・一体何を望むのだろうか？

「あなたのことをすっかり忘れてたわ。惰弱な脳量子波使い・・・・出来損ないの超兵」

「生きてきた！私はこのために生きてきた！どれだけまわりに罵られようと、私は今日・・・・破壊神を超える！！」

「どう？あたしを殺した気分は」

「いくら死なないって言っても、滅茶苦茶痛いんだからね？」

「ツインドライヴがあなた達だけのものと思ったら大間違いよ」

「おおっと、どうやらレディーを泣かしちまったようだな。さっさと終わらせて、抱きしめてやろうぜ」

「まさか・・・・っ！細胞分解構造を！？」

「その機体は本来あたしが乗るはずだったの・・・・・。だから、殺してでも返してもらうわ！」

「相棒・・・・。半分力貸せや」

『ハッ！ようやくその気になりやがったか。なら見せてやろうぜ！最強の』

「超兵ってやつをなぁっ！！」

「やっぱり目覚めていたのね。純粋種（イノベイター）に・・・・」

「貴様のその歪みが政志を苦しめるというのなら・・・私は只、断ち切るだけだ！！」

「全ての過去を振り切る・・・・。そして、お前を止めてやるよ！」

「ヤークトアルケー！」

「マスラオ改めスサノオ！」

「目標を！」

「いざ尋常に！」

「「破壊する！／勝負！」」

「こんな俺を、愛してくれて・・・・ありがとう・・・・・・」

絶望という名の終焉が始まる・・・・。

次章予告。黙示録編（後書き）

よーし！

次章に向けてハリキルぞーッ！！

Hの襲来／大事な物を失った男達（前書き）

ネタに走り過ぎた結果こうなりました。

後悔は・・・・・ちょっとしてます。

では、本編をどうぞ！！

Hの襲来／大事な物を失った男達

本部がある反対側の海岸線。月の光が海を照らして幻想的な光景を生み出す。しかしながら、その穏やかな光景に不似合いな影が二つ島に向かっていた。

「全く・・・本当にしつこいですよ、あなたは！」

人とは明らかに一瞥した異形が海面を凍らせてスケートのように滑る。それを追うのは五対の十枚からなる翼を持った蒼いＩＳ。異形は自らに迫るＩＳに対して腕から獄炎を放つが蒼いＩＳに容易く避けられ、逆に背中から射出された自立兵器によるビーム攻撃を受けてしまう。

「がぁっ！」

黒煙から吐き出された異形は、放物線を描いて島の砂浜へと叩き付けられる。

「・・・これで終わりだ」

蒼いＩＳを纏った者は砂浜へと降り立ち、両手の全指先からビームクローを展開させて異形に向ける。勝利を確信したはずだったが、異形は瞬時に両手を蒼いＩＳへと向けて虹色の光を放つ。蒼いＩＳの操縦者は大して驚くこともなく左手のビームクローを束ねて後ろに弾いた。しかし、再び異形に視線を落とすと姿を消していた。

「逃げられたか・・・。まあ、いいだろう。この島にいることは間違いないはずだ」

周囲を見渡して完全に異形がいないと確認するとＩＳを解除した。白いスーツに身を包んだその者の髪が潮風に揺れ、漆黒の瞳が森の向こうを見据える。

「成り行きとは言え、まさかここに来てしまうとは・・・・。しかし、これが俺の天の道というのなら、俺はただ歩むだけだ」

「へぇ、政志の妹か。会って見たかっ・・・・また死んだよ」

政志の部屋に集まって再び人生ゲームをしている男子連中。今はアルの番でどうやらスタートからやり直しになったらしい。全マスの二割がスタートに戻るマスという摩訶不思議なこの人生ゲーム。超絶的な運の持ち主であるアルは二回に一回はスタートに戻っており、

今ではもう慣れてしまったようだ。

「んにしても。男七人が集まって人生ゲームって、華が無さ過ぎるやろ」

夜遅くということもあって、眠たそうに龍鳳はコマを進める。次の番である一夏はルーレットを回して、アルのように死亡マスを踏んでスタートに戻していると、

「ところで政志。蘭を紹介したって言ってたけど、あれどういうことだ？」

「ああ、アレか。一ヶ月ぐらい前に蘭が電話で来年ＩＳ学園に入りたいって聞いから、アルカディアスを薦めたんだよ。でもまさか、早速第七位になってるとは驚いたぜ・・・・」

ロイヤルナイツの称号はその世代最強を意味するに等しい。それをたった一ヶ月で勝ち得た蘭のスペックは半端では無い。さすが政志が紹介したことはあるね、と言いながらクリスは自前の菓子をバリバリ食っていた。

「有望な後輩が来るのが楽し――――・・・・聞こえた？」

突如クリスの表情が険しくなり政志達と顔を合わせると一夏以外全員同じような顔つきになっていた。

「聞こえたって・・・・一体何が聞こえたんだ？」

「ほんの微かにだが、爆発音が聞こえたんだよ」

一人だけ付いていけない一夏に窓の外に視線を向ける夜明。政志は目を細めながら窓に歩み寄って外に顔を出す。しかし、視界に入るのは一面の暗闇に包まれた森のみ。

「何なんだ一体・・・・」

また本部の人間が馬鹿騒ぎでもしたのかと考え始めたが森の向こうで何かが光った気がした。目を凝らしてそちらを見つめ始めたその刹那。虹色の光が彼等がいる部屋に向かってきて、政志が一夏達に逃げるよう伝えようとする。しかし、その願いは叶わず彼等の視界を光が覆いつくし意識を手放すのであった・・・・。

太陽が昇り、小鳥が囀り出した朝。窓際で横たわっていた政志はゆっくりと目を開いていった。上半身を起して窓から差し込む日の光

を眩しく思っていると昨日の夜のことを思い出した。

「（あの光は何だったんだ？ちゃんと生きてはいるみてぇだけど・・・）」

まあいっか、と自己完結した政志は欠伸をしながら頭を掻く。しかし、ここであることに気付く。

「・・・・？」

髪の感触が違った。しっとりとツヤツヤしており、良い匂いがする。そもそも髪の長さから違い、髪を撫でて長さを確かめると、何と髪の長さは肩よりも長かったのだ。明らかにおかしいと思いつつも髪を目の前に持ってくると色まで違っていた。いつもの茶色より黄色みが掛かった黄褐色と呼ばれる色に近かった。

「・・・・どういうこと、ん？」

声を出した瞬間またもやおかしいことを発見した。やたらと声が高い。いつもの声を正確に覚えているわけではなかったがこの高さは異常だった。そして、自分の体を確かめようと下を向いた瞬間、政志は固まった。

「・・・・・え？」

そこにはあってはならないものがあったからだ。豊かにタンクトップを押し上げる大きな二つ山が。俗に言う、オッパイが。

「・・・・・」

五秒ほど沈黙したぐらいだろうか。政志はある結論に至った。

「何だ・・・・夢――――」

「「「「「「夢じゃねぇよッ！！！！！」」」」」」

聞き覚えの無い声での突っ込みに政志は首を傾げながらも後ろを振り向いた。すると、そこにいたのは・・・・。

「・・・・・誰だテメェ等？」

一夏達がいるはずが見知らぬ少女達がいた。しかし、彼女達が着ている服と髪の色。そして今の自分の状態からしてまさかと思いながら、一番手前にいる銀髪の可愛らしい少女に聞いてみた。

「お前・・・・夜明か？」

「・・・・あぁ。不本意ながらな」

ガチで不本意そうな目をした夜明と名乗る少女の髪は肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さであった。他の少女に目をやると、さらっとウェーブが掛かった金髪の少女、黒髪の腰まで長い髪の少女、青い短髪の少女、そして白い髪の緩そうな顔の少女に同じ顔だが目付きが鋭い少女。政志はすぐに、アル、一夏、龍鳳、クリス、ヴィンセントだと理解した。そして、今の彼等（彼女等）の胸と背について説明すると。

政志：巨乳、ラウラと同じぐらい

夜明：普通、シャルと同じぐらい

一夏：巨乳、元のまま

アル：普通、シャルと同じぐらい

龍鳳：普通、鈴と同じぐらい

クリス：巨乳、元のまま

ヴィンセント：普通、元のまま

とまぁ、こんな感じでになっている。

「それより政志。お前のその格好、色々とアレだから何とかしてくれないか？」

一夏にそう言われた政志は自分の胸を見ると、体に似合わない馬鹿デカイ胸がタンクトップの隙間からはみだしている。流石に政志もこれは目に余るものだったのですぐに軍服に袖を通した。

「で、どうする？」

「何で君がそんなに冷静でいられるのか突っ込みたいけど今は我慢するよ・・・。ボクとしては、どうしてこんなことになったのかを調べる必要があると思うよ」

「調べるもなにも、こんなことになったのは昨日の光のせいだろ？あれを浴びてから記憶がねぇんだからな」

アルにしてはまともな意見を出していることに政志は関心するが、

よくよく考えれば馬鹿でも分かることなので敢えて突っ込まなかった。

「んにしても、よりによって女になってまうとはなぁ・・・・。男として大事なもん失くした気がするで」

「いや、俺達はまだマシな方だぜ？兄貴なんか・・・・・」

ヴィンセントが憐れんだ目で政志を見ると他の五人を政志を見始めた。確かに、今の政志は可愛らしい童顔にミニマムボディ。いつもの彼とは程遠い姿になっているのだから。そんな自分の姿を鏡で見た政志は拳をふるふると震わせながらドアへと向かって行く。

「お、おい政志！どこに行くつもりだよ！？」

「決まってんだろ。俺をこんな姿にした奴を見つけて塵にしてやるんだよ」

アルの制止も聞かず可愛らしい顔には似合わない言葉を吐いた政志は窓の外に視線を向ける。

「あの光のせいでこうなったっていうんなら、それを放ったやつがいるはずだ。気を失う前、微かにだが森の向こうで何かが光ったのが見えた。だから、ちょっくら行って――」

「その格好でか？」

夜明に言われた政志はドアノブを握ったまま固まる。今このまま部屋から出て誰かに見つかった時のことを考えると、

「・・・色々と拙いな」

特になな せ達に見つかった時が、と言おうとしたその時。握っていたドアノブが回りドアが開いた。

「もお、政志？もう朝だ・・・・」

「さっさと起きろ。それでも私の嫁・・・・」

「夜明。こんなところにいた・・・・」

「夜更かしして寝坊とは。情けないぞ、一・・・・・」

「早く朝ご飯食べに行こうよ、ア・・・・」

「龍鳳。あんた一体何やっ・・・・」

「クリスさん。朝食のお誘いに・・・・」

部屋に入ろうとしたなな せ、ラウラ、太陽、箒、シャル、鈴、セシリアは中を見て彫刻と化した。見知らぬ少女達が着ている服は昨日政志達が着ていたのと同じ物。

「あ、あなた・・・・誰？」

わなわなと震える指を政志の軍服を着た少女に向けるなな せ。他の六人も中にいる少女達に向けてドス黒いオーラを放ち部屋が軋みを上げ始める。

「（またメンドクセェことになってきやがったぜ・・・・）」

いつもの口癖を心の中で呟いた政志は溜息を吐いた後、何とか事情を説明するのであった。

「「「「「「朝起きたら女になってたァッ!?!?」」」」」」

漸く政志達の状況を理解して有り得なさ過ぎる事態にド豪い声が響く。さっきからそう言ってるだろ、と元男子達はボソッと呟くのだが、ななせとシャルの目がヤバイことになっていた。

「政志が可愛い・・・・っ。お、お持ち帰りしたい・・・・」

「いつもの男の姿もいいけど・・・・こっちも・・・・」

じゅるりと涎を垂らす危険分子に背筋を凍らせる政志とアル。他にも鈴は鈴で龍鳳に詰め寄っていた。

「ちょっとあんた！どうして胸があたしより大きいのよ！！」

「知るかや！好きでこんなになったんとちゃうわ！！」

全く持って仕様の無い口喧嘩を太陽は呆れた目で見ていた。

「あの馬鹿共は放って置いて・・・これからどうするつもりだ？」

「「「「「「決まってんだろっ！！犯人見つけ出して血祭りじゃあぁぁっ！！！！！！」」」」」」

「・・・お前達がどれだけ怒ってるのかは分かったから、一旦落ち着け」

元男子七人の凄まじい剣幕に太陽はたじろいでしまう。男の姿から か弱き乙女の姿にされたのだ。怒り狂うのも無理はない。そんな馬鹿共を白い目で見ていたシャルはあることに気付く。

「でも、犯人を見つけるって言っても・・・当てはあるの？」

「恐らく、『禁じられた森』に全ての鍵はある」

≪・・・・・・・・・・何それ？≫

ドヤ顔で厨二臭いことを言う政志に全員が疑問符を浮かべる。連邦の者であるアル達も初めて聞く名前だった。ななせは苦笑いをしながら額を指で押さえる。

「政志？一つ聞くけど、それって島の反対側にある森のことだよね？」

「あぁ」

「そんな名前今初めて聞いたんだけど・・・・」

「当たり前だ。今俺が名付けたんだから」

ふっ、と鼻で笑う政志に呆れる一同。こんなやつが元帥でいいのか？と思ったが口に出した瞬間、可愛らしくなった破壊神の手によって滅ぼされそうだったので止めた。

「つうわけで・・・・行くぞ野郎共ォ！！！」

「「「「「シャアァッ！！！！」」」」」

政志の掛け声と共に部屋から出ていこうとする元男子達。しかし・・・。

「「「「「「「その格好で行くの？／行くのか？／行くのですか？」」」」」」」

「「「「「「「あっ・・・・・・」」」」」」」

デジャヴった。

あの後、話し合った結果。元男子達は本部（政志の部屋）に残ることにして、犯人については女子達に任せた。そして政志の部屋にある資料を使ってどうにかして男に戻れないかを元男子達は調べていた。しかし、一向に何も分からずじまいのままただ時は流れて行く。

「あかん。何も分からへん・・・・」

「それはいいとして、あそこで寝てる馬鹿をしばいておいてくれ。滅茶苦茶腹が立つから」

政志の視線の先にいる涎を垂らしながら寝ているアルに夜明、一夏、龍鳳、クリス、ヴィンセントの蹴りが炸裂する。

「グホォッ！！」

だが、当たり所が悪かったようでアルは再び眠りについてしまった。

まあいっかと思いながら各々は作業に取り掛かるが何も手がかりになりそうなものは見つからない。痺れを切らした一夏が頭を乱雑に掻き回して頭を抱える。

「だぁ、もうっ！何も見つかんねぇぞ！」

「落ち着けや一夏。そもそも、そう簡単に見つかるわけがないんやから」

「ったく。どうやったら男が女になれるんだよ・・・・」

「ホント、奇怪すぎるよね」

「超常現象にもほどがあるだろ・・・・」

一夏に続き、龍鳳、夜明、クリス、ヴィンセントがそれぞれ愚痴を零していく。しかし、この五人の会話を聞いて政志の中で何かが走った。

「ヴィンセント・・・・。お前、今何て言った？」

「え？いや、超常現象にもほどがあるだろ～、って言っただけっすけど」

「超常現象・・・・・まさか！」

顎に手を当てて何か思いついた政志は携帯を取り出して電話を掛け始めた。他の元男子達が何だと思いながら数秒程コールしていると、電話を掛けた相手が出た。

【はい。こちら井坂内科医院ですが？】

「井坂、俺だ。鈴木政志だ」

【あ～、鈴木君ですか。いや懐かしいですね。しかし、声が女のものに聞こえるのは気のせいでしょうか？】

「気のせいじゃなくて、女になってんだ」

【ほう。それはまた厄介なことになりましたね。で、用件はどういったものでしょうか？】

「無いと思って一応聞くが・・・・・男を女にするドーパントなんていねぇよな？」

「ドーパント・・・って何だ？」

初めて聞く単語に一夏は首を傾げる。どうやらこの案件にはそのドーパントとやらが関わっているかもしれないようだが、何のことだかサッパリの一夏にヴィンセントが解説を入れる。

「ドーパントって言うのはガイアメモリっていうもんを使って怪人になったやつのことだ。んで、ガイアメモリはあらゆる地球の記憶を収めた、十センチぐらいのＵＳＢメモリ型の生体感応端末。使用者はがそれを使うとメモリに収められていた記憶を再現出来る怪人、つまりドーパントになるってわけ」

ご丁寧な解説に一夏はへぇ～と関心する。そして再び政志と井坂の会話に耳を傾けた。

【男を女にですか・・・・そういえば、ありましたねぇ。しかし・・・・】

「しかし、何だ？」

【あのメモリはミュージアムが壊滅して他のメモリを処分した時に、ある人物が持ち去った物何ですよ。その人物の名前は一馬健一（かずまけんいち）。そしてメモリの名前は・・・・『ホルモン』】

「ホルモン・・・・だと？」

【恐らく鈴木君は、一馬のホルモンの力によって身体の様々なホルモン分子を弄られて、男から女になってしまったんでしょう。でも、ご安心下さい。メモリさえ破壊すれば元に戻れますので。しかし、一つ注意事項があります。一馬は私と同様、メモリの『地球の記憶』そのものを取り込んでいます。おおっと、どうやら患者が来たようなので私はこれで失礼させてもらいますよ】

「サンキュー井坂。今度何か奢ってやるよ」

【それは嬉しいですね。では、その時を楽しみにしてますよ】

長い通話を終えた政志は口元を上げる。可愛い容姿ということもあってより一層恐ろしげのある政志に一夏達はゾッとさせられる。そんな一夏達を尻目に政志は部屋の片隅に置いてあった金庫に目をやってニタァと獣じみた笑みを浮かべた。

「どうやら、あれの出番のようだな。こいつはオモシレェことになってきやがった」

Hの襲来／大事な物を失った男達（後書き）

「久しぶり～！ワンワン、元気にしてた？」

「何でこんなところにホワイトタイガーがいるのよ！？」

「俺の道は俺が決める。誰の指図も受けない」

「貴様・・・・ッ！どうしてここにいる！？」

「地球連邦を壊滅させて、新生ミュージアムへの手向けにしてみせましょう！」

「ここで好き勝手やりたきゃ俺を殺していけ」

【ＣＹＣＬＯＮＥ！】

【ＪＯＫＥＲ！】

「「変身！」」

～次回～

『騎士と
陰謀と
二人で一人の・・・』

お楽しみに！！

Hの襲来／乙女達の冒険とカオスな森（前書き）

ネタと本編の内容を進めるのってこんなに大変だったっけ・・・・？

ま、別にいいよね！！

では、本編をどうぞ！！

Hの襲来／乙女達の冒険とカオスな森

「ここが禁じられた森か・・・・」

「お願いだから、政志の言うこと鵜呑みにしないで」

目をキラキラさせるラウラになせは溜息を吐く。今現在、ななせを先頭にラウラ、太陽、箒、シャル、鈴、セシリアは森の中を歩いていた。一本一本の木の間が広いため、地面に日光がよく照らされて明るく見える。ヲタクの言ってた物騒な名前とは程遠いものだった。

「アル達。何か手掛かり見つけれたかな？」

「面子が面子だからな。当てにしない方がいいだろう」

シャルの質問にご尤もな答えを返す太陽。政志達と出会ってほんの数日しか経っていないのに彼等の馬鹿さを見抜いていた。・・・・前言撤回。あいつらの馬鹿さに気付かない方がどうかしている。

「いずれにせよ。私達が犯人を捕まえればいいだけの話だ」

「ラウラの言う通りよ。龍鳳があのままだなんて、絶対に嫌だし」

「私も同意見だ。早く一夏には元に戻って貰わないとな」

「そうかなぁ？僕としてはアルがあのままでもいいけど」

「シャルロットさん・・・・。本人がそれを聞いてたら、泣いてま

すわよ？」

とまぁ、そんな風に談笑しながら歩くこと十分。小屋のようなものが見え始めたぐらいで向こうから小さな柴犬がトコトコと近づいて来た。可愛いなどと内心で思っているとパァと表情が明るくなったななせが子犬の所まで走って行って両脇に手をやって持ち上げた。

「久しぶり～♪ワンワン、元気にしてた？」

「「「「「「・・・・ワンワン？」」」」」」

うっとりとした目でくぅん、と鳴く子犬を見つめるななせ。一方、ラウラ達はその子犬のものであろう名前に疑問符を浮かべる。ぽかんと口を開けて唖然としているラウラ達に気付いたななせは子犬を抱き抱えて頬擦りする。

「紹介するね。この子はあたしのペットのワンワン。この森で放し飼いしてるんだ」

子犬にぺろぺろと舐められて擽ったそうにするななせは無邪気そのものだが、ラウラ達はななせのネーミングセンスを疑う。しかし、非常に絵になっていたため何も口出ししなかった。

「ねぇ、ななせ。あんたのペットがいるってことは、龍鳳達にもいるの？」

「うん。丁度そこにいるよ」

ほら、とななせが鈴の後ろに指を差すと同時にシャ～ッと何かが鳴く音が聞こえた。非常に嫌な予感がしつつも振り返ろうとすると、

ドスンと重みのあるものが左肩に乗っかかった。びくびくしながら横目で左肩を見ると・・・・

「ギャアアアアアアア！！！」

巨大な蛇の頭が乗っていた。悲鳴を上げた猛スピードでななせの背後に隠れて、箒、セシリア、シャルもラウラと太陽の背後に隠れた。平然としているラウラと太陽はデカいな、と関心している。涙目になった鈴はギュッとななせの軍服の裾を握り締めて震えている。

「な、ななせ・・・・！？もしかして、あれって・・・・」

「うん。あの子が龍鳳のペット。アナコンダのエリザベスだよ」

ななせが手を振る相手のアナコンダことエリザベスは全長十五メートルはありそうな大蛇。そんな蛇をペットにしている者の気が知れない。ななせがおいでと手招きをすると舌を出し入れしながら寄って来た。

「ちょ、ななせ！あんた正気！？」

「大丈夫だって。エリザベス、また大きくなったね」

超絶ビビッている鈴を宥めるななせは頭を差し出したエリザベスの頭を撫でる。賢者過ぎるその行為を見ていると段々とエリザベスが気持ち良さそうにし始めた。

「鈴も撫でてあげなよ」

ななせがそう言うとエリザベスは鈴の前に頭を差し出した。躊躇い

ながらも鈴はゆっくりと頭に手を置いて動かす。すると、ななせがやったのと同様に気持ち良さそうな仕草をしたのを見た鈴の表情から恐怖が消えた。

「可愛い・・・・かも」

思わずそんな言葉を零してしまった。ななせはそんな鈴を見てクスクス笑っており、箒、シャル、セシリアも害が無いと判断したようでホッとするが・・・・。

「あと、セシリアの後ろにいるのがクリスのペットのタマだから」

「・・・・えっ？」

セシリアが驚いた刹那、彼女の隣を白いネコ科の動物がのしのしと歩いていく。それは俗に言う、ホワイトタイガーなるものだった。

「何でホワイトタイガーがこんなところにいるの！？」

「あたしが来たのに気付いたからかな？」

「「「そういう意味じゃなぁぁぁぁい！！」」」

激しく突っ込みを入れる箒、鈴、シャルとは別にラウラと太陽はデカいな、と再び関心している。そして、セシリアは突然過ぐる状況に対応し切れず石化していた。アハハと引き攣った笑いをななせが浮かべていると鳥の鳴き声が空高く聞こえた。

「あの鳴き声・・・・クラウザーかな？」

「クラウザーって？」

「アルのペットの名前だよ。ほら、あそこで飛んでるの」

空を見上げるななせと同じようにシャルは自分も空を見上げようとするが、ここで一つ疑問が生まれた。今のところ、ななせの子犬以外まともなのを見た記憶がない。そう思いつつも空を見上げると一匹の鳥が翼を広げていた。翼開張が三メートルぐらいありそうな馬鹿デカい動物界脊索動物門鳥綱タカ目タカ科オジロワシ属に分類される鳥類、オオワシが飛んでいた。

「「「「「「「「・・・・・」」」」」」」」

余りのデカさに驚いて黙っているようにも見えるが、今回はななせとラウラ、太陽も白い目になっていた。その理由は、オオワシが掴んでいるものにあった。どこか見覚えのある黒い恐竜のヌイグルミ。昨日から姿が見えないと思っていたが、漸くその訳が分かった。

「ロシナンテ・・・・何やってるの？」

いつものモフモフの姿とは程遠いズタボロになったロシナンテの両目は閉じて両手足もだらんと垂れている。死んでるんじゃね？と思わせるロシナンテはクラウザーさんと共に何処かへ飛翔するのであった。

「ロシナンテ・・・・完全にギャグキャラになってるね」

「言ってやるな、シャルロット。恐らく、あいつも気にしていることだ・・・・」

ラウラに賛同するが如く、ななせ、太陽、箒、セシリア、鈴は頷く。
まるでちょっとした動物園のような森を楽しむ彼女達だったが、ここで太陽は本来の目的を思い出した。

「なぁ。楽しむのはいいが、犯人を見つけ出すのを優先しないか？」

「それもそうだね。じゃあ、あの小屋がこの森の中心になってるから分かれ――――・・・・レンレン？」

ななせが話しているとガサガサッと草むらからやたらとデカいパンダの顔が出てきた。ななせ、龍鳳、クリス、アルのペットと来たら残りは政志かヴィンセントのペット。しかし、政志ならもっと厨二臭い名前を付けるだろうと推測した一同は目の前のパンダをヴィンセントのペットだと判断する。そしてキョロキョロした後、レンレンはななせの方に視線を合わせて草むらから四足歩行で出て来た。
しかし・・・・。

「・・・・誰？」

レンレンの背中で何者かが寝そべっていた。顔はその者が着ているスーツと同じ色の帽子で隠していたが男であることは分かった。ななせ達の気配を感じて男は帽子に手を当てたまま地に降り立った。
顔に当てていた帽子をゆっくり被り漆黒の瞳でななせ達を捉える。

「その制服・・・・ＩＳ学園の生徒か」

二十歳前半であろうその者の顔は美形と呼ばれるに相応しく、表情と相似したクールな口調で話し出す。森とは不釣合いなその格好・・・・明らかに怪し過ぎる。

「ねぇ。もしかしてこの人が・・・・」

「どうかな?悪そうな人には見えないけど・・・・」

鈴は目の前の男が政志達を女にした犯人ではないかと疑い出すが、シャルの目にはそうは見えない。取り敢えず話しだけでも聞こうとななせが前に出る。しかし、そんな彼女よりも早く飛び出した者がいた。

「貴様・・・・ッ!どうしてここにいる!?」

ラウラだ。敵意を丸出しにして睨み付けられているにも関わらず男は無表情のままでラウラと向き合う。

「見覚えのある顔だと思ったらお前だったか、ボーデヴィッヒ。黒兎(シュヴァルツェア・ハーゼ)ウサギ部隊のお前がどうして連邦の本部にいるんだ?」

「質問をしているのはこっちだッ!!」

「なら答えてやろう。俺の歩む道は天の道・・・・誰の指図も受けることのない、光輝く道だ」

人差し指を天に向ける姿からは政志達と同じ臭いがした。トラブル臭をぷんぷんと漂わせるその男をななせ達は面倒臭そうな目になる。だが、ラウラだけは今にも噛み付きそうな目をしている。今更だとしか思えないが、漸くななせはあることに気付く。

「ラウラ・・・・この人と知り合いなの?」

会話からすると何か因縁がありそうなこの二人。しかし、ラウラが

一方的に受け流されているのが現状であった。

「この男は――」

「俺は黎明と終焉を司る男・・・逢沢帝（あいざわみかど）だ」

カブトの主人公っぽいことを言う帝はななせ達の顔を一通り見た後、スーツの内ポケットから蒼鉄の懐中時計を取り出した。カチャっと中を開けて、もうこんな時間か・・・と呟く彼を怪訝な表情で睨むラウラ。

「貴様が政志達を、あんな風にしたのかッ！？」

この問いの答えはラウラだけでなくななせ達も欲していたもの。もしそうだった時のことを考えて一同は身構える。

「さぁな。どの道俺には関係の無いことだ」

刹那、ラウラから何かが切れる音がしてシュヴァルツェア・レーゲンを展開する。生身の人間相手にＩＳを使おうとするラウラをななせ達は止めようとするが・・・。

「この際だから丁度良い。お前のその力・・・見極めさせて貰うぞ」

懐中時計を手首のスナップを利かせて軽く上に投げた帝の表情に変化があった。無表情から戦士のものへとシフトさせた彼の空気に一同は戦慄を覚える。クルクルとコマ送りのように落下する懐中時計を眼前でキャッチした帝は言葉を漏らした。

「行くぞ・・・・『幻騎士』」

彼の全身を蒼い光が包み込んだ。ななせ達が驚いている中、光が消えて中から翼を持った騎士が現れる。騎士を思わせる装甲は蒼く、背中には五対の十枚羽から成る推進翼（ウィング・スラスター）。帝が纏っているものは正しくＩＳだった。

「何故この方がＩＳを・・・・ッ！？」

思わずセシリアから驚嘆の声が零れる。男がＩＳを使えるはずが無いのだが、彼女達の周りには例外がうじゃうじゃいる。世界で唯一ＩＳが使える男として一夏はＩＳ学園に強制入学。政志達は連邦の情報操作で自分達がＩＳを使えていたことを隠蔽していて、一夏の存在が世間にしれたことにより隠す必要が無いと判断してＩＳ学園へ入学。世間で認知されているのはＩＳ学園にいる六人だけのはずだが、先月の臨海学校での黒いＩＳを駆る仮面の男が敵として現れた。つまり、目の前にいる男は敵である可能性があると彼女達は考えた。

「付いて来い」

それだけ告げた帝は空へと飛翔し、ラウラは無言のままその後に続く。どれだけ高く上がったのか、二人の姿は完全に見えなくなった。

「どうする、加勢するか？」

「ダブルオーもあるし・・・・あの人はラウラに任せて大丈夫と思うよ。知り合いみたいだったし」

箒の問いになせは少し真剣に答える。帝がどれほどの力量を誇っ

ているのかは分からないが、ダブルオーがあるラウラが負けることはないだろうと踏んだのだ。ラウラが帰ってくるまで待つことにしたななせ達。しかし、彼女達の背後から足音が聞こえてそちらを振り向くと一夏がいた。しかも、男の姿に戻って。

「一夏、男に戻ったんだな!!」

喜びで満ちた箒は一夏の元へと歩み寄ろうとする。だが、一夏は無表情で箒を見据えるだけ。ワンワンとタマ、レンレンは歯を剥き出しに、エリザベスは喉を鳴らして一夏に威嚇していた。

「箒!ちょっと待っ――――」

制止の声を掛けるななせの隣に一陣の風が吹いた。風の正体である赤い影は箒の目の前にいた一夏をブッ飛ばす。一夏は苦痛の声を上げるわけでもなく、何本もの木々を倒しながら地面と水平に飛んでいき、五本目の木を倒したぐらいで地面に叩き付けられた。突然のことでポカンと口を開ける箒の視線はボロボロになった一夏に釘付けになる。

「お前・・・誰だ?」

蹴りを入れた足を降ろす太陽の目がスゥっと細まっていく。その言葉の意味をすぐに理解出来ない箒、鈴、シャル、セシリアはえっ?と声を漏らした。そして一夏(?)はククククと薄気味悪い笑い声を上げながら立ち上がって狂気の笑みを浮かべる。

「よく気付いたじゃありませんか。私のこの擬態に気付いたのは、君が二人目ですよ」

表情も口調も完全に一夏ではない。目の前の一夏（？）の言動を分析したななせはある結論に至った。

「（そういうことか・・・・）あなたが、政志達を男から女に変えた・・・・違う？」

「ええ、そうですよ。流れ弾とはいえど、まさか連邦のトップ４を女に出来るとは思ってもいませんでした。どうやらあの男も今は空高くにいるようですし、これでやっと私も自由に動ける」

一夏（？）が言う『あの男』が帝を指しているのだろうと理解する。ニタァと口元を歪めた一夏（？）の全身からドス黒い光を放たれると同時に形を変えていく。科学的に有り得ない光景を目の当たりにしたななせ達は黙ってそれを見ることしか出来ず、完全に変貌を遂げた異形の姿は生々しいピンクの肌にボコボコの筋肉。八頭身ぐらいあるその巨躯から見下ろす四つの青い目が不気味に光る。

「私の存在を知られた以上、死んで頂きましょう」

戦闘態勢に入った異形に対してななせ達はＩＳを起動させようとしたその時。

「「ギャゴオオオオオオオ！！！」」

初めて聞く何かの鳴き声が周囲を蹂躙して動きを静止させられる。次にはドスンッと地響きが聞こえ段々と大きくなっている。いつの間にかペット達は姿を消しており、ななせはこの足音の正体に気付いたのか顔を引き攣らせた。

「お前がホルモン・・・・いや、一馬健一だな？」

声がする方に目を向けると政志と夜明がいた。いたのはいいのだが、問題はその場所だった。

「ねぇ・・・あれって、あれだよね・・・・？」

「私の目がおかしくなければ・・・・あれですわね・・・・」

「どうせあれが、政志のペットだとか言い出すんでしょうね・・・・」

「ここまで来ると・・・・笑うしかないな・・・・」

「もう面倒臭いから敢えて突っ込まないぞ・・・・」

シャル、セシリア、鈴、箒から渇いた笑い声が聞こえ、太陽は呆れた表情になる。政志と夜明が乗っているのは遥か昔に絶滅したはずの肉食の巨大生物。その二頭の首から政志と夜明はななせ達と一馬の間に飛び降りた。

「こっからは危ねぇから、お前等は離れてろ」

「運んでくれてありがとな～」

手を振る夜明を背に二頭は再び地響きを鳴らせながら政志の指示通り何処か遠くへと歩いていった。漸く地響きも聞こえなくなったぐらいで鈴が口を開いた。

「政志・・・・あれは何なの・・・・？」

「何って、ティラノサウルスのフェルナンド7世とスピノサウルスのアレキサンダー６６６世だけど?」

「そういう意味じゃなくて、何で恐竜がこんなところにいんのよ!!」

「・・・・そこは企業秘密だろ」

「その『え、何でお前知らないの?』みたいな目で見るの止めなさいよ!!!」

知らない内にツッコミ役になっていた鈴のツッコミが炸裂する。自らのペット（恐竜をペットにしているのこの馬鹿だけですから）に厨二病全開の名前を付けている政志は流石としか言いようがない。政志達が来る前の殺伐とした空気は漫才染みた会話によって崩壊していた。というよりかは、美少女二人が恐竜に跨るシュール過ぎる光景にシリアスを求めようというのが間違いなのだ。

「よぉ、内臓野郎。よくもこんな姿にしてくれたな」

「その命、神に返させるぞコラ」

コメディな雰囲気から一気に真剣なものに変えた政志と夜明は一馬と向き合う。

「もしや・・・・君が鈴木政志ですか。いやぁ、これはまた何とも可愛らしい姿になりましたねぇ。噂の破壊神もそのような姿だと、少しも怖くありませんね」

「そりゃどうも。で、どうして元ミュージアムのお前は何が目的で

ここに来たんだ？」

「本来なら、このような危険な場所に来るつもりは無かったのですが、ある男に捕まりそうになったのでね。ここへと逃げ込んだわけですよ。しかし・・・・これは好都合です！私の力によってホルモン変換された者はＩＳを起動させれなくなる。元帥と大将が使い物にならなくなった今、地球連邦を壊滅させて、新生ミュージアムへの手向けにしてみせましょう！！」

腕を広げて高らかに笑う一馬。それはななせ達を不愉快な気分にさせるが、政志と夜明は違った。

「確かに、今の俺達はＩＳが使えねぇ・・・・けどな」

「そんなアホ丸出しの考えを持ってる奴を、見過ごすわけにはいかねぇんだよ」

フッ、と一馬を鼻で笑う政志と夜明からは余裕の色が伺える。後ろを向いて太陽と目が合った政志は手に持っていたアタッシュケースを投げ渡した。

「太陽、今回はＩＳじゃなくてそれで戦ってくれ。そっちの方が盛り上がるからな」

ニッと笑みを浮かべる政志に疑問を抱きながらケースを開けると中にはバイクのスロットを模したドライバーと赤いＵＳＢメモリが入っていた。

「そういうことか・・・・ふっ、面白い」

自分が何をすべきか理解した太陽はドライバーとメモリを手に取って政志と夜明の隣に並んだ。

「こんなこともあろうかと思って作っておいた甲斐があったぜ」

政志と夜明は懐から太陽が持っているのとは形が違うドライバーを取り出し、腰に当てるとベルト状のデータ転送ケーブル・コネクションベルトリングが伸長し装着される。同じように太陽もドライバーを装着した。

「用意はいいか？夜明、太陽」

「いつでもいけるぜ」

「同じく」

確認を取った政志はポケットから黒いＵＳＢメモリを取り出し、それを右手で持ちスイッチを入れる。

【ＪＯＫＥＲ！】

夜明もポケットから緑色のＵＳＢメモリを取り出し、それを左手で持ちスイッチを入れる。

【ＣＹＣＬＯＮＥ！】

そして太陽は赤いＵＳＢメモリのスイッチを入れる。

【ＡＣＣＥＬ！】

「それはガイアメモリ!?どうしてお前達がそれを・・・・ッ!!」

「Ｓｕｃｈ　ａ　ｔｈｉｎｇ　ａｎｄ　ｙｏｕ　ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｌｅａｒｎ.（そんなこと、お前が知る必要はない）」

流暢な英語で政志が答えると、三人は子供が一度は夢見るヒーローが叫ぶ呪文を唱える。

「「「変身!／変・・・・身!」」」

夜明が『サイクロンメモリ』を『ダブルドライバー』の右側のライトスロットにインサートする。すると、サイクロンメモリと夜明の意識が政志のダブルドライバーへと転送された。最後に政志は『ジョーカーメモリ』をダブルドライバーの左側のレフとスロットにインサートして両手で二つのスロットを左右に開いた。

【ＣＹＣＬＯＮＥ!ＪＯＫＥＲ!】

ガイアウィスパーの音声と『風』が吹くような音楽と『切札』の軽快な音楽が辺りに鳴り響いた。政志を中心に旋風が吹き荒れ、政志に細やかな黒色の物質が纏い、そして服越しで体全体に装着されて装甲が生まれる。ボディの正中に伸びる銀色の帯・セントラルパーテンションを境界に右側は『風』を表す翡翠色、左側は『切札』を表す漆黒色の装甲。右側の首の後ろから付加された銀色のマフラーが風に靡く。そして、紅色の大きな複眼の上部にWの形をしたの銀色の飾り。二つのガイアメモリを一つの肉体に作用させた超人戦士。二人で一人の仮面ライダー、『W』が降臨した。そして太陽はガイアメモリを『アクセルドライバー』中央上部にあるスロットに挿入して右のパワースロットルを捻る。

【ＡＣＣＥＬ！】

太陽が纏うのは赤を基調とした装甲。フルフェイス・ヘルメットのような仮面で覆われ、奥の青い円形の複眼が輝く。太陽が使用したガイアメモリは『加速の記憶』が内包された『アクセルメモリ』。そして太陽が変身した仮面ライダーの名は『アクセル』。Ｗは左手を一馬ことホルモンドーパントへと向け、アクセルは大剣型専用武器『アクセルブレード』を構える。

「「「さぁ、お前の罪を数えろ！／振り切るぜ！」」」

Hの襲来／乙女達の冒険とカオスな森（後書き）

「早くガンダムになってみせろ」

「メンドクセェこの上ないやつだな・・・・」

「政志・・・。何時の間あんなの作ってたんだろう・・・・？」

「悪いが、ここからは圧倒させて貰うぞ」

【ＴＲＩＡＬ！】

「次の一撃で、全て破壊してやんよ」

【ＦＡＮＧ！】

【ＪＯＫＥＲ！】

「「「ライダーツインマキシマム！！」」」

～次回～

『仮面と
幻と
これってＩＳの小説だよね？』

お楽しみ！！

決着のH／変革の兆し

政志達が仮面ライダーに変身する少し前。遥か上空、雲の上まで飛翔したラウラと帝は互いのメインウェポンを展開して見合っていた。先に動いたラウラは両袖に展開したプラズマ刃の切っ先を帝に向けて突っ込む。それに対して帝後は後退しながら背中の推進翼から自立兵器、ストライザーを十基射出する。五つのストライザーから青いビームが放たれ、ラウラは静止することなく回避した。

「少しはマシになったようだな・・・これならどうだ?」

ビームを放ったものとは別のストライザーの銃口からビーム刃が発生してラウラへと向かう。避けるのが無理と判断し一旦静止したラウラは眼帯を外して金色の瞳を開いた。自らを貫かんとするストライザーを一通り見てフ～と一息吐く。次の瞬間、赤と金のオッドアイがカッと見開かれプラズマ刃とワイヤーブレードを用いて一瞬で四基のストライザーを弾き返した。残りの一基のビーム刃が空気を焼くと共にラウラの顔面へと迫る。だが、ラウラは焦ることもなくＡＩＣをぶつけて動きを止めた。

「この程度でやられるほど、私は弱くないぞ!」

自身満々にそう言うが、さっきまで視界に入っていた帝の姿が無い。

「確かに弱くはないな」

背後から声と気配を同時に感じたラウラは瞬時に右手のプラズマ刃を振り向きながら水平に払う。プラズマ刃は帝が振り下ろした全両指のビームクロー、ミラージュソニックと交錯し火花を散らす。

「だが・・・・」

無表情のまま帝はミラージュソニックを引いてラウラの腹部に蹴りを入れた。

「俺の方が遥かに強い」

肺の空気を強制的に吐かされ思考が止まったラウラへ追い討ちを掛けるように両腕に内臓されているビームサブマシンガン、スプラッシャーからビームの雨を降らせる。急激にシールドエネルギーが減っていき、ラウラが態勢を立て直すと同時に雨が止んだ。帝からはストライザーを一基ずつ背部に戻す音。ラウラからは先ほどの攻撃で破損した右肩の大型レールガンが火花を立てる音。その二つの音が空間を支配していた。数秒程睨み合い沈黙が続いていた中、帝が口を開いた。

「さっさとガンダムを出せ。そんな機体で、この幻騎士に勝てるとでも思っているのか」

「ッ！？」

何故それを知っている、とは敢えて口にしなかった。言ったところで受け流されるのが目に見えている。帝の言う通り、シュヴァルツェア・レーゲンと幻騎士では機体性能に差がある。それどころか、操縦技術もあちらの方が上手だと分かっていた。ラウラは苦い表情になりながらもシステムを起動させた。

「・・・・シュヴァルツェア・レーゲン、モードGへ移行」

【Ａｐｐｒｏｖａｌ　Ｃｏｄｅ（コード承認）・Ｗａｋｅｕｐ　ＯＯ－Ｒｉｓｅｒ】

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲が光り最強の剣へと姿を変える。ほぉ、と興味深そうな表情になった帝は腕を組みラウラを見下ろす。

「ダブルオーライザー、目標を駆逐するッ！」

ＧＮソード?を連結させたＧＮツインランスを握りしめたラウラは粒子を撒き散らしながら帝の元へ飛翔する。ラウラを迎え撃とうと帝は腕を組んでいたのを解くが、それを見逃さなかったラウラは三段階瞬時加速（リブル・イグニッション）で一気に距離を詰めてＧＮツインランスを振り下ろした。

「速いな・・・・」

そう言わざるを得ないダブルオーライザーのマシンポテンシャルに驚かされた帝は真後ろへと瞬時加速（イグニッション・ブースト）して躱した・・・・つもりだった。目の前の少女との距離が変わっていないと気づくまで。

「（何ッ！?）」

帝が瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使うと同時にラウラも瞬時加速（イグニッション・ブースト）したため当然の如く二人の距離が変わるはずがない。瞬時加速（イグニッション・ブースト）をする素振りを見せていない帝にとってこれは衝撃的なことだった。

「闇に沈め・・・・」

そして、彼は一瞬だけだが垣間見た。ＧＮツインランスを振り下ろす際にラウラの両目が異様な金色に輝いているのを。

「（そういうことか・・・・）」

心の中で舌打ちした帝が仕方ない、と一言漏らした刹那、幻騎士の装甲が赤く輝いた。何をしようとしているのかラウラには分からなかったが、この一撃で終わる。そう思っていたが、輝きの中から二本の大型実体剣が出てきてＧＮツインランスを受け止めた。先ほどの幻騎士の装備には無かったはずの装備。驚きの表情になるラウラの目の前にいる幻騎士の装甲が赤くなっていた。背中の推進翼（ウィング・スラスター）が消えて代わりに小型の高出力スラスター。両手に握っている二本の大型実体剣、ダイダロス？。両腰に装備されている四本の中型実体剣、ダイダロス？。両脹脛に装備されている四本の小型実体剣、ダイダロス？。これが幻騎士の近接特化換装形体、名を『炎帝』という。

「まさかこれを使う破目になるとは・・・・」

呟きと共に序々に押されていた帝がラウラと拮抗し始める。接近戦は実力の差がそのままでる。ラウラは状況整理も含めオーライザーからミサイルをばら撒きながら距離を取った。自らに迫るミサイルを帝は避けようともせず全て喰らった。だが、黒煙が晴れ中から出てきた幻騎士の装甲には傷一つ付いていなかった。脅威の防御力を持つ幻騎士・炎帝。それをどうやって突破しようか考えるラウラはＧＮツインランスの連結を解く。

「（あのＩＳ・・・ガンダム並の出力があるな。近接があるということは他にもあるはず。なら、トランザムを使って一気にケリを着けるッ！）」

長時間の戦闘は不利になると判断したラウラはトランザムを作動させようとする。しかし・・・・。

「俺だ。あぁ、出来るだけ急――――・・・・分かった。すぐにそっちに向かう」

突如誰かと通信をした帝はやれやれといった表情になり、両手のダイダロス?を肩に戻した。

「急用が入ったから、今日はここまでだ。じゃあな」

そう言って背を向ける帝。しかし、ラウラがそれを呼び止める。

「待て!お前には用が――――」

「さっき犯人がどうとか言っていたが、あれは俺じゃないぞ」

「何・・・・!?」

「だが、心配することは無い・・・・。鈴木があの島にいるというのならな」

鼻でだが、今日初めて笑った帝をラウラは意外な表情で見る。数秒後、ラウラは手に持っていたＧＮソード?を腰へ戻して眼帯を付け直した。彼女の右目に映るのは遠くを飛行する点となった帝。

「・・・・・」

それをしばらく見つめた後、ラウラはゆっくりと降下するのだった。

決着のH／ＩＳと関係無いのは気にするな！！（前書き）

残り二話で夏休み編も終わり夜明達ともお別れです。

今なら言えることが一つだけあります。

この話しをしたかったために、夜明を呼びました。

では、本編をどうぞ！！

決着のH／ＩＳと関係無いのは気にするな！！

「「「「「・・・・・・」」」」」

ななせ、箒、シャル、鈴、セシリアは目の前で起きた状況に着いて行けずポカンと口を開けている。いきなりドライバーを腰に付けて政志と太陽は変身し、夜明は気を失ったように倒れた。しかし、変身した政志の声と共に夜明の声も聞こえてきたので、無事であることは分かった。美少女三人が仮面ライダーに変身する光景はシュールとしか言い様が無かった。

「政志・・・・。何時の間にあんなの作ったんだろう・・・・？」

ちゃんと仕事してよ、と溜息を吐くななせの前ではWとアクセルがホルモンドーパントに向かって決め台詞を放っていた。

「「「さぁ、お前の罪を数えろ！／振り切るぜ！」」」

「二対一・・・・些か不利ですね。なら、こういうのはどうでしょう！！」

ホルモンドーパントの体が発光して真ん中から二つに別れていく。そして、完全に別れたホルモンドーパント二体を見た政志は成る程と理解した。

「情報通り、複数のメモリの力を取り込んでるんだな。その力・・・・『ミラージュ』か何かだろ」

「よく分かりましたね」

「ミラージュの他にも、『アイスエイジ』、『マグマ』・・・色々とありますよ」

「あなたの相手は私がしましょう！」

視線をアクセルに合わせたホルモンドーパントBは地面を凍らせスケート選手のように森の中へ滑っていった。

「その挑戦、受けて立とうじゃないか」

腰のアクセルドライバーを両手で外してジャンプすると序々に変形していき、地面に着いた時にはバイクとなっていた。ホルモンドーパントBが作った氷の上をスリップすることなく走行していく。

「あいつ・・・初めてのクセに何であそこまで使いこなしてるんだ？」

「突っ込むんだら負けだぞ、政志。あいつは色々と天元突破してるから」

さいですか、と呆れた声を漏らしたWはホルモンドーパントAと向き合い指の関節をボキボキと鳴らす。

「「始めようぜ！死神のパーティタイムだッ！！」」

ホルモンドーパントBが作った氷の道をバイクフォームで走っていたアクセル。しばらく走っていると木々の無い広い場所へと出た。真ん中にはホルモンドーパントBが腕を組んで仁王立ちしており、アクセルはバイクフォームから人型へと戻った。

「さっさと夜明には元に戻ってもらいたいんでな！振り切らせてもらうぞ！！」

エンジンブレードを構えたアクセルはホルモンドーパントBに向かって走り出す。ホルモンドーパントBはアクセルに掌を向けて全てを凍らせる『アイスエイジ』の能力である冷気を放った。アクセルはエンジンブレードの刀身を押し上げてメモリスロットを出す。エンジンブレード専用のギジメモリ、『エンジンメモリ』を取り出してメモリスロットに挿入して刀身を戻す。

【ＥＮＧＩＮＥ！】

刀身を冷気へと向けてエンジンブレードの柄にあるグリップを引い

た。

【ＳＴＥＡＭ！】

刀身から高温の蒸気が発生し、それを噴射する。冷気を相殺するどころか完全に圧倒してホルモンドーパントＢを襲う。

「ぐあっ！！」

一瞬の隙が生まれたのに乗じて再びグリップを引く。

【ＪＥＴ！】

エンジンブレードの切っ先からエネルギー弾が発射され、ホルモンドーパントＢに命中する。一気に片を付けようとグリップを引く。

【ＥＬＥＣＴＲＩＣ！】

刀身に電気エネルギーが纏われ、ホルモンドーパントＢの胸部を豪快に切り裂く。ホルモンドーパントＢは怯みはしたが、すぐに立ち直った。

「その程度の攻撃ではビクともしませんよ」

煙を上げていた傷口が再生していき完全に治った。これは一馬が取り込んだ『ビースト』の能力である。

「本当にぶっとんでるな・・・・この世界は」

仮面の下で溜息を吐いた太陽が打開策を考え始めるとホルモンドー

パントは狂喜の笑声を上げる。

「無駄無駄。いくら策を練ろうが、そんな玩具でこの私に勝てるはずがない！」

その言葉に苛っとした太陽はエンジンブレードを槍投げの要領でホルモンドーパントBへと投げつけた。超高速で投げつけられたエンジンブレードはホルモンドーパントBを貫いた。しかし、ホルモンドーパントBが誇る再生能力の前では意味をなさないことは分かっていた。

「なら、その玩具に負けるお前は何なんだろうな」

ホルモンドーパントBがエンジンブレードを抜き再生している合間に信号機とストップウォッチを模した装飾のガイアメモリを取り出した。

「悪いが、ここからは圧倒させて貰うぞ」

【ＴＲＩＡＬ！】

スイッチを入れて起動させる。メモリモードにし、アクセルドライバーからアクセルメモリを抜き、そのガイアメモリを挿入してパワースロットルを捻る。

【ＴＲＩＡＬ！】

信号機の装飾のランプが赤色から黄色になった瞬間、アクセルの装甲の色が赤色から黄色になる。そして、ランプが青色になると全身の装甲が弾け飛んで青色の装甲になった。青色からオレンジ色の複

眼となり、装甲は至ってスマートである。

「そんな虚仮脅しが通用す――――」

再生を終えたホルモンドーパントBがアクセルの変化を弱評していると目の前に青い影が現れた。

「虚仮脅しがどうしたって？」

一瞬でホルモンドーパントBの懐に入ったアクセルはパンチを打ち込む。ホルモンドーパントBは短い悲鳴を上げて吹っ飛び木々をなぎ倒していく。アクセルが使用したのは『挑戦の記憶』が内包された『トライアルメモリ』。装甲の必要最低限以外の部分の重量物を徹底排除し、大きく軽量化にしたことで運動性能の飛躍的向上と音速をも超える、超高速移動を実現している。

「そろそろクライマックスといこうか」

起き上がるホルモンドーパントBを見据えながら、アクセルトライアルはトライアルメモリをアクセルドライバーから引き抜き、マキシマムモードに変形させる。スイッチを入れるとストップウォッチがスタートした。トライアルメモリを上に投げるとアクセルトライアルは音速の速さで再びホルモンドーパントBの間合いに入り、音速の連続蹴りを喰らわせる。トライアルメモリの戦法の真骨頂は一度に連続攻撃をしてダメージを蓄積させること。十秒間の最大加速を行い、超高速の連続蹴りを『T』の字を描くように対象に叩き込み、アクセルトライアルの最強の技『マシンガンスパイク』が炸裂する。ホルモンドーパントBに蹴りを打ち込むごとに大きな『T』が描かれていく。上に投げたトライアルメモリが落ちてくるとアクセルトライアルは蹴りを停止し、振り向くと同時に右手でトライア

ルメモリをキャッチしてストップウォッチのスイッチを止める。ストップウォッチには『9．8』と表示されていた。

【ＴＲＩＡＬ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！】

「9．8秒・・・・それがお前の絶望までのタイムだ！」

打ち込んだ『T』の字が大きな光を放って爆発を起す。

「が、がはっ・・・・・」

完膚なきまでに撃破されたホルモンドーパントBは前屈みに倒れ、地面と接触すると同時に粒子となって消えていった。

「これ・・・・面白いな」

政志の馬鹿さを評価する太陽だった。

【ＨＥＡＴ！ＭＥＴＡＬ！】

『熱の記憶』と『闘士の記憶』を内包した『ヒートメモリ』と『メタルメモリ』。それを使用したＷは赤と銀の戦士になっていた。背中に装備されたメタル専用の武器、『メタルシャフト』を手に取り振り回す。

「「行くぜ行くぜ行くぜえぇぇぇ！！！」」

どこぞの赤いイマジンのように叫ぶＷはメタルシャフトでホルモンドーパントＡの皮膚を抉っていく。接近戦最強の政志が変身しているＷのヒートメタル。それに勝とうなどと考える者の気が知れない。

「ぐ・・・っ！再生が追いつかないだと！？」

ビーストの再生能力を手に入れていたとしても今回相手が悪過ぎる。ホルモンドーパントＡは距離を取ろうとするがＷがそれを許さない。

「ところがぎっちょん！」

頭上から縦のラインを切り裂いた後、ＷはホルモンドーパントＡに回し蹴りを食らわせ吹き飛ばす。

「感謝しろよ。お望み通り距離を取らせてやったんだからなぁ？」

「お前・・・そういう悪役みたいな台詞言うの好きだよな」

「別にいいだろ。楽しいんだから」

全く緊張感の無い会話が繰り広げられ、それをななせ達は引き攣った笑みで見ていた。戦いが始まってからというもの、これって苛めじゃね？と思わせるほどのWのワンサイドゲーム。ホルモンドーパントAは真剣に戦っているが、Wは完全に遊んでいた。

「オラオラァ！次はこれで行くぜェ！！」

「ヨッシャーーッ！！」

メタルメモリとヒートメモリを抜き歓喜の声を上げながら、Wは新たに二本のガイアメモリを取り出す。

【ＬＵＮＡ！】

一本は黄色いメモリ。

【ＴＲＩＧＧＥＲ！】

もう一本は青いメモリ。

【ＬＵＮＡ！ＴＲＩＧＧＥＲ！】

Wの右半分が黄色に、左半分が青色に入れ替わる。そしてWの左胸に青色の銃が設置されていた。

「ええい、小賢しい！！」

ホルモンドーパントAは『マグマ』の能力を使って手から灼熱のマグマ弾を放つ。

「射撃は俺に任せな！」

Wは左胸のエネルギー銃、『トリガーマグナム』を右手で持ち、引き金を引いた。銃口から黄色と青色が混ざったエネルギー弾が連射され、マグマ弾を全て相殺した。青いガイアメモリの名は『トリガーメモリ』。『狙撃手の記憶』を内包し、視力の上昇や足元の磁場フィールドの固定による銃撃戦に特化したメモリである。Wはマグマ弾を相殺した後、ホルモンドーパントAに向けてエネルギー弾を発射して、全て命中する。

「ならば・・・・ッ！」

ホルモンドーパントAは瞬時の氷の壁を生成してエネルギー弾を防ごうとする。だが、Wは再び引き金を引いてエネルギー弾を放った。

「無駄ですよ！その程度の威力ではこの楯は破れません！！」

「・・・馬鹿かお前は？そんなことアルにだって分かるぞ」

呆れが混じった声を漏らすとエネルギー弾は軌道を変え、氷の壁を回り込んでホルモンドーパントAを襲った。

「まかさ・・・・誘導弾か！？」

トリガーメモリと共に使用した黄色いガイアメモリ、『ルナメモリ』は『幻想の記憶』を内包しており、超常的な属性を付加し、肉体・武器の形状を自由自在に変化させることが出来る。

【ＣＹＣＬＯＮＥ！ＪＯＫＥＲ！】

ルナトリガーからサイクロンジョーカーに戻ったＷはダブルドライバーからジョーカーメモリを外して右手に持ちかえる。

「そろそろ決めるぜ！」

今までの攻撃によってよろけるホルモンドーパントＡにトドメを刺そうとジョーカーメモリをダブルドライバーの右腰に設置されている『マキシマムスロット』に挿入する。

【ＪＯＫＥＲ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！】

Ｗは竜巻を纏って宙に浮いて、必殺技の態勢に入る。

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

Ｗが技名を叫ぶと、Ｗの体が正中から真っ二つに別れ、そのまま強力な連続飛び蹴りをホルモンドーパントＡに喰らわせた。ホルモンドーパントＡは吹っ飛び、火花を散らせながら地面をのた回っていると派手に爆発した。

「終わったか・・・」

目の前の黒煙を見据えながらＷはダブルドライバーからサイクロンメモリとジョーカーメモリを外して変身を解除した。装甲が細かく分解され、風に吹き飛ばされてＷは政志に戻って、同時に夜明の意識が戻り、スッと起き上がり、そのまま政志のところへ行く。

「なぁ・・・・一つ聞いていいか？」

「・・・・何だ？」

「何を思ってコレを作ったんだ？」

「・・・・面白半分？」

「・・・ごめん。聞いた俺が馬鹿だった」

そんなアホな話しをしていると戦いを見ていたななせ達は歩み寄って来た。だが、その表情は勝利を祝福しているものではなく怪訝なものだった。

「おい、政志。俺達まだ女のままだぞ！」

「そういえばそうだな。マキシマムをモロに喰らったんだ、メモリがブレイクされてるはずなんだが・・・・」

刹那、言葉を遮るように黒煙が一気に吹き飛び中からホルモンドーパントAが姿を現した。その姿は無傷とは言えるものではなく皮膚にヒビが入っており火花を散らせている。

「フフフッ。まさかここまで追い込まれるとは思いもしませんでしたよ」

「そりゃどうも」

「ですが残念でしたね。私はこう見えて用心深く、いつも保険を用意しているのですよ」

すると、木々の間を粒子がすり抜けてきてホルモンドーパントAの周りに集まる。天を仰ぐように上を向くとヒビが塞がっていき粒子が消えた。

「なるほどな・・・・。あの分身にはそういうカラクリがあったのか」

声がする方を向くと、そこには通常の赤い装甲のアクセルがいた。アクセルがここにいるということは追っていたホルモンドーパントBを倒したということ。話しの内容からすると、ホルモンドーパントBがホルモンドーパントの分身だったことが分かる。

「カラクリって何のこと?」

「簡単に説明すると、こいつは自分の作った分身を元に戻すことで傷を回復させることが出来る・・・・そうだろ?」

シャルの問いに答えた政志はホルモンドーパントに問う。

「いや~、君は実に聡明だねぇ。どうです?今からでも連邦なんて辞めて、私と共に――――」

「新生ミュージアムをどうたらこうたら~・・・・とかほざくつもりだろうが、そんな下らねぇ質問してんじゃねぇよ」

「交渉は決裂ですか・・・・。なら、君達の人生に幕を引いて差し上げましょう!!」

ホルモンドーパントは自らが取り込んだ全てのメモリの力を同時に

引き出す。全身がドス黒く輝き、頭上に巨大な黒いエネルギー球を生成していく。

「どうするんだよ、政志。俺達のマキシマムじゃ、あいつを止められねぇぞ？」

「だったら、さっきのよりデカい一撃をお見舞いしてやればいいだけの話しだ」

ホルモンドーパントがエネルギー球を段々と大きくしている中、政志と夜明の会話には相変わらず緊張感がない。政志が右手の親指と中指を咥えて口笛を吹くと、草むらから小さな恐竜のロボットが飛び出してきた。

「クァーッ！」

一鳴きしたその恐竜のロボットは夜明に向かって飛び跳ね、夜明は思わず掌で受け止めてしまう。ニッと笑う政志の表情からそれが何なのか理解した夜明も釣られて笑みを浮かべる。絶体絶命な状況下において笑い合う二人に憤りを覚えたのかホルモンドーパントが怒声を上げた。

「さっきから一体・・・・何なんだお前達は！？」

「知りたいか？なら教えてやるよ・・・・。俺は、破壊の神で」

「不屈の翼で・・・・」

「「二人で一人の、仮面ライダーだ！！！」」

夜明は恐竜のロボットこと動くガイアメモリ、『ファングメモリ』を手に取り手足を畳んで尻尾を指で弾いた。尻尾がクルッと１８０度回転すると中から『Ｆ』のガイアメモリが現れ、スイッチを入れる。

【ＦＡＮＧ！】

「行くぜ、政志！」

「ＯＫ、夜明！」

政志はジョーカーメモリのスイッチを入れる。

【ＪＯＫＥＲ！】

「「変身！」」

ジョーカーメモリをダブルドライバーに挿入して夜明のダブルドライバーに転送する。転送されたジョーカーメモリを挿入し、ファングメモリを挿入してダブルドライバーを左右に開く。その際に、ファングメモリのボディが角のある恐竜の頭部の形となる。

【ＦＡＮＧ！ＪＯＫＥＲ！】

恐竜の雄叫びに似た音が鳴り、夜明が右半分が白色のＷに変身した。意識を転送した政志はその場に倒れるが・・・・。

「もう！何で一人で変身出来るのにしなかったの！？」

そこはななせがしっかりと受け止めた。

「太陽。お前もタイミング合わせて、二人でツインマキシマムだ」

「私もか？」

「当たり前ェだ。次の一撃でケリを着けようぜ」

ホルモンドーパントが生成しているエネルギー球は完全に供給を終えて今にも放たれようとしている。なら、自分達がすべきことはそれを最大の技で迎え撃つこと。Wは右の手刀でファングメモリのタクティカルホーンを三回弾き、アクセルはアクセルドライバーの左グリップのマキシマムクラッチレバーを引く。

【ＦＡＮＧ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！】

【ＡＣＣＥＬ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！】

Wの右脚に白色の刃『マキシマムセイバー』が出現し、パワースロットを数回捻ったアクセルの体から高熱が放射される。

「今更何をしようが、もう遅い！！消えてなくなれぇぇぇぇ！！！」

ホルモンドーパントは巨大な高濃度のエネルギー球を二人のライダーに投げる。Wとアクセルはシンクロしているかのように同じタイミングでジャンプして、必殺技の『ファングストライザー』と『アクセルグランツァー』を叩き込んだ。

「「「ライダーツインマキシマム！！」」」

放たれた二人の回し蹴りはエネルギー球を二つに分断し、それぞれ

のエネルギーを纏わせホルモンドーパントへと跳ね返した。

「グァアアアッ!!」

二人のマキシマムに加えて自分の力も上乗せされたそれの威力は絶大なもので、直撃したホルモンドーパントは大爆発を起して何処かへ吹っ飛んで行った。その際、ホルモンドーパントの体からメモリが出てきて砕けた。書かれているアルファベットは『H』。Wとアクセルは変身を解き、元の姿に戻ると政志と夜明の体が光り出し、次の瞬間には元の男の姿に戻っていた。

「やっと戻れたぜ・・・・」

「何か無駄に疲れた気がするのは俺だけか・・・・?」

乾いた笑い声を出す政志と夜明。この二人が元に戻っているということは・・・・。

「一夏達も元に戻っているということか!?」

「良かった〜・・・・」

ホッと息を付く女子勢。ここで政志となせは同時にあっ、と声を出して疑問符を上げた。

「「そういえば、ラウラはどうしたんだ?/アル達はどうしたの?」」

これには他の者達も気になったようで、先に政志達がなせの問いに答える。だが・・・・。

「あれは如何しようも無い、尊い犠牲だったんだ・・・・」

「今頃、どうしてるかな・・・・」

辛気臭い表情で空を見上げる二人に、ななせ達は敢えて何も突っ込みを入れなかった。恐らく、政志と夜明の瞳には故人扱いされているアル達が映っているのだろう。そして、ななせ達が政志の問いに答えようとすると、茂みの中からラウラが出て来た。最初は何処か浮かない表情だったが政志を見た途端に一気に明るくなった。

「どうやら男に戻ったようだな、政志。それでこそ私の嫁だ」

「あのままだったらガチで嫁に行く破目になってたからな・・・・。で、お前は何してたんだよ?」

「・・・別に、大したことじゃない」

だが、すぐに不機嫌な顔になったラウラは本部へと戻る道を歩き出した。本人がそう言うのなら、と政志は一馬が飛んで行った方向へ爪先を向けようとする。しかし、メールの着信音が突如鳴った。その内容を見た政志は爪先を本部へと向けて歩き出す。

「良いのですか?あの怪人を放って置いても」

普段の政志なら自分を女にした犯人を半殺しにしそうなのだが、今の彼はそれをせず帰ろうとしている。不思議に思ったセシリアがそう言うと突然晴れていた空が曇り出した。

「そんなことより、早く戻った方がいいぞ。悪魔に会いたくなけれ

ばな・・・・」

政志達が歩く反対方向の森ではドーパントの姿では無くなった一馬がふらふらになって歩いていた。

「くそぉ・・・・私のメモリがッ！」

３０代の髭を蓄えた男は一本の木に背を預けて座り込んだ。このまま居ても訳の分からない化物達（政志達にとっては可愛いペット）に襲われるか分からない。悩みに悩み考えた結果、服の内ポケットから羽の付いた『Ｑ』と書かれた金色のメモリを取り出した。

「は、はは・・・・はははははははっ！！そうです、私にはまだこれがあります！！これを使って連邦本部を壊滅へと導いてみましょ

う！！」

一馬が狂喜の笑い声を上げていると、何者かが近づいてくる音がした。そちらに目を向けると４０代ぐらいであろう男が紳士のような格好にステッキのような傘を持っていた。その男の顔を見た途端に一馬の顔が恐怖に染まった。

「そのメモリ、『ケツァルコアトルス』ですね？まさか君が持っているとは思いませんでした」

「井坂深紅朗・・・どうして裏切り者の貴様がここにッ！？」

「裏切り者とはとんでもない。ちゃんとしたビジネスで私は連邦に付いたのですよ。鈴木君が・・・『テラー』のメモリをくれるという条件でね。元同僚の後始末の序でに、そのメモリも戴くとしましょう」

井坂がスーツの内ポケットから出したメモリに書かれているアルファベットは『Ｗ』。そして、彼はそれを作動させた。

【ＷＥＡＴＨＥＲ！】

この日、一馬健一という男の存在が世界から消えた。

決着のH／ISと関係無いのは気にするな！！（後書き）

「コラァッ！お前等のせいで俺達はひどい目にあったんだぞ！！」

「いい加減その下手な関西弁止めたらどうなの？・・・・ブルーノート」

「クリスゥゥゥゥ！！」

「なぁ・・・お前の戦う理由って何だ？」

「あいつらも心配してるかもしれないし・・・そろそろ元の世界へ帰らねぇとな」

「「「三時間後に巨大隕石が日本に衝突するだとぉぉぉぉ！？」」」

「たかがデカイだけの石っコロ、俺達がブッ壊してやるよ」

～次回～

『不死と
超兵と
戦う理由』

お楽しみに！！

迫り来る危機、暴かれた秘密（前書き）

山のようなテストが終わって漸く一段落付きました。

投稿が遅くなって申し訳ないです。

あと一つ謝罪があるとしたら、予告で言ってた内容が収まりきらなかったことです・・・・。

では、本編をどうぞ！！

迫り来る危機、暴かれた秘密

ＩＳとは全く関係の無い戦いが終わってから少し時が経ち、連邦本部から場所は変わってＩＳ学園ゲート前。そこには一人の男が仁王立ちしており学園をまじまじと見ていた。

「ここが俺の聖地となるのか・・・悪く無い」

フッと鼻で笑って何気に危ない発言をしているのはこの際無視。男性はずかずかとゲートをくぐり園内へと足を運ぶ。すると、ゲート内側にいた緑の髪の女性が男性に歩み寄ってきた。

「あ、あの～、すみません。ここは関係者以外立ち入り禁止なんですけど・・・」

ここ暫く出番が無かった山田先生はおどおどしながらも話しかける。だが、男性が歩みを止めることは無い。

「あ、あなたッ！良い加減にしないと警備の人を――」

「安心しろ、俺は怪しい者じゃない。寧ろ、全てにおいて見本となる男だ」

声を遮るようにそうは言うものの、クッソ暑いこの真夏に白スーツに白帽子は怪しすぎる。駄目だ、この人・・・馬鹿だ、と思った山田先生が本気で警備の人を呼ぼうとしたその時。

「全く、お前は何をしているんだ・・・？帝」

声の持ち主である千冬は呆れた表情をしており、頼もしい人の登場に山田先生はホッと安心する。

「何もただ、俺の聖地となる場所を観さ――――」

「聖地じゃない。職場だ、馬鹿者」

やれやれと米神を押さえた千冬はここは任せるように山田先生に言った。そして、山田先生がいなくなり、周囲に人がいないのを確認した二人は一気に表情を真剣なものへと変えた。

「で、どういう風の吹き回しだ？お前がここで教師をしたいなどと」

男を教師にするのは大変だったんだぞ、とは敢えて言わなかった。

「・・・・これを見ろ」

帝は重々しくも口を開きながらＹシャツを捲って脇腹を見せる。そこには生々しい傷跡があり、千冬は目を見開き驚愕する。

「この傷は、一ヶ月前に付けられたものだ。擬似太陽炉搭載型のＩＳによってな」

ここで千冬が真っ先に思い浮かんだのは臨海学校の時に現れた黒い仮面の男。しかし、・・・・。

「俺は決して油断をしていたわけではなかった。それでも、俺と幻騎士はかなりの手傷を負わされた・・・・。あの女と、そのガンダムに」

そう言った帝は携帯サイズの端末を出して操作する。数秒後、操作を終えて千冬に渡すと、受け取った千冬は端末に移し出されている写真を見た。

「これは、アルケー・・・・いや、ディアボロスか・・・・？」

千冬は写真を目を細めて睨み付ける。映っている白いＩＳの形状はアルケーとディアボロスに酷似しており、違う点があるとすれば二機には無い推進翼（ウィング・スラスター）。それは神々しく見えるが、操縦者の口元が邪笑に歪んでいることによって禍々しく見える。

「どちらでも無いだろう。その証拠に・・・・」

千冬が持っている端末を軽く操作して、画面を拡大させる。拡大された画面には、機体名であろう英語が装甲に刻まれていた。

「『Ｓｉｒｉｕｓ（シリウス）』・・・・か」

「機体性能もそうだが、操縦者も異常だった・・・・。まぁ、似たような奴が他にも一人いるんだがな」

「それは・・・・政志のことか？」

「鈴木は、間違い無く世界最強レベルの男だ。そして、あの女からはその鈴木と同じ臭いがした・・・・。鈴木が破壊の神なら、あの女は死神と呼ぶに相応しいだろう」

『死神』。文字通り、死を司る神。その話しをし始めた途端に、今までクールだった帝の頬に一筋の汗が流れる。

「で、それがお前が教師になるのとどう関係していると言うんだ？」

「あの女は・・・・去り際にこう言ったんだ」

『近い内に、また戦うことになるでしょうね。全てが交錯する彼の地・・・・』

『ＩＳ学園で』

着実にＩＳ学園へ危機が迫っている。全ての命を刈り取る死神と、全てを打ち砕く破壊の神。近い将来出会うであろうこの二人によって、悲劇が訪れることなど誰も知り得はしなかった。この時は、誰も・・・・神ですら。

そんなシリアスな展開がされている同時刻。この小説の主人公達はというと・・・・。

「絶命までのカウントダウン、俺が数えてやる!!」

「待てい!!先ず何のことか説明しやがれ!!」

「取り敢えず落ち着や政志!!」

「そうだよ!それにボク達何も悪いことしてないよ!!」

また馬鹿騒ぎをしていた。

「ウルセェぞ、塵芥共!!特に金髪の方は、存在すらも末梢してやる!!!」

「何ですとぉぉぉぉぉ!?!?」

現在進行形でななせ達の目の前でアル、龍鳳、クリスが破壊神の魔の手から逃げている。建物から出て行く三人とそれを追いかける政志。誰もがその光景をアホを見る目で見ていた。何故こんなことに

なったのかと言うのを説明するために、時は十分ほど遡る・・・・・。

見事ホルモンメモリを破壊し男の姿に戻った政志と夜明は、ななせ達と共に本部へと戻って行った。そして、建物の中に入ってすぐに出迎えてくれたのは

「テメェ等も男に戻ってたんだな。良かった良かっ――――」

「良かねぇわ!!お前らのせいで、俺達がどんな目にあったと思ってんだよ!?」

ド豪い形相のアル、一夏、龍鳳、クリス、ヴィンセント。五人の表情からはかなりの疲労が見受けられ、服が着崩れしている。何故こうなったかと言うと、全ての原因は本部の人間にあるのだが・・・・取り敢えず、説明の為にもう一度時を遡ろう。

政志達が井坂からメモリのことについて聞いた後、ななせ達の元へ向かおうと決めて外に出ようとしたのだが、ここで問題が発生した。

「おい。誰だよあの美少女達」

「見かけない顔だけど、あの服は・・・・」

辺りを警戒して誰にも見つからないようにしていたのだが、玄関ホールで見つかってしまった。そして、一人の軍員が見知らぬ美少女達の服装に目をやり、まさかと思いながらもあることを口にした。

「もしかして・・・・元帥？」

ギクッ！！と景気の良い効果音が響いた途端に、あらゆるところから人が湧き出した。

「どういうわけか知んねぇけど、元帥達が女になってるぞ！！！」

「日頃の鬱憤、今こそ晴らしてやろうぞおおおおおおお！！！」

≪うおおおおおおおおおお！！！！≫

目を血走らせながら、男女問わず巨大な波となった馬鹿共が背後に迫ってくる。情け無い部下たちに舌打ちをした政志はＩＳを起動させようとするが起動しない。アル達と顔を見合すとどうやら彼等も同じようで万事休すとなった。

「・・・・仕方無ぇ。ここはあの手で行くしかないか」

「何か良い手があるんだな、政志！」

「ここはお前に任せたで！」

真剣な政志の眼差しを見て、全てを託すことにしたアル達。

「一夏、アル、龍鳳、クリス、ヴィンセント。先ず、お前等五人は

何とかしてあの馬鹿共を止めろ。その間に俺と夜明が逃げ切る！」

説得力があるように聞こえるが、ぶっちゃけ

「それって俺達に囮になれってことかよ！？」

「囮じゃねぇ、生贄だ」

「「「「「余計性質悪いわッ！！！！！」」」」」

当たり前の如く嫌がる五人を無視した政志は夜明にアイコンタクトを送る。なるほど、と理解した夜明は政志とほぼ同タイミングでジャンプして後ろを走っていた五人に回し蹴りを叩き込んだ。

「「「「「ドベシィッ！！！！！」」」」」

今の美少女となっている彼等から何とも言えない悲鳴が聞こえた。

「やっておいて言うのもなんだが・・・大丈夫なのか？あいつ等」

「別に死にはしないだろう。あいつ等の犠牲を無駄にしないためにも、さっさと行くぞ」

苦笑いを浮かべる夜明を引き連れて政志は自称『禁じられた森』へと向かい、背後の五人の元男子達はもみくちゃにされるのだった。

ということがあり、アル達はキレているのだ。

「お前らのせいで・・・お前せいで・・・・！ウワァァァァ！！！」

「一体何があったんだよ・・・・」

頭を抱えて叫び狂うアルに政志と夜明の同情の視線が刺さる。一夏達もアルほどではないが目が逝っている。政志の呟きを聞いてか通りかかったシエルがニヤニヤしながら歩み寄ってきた。

「政志。何があったか教えてあげようか？」

「あぁ、頼――――」

「「「「「止めレェェェェェェェ！！！！」」」」」

ポケットから何かを取り出そうとしていたシエルにアル達の必死の制止の声が掛かる。ここまで来たら意地でも見てやろうと思い、政志は再び鬼と化す。

（※一場面ですが、過激なシーンなので音声のみとなっています）

「石破ァ！天驚拳！！！」

「「「「「あべしィィィィィィィィッ！！！！！」」」」」

「ホント無茶苦茶だな・・・・お前」

ネタすれすれの某マスターアジアっぷりの攻撃を受けた五人は黒こげになって沈黙する。今更とも言えることを言う夜明と、ななせ、

ラウラ、太陽、箒、シャル、鈴、セシリア、そして政志はシエルがポッケから出したものを見た。中に入っていたのは五枚の写真。だが、その写真に写っていたものを見て、政志、夜明、ななせ、ラウラ、太陽は顔を引き攣らせた。

「うん。これはアウトだね・・・・」

きっぱりと断言するななせの目に映っているのは、様々なコスプレをしているアル達（安心して下さい、女の姿です）の写真。一夏はミニスカポリス、龍鳳はミニスカナース、クリスはバニーガール、ヴィンセントは着物、そして一番の問題はアルの格好だった。

「ビキニって・・・・。男として完全に自殺もんだろ」

そんな風に政志達は引いていたのだが、シャル、箒、鈴、セシリアは違った。若干息が荒くなっており、目がヤバイことになっていた。

「シ、シエルさん・・・・ッ！これをどこで！？」

「これなら、あそこで売ってるよ」

セシリアの問いにシエルが指差して答えた刹那、風切り音と共に四人の姿が消えた。

「あいつらって、やっぱ馬鹿なんだな」

小さな屋台みたいなところに財布を出して食いついているシャル達を政志は呆れた表情で見ていた。すると、不意にシエルのポケットから一枚の写真が落ちて、シエルは慌てて拾おうとするが、その前に政志が拾った。

「ったく、お前もお前だぞシエル。あいつらの黒歴史買いやがっ・・・・」

写真を見た瞬間、政志の動きが止まった。何事かと思い夜明達が覗き込む写真には何時の間にか撮られていた朝イチのタンクトップ姿の政志（元男子状態）だった。顔を赤くしてバッとそれを奪い取ったシエルは気まずそうに走り去って行く。本気でこの軍の行く先を心配した政志だった。

「確かに・・・・これは、キツイな」

「ほうほう。僕達の気持ち～、分かってくれましたかぁ？」

「ほなけど、政志君には反省の色が見えへんなぁ」

「ホント困るよね～」

何時の間にか復活したアル、龍鳳、クリスがドヤ顔で政志を見る。復活した際に写真を必死で買おうとしているシャル達が目に入ったが、見なかったことにした。流石に悪かったと思い始めたのか、低姿勢になった政志に対して調子に乗っていると、ルーシィがやって来た。しかし、とても良い笑顔なのだが、目が笑っていなかった。

「これ・・・・この間アル達が行った支部から届いたものです」

手に持っていた大きめの封筒を政志に渡したルーシィはそのまますぐに立ち去った。未だに目の前で調子に乗ってる3馬鹿を尻目に、何だ？と思いながら封筒の裏を見ると、

『アーノルド・ギアナ大将、龍鳳・クシュリナーダ大将、クリストファー・トールギス大将。上記の三名の報告書再提出を願う』

「？―？」

ガチで何のことか分からず、封筒を開けて中から三枚の紙を取り出すとアル、龍鳳、クリスが提出したであろう報告書があった。本来なら大将である彼等は報告書など出さなくてもいいのだが、『こういうことは積極的にやろう』と言い出して会議に出たら必ず提出するようにしている。要するに、ちょっとした宿題である。三枚あるうちの一番上にあるクリスの報告書にはこう書かれていた。

『たった十分で出来る！電子レンジを使った、簡単プリンのレシピ～♪必要な材料は・・・・』

龍鳳の場合。

『面倒なので上に同じ』

アルの場合。

『この前、政志の部屋に入った時にウッカリＤＶＤ落としてキズ付けちゃった。でも、本人にはバレテないから大丈夫だよね（キリッ）』

「・・・・・」

「政志・・・・どうしたの？」

黙ったままプルプル震え出す政志を気に掛けてななせが話しかける

と、手に持っていた報告書をグシャッと握りつぶした。物理的な殺気を放つ政志から3馬鹿以外の者は全員ササーッと離れていく。

「あ～あ、僕もう生きていけませ・・・・ってあれ？皆どったの？」

さっきまで回りにいたななせ達が何時の間にか距離を取っており、額には一筋の冷や汗を流している。そして、周囲を見渡していると政志と目が合った。だが、その目は虚ろで俗に言う『レイプ目』と呼ばれるものだった。

「テメェ等纏めて・・ブッ殺す！！！！！！！！！！！！！！」

そして、時は今現在。政志からアル、クリス、龍鳳が逃げているところに戻る。

「おいおい、どうすんだよ！？アレに捕まったら洒落になんねぇぞ！！！」

アルの言うアレとは勿論政志のことである。背後に迫る政志は正に阿修羅そのもの。捕まる＝死と言う式が成り立つのは言うまでも無い。

「しゃあない！ここはあの手で行くぞ、クリス！！」

「ＯＫ、龍鳳」

「何だよ、その手ってゴヘッ！！」

龍鳳とクリスの二人から両脇腹に拳をお見舞いされたアルはその場に倒れる。龍鳳とクリスは振り向きもせずに森の中を爆進していき、アルも立ち上がって走り出そうとするが、

「やあ、アーノルド君♪」

「政志さん！？取り敢えず落ち着きませギャアアアアアア！！！！」

目の前が暗くなったと思ったら頭蓋骨がメキメキと大変な音が鳴り出した。政志はアイアンクローで掴んだアルの体を片手で持ち上げて更に力を込める。

「死にます！死ねます！死なされますゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！」

「俺のこの手が紅蓮に染まる！！貴様を殺せと轟き叫ぶ！！殺・戮ゥ！！ジェノサイド・フィンガアアアアアアアア！！！」

「アンギィアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！」

アーノルド・ギアナ、ここに死す・・・・。

「な、何とか逃げ切れたみたいだね・・・・」

「せ、せやなぁ・・・・」

息を切らして森にある川辺に座り込むクリスと龍鳳。尊い犠牲があったものの死の危険を回避した二人は静かに流れる川を見つめる。二人の呼吸が落ち着き、汗が引いたぐらいでクリスが徐に口を開いた。

「ねぇ・・・・。龍鳳ってあのこと鈴ちゃんに言ったの？」

「あのこと・・・・？あぁ、あれか。そういや、まだ言うてへんなぁ」

「別に鈴ちゃんなら大丈夫だと思うよ？龍鳳が『超兵』だって知っても」

「まぁ、俺もそう思おとるけど・・・・言い出すキッカケがあれや

ねん」

ハハハと乾いた龍鳳の笑い声を聞いたクリスは急に冷めた表情になり立ち上がった。

「それはそうと・・・・いい加減その下手な関西弁止めたらどうなの？・・・・ブルーノート」

ブルーノートと呼ばれた龍鳳は頭をバリバリと掻きながら腰を上げて、ニタァと笑みを浮かべて蒼い瞳でクリスを見据える。

「よく分かったじゃねぇか。流石は化物と言ったところか？」

「御託はいいから、さっさと龍鳳から出てってよ。君がいると、龍鳳だけじゃなくて他の人にも迷惑が掛かるんだから」

「お前馬鹿か？この体は元々俺のモンだったんだ！それが研究所のやつらに弄くられたせいで、俺は脳味噌の片隅に追いやられたんだよ！人格を上書きされたせいでなぁ！！！」

忌々しそうに語るブルーノートの瞳は青にも関わらず怒りの炎が見受けられる。それでも、クリスは表情を変えることはなく真直ぐな瞳でブルーノートを睨み付ける。

「例え龍鳳が作られた人格だとしても、ボク達の大事な仲間に変わりはない。・・・・でも妙だね。君はあの時に受けた傷で死んだと思っていたのに」

クリスのその言葉を聞いた龍鳳は前髪で隠れた額の傷を親指で差す。

「確かに、こいつのせいで表に出れなくなっちまった。だがそれも、一昨日までの話しだがなぁ！」

ブルーノートが歓喜の雄叫びを上げると、草むらからパキッと音がした。クリスはそれが何なのかは分からなかったが、ブルーノートには分かっていたようで表情が再び邪悪な笑みで歪んだ。

「隠れてないで出てきたらどうだぁ？」

すると、草むらから出てきたのは目の前の状況に困惑している一夏。アル達が心配になって後を追いかけた結果がこれなんだが、今の状況からして不幸としか言いようがない。

「龍鳳、お前・・・どうしちまったんだ？」

目の前の青い目をした龍鳳に一夏は声が震える。いつもの調子で『何でもあらへん』と答えてくれることを願うが、それはすぐに打ち破られた。

「龍鳳ぉ？違うなぁ、俺の名前はブルーノート。ブルーノート・スクライダーだ！」

手を広げて自らの真の名を名乗ったブルーノートは驚愕の色に染まっている一夏の肩に腕を回す。

「俺はなぁ。こう見えても、お前とヴィンセントのこと気に入ってんだぜ？」

腕を振り解こうとするが、耳元で囁かれる度にあたる息が人間とは思えないぐらいに冷たく息を詰まらせる。

「俺が目覚めてからこの二日間。中からお前ら二人を見てたが、中々の逸材だ。特に、あいつの弟なんて最高だぜ。表に出ていなくても、心地良い嫉妬をビンビン感じてよぉ！あれで欲望を完全に開放した時が楽しみで仕方が無――――」

「ヴィンセントはそんな子じゃないッ！！！」

「・・・・あぁ？」

気持ちよく話しをしていたのを折られてか、不機嫌になったブルーノートは殺意の篭った視線をクリスに差した。

「あの子のことを何も知らないお前が、ヴィンセントを語るなッ！！！」

ブルーノートとクリスの殺気がぶつかり合い、一陣の風が吹く。数秒睨み合ったぐらいで、ブルーノートが舌打ちを鳴らす。

「ちっ、お前とはここでケリを着けてもいいが、俺の親友の一夏がいることだ。今日の所は勘弁してやる」

「よく言うよ。君一人じゃ大したことないクセに」

「だから前から言ってんだろ？俺と龍鳳は二人で一人の、最強の超兵だってよぉ」

ブルーノートは肩に回していないもう片方の手を胸ポケットに突っ込んであるものを出す。そして、それをゆっくりとクリスへと向ける。

「なッ！？」

横目に映る一丁のマグナムに一夏は度肝を抜かれる。指をトリガーに掛けて引こうとしているのが見えて、止めようとするが時すでに遅し。

「よぉく見とけよ、一夏。こいつの・・・・化物っぷりをなぁ！」

バァンッ！！と銃声を響いた刹那、弾丸はクリスの額のど真ん中を貫いた。白い髪を血で真っ赤に染め上げながら倒れるクリスに腕を振り解いた一夏が瞬時に駆け寄る。

「クリス・・・・ッ！クリスゥゥゥゥゥゥ！！！」

「別に心配することねぇのに・・・・まぁいいか。そろそろ眠くなってきた頃だし、適当にぶらついて時間でも潰すか」

マグナムを仕舞ったブルーノートは呑気に欠伸をした後、その場から立ち去って行った。一夏はクリスを殺したブルーノートに憎悪を覚えて、ＩＳを展開させようと立ち上がる。だが、立ち上がった時に足元に出来た影が二つ。一つは自分のものだと分かったが、もう一つが何なのか分からなかった。

「あ～あ。髪が血塗れになっちゃったよ」

バッと振り返った一夏の目に映ったのは、額に穴が開いた状態でケロッとしているクリスだった。目を見開いて驚きの余り声が出ない一夏にクリスは渇いた笑みを浮かべる。

「あぁ、これのことなら大丈夫だよ」

すると、額と後頭部の傷が塞がっていき、数秒後には完全に治っていた。

「クリス・・・・お前は・・・・・」

親友二人の秘密を目撃してしまった一夏はもう後戻り出来ない・・・・。それほどの闇を彼等は有しているのだから。

「龍鳳は・・・・ブルーノートが言ってた通り、彼の凶暴性を抑える為に作られた人格。人工的に脳量子波を使えるようにされた強化人間兵士、『超兵』」

黙っていたクリスが意を決した表情で語るのを一夏はただ聞くしかなかった。たとえ、目の前にいる少年が人間とは次元が違う存在だとしても。

「そしてボクは・・・・不老不死の『不死』を体現した『結晶体』。何があっても死ぬことを許されない存在、『ＥＴＥＲＮＩＴＹ－ＣＲＹＳＴＡＬ』。通称・・・・・」

「『ETERNAL（エターナル）』」

不死の記憶、そして危機は突然に（前書き）

最近ゲーセンのガンダムＥＸＶＳってやつにハマッてしまいました

金の消費が半端ネェっす（涙）

では、本編をどうぞ！！

不死の記憶、そして危機は突然に

「一夏くんは、サンクキングダムって知ってる？」

血塗れになった首から上を、川の水で洗い流しながらクリスは一夏に問いかける。クリスの衝撃の告白によって未だに唖然としている一夏は漠然と返事をすることしか出来ない。

「いや・・・・知らないけど」

「そっか・・・・。まぁ、一夏くんなら仕方無いよね」

そういう反応には慣れているのか、クリスは何処か遠い目で空を仰ぎながら語り出す。

「サンクキングダムって言うのは、ロシアの軍事機業の最先端を行く会社なんだ。そしてボクは・・・・その社長、ハルベルト・ピースクラフトの実の息子なんだよ」

「えっ？でも、お前って・・・・」

「確かに、今のボク達が名乗ってる名前と違うよ。その訳を説明するには、どうしてボクがこんな体になったのかも言っとかないとね」

いつものように明るい笑顔をクリスは一夏に向ける。だが、そこからは哀しみしか感じ取られず、一夏の胸の中に重い何かが圧し掛かる。

「ボクは生まれた時から体が弱くて・・・・いつ死んでもおかしく

無い状態だったんだ。そこで、科学者だったお母さんが、お父さんと結婚する前から研究をしていたある処置をボクに施したんだよ。誰もが一度は望んだことのある・・・『不老不死』のね。一億分の一の確率でボクは『不老不死』の『不死』の部分を手に入れることが出来て、生きながらえることが出来た。それで何もかもが解決したかに見えたんだけど、ある日事件が起きた・・・酔っ払い運転による交通事故。車が歩道に突っ込む何処にでもありそうだけど、そのせいで・・・・」

刹那、クリスの表情は一気に冷めたものになり、冷たい風が吹き詰める。

「お母さんが死んじゃったんだ・・・しかも、ボクを庇ったせいでね」

今までで一番、一夏が見た中で最も悲しい瞳をクリスはしている。悲しい瞳のままで口元が自嘲の笑みに歪むのは哀れでしかなかった。

「ホント馬鹿だよね。死なないボクを庇うなんて、優しいにも、ほどがあるよ・・・・ッ！」

両の目から流れる滴を一夏は見逃さなかった。

「そして、お母さんのお葬式が終わった次の日からボクにとっても地獄が始まったんだ」

淡々と自分の過去を話す少年がいつもの彼だとは一夏には思えなかった。だが、それは一夏が知らなかっただけ。彼には・・・彼等にはそういう闇があるはずだとは薄々気付いていた。そうでなければ・・・・。

「誰よりもお母さんを愛していたお父さんは、先ず最初にボクを何度も殴ったね。泣いて『止めて』って言っても止めてくれなかった・・・。そこからはもうボクは彼にとって、息子でも何でも無かったんだろね。会社の発展のために、ボクの体を何度も解剖して色んな薬を盛って、『再生速度を測ったり』とか『首を切り落としたらどうなるか』とか・・・ホントに辛かったよ。自分達がこういう体にしたくせに、最後には化物扱いして実験動物にするんだからね。そして、ボクはそんな毎日に耐え切れず研究所から逃げ出したんだ。その後は大体分かると思うけど、運良くお義父さんに拾われて、政志達と一緒に暮らすことになったんだ。忌々しいピースクラフトの名を捨てて、大好きなお母さんの旧姓である『トールギス』を名乗ってね」

漸く重い話しを終えたクリスはふぅと一息付く。一夏は相変わらずどうしていいか分からずただ話しを聞いていただけで、未だに信じられないような顔をしていた。ハハハと空笑いをするクリスはポケットから棒付きのキャンディーを取り出してペロペロ舐め始めた。

「この体色々と便利なんだよ。いっぱい御菓子食べても糖尿病にはならないし、もし虫歯になっても、抜けばすぐ生えるしね。でも、ヴィンスには本当に悪いことしちゃったよ・・・・」

場を和ませるためか、いつもの調子の声色で話し出すが、キャンディーを舐めるのを止めた。

「家のこと全部押し付けて、勝手に逃げ出しちゃったからね。七歳のころに家を出て、再会したのが二年前。あの子もお父さんが嫌いだったみたいで、軍に入ったんだって。知ってた?ヴィンスのレグナントは、太陽炉以外全部ヴィンスが作ったんだって。ホントに誇

れる自慢の弟だよ、ヴィンスは。家の名前を捨ててトールギスを名乗るところも、やっぱり双子なんだな、って笑い合ったっけ」

懐かしいように語るクリスの微笑みはいつものクリスのもの。そんな彼を見た一夏は、先ほどまでの自分の態度を恥ずかしく思う。だが、

「別に気にしなくていいよ。この話しをアル達が聞いた時も今の一夏くんと同じ反応してたから。心の無い人だったら、逃げ出すんだけどね。でも、政志の反応には驚いたなぁ・・・こっちは真剣に話したつもりなのに、あんな反応されたら困っちゃうよ」

その反応というのがコレ。

『どうでもいいわボケェ!!!』

ズサーッ!と一夏は思わず扱けてしまった。

「ちょっと待て!その反応はおかし過ぎるだろ!?」

「話しをする前にアニメ見てたからね。多分それで怒られちゃったんだろうけど、あれはあれで結構救われたよ」

『お前が不死だか何だか知らねぇが、正直どうでもいいんだよ。お前が俺達のダチに変わり無ぇんだから』

その何気ない一言。それによってクリスは救われた。想い一つで人は変われる、そう思えるようになったのだ。

「だから、今度は政志を救って上げないといけないんだ。どんなに

辛いことがあっても・・・・。政志だけは・・・・」

優しさを知るものは必ず痛みを、苦しみを、悲しみを知っている。破壊の神が何を抱えているのかは一夏には分からない。今はただ、クリスの決意の篭った瞳が見つめる先に視線を置く。そこには酷く澄んだ青空が広がっていた。

「・・・・・」

アルを屍した後、政志はアルカディアス内のグラウンドを眺めていた。フェンスの向こうでは彼の妹達が体育の授業か何かで運動している。元気に明るく、楽しそうにしている彼女等を見る政志の目は一人の兄でしかなかった。

「へぇ、あれがお前の妹か。言われてみれば、何処となく似てるな」

「夜明か・・・・。何の用だ？こんな所に」

夜明が隣に立ち並ぶと政志はフェンスに背を預けた。政志の意外な一面を見るコトが出来た夜明はニヤニヤする。

「大した用じゃねぇよ。ただ、シャルに頼まれてあの馬鹿回収しに来ただけさ」

夜明の親指を差す方向には屍（死んでないんだけどね）と化したアルが横たわっていた。

「そいつはご苦労なこった」

「人事だと思いやがって・・・・。まぁ、いいけど」

それを限に二人の会話は無くなった。海が近いせいか波の音が良く聞こえる。出会って間もない二人だが、互いのことは言葉にしなくても理解出来た。小さく溜息を吐いた夜明は何となく口を開いた。

「なぁ・・・・お前の戦う理由って何だ？」

「・・・・いきなりだな、オイ」

頭を掻きながら政志は面倒臭がる。唐突な問いの答えを空を仰いで模索する。そんなことなど近々考えたことがなかった政志にとって、気恥ずかしいものがあった。

「今のこの世の中、未だに戦争をやりたがる奴等がいてな。そいつ

等のせいで犠牲者が出るのが、我慢なんねぇんだ。だから、そういう歪みを俺は破壊する。世界のために・・・・・。っていうのは、建前で一番の理由が他にあるんだけどな」

「何だよ、それって？」

「大事な仲間を悲しませたくない。あの馬鹿共と一緒にいる毎日を、俺は守りてぇんだよ」

「・・・なるほどね。お前らしくていいんじゃねぇのか？」

「自分で聞いておいてその反応は無いだろ・・・・」

ハハハハハ、と笑い合う二人。だが、こんな日常がいつまでも続くことが無いのは分かっていた。違う世界の夜明と太陽は何時かは元の世界へと帰らなければならない。

「俺達もそろそろ帰らなねぇとな・・・あいつらも心配してるかもしれないし」

「こっちに来れたぐらいだ。その内帰れるようになるんじゃね？」

「じゃね？って・・・ま、取り敢えず世話になったことは感謝してるぜ。馬鹿騒ぎには参ったけど

「それは全力で謝らせてもらうわ」

そんな他愛も無い話しをしていると、平和を崩すかのように政志の眼前に一枚の投影ディスプレイが現れる。そこに映っているシエルの表情は穏やかなものではなく、かなり焦っておりただ事ではない

と政志と夜明には分かった。

「またメンドクセェ事になってきやがったな・・・・・」

「三時間後に直径１０００Ｍの隕石が日本に落下する」

・・・・・・。

≪ハァッ!?!?!?≫

政志のいきなり過ぎる告白に全員が驚愕する。呼び出しをくらって会議室にいるのは、政志、夜明、一夏、アル、龍鳳、クリス、ヴィンセント、ななせ、太陽、ラウラ、箒、シャル、鈴、セシリア、そして本部の上階級の者達。

「一応聞くけど、もしそのまま日本にぶつかったらどうなるわけ・・・？」

大体予想は出来ているが聞かずにいられなかった鈴が政志に問う。

政志は黙ったまま全員の前に隕石の落下による予想被害図を出した。

「嘘っ！？これって・・・・」

シャルが声を出すのも無理は無い。何故なら・・・・。

「このままいくと、日本全域が壊滅は勿論・・・・下手すれば地球から海が無くなっちまう」

誰もが唖然としている中、政志は淡々と冷静に語りを止めず続ける。

「この隕石は特別でな。何かしらの電波を発してるみたいで、そのせいもあって発見に遅れちまったんだとよ。ウゼェにも程があるんだよなぁ、全く・・・・。でだ、世界中の政府からの要請で俺達、地球連邦がこれの排除任務を行うことになった。何か質問とかあるか？あるんだったら早く言えよ」

「えぇと・・・・じゃあ、よろしいでしょうか？」

誰もが沈黙している中、セシリアがゆっくりと挙手した。その表情からは動揺が見受けられるが政志は機に止めなかった。

「それだけ大きな隕石を、どうするつもりですか？」

この問いに政志は最初は呆れた表情になるが、すぐに口元を歪ませ

た。それからは恐れなどなく、あるのは自信のみ。

「んなもん決まってんだろ。たかがデケェだけの石ッコロ、俺達がブッ壊してやるんだよ」

大雑把過ぎる政志の答え。だが、それを聞いた一同から僅かならも緊張が消えて行く。それを見た政志は満足そうに口元の笑みを更に深める。破壊の神に壊せぬものなど何も無い、と誇っているようにも見える表情は獣そのもの。

「始めるぞ。オペレーション、『メテオ・ブレイカー』」

不死の記憶、そして危機は突然に（後書き）

Q：2対2で行う試合をダブルスと言います。では1対1は何というでしょうか。

A：シングルス

アル「デスマッチ」

政志「勝手に死んでろ、馬鹿」

～次回～

『友情と
別れと
隕石破壊作戦じゃこの野郎ッ！！』

お楽しみに！！

トランザムライザー（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ないです

参考資料に使えないかと思ってガンダムWを見ていたら完全にハマッてしまいました

面目次第もございません・・・・

では、本編をどうぞ！！

トランザムライザー

ななせ中将の作戦説明タ～イム。

「先ず、本部のハイパーメガ粒子砲全四門での隕石の四角を出来るだけ削った後、残りを宙(そら)に上がっている第一部隊の一斉攻撃で破壊。そして日本の上空にて展開している第二部隊は、大気圏で燃え尽きなかった隕石の破片の処理にあたってもらうから」

「第二部隊にはアル、龍鳳、ヴィンセント、一夏、箒、シャル、鈴、セシリア、ジンクス部隊。第一部隊次第で仕事の量が変わるから、何が起きてもいいようにしててね。そして、一番重要なのが大火力持ちの第一部隊。これは、あたし、ラウラ、クリス、夜明、太陽の五人編成で自機が持てる最大の一撃で、出来ることならこれで全部壊したい。最後に政志は、ヤークトアルケーのトランザムがまだ不安定だから第一部隊と第二部隊の中間地点にて待機。状況に応じて好きに動いて貰っていいから」

「一般人にはこの事伝え切れてないみたいだから、彼等の日常を守るためにも何が何でも一欠片も落とさないこと。最後にあたし個人から一言・・・世界だけじゃなくて、あたし達の平和も守ろう。そのためにも、誰一人死なないでね！」

「まさか隕石を壊す日が来るとは・・・・何処のアルマゲドンだよって話しだよな」

「そういうギリギリのネタは止めようね」

第二部隊のアルとシャルは何れ来るであろう隕石の落下コースにいた。周囲には彼等の他にも多くのＩＳを纏った人間が展開している。

「さっきから気になってたんだけど、それは何？」

アルが両手で抱えているのは身の丈の倍以上ある馬鹿デカイ大型のライフル。いつものケルディムには無い武装をシャルは不思議そうな表情で見る。

「ん？あぁ、これか。これは俺専用の超長距離狙撃ビームライフル。飛距離が二百キロで、威力もクソ高いんだけど、ご覧の通り持ち運びが面倒だからな。今まで使う機会が無かったんだよ」

狙撃に関しては世界一の腕前を持つアルにとってこの武装は鬼に金棒といっていいものである。だが、如何せん大きさが大きさな為出番がなかったのだ。しかしそれも、第一部隊次第でまたも出番が無くなる可能性がある。出来る事ならそれを願うアルは仲間がいる宙

を見上げる。

「嫌な風が吹きやがるぜ。・・・・ったくよぉ」

彼の呟きは風に飲まれて消えて行く。

「これが宙か・・・・」

ラウラは初めて来る宇宙空間に神秘的なものを感じた。写真などで見るのとは比べ物にならない青く澄んだ地球とそれを覆う闇。彼女を魅了させるには十分過ぎた。そんなラウラを面白そうに見ていたななせはゴホンと咳払いをする。

「感動するのは良いけど、この五人の中で一番重要なのが自分だってこと忘れないでね」

「そ、そんなこと分かってる。私とダブルオーが今作戦の要なのだろ？」

トランザムを発動出来るようになったおかげでダブルオーの最大武装、『ライザーソード』が使用出来る。数千メートルを誇る超極大の高出力ビームサーベル。ななせ、クリス、夜明、太陽の集中砲火の後、これで小さくなった隕石を叩き切る。計算上、残りの破片は大気圏で燃え尽きて一件落着のはずらしい。

「それにしても、二人共ごめんね。また迷惑掛けちゃって」

ＧＮバズーカを両手で持ったクリスが夜明と太陽に申し訳なさそうに言う。

「気にすんなって。困ったときはお互い様だろ」

「政志が言ってた通り、たかがデカイだけの石ッコロだ。それを壊すぐらい造作もないさ」

「ハハハハ。それもそうだね～」

「「オイ、さっきの俺（私）の言葉を返せ」」

全く持って緊張感の欠片の無い会話が交わされる。やれやれと溜息を吐くななせは視線を無限に広がる闇へと移す。細めた目の先にはゆっくりと近づく大きな石の塊があった。遠近法の関係もあって大きさに実感がなかったが、地球に落としたらどれだけの被害が出るのかは予想出来た。

「そろそろ時間か・・・・。シエルさん、何時でもいけます」

【了解。では、ハイパーメガ粒子砲の使用に伴い、各員は射線場から離れてください】

五人にシエルからの通信が入り、指示通り動き始める。如何せんこの指示に従わない場合、地上から放たれるハイパーメガ粒子砲が直撃するかもしれない。そんなことになったら、宇宙空間ということもあり、『はい、死亡～』ということが有り得るのだ。多くの者が緊張している中、作戦に関わる者全員へと政志からの通信が入る。

【聞こえてるか野郎共。作戦開始前に、元帥として一言言いたいことがある】

真剣な声色に皆がゴクリと唾を飲み込む。だが、この時皆が忘れていた。政志も馬鹿だということを。

【オペレーション・・・スタート！！】

≪それがやりたかっただけかあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！≫

某死んだ世界戦線のリーダーさん並の開始宣言が出来たことに政志は満足するが、それを聞いていた者は渾身のツッコミを入れる。

「（ま、まぁ・・・これで少しは緊張も解れたと思うから、良しとしようかな）」

溜息の持ち主であるななせは呆れながらも頬を緩ませる。だが、深呼吸を入れてすぐに顔を引き締めて両手にバスターライフルを握った。作戦開始時刻と隕石が迫り、発射シークエンスが始まる。

【ハイパーメガ粒子砲、四門の発射カウントダウンを開始。６０・・・・５９・・・・５８・・・・】

シエルの短いようで長い秒読みが耳に入る。第一部隊の皆は焦ることもなく超巨大な石の塊を見据える。発射まで思ったよりも時間が長いので政志がどうしているか見てみよう。

「（あそこでゆりっぺをチョイスしたのは間違いだったのか・・・・。やっぱ、とあるの不幸少年みたいに『お前の幻想をブチ殺す！』的な決め台詞欲しいんだけどなぁ。ん～、何かいいやつはないものかね）」

全責任者がそんなアホな考えをしている間にあっと言う間に時は過ぎていき、遂に十秒前となった。

【１０・・・・９・・・・８・・・・７・・・・６・・・・５・・・・４・・・・３・・・・２・・・・１・・・・】

【発射ッ！！】

本部の四方角から極光が放たれる。それは轟音を鳴らしながらも天へと上がっていき、数秒後にはななせ達の隣を通過した。第一部隊の皆が目を細めて四つの奔流の行く先を見据える。巨大な閃光が隕石に当たると宇宙の闇が白へと塗りつぶされた。

「隕石の破壊率３５パーセント・・・・思ってたより硬そうだけど、

やるしかねぇよな！」

黒煙の中から現れた一回り小さくなった隕石に向かって第一部隊の者は己が持つ最大攻撃の準備に入った。ななせはＧＮバスターライフルを、クリスはＧＮバズーカを連結させる。太陽は両手に持ったアロンダイトと身体中に装備していた全てのソードビットを連結させていき、巨大なビームブレード、『アロンダイトＢ（バスター）』の柄を握り締める。

「「トランザム！」」

【【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】】

【Ｍｏｄｅ　Ｔｒａｎｓａｍ　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？】

セラヴィーとディアボロスの装甲が赤く発光していき、バルディッシュトワイライトの装甲がスライド展開、紅の粒子を放ち始めた。夜明はレイジングウィングの全武装を展開させて双眸をマルチロックオンバイザーが覆う。ＧＮツインバスターライフルとＧＮバズーカの砲口、アロンダイトＢ、そして十を悠に超える銃口が光を放つ。

「ハイパーバーストモード！圧縮粒子、完全開放！！」

「ＧＮツインバスターライフル・・・・発射っ！！」

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）ァァァ！！」

「スターライト・・・・フルバーストォォッ！！」

全てを無に帰す四つの光は隕石へと直進していき、目標へと衝突した瞬間、先ほどと同様に闇を照らした。役目を終えた四人は襷を渡す次の者へと視線を向ける。

「「「「ラウラ（ちゃん）！！」」」」

ラウラは無言のまま両肩のバインダーと両手のＧＮソード?を隕石へ向けることで応える。高ぶった気持ちを瞳を閉じることで抑えて息を吐き出す。自分にしか出来ないこと。それを任された彼女の意識は完全に一点に集中していた。だが、そのせいで自らの背後に迫るものに気付く事が出来なかった。

「ラウラ、後ろ！！」

ななせの声が聞こえると同時に何かが両肩に当たって身体中に電撃が走った。意識が飛びそうになりながらも首を回して横目で後ろを見ると、５０メートルほど離れた空間に白い戦闘機のようなものがいて、二本のアームからワイヤーを発射していた。

「ＧＮドライヴ・・・・搭載機だと・・・・ッ！?」

苦しむラウラから掠れながらも驚きの声が漏れる。白い機体の後方部からは赤みのかかったオレンジ色のＧＮ粒子が放出されている。すぐになせ達はその機体に攻撃しようとするが、ラウラからオープンチャンネルが入ったことにより足を止める。

「全員・・・私の左側へ回れ。あれは・・・・私が、墜とすッ！」

声に苦痛が混ざっているのは明らかだったが、彼女の意志の強さも伝わってきた。ななせ、クリス、夜明、太陽は指示通りすぐにラウ

ラの左側へと移動して、それを確認したラウラは身体に鞭を入れて回れ右で白い機体と向き合う。

「圧縮粒子完全開放・・・・ライザーシステム、起動・・・・ッ！」

両肩のバインダーと両手のＧＮソード?を白い機体に向けると同時に、白い機体の前面にあるカバーが前方向にスライドして、砲身が伸びる。砲口に光が収束して発射態勢へと移行するが、ラウラはそれよりも早く動いていた。

「トランザム・・・・ライザァァァァァァ！！！！！！！！」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

装甲が赤く発光して、超極大の光柱が生まれる。白い機体は自分に向かってくる桃色の高エネルギー体に対して、砲身を戻してＧＮフィールドを発生させた。だが、ライザーソードとＧＮフィールドは拮抗することもなく、白い機体ごと飲み込んでいった。

「回れェェェェェェェェェェ！！！！！！！！」

ラウラはそのまま身体を左へと水平に、ライザーソードごと振り回す。極大のビームサーベルが１８０度回ったぐらいで隕石の側面へと当たり、焼き削っていく。しかし、ライザーソードの刀身が序々に細くなっていく、数秒後には消失して、ダブルオーライザーの装甲も黒と青へと戻る。

「隕石の破壊率は・・・・６０パーセントだとッ！？」

トランザムが終了して機体性能が極端に下がる。そのため追撃が出

来ず、ラウラの表情が苦くなる。日本壊滅とまではいかないが、直径４００メートルの隕石が落下すれば甚大な被害が出る。突然の奇襲によって作戦は失敗してしまい、五人は額に汗を流しながらも、何か良い手が無いか模索する。だが、何も思い浮かばず、隕石は地球の重力圏内へと入ろうとするのであった。

「それにしても、良かったのか？魔獣の機体を模して作った『エンプラス』をあのような捨て駒に使ってしまって・・・・」

「別に構わないわ。所詮、模作品は模作品。元になったレグナントには及ばなかったし」

地球に迫る隕石を前に困惑する五人がが映っている画面を見つつ、ブレイドは白衣の女性に問いかける。だが、彼女は興味がないのか画面を見ることなく他の作業をしながら答えた。

「しかし、破壊神が未だに動かないとは・・・・何を考えているのやら」

「さぁ?でも、折角この状況を作ってあげたんだから、動いてもらわないと困るわ」

「自らの命を危ぶめてまで見たいものなのか?ヤークトアルケーのトランザムを」

「ダブルオーのデータはある程度揃ってるけど、アルケーのデータが不十分だから、もう少し欲しいのよ・・・・。あたしの計画のために、どうしてもね」

クスクスと笑いながら白衣の女性はコンソールをか細い指で弾いていく。そして、そんな彼女をブレイドは真剣な瞳で映す。

「君と初めて会った時から言っているが、破壊神を倒すのはこの私だ。それだけは忘れないでくれたまえ」

「約束はキチンと守るわ、ブレイド。いや・・・・剣(つるぎ)と言っておこうかしら?」

白衣の女性は口元に邪笑を浮かべながら、ラウラ達が映っているものとは違う画面へと視線を投げる。

「ちゃんとあたしの思い通りに動くのよ、マサシ。近い内に始まる、『再生』のためにも・・・・」

政志が映っている画面を満足そうに見た彼女は、一旦視線を逸らして机の上に置いてある白い服へと移す。それは世界で一つしかない

学園のもので、彼女（死神）の両眼は異様な金色に輝き出す。

「そして、あなた達からは全て返してもらうわ。ラウラ・ボーデヴィッヒ、ななせ・・・・・」

トランザムライザー（後書き）

Q：ねじれ国会とはどういう状態か説明しなさい。

A：日本国憲法下の日本の国会において、衆議院で与党が過半数の議席を持つ一方で、参議院では野党が過半数の議席を維持している状態のこと。

政志「衆議院と参議院との間に時空のねじれが発生し、時空の壁を通り抜けるのに莫大なエネルギーを消費する状態」

龍鳳「どこの厨二アニメやねん・・・・」

来るは別れの時　そして・・・（前書き）

今話で長かった夏休み編も終了です

長期間のキャラの貸し出しありがとうございました！サザンクロスさんには、心から感謝します！！

それと、最後ら辺で『えっ？』と思ってしまうかも知れませんが気にしないで下さいまし

では、本編をどうぞ！！

来るは別れの時　そして・・・

「謎の敵の奇襲によって作戦は失敗か・・・・。まぁ、仕方無ぇっちゃ、仕方無ぇけどよ」

ななせからの通信を受けた政志は腕を組んで考え事をする。直径４００メートルの隕石、政志とアルケーなら壊せると言えば壊せるが、それでは駄目なのだ。壊した後の破片の事を考えると、もしもの場合地上に落下する恐れがある。要するに・・・・。

「一撃で完全消滅させるしかねぇよな」

だが、今のアルケーにそこまでの火力は無い。しかし、ここで挫ける政志ではなく、無ければ作れば良いだけの話しと彼なら言うだろう。その証拠に、政志の目には希望の光が灯っていた。一通り作戦を考えた政志はすぐにアルに通信を入れた。

「アル、俺だ。作戦は失敗、今から次の作戦を開始する、指示通り動いてくれ」

【あ～、やっぱそうなっちまったか？嫌な予感がしてると思ったら、まさか的中するとは・・・・。ＯＫ、んでこのことは他の奴に言わないほうが良いんだろ？プライベートチャンネル使ってるぐらいだし】

「お前今、あの馬鹿デカいビームライフル持ってるよな？」

【まぁ、持ってるけど・・・・これだけじゃ隕石は壊せないぞ？】

「それを使って、ラウラが削った側面を俺の真上に来るように反転させろ。一応聞くけど、出来るよな？深緑の狙撃手」

政志はアルに現在の隕石のデータを送る。大きさ、形状、落下速度、落下角度、予想質量などありとあらゆるものだ。それを隅々まで見たアルから返ってきたのは・・・・。

【はっ、上等だぁ！このぐらい俺様に掛かればお茶の子サイサイよ！】

「そうか。なら、タイミングはお前に任せるから、上の五人には離れるように伝えておいてくれ」

【応、任せとけ！】

いつもの声色の自信たっぷりの返事に政志はフッと鼻で笑う。チャンネルを切って数枚の投影ディスプレイを広げて、アルケーの現状況を分析する。火力が足りないのなら、増やしてやればいい。トランザムシステムを使って。

「なるほど、ここが問題か・・・・」

しかし、アルケーのＧＮドライヴは四基もあり、その内の二基はツインドライヴとして使われている。これにはななせも手を焼いて未だにアルケーのトランザムには不安定さを残している。今政志が見ているのは腰部のアーマーにある二基のＧＮドライヴの同調データ。両肩のツインドライヴに使っている二基は問題ないのだが、アーマーの二基から精製されているＧＮ粒子は全て武装に回している。トランザムに反応するのは両肩二基であり、アーマーの二基は元のまま。つまり、トランザムが発動できたとしても出力は二倍程度しか

上がらないのだ。

「こういうのは得意じゃねぇけど・・・やるっきゃねぇよなぁ！」

何か策があるのか、政志は獣じみた笑みを浮かべて、ななせ、ラウラ、クリス、夜明、太陽に通信を入れる。

「よぉ、野郎共。今から俺が言うことをよ～く聞けよ？アルから一通り聞いてると思うが、お前らの目の前にある石っコロは俺がブッ壊すことになった。ななせとクリスは下に降りて、今の状況を第二部隊に直接伝えろ。そっちの方が混乱が少ないはずだ。んでラウラは俺の所に来い。ちょっと頼みたいことがあるからな。最後に夜明と太陽だが・・・隕石が落ちてくるの遅められねぇか？」

【どうやってだ？】

「ん～・・・逆シ○アみたいに押し返せば？」

【テメェ、簡単に言いやがって・・・まぁ、別にいいけどよ】

【仕方無い、やるだけやってやろうじゃないか】

良い返事が返って来たことに政志は口元を吊り上げる。こうも馬鹿な仲間ばかりに囲まれている自分が嬉しくも、可笑しくも思えた。指示を出してから数十秒後、ななせ、ラウラ、クリスが降りてきて、ななせとクリスは政志と目を合わせる事も無く、そのまま通り過ぎて行った。

「言われた通り来たが、私に用とは何なんだ？」

政志の隣で停滞しているラウラは何故自分が呼ばれたのか分からなかった。ライザーソードの使用によってダブルオーの機体性能はまだ下がったままだ。

「正確に言えば、お前じゃ無くてダブルオーにあるんだけどな」

「ダブルオーに？」

「あぁ。遂さっきのトランザムライザーのデータをアルケーにインストールして、強制的に四基の太陽炉の同調率を同じにする。これなら、アルケーのトランザムも安定するし、出力もちゃんと上がー――」

「正気か、お前は!?ダブルオーとアルケーは全く違う機体。それのデータを元に無理矢理太陽炉を弄ったりなんかしたら、どうなるか分かってるのか!?」

「安心しろ。計算では五分の確率で成功するらしいから」

目の前の男は五パーセントの確率に命を賭けると言っている（ドヤ顔で）。呆れる余り、ラウラの小さな口から溜息が漏れる。だが数秒後には、渋りながらも数枚の投影ディスプレイを広げていた。

「どうせ止めろと言ってもお前は止めないのだろ？なら、必ず成功させろ。地球と、お前の為にも・・・・」

「当たり前ぇだ。俺にとって、零パー以外は全部百パーなんだぜ？俺とアルケーに出来ねぇことなんか、この世には在るかよ」

自信しか感じられない表情の政志を見たラウラは頬を緩ませる。

「それでは始めるとするか」

「あぁ、とっとやっちまおうぜ。あの二人の頑張りを無駄にしたくねぇからな」

「重ぇんだよ、こんちくしょオオオオオオ！！！」

「ちょっと無理ゲーが入ってるぞ、これは・・・・ッ！！！」

推進翼（スラスター）の出力を全開にした夜明と太陽は重力圏内に入ろうとしている巨大な岩を押し返していた。しかし、隕石は押し返されることはなく、僅かながらも地球へ迫っている。出会って二日のヲタクの頼みを素直に聞く自分達もあいつらのことを馬鹿に出来ないと心の中で自嘲する。

「もう、限界か・・・・！」

後少しで重力圏内に入ろうとしており、流石に無理と諦めが浮上しようとしていたその時。

【二人共ご苦労さん！後は俺に任せて、ゆっくり休んでな！！】

通信から聞こえたアルの渇声に夜明と太陽は顔を見合ってから隕石から手を離して、視線を隕石に向けたまま降下し始めた。

「アルのやつ・・・・どうやって隕石を動かすつもりなんだ？」

「さぁな？けど、あいつの声色からして、心配する必要は無いだろう」

距離を取って、重力に身を委ねて落下する二人。隕石が赤く染まり全体が炎を纏ったぐらいで青い星から一筋の桃色の閃光が煌いた。桃色の濃さから、超高濃度の粒子ビームであることが一目で分かった。しかし、それは隕石に直撃することなく、右上部を掠めただけ。最終的には無限に広がる闇の中へと消えて行った。誰が見ても失敗にしか見えない一撃。だが、夜明と太陽の目には違って見えた。

「あいつ凄ぇなぁ・・・・」

「自信たっぷりに言ってただけの腕はあったな・・・・」

唖然とする二人の目の前では隕石がほんの僅かだが、ゆっくりと回転し始めていた。寸分の狂いのない射撃による軌道変更。砂浜に落ちたコンタクトレンズを真夜中に探すぐらい困難なことをアルはすんなりとやってのけたのだ。これには流石の夜明と太陽も驚きを隠

せずにいた。

「取り敢えず、ここまでは予定通り。後は政志の仕事だな」

抉れていた側面が完全に下を向いたぐらいで、二人は推進翼（スラスター）を噴かせて政志とラウラの元へ降下していく。隕石を置いてけぼりにし、数秒もしない内にインストールを終えた政志とラウラを視界に捉えた。そして逆に、政志とラウラも夜明と太陽の姿と共に隕石を視認した。

「流石アルだな。相変わらず、良い仕事しやがるぜ」

バスターソードを連結させた政志は早速トランザムを起動させようとする。先ほどインストールを終えたばかりで最終チェックが終えてないことにラウラは不安を覚えたが、何を言っても無駄な政志に溜息を吐いて夜明と太陽と共に政志から距離を取った。

「一応聞くけど、大丈夫なんだろうな？」

「・・・政志曰く、成功する確率は５パーセントらしい」

不安の色が見えていたラウラに夜明が聞いてみると、９５パーセントの確率で隕石が地球に落下するらしい。しかし、ラウラとは裏腹に政志の表情からは不安の色など見えない。三人はただ成功することだけを祈り、隕石との距離が２００メートルを切ったぐらいで政志は動き出した。

「トランザム！」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

アルケーの赤い装甲が更に赤く発光していく。政志自身成功したかに思えたが、眼前に表示されたアルケーのステータス画面が赤で塗りつぶされていく。警報アラートが鳴り響き、一枚のディスプレイが現れた。

【ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！ＷＡＲＮＩＮＧ！】

無限に埋め尽くされていく警告表示。装甲からは火花が散り始めて、それは政志の身体をも侵していく。

「くそが・・・ッ！グァアアアアアアアアアアアア！！！」

肉が爆ぜ、血が沸騰するような激痛が身体中に走る。苦痛の咆哮が響き渡る中、隕石は着々と政志との距離を詰めていた。

「政志ッ！！」

「あんの馬鹿野郎・・・！行くぞ、太陽！！」

「あぁ！！」

状況を把握した夜明と太陽は隕石の元へ飛翔して、再び押し返そうとする。だが、先ほどと違い完全に重力圏内に入っているためエネルギーが違い過ぎる。それでも二人は諦めず、両腕の装甲を弾けさ

せながらも止まることは無かった。ラウラは苦しむ政志に駆け寄ろうと考えたが、唇を噛み締めながらも夜明と太陽に加わり隕石を押し始めた。

「しっかりしろ、政志!!それでも、私の嫁かぁッ!!」

オープンチャンネルを通してラウラが政志に呼びかけるが返事は無い。苦痛の悲鳴を上げる政志の耳には何も聞こえず、ただ身体が崩壊するのに耐えていた。

「気張りやがれ、政志!!俺はお前がそんな程度の男だとは思ってねぇぞ!!!」

「自分の世界ぐらい守れない奴が、破壊の神などとよく言えたものだな!!!」

二人の罵声が政志に刺さるが、それでも叫びは収まらない。三人の腕からは血が噴き出し、顔が痛みで歪んでいく。

「クソ・・・・ッ!」

政志との距離が５０メートルを切った辺りで、ラウラに諦めの色が見え始めた。しかし、その刹那。

「よぉ・・・・。待たせちまったな、野郎共」

声が聞こえたと共に黒い粒子が周囲に広がっていく。青い空は一気に闇へと変えられたが、その光からは暖かいものを感じた。首を回して、後ろを向いた三人の目に映ったのは、ＧＮバスターブレイドを肩に掛けて、膨大な量の黒いＧＮ粒子を散布させているトランザ

ム状態のヤークトアルケーを纏った政志だった。その表情からは苦痛が消え失せており、口角が上がっている。

「全く、お前は！いつも心配ばかり掛けさせて・・・・！」

怒声を浴びせるラウラだったが、内心今にも泣きそうなぐらいにホッとしている。ラウラ、夜明、太陽は隕石から手を引いて政志の後ろまで後退する。

「ギガァ・・・・」

それを見た政志が両手で持ったＧＮバスターブレイドを右脇下に振りかぶると同時に刀身が異常なまでの紅い輝きを帯び始める。

「デストラクション・・・・！」

バチバチと唸る黒い雷をも纏ったＧＮバスターブレイドは正に破壊の剣。そして、政志は零段階瞬時加速（ゼロ・イグニッション）で隕石まで距離を詰めて、それを叩き込んだ。

「ブレイカァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」

零距離で放たれた一撃は、ラウラが削っていた部分から蜘蛛の巣状に輝を作っていく。輝から漏れる紅い光が隕石全体を包み込むと、轟音を立てて爆ぜ散った。文字通り、『完全消滅』したのだ。そして、政志を含め、ラウラ、夜明、太陽はその爆発による閃光に飲み込まれたのであった。

「何処だよ此処は・・・・。つか、何でＩＳ学園の制服なんだ？」

「奇遇だな。俺も全く同じ事考えてたよ」

閃光に飲まれた後、目を開けた政志と夜明の前に広がっていたのは真っ白い空間。そこには何も無く、聞こえるのは自分達の話し声だけ。奇怪な場所に来てしまったことを面倒臭そうに二人がしていると、背後に二つの気配がした。振り返ると、自分達と同じくＩＳ学園の制服を着ているラウラと太陽が不思議そうに辺りを見渡している。

「やっぱり、お前達も来ていたのか」

「本当にこの世界は無茶苦茶だな」

呆れながら言う太陽に政志とラウラは苦笑いを浮かべる。

「それより、さっきは助かったよ。お前らがいなかったら、間に合

わなかったかもしんねぇし」

「私からも礼を言わせてくれ。違う世界のお前達にここまでしてもらっては感謝のしようがないからな」

夜明と太陽に向き合った政志とラウラは二人に心から感謝の意を表する。実際問題、夜明と太陽がいなかったら作戦自体がなりたたなかったかもしれない。

「止せよ、水臭ぇ。困ってる奴がいたら助けるのは当たり前だろ？」

ニカッと無邪気な笑顔を浮かべる夜明に釣られて太陽も微笑みを表す。すると、夜明と太陽の身体が光を放ち出して、序々に霞み始めた。それを見たラウラは驚いたが、政志はこれが何を意味しているのか理解した。

「戻るんだな。元の世界に」

「どうやらそうらしいな・・・・」

突然の別れにラウラと太陽は少しシュンとなる。出会ってまだ三日の彼等だったが、友達と言える仲に達していたのは事実。お互いまだまだ色んなことを話せただろうが、それも二度と出来ない。そもそも並行世界を渡ることなど出来るはずがないのだが、それをやった二人は元の世界へ帰ろうとしている。恐らくは今生の別れになるだろうが、政志と夜明は互いに見合って笑いあっていた。

「おい、夜明。間違っても『サヨウナラ』とか湿っぽいことほざくなよ」

「何言ってんだ。それはこっちの台詞だ」

もう会えることは無いはずなのに、この二人は何れまた再会出来ると信じている。それを見た太陽はフッ、と口角を上げて笑うと片手をラウラに差し出した。

「じゃあ、『また』いつか会おう」

「・・・・そうだな。『また』いつか」

再会を誓ったラウラと太陽が握手を交わして手を離すと、夜明と太陽の足元が粒子になって消えて行く。

「太陽。今度会ったら、この間の決着(ケリ)白黒付けようぜ」

「ふっ、いいだろう。望む所だ」

「それから、夜明・・・・」

「ん？」

政志はポケットからあるものを取り出して夜明に投げ渡した。既に二人の身体は下半身が消えており、後十秒ほどで完全にこの世界から去っていくだろう。

「餞別だ。お前にやんよ」

政志のその言葉を最後に夜明と太陽は意識を手放したのであった。

「ん・・・・ここは？」

とてつもなく深い眠りから覚めた感覚で、夜明は倒れていた身体を起した。隣に目をやると太陽が眠たそうに目を擦っている。見上げると青い空が広がっており、風が肌に当たるのを感じた。見覚えのある景色から、ＩＳ学園の屋上であることが分かった。

「戻って、来たのか・・・・？」

「そうらしいな・・・・」

「「「「夜明　（さん）ッ、太陽　（さん）ッ！！！」」」」

ブチ破るぐらいの勢いで開けられたドアからセシリア、鈴、シャル、ラウラが出てきた。四人とも息が荒れており、全力疾走していたのが分かる。

「良かったぁ・・・・。気が付いたんだね」

「気が付いたって、どゆこと？」

「あんた覚えて無いの？セシリアが作ってきたサンドイッチを太陽と食べた瞬間、バタンて倒れちゃったんだから」

「「・・・・・あっ」」

鈴の言葉で完全に記憶が戻った夜明と太陽。恐らく、身体が防衛反応を起して記憶を消していたのだろう。だが、それを作った張本人はと言うと・・・・。

「本当に驚きましたわ。まさか私の料理でお二人を昇天させてしまうとは、才能とは怖いものですわね」

オホホホと上品に笑うセシリアに、夜明と太陽は頬を引き攣らせながら笑みを浮かべる。

「何処にも問題が無いのなら、私達は教官にそう告げてくる」

「大丈夫だとは思うけど、安静にしててね」

ラウラとシャルの後に続いて、セシリアと鈴は入ってきたドアから出て行った。こっちの世界の時間的に言えば、十分ほどしか時間が経過していないようで、政志達の世界にいた三日間が嘘のように思えた。一つ溜息を吐いた夜明は芝生の上に仰向けで寝っ転がる。

「なぁ・・・・あれって、やっぱ夢だったのかな？」

空の青とは正反対の赤い髪の少女に問いかける夜明の表情は僅かだが曇っている。太陽はまじまじと夜明を見ており、あるものを見つけると頬を緩めた。

「そう思うなら、それは一体なんだ?」

太陽が指差す先にあるのは夜明のズボンのポケット。何か入っているのか膨らんでいるポケットに夜明は手を突っ込んで緑色の物体を取り出した。別れの時に政志から受け取った物。それを空に掲げて見つめる夜明の表情は清々しいもので、物体にあるスイッチを押すのであった。

「また何時か会おうぜ・・・・・ダチ公」

【ＣＹＣＬＯＮＥ!】

「あ～あ、やっと終わったぜ。ったく、あいつら仕事全部俺に押し付けやがって・・・・」

廊下を歩く政志の口から零れるのは愚痴。今回の件の事後処理を全てやらされた政志からは疲労が見受けられる。３馬鹿は兎も角、ななせとシエルにも仕事を押し付けられるとは思っていなかった。そして、先ほどから廊下を歩いているが、誰ともすれ違うことがなく、人の気配がまるでしない。

「今度は何企んでんだよ、あの馬鹿共は」

どうせ『祝！隕石破壊作戦成功パ～ティ～』とかやりそうな自分の部下達のことを思うと溜息が漏れる。ふと、窓の外の今にも沈もうとしている夕陽が目に入って足を止めて見つめる。赤みが掛かったオレンジ。敵の擬似太陽炉から精製されるＧＮ粒子と同じ色。ここ最近現れた新たな敵に政志は内心では困惑していた。彼が知っている中で、擬似太陽炉が作れるのは・・・・。

「止めとこ・・・・。今考えても始まんねぇし」

視線を夕陽から外した政志は再び歩き出した。行く先は、仕事が終わった後に来るように言われていた大広間。アル達が言っていたのなら、普段無視しているかもしれないが、今回はななせに呼ばれたもの。何だろう?と思いつつも目的の部屋の前に着いた政志はドアノブを回して、中へ入って行った。すると、そこに待っていたのは・・・・。

≪政志（元帥）（お兄ちゃん）（兄貴）（兄さん）（政志さん）！！誕生日オメデトウ（御座います）！！！≫

「・・・・・はい？」

入った途端に無数のクラッカーの音が鳴り響き、政志の身体中に紙テープが掛かっている。何の事か一瞬理解出来なかったが、今日の日付を思い出して一人納得する。

「八月十六・・・・・。そういえば、今日だったな」

「何だよ、政志～。感動の少ねぇやつだな、お前は！」

「せやで？折角、お前の妹さん達と一緒に考えてやったんや。もうちょっと喜んでも良えんとちゃうか？」

「それにこれは、今日の作戦で大活躍した政志を称えるパーティでもあるんだよ？二つのパーティの主役なんだから、もっと笑顔でいなきゃね！」

左右から両肩に腕を回して、アルと龍鳳。そして、クリスは勝手に肩車している。やれやれと首を回して人混みの中に目をやると、真海と茜と天空が一緒にいるのが見えた。周りが騒がしかったため、声が聞こえないだろうと思った政志は微笑むことで妹達に応えた。すると三人も満足したのか、笑い合っている。だが、その隣でバクバクと飯を食って、皿の山を築き上げている者がいて、見覚えがあった政志はジト目になる。

「井坂のやつ、何やってんだ？」

視線に気付いたのか、食べる手を一旦止めた井坂はアイコンタクトで政志のジト目に返信する。

『お先に頂いてますよ』

「見たら分かるわ、んなもん」

冷静に突っ込みを入れると、再びドアが開かれて政志はそちらに身体を向ける。またしても見覚えのある知人に政志は溜息を吐く。

「ハッピー・バースデイ、鈴木君ッ!!」

「鴻上会長・・・・。あんた何してんだよ?」

「君の誕生日だと聞いて、駆け付けたのさ!!破壊の神の誕生日など、メデタイにも程がある!!さぁ、私の手作りのケーキを受けて取ってくれたまえ!!!」

最初っから最後までテンションが高い鴻上のおっさんに呆れていると、秘書の里中がカートに乗せた、ウェディング・ケーキクラスのチョコレートケーキを運んできた。この時、クリスの口から涎が垂れていたのは無視しよう。

「では、私にはこれから仕事があるので、ここで失礼させてもらうよ!!さらばだ、諸君ッ!!また会おう!!!」

ハッハッハッハッハッハッハ!!と豪快に笑いながら鴻上と里中は部屋を後にした。いつものことだが、どう反応していいか分からない政志は唖然としている。そんな彼の周りには、何時の間にか、ななせ、ヴィンセント、ラウラ、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルがいた。アルと龍鳳、クリスの三人も政志から離れて八人に加わる。嬉し恥ずかしの政志の顔は若干赤く染まっており、それを誰もがニヤニヤ見ていた。

「政志、今日はお疲れ様。これはあたしからのプレゼントだよ」

「ななせ、抜け駆けはズルイぞ！政志、これは私からだ」

前に出てきたななせとラウラがそれぞれ持っていたものを差し出す。ななせのは綺麗に包装された小さな小箱で、ラウラのは刃渡り２０センチほどもある軍事用のブラックメタルなナイフ。不釣合い過ぎる二つを見ていた政志の心が温まっていく。

「（ホントこいつらは・・・・）ありがとよ。じゃあ、有難く受けと――」

二人からプレゼントを受け取ろうとしたが、そのまま床に落としてしまう。数秒後にハッとした政志は慌てて拾うが、アル達は気に留めなかった。

「おいおい、政志。アニメの見すぎで目がおかしくなってんじゃないのか？」

「少しは加減した方が良いよ。それで階段とかから落ちちゃったら大変だからね」

冗談混じりでアルとシャルがそう言うと他の面子も笑い始める。プレゼントを懐にしまった政志も皆と同じように笑みを浮かべた。

「悪ぃ。俺ちょっとトイレ行ってくるわ」

「早く帰って来いよ。お前は主役なんだからな」

一夏にそう言われながらも、政志はドアを開けて部屋から出た。正にその時だった。

「――――ッ！？」

視界が歪んで足元がおぼつき、前のめりで倒れてしまう。息が乱れ、身体のコントロールが利かない。苦痛で歯を食いしばって、匍匐前進で窓際まで行くと、柵に手を掛けて身体を起した。ふらつきながらも立ち上がった政志はガラスの窓に背を預ける。そして、大きく咳き込み始めた。

「ゴホッ、ゴホッ・・・・・！！！」

口に当てていた手を離すと、それは真っ赤に染まっており、口の中も鉄の味で充満している。

「・・・・・」

政志はそれを見つめた後、何も言わずに手を握り締めるのであった。まるで、その事実を揉み消すかのように、ただ力強く・・・・握り締めるのであった・・・・。

来るは別れの時　そして・・・（後書き）

Q：インカ帝国を滅ぼしたのは何人でしょうか。

A：スペイン人

龍鳳「１０人」

クリス「少な過ぎる以前に、問題の意味から違うからね」

天上天下唯我独尊先生参上！！（前書き）

最近気付いたんですが、後書きの予告通り話を進めるのに無理を覚え始めたので、予告はもう書かないことにしました。

あと、今回は前回の予告通りいっていないので勘弁してくださいｍ（＿＿）ｍ

では、本編をどうぞ！！

天上天下唯我独尊先生参上！！

時は流れ、夏休みを終えての初めての登校日。母国へと帰国していた多くの生徒達も今はＩＳ学園に帰って来ており人気で賑わっている。しかし、そんな日だと言うのに対して、マイペースな一部の馬鹿は毎度の如く朝ッパラから騒いでいた。

「だから、目玉焼きには醤油だって言ってるだろうがッ！この似非関西人！！」

「ほざけ金髪クソ野郎！醤油や邪道や、邪道！！男ならソース以外有り得へんわ！！」

「二人共馬鹿だな～。普通はケチャップでしょ！」

「はぁ？ケチャップって、オムライスじゃあるまいし馬鹿だろ絶対！マスタードで刺激的にいくのが王道だぁ！！」

机をバンッと叩きながら立ち上がるのは、アル、龍鳳、クリス、ヴィンセント。事の発端は四人の朝食のメニューである目玉焼きから始まった。何をかけるかなど個人の好みによって違うのは当然のはずだが、四人は何を思ってかムキになって討論を始めたのである。

「あいつ等ああ言ってるけど、お前は何派なんだ？」

「いや、俺そんなに目玉焼き好きじゃねぇから関係無さす」

アホ四人を尻目に一夏は焼き鮭を箸でつつき、政志は朝からステーキを頬張っていた。一夏は心底どうでも良さそうにしているが、こ

ういうことには慣れっこの政志は淡々と空の皿の山を築き上げていく。そんな悠長に朝食を取っていると、学食の入り口から六つの影が出てきた。

「ちょっとアンタ達、まだ食べてたの！？」

「もう朝のＨＲまで１０分を切ってますわよ！！」

「新学期早々遅刻は流石に不味いよぉ！！」

「六人共早くし・・・・って政志！お前はまだ御替りするつもりか！？」

「朝からステーキ十枚って・・・・相変わらず凄い食欲だね」

「気のせいだと思うが、予鈴鳴ってないか？」

「「「「「な、何だってーーーーっ！？！？」」」」」

余りにも来るのが遅い六人を心配して来た鈴、セシリア、シャル、ラウラ、ななせ、箒。言われて周囲を見れば自分達以外誰もおらず、五分前の予鈴が鳴り始めた。一夏、アル、龍鳳、クリス、ヴィンセントは慌てて皿に残っていた料理を口へ放り込む。

「もきゅもきゅっ」

「「「「「お前も急げェェェェェェェェッ！！！！！」」」」」

未だに呑気にステーキを食べていた政志に、男五人は肩を揺らせて急がせた。仕方無さそうに残りのステーキを口に放り込んだ政志と

共にトレーを片付けた彼等は全力疾走で学食を出た。寮を出る時に外履きに替え、校舎で内履きに履き替えるという非常に面倒臭い作業を終えた十二人の耳に入ったのはＳＨＲの開始を告げる本鈴だった。

「あれま。こりゃ遅刻決定だな」

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃないっすよ、兄貴！」

十二人が廊下を走る音が騒がしいもので、常人では考えられない速度で階段を駆け上がっていく。本鈴が鳴り終わる前に三階に着き、鈴とヴィンセントは二組の教室へ駆け込み、残りのメンバーは一組の教室へと向かう。

≪セーーーーッフ！！！！≫

「遅刻だ馬鹿者共」

勢いよく教室に入った途端に鬼教官の出席簿が降り注いだ。一人だけさらりと避けた政志は欠伸をしながら席へと着こうとするが

「担任の仕置きから逃げるとは、お前も偉くなったものだな」

咄嗟に政志は鞄を持ってない方の腕を頭上へ持っていくと、何者かの手刀と交差する。重みのある一撃に政志は覚えがあり、後ろを振り向くと予想通りの人物がいた。

「どうしてテメェが此処にいんだよ・・・・」

「生意気な口は健在か。それと、俺は今日からお前達の副担任、『

逢沢帝先生』だ」

面倒臭そうな表情で舌打ちをする政志に、白スーツを纏った帝は無表情のまま溜息を吐く。千冬の一撃から正気を取り戻した一夏達を含め、それを聞きされたクラスに沈黙が生まれる。政志ですら口をポカンと開けて唖然としている中、小さな影が一つ動いた。

「貴様が教師だと・・・・ッ！教官、これは本当なのですか！？」

「聞いての通りだ。これからは、お前達も敬意を持って接するように・・・・。取り敢えず、お前達もさっさと席に着け。これじゃあ、いつまで経ってもＳＨＲが始められん」

ラウラだけではなくクラス全員に告げる千冬。二つ返事（政志、アル、龍鳳は『へ～イ』）で政志達が席に着くと、帝が千冬に替わって教卓に立った。

「織斑先生からも説明があったと思うが、一応言って置く。俺の名前は逢沢帝。山田先生と同じく、このクラスの副担任になった。噂によれば、このクラスは問題児が集中しているようだが、俺が副担任になったからには厳しくいくつもりだ」

クラスの皆がその問題児達に視線を向ける。政志は携帯でアニメを、アルは最前列にも関わらず爆睡、龍鳳は窓の外をボケーっと見ており、クリスはポテチを食べている。

「・・・・以上だ」

表情を変えること無く、帝は一番近い馬鹿の脳天を豪快にシバクのであった。

「あの野郎、ガチで殴りやがって・・・・。脳細胞が百個は死んだぞ」

「心配しなくても、脳細胞は全部で百四十億個ぐらいあるから大丈夫だよ・・・・」

頭をさするアルにシャルは苦笑いを浮かべる。彼等はいつもの面子で学食に来ているのだが、政志となな せを除く一組の者達からは疲労の色が伺える。

「さっきから気になってたんだけど・・・・何でそんなに疲れてんだ?」

「今日来たって言う先生に何か関係あんの?」

二組のヴィンセントと鈴は一組に新任の教師が来た事は知っていたが、誰が来たかまでは知らなかった。朝のＳＨＲが終わった後、他の生徒は一組に押しかけたが、そういうことに興味が無い二人。新任早々、一組は帝による授業を受けたのだが、その内容に問題があった。

「二人も、あの授業を受けてみなよ・・・・」

「きっと、私達のようになりますわよ・・・・」

ハハハハと乾いた笑うクリスとセシリアの目は焦点があっていない。

「ちょっとななせ。一体何があったのよ？」

「ええと・・・・どう説明したらいいのかな？」

「・・・・俺に振るな」

説明に困るななせとは裏腹に、平然としている政志は唐揚げをパクリつく。だが、少し思い出したのか、一旦箸を置いて溜息を吐いた。

「けどまぁ・・・・あれを毎日やられたら大抵のやつは参っちまうぞ」

「織斑先生が増えた・・・・って思ってくれたらいいよ」

一瞬で目の前の八人の疲労の根源が分かった。だが、ななせはこうは言っているは実際は千冬より凄いものだった。

『教師の俺が言うのもなんだが、教科書などたかが紙切れの群れに

すぎない。それに書かれていることに囚われているようでは、天の道を行く俺には・・・・』

ぶっちゃけると、ものスンゴく面倒臭かった。しかし、見た目とクールな口調もあり女生徒からは黄色い声援を浴びていた。

「しっかし・・・まさかあいつが表に出てくるとは驚いたぜ」

「朝から思ってたんだけど、政志って逢沢先生と知り合いなの？」

「逢沢？何処かで聞いたことがあるような・・・・」

「あたしもそうなんだけど・・・・」

う～ん、と頭を唸らせる鈴とななせ。あんなに濃いキャラを忘れるはずが無いと言い聞かせ思い出そうとするが、やはり思い出せない。箒、セシリア、シャルも同じような反応をしており、ナポリタンをスプーンに巻き付けていたラウラが見かねて嘆息した後、口を開いた。

「連邦に行った時に会っただろう・・・・。あの無茶苦茶な森で」

・・・・・。

「「「「「あぁっ！そう言えば、あの時の！！」」」」」

「な、何やお前ら？あの先公と会ったことあるんか？」

五人揃えて上げる声に驚いた龍鳳は、思わずたこ焼きが刺さった爪楊枝を落としてしまう。これには興味があるのか、政志達は箸を止

めて聞き耳を立てて経緯を一通り聞いた。その時に、政志を除く男子の表情が歪んだのはこの際無視しよう。

「なるほろ・・・・。道理であん時、お前が不機嫌だったわけだ」

そう言う政志の視線の先ではラウラがソッポを向いて不貞腐れている。

「あの時もそうだったけど、ラウラと逢沢先生って仲悪いの？」

「仲が悪いって言うか、何と言うか・・・・。メンドクセェけど、それも含めて説明してやるよ」

今のラウラに聞いても正しい情報が入ってきそうに無いと判断したシャルは政志に聞くことにした。テーブルに座っていた面子も興味心身の様子であり、視線が政志に行っている。氷だけになったグラスを片手で回す政志の目は何処か遠い。

「俺達とあいつの出会いは、俺がドイツ軍に研修で行ってた時のことだな・・・・」

（※ここからは時間が結構遡りますので）

「不法入国者の確保ねぇ・・・・正直メンドクセェんだけど」

「そう言うな。織斑教官が私達二人に下した任務なんだ。聞かないわけにはいかないだろう」

木々に囲まれ、雪で敷き詰められている地面を歩む政志とラウラの腰にはホルスターが装着されており、当然の如く拳銃が装備されている。ラウラは至って真面目だが、政志は非常にやる気が感じられない。それもそのはず、指令を言い渡された時に彼は某動画サイトで趣味を楽しんでいたからだ。

「あーあ。後ちょっとで、加賀美がガタ○クに変身してたのになぁ・・・・」

「気のせいだと思うが、昨日も良く似たこと言ってなかったか？」

「違ぇよ。昨日見たのは５○５で、さっきまで見てたのはカ○ト。両方とも名作だけど、一緒にすんなよな」

「・・・・すまん」

言ってることが全く理解出来ないが、語る本人の目が真剣そのものだったので取り合えず一言謝罪を入れた。そんな風に談笑？しながら森の中を歩くこと数十分。日も暮れて、辺りが暗くなり始めた。

「目標を確認することは出来なかったか・・・・。時間が時間だ。そろそろ戻るぞ」

「・・・・いや。どうやら、その必要は無いみたいだぜ」

踵を返そうとしたラウラの隣で、政志はホルスターから拳銃を抜いて笑み浮かべた。だが、銃を構えた瞬間、銃口が向いている２０Ｍぐらい離れた木の陰からナイフが飛んできて、政志の銃を弾き飛ばした。

「な・・・・っ！？」

「ったく、軽い気持ちで来たら予想外の大物が掛かりやがったな」

驚くラウラとは正反対に、政志は戦いに飢えた獣のように舌で唇をなぞる。すると、木の陰から再度ナイフが一本飛来して、それは政志の顔面へと直進する。誰もが目を覆いたく光景を想像するだろうが、この男には無用の長物だった。

「お前には避けるという考えが無いのか・・・・？」

呆れた表情を浮かべるラウラの視線の先ではナイフの刀身に噛み付いている政志がいた。顎に入れる力を強め、ナイフの刀身に皹が広がっていき、最終的には粉々に砕け散った。

「おいおい。今の俺じゃなかったら死んでたぞ」

飛んでくるナイフを口で受け止めるのはあなたぐらいです。ナイフが飛んできた木の影から人影が出来てきて、ラウラは身構える。その者の手には投擲したであろうナイフと同様のものが握られていた。

「お婆ちゃんが言っていた・・・・この世で覚えておかねばならない名前はただ一つ」

いきなり語り出した二十代前半ぐらいの茶髪の男はゆっくりと二人へと歩み寄る。

「黎明と終焉を司る男・・・・逢沢帝」

・・・・・。

「（こいつ・・・・アホだ）」

「（あぁ、新手のアホだな・・・・・）」

嘆息するラウラと政志。帝は足を止めることなく二人に近づき、無表情のままの彼をラウラは不審に思い銃を向けた。

「止まれ。貴様には不法入国者として容疑がかかっている。大人しく――――」

「俺は誰の指示も受けない。それが・・・・俺の天の道だ」

最早会話が成り立たず、ラウラは威嚇射撃を行おうとトリガーを引こうとするが、瞬時に目の前に移動してきた帝によって防がれた。帝はそのままナイフで銃を真っ二つにして、そのままラウラに蹴りを叩き込む。

「へぇ、中々重い蹴りじゃねぇかよ・・・・オモシレェッ！！」

ことはなかった。帝の蹴りを片手で受け止めた政志はお返しと言わんばかり膝蹴りを腹部へと入れた。蹴りを喰らった青年は木々を薙ぎ倒しながら吹っ飛んでいき、六本ぐらい倒したところで止まった。

「やったか？」

「・・・・いいや。まだみたいだぜ」

舌打ちをする政志の視線の先では、何事も無かったかのように帝が立ち上がっていた。アバラをへし折るぐらいのつもりで蹴り入れた政志にとっては多少の驚きがあった。

「俺を倒したければ、殺す気で来い。『ソレスタルビーイング』のリーダーであったお前が、この程度の訳無いだろう」

刹那。政志が纏う空気が一変して近くにいたラウラは怯んでしまう。物量さえも感じさせる殺気は全て帝へと向けられていた。

「テメェ、何処でそれを知った・・・・」

「知りたかったら俺を倒すことだ。尤も、俺が負けることなど有り得んがな」

「上等だぁ・・・・ッ！なら、その自信も序でにブチ壊してやんよぉッ！！」

咆哮と共に政志は帝へと駆けていき拳を全力で拳を振るい、帝が突き出した拳と衝突する。その衝撃で二人の足元には巨大なクレーターが形成され、どれだけの力がぶつかり合っているのかが伺える。

「ほぅ、俺と互角の力とは・・・・多少はできるようだな」

「それはこっちの台詞だ、クソ野郎！！」

まるで怪獣映画のような死闘を繰り広げる二人を目を丸くして見るラウラは、辺りの木々が全て薙ぎ倒され、地形が変形したぐらいで千冬に連絡するのであった。

「んでその後、あいつが千冬に呼ばれてドイツ軍に来てたのが分かって戦闘は一旦中止。理由を聞いたら、何の迷いも無く歩いててそのまま不法入国しちまったんだと・・・・ホント迷惑なやつだよ、全く」

≪化物か、あの先生はッ！？≫

まさか素手で政志とヤリあえる人間がいるとは思っていなかったな

なせ達は驚きを隠せ無い。

「でも一番驚いたのが、あいつもＩＳが使えたことだよなぁ・・・・」

「「「「何ィィィィィッ!?男でＩＳだとォォォォォォォッ!!!!」」」」

これには女性陣は知っていたため驚くことは無かった。しかし・・・・

「しかも、千冬と束の元同期。更には、あいつのＩＳ『幻騎士』が第一世代型で性能がガンダム並だってことにもビックらこいたぜ・・・」

≪何ィィィィィィィィィィ!?!?≫

彼等の驚声は学食中に響き、自然と視線を集めてしまったのは言うまでも無い。

「結局、何でラウラちゃんはミカドンのこと嫌いなの？」

「多分、あいつが千冬が仲良くしてたのが気に入らなかったんじゃねぇのか？他にも、模擬戦で一人だけ本気出されてボコボコにされてたし」

ラウラが帝を気嫌う理由が至って仕様無いことに、ななせ達からは失笑が零れてしまうのであった。

天上天下唯我独尊先生参上！！（後書き）

Q：片栗粉にヨウ素液をかけると青紫色に変色します。このことから、何が分かりますか？

A：片栗粉にデンプンが含まれている

クリス「片栗粉にヨウ素液をかけると変色します」

アル「あれ？もしかして違うの？」

生徒会長、満を持して光臨！（前書き）

まだまだ先は長いですが、ＰＶが５０万を突破したら、記念になにかやろうと思います。

はて、何がいいものかな・・・・

取り敢えず、本編をどうぞ！！

生徒会長、満を持して光臨！

「イッチーよ・・・・君は頭を使うことを知らないのか？」

「初っ端からあんだけ荷電粒子砲撃ってたらエネルギー無くなるわ」

トンデモ先生が着任して翌日の九月三日。二学期初の実戦訓練は、一組と二組の合同で行われた。そして現在、後片付けを終えた彼等はいつもの面子と共に学食に来ていた。政志達男勢は一夏と鈴の試合を観戦していたのだが、結果は一夏の負けで終わったようで、アルと龍鳳にボロクソ言われている。

「はぁ・・・・。何でパワーアップしたのに負けるんだよ」

「お前はアホか。ただでさえ燃費が悪かったのに、さらにそれが一個増えたんだぞ？」

「普通だったら、短期決戦で決着つけるとか、エネルギー管理を万全にするとか考えるものなんだけどね」

「ぶっちゃけ、一夏は機体性能に頼り過ぎなんだよ」

ヴィンセント、クリス、政志にまでボロクソ言われた一夏は流石に少しシュンとなる。だが彼等の言う通り、今の白式は第二形態移行（セカンド・シフト）による背部推進翼（ウィング・スラスター）の大型化、左腕の多機能武装腕（アームド・アーム）《雪羅》の増設。雪羅から放たれる荷電粒子砲と推進翼（ウィング・スラスター）は同じエネルギー系統なので使い分けをしないと戦闘どころか飛行すら儘なら無いのだ。

「そうは言うけど、お前らは太陽炉のおかげでずっと動けるんだろ

？俺と比べたら楽でいいよなぁ・・・・」

「あのなぁ・・・。前にも説明したと思うけど、俺達には『シールドエネルギー』も無ければ『絶対防御』も無ぇんだぞ？」

「気ぃ失って上空から地上に落ちてもうたら、ハイ死亡～ってなってまうからな」

「それに、俺は擬似だからお前と同じで活動限界があるぞ」

羨ましそうにしていた一夏に、アル、龍鳳、ヴィンセントが持っていたスプーン、爪楊枝（お前昨日もたこ焼き食ってなかったか？）、フォークを向ける。そして一夏は今更過ぎるあることに気付いた。

「今思ったんだけど、太陽炉搭載型と戦うことになったら、零落白夜って・・・・」

「ただのライトセイバーだろ」

「正直、要らん子だね」

政志とクリスはバッサリ言うが、二人の言ってることに何の間違いも無い。ＧＮ粒子で動く太陽炉搭載型にとって零落白夜など全くの役立たずっ子なのだ。問題点が多すぎる現状況に溜息を付くと、腕組みで箒が啖呵を切る。

「ま、まぁ、アレだ！　どんなにエネルギーの問題が深刻でも、私と組めば解決だ！」

箒の紅椿のワンオフアビリティー『絢爛舞踏』は最小のエネルギー

を増大させ、しかも他のＩＳにその増大させたエネルギーを譲渡することが出来る。ぶっちゃけると、エネルギーを大量に使う白式の為にあるワンオフアビリティーだ。・・・だが、それ以前に問題点が一つあった。

「でも、箒って絢爛舞踏を自由に発動できたっけ？」

ななせの問いに箒はしょぼくれてしまう。それを一夏が頭を撫でる事によって慰め、イチャつき始めた二人はピンク色の空間を作り出してしまう。

「何があっても俺は箒としか組む気はないよ。大切な人が傍にいるだけで、男は強くなれるからな／／／／」

「一夏・・・・／／／／」

「はいはい、ご馳走様でした」

ハートが飛び交う二人を視界の角に置き、政志はラーメンを啜る。他の男子陣は苦笑し、他の女子陣は二人に憧れの眼差しを向けた後、それぞれの想い人へと首を向けた。ここでアル、龍鳳、クリスの三人は食事の手を止める。

「ペアねぇ・・・・」

「前回は出れへんかったけど、またペア参加のトーナメントがあるかも知れへんし」

「今の内に考えといてもいいかもね」

三人がこの話題を出した途端に、シャル、鈴、セシリアは耳をピクンとさせた。期待を込めた目をしている三人の乙女だったが、政志は3馬鹿が何て答えるかが簡単に予想できた。

「俺だったら鈴に頼むぜ？近距離から中距離までこなせる甲龍だったら前衛で暴れてもらって、そっちに敵の目が行って援護しやすいからな」

「アルと似たような理由やけど、俺はセシリアやな。俺が高機動で敵を動かして、そこ狙ってくれてもええ・・・・。逆に狙撃を回避し始めたら一気に距離詰めて瞬殺ってところや」

「ふ～ん、二人とも偉く真面目に考えたね。だったらボクは、セラヴィーの武装から考えてシャルるんがいいな。実弾武装が多いのに加えて、普通に強いしね」

戦闘のプロとしては二重丸を上げたいところだが、年頃の男子としてはどうかと思う解答。その証拠に、さっきまで輝いていたシャル、鈴、セシリアの目は輝が入る音がしてガラス色へと変わった。視線は虚ろになり、食事を再開する。

「どうせそんな事だろうと思ってたよ・・・・」

「少しでも期待してたあたしが馬鹿だった・・・・」

「そうですわね・・・・」

溜息を吐く三人の姿は哀れなもので、そのようにした張本人は呑気そのもの。同情しか覚えさせない光景を生々しい目で見ていた政志達だったが、一応と思ってななせも聞いてみることにした。

「ねぇ・・・政志は、ペアを組むとしたら誰と組む？」

この問いにラウラは目を光らせ、沈んでいる三人以外は興味の眼差しを向けた。

「何を無駄に悩んでいるか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め」

むに、とラウラが頬を指で押すのを感じる政志。出会った当初の無愛想な感じから大きく変わり、今は態度も柔らかくなり冗談もしばしば言うようになった。・・・だが、本人にとっては冗談でないのか、マジ顔で言うので判断し難い。

「でも、政志って誰かと組むのあまり好きじゃないよね」

「前までと違うて、今のアルケーは全距離対応型やからな。正直一人でも問題ないやろ？」

「ぶっちゃけ、そうなんだけどな」

余計なことを言う小動物と青髪ロン毛をななせとラウラが一睨みしたのは言うまでも無い。やれやれと肩を竦めたアルは、見かねて（お前人のこと言えないからな）助け舟を出すことにした。

「で、結局ペア戦があったら誰と組むんだ？」

「ん？あぁ、それなら俺はななせと組むぜ」

「えッ？あ、あたしィ！？」

パァッと明るくなるななせだったが、理由が超絶論外だった。

「だって、中の人が水樹奈々だし」

≪・・・・・≫

この瞬間、空気が死んだ。。

「ななせの奴、水樹奈々が嫌いだったのか？」

「「「「「そういう問題じゃねぇ」」」」」

広いロッカールームも今は六人の男子専用になっている。未だになせが真っ白になった理由が分からず、一夏達は冷静に訂正を入れる。せっせとＩＳスーツを着て、一夏は白式のコンソールを呼び出して調整を始めた。

「うーん・・・。やっぱり雪羅に割いてるエネルギーが多すぎるな。これ、もうちょっと抑えられないか？」

「だから言ってんだろが。お前は白式に頼り過――――」

「だーれだ？」

「・・・・あぁ？」

大人びた女性の声が聞こえると同時に政志の視界が真っ黒になった。この際に、政志がヤクザのようなドスの聞いた声を出したのは気のせいだと信じたい。政志の後ろでは、水色の髪をした二年生（リボンの色で分かる）が愉快な表情で彼の目を両手で塞いでいる。その女性が誰だか一夏には分からず困惑しており、数秒後に政志は解放された。

「はい、時間切れ」

大体誰だか予想出来ていた政志だったが、振り向いて顔を確認すると呆れた表情で溜息を吐いた。

「一夏、お前は先に行ってろ・・・・」

「先にって・・・・お前らはどうするんだよ！？」

「千冬さんとミカドンには適当に言っといてね」

そうは言われても、置いていくわけにもいかず足を止めていたが、時計を見ると授業開始二分前を切っていた。このまま遅刻すれば、

千冬と帝によって灰塵と化すのは決まっている。仕方無しと、一夏は政志達を残してロッカールームから駆け出て行った。

「お前って、ホント自由だよな・・・・楯無」

楯無と呼ばれた女性は、満足気な笑みを浮かべて政志からアル、龍鳳、クリス、ヴィンセントへと見回す。

「久し振りだね、政志♪皆も元気そうで何より何より」

輝きを放つ笑顔で何処から取り出したのか気になる扇子を口元へ持っていく。

「タッキーも相変わらずだな・・・・」

「ホンマにこれで生徒会長なんか？」

「まぁでも。たっつぁんらしいって言えば、たっつぁんらしいけどね」

「クリス・・・・。その『たっつぁん』って言うの止めてくれないかな？」

学園唯一の国家代表にしてＩＳ学園の生徒会長、更識楯無は苦笑いを浮かべるのであった。

一方、ギリギリで遅刻してしまった一夏は全身から冷や汗を流していた。アリーナに駆け込んだ瞬間、彼は帝によって頭を鷲掴みにされて身体が宙に浮いている。

「織斑。俺の耳が正常なら、たった今本鈴が鳴り終わったのだが・・・遅刻（死刑）ということでいいか？」

ギギギと頭蓋骨が軋む音が響く。その光景を、女子生徒達は顔を引き攣らせており、千冬は無表情ながらも弟が殺されないことを祈っていた。

「せ、先生ェェェェッ！？そろそろ離してくれないと本気で死ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「ところで、他の馬鹿共はどうしたんだ？」

質問をするぐらいなら腕に込める力を入れるなと命を掛けて心の中で突っ込む一夏。苦痛に悶える一夏が答えれるわけもなく、帝は目を細めた。

「五秒だ・・・・。五秒以内に答えないと、握り殺――」

「に、二年生の先輩と話しおりまするゥゥゥゥ！！！！」

「二年生・・・・か。なるほど、あの女なら頷ける」

一人納得した帝は手を離して、一夏は重力に従って地面に倒れ伏せる。白目を剥いており、口からは魂のようなものが見えなくも無い。放っておいたら、三途の川を渡り切りそうな一夏に箒が駆け寄り介抱する。

「大丈夫か、一夏！？しっかりしろッ！！」

「もう・・・・駄目、ポ・・・・・」

「一夏ァァァァァァァ！！！！！！」

よくあるドラマの1シーンを再現する二人を生徒達は生々しい目で見ていた。

「琴吹。授業はいいから、あの馬鹿共を呼んで来い」

「え・・・・？は、はい。分かりました」

急に名指しで指名されたななせは、何故自分なのかを頭の中で高速で考え始めた。一夏と帝の話しの中に出ていた『二年生の先輩』。そういうことか、と瞬時に解決したななせは出口へと歩いて行くのであった。

「それにしても、楯無先輩と会うのも久し振りだなぁ・・・・。あ

の人のことだから元気なんだろうけど」

生徒会長、満を持して光臨！（後書き）

Q：試験管で液体を沸騰させる時に、沸騰石を入れておかないとどうなりますか

A：液体が急激に沸騰して飛び散る可能性がある

アル「エラいことになる」

政志「確かに間違っては無い・・・間違っては・・・・」

動き出した影（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません

ここ一週間軽く逝ってました

しかし、次週からはテストが始まってしまう・・・だと!?

時々、ＮＥＥＴが羨ましく思えて仕方がなかとです

では、本編をどうぞ!!

動き出した影

「でもホントに久し振りだよね。こうして皆と話しするの」

少し顔を貸せとのことで、政志達は楯無に連れられて屋上に来ていた。授業サボるなよ、と突っ込みを入れたくなるがこの面子に言っても無駄なのだろう。それに授業に出たとしても、真面目に受ける奴が・・・・いないんだよね。

「つかタッキー。俺達に何の話しがあるっていうんだよ？」

「話しだけやったら、こんな所にまで来んでも良かったんとちゃうか？」

うんうん、とクリスとヴィンセントが頷く。呑気な四人に冷ややかな視線を送った政志は溜息を吐いた。

「お前らなぁ・・・・少しは考えるってことをしろよ。どう考えても、今から聞かされるのが世間話のわけねぇだろうが」

「ん～、流石は政志と言ったところかな。良く分かってるね♪でも、出来たらななせちゃんにも聞いて欲しかったんだけど・・・・あっ。噂をすれば何とやら」

ニコリと笑う口元を広げた扇子で隠す楯無が振り向くと、ななせがドアを開けて入ってきているところだった。楯無の姿を確認したななせは、笑顔を返すように頬を緩ませた。

「楯無先輩、お久し振りです！」

「ななせちゃんも久し振り～。それより、よく此処が分かったね」

「いくら楯無先輩でも、授業中に政志達を連れ出すぐらいですから、何か大事な話しだと思って・・・・。そう考えると、盗聴される確率が低い場所を考えた結果が」

屋上なんですよ。

「「「「へぇ～」」」」

なるほど、と関心するアル達の脳味噌をどうやったら増量出来るか政志は考えたが、数秒ぐらいして無理だと諦めた。

「さてと・・・・。それじゃ、役者も揃ったことだし早速本題に入るとしますか」

本題という言葉を聞いた途端に六人は空気を切り替え、楯無はポケットから小さな茶封筒を取り出した。本来なら電子端末で情報のやり取りをするものだが、漏洩を避けてか楯無は古典的なものを選んだのだ。そして、彼女が茶封筒から取り出したのは四枚の写真。それぞれの足元には瓦礫の山が築かれており、周囲が炎上している中に佇む四機のＩＳが写っていた。四枚の内の一枚を見た途端に政志の目が自然と細くなる。

「こいつは、あの時の仮面野郎・・・・」

写真越しに政志はブレイドと約二ヶ月ぶりの再会を果たした。マスラオから放出されるＧＮ粒子を忌々しそうに見ていた一同。そして、残りの三枚の写真も彼等を怪訝な表情にさせた。形状は似ているが、

装甲色と武装が異なる三機。それらからもＧＮ粒子が零れている。

「またＧＮドライヴ搭載型か。一体どうなってんだよ？」

アルの問いに答えれる者はいない。沈黙が続く中、政志は楯無にプライベートチャンネルの回線を入れた。

【なぁ、楯無。これを撮った場所って・・・ロシアだろ】

【うん、そうだよ。でも、どうして分かったの？】

【世界中で支部が無く、連邦に非強力的な国はあそこだけだからな。普通だったら、こんなもんの目撃情報はすぐに俺の耳に入るはずだし・・・。まぁ、クリスとヴィンセントのこともあるから、良く思われてないのは仕方無ぇんだけど】

【その国の代表である私が言うのもあれだけど、サンクキングダムがある限り、ロシアは連邦を敵視し続けると思うよ。軍の上層部には連邦が影で世界を支配しようと考えているんじゃないかって言う人もいるみたいだし】

【あそことも近い内に決着（けり）つけねぇとな。じゃねぇと、冗談抜きで宣戦布告とかされそうだからな】

今の連邦の戦力ならば何処の国と戦ったとしても負けることはないだろう。しかし、ロシアのサンクキングダムには怪しい噂が絶えない。死体の兵士やら衛星兵器、世界中を敵に回しそうなものばかりを製造しているらしいのだ。そんなサンクキングダムの技術をロシア軍は取り込もうとしたが、今となっては・・・。厄介ごとのオンパレードに政志の口から小さな溜息が漏れ、それが合図だったか

のようになせが口を開いた。

「この写真に写っててるの・・・・フラッグ？」

指差す写真の薄紫色の機体の足元にはフラッグの頭部らしいものが転がっている。よく見ると、他の写真にも全壊したイナクトなど亡国機業の機体などがあった。

「これはどういうことなのかな？だって、この四機って亡国（ファントム）のじゃ・・・」

「俺らが知っとる限りはそうなんやろうけど、あいつらも一枚岩やないってことやろ、結局」

「そうだとしても、これはやり過ぎだろ。この様子じゃ、全員殺されてんだろうし」

「一体何が目的何だか・・・・。ったく、気味悪ぃことこの上無いぜ」

上からクリス、龍鳳、アル、ヴィンセント。彼等の言うことには賛同するしかなく、政志となせも険しい目で写真を見つめており、自分には必要ないと楯無は写真を政志に渡した。

「貴重な情報はありがたいけど、いくらお前でもこの件に関してはあまり深入りするなよ」

「あら、もしかして心配してくれてるの？お姉さん嬉しいな～♪ところで今日の夜は空いて――」

「退散ッ！」

邪悪な意志を感じた政志は風切り音と共に姿を消した。ムゥと頬を膨らませる楯無に残りの面子は苦笑いを浮かべるのであった。

ロシアのとあるホテルの一室。そこには男が一人、少女が三人居り、豪華な部屋で寛いでいた。少女三人は髪型と髪の色、目の色は違えども顔は全く同じだった。緑髪の少女はベッドに寝転んで退屈そうにしており、表情から苛立ちが見える。褐色の髪の少女は椅子に座って何か考え事をしているのか目を閉じている。紫の髪の少女は端末を弄って何かのデータをみている。そして、男は誰かとの電話を終えたのか、携帯を閉じて椅子に座った。

「ねぇ、ブレイド～。今の電話の相手ってドクターだったんでしょ？一体何話してたのか教えてよ」

「大したことでは無い。ただ、これから施設ごとではなく、コアだけを破壊しろとのことだ」

「何だそんなことか・・・・って、それじゃ全力で暴れられないじゃない！」

「そのぐらい我慢しないか、ヒリング。ただでさえ君の戦い方は目立ち過ぎるんだ。それぐらいが丁度いいさ」

ヒリングと呼ばれた少女は紫の髪の少女にそう言われてムスッとなる。

「しかし、ブレイド。命令だと、ドクターが亡国機業に与えたコアを全て破壊せよとのこと・・・・。流石にいつかは連邦にも知られてしまうのではないのか？」

「安心したまえ、ブリング。その件に関しては、彼女も承知の上。我々が一番注意すべきは亡国機業に悟られないことだ。それは三人とも分かっているな？」

「分かってるわよ、そのくらい。だから施設の人間を全員殺したんじゃない」

口端を上げて笑うヒリングの表情からは狂気を覚えさせられる。ウットリしている彼女を尻目にブレイドは緑茶を啜った。

「ところでリヴァイヴ。昨日の時点でガッデスの調子はどうだった？」

「特に問題はありませんよ。流石はドクターと言ったところでしょ

うか・・・とても急ピッチで仕上げた機体とは思えない出来でした」

「そうか。ならい――」

「そういえばさぁ、ブレイド」

ブレイドの言葉を遮るようにヒリングが声を被せる。その声はさっきまでのチャラけたものではなく真剣さを感じさせるものであった。

「・・・何かね、ヒリング？」

「次の目的地、日本だっけ？本当にいるのかしら・・・ドクターと同じ純粋種が」

「私も未だに信じられないが、彼女がそう言うんだ。恐らく本当なのだろう・・・」

「『ナイトメア・レヴォリューション』最大の障害は、その者と破壊神ということか」

「なるほど。それなら、我々だけでなくスレイヤーズも投入するのも頷けますね」

ふむふむ、と顎に手を当てて納得するリヴァイヴ。彼等が次に向かうのは日本。いや、正確に言うのなら・・・・

「ＩＳ学園でドクター達と合流すると同時に作戦を決行をする。破壊神達さえいなくなれば、革命は成されたも同然」

ふっ、と鼻で笑ったブレイドは仮面を外して、自分の顔を鏡で見つめる。

「破壊神、鈴木政志・・・・君だけは私が討つ。私はそのためだけに今まで生きてきたのだからな」

髪と瞳の色は明るいオレンジで顔つきは男性アイドルにも劣らないほどのものだ。しかしそれは、世界最強と謳われるあの男と瓜二つだった。

「ガデッサ、ガラッゾ、ガッデス、デスティニー、レジェンド、ストライクフリーダム、インフィニットジャスティスの七機に加えて、剣のマスラオとあたしのシリウス。これだけの戦力だけでも十分とは思うけど、念を入れてあれの完成も急がないと・・・・。ふふふ、楽しみで仕様が無いよ。皆の絶望に染まった顔を見るのが・・・・」

動き出した影（後書き）

Q：ＷｉｎｄｏｗｓのＰＣを操作中にマウスやキーボードが固まってしまった。一旦、電源を落とすためにはどうすればいいでしょう

Ａ：ＣｔｒｌキーとＡｌｔキーとＤｅｌｅｔｅキーを同時に押す

政志「家のブレイカーを落とす」

龍鳳「正解・・・のわけないやろ！」

だれでもいいから、あの馬鹿止めてくれ

翌日。朝のＳＨＲと一時限目の半分を使って行われる全校集会のため、全生徒が体育館に集められている。内容はもちろん、今月半ばほどに行われる学園祭のことだ。

「でも、まぁ・・・・これだけ女の子が集まっちゃうと」

「騒がしいを通り越して姦しいで」

六人を除き全てが女子であるため仕方が無いと言えば仕方が無い。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会役員の一人がそう告げると、ざわめきが引き潮のように消えていった。

「やあみんな。おはよ～」

壇上に上がって明るい声で挨拶をするのは水色の髪を持った二年生、更識楯無である。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと微笑みを浮かべて言う楯無を見た女生徒達から熱っぽい声が溜息が聞こえる。どうやら彼女の魅力は彼女の魅力は男女問わずに発揮されるもののようだ。

「では、今月の一大イベントである学園祭だけど、今回に限っては特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

扇子を取り出し横へスライドさせると、空中投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名づけて、『各部対抗男子争奪戦』！」

「「え・・・・？」」

「「「あだとゴラァァァァァァ！？！？！？！？！？」」」

≪えええええええ～～～～～～～！？！？！？！？！？！？≫

「忘れてた。そう言えば、あいつもアホだったな」

状況が飲み込めずポカンとしている一夏とクリスに怒りと驚愕の声を上げるアル、龍鳳、ヴィンセント。女子達はホールがゆれるほどの叫び声を上げ、政志は完全に呆れていた。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催しを出して、それに対して投票を行い上位の部活動に特別助成金をが出る仕組みでした。でも、それじゃつまらないと思い・・・・」

悪い笑みを浮かべた楯無は男子六人を扇子で指した。

「一位から六位までの部活動に、鈴木政志、織斑一夏、アーノルド・ギアナ、龍鳳・クシュリナーダ、クリストファー・トールギス、ヴ

ィンセント・トールギスの男子六人から一人を強制入部させる権利を与えましょう！」

刹那、再び体育館が揺れるほどの叫び声が響いた。

「うおおおおおおおっ！！」

「素晴らしい！素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる・・・・。やぁぁぁってやるわ！」

「今日からすぐに準備始めるわよ！秋季大会？ほっとけ、あんなん！」

秋季大会をあんなん呼ばわりする時点で彼女等もやはりアホなのだろう。目を血走らせている光景は非常に怖いもので政志達は苦笑いを浮かべている。

「なあ、イッチー・・・・」

「・・・・何だよ、アル」

「どうして、俺達の周りって馬鹿しかいないんだ？」

「・・・・」

その馬鹿の頂点が自分だと気付いているのか、コイツか？政志達が諸悪の根源である生徒会長を見ると・・・・

「あはっ♪」

とてもつもなく良い笑顔でウィンクしてくる楯無。もう何を言っても無駄なのだろうと諦めるしかなかったとさ。

同日の放課後、教室では特別ＨＲを行っている。内容は学園祭でのクラスの出し物決めで、女子はわいわいと騒いでいる。クラス代表である一夏はクラスメイトが出した案を書き込んだ紙を片手に途方に硬直しており、何事かと思った政志、アル、龍鳳、クリスは一夏から意見が書き込まれた紙を受け取り中身を見た。内容は『鈴木政志のホストクラブ』、『織斑一夏とツイスターゲーム』、『アーノルド・ギアナとポッキー遊び』、『龍鳳・クシュリナーダと王様ゲーム』、『クリストファー・トールギスに餌（お菓子）やり』。

「「「「「却下」」」」」

≪えええええぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！≫

大音量でブーイングを受けるが、これぱかりは却下せざるを得なかった。

「あ、アホか！誰がうれしいんだ、こんなもん！」

「まさか、こんな所にまで腐女子が広がっているとは・・・・」

「全力で却下するに決まってるだろがぁぁッ！！」

「アカン・・・こいつら全員頭逝ってもうとるわ」

「ボクのだけ変なのはツッコんでいいかな？」

一夏、政志、アル、龍鳳、クリスの順に各々の意見を述べるが、それも無駄に終わった。

「私はうれしいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「男子五人は共通財産である！」

「他のクラスからいろいろ言われているんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

「誰が救世主（メシア）だッ！山P、こんな企画ダメに決まってるよな！？」

アルが助け船として山田先生にふるが、数秒考えた後、頬を赤らめた。

「えーと・・・私はポッキーのなんか良いと思います」

「「「貴様、正気かーーーッ！？」」」

アル、龍鳳、クリスのツッコミが炸裂する。恐らく、隣のクラスでもヴィンセントが気苦労してそうな気がした政志は溜息を吐いてクラスのアホ共と向き合った。

「あのなぁ、頼むから一つぐらいマトモな意見出してくれよ・・・・。この中から選んだのを一夏が報告したら殺されるぞ？」

「なら、メイド喫茶はどうだ？」

・・・・・。

≪えっ？≫

まさか過ぐるラウラの意見にクラスの者達は唖然とする。彼女のキャラにそぐわない出し物だが、一度メイド喫茶で一緒にバイトをしたことがある政志、ななせ、アル、シャルは納得していた。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入るのだろう？それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもの口調で淡々と説明するラウラを逆立ちしている兎のように見ていた。そして、彼女の言っていることを理解するのに数秒要した。

「え、えーと・・・みんなはどう思う?」

一応、クラス代表である一夏が女子達に聞くが急に振ったせいか、未だにきょとんとしている。

「僕はいいと思うよ、メイド喫茶。アル達には執事か厨房を担当してもらえればオーケーだし」

そう言ったのはシャルで、ラウラの援護射撃と思われるそれは、見事クラスの女子にヒットした。

「いいよぉ!執事いいよぉっ!!」

「それでいこう、それで!!」

「メイド服はどうする!?私演劇部衣装係だから縫えるけど!」

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

またもや発言したのはラウラだ。え?と皆が目を丸くする中、ハッと気がついてラウラは咳払いをする。

「・・・ごほん。ななせが、な」

注目されたのが恥ずかしかったのか、ラウラは頬を赤らめてななせ

にキラーパスを送る。送られたななせは困った顔をするばかりであった。

「え、えっと、ラウラ?それって先月の・・・・?」

「うむ」

「・・・まぁ、一応訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでよ」

苦笑いを浮かべてそう告げるななせに、クラスの女子が『怒りませんとも!』と断言する。

こうして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』となった。

「じゃあ、俺はここで待ってるから、さっさと行ってこい」

「あぁ、分かった」

学園祭の出し物が決まったので、担任である千冬に報告しに来た一夏は職員室へ入って行った。付き添いで来た政志は一夏が入るのを見送った後、ドアの隣の壁に背を預けて窓の外に目をやる。

「・・・・ちっ」

僅かながら視界が一瞬だけ歪み、舌打ちを鳴らす。

「（アレが無ぇとこれかよ・・・・。今日の放課後にでも、あいつの所に――――）」

「何処の不良かと思ったら、お前だったか。鈴木」

「これはこれは逢沢先生じゃないですか。一体俺に何の用です？」

「態とらしい敬語は止めろ。逆に腹が立って仕様が無い」

互いに憎み口を言う政志と帝。同考えても生徒と教師の会話ではない。職員室から出てきた帝の後ろから千冬の豪快な笑い声が聞こえてきた。物珍しい表情になった帝はドアを閉めて、大体の事情が想像出来ている政志に問いかける。

「まさかと思って聞くが、家のクラスの出し物を提案したのは・・・・」

「ラウラだけど？」

「はぁ・・・なるほどな。道理で千冬が爆笑するわけだ」

溜息を吐く帝だが、そうこう言っている本人も笑いを堪えているのか頬がピクついている。

「そう笑ってやんなよ。昔と比べると、随分軟らかくなって他人とも接するようになったんだから」

「随分とボーデヴィッヒのことを理解しているようだが・・・好きなのか？」

いきなりの質問に政志は睨むことで応える。鋭い視線が帝に刺さるが全くものともしてなかった。

「テメェ・・・喧嘩売ってんのか？」

「ふっ。確かに、今のからかい方は教師失格だな。すまなかった」

謝ってるわりには全く心がコモっていない。鼻で笑う帝から窓の外へと政志は視線を移す。その表情からはこれ以上付き合ってられないと意思表示しているのが見受けられた。

「やれやれ。仮にも副担任である俺をここまで拒むとは、それでも――――」

「俺は面倒事が好きじゃねぇだけだよ」

「まぁいい。それと一つ聞きたいことがあったから丁度いい」

あぁ？と政志は首を横に向けると、黒い瞳で真直ぐ自分を見つめる帝がいた。

「ボーデヴィッヒにガンダムを与えたのはお前か？」

「・・・それがどうかしたか？」

「いや・・・別に大した事では無い。だが、お前とあいつに言えることが一つだけある」

声色と共に彼が纏う空気も真剣なものなる。政志は黙って帝の話しを聞いており、彼が次に何を言うのかをジッと待っていた。そして、帝の口がゆっくりと開く。

「『死神』には、気をつけろよ」

それを最後に帝は政志に背を向けて廊下を歩き出した。一体何のことかは分からなかったが、帝の様子からすると今までで一番厄介なことだと予想出来た。

「死神・・・か」

俯いて呟いた言葉は空気に溶け込むかのようにすぐに消えた。どんな敵が来ようと、どんな状況に陥ろうが、彼の成すべきことはただ一つ。全て破壊することだ。戦うことしか出来ない破壊の神である自分を鼻で嘲笑すると、水色の髪の女性が除き込んできた。

「どうしたの？浮かない顔しちゃって」

「何でもねぇよ。つか顔が近いんだけど・・・」

やれやれと言った感じの政志の目の前で、楯無は良い笑顔を浮かべるのであった。

だれでもいいから、あの馬鹿止めてくれ（後書き）

Q：『この机はあなたのお兄さんが使いますか？』を英語に訳しなさい

A：Ｉｓ　ｔｈｉｓ　ｄｅｓｋ　ｕｓｅｄ　ｂｙ　ｙｏｕｒ　ｂｒｏｔｈｅｒ？

龍鳳「Ｉｓ　ｔｈｉｓ　ｄｅｓｋ　ｙｏｕｒ　ｂｒｏｔｈｅｒ？（この机はあなたのお兄さんですか？）」

クリス「アルにばっか目が行ってて忘れるけど、龍鳳も結構馬鹿なんだね」

だって生徒会長だもん♪（前書き）

前半部はちょっとした過去編となっています

あと最後の方に『えっ？』と思わせるものがありますが気にしないでください

では、本編をどうぞ！！

全てが凍て付くシベリアの大地。そこではあるＩＳのテストが行われようとしていた。機体の名は『モスクワの深い霧（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）』。そこには国の上層部の人間が監査目的で集結しており目を光らせている。そして、連邦からも使者が一人来ており搭乗者である更識楯無と初見の挨拶を交えていた。

「んー。まさか噂の堕天使が君みたいな子だなんて、お姉さんもビックリだよ」

「は、はぁ・・・そうですか」

一体どう思われてたんだろう？反応に困った黒い堕天使、琴吹ななせは苦笑いを浮かべる。何故何処の国にも属さない連邦の人間が来ているかと言うと、それは楯無の相手を連邦から提供しているからである。ななせが開発した実戦配備する予定のジンクス。ロシア側としては、自国のＩＳよりもそちらの方に興味が傾いているようであった。

「でも、本当に良かったの？連邦の試作機を他国に見せちゃうことになるけど」

「それなら大丈夫です。家の機体は他のＩＳと根本から違いますから。それに・・・・」

「それに？」

「別の理由もありますしね」

可愛らしく微笑むななせに楯無は頭上に?を浮かべる。ふぅ、と一息つき自分の戦う相手の方に目をやる。そこには真っ赤な長髪をポニーテールにしている少女がいた。退屈なのか欠伸をしている少女からは緊張感が全く感じられない。

「（あの子・・・かなりのやり手だね）」

常人には分からないオーラを醸し出す少女を楯無が興味有り気に見ていると、ふと目が合った。

「・・・・・」

無言かつ無表情で軽く手を振ってきたので、楯無は笑顔で振り返した。そして二十分後。テスト開始の時間がやってきた。楯無と少女はそれぞれのＩＳを展開しており見合っている。雪が降る中、開始の合図が響いた。だが、その刹那。

「上空より見確認の機体を確認！数は・・・・十三機です！！」

「何だとッ！？」

部下の報告を聞いた上官であろう者はすぐに灰色の空を見上げる。それに釣られて他の人間も上を向く。緑色の全身装甲に肩のスパイク。そして特徴的な赤い一つ目のようなメインカメラ。十機のそれは楯無を捉えており、ゆっくりと降下している。

「ザク十三機か。まぁ、確かにテスト機を奪うのには、それぐらいが妥当だろうね・・・・」

上層部の人間が慌てて避難する中、ななせは全く動じることなく呟いた。楯無と赤髪の少女に背を向けた彼女は会場にいた人間の警備に参加するのであった。一方、楯無はザクが視界に入った瞬間に、敵の目的が自機であることを悟った。なら、全員が避難するまで時間を稼ぐしかない。そう思ってはいるが敵の数は十三で自分が駆る機体はテスト機。無意識から現れる不安が彼女の額に冷や汗を流させる。

「止めとけ。今のお前が行っても無駄死にするだけだ」

ランスを構えて飛翔しようとしていた楯無に赤髪の少女が制止の声を掛ける。振り返ると、赤髪の少女はジンクスを解除しており、何時の間にか服もＩＳスーツからななせが着ていた軍服の色違いに変わっていた。

「無駄死にって・・・・これでも私は――――」

「黙ってろ。そもそも、俺が戦うこと事態あまり好きじゃねぇんだ。だから・・・・」

赤髪の少女は右手で頭を、左手で首元を掴んで一気に引っ張った。メリメリと音を立てて薄いマスクと、バサッと鬘を取れる。中から出て来たのは茶色の髪に金と赤のオッドアイを持つ少年。彼は真直ぐな双眼で楯無を見つめる。

「ちっとばっか、俺に守られてろ。いいな？」

「え？う、うん。分かった・・・・」

女性と思っていた者が男だったことにも驚いたが、そんなことなど

どうでも良く感じさせる何かが少年にはあった。今まで感じたことのない感情を胸に抱き、楯無は少年の背中を見つめる。十三機の先頭を駆るザクのメインカメラが楯無から少年へと視線を移す。

「小僧、死にたくなければそこを退け。我々はその女に用がある」

降下し切った十三機が持つサブマシンガンの銃口は全て少年へと向けられる。しかし、少年は臆することなく口角を上げて指の関節をバキバキ鳴らした。そして、少年の姿が残像を残すこと無く消えた。

「残念だったな。俺はお前達に用があんだよ」

声が聞こえた方を振り向くと、そこには驚くべき光景が広がっていた。最後尾にいたザクの胸部から腕が生えており、血で真っ赤に染まっている。しかも、その血はザクの搭乗者のものであった。腕を引き抜くと同時に、貫通部から火花が散り、数秒後には爆発を起した。

「な、なんなのアイツ！？」

「いや、ちょっと待て・・・・あの軍服、地球連邦のじゃないか！？」

「まさか、お前は・・・・ッ！！」

装甲下で大量の冷や汗を掻くザク達は後ずさりをする。爆発によって生まれた紅蓮の炎の中を悠々と歩く少年を見て楯無はあることを思い出した。単騎で何百もの敵を蹂躙し尽くす存在を。噂でしか聞いたことが無かったが、何故か目の前にいる少年がそれだと確信が持てた。

「あぁ、俺か？安心しろ。俺はただの・・・・」

少年の体を光が覆うと、次の瞬間には彼は赤い装甲を展開していた。真っ赤な粒子と装甲は彼の邪笑によって、より一層悪魔らしさを醸し出している。

「通りすがりの破壊神だ！覚えておけぇッ！！」

アルケーと共に得た称号を叫んだ政志はバスターソードを片手にザク十二機へと突っ込んでいく。これが政志と楯無との出会いであり、彼女が初めて恋をした瞬間でもあった。

それから楯無はちょくちょく連邦へと顔を出すようになり、今では本部のほとんどの人間と顔馴染みになっている。これが政志達と楯無が知り合いになった経緯であり、そして時は現在に戻る。

「一夏・・・こいつ殴っていいぞ」

「ちょ、酷くない！？」

職員室から出て来た一夏に政志が撲殺の許可を与える。当然だが、一夏は殴ることなく苦笑いを浮かべる。政志の言葉には若干の怒りが含まれているのは勝手に文化祭の景品にされたからであり、仕方無いと言えば仕方無い。一つ深呼吸を入れた政志は一夏と共にアリーナへと向かうが、楯無も政志の隣にごく自然に並び歩き出した。

「おい、生徒会長。俺達に何か用でもあんのか？因みに、ストーカーは犯罪だぞ」

「隣歩いただけでストーカー扱いって鬼畜過ぎない・・・？でも、それはそれで快――」

「俺が悪かったから、用件を言ってくれ」

ウットリした表情で危ない発言をしようとする楯無を政志は全力で阻止した。政志に頼み事をされたせいか楯無は満足気な笑みを浮かべる。

「じゃあ、先に一夏君からの用から言っちゃうと、暫くのＩＳのコーチは私がやるから」

「いや、それに関しては問題無いです」

現在、一夏のコーチをしているのは政志、アル、龍鳳、クリス、ヴィンセント、ななせ、ラウラ、箒、シャル、鈴、シャルの十一名。

数も半端なく多く、特に前から六名がコーチなど贅沢過ぎると言っても過言では無い。十分過ぎる面子のはずだが、政志は反対することなく、逆に賛成した。

「確かに、楯無のコーチは一夏のためになるだろうし・・・受けてみても損はしねぇ話しだぞ、一夏。こいつは傍から見たらアホにしか見えねぇけど一応生徒会長だからな。それに関しては俺が保障する」

「え、それに生徒会長って何か関係あんの？」

「あれ、知らないの？ＩＳ学園の生徒会長というのは・・・・」

楯無が説明しようとしたところで、前方、窓、後ろの三方向から同時攻撃が楯無目掛けて放たれた。前方からは竹刀を持った女子、窓からは弓道の矢、後ろにあるロッカーからはボクシンググローブを嵌めた女子。

「おいおい。こいつは新手のテロか・・・・？」

呆れて言う政志の隣では一夏が驚きのあまり口をあんぐりとさせている。楯無はまず竹刀を振り上げた女子の喉笛に畳んだ扇子を叩き込んで意識を奪い取った。女子が手放した竹刀の柄頭を蹴り飛ばし、窓の外から放たれた矢を弾いて、矢を放っていたであろう袴姿の女子の眉間に直撃させて見事撃破。最後に体勢を立て直すこともせずに跳躍し、背後から襲いかかってきたボクシング女子に後ろ回し蹴りを叩き込む。

「生徒会長。即ち、生徒の長たる者は・・・・」

淡々と語る楯無の姿は戦場を舞う一匹の蝶を思わせる。

「最強であれ」

後ろ回し蹴りの際に上へと放り投げていた扇子をキャッチし、楯無は扇子でスカートの裾を押さえた。チラッと二人に悪戯っぽい視線を投げかける。

「見えた？」

「みっ、見てませんよっ！」

「安心しろ。端っから興味無ぇから」

「ま～たそんなこと言っちゃって。見たいなら見たいって言えば、いつでも見せて上げるのに♪」

「・・・もしもし、シエルか？今から言う座標にハイパーメガ粒子砲を撃ち込め。犯罪者予備軍を排除する」

「落ち着け政志！俺達も死ぬぞッ！！」

携帯片手に学園ごと楯無を吹っ飛ばそうとしていた政志を一夏は全力で止める。舌打ちをする政志が横を向くと、女狐がケラケラと笑っていた。

「まぁ何にせよ。ここで話しをするのもあれだから、二人を生徒会室に招待させて貰おうかな」

承諾もしていないのに勝手に話しを進める楯無を見て、政志と一夏

は揃って溜息を吐く。

「悪いけど、何だか長引きそうだから俺はパスするわ。ちょっと外せない用があるから」

「用事って・・・・もしかしてアニメ絡み？」

「勿ッ！」

サムズアップしてグッと親指を上げる政志はキラキラと輝いている。

「じゃ、そういうことだから、よろしくな」

それだけ告げた政志は弓道の矢が飛んで来た窓から出て行った。一夏はやれやれと言った感じの表情を浮かべており、楯無は・・・・

「・・・・逃げられた」

むぅ、と頬を膨らませるのであった。

日も暮れて、空はオレンジ色へと染まる。場所はＩＳ学園内にある医療施設。設備は当然の如く最先端の物を有しており、そこいらの病院なぞ目ではない。そんな施設の診察室にとある二人の男性がいた。

「それにしても、君がまたここに来るなんてね。正直、私も驚いているよ」

紫の髪に金色の瞳を持つ白衣を着た男性、ジェイル・スカリエッティは椅子に腰掛け、診察台に寝転ぶ少年を見据える。

「ウッセーよ。つか、どうでもいいからさっさとアレ寄越せや」

「そうしてあげたいが、一応ここは病院なんでね。ちゃんと診断はさせて貰うよ」

「ちっ。分かったよ・・・・」

諦めた少年は頭に回していた手を診察台の近くにある青い袋へと伸ばす。ゴソゴソと中を探り取り出したのは一冊の雑誌。

「・・・・それは一体何の雑誌だい？」

「Ｎｅｗ　ｔｙｐｅ最新号」

アニメ雑誌を黙々と読む少年はページを捲る度に鳴り声を上げる。

趣味を楽しむ少年を尻目にジェイルは過去の診察書に目を通す。すると、部屋のドアが開いて一人のナースが入って来た。

「ドクター、診断結果が出ました」

「ありがとう、ウーノ」

ウーノから診断結果を受け取り内容を見た瞬間、ジェイルの表情は険しくなった。そして視線は診断結果から少年へと移る。少年は相も変わらず雑誌を読んでいた。

「一つ・・・・質問をしていいかい？」

「ん？あぁ、別にいいぜ」

「ここ最近。視界がぼやけたり、フラついたりと何処か身体に異常があっただろ？」

「ほぉ、流石は元天才科学者。良く分かったじゃねぇか」

「君は・・・・自分の身体が今どうなっているのか分かっているのか？」

「分かってるから此処に来たんだ。それより、全部終わったんだからアレ出してくれよ。帰るのが遅くなったら色々と面倒なことになっちまうから」

雑誌を閉じて診察台から降りた少年は帰り支度を始める。何を言っても無駄と察したジェイルは一言だけ、分かったと告げた。少年は診察室から出て行き、部屋にはジェイルとウーノの二人となる。

「いいのですか、ドクター。彼をあのまま帰してしまって・・・・」

「止めたどころで私にはどうにも成らないさ。第一、彼を止めることが無理なのは君も知っているだろ？」

ははは、と乾いた笑いを浮かべるジェイルは診断結果に記載されてあるパラメータを見据える。

「〇〇〇〇〇が７０％・・・・。五ヶ月前よりも明らかに悪化しているね」

「普通の人間なら死んでいる数値です。それなのに、どうして彼は・・・・」

「私にも良く分からないが、覚悟というやつじゃないのか？」

「覚悟？」

「彼曰く、やることがある限り死ぬことはないそうだ。彼らしいと言えば彼らしいけどね」

二人が首を横に向け、視線の先にある一枚の写真を見つめる。ウーノを含む十二人の女性に囲まれて二人の男性が写っている。一人はジェイルで、もう一人は先ほどの少年。

「だけど、やりたいことがあるなら早くした方がいいよ。君に残された時間は、君が思っている以上に少ないんだ・・・・政志」

自分を犯罪者の道から救ってくれた友人に向けるその目は僅かなが

らも寂しさを含んでいた。

「ドクターは・・・後何回、政志はガンダムに耐えれると思いますか？」

「これは私の推測に過ぎないが、彼の症状からするともって後・・・・」

『三回が限界だろうね』

友人達が知らないところで、政志の終焉は始まっていたのであった。そして、この回数は政志本人も大体理解している。だが、彼にこのことを誰にも言うつもりは無い。今の彼に出来るのは、ただひたすら明日を求めることなのだから・・・・

主人公は裸Yシャツ派（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ありません

でも、木曜日に全てのテストが終わるので、投稿速度が上がると思います

では、本編をどうぞ！！

主人公は裸Yシャツ派

「応募者全員サービスは一冊につき一つだとッ！くそッ、こんなことなら百冊ぐらい買っときゃ良かった・・・・」

病院から寮に帰るまでの道のりを政志はずっと雑誌を読んでいる。自室へと向かう廊下で痛恨のミスに気付いた瞬間、表情が暗黒に染まった。足のりも急に重くなり、ブラジルまで届きそうな深い溜息を吐く。

「・・・何やってんだ、お前？」

自室が近づき俯いていた顔を上げると、見覚えのある物体が紐でグルグル巻きにされていた。

「政志か・・・・。そんなことより、早くこの紐を解いてくれ」

短い手足をジタバタさせるロシナンテに冷たい視線を送った政志は仕方無しに紐を解いてあげた。戦闘形態になれば自分で抜け出せただろうが、彼も政志達と行動を共にしたせいか馬鹿が伝染し、思いつかなかったようだ。

「で、お前は何で縛られて部屋の前に放置されてたんだ？」

「・・・・・」

政志の問いに答えることなくロシナンテはふんっ、と不機嫌そうに鼻を鳴らしてトテトテと何処かへ歩いていった。奴の行動が理解出来ないまま、政志はドアノブを捻った。すると、そこには・・・・

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それとも、わ・た・し？」

ドガシャーン！！と有り得ない音を出してドアが閉められる。それもその筈、誰もいないはずの自室に、裸エプロンと言う過激すぎる格好をした楯無がいたのだから。大きく深呼吸し、気持ちを切り替えた政志は再びドアノブに手を掛ける。

「そもそも・・・楯無がいるわけねぇだろ。つか、裸エプロンて何処のエロゲだよ・・・・」

そう自分に言い聞かせるが、視界に入ったのは先ほどと全く同じ光景だった。

「お帰りなさい。今夜は責める？受ける？それとも――――」

「アウトなこと言ったら全力でド突くからな」

何を言おうとしているのが直感で分かった政志は最後まで言わせなかった。変な誤解をされる前に、廊下に誰もいないことを確認してドアを閉める。ななせとラウラにバレた時に理不尽な仕打ちを受けるのは目に見えている。特に、ななせが暴れると学園が更地になりかねない。

「俺・・・何か悪いことしたっけ・・・・？」

神に見放された気がして仕方が無く、頭痛すらも覚えた。

「まぁ、とりあえず自分の部屋帰れ・・・・うん、それがいい」

「え～？折角、政志が好きなこの格好で待ってたのに」

「おいコラ。いつ俺が裸エプロンが好きだって言った」

「アルから聞いたんだけど？」

「・・・・・」

要らぬ情報を流したアルが後で血祭りにされたのはまた後で語ろう。馬鹿の処刑方法を考えていると楯無の姿が目に入り、改めて現状況を理解する。

「なぁ、楯無・・・・その格好どうにかならないか？」

両手を膝の上に置いて谷間を見せ付けるかのように上目遣いで政志を見る。しかも部屋には二人っきり。そこいらの男なら理性が崩壊しそうなシチュに耐える今の政志を見て、誰が連邦の元帥だと思うだろうか？ほのかに頬を赤くして後ろを向く政志を楯無はニヤニヤと見つめる。

「どうにかしないと何かまずいのかな？」

「この確信犯が・・・・絶対いつか後悔させてやるからな」

舌打ちを鳴らした政志はベッドに腰掛けた。それを見た楯無も政志の隣に腰掛け、スリ寄ってきた。

「今日からここに住もうと思ってるんだけど・・・・駄目？」

「当たりめぇだ。つかマジでその格好止めてくれ」

無駄だと思いつつも頼んだがやはり無駄だった。その証拠に頭痛の原因である楯無は政志のベッドに仰向けで寝転がる。どうにもならないと諦めた政志はアル達の部屋に行こうとベッドから立ち上がって歩を進めるがそれもすぐ止まることになる。

「ここで政志が寝てるのか・・・そう考えただけで濡れちゃいそう」

危ない変態はベッドのシーツの臭いをくんくんと嗅ぐ。自分のベッドのが良からぬことに使われているのを見逃すわけにはいかず直ぐUターンした。

「お前なぁ・・・一体何がしたいんだよ」

「まぁまぁ。そう顰めっ面しないで、ホラ！」

「ちょ、止め――――」

近寄った瞬間、腕を強引に引っ張られベッドに倒れ込む。両手をなんとか楯無の顔の両隣に立てるが、その格好は傍から見たら政志が楯無を押し倒しているようにしか見えない。明らかに拙い状態なのは明白であり、すぐに政志は楯無の上から退こうとする。しかし、その瞬間。

「政志？今日の放課後、何処に行っ・・・・」

「お前がいない間に変な女が来・・・・」

ガチャッと開けられたドアから入って来たのはななせとラウラ。二人共何か文句が有り気な表情だが部屋の中を見た瞬間に石像と化した。

「（ヤバい・・・・。こりゃ完全に死亡フラグが立っちまったぞ・・・・）あ～、二人共？これには深い訳が有ってだな・・・・」

戦場とアニメで授かった直感が危険と伝える。その証拠にななせとラウラの周りには視認出来るほどの黒いオーラが漂っている。どうにかして難を逃れようと政志は経緯を説明しようとするが、それよりも事の根源が先に動いた。

「そんな風に押し倒さなくても、政志になら全部捧げ――――」

「お前は喋るなぁぁぁッ！！」

火に油を注ぐような事を言う口を政志は手で塞ぐ。だが、突如ありえないほどの殺気を感じ、額に一筋の冷や汗を流しながらも、恐る恐る殺気の発生源であろうななせ達に視線を向けた。

「「・・・・」」

二人はそれぞれのガンダムを展開し終え、ＧＮソード？とＧＮバスターライフルの銃口を政志に向ける。

「クソッ！こういうのは一夏の役じゃなかったのかよ！！」

愚痴を吐きながら政志は窓へと直行し、ガラスをブチ破って飛び降りた。その一秒後、窓枠を消失させて、深紅と桃色の閃光が部屋から飛び出したのは言うまでもない。

「ねぇ、このフレーズどう思う？」

寮の部屋で真海は新曲の作成をしており茜に感想を聞く。毎日聞かされる質問に茜は答えるか悩むが答えなければ後々面倒臭いので仕方なく答える。

「別に良いんじゃない・・・・。ていうより、そういうことはあたしじゃなくて、ひさ子に聞きなさいよ」

「あいつにならもう聞いたさ。でも、茜と同じこと言うんだよ・・・・何でだろ？」

そりゃ呆れられてるからだろ。心の中でそう思った茜は音楽キチから女性雑誌へと視線を移す。真海の先ほどの質問を政志に置き換えると『このアニメ面白過ぎね？』になる。これを毎日聞かされたら

たまったもんじゃなく、茜じゃなくても面倒臭くなるのは必然だ。
そして雑誌に飽き始めた頃に茜はあることを思い出した。

「そういえば、あんたこの前の作戦でまた派手にやったらしいじゃない」

この前の作戦とはオーストラリアで起こった紛争の鎮圧である。本来ならルーシィ率いるジンクス部隊が行うものを真海が単独での作戦を志願したのだ。その結果、紛争は見事真海一人によって治まったが、やり方に問題があった。

「仕方無いだろ？止めろって言っても止めないんだから」

「だからって、全員を半殺しにすることないでしょ・・・・」

「ああいう奴等は一度痛い目に会っとかないと反省しないんだよ」

痛い目で済むのか些か気になりつつも相変わらずの姉妹に茜は苦笑を浮かべる。

「それより、最近皆が私のことを『鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）』って言うんだけど・・・何で？」

「あんたもお兄ちゃんに似てきたってことでしょ。はぁ・・・・そう考えたら、作戦に参加するの嫌だなぁ。あたしも物騒な呼び名付けられたらどうしよう・・・・」

「心配しなくても、『紅蓮の破壊神（クリムゾン・デストロイヤー）』より酷くはならないよ」

実の兄をどういう目で見ているんだこいつは・・・・。本人がいた

ら間違い無くシバかれている発言を真海がした直後、部屋のドアが開きもう一人の姉妹が入ってきた。

「真海、茜。これ、兄さん達から」

そう言って天空が渡すのは二つの封筒。何だろうと思いつつも開けると中に入っていたのは一枚のチケットだった。

「ＩＳ学園の学園祭か・・・・。行きたいの山々だけど、学園長が・・・」

「それなら大丈夫。さっき、私が学園長から許可もらってきたから」

ほれ、と言わんばかりに二人に外出許可証を見せる。すると真海と茜からオォーッ！と小さな拍手が送られた。

「あれ？でもこのチケット、配布者がギアナ大将になってるんだけど？」

茜がそう言うので真海も自分のチケットの配布者名を見る。すると、そこに書かれていたのはななせの名前だった。

「天空は誰からになってる？」

「私はトールギス大将。他にも学園長とマスクアード大佐の所にもトールギス少将とクシュリナーダ大将から着てたらしいよ。でも、二人共忙しいから行けないって」

特に招待する人物がいないアル達は考えた結果、彼女達に渡すことにしたのだ。来年、ＩＳ学園に来るのなら見学も兼ねて丁度良いの

ではないかとのことだ。そして、ななせは真海、アルは茜、クリスは天空、龍鳳はシエル、ヴィンセントはルーシィ。

「じゃあ、お兄ちゃんのは誰が持ってるの？」

茜がそう疑問に思うのは仕方無く、真海も気になっていたことだ。

「兄さんのは蘭さんが持ってる。渡して配布者の名前見た瞬間、凄く喜んでた」

「なるほど・・・これで隣の部屋から聞こえてくる叫び声の正体が分かったよ」

「でもＩＳ学園かぁ・・・あたし入学する前に一度行っときたかったのよねぇ」

「で、あの馬鹿兄貴達のクラスは何やるんだ？」

「私もそこまでは知らない」

「どうせお兄ちゃん達のことだから、『ご奉仕喫茶』とかそういうのでしょ」

「いや、流石にそれはないだろう・・・」

「冗談に決まってるでしょ。『ご奉仕喫茶』とか、本気でやるクラスがあったら担任の顔が見てみたいわよ」

笑いながら言う茜だが、本当に政志達のクラスが『ご奉仕喫茶』なるものをやるとはこの時思ってもいなかった。そして、彼女が言う

担任に全く同じことを言えば、どういう目に合うかは目に見えている。

～オマケ～

「おい金髪野郎・・・・とりあえず歯ぁ食いしばれ！」

「ちょっと政志さん！？いきなり過ぎて何のことだか――」

「百回死ねや、ゴラァァァァァァ！！！！！！」

「あんぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

政志から酷い仕打ちを受けるアル。そして楯無は申し訳なさそうな表情でそれを見ていた。

「ごめんね。嘘つく序でアルの名前出しちゃって」

口元で開かれる扇子には『理不尽な仕打ち乙』と書かれていた。

主人公は裸Yシャツ派（後書き）

次から学園際編に突入しま～す

みんな、学園祭やで！！（前書き）

テストがやっと終わりました

ええぇ、そりゃ色んな意味で・・・・

まぁ、それは置いといて、今日からは以前のような投稿スピードを取り戻せるように努力します！

では、本編をどうぞ！

みんな、学園祭やで！！

楯無が政志の部屋に住みついてから、政志は幾度となく気苦労した。ラウラからは睨まれ、ななせは目を合わせてくれない時もあった。他にもシャル達からは冷たい視線を送られ、アル達からは笑い者にされた（その際、アルが再び血祭りに上げられたのは言うまでもない）。そんなこんなで時は流れ、今日は待ちに待った学園祭当日。こういう催し物のお決まりと言っていい程の盛り上がりを生徒達は見せている。

「うそ！？一組であの鈴木君達の接客が受けられるの！？」

「しかも執事の燕尾服！」

「それだけじゃくてゲームもあるらしいわよ？」

「しかも買ったら写真を撮ってくれるんだって！ツーショットよ、ツーショット！これは行かない手はないわね！」

中でも一年一組の『ご奉仕喫茶』はド豪いぐらいに盛況しており、朝から大忙し。だが、本当に忙しいのは政志、一夏、アル、龍鳳、クリスの男子五人で、他の面子は割と楽に仕事をしている。

「いらっしゃいませ♪こちらへどうぞ、お嬢様」

とりわけシャルはアルにメイド姿を似合っていると言われたためか楽しそうにしている。他のメイド担当のラウラ、箒、セシリアは難なく接客をこなしているが、一人だけスムーズにいっていない者がいた。

「せ、精一杯ご奉仕させていただきます・・・・」

恥ずかしさもあってか声が小さいななせ。そんな彼女に萌える一部の女子からは黄色い声が飛び交っている。

「今思ったんだけど、接客に十人もいらねぇだろ絶対」

政志の言う通り接客班はメイドと執事を入れて十人。明らかに多すぎるように思えるが客の数が数だけに割りと丁度良い人数となっている。接客班の他の二つある調理班と雑務班。中でも雑務班は忙しく、長蛇の列を整理しているスタッフは気の毒としか言い様が無い。

「こちら二時間待ちで～す」

「大丈夫です。学園祭が終わるまでは開店してますから」

整理しているのに列の長さは短くなることを知らず、逆に長くなる一方だ。接客の合間に何事かと思った龍鳳が教室から顔を出した。しかしその瞬間、一人の女子と目が合ってしまった。

「あ！クシュリナーダ君だ！」

すると他の女子も龍鳳へと視線を移し目を輝かせる。面倒臭いことになる前に頭を教室に戻すと、再び接客へ戻った。

「ちょっとそこの似非関西人。テーブルに案内しなさいよ」

「誰が似非関西人や！」

聞きなれた声での乱暴な口調のお嬢様。一瞬で誰か分かった龍鳳が振り返ると予想通りの人物がいた。しかし、彼女の服装は予想外だった。

「鈴・・・お前何やっとんねん?」

鈴はチャイナドレスに身を包んでいた。。一枚布のスカートタイプで、真っ赤な生地に龍をあしらっていて、かなり大胆なスリットが入っている。

「う、うるさいわね!うちは中華喫茶をやってんのよ!」

「あぁ、あれか。俗に言う飲茶ってやつやな」

「あたしとヴィンセントがウェイトレスやってるっていうのに、隣のあんたのクラスのせいで全然客来ないじゃない!」

「それは気の毒やな・・・って、ちょっと待てや。ヴィンセントがウェイトレスってどういうことや?」

「あんた達に対抗して、うちのクラスの女子がヴィンセントを改ぞ・・・じゃなかった。女装させちゃったのよ」

女装を改造と言い間違える時点で碌な目に合っていないだろうヴィンセントを龍鳳は心の中で憐れむのであった。

「まぁええわ。ほなら・・・・間違えた。それではお嬢様、こちらへどうぞ」

「お、おじょ・・・・!?」

「そう言うんがルールやからしゃあないやろ」

「そ、そう、ルールなら仕方ないわね！・・・仕方ないわね」

何で二回言ったんや。そんな疑問を抱きながら龍鳳は鈴を空いているテーブルへと案内する。因みに、この『ご奉仕喫茶』の内装、クオリティが学園際を悠に超えていた。ほとんどはセシリアが手配したものが多いが、ティーセットに限っては全てクリスが用意した。甘党の本人曰く、『入れ物が良かったら、甘味が倍増する』とのことだ。だが、そのティーセットはとある国の王室で使っているのと同じものらしく、調理担当のクラスメイト達は手を震わせないようにするのに全神経を使っているらしい。

「それで、ご注文は何になさいますか、お嬢様？」

「そ、そうね・・・」

内装の高級感が落ち着かないのか、鈴は二回ほど身をよじって座り直し、龍鳳が開いているメニューを凝視する。

「この『執事にご褒美セット』って何よ？」

「申し訳ございませんが、当店にそのようなメニューは存在しません」

「存在しませんって言われても、赤文字で滅茶苦茶デカく書いてるんだけど・・・・」

「それなら、一度眼科に行った方がよろしいかと」

こんな執事が居たら間違い無く即効で首になっている。

「・・・その喋り方、お願いだから止めてくれない？気持ち悪いから」

「お前なぁ！気持ち悪いは無いやろ！こっちは仕事でやっとる言うのに！」

「じゃあ『執事にご褒美セット』を一つ」

「はい！『羊に牛蒡抜きセット』一つ～！」

「あんた関西弁のクセにギャクのセンス無いのね」

結構グサリとくる台詞によって諦めが生まれた龍鳳は深々と溜息を吐いた。

「『執事にご褒美セット』が一つですね。それでは、少々お待ち下さい」

心の中で舌打ちをした龍鳳は鈴の前から立ち去る。因みに、オーダーはブローチ形マイクから音声で通じているので通す必要はない。キッチンテーブルに戻ると直ぐに『執事にご褒美セット』が渡された。気が進まず、重い足のりで龍鳳は鈴の元へと戻った。

「お待たせしました、お嬢様」

「う、うむ。苦しゅうないわよ？」

「（こいつ、これでお嬢様のつもりなんか・・・・・？まぁ、ええけど）では、失礼します」

「え？」

龍鳳は鈴と向き会う形でテーブルに座った。片方は燕尾服、もう片方はチャイナドレス。至って摩訶不思議な構図である。

「な、何で座ってんの・・・・・？ま、まぁ、別に良いけどさぁ」

「ご説明させていただきます」

「お、おー。よきにはからえばいいわよ」

・・・・・。

「・・・・なぁ、この喋り方止めてええか？お前に対してやと、メッチャ違和感があるんやけど」

「そうね。あんたから関西弁取ったら何も残らないし、許してあげるわ」

「一応言うとくけど、お前が客やなかったらド突いとるからな」

遠慮することなく本音を言い合う二人はいつもの調子に戻った。そして鈴は、『執事にご褒美セット』であるアイスハーブティーと冷えたポッキーのセットに視線をやる。

「で、これってどんなセットなのよ？お菓子と飲み物だけど」

「・・・・食べさせられんねん」

「はい？」

「せやから、執事に食べさせられるセット」

直ぐには龍鳳の言っている意味が理解出来なかったが、数秒後に鈴はボッと赤くなった。

「な、何よそれ・・・・っていうか、金取ってお菓子上げるとか・・・・」

「言うとくけどキャンセルは出来へんからな。・・・・ったく、これ考えた奴絶対アホやろ」

「いや、で、でも、まぁ、一度注文した以上は・・・・ごにょごにょ・・・・・」

「何や、鈴。これは任意のサービスやから、やりとうなかったら無理してやらんでもええんやで？まぁ、そん時は俺も戻るだけやど」

「へ、へぇー、そうなんだ・・・・。でも、やっぱり勿体ないし、折角だし序でに・・・・ご褒美あげようかしらねっ」

いやいや折角の意味が全く分からんのやけど。手を振ってツッコミを入れる龍鳳を無視して鈴は一本のポッキーを取って、先端を龍鳳の口元に向ける。

「は、はい、ご褒美・・・・。あ～ん・・・・・」

「お前・・・・恥かしいんやったら止めとけや。思くそ横向いとるし」

「す、するってば！ちゃんとお金分サービスしなさいよ！」

「はいはい。分かったから怒んなや」

「そ、それじゃあ、その・・・・あーん・・・・」

「あーん」

ポッキーの先端が龍鳳の口内に入り込み、それを噛み砕いた。パキッと軽い音と一緒にポッキーは砕け、数秒と掛からずに口の中で溶ける。

「た、た、食べさせてあげたんだから、あたしにも――――」

「おい、そこのアホカップル。いちゃつくなら他所でやれ」

鈴の言葉を遮ったのは何時の間にか二人の間に立っている執事服姿のアル。只でさえ忙しいのに、傍から見たらいちゃついているようにしか見えない龍鳳と鈴。それがアルの小さな脳にストレスを溜め込んだのだ。

「うっさいわ、金髪馬鹿。お前も六番テーブルで注文来とるから、さっさと行けや」

「ちっ、わぁったよ」

不満気に返事をしたアルはすたすたと歩いて去っていった。

「ったく、誰がアホカップルやねん・・・・。なぁ？」

「えっ？う、うん・・・・」

赤く染まった顔を俯き加減にして、鈴音は両手で持ったポッキーをこりこりと食べている。その様、小動物のようで実に可愛らしい。

「鈴」

「ん？」

「お前、なんか可愛いな」

「ぶーーーーっ！！！」

火山の如く、鈴は口に含んでいたハーブティーを噴き出した。ごほごほ咳き込みながら、鈴音は顔を更に赤くさせて龍方を睨みつける。

「あ、あんたねぇ！いきなり何言ってんのよ！」

「何言うても、ただ可愛い思たから言うただけやで？」

「だけやで・・・じゃないわよ！」

「ちょっと待てや！何で俺がキレられなあかんねん！」

「何でもクソもないわよ、この似非関西人！」

「喧しいわ、この似非中国人！」

「あたしは似非じゃなくて本物なの！あんたってホント馬鹿ね！！」

「知らんのか？馬鹿って言うやつが馬鹿なんや！！」

「じゃあ、今あたしのこと馬鹿って言ったあんたも馬鹿じゃない！！」

「お前は馬鹿やのうてスーパー馬鹿や！！」

「それなら、あんたはスーパー・ウルトラ馬鹿よ！！」

「せやったら、お前はスーパー・アルティメット・ウルトラ馬鹿や！！」

最早小学生レベルの言い合いをしている二人。終わりが見えそうになく、止めようと政志が動いたが、それよりも先に、クラスの様子を見に来た帝が二人の頭に鉄拳をお見舞いしたのであった。

「あ、あんたがハイパー・ジェノサイド・トルネード・バスター馬鹿なんだからね・・・・」

「ほ、ほざけ・・・。お前がハイパー・ジェノサイド・トルネード・エクセリオン・バスター馬鹿や言うとるやろ・・・・」

廊下に放り出され、頭上からシュ～と煙を出しているにも関わらず、未だに言い合いをしている二人を通行人は不思議そうに見るのであった。

みんな、学園祭やで！！（後書き）

一応報告しておきますが、作者の考えだとこの小説は、原作五巻＋α→原作六巻→原作七巻→原作八巻？→オリジナルで完結とさせていただきます。

あくまで予定ですが、原作の七巻か八巻の後のオリジナルで完結させるのは作者的に決定しています。

もし作者に余裕があるなら第二期の製作も・・・あるかもしれません。

だって、クアンタとかまだ出してないからね。

以上、作者からの報告でした！

馬鹿は一人で十分なんだよ！（前書き）

後書きでちょっとしたアンケートをするのでお願いします

馬鹿は一人で十分なんだよ！

「まさか『ご奉仕喫茶』にここまで人気があるとは・・・・予想外過ぐるぞ、オイ」

開店から数時間が経っても行列が減ることなく、政志はただ呆れるばかりである。何故か何時の間にか楯無も接客に加わっており、予定より早く休憩を取ることが出来た。そして今は一夏と箒が休憩を取って校内を回っている。

「なぁ・・・気のせいか知んねぇけど、イッチーがいなくなってから俺達やたらと指名されてね？」

「それは多分、一夏くん目当てで来た人が仕方無くボク達を指名してるだけだよ」

「そんぐらい考えたらわかるやろ・・・普通」

「それが分かってんなら、いい加減に仕事に戻れ」

「「「あべしっ！」」」

キッチンテーブルの前で油を売っていた3馬鹿の脇腹に政志は拳を打ち込んだ。三人が居ない間の執事の接客は全て政志一人でやっており、一夏も含めると五人分の仕事をしていた。手加減の無い一撃に悶える三人は涙目で政志を見ると目が『死にたくなかったら早く行け』と言っていた。即座に仕事に戻る三人の背中に政志は苦笑いしながら溜息を吐く。

「ったく、相変わらず手間の掛かる野郎共だぜ・・・・」

慣れない服での仕事は流石の政志でも疲れるのか調理班の女子に頼んで水を一杯もらった。実は政志達にとって学園祭は今回が初めてであった。それ故に、表には出していないが政志達はこの学園祭をかなり楽しみにしていた。そして現在、政志達は軍人には味わえない充実した学園生活を送っている。接客をするななせ達を見ていると自然に微笑みが零れてしまい、グラスの水面にそれが映っているのを見ると顔を引締め、グラスを空にした。

「さてと、行くとしますか」

小さな休憩を挟み仕事に政志が戻ると部屋の角のテーブルから指名が入った。百から先は数えない主義の政志は、今日何回目の指名か分からないまま思い足のりで指名先へと向かった。そこには二人組の少女が座っており、どちらも擦れ違ったら振り向いてしまうほどの容姿である。黄緑色の肩までかかった髪の少女と短めの赤髪に触覚のようなアホ毛が生えている少女。初めて見た顔なのだが政志が二人に向ける視線は只ならぬものだった。

「テメェら・・・・何しに来やがった」

二ヶ月前の臨海学校。バイザーで顔は見えなかったが気配はあの時と全く同じ。政志は目の前の二人が敵だと理解した。

「別に～。ただ面白そうだから来てみただけ。ねっ、恋」

「・・・・（コクリ）」

険しい表情の政志とは正反対の明るい表情で輝火は話を恋に振る。

輝火の言い様からして、どうやら戦闘の意志は無いようだが、目の前にいる亡国機業（ファントム・タスク）の人間をどうするか思考を練る。すると、あれ？と思うことを一つ見つけてしまった。

「なぁ、そいつの名前・・・恋っていうのか？」

「うん、そうだよ。因みに、ウチの名前は輝火。よろしくね！」

「・・・・」

親指を立ててサムズアップする輝火に対して、政志は冷たい視線を送る。

「・・・それ、俺に言ったら駄目なんじゃねぇのか？」

「そりゃそうだよ。ウチらの情報を簡単に漏らすようなこと駄目に・・・あー！シマッターーーッ！！」

そうか、お前も馬鹿なんだな。心の中で輝火を『アーノルド？世』と名づけた政志は周囲を見渡して他にも機業の人間が確認する。

「・・・心配しなくても、ここには恋と輝火しかいない」

今まで口を閉じていた恋に思っていたことを言われ少し驚く。だが・・・

「『ここには』ってことは、まるで他の場所に残りの奴等もいるみてぇじゃねぇか」

「え！？い、いや、それはその・・・（どうしよ～！ここで変に

悟られたら絶対殺されちゃう！！破壊神一人にも勝てないのに、良く見たら周りに連邦の堕天使やら噂の『戦神（ヴァルキリアス）』までいるじゃん！！こんなことなら来るんじゃなかったー！！うぅ～、アリスに絶対怒られる～～！！！）」

頭を抱えて唸る輝火とは別に恋はジ～ッとメニューと睨めっこしている。そんな二人は何処にでもいる少女にしか見えず、政志はやれやれと溜息を吐いた。

「仕様が無ぇ・・・・。お前等のことは黙っててやるから、さっさとコーヒー飲んで帰れ」

「ホントに！？いやぁ～、破壊神も噂ほどの悪――――」

「けど・・・・」

「「けど？」」

輝火の言葉を遮るように政志の声が重なる。なんだろう？と輝火と恋は疑問符を浮かべた瞬間、目の前の男が破壊神となった。

「次に戦場で会った時は容赦なく叩き潰すぞ」

「――――ッ！！」

声には殺気がこもり、口角を上げて笑うその表情。明らかに主人公のものではない。そんな政志に恐怖を抱いた輝火は額に一筋の冷や汗を掻きながらコーヒーを啜った。

「（やっぱ破壊神怖いよ～！ここはさっさとコーヒー飲んで帰――

―）」

「・・・・肉まん、十個」

「緊張感ゼロか、お前は！！」

呑気に肉まんを注文した恋だったが、『ご奉仕喫茶』にそんなメニューがあるわけがなく、それを知った恋の表情は一気に暗くなった。

「（亡国機業（ファントム・タスク）って個性的なやつが多いんだな・・・・）」

そう思わせざるを得ない輝火と恋は注文した品の代金をテーブルの上に置いて立ち上がった。

「じゃ、じゃあね、破壊し・・・・なんか破壊神っていうのもあれだから、政志って呼んでもいい？」

「好きにしろ」

「うん、分かった。じゃあね、政志！」

「・・・・さよなら」

手を振りながら二人は一組から出て行った。どうしてあんな同世代の少女が亡国機業なんかにいるのか。政志は二人の姿が見えなくなるまでそればかりを考えていた。二人が出て行ったドアに視線を送っているとラウラが呆れた表情で歩み寄ってきた。

「良かったのか？あのまま二人を逃がしても・・・・」

「・・・・気付いてたのか、お前」

「プロヴィデンスとジャスティスの搭乗者だろ?そのぐらい何となく分かってたさ」

ふっ、と鼻で笑うラウラだが、その隣で政志は内心驚いていた。ななせ達ですら見抜けなかったことをラウラには出来た。そして、それと同時に一つ疑問に思うこともあった。

「なら・・・・お前こそどうして見逃したんだ?」

政志の知ってるラウラなら敵だと判断した瞬間斬り掛かっているはず。なのだが・・・・

「さぁな。おそらく、お前と同じ理由なのだろうな」

そう言って微笑んでくるラウラに、不覚にも政志はドキッとしてしまった。急に自分から視線を逸らす政志を不思議そうにラウラは見ており首を傾げる。そんな二人を見て、少し離れた場所からななせは切なそうな表情になる。

「(もしかして、政志ってラウラのこと・・・・でも、もしそうだとしても・・・・)」

『政志は誰かを好きになることが出来ない』

嫌なことを思い出してしまい、首を横にブンブン振ったななせは気持ちを切り替えて仕事に戻るのであった。

「どうする、箒。何処か他に回りたいところとかあるか？」

「いや、剣道部にも顔を出せたし私はもう十分だ」

休憩時間に校内を回っていた一夏と箒。とりあえず、箒が一応所属している剣道部に行ってみると何故か占の館になっていた。その際、部長が出席率の悪い箒に対して冷たかったのは余談である。

「じゃあ、休憩時間もそろそろ終わりそうだし、クラスに戻るか」

「そうだな」

ニコニコしながら手を繋ぐそれは正に彼女彼氏そのもの。周囲から羨ましさと嫉妬が入り混じった視線を受けながら廊下を歩いている。だがその視線も二人のラブラブなオーラに弾かれ、二人には届いていない。そんな二人が一組へと向かっている途中、ある一人の男が目に止まった。

「一体・・・あの二人は何処に行ったんだ？」

オレンジの髪にグラサンを掛けて、黒のサマースーツを着こなしている。同じぐらいの歳であろう少年にしては妙な格好であったが、何だか困ってそうだったので一夏と箒はその男に声を掛けた。

「何か困ってそうだけど、どうしたんだ？」

男は一夏と箒を見るとグラサンの下で目を細くする。ジ～ッと見られている一夏はＩＳが使える男が珍しいという理由で見られているのだと解釈していた。

「少年。すまないが、馬鹿そうな黄緑色の髪の少女と触覚みたいなアホ毛が二本生えた赤髪の少女を見なかったか？」

馬鹿という単語が出た瞬間、一夏と箒がアルを思い浮かべたのは内緒である。

「ええと、悪いけど俺は知らないなぁ・・・・箒は？」

「すまないが、私も・・・・」

「そうか・・・なら、仕方あるまい・・・・。二人の協力には感謝する。ではまたの機会に会おう。織斑一夏、篠ノ乃箒」

一夏と箒に頭を下げて礼を言った男は歩き去って行った。男の姿が完全に見えなくなったぐらいで黙り込んでいた二人は口を開いた。

「どうして・・・あの男は私とお前の名前を知っていたんだ？」

世界でＩＳが使える男として報道された一夏なら兎も角、初見の人間が箒の名前を知っているはずがない。それに加えて男が纏っていた空気は常人のものではなかった。一体何者なのだろう？と箒は疑問に思っていたが、一夏は別の疑問を浮かべていた。

「あの顔・・・・誰かに似てる気がするんだよなぁ。う～ん、誰だろう？」

「漸く見つけたと思えば、君達は何をしているんだ・・・・？」

大食いをしている女の子がいる、という情報を聞きつけたグラサンの男、ブレイドが一年二組に向かうと山積みになっている肉まんをむしゃむしゃと平らげている恋がいた。輝火はその隣で女の子らしく肉まんを一口サイズに千切って食べている。

「あっ、ブレイドだ。どうしたの？こんなところで」

「どうしたもこうしたも、アリスから君達がいなくなったと連絡を受けて探しに来たのだ」

「あー、ごめんごめん。でも、恋がこれ全部食べ終るまでもうちょっち待っ――――」

「・・・・おかわり」

「まだ食べるの！？」

皿を空にしてまた注文しようとする恋に輝火はツッコミを入れた。呆れたブレイドの口から溜息が漏れ、二人が食べた肉まんの会計を済ませた。

「二人共、早くしたまえ。これ以上、アリスとマドカの機嫌を損ねるのは懸命では無いと思うが？」

「そ、それもそうだね！恋、急いで帰ろ！そうしないとアリスとマドカに怒られちゃうから！！」

「・・・・アリスとマドカに怒られるの、恋も嫌」

二組から出た三人はやや早足気味で歩いてく。だが、この時三人は気付いていなかった。彼等の後を付ける存在に。

「ったく。ななせ達にとって初めての学園祭だっていうのに、亡国機業は何考えてんだ？」

それは二組の女子達によって改造（女装）させられたチャイニーズドレスを纏ったヴィンセントだった。

馬鹿は一人で十分なんだよ！（後書き）

突然ですが、そのうち書こうと思っている番外編についてアンケートを取ろうと思います。

見てみたいと思う組み合わせを二つ選んで感想に書いてください。

?政志×鈴

?一夏×ななせ

?アル×箒

?龍鳳×セシリア

?クリス×ラウラ

?ヴィンセント×シャル

一番人気があったものを題材として番外編を書くつもりなのでご協力お願いします。

あと、設定に関しても希望があれば受け付けます。

学園祭のお店は色取り取り（前書き）

いらないと思いましたが、一応アンケートの中間発表をします

政志×鈴
2票

一夏×ななせ
2票

アル×箒
2票

龍鳳×セシリア
0票

クリス×ラウラ
1票

ヴィンセント×シャル
1票

龍「ちょっと待てや。何で俺んとこには一票も入って無いねん」

クリス「一応龍鳳はオリキャラの中じゃ第三位の人気を誇ってるのにね」

アル「相方に問題があるんじゃねぇの？」

・・・・・・

龍・ク「「あぁ、なるほど」」

セシリア「ちょ、ちょっとそれは失礼酷過ぎませんか！？」

馬鹿は置いといて、本編をどうぞ！！

学園祭のお店は色取り取り

「料理部ねぇ・・・・。俺には縁も縁も無いとこだな」

「えっ、アルって料理苦手なの？」

一夏と箒が戻って来たので、次のアル&シャルが休憩を取ることにした（余談だが、騒いだ龍鳳には休みが与えられなかった）。

「苦手ってわけじゃないんだけど・・・・軍に入るまで俺達自炊してさ。一日交替で飯作ったりしてたんだよ。政志となせのはやたらと美味くて、クリスに至ってはパティシエかって突っ込みが入るぐらいだ。その中で俺と龍鳳の美味くも不味くもない飯は、それはもう悲しいもんだったぜ・・・・」

「そ、それは気の毒だったね」

あははは・・・・、とシャルは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「けど、あの頃は楽しかったなぁ。今も十分楽しんでるけど、六人で遊んだ思い出も宝物だな」

懐かしそうに無邪気な笑みを浮かべながら語るアルを見ていたシャルだったが、一つ気になることがあった。

「（六人？アルと政志となせと龍鳳とクリスは分かるけど、もう一人は誰のことだろう・・・・？ヴィンセントとは軍に入ってから知り合ったってらしいし・・・・）」

う～ん、と脳内で考え事をしていると二人は調理室に着いた。

「うわぁ・・・・。凄ぇ数だな・・・・・」

調理室に入った二人の視界に入ったのは大量のお総菜。ずらりと並べられた大皿には、肉じゃがやおでん。その他にも、焼き魚や煮物と色とりどりのものが揃っていた。

「あ、もしかしてこれが肉じゃが？」

「ああ。ルーシィから聞いたんだけど、昔は女性の必須スキルだったらしいぜ？」

「ふうん。どうして？」

「何て言ってたっけ・・・・。確か、肉じゃがが美味く作れると好きな男と結婚出来るとか言ってた気が――」

「そ、その話し本当なの！？」

「えっ？ま、まぁ、ルーシィが言ってたんだからガチだと思う・・・・多分」

いきなり食いついてきたシャルに圧倒されて自信無げに返事をする。熱が籠もった目で肉じゃがを見るシャルに何て声を掛けたらいいかアルは考えるが、スプーン一杯分の脳みそしかない馬鹿には無理であった。そこに料理部部長が現れ、できたて温度の肉じゃがを二人分盛ってもらって食べることにした。

「ウマし・・・・！」

「本当においしいね、アル。すみません、これには何かコツとかあるんですか？」

「ふっふっふっふー。それを知りたければ、うちに入部するんだね！」

やはりそう簡単には教えてはもらえず、料理部部長は二人の元から去って行った。

「料理部かぁ・・・・。あ、アルはさ、僕の料理が美味しいと嬉しい？」

「そ、そりゃ嬉しいに決まってるだろ！」

何故か声を張り上げてしまったことを恥ずかしそうにするアルの顔は少し赤い。そんなアルの顔をジ～ッと見つめたシャルは残りの肉じゃがを嬉しそうに頬ばりだした。そんなシャルを不思議そうに思いながら、アル&シャルの休憩時間は終わった。

「で、お前は何処に行きたいんだ？」

「さ、茶道部だ」

次の休憩は政志&ラウラ。あれ、ななせは？と多くの人が思っただろうが、彼女は残念なことに平和的交渉手段『ジャンケン』でラウラに敗北してしまったのだ。とは言っても、先に行くか後で行くかを決めるだけでムキになることではないのだが・・・やはり乙女としては先に行きたいのだろう。

「なら、休憩時間が無くなる前に、さっさと行こうぜ」

政志はラウラの手を掴んで茶道部へと歩き出す。

「て、手を握るな！」

「はいよ」

「・・・やはり握ってろ」

「？π？」

「握ってろと言ったんだ！！」

「・・・おーい、誰でもいいから俺が怒られている理由を教えてくれー」

そんなアホなやりとりをすること一分後。二人は茶道部にやって来た。

「へぇ、なかなか良い畳使ってるじゃねぇか」

何でオタクに畳の善し悪しが分かるかは疑問だが、政志の言うとおり二人が案内された茶室は本格的なもので非常にしっかりしている。流石は天下のＩＳ学園と言ったところか。

「じゃあ、こちらに正座でどうぞ」

言われるまま、政志とラウラは靴を脱いで畳の上に上がる。しかし、執事とメイドが畳で抹茶というのはアニメの世界でも滅多に無いことだ。簡単に言うと、シュールとしか言いようが無い。畳の上で正座して待っていると、着物姿の部長が茶菓子を二人に差し出した。だが、ここで問題が発生した。

「「うぅ・・・・」」

政志とラウラは茶菓子に口を付けることなく難しい顔をしている。ラウラに渡された茶菓子は白餡で作ったウサギでなかなか愛嬌のある顔をしており、じぃっとラウラを見つめるその目は『僕をお食べよ！』と言ってるようにも見える。そしても政志に渡されたのは某有名魔法少女アニメに出てくるキュ〇ベ〇そっくりの茶菓子。その愛らしい顔は『僕と契約してよ！』とまでは言わないが、ラウラの茶菓子と同じようなことを言ってそうだった。

「ラウラ、早く食べねぇと抹茶が飲めねぇぞ・・・・」

「それを言うなら、お前も・・・・・」

ごくりと唾を飲み込み、二人は一度顔を見合って頷き、覚悟を決める。ぱくりと一口でそれぞれの茶菓子の味を堪能した二人は満足そうな表情になる。その表情を見ていると、先ほどの葛藤はどうしたんだよ、と突っ込みたくなる。

「お手前いただきます」

差し出された抹茶の入った茶碗を一礼してから手に取り、二回回してから口に付ける。抹茶特有の苦みが口内に残っていた茶菓子の甘みを流していく。それはとても心地の良いもので二人そろって、ほぅ・・・・っと一息ついた。

「結構なお点前で」

決まりの締め言葉を言って二人は再度一礼し、部長に見送られた茶室を出た。

「なぁ、政志・・・・」

「ん、どうした?」

「も、もし・・・・もしもの話しだぞ?私が着物を着たら、お前はどう思う・・・・?」

何故そのような質問をしたのか政志には理解出来なかったが、取り敢えずラウラの着物姿を想像してみることにした。流れるような美しい銀髪を結っての着物姿。想像した本人は不覚にも顔を少し赤くする。

「そ、そうだな・・・・。見れるなら、一度くらい見てみたい・・・・かな」

「そ、そうか！ま、まぁ、機会があれば見せてやらないことも無いぞ」

「あぁ・・・・。楽しみにしてるよ」

いつもと立場が逆転しているやりとりをしている間に二人の休憩時間は終わるのであった。

「お、音が出ないよ～・・・・」

「く、クリスさん、大丈夫ですか！？」

クリス&セシリアは吹奏楽部の楽器体験コーナーに来ており、セシリアに見守られながらクリスはホルンを吹く。しかし、顔が赤くなるまで息を吹き込んでも音が出ず、とうとう目を回し始めた。顔色が赤を通り越して凄い色になったので、見かねたセシリアはクリスからホルンを回収するのであった。

「ふぅ・・・・危うく楽器で酸欠になるとこだったよ」

「どうして、あんなになるまで続けたのですか?」

「いやぁ、限界まで頑張ったら大丈夫かなって思ってたんだけど、やっぱり駄目だったよ。それに、こうみえてボクの身体は丈夫にできてるから心配ご無用だよ!」

可愛らしい笑みを浮かべ親指を上げるクリスをセシリアは満足そうに見る。しかし、このまま楽器の一つや二つも演奏出来ない男と思われるのも情けないと思ったクリスは自分が唯一自信がある楽器を室内を見渡して探す。すると、それは部屋の片隅にポツリと置かれていた。

「あったあった。部長さ~ん、コレ借りますよ~」

了承を得る前に手にとったソレの吹き込み口に口を付けて演奏準備に入る。だが、それは展示用のハーモニカであり、部長とセシリアが止めようとした次の瞬間。時が・・・・止まった。

「す、凄い・・・・」

「これ何て曲かしら・・・・・?」

「ハーモニカって、こんな音出せたっけ・・・・」

室内を支配する暖かな音色に誰もが聞き入っていた。洗練されたかどうか云々では無く、ただ『優しい音楽』。クリスの奏でるハーモニカから出る音はそうとしか表現出来ないものだった。全ての人を魅了させる今のクリスには『王子』という呼び名がピッタリでセシリアも頬を赤らめて鑑賞している。

「・・・・・」

ハーモニカから口を離し、クリスは演奏を終えた。無言のままハーモニカを優しく一撫でした後、王子は柔らかい笑顔を浮かべた。

「ご静聴感謝します」

恭しく、演奏者は鑑賞者に頭を下げる。その姿に惜しみない拍手が贈られたのは、言うまでもない。

「ふと思ったけど、何で俺だけ休憩が二回もあるんだ？」

「それは多分、大人の事情ってやつだと思うよ」

結構メタな会話をする政志とななせは行く当ても無くただただ歩いている。漸く政志と回れることが嬉しいのか、ななせの表情はいつもより明るく感じられる。

「んで、これからどうする？ただ歩いてばっか、ってのもどうかと思うぞ」

「まぁ、それもそうだけど、あたしも特に行きたいところなんて・・・」

立ち止まったななせの視線の先には、どこかのクラスが出したであろう射的の屋台があった。だが射的に使われているのは本物の猟などに使われているライフル。それで百メートル先の地点を横切る直径十五センチほどの円盤を撃ち抜くというもの。ライフルを構える生徒を見て、許可出したら駄目だろ・・・、と政志は呟いた。

「ああいうの、アル得意そうだね」

「何言ってんだよ。あの馬鹿から射撃をとったら何も残らねぇよ」

「ふふっ。それもそうだね」

何気にヒドいことを言う二人の興味は完全に射的に行っており、そのまま受付へと向かった。

「うわっ、鈴木君と琴吹さんだ！！」

「えー！どこどこ！？」

ＵＭＡのような扱いを数分受けてから、二人はライフルを受け取った。

「それでディスクの速さはどうする？最初はゆっくー――」

「んなもん最初っからＭＡＸでいいよ」

「うん。あたしもそれで」

因みに円盤の最高投擲速度は時速三百キロ。スコープ無しで百メートル先の的を打ち抜くことすら常人には不可能なはずなのに、この射的屋ではその的が動く。どう考えても学園祭でやる催しではない。

「じゃ、じゃあ、的を外すまでだったらいつまでもやっててていいから・・・・」

係の人が苦笑いを浮かべながら説明をして、政志とななせはボックスへと入る。執事とメイドがライフルを構えるというのはなかなかシュールなもので、他の客も含めた周囲の人間の視線が二人に釘付けになる。円盤発射までのカウントダウンとして三つのライトが点滅していき、全ての光が消えた瞬間。目を凝らしていた政志とななせはトリガーを引いた。

バギャンッ！！×２

「ちっ、外したか」

「あたしの方が真ん中に近かったね」

上の奇怪音は円盤が砕け散った音で周囲の野次馬はポカンと口を開けて唖然としている。円盤を撃ち抜くだけでも神クラスなのに二人にとっては如何に中心を撃ち抜くかの戦いになっていた。

「おい、ななせ。無いとは思うけど、どっちかが外すまで勝負しようぜ。負けた方は勝った方に何か奢る。それでいいだろ？」

「いいよ、それで。でも、格闘以外でならあたしでも政志に勝てるからね」

「はっ！上等！」

顎が外れるほど口を開ける野次馬の前で二人の超人は次々に円盤を撃ち抜いていくのであった。

「こ、ここがＩＳ学園・・・・」

「思ってたより普通だね」

「あんたは一体どんな想像してたの？」

「ん～・・・・城、的なやつ？」

学園のゲート前に四つの影がある。政志の妹である真海、茜、天空とその友人である蘭。手には招待券が握られており、今にも入ろうとしていた。

「それじゃ入るとしますか・・・・って天空、その手に持ってるカメラは何？」

「本部の人に頼まれて、兄さん達の写真撮ってきてって」

「あははは・・・・流石は学園長達だね」

「連邦に入るのを真剣に止めようか悩むわね・・・・」

真海の問いに無表情でのドヤ顔で天空が答える。相変わらずの本部の人間達に蘭は呆れ、茜は頭を抱える。

「まぁ、それはそうと・・・・さっきからみんながこっち見てるの、気のせいかな？」

蘭の言う通り先ほどから四人に向けてやたらと視線が刺さっていた。他の三人もゲートを潜ってから感じていたもので何だろうと首を傾げる。すると、視線を向けていた女生徒の一人が歩み寄ってきた。

「ねぇ、あなた達ってお兄さんがいたりするの？」

「はい。兄が一人」

別に隠す程のことでもないので天空はすらっと答えた。次の瞬間、女生徒の目が輝き始めて真海は嫌な予感を覚えた。

「やっぱりそうなんだ！！みんなぁ、この三人鈴木君の妹さんよ！！！」

女生徒が大声で周囲にそう伝えると雪崩の如く生徒達が迫ってきた。何故ばれたのか茜と蘭は真剣に考え、お互いの顔を見た瞬間ハッとなった。

「茜、多分だけど・・・・」

「この目のせいでしょうね・・・・」

赤と金のオッドアイなど珍しい以外のなにものでもなく、女生徒は真海達の目を見て政志の妹だと判断したのだろう。因みに、政志に指摘されて以来、苗字を鈴木に戻してカラーコンタクトを外している。

「これはマズいわね・・・・って真海はどこ行ったのよ！？」

「真海なら、さっきあっちへ行ったけど」

「相変わらず逃げ足早いよね・・・・真海って」

一人だけ逃げた真海を後で一発シバくと心の中で誓った茜の目の前では雪崩はすでにそこまで来ており三人を飲み込んでいった。

「ちょ、ちょっと！あたし達はお兄ちゃんのところに・・・・！！」

「あと少しで政志さんに会えるのにーー！！」

「あーれー」

人混みから抜け出そうと藻掻く茜と蘭、流れに身を任せる無表情で棒読みの天空は半時間ほど質問攻めにあったとさ。めでたしめでたし。

「みんな暫く抜け出せそうにないから、その辺でもぶらぶらしてようかな」

哀れな姉妹と友人を見捨てた真海はその場を後にするのであった。

「ちょとみんな～。暇そうだから生徒会の出し物手伝ってちょー」

「「「「「おい、ちょっと待て！！」」」」」

何のことか分からぬまま政志、一夏、アル、龍鳳、クリスの五人は楯無に連行されている。

「テメェ、クラスの出し物手伝いに来たと思ったらすぐ消えて、帰ってきたと思ったらこれかよ・・・・！」

「俺たちに手伝わせるぐらいやったらヴィンセントも呼べや！」

「そう思って探したんだけど、今あの子ちょっと行方不明なのよね」

「な、なら、せめて何を手伝うか教えてくださいよ！」

足を止めて振り向く楯無はとても良い笑顔を浮かべていたが、それは今にも悪戯をしようとしている子どものものだった。

「ただの『灰被り姫（シンデレラ）』よ」

ふふん、と満足げに言うが政志には嫌な予感しかしなかった。

「またメンドクセェことになってきやがったぜ・・・・」

言うまでも無いが、政志の勘が外れることはあまりない・・・・

学園祭のお店は色取り取り（後書き）

家にいてもすること無いから捗る捗るー！！

開幕『恋姫大戦』（前書き）

三日に一回の更新ペース。

何とか維持したいです・・・・

では、本編をどうぞ！！

開幕『恋姫大戦』

「五人とも、ちゃんと着替えたー？」

「あぁ・・・・」

「一応・・・・」

「取り敢えず・・・・」

「何とか・・・・」

「着替えたけど・・・・」

楯無の問いに答える政志、一夏、アル、龍鳳、クリスの表情は疲れ切っていた。政志達は第四更衣室で王子様的な服に着替えさせられたのだが、今の彼等にはそれに突っ込む気力など皆無だった。

「はい、これ王冠ね」

楯無は笑顔で五人に王冠を渡すが、受け取る側の男達の目は色々と諦めている目だった。

「なによ、嬉しそうじゃないわね。シンデレラの方がよかった？」

「「よかねぇよ！！／ええわけないやろ！！」」

声を揃えてアルと龍鳳が否定する。その後で政志は鏡に映った自分を見て、う～んと唸りながら眉を寄せていた。

「俺、王子様って柄じゃねぇんだけど・・・・」

戦場で敵をバッサバッサと真っ二つに斬る男。紅蓮の破壊神（クリムゾン・デストロイヤー）と呼ばれる自分が王子様など違和感しか感じなかった。

「まぁ、お前の場合。どっちかって言うと王様の方が似合ってるかもな」

「一夏くんの言うとおり、間違っても王子様なんてメルヘンチックなのが政志に似合うハズが無お願いだからチョキで目を殴らないでぇぇぇぇぇ！！！！」

自覚していたがクリスの発言に苛っとした政志は容赦なく目潰しを御見舞いした。真っ赤に腫れた目を手で覆って地面で悶え苦しむクリスだったが、数秒後には目も元通りになり立ち上がっていた。

「ちょっと政志・・・・？ボクが普通の人間だったら失明してたところだよ！？」

「安心しろ、ギリギリ失明しない程度に突いたから。それにお前は普通じゃないから問題無ぇ」

「そういうアウトな発言は自重してよ・・・・」

額に手を当てて溜息を吐くクリスを余所に一行は移動を始めた。彼らがこれから向かうのは第四アリーナを弄って作られた特設セット。学園祭で使うには勿体ないくらい豪華な物だった。客席は勿論満席で、演劇の始まりを待つ声が更衣室にまで届いていた。

「これから五人に参加してもらう観客参加型演劇『灰被り姫（シンデレラ）』だけど、みんなはアナウンス通り動いてくれたらそれでいいから。あっ、それと台詞はアドリブでお願いね」

「無茶苦茶過ぎるだろ・・・・」

本当に劇として成り立つのか非常に不安に思いながら政志達は舞台袖に移動した。

「さぁ、幕開けよ！」

ノリノリの楯無がそう叫ぶと同時にブザーが鳴り響き、照明が落ちた。するするとセット全体にかけられていた幕が完全に上がり、ライトが五人照らし出す。

『むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました』

「なんや・・・出だし普通やんけ」

「シンデレラが魔王とかじゃなくて助かった・・・・」

「逆にそのシンデレラ、見れるなら一度見てみたいけどな・・・・」

アルの無駄な心配は無用だったようで、ホッと息を吐いた五人は舞踏会エリアへと向かう。だが、その刹那。

『否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を駆け抜け、群がる敵兵を薙ぎ払い、灰燼を纏うことさえ厭わない地上最強の兵士達。彼女達に与えられた相応しき称号・・・・それが『灰被り姫（シンデレラ）』！』

「・・・・え？」

「あれ？シンデレラってこんなんだっけ？」

「アホぉ！んなわけないやろ！」

「最強の称号が『灰被り姫（シンデレラ）』って・・・・これまた凄い設定だね」

「子どもに見せたくない童謡ナンバーワン間違い無しだな・・・・」

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる五人の王子の王冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という死地に少女達が舞い踊る！』

・・・・・。

「「「「は、はぁっ！？」」」」

「あの野郎・・・なかなか逝かれたシンデレラ考えてくれんじゃねぇか！」

「もらったぁぁぁぁ！！」

いきなりの叫び声と共に現れたのは、白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスに身を包んだ鈴だった。だがその手にはシンデレラが持ってはいけない中国の手裏剣こと飛刀が握られていた。

「鈴、お前！これは一体何のつもりや！？」

「うっさい！そんなのどうでもいいから王冠よこしなさいよ！！」

何の躊躇いもなく鈴は龍鳳目掛けて飛刀を投擲する。もちろん王冠を被っている頭に・・・・。

「アホか！お前絶対殺す気でおるやろ！！」

「こうでもしないと、あんたから王冠奪い取れないでしょ！！」

「そんな猟奇的なシンデレラ、聞いたことないで！！」

龍鳳はセットの上にあるテーブルを横に倒して盾にして飛刀を防ぎ一安心する。だが次の瞬間、ガラスの靴を履いた鈴の蹴りによりテーブルが粉々に砕け散った。因みにこのガラスの靴は強化ガラスで出来ているらしく、かなりの強度を誇っているらしい。

「待てや！それで腹蹴られたら穴開いてまうぞ！？」

「開いたらその時はその時よ！！」

「正気か貴様ぁぁぁぁっ！！！」

一撃でも食らったら病院送りになりそうな蹴りを龍鳳は巧みに避け続ける。カンフー映画顔負けの戦闘を繰り広げる二人を政志達は他人事のように見ていた。

「あいつも大変だな」

「日頃の行いが悪いからだろ？ざまぁねえよ」

「それをお前が言うか・・・・？」

「まぁ取り敢えず、ここに居てもあれだから何処か・・・・んにゃ？」

ふとクリスは赤い光線が空中を泳いでいることに気が付く。なんだろう？と思っていると顔の真隣が豪快に吹き飛んだ。

「す、スナイパーライフル！？ってことはセシリアちゃん！？」

サイレンサーを装備しているらしく、発砲音とマズルフラッシュが無い。しかも速射性に優れているようで、立て続けに弾丸がクリスの王冠を狙って迫ってくる。

「う、うわぁぁぁぁぁ！！ちょ、みんな逃げないで助けてよぉぉぉっ！！！」

「「「「どうでもいいからこっち来んなぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」

「こ、ここなら暫くは安心だな・・・・」

セットの物陰に隠れた政志達は安息の一時を過ごしていた。

「な、何であいつらあそこまで本気になっとんねん・・・・」

「ちょっとコレは、シャレになんないよ・・・・」

実際に命を狙われた龍鳳とクリスのテンションは完全にブルーと化している。恨まれる理由は無いことも無いが殺されるほどのことをした覚えはない。

「つーか今思ったんだけど、狙われてんのが龍鳳とクリスなら、俺と政志とイッチーは普通に逃げても良かったんじゃねえか？」

「お前なぁ・・・一応聞くけど、あの状況でどこに逃げるっていうんだ？それに鈴とセシリアがこいつらを狙ったっていうだけで、他のシンデレラが俺達を狙わないって保証がどこにあるんだよ」

「えっ！？ということは、まさか箒も・・・・」

「参加してるとしたら、先ずお前を狙ってくるだろうな」

他にもななせ、ラウラ、シャルも参加していると考えた方がいいだろう。ここまで政志は予想出来たが、何を理由で参加していたのかが分からない。一体何を餌に参加させられたのだろうと考え始めたところにセシリアの狙撃が襲いかかってきた。

「にゃろう・・・クリス！お前さっさと死んでこい！！」

「お前の犠牲で俺たちが救われるんや！！」

「じゃあ、そういう龍鳳も鈴ちゃんどうにかしてよ！！」

物陰から追い出され馬鹿三人が口喧嘩を広げる中、五人が追い込まれたのは隠れるところのない無駄に広いステージ。そして辿り着いたのが、

「「「げぇっ、行き止まりかよ！？」」」

「にゃるほど、さっきまでの狙撃は俺たちをここまで誘い込むための罠か・・・。なかなかの腕してるじゃないの」

「あぁ。お前ほどとは言わねぇが、世界に通用するレベルではあるな」

銃関連になると急に冷静になる馬鹿ことアルと政志はセシリアの腕を高評価する。

「みんな、僕の後に！」

突然、アルと政志の前に現れた対弾シールドを装備したシャル。その服装は他の女子と同じくシンデレラ・ドレスでアルが見とれている間に一夏、龍鳳、クリスの三人もシールドの裏に隠れた。

「しゃ、シャルか・・・助かった」

キンッ、カンッ、と弾丸を防ぐ度に鋭利な音が鳴る。

「ここは僕に任せて、みんなは早く逃げて！」

「ありがとよ、シャル！」

「助かったよ～！」

「あ、え、えっと、ちょっと待って！」

「にゅ、何だよ？」

「その、出来たら王冠を置いていってくれたら嬉しいなぁ・・・・。他のみんなも箒や鈴達に王冠を渡せば襲われなく済むよ」

「何だぁ、そんなことでいいのかよ・・・・」

「そんな話しやったら、さっき渡したらよかった・・・・」

襲われるのが王冠のせいならばすぐに外そうと思い、アル、一夏、龍鳳は王冠に手をかける。しかし、あの楯無が考えたことだ。こんな簡単なことで済むはずがない。政志がそう思っている中、三人が王冠を外そうとしており、楯無のアナウンスが流れてきた。

『王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます』

「「「はい？」」」

何のことだか理解するのに時間がかかる。そしてその間に、三人は

完全に王冠を外してしまっていた。

「「「あぎゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」

バリバリバリィッ！！と三人の全身を電流が駆けめぐる。気のせいか、漫画の如く骨が見えている。電流が流れ終わると服の所々が焼けておりぷすぷすと煙を出している。

「なんだ、その程度かよ」

「ボク達なら大丈夫そうだね」

王冠を外したらどうなるのかを実証した三人を見た政志とクリスは自分達なら耐えられると考え王冠を外そうと手をかけた。しかし、その刹那。またもやあの問題児からのアナウンスが入る。

『しかし、その中でも勇敢な破壊の王子と魔王の王子は死神に呪いを掛けられてしまいました。王冠を失った瞬間、破壊の王子はアから始まってメで終わる三文字関連のグッズを、魔王の王子は食堂から糖分の含まれるメニューを奪われてしまいます。あぁ、何てことでしょう！私達には見守ることしか出来ません！あぁ、何てことでしょう！！』

・・・・・。

「野郎共！全力で逃げるぞッ！！！」

「「「オオオォォォォォォ！！！！！」」」

「悪いシャル。そういうことだから」

「ええっ!?そんな、困るよ!」

「これ以上あの電流食らったら馬鹿が加速しちまいそうなんだよ!」

「え、ちょ、アルってばぁ!」

死活問題に関わる事態にまで発展してしまったことで政志とクリスの瞳に炎が灯る。それに釣られて一夏達も逃げ出すが、彼らの前に黒髪と銀髪のシンデレラ×2が現れた。

「一夏、そこに直れ!」

「私に王冠を渡せ、政志」

日本刀を構えた箒と、タクティカルナイフを両手に構えたラウラ。黒と銀のシンデレラはあっと言う間に二人との間合いを縮める。

「ちょっと待て箒!一体何が目的なんだ!?」

「目的もなにも、私は私達のために戦うだけだ!だから・・・死んでくれぇ!!」

「誰だぁぁぁ!?俺の箒に変なことを吹き込んだのは!!」

完全にヤンデレ化している箒を見て一夏はホロリと涙を流す。何故箒がこのように変貌してしまったかを説明するには、五人の王子が被っている王冠について話す必要がある。本人達は知らないが彼らが被っている王冠を手に入れられた女子(シンデレラ)は、その王冠を被っていた男子と同室になれるのだ。故に彼女達は必死になって王冠を手に入

れようとしているのである。

「ラウラ・・・テメェが何吹き込まれたかは知らねぇが、俺と戦(や)り合うんなら殺す気で来いよ」

「ふんッ！心配しなくても最初からそのつもりだ！」

何気にガチバトルを繰り広げようとしている政志とラウラ。アル達は今の内に逃げようと考えたが、その希望はすぐに砕け散った。

『さぁ！今からフリーエントリー組の参加です！みなさん、王子様の王冠を目指して頑張って下さい！！』

地獄への手招きにも思える楯無のアナウンスが終わると同時に地響きが聞こえてきた。額に冷や汗を流す王子達の視界に写るのは数十人以上のシンデレラ達。しかも、その数は現在進行形で増え続けている。

「いい加減私の物になりなさい、鈴木君！」

「織斑君、大人しくしなさい！」

「私と幸せになりましょう、王子様方！」

「そいつを・・・よこせぇぇぇぇぇ！！！」

一人明かにヤバいのが混じっているのを突っ込もうが悩むが状況からしてそれどころではない。どうしたものかと悩んでいると、押し寄せてくるシンデレラの先頭の床に一筋の閃光が走った。

「面白そうだから参加してみたけど・・・・ロクな人がないわね此処も」

閃光は床にクレーターを作り、衝撃で数人のシンデレラが吹き飛んだ。聞き慣れた声もあってか、まさかと思いながら後を振り向いた政志の目に入ったのは、シンデレラ・ドレスを着込んだ茜だった。その手にはコインが握られており、クレーターの中心にあるものと同じだった。

「おい、妹よ・・・・。イメージキャラが御〇美〇だからって、これはやり過ぎだろ」

「何よ、その言い方。助けてもらったんだから感謝しなさいよ。それに、あたしなんかアレに比べたらまだマシよ・・・・」

政志は嫌な予感しかしない中、茜の指さす方向を見る。そこには対戦車用のガトリングガンを二挺両手で持ち佇むシンデレラ・ドレスの天空。対戦車用のガトリングガンを片手で持っちゃ駄目だろ、と実の兄である政志のみならず、一夏達も心の中で突っ込んだ。

「全く、みんな楯無先輩の口車に乗せられちゃって・・・・しっかりしようよ？」

「「「な、ななせさん！！」」」

「なんで敬語かは突っ込まないから、早く逃げなよ。ここはあたし達が押さえとくから」

「なら、お言葉に甘えさせてもらうとするか・・・・野郎共、ここからはバラバラで逃げるぞ」

政志の言葉に従い、王子達は脱兎の如く逃げていった。舞台袖から脱出した政志達を見送った後、やれやれと溜息を吐くななせの隣で、蘭が意外そうな顔をする。

「琴吹中将は良かったのですか？政志さんの王冠を取らなくて」

「楯無先輩のことだから、最終的に自分に上手く転がるようにしていると思うの。だから、無理して取ろうとするだけ無駄なんだよ。・・・でも、みんなを倒した後に、あたしも追いかけちゃうかな」

サラッと数十人のシンデレラ達に勝利宣言をするななせ（因みにシンデレラ・ドレス）の手には何処から取りだしたのか二本の小太刀が握られている。

「じゃあ、あたしが箒達代表候補生の相手をするから、茜と天空と蘭ちゃんはその他をよろしくね。・・・あとそれから、出来たら気絶させるだけに」

「「「了解！／了解」」」

気合いの入った返事をする茜達に微笑んだななせは小太刀を逆手に持ち替えて箒達に向かってゆっくりと歩き出す。

「みんなには悪いけど、これ以上楯無先輩の思い通りにさせるわけにはいかないから、足止めさせてもらうよ」

「ま、待ってくれななせ！私はただ一夏の王冠が――」

「止めておけ、箒。こいつには何を言っても無駄だ」

ななせが本気だと察したラウラは戦闘態勢に入り、それを見た箒達も武器を構える。

「ななせ。5対1とは不本意だが、手加減はしないぞ！」

「今日ばかりは、ななせさんに負けるわけにはいきませんわ」

「悪いけど、あたし達にも譲れないものがあんのよ！」

「何としても、君を倒す！」

「そういうわけだ、ななせ。今の私達を・・・・止められるものなら、止めてみろ！！」

「別にいいよ。だけど、あたしこう見えて・・・・殲滅戦の方が得意だから！」

それぞれの想いを胸に抱き、六人のシンデレラはぶつかり合う。本人達に言ったら殺されそうだが、武器を手にとって戦う彼女達はシンデレラとほど遠い・・・・。

開幕『恋姫大戦』（後書き）

次回から、ようやく戦闘に突入します

ななせの助けによって何とか逃げ出すことが出来た政志達。しかし、一人だけ何者かに誘導される男がいた。

「こちらへ」

「へっ？」

政志達と分かれた後、いきなり現れた何者かが一夏の手を引き更衣室へと誘導した。そこは最初に着替えに使った更衣室で制服なども揃っている。

「えっと、あなたは確か・・・・」

連れてこられている際には暗くて誰だか判らなかったが、改めてその人物を見ると見覚えのある人だった。休憩時間に名刺を渡して来たスーツの女性、巻紙礼子。ＩＳ装備開発企業『みつるぎ』渉外担当らしく、やたらと一夏に自社の装備を薦めて来た人だ。

「織斑さん。もう一度我が社の装備を使っていただけないか、考え直していただけませんか？」

「・・・そんなことを言うために、わざわざこんな」

関係者以外立ち入り禁止の場所に連れてきたんですか。一夏が目をスゥっと細めて巻紙を見るが、彼女のニコニコ顔が崩れることはない。それは十秒近く経って変わることはなく、一夏は短い溜息を吐いた。

「・・・いい加減、その下手な作り笑い止めたらどうですか？」

そう一夏が告げた瞬間、巻紙の身体は動きを止めた。

「俺の訳ありの知り合いが似たような表情してたことがあるんだ。しかも、あんたが纏ってる空気には、アイツと同じ狂気が混ざってる」

一夏の脳裏に浮かぶのは龍鳳の中に潜むブルーノート。彼ほど恐怖を覚えさせられる邪笑を浮かべる人間を一夏は知らない。そんなブルーノートに似た空気の持ち主がただの企業関係の人間のはずがない。

「あんた・・・・一体何者だ？」

すると、笑顔を崩すことなくクックックックックと不気味に笑い出した。

「あーあ、まさかこんなガキにバレるとは・・・・胸くそ悪いったらありゃしないぜ」

笑顔から邪悪な表情に変わると同時に巻紙は一夏に蹴りを放ってきた。政志や楯無達との特訓があってか一夏はバックステップでそれをかわした。

「あんたは危険過ぎる・・・・だから、俺がここで討つ！」

体勢を整え巻紙と向かい合った一夏は白式を展開して雪片を構える。

「ガキが・・・・ッ！やれるもんならやってみやがれッ！！」

スーツを引き裂いて、女の背後から鋭利な爪が飛び出す。クモの脚に似たそれは黄色と黒という禍々しい配色で、刃物のような先端を盛っている。

「いただくぜ、お前のＩＳ！！」

背中から伸びた八つの装甲脚の先端が開いて銃口を見せる。それを見た一夏は脚のスラスターを思い切り床にたたきつけ最大噴射を行う。

「結局、あんたは一体なんなんだ！？」

天井へと緊急回避を行った一夏は直ぐさま攻撃へと移る。天井を蹴った勢いで雪片を振り下ろす。しかし、女は後ろ飛びをすることでそれを避けた。

「秘密結社『亡国機業』が一人、オータム様って言えばわかるかぁ！？」

脚の銃口から放たれる実弾射撃が一夏を襲う。左右から迫ってくる八門の集中砲火を一夏は真上に跳んでかわし天井に足をついた。逆さまの状態からスラスターを吹かして前転気味でオータムの懐へ飛び込む雪片を脇下から水平に薙ぎ払う。

「もらったぁ！！」

「甘ぇんだよ！！」

だが雪片の刃は八本の装甲脚によって受け止められてしまう。押しても引いても動かない。どうしようもならない状況の中、オータムは手にマシンガンを構築して一夏に向かって弾丸を放つ。

「ぐっ、これ以上は・・・・！」

何発かの弾丸がシールドバリヤーを貫通して一夏の身体に断続的なダメージを与える。痛みに耐えて歯を噛み締めながら、一夏は左腕の雪羅をカノンモードにしてオータムの腹部に押しつける。

「食らえぇ！！」

零距離で放たれた荷電粒子砲はオータムを吹き飛ばす。そして吹き飛んだことによって雪片の拘束が解け、改めて雪片の切っ先をオータムに向ける。

「ハハハ、生意気なガキだ！この『アラクネ』相手にここまでやるとわなぁ！！」

再びマシンガンの弾丸が迫るが、一夏はオータムへと向かっていく。細かいマニュアル操縦を駆使して回避と接近を同時にやってのけれるのは特訓のおかげだろう。確実に力を付けている自分の助けをしてくれた政志達に心の中から感謝した。

「うおおおお！！！」

しかし近づいても雪片の刃がオータムを捉えることはない。彼女が駆る『アラクネ』は複雑でしなやかな機動で動き回る。それはまさしく蜘蛛そのもの。雨あられのように降り注ぐ銃弾を円状制御飛翔（サークル・ロンド）でかわしながら。一夏がチャンスを待っているとオータムが口を開

いた。

「そうそう、ついでに教えてやんよ。第二回モンド・グロッソでお前を拉致したのはうちらの組織だ！感動のご対面だなぁ、ハハハハ！！」

「ッ！！」

その言葉で一夏の頭は一瞬で沸点を超えた。完全に冷静さを失った一夏は何の策も無く全速力で直進する。

「だったら、あの時の借りを返してやらぁ！！」

「クク、てめぇやっぱガキだな。こんな真正面から突っ込んで来やがって・・・・よぉ！！」

指先であやとりのようなものをいじっていたかと思うと、それを一夏に投げつけた。そのエネルギー・ワイヤーで構成された塊は、一夏の目の前で弾けて巨大な網へと変化した。それに捕らえられた一夏は雪羅で切り裂こうと藻掻くが強度が高いのか手足が動かない。

「ハハハ！楽勝だぜ、まったくよぉ！蜘蛛の糸を甘く見るからそうなるんだぜ？」

にやにやと気品の欠片の無い笑みを浮かべたオータムがゆっくりと近づいてくる。その手には一夏が見たことのない四本脚の装置が握られていた。

「さぁて、お別れといこうかぁ！！」

装置を一夏へと取り付けようとした瞬間。二人しかいない第三者の声が響いた。

「兄貴のダチの浮気現場を目撃したかと思えば違っていたのか・・・・まぁ、別にいいけど」

声のする方を見ると一人の少女が立っていた。悠々と佇む少女が気にくわないのかオータムは舌打ちを鳴らした。

「何だてめぇ？何処かで見たような気がするが・・・・まあいい、見られたからには殺すだけだぁ！」

「お、おい！止め――――」

一夏の制止の声を聞くことなく、オータムは身を翻して少女に襲いかかる。

「・・・・どうやら『敵』・・・・らしいね」

そう呟いた少女は自らを貫こうとしている一本の装甲脚を片手で受け止めた。

「「なっ！？」」

驚きの声を上げるのはオータムだけでは無く一夏もだ。しかし、その少女の顔を見た途端にあぁ、と納得してしまった。

「たかがアメリカの第二世代型ごときで、私を殺せると思ったの？」

ふんっと少女は脚を上げて、受け止めていた装甲脚を蹴り砕いた。

もはや人間の成せる技ではなく、恐怖に似た何かを感じとったオータムは少女から一気に距離を取る。

「どういう状況かは知らないけど、家の兄貴のダチに手を出したんだ・・・・死なない程度に殺してやるよ」

口角を微かに上げた少女の身体を黒い粒子が包み込んだかと思えば、次の瞬間には少女は黒いＩＳを展開していた。

「黒い、ユニコーン・・・・？」

その黒いＩＳは政志が所持しているユニコーンとただ色が違うだけで、武装も全て同じだった。首の骨をポキポキと鳴らす少女を見るオータムの表情は恐怖一色に染まっていた。

「漆黒の装甲に、血のよう赤い髪・・・・！？まさか、お前が『鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）』か！？」

「ご名答。だけど、私には」

『鈴木真海』って名前があるんだ。

【ＩＳ－Ｄ　発動】

ユニコーン二号機『バンシィ』の装甲がスライド展開していき、展開された部分が黄金に発光して体格も一回り大きくなる。

「奏でるぜ。蜘蛛女に捧げる、悪魔のロック」

ガチャンッとビームマグナムを目の前の敵に向ける真海のその姿は、

誰が見ても『破壊神の再来』と口ずさんでしまうものだった。

「政志、何処に行っちゃったんだろ・・・・」

今楯無がいるのはＩＳ学園の屋上。彼女は政志の王冠にだけ発信機を取り付けていたのだが、数分前に反応が消えしまった。すると、屋上のドアが開いて一人の少女が顔を出す。

「政志、居る？・・・・って楯無先輩？」

「ヤッホーななせちゃん。残念だけど、政志はここに居ないよ～」

事の元凶である楯無の言ってることが本当か疑ったななせは屋上を一通り見渡してるがやはり政志の姿は見あたらない。ホラ、私の言うとおりでしょ？と言わんばかりの表情になななせはムッとなる。

「ははは。本当にななせちゃんは弄り甲斐があるなぁ」

「もぉ・・・・今はそんなこと言ってる場合じゃないですよ？」

「それもそうだね」

二人の頭上に広がる空は、本来の美しい青とはほど遠い鉛色で塗りつぶされている。空を見上げたななせの眉間に皺ができ、険しい表情になる。

「あれは、『ジンクス？』・・・・？」

ディアボロスのハイパーセンサーで雲の向こうに百機近くの全身装甲のＩＳが展開しているのを確認する。そのＩＳは連邦のジンクスに酷似しており、装甲が黒ずんでいる。そして、背部のＧＮドライヴからは赤みが掛かったオレンジ色の粒子が。

「・・・・・」

無言のままななせはディアボロスを展開し、それを見た楯無はふぅと溜息を吐いた。

「ななせちゃん？やる気満々なのは良いけど、冷静さを欠くのは地球連邦中将としてどうかと思うよ？」

ポンと肩に手を置いた楯無の全身を光が覆い、それが消えるころには彼女はＩＳを展開し終えていた。全体的に装甲の面積が狭く、小さい。だが、水のドレスのような液状のフィールドが展開されていて、楯無の身体を守っている。これが楯無の専用機『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』だ。

「え?あ、す、すみません・・・・少し、感情的になりすぎました」

「いいよ、謝らなくて。それより、サクッと済ませちゃおうよ」

「・・・・言っておきますけど、楯無先輩の機体じゃ――――」

「わかってるよ。私の機体じゃ太陽路搭載型の性能に勝ててないのは・・・・。でも、よく言うでしょ?『性能の差が勝敗を分かつ絶対条件じゃない』って」

「それもそうですね。心配するだけ無駄でした」

顔を見合い笑い合った二人は視線を空へと戻して一気に飛翔する。雲へと辿り着くまでになせはGNツインバスターライフルをセットして、雲を突き抜けると同時にジンクス?の大群に向けてトリガーを引いた。

「琴吹ななせとディアボロス。目標を殲滅します・・・・」

銃口から放たれた真紅の極光は無数のジンクス?を飲み込んでいくのであった。

「どうやら堕天使と学園最強が戦闘を始めたようですね」

「そ、そうだね・・・・」

ＩＳ学園校舎裏に広がる小さな林の中に一本の木。その木の枝に立っているアリスは空を仰いでおり、その隣に座っている輝火は涙目で頭を撫でていた。理由は簡単。勝手な行動がバレたためアリスからお仕置きとして拳骨をお見舞いされたからである。そして二人の下にはマドカが木にもたれ掛かって立っており、恋は体育座りでボーッとしている。

「で、私達はどうする？ドクターからは、破壊神、狙撃手、閃光、魔王の四人には手を出すなとのことだけど」

「・・・・なら、それ以外を倒せばいい」

「恋の言うとおりだよ。折角ウチらの機体もリニューアルしたんだから、相手が誰だろうと負けないよ！・・・・・・政志は無理だけど」

「そうですね。ではそろそろ・・・・ん？」

突如アリスに通信が入り会話する。数秒後、了解しました・・・・

とだけ告げたアリスの小さな口から溜息が零れた。

「スコールからの指令です。どうやらオータムと織斑一夏の戦闘中に『鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）』が現れたようです」

「あぁ、あの『鮮血の悪魔（ブラッディ・デーモン）』か。噂によると確か、破壊神の妹だった気が・・・・」

「じゃあオータムじゃ無理だね～」

「お世辞にも、あの人が勝てるとは言い難いので、これから私とマドカが救援に向かいます。輝火と恋は目立たない程度なら、自由に動いて構いません」

「「「分かった／ＯＫ～♪／・・・・（コクリ）」」」

リーダーの指示に従いスレイヤーズが動き出した。アリスとマドカは風切り音と共に姿を消して、輝火と恋の二人が取り残された。すると輝火が目の前の茂みを向いて口を開いた。

「上手く気配は消してるみたいだけど、ウチにはバレバレなんだからね」

「？」

輝火の言ってることが理解出来ず首を傾げる恋だったが、彼女達の目の前の茂みが動いた。中から出て来たのは一枚布のスカートタイプのチャイナドレスを着込んだ白髪頭の少女。青い生地に寅をあしらっていて、かなり大胆なスリットが入っている。

「ほぅ、亡国機業にもなかなかやるやつがいるじゃねえか」

「えっ、男ぉぉ！？」

「・・・・輝火。あれ、魔獣」

「嘘ッ！？魔獣って女装趣味の変態だったの！？」

「てめぇ・・・・どうやら死にたいようだな」

全身をぷるぷると震わるヴィンセントはそのままレグナントを展開した。これを見た輝火はおちゃらけモードから仕事モードへと切り替える。

「つうかよぉ。てめぇ、俺がいることに気付いてたんなら、何で四人いる時に襲ってこなかったんだ？」

「あんたをここまで連れてきたのはウチらだからね。なら、自分の不始末は自分で片づけるのが常識でしょ。それに・・・・」

ニヤリと口角を上げる輝火と恋の身体を光が包み込み、一瞬のうちでＩＳを展開する。だが、二人が展開したのは臨海学校の時の物とは違っていた。

「あんたの相手なんて、ウチらだけで十分だからね」

輝火が纏うのはプロヴィデンスの後継機『レジェンド』。

「・・・・敵、倒す」

恋が纏うのはジャスティスの後継機『インフィニットジャスティス』。

「さぁて、魔獣狩りと行きますか」

戦闘態勢に入った二人の機体をまじまじと見たヴィンセントは数秒後、豪快に笑い出した。

「ハハハハハハッ！なるほど！機体が強くなったんだから、俺に勝てる気が出てもしょうがねぇよな！！」

ハハハハハハッと未だに笑い続けるヴィンセントに不愉快な表情になる輝火。だが、暫くするとヴィンセントの笑い声がピタリと止んだ。

「調子乗ってんじゃねえぞ、カス共が・・・・」

全てが凍りつきそうな冷たい声だが、隠しきれないほどの怒りがこもっていた。ギラついた瞳で睨まれた輝火は一瞬だけ身体をビクンと跳ね上げてしまう。

「どいつもこいつも勘違いしてるみてぇだけど、何時俺がお前等の前で本気出した・・・・？」

十基の大型ファングを射出させ、胸部の装甲をスライドさせ大型GNキャノンの砲身の発射態勢に入る。犬歯を剥き出して笑う今のヴィンセントは獣そのもの。それを見た輝火と恋の目は自然と細まっていった。

「亡霊は亡霊らしく成仏してりゃいいんだよ！ファングゥ！！」

「あんたのその2対1でも勝てるって態度・・・・気にくわないねぇ！ドラグーン！！」

ファングを見た輝火はドラグーンを射出する。恋も二本のビームサーベルの柄を連結させてヴィンセント向かって瞬時加速（イグニッション・ブースト）した。

「そうだ掛かってこい！そして俺は証明する・・・・俺があいつよりも強いことを！！」

「楯無の野郎・・・・発信機まで仕込むとはどういうつもりだよ」

「さあな。後で殴るついでに聞いてみろ」

場所は第三アリーナ。学園祭ということもあって人気は無く、政志はロシナンテに頼んで王冠を解体してもらった。やっと自由を取り

戻した政志は観客席から立ち上がって、う～んと身体を伸ばした。

「さてと、取り敢えず・・・・」

政志は向い側の観客席を静に睨み付ける。そこには仮面を付けた怪しげな男がおり、向こうも政志の方を見ていた。

「ロシナンテ・・・お前はみんなの所に行け。どうやらあいつは俺に用があるらしい」

「・・・分かった」

短い返事をしたロシナンテは戦闘体型へとなってアリーナの外へ飛んでいった。

「「・・・・」」

数秒睨み合った二人は全く同じタイミングでそれぞれのＩＳを展開させ、メインウェポンを手に突っ込んでいった。フィールド内に響くのはバスターソードとビームサーベルのぶつかり合いにより生まれる火花の音のみ。

「よぉ、久しぶりだなぁ！仮面野郎！」

「こちらこそ、久しぶりと言っておこうか！」

互いの剣に力を込めて振り切ると、それぞれの力によって吹き飛ばされ二人は距離を取る。

「（こいつがここにいるってことは、あの四人も動き出してるって

考えた方がいいか。となると目的は・・・・）悪ぃが、テメェの相手してる場合じゃねぇんだよ。だから、とっとと終わらせるぞ！」

【Ａｒｃｈｅ（アルケー）　Ｕｐｇｒａｄｅ（アップグレード）】

マシンボイスが響くと同時にアルケーがヤークトになる。もう一本のバスターソードを握り、二本のバスターソードを政志は構えた。

「邪険にあしらわれるとは。ならば君の視線を釘付けにしよう」

口元にうっすらと笑みを浮かべるブレイドの纏う空気が変わると同時に、政志に嫌な予感が過ぎった。何か妙な動きをされるのを止めようとしたが、時既に遅し。

「とくと見るがいい・・・・盟友が作りし、我がマスラオの奥儀を！」

突然マスラオから放出されるＧＮ粒子の量が急増する。変化はそれだけに止まらず、装甲も赤く発光し始めた。それは紛れもない、あのシステムだった。

「な、あれは・・・・トランザム！？」

驚愕の表情を浮かべる政志に向かって、ブレイドは瞬時加速（イグニッション・ブースト）して急接近して、ＧＮロングビームサーベルとＧＮショートビームサーベルを振り下ろすのであった。

「隙有りィィィィィィ！！！」

修羅の道（前書き）

暇だったので主要キャラのＣＶを考えてみました

政志：宮野真守

アル：保志総一朗

龍鳳：中井和哉

クリス：釘宮理恵

ヴィンセント：朴？美

ななせ：水樹奈々

ブレイド：中村悠一

ドクター：平野綾

微妙とは分かってますが、こんな感じで許してください・・・・

では、本編をどうぞ！！

「一撃で倒したいから、出来たら避けるなよ？」

かなり無茶苦茶なことを言いながら真海はビームマグナムのトリガーを引いた。放たれたビームはビームライフルの四本分もあり、オータムはかろうじで回避したが余波で装甲脚の一本が溶解して爆発した。

「くそっ、何て馬鹿げた威力なんだよ！？」

爆煙の中でオータムはマシンガンと装甲脚の銃口を真海がいるであろう場所に向ける。しかし、彼女の背後の煙の中からは金色の輝きが漏れていた。

「遅い・・・・というより弱すぎ」

両腕に装備されたのと、両手に持ったのを合わせて四本のビームサーベルがオータムに迫る。そして、四本の光の軌跡が走ったと同時にアラクネの残りの六本の装甲脚がバラバラに切り刻まれた。一度に六本の脚を失いバランスを崩して前のめりに倒れるオータムの腹部に真海は回し蹴りをたたき込んだ。

「す、凄ぇ・・・・・」

強いとは聞いていたがまさかここまでとは・・・・・。まるで政志を見ているかのような戦闘に一夏は目を奪われる。一方、蹴りを御見舞いされたオータムは装甲の重さを感じさせないほどの猛スピードで吹っ飛び、壁の向こうへと吹っ飛んでいった。

「あ、そうだ忘れてた」

ふと視界に入った一夏の存在に気付きビームサーベルで一夏に絡み付いていたエネルギー・ワイヤーを切った。

「あんた、大丈夫？」

「あぁ、大丈夫・・・・助かったよ」

「そう、なら良かった」

そう言って真海は壁に開いた穴へと視線を向けて歩き出す。その後に一夏も続き、オータムへと近寄った。

「さぁて、色々と喋ってもらおうか。亡国機業さん？」

ボロボロのになったＩＳのオータムに無傷の状態の真海がビームマグナムを向ける絵面は見方を変えるとイジメにも見えなくはない。その証拠にオータムの身体が恐怖でカタカタ震えていた。

「が、ガキが・・・・ッ！調子に乗ってんじゃねぇぞ！！」

空気圧縮の音が聞こえると同時にアラクネの装甲がオータムから切り離される。

「なっ！？」

「ちっ、また古典的なことを・・・・」

二人の目の前でＩＳ本体は光を放ち始め、数秒後に大爆発を起こした。真海は爆発の前に自分とオータムの間の地面向かってビームマグナムを放ち、爆発を相殺させた。煙が晴れるころにはオータムの姿は無く、真海は追跡しようとするが展開していた装甲が閉じていき、ＩＳ－Ｄの限界を告げる。

「通常モードでの追跡は止めておいた方がいいか・・・・私は茜達と合流するから、後は任せたよ」

ＩＳを解除した真海はそう一夏に告げて何処かに去って行った。残された一夏はＩＳを解除して真海の戦闘を思い出し、更衣室の壁を殴った。

「俺は・・・・まだ、守られてばかりなのか！！」

次元の違う力を持つ親友達とその妹。いつになっても彼らの領域にたどり着けない自分を不甲斐なく思い、拳の痛みなど忘れてもう一度壁を殴るのであった。壁を伝い、拳から流れる血は彼の心の涙かのようだった・・・・。

「な、あれは・・・・トランザム!?」

政志の表情が驚愕で染まる中、ブレイドが瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近する。直線的であるはずの軌道もトランザムによって捉えることが容易では無くなっている。ハッと正気に戻った政志の目の前では、すでにブレイドが二本のビームサーベルを振り下ろしており、反応が遅れた政志はそれをただバスターソードで受け止めることしか出来なかった。

「ぐぅ・・・・ッ！」

攻撃を受け止めてもブレイドはすぐさま高速で距離を取り、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰める。左、右、上、様々な方向からの止むことのない斬撃を政志は苦虫を噛んだ表情で防ぐ。しかし、いくらヤークトアルケーと言えど、今のマスラオはトランザムを起動させている。持ち前のパワーを生かすことが出来ず、ただ攻撃に耐える中、真正面に距離を詰めてきたブレイドが今までで一番大きく二本のビームサーベルを振りかぶった。

「切り捨てぇ、ごめえええぇぇぇぇぇん！」

叫び声と共に振り下ろされた二本のビームサーベルを政志は二本バスターソードで受け止めるが、序々に押されていく。アルケーを駆ってここまで追い込まれた戦いは初めてで、舌打ちを鳴らした政志はブレイドと同様にあのシステムを起動させる。

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

アルケーの装甲が赤く輝き、ＧＮドライヴから膨大な黒いＧＮ粒子が放出される。残像を残して後に高速で後退する政志を見て、ブレイドの口角が歓喜で歪む。

「そうだ・・・・！それが見たかったぁ！！」

互いに瞬時加速（イグニッション・ブースト）で接近してメインウェポンを振り下ろす。そこから生まれる火花は尋常では無く、その衝撃による波動でアリーナのフィールドや観客席にヒビが入る。切り結ぶ度に相手の力によって吹きとばされ、大きく距離を取った二人は残像すら残らぬほどの瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行った。

「うおおおおおおおおお！！！」

「ぬおおおおおおおおおお！！！」

５度目の切り結び合いで、近づいた二人は先ほどよりも力を込めてバスターソードとビームサーベルを振り下ろした。そして二人は、持てる力を惜しむことなくぶつけ合う。

「私は純粋に戦いを望む！」

「戦うだけの人生！」

「破壊神との戦いを！」

「俺もそうだ！」

「そして破壊神を超える！それが私の・・・・・！」

「だが今は・・・・！」

「「生きる証だッ！！／そうでない自分がいるッ！！」」

二人が歩んできたのは戦まみれの道。二人は互いがどんな道を歩んできたかなど知らないが、戦う理由はある。ブレイドは政志を倒すため。政志は仲間を守るため。結局、戦うことでしか果たせない目標を今二人は果たしていた。

「「「政志！」」」

「「！？」」

政志にとって聞き覚えのある三人声が聞こえると同時に政志とブレイドは鍔競り合いを止め離れた。すると、二人の間に桃色の粒子ビームが飛来してビームの出所に視線を向けた。そこには政志の元へ駆けつけるため、トランザムを発動させたアルと龍鳳とクリスがいた。政志がブレイドから離れたのを見て、三人はブレイドに向かってビームを放ち始めた。

「ええい、水入りか！粒子残量も少ない・・・・」

ブレイドの言うとおり、マスラオはトランザムの限界時間が来たのか、装甲から輝きが消え失せていた。横殴りに降るビームの雨を回避しながら、ブレイドは政志と再び向き合った。

「敢えて言うぞ、破壊神・・・・！覚えておくがいい！！」

最後にビームサーベルの切っ先を政志に向けたブレイドは雲の中へと消えていった。トランザムを終了し、ただの赤い装甲となったアルケーを纏う政志はブレイドが去っていった方向を数秒見つめた後、アル達の方に身体を向けた。

「ったく、何ちょっと手間取ってんだよお前は？」

「頼むから心配かけさせんなや」

「でも、政志がトランザムを使っても勝てない相手となると、相当な手練れだね・・・・」

「ウッセーよ。次会ったら決着つけてやんよ」

そうは言うもののブレイドの強さはハンパではなく、一瞬とは言え政志が圧倒されたのも事実。あのまま戦い続けていたら、自分が勝っていたとはとてもじゃないが断言出来ない。そんな強敵が去った方向にもう一度視線を向けた途端、政志は溜息を吐いた。

「今日はホントろくなことがねぇな・・・・」

視線の先では百機近いジンクス？が四人の方に向かって来ていた。やれやれとＧＮランチャーをセットする政志を見てアルが声を掛ける。

「おいおい、政志。お前さっきあれだけ戦ったんだから、ちっとは休んだ方がいいんじゃねえか？」

「馬鹿言うな。三人でやるより、四人でやった方が効率的だろうが・・・・それに」

後をチラ見して視界に入れるのはＩＳ学園の校舎。一般公開されていないとは言え、招待客が多くいるのに変わりはない。

「一機たりとも、ここから先に行かせるわけにはいかねぇだろ？」

「まぁ、それもそうやな。こういう血生臭いことは俺達だけで済ませてまおうや」

「じゃあ、行くとしますか」

「余計な心配だとは思うけど調子が悪くなったらすぐに下がれよ、政志」

「へいへい」

政志の気の抜けた返事を合図に四人は百機のジンクス？へと飛翔するのであった。

「ホント、どうして良いところで邪魔するのかなぁ、あの三人は・・・。でも、あたしのマスラオで勝てない剣も剣だけど、『神秘化（アルカナ）』した状態のアルケーで勝てないマサシもマサシよ・・・まぁ、これでお楽しみが終わったわけでもないし、貴重な戦闘データが取れたから良しとしようか」

投影ディスプレイで二人の戦闘を見ていたドクターと呼ばれる少女は中庭のベンチに腰を下ろしている。

「なんだかんだで、スレイヤーズも良い感じに動いてるみたいだし・・・そろそろあたしも動こうかな？」

クスッと可愛らしく笑った少女の黄褐色の髪が風に揺れる。その風の発生源はベンチの後に現れたリヴァイヴ、ヒリング、ブリングにあり、三人は各々のＩＳを展開している。

「三人には別に口で伝える必要も無いし、特に問題はないわね」

そう言って立ち上がった少女が見開いた目は金色に輝いており、それは彼女の後にいる三人も同じ。

「さぁ、『ナイトメア・レヴォリューション』の始まりよ」

口元に邪笑を浮かべると同時に少女も自らのＩＳを展開する。それは前に帝が千冬に見せた写真に写っていた、一対の翼を持ったアルケーとディアボロスに似た白いガンダム『シリウス』。それが飛翔するとリヴァイヴ達も後に続き、目的の人物達がいる方へと向かう。

それは政志達がジンクス?を相手にしている方角だった。

Ｄｅｓｔｉｎｙ（前書き）

徹夜の勢いで書いたらこんな風になっちゃいました

では、本編をどうぞ！

「はぁ、はぁ・・・あのガキ、次また会ったらブッ殺してやる！」

真海から逃れたオータムはＩＳ学園から離れた公園へと辿り着いていた。一瞬で真海に敗れたことを忌々しく思い、ギリギリと音が鳴るくらいに奥歯を噛み締める。

「（まぁ、あいつらは絶対に殺すとして、どこかに水は・・・・）」

喉が渇き、公園なので何処かに水飲み場がないか左右に視線を動かして探していると目の前にあった。苛々もあってか目に付いた途端に早足で向かって蛇口を捻った。

「（私にもちゃんとしたＩＳがあれば、あんなガキなんかに・・・・）」

ふとそんなことを思っていると、それまで喉を潤していた水が止まっていることに気付く。

「（なんだ？壊れてんのか・・・・？）」

そう思って蛇口を見ると、有り得ないことが起きていた。縦に伸びる水飛沫が空中で遮られている。

「なっ！？」

バシャバシャと透明の板に弾かれているように暴れる水は、オータムの服を際限りなく塗らしているが、そんなことなど気に掛けてい

る場合ではなかった。

「（こいつは・・・・ＡＩＣか！）」

すぐさま飛び退くようにその場を離れるが、着地しようとした脚をＡＩＣによって拘束されてしまう。そのまま着地しようとした慣性が働き、オータムは背中から倒れた。

「くそッ！ドイツのＩＳだな！？」

「その通りだ、亡国機業」

公園にラウラの冷たい声が響く。その声は『ドイツの冷水』の名に相応しい程に氷河の如く冷たいものだった。

「動くな。すでに狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている」

「くッ・・・・！」

「洗いざらい吐いてもらうぞ。こっちには聞きたいことが山ほどあるんだ」

軍人であるラウラは以前から秘密結社の情報をわずかに持っていた。臨海学校、地球連邦本部、そして今回と度重なる亡国機業の襲撃から組織が相当に巨大なものだと理解していた。

「お前のＩＳはアメリカの第二世代だな。どこで手に入れた。言え」

「言うわけねーだろうが！」

「よかろう。私は尋問の心が多少ある。長い付き合いになりそうだな」

そう言ってラウラが接近しようとした瞬間、プライベート・チャンネルからセシリアの声が響いた。

【離れて！一機来ますわ！】

警告と共に何かを感じたラウラは後へ跳ぶ。すると彼女がいた場所に緑色のビームが着弾しクレーターを作った。

「新手か・・・・！」

ラウラは左目の眼帯をむしり取り『ヴォーダン・オージェ』を発動させると同時にシュヴァルツェア・レーゲンをダブルオーライザーへと移行させた。だが、彼女が睨むのはビームが飛んできた上空ではなく煙の奥にいるはずのオータム。逃がすまいとＧＮソード？の銃口を向けてビームを放った。桃色の粒子ビームは煙を掻き分けて直進していきオータムがいるであろう場所へと向かう。しかし、それは何かに防がれて拡散してしまう。

「何ッ！？」

煙が晴れ、驚くラウラの目の前に気絶したオータムを右腕で抱える影が見え始める。それはＩＳを身に纏っており、左腕からはビームを防いだであろうビームシールドが展開されていた。

「軽い気持ちでこの人（オータム）を回収しにきたつもりが、まさかあなたに会うとは・・・・」

完全に姿を現したのは赤、青、白のトリコカラーからなる装甲を持った、背部の赤い推進翼（ウィング・スラスター）が特徴的なＩＳ。そしてそのＩＳを駆るのはバイザーで口元以外を隠している黒髪の少女。

「貴様は・・・Ａ！」

臨海学校での戦いを思い出したラウラは二本のＧＮソード?を連結させＧＮツインランスにする。そのままアリスに飛びかかろうとするラウラだったが、目の前にブルー・ティアーズのビットに酷似したものが現れビームを放った。

【ラウラさん！一旦下がってください！】

ラウラがＧＮツインランスでビームを弾いたのを確認したセシリアは、先ほどから上空から攻撃している狙撃者を初発の弾道位置から割り出した。

【な、何なんですの・・・あの機体は!?】

高速接近するそのＩＳの背部には呼び戻したのも含め八枚の青い機動兵装ウイングを搭載している。両手にビームライフルを持ったその者は真っ直ぐセシリアへと飛翔していた。

「何をしている!?セシリア、撃て！」

「くっ・・・・！」

すぐさまレーザーライフルを構えたセシリアは自分に向かってくる敵から只ならぬものを感じ、ミサイル・ビットからミサイルを発射した後、四つのビットを射出した。

「ふんっ。その程度でこの私と『ストライクフリーダム』を墜とそうなど・・・・」

急停止したその襲撃者ことマドカはバイザーで口元しか見えないが明かにセシリアを嘲笑っていた。両腕のビームライフル、腹部の荷電粒子砲、腰部にある二挺のレールガン、そして翼から八基のスーパードラグーンが展開させる。眼前に現れたマルチロック用の小型ディスプレイのロックオンカーソルがミサイルとブルー・ティアーズの全ての武装を捉える。有り得ない熱量と多数のロックオンアラートが響き、セシリアは慌てて逃げようとする。しかし、その一歩手前でストライクフリーダムの十三の砲門が火を噴いた。

「笑わせる」

十三の内、八つの閃光はミサイルと全てのビットを撃ち落とし、残りがセシリアを襲う。

「せ、セシリア！！」

「おっと。あなたの相手は私ですよ」

ブルー・ティアーズの装甲が飛散するのを見て、ラウラはセシリアの元へ駆けつけようとするが、アリスがそれをさせない。高機動でラウラの前に回り込んだアリスは腰からビームライフルを手にとりラウラに向けて放つ。何とかＧＮフィールドを展開して防いだラウラの視線の先では、エネルギーが底を着いたのかＩＳを強制解除させられたセシリアが地面に倒れていた。

「すみませんが、これをお願いします」

今まで右腕で抱えていたオータムをアリスはラウラと向き合ったままマドカへと投げつける。

「言っておきますが、彼女は私の獲物なので・・・・邪魔をすれば、例えあなたでも殺します」

「・・・・わかった」

オータムを受け取り、全ての武装を引っ込めたマドカは飛来した方向へと離脱していく。

「逃がすかあああああッ！！！」

腰背部に装備されえてあった二基のビームサーベルをラウラはマドカへと投擲する。超高速で投擲されたビームサーベルはマドカとの距離を着実に縮めていたが、

「言ったはずです。あなたの相手は私だと」

両肩から抜いたビームブーメランを投げてビームサーベルに直撃させ、その際に小さな爆発が起きる。爆煙の中で赤い翼を羽ばたかせると大型ウィングの中から小型ウィングが展開され、その勢いで煙は消え去った。

「悪いが、今は貴様などに構ってる暇は無い・・・・！」

目の前で親友（セシリア）をやられて、怒りに支配されたラウラの双眼に金色の光が灯る。アリスはそれをバイザーの下から冷たい目で見つめていた。

「・・・あなたは、知っていますか？」

静かに語りだしたアリスは両手を右肩後に手を回して、飛び出ている柄に手を掛ける。

「『ウンメイ』とは『命を運ぶ』と書いて『運命』と読むのですよ？だから・・・・」

力強く柄を握りしめ、アリスは右背部にマウント収納されていた対艦刀『アロンダイト』を両手で構えた。それと同時に赤い推進翼（ウィング・スラスター）から光が溢れ、光の翼を形成する。

「あなたの命も、私と『デスティニー』が運んで差し上げましょう・・・無論、地獄まで」

「なら私は、貴様を闇に沈める！」

「この無人機、一機一機が結構強いね」

「多分、過去のあたし達の戦闘データを元にしてると思います」

呑気に会話をしながらななせと楯無はビームサーベルとランスを振るう。すぐに終わるかと思っていた戦いだったが、僅かながら二人は苦戦していた。ジンクス?の動きは今までの無人機の中で一番手強いもので、下手したらそこいらの国家代表より強いかも知れないほどだ。しかし、そんなジンクス?百機相手に無傷のまま確実に数を減らしているななせと楯無の強さは常軌を逸している。

「・・・・回るか」

ポツリと呟いたななせはビーム刃を仕舞い、GNバスターライフルを両手に握りしめた。両腕を広げ、肩まで上げると銃口に輝きが収束し始める。そんなゆっくりな動作をジンクス?が見逃すはずもなく、瞬時加速(イグニッション・ブースト)を使って奇襲をしかけてきた。しかし、それはななせの口と指先が動くのと同時だった。

「・・・・発射」

銃口から真紅の粒子ビームが放たれる。消滅したジンクス?はたった三機。だが、ここで終わる連邦の黒い堕天使ではない。ビームを照射したままライフルごと身体を旋回し始めた。思わぬ攻撃だったのか、反応が遅れ水平に位置していたジンクス?は次々と飲み込まれていった。いくつもの爆発は巨大なドーナツ型の爆煙を形成し、その中心で凛と佇むななせを見ると殲滅戦が得意と言っていたのがよく分かる。

「な、ななせちゃん?そういうのは、前もってやるって言ってよね・・・流石のお姉さんもビックリしたよ」

「え・・・?あ、す、すいません!大丈夫でしたか!?」

頭上すれすれをビームが通ったらだれでもビックリします。苦笑いを浮かべる楯無に必死で謝るななせだが、しっかりとジンクス?を破壊している。

「今ので二十機近く落としましたから、残りは・・・」

「ちょうど半分ってところだね」

無傷とはいえ体力は消費してしまうため、僅かながら二人の息が上がっている。このままではエネルギーよりも体力が底を着きそうな予感がした。そんな二人に五十機まで減らされたジンクス?はじわじわと間合いを詰めていく。だが、次の瞬間。

「おばあちゃんが言っていた・・・」

声が聞こえると同時に真下から音もなく高速で黒い影が二人の目の前を通り過ぎる。聞き覚えのある声だったので、まさかと思って目線を上へと上げると太陽をバックにあの男が佇んでいた。

「子どもは宝物・・・この世で最も罪深いのは、その宝物を傷付けることだ」

すると、ななせと楯無に一番近かった四機のジンクス?の胸から火花が散り始める。そこには小型の実体剣が刺さっており、正確にコ

アを貫いていた。爆発するジンクス?を見て、いつの間に刺したのか考えたが、目の前を通り過ぎたあの一瞬しか考えられない。

「逢沢先生って強かったんだ・・・・」

「当たり前だ。お前は俺を誰だと思っている」

ななせは誰にも聞こえないぐらい小さな声で呟いたつもりが、本人に聞こえていたらしくビクッとする。

「ここは俺に任せて、お前達は下に戻れ。さっきから、妙な胸騒ぎがする・・・・」

いつも無表情な帝の目が細まり、彼が抱いている嫌な予感が二人にも伝わる。

「でも、逢沢先生一人を残すのは・・・・」

「安心しろ。俺が負けることなど有り得ない」

「「?」」

「世界にとって正義とは俺自身。昔から、まずい飯屋と悪の栄えた試しはない」

(※要約すると『取り敢えず俺は負けない』)

「わかりました。後はお願いします!」

だいたいの意味を理解したななせは一礼を入れた後、楯無とともに

雲の下にいる仲間の元へ向かった。二人の生徒を見届けた帝は視線を五十機のジンクス?へと移す。すると、幻騎士の装甲が粒子的に揺らいだ。

「俺もすぐに生徒達の所に向かいたいからな・・・悪いが、圧倒させてもらうぞ」

高機動追加武装『幻影』から火力追加武装『撲殺』へと変わる。両肩には大型キャノン砲台、両腰にはレールガン、胸部にはビーム砲。装甲も黒から赤へと変わっている。その直後、五十機ものジンクス?は帝へと突っ込んでいく。

【ＳＴＡＮＤＢＹ　ＥＸＥＬＩＯＮ（エクセリオン）　ＢＲＥＡＫＥＲ（ブレイカー）】

背部の推進翼（ウィング・スラスター）が展開され輝き出す。スラスターで光をエネルギーへと変換し、それを砲身へとチャージする。限界までチャージし、全てのジンクス?を射程範囲内まで引きつけた帝は幻騎士が持てる最強の砲撃を放った。

「エクセリオン・・・ブレイカー」

二門から放たれるのは青い極光。目を覆いたくなるほどの輝きは全てのジンクス?を無へと還していく。照射を終えた後に残ったのは、全てを無に還す白い騎士のみで、太陽の光が彼を称えるように照らしている。

「反動ダメージ回復まで七百二十秒・・・それまでは動けないか」

一撃必殺武器であるエクセリオンブレイカーには使用した後に反動ダメージが残ってしまい、回復するまで全ての行動が取れなくなる。

尚、その回復時間はエネルギーチャージ時間と比例しており、威力が上がれば上がるほど、反動ダメージも上がってしまうのだ。

「救援には遅れるが、鈴木がいるなら大丈夫だろう・・・・」

あいつが負けることなどない。帝だけでなく誰もがそう信じていた。

今日から始まる悪夢（ナイトメア）まで・・・・

Ｄｅｓｔｉｎｙ（後書き）

前から行っていたアンケートですが、現在一位が多数存在している上、これ以上は投票が望めないので、申し訳ありませんが、番外編の方は凍結させていただきます

ですがＰＶ五十万記念には何かやるので暫しお待ちください

以上、ＥＸＴＲＥＭＥからの報告でした

戦い

ＩＳ学園第三アリーナ近くの上空。そこでは無数の光と爆発が空に散らばっており、四人の少年が百機近いジンクス?を次々と墜としていた。

「ご立派に性能だけ上げやがって。そんな金があるなら募金しろっての」

スナイパーライフルで正確に敵のコアだけを撃ち抜くアルだが、言ってることが少しずれている。敵の動きが以前より洗練されているため、いつもより意識を集中させてトリガーを引く。そこにいるのはいつもの馬鹿な彼ではなく、一人の狙撃手だった。

「こんな無人機で俺ら倒せると思てるんか?亡国機業のアホ共は」

溜息を吐きながら自らに向かってくるビームの雨をかわし間合いを詰める。ジンクス?はビームライフルからビームサーベルに持ち変えるが、その瞬間。メインカメラがビームサーベルを右脇下から振りぬく龍鳳を捉えた。

「むむむっ。龍鳳、また一段と速くなってるね～」

ジンクス?を胴体から真っ二つにする龍鳳を見て、負けてられないと何故か意気込みＧＮバズーカを両肩のＧＮキャノンに接続させる。クリスのエメラルドの瞳が細まると同時に、ツインバスターキャノンの砲口から破壊の光が生まれ、触れるものを全て飲み込んでいった。そんな連邦の三大将である彼らは敵に触れることすら許さない。そして、そんな彼らの親友であり一応上司にあたるあの破壊神(アニヲタ)はと

いうと・・・・

「GNメガランチャー・・・・発射」

初めて使うGNメガランチャーを乱射していた。そして、敵に狙いを定めていたアルの隣を粒子ビームが通過する。

「ゴラァ、政志!お前は何処狙って撃ってんだぁ!!」

「何って・・・・敵に決まってんだろ?」

「その『はぁ?お前何言ってんの?』的な目を止めろ!つうか、お前明かに楽しんでるだろ!?」

「b(・∀・●)グッ」

「サムズアップすんなぁぁぁぁぁぁ!!!」

アルの魂の叫び(ツッコミ)が周囲に木霊する。普段は近接戦闘しかしていない政志で、遠距離兵器を使うとしてもファングのみでビームライフルを使うことすら珍しいほどだ。しかし、GNメガランチャーを撃って敵を破壊している際に政志は気付いてしまったのだ。

『あれ?これ面白くね?』と。そして、そんな彼を見て立場が危うくなりそうな者が一人いた。

「ちょ、政志が砲撃に目覚めちゃったら、ボク要らない子になっちゃうよ!?」

「何言うとんねん、お前はまだマシな方やろうが。俺や政志よりちょっと速いだけで、後は完全に負けとるんやで?」

「プッ、ざまぁねえなｗｗｗ」

「「黙れ社会のゴミ」」

「ご、ゴミ・・・だと!?お前ら、人権侵害で訴えるぞ!!」

「おい、そこの馬鹿トリオ。戦闘ぐらい真面目にやれや」

「「「お前が言うなぁぁぁぁ!!!!!」」」

漫才のような会話をする四人だが、これでちゃんとジンクス?を撃破しているのだから、流石は連邦のトップ4と言ったところか・・・。百機近くいたジンクス?も四人の手によって数分足らずで残り四機まで減らされていた。

「「「「これで終わりだ」」」」

声が重なり、それぞれが放った粒子ビームは格目標のジンクス?を破壊した。

「あ～あ、何か呆気なかったな」

「そうかぁ?俺達四人掛かりでやったら、ざっとこんなもんやろ」

「あっ・・・今気付いたんだけど、こうして四人で殲滅戦するの久しぶりだよね」

「あぁ。でも、あの頃と比べると今のは少ない方だろ?多い時には千機近・・・ホント凝りねぇな」

溜息を吐く政志の視線の先には、四人に向かってくるジンクス？の大群がいた。それも先ほどと全く同じ数。

「はぁ・・・何で勝てないってわかってるのに投入してくるかね？」

「とうとう亡国機業（あいつら）も頭イカれたんとちゃうか？」

「ここまでしてボク達を足止めするってことは、他の場所で何かやってそうだね・・・・」

「普通に考えたらそうだろうな。まっ、何にせよ・・・・全部潰せばいいだけの話だ」

ＧＮランチャーを待機状態に戻し、政志は両手にバスターソードを握った。やれやれと言った感じの表情で四人は各々のメインウェポンを再び構えてジンクス？へと向かって行くのであった。

「オラオラァ、その程度かぁ！？亡国機業の犬共がぁッ！！」

狂気の叫び声と共に大型ＧＮキャノンが火を噴き、真紅の粒子ビームは恋へと向かう。恋は左手に持ったシールドを構え、ビームシールドを展開する。それを見たヴィンセントの口角が上がると同時に、ビームが屈折し標的を輝火へと換えた。

「ちょ、冗談キツいって・・・・！」

瞬時にヴィンセントに向けていたビームライフルを下ろして、右手の甲からビームシールドを展開する。ビームシールドは粒子ビームを防ぎきり、それを見たヴィンセントは舌打ちを鳴らす。

「（初見であれに反応するって、どんな反射神経してんだよ・・・・！まぁ、それよりも気になるのは）」

あいつらの機体だけどな。睨み付ける先にはインフィニットジャスティスとレジェンド。レグナントの機動性は良いとは言い難いが、それでもそこいらのＩＳよりかは上であるのは間違いない。しかし、目の前の二機はレグナントのそれを遙かに凌駕していた。

「（太陽炉を積んでるわけでもないのに、あの機動性とパワー・・・・一体どんな奴が作ったんだよ）」

そんな人間がいるとしたらそれは自分は疎か、ななせすらも超えているかもしれない。有り得ないことだが目の前の二機を見ていると否定しきることが出来なかった。

「今のアンタ、どうしてウチらの機体がこんなに性能が良いのか不思議に思ってる顔してるよ！」

レジェンドの背部ユニット側面に連結されている小型ドラグーンが前方に倒れて、砲口をヴィンセントに向ける。八基のドラグーンから為される面制圧攻撃は強力だが、レグナントのＧＮフィールドはそれを難なく防いだ。

「亡国機業が連邦の本部を襲撃したの覚えてる？あれはね、連邦を制圧する為じゃなくて、ガンダムの戦闘データを取るためだったんだよ！」

「・・・そうか、じゃあその機体は・・・・」

「そう！全ＩＳで最強を誇るガンダムのデータ、それがウチらの機体を究極へと進化させたっていうわけ！」

それを聞いたヴィンセントは、なるほど・・・と納得した。だが、今やるべきことに変わりはなく、全てのファングを射出した。輝火も小型ドラグーン八基を射出し、ファングに向けてビームを放つ。赤と緑のビームが飛び交う中、一基のドラグーンが被弾して小さな爆発を生む。それを見て輝火が笑うと同時に、背部ユニット最上端に装備されてある大型ドラグーン二基が射出された。砲門から小型ビームスパイクを形成したドラグーンは黒煙の中を突き進み、ヴィンセントへと向かう。

「なっ！？」

「これで終わりだね！」

黒煙の中から現れたためヴィンセントの反応が少し遅れた。ＧＮフィールドも間に合わないと践んだ彼は両肩の大型ＧＮソードを身を守るように構える。だが、ドラグーンは軌道を変え、背後からヴィンセントの両肩を貫いた。装甲が破損して、装備されていた大型ＧＮソードが地に落ちていく。

「アハハハッ！悪いけど、一気に叩かせて・・・・嘘！？」

負傷したヴィンセントに全ドラグーンを向けようとしたが、大型の二基以外の小型が見あたらない。あるのはサーベルを展開しているファングのみ。

「まさか！あの爆発の時、ウチが見えないところで・・・・」

「あぁ、全部潰させてもらったぜ！次は、テメェの番だぁ！！」

十基のサーベルを展開したファングが、輝火を貫かんと迫る。そんな心許なくビームサーベルを構える輝火の前に赤い影が現れ、持てる全ての近接武装を振るった。

「・・・・輝火は、やらせない」

右手のビームサーベル、左手のシールド、そして左右の膝～爪先間に設置されたビームブレイドが全てのファングを墜としたのは一瞬の出来事だった。身体が動いたと思った時にはすでにファングは粉々になっており、ヴィンセントは忌々しく奥歯を噛み締める。

「ちぃッ！格闘技能は兄貴級（クラス）かよ！！」

すぐさま両腕を突き出し電磁アンカーを射出した。二基のアンカー

は恋と輝火へと向かっていき、身構える二人の手前でさらにアンカーの先から五本の子機が射出された。シールドを構えていた二人に捕らえるように子機が迫る。その瞬間、恋が再び動いた。

「・・・・・」

無言のまま自らの防御を解き、輝火へと向かっていた子機を全て鷲掴みにした。その間にも恋の身体は子機で絡め取られ、そこから電流が流れ込んでくる。周囲に飛び散る程の電流が恋の身体を駆けめぐり、ヴィンセントは勝利を確信した。だが・・・・

「・・・・化け物かよ!?」

驚愕の表情を浮かべるヴィンセントの瞳が、無表情で身体に取り付いた子機を引き千切る恋を捉える。片腕分の電流だけでも、常人なら十秒もせず悲鳴を上げ失神するものを、恋はその二倍をモノともしなかった。

「どうやら、最初っから警戒すべきはこいつだったようだな・・・・」

とんでもねえ当たりを引いたようだぜ。何とか弱気を見せないように口元に笑みを浮かべているが正直かなりマズい状況である。レジェンドのドラグーンを大型以外八基を破壊しているとは言え、もう一人は無傷。それに比べ、レグナントの主力武器はほとんど破損している。頬を一筋の汗が伝うと同タイミングで、勝ち気の恋と輝火が向かってきた。

「そろそろ墜ちなよ!ヴィンセント・トールギ――――っ!?」

輝火と恋は咄嗟に後ろに瞬間加速（イグニッション・ブースト）してヴィンセントから距離を取った。刹那、さっきまで二人がいた所に巨大なエネルギー球が通過した。

「あれは・・・・」

過去に一度それを食らった覚えのあるヴィンセントは振り返った。そこには、

「・・・・ロシナンテか、ちょっと危なかったぜ」

「政志に言われて来てみれば、案の定だったな」

戦闘形態のロシナンテがいた。心強い助っ人の登場にヴィンセントはホッと息をつき、ロシナンテはヴィンセントの隣まで移動する。

「お前は、そんな状態で戦うつもりか？」

「当たり前だ。このまま引き下がれる程、俺のプライドは安っぽくないんでな」

「二対二でイーヴンか・・・・・うんうん！面白くなって来た感じだね！」

「・・・・来い。恋が全て倒す」

最強のＧＤを加え、激戦が再び始まった。

「さっきから、一体何の音だろ・・・・？」

場所は変わってとあるアリーナ。その周囲を歩く一人の少女がいた。クラスに馴染めずにいる彼女は一人寮に戻っていたのだが、爆発音を耳にして気になって外に出てみたのだ。歩く道中、誰とも出会うことはなく不思議に思った。それもそのはず、襲撃を聞きつけた千冬が全生徒を避難させているからだ。

「（やっぱり、寮にいた方がよかったかも・・・・私のＩＳもまだ完成には程遠いし・・・・）」

しかし好奇心を抑えることは出来ずそのまま歩みを進める。だが次の瞬間、空から爆発音が聞こえて顔を上げると、見たこともないＩＳが胸に穴を開けて火花を出していた。流れ星のように地上を目指すそれはアリーナの外壁に衝突し爆発を起こした。その際、外壁の破片が飛び散り、一部が少女の真上に落下する。

「（嘘・・・・私、こんな所で死ぬの・・・・？）」

逃げようと考えたが足がすくんで動けない。少女の目から一筋の涙が零れ、迫り来る死を目を閉じて待っていた。

「デ・・ト・・ショ・・イ・・」

誰か男の声が聞こえた気がしたが、何を言っているかはわからなかった。しかし、声が聞こえてから数秒経っても、来るはずの痛みが来ることはなかった。

「あっ、手加減するの忘れてた・・・まあ良いか」

今度は何を言っているかはっきりと聞こえ、恐る恐る目を開けると赤い悪魔と呼ぶに相応しいＩＳを纏った少年がいた。ふと首を横に向けるとアリーナがあった場所には何も無い。比喩などではなく文字通り完全に消滅していた。

「おーい、聞こえるか三馬鹿?俺はちょっと疲れたから、後は頼んだぞ」

【はいはい。元帥殿はそこら辺で休んでてくださいな】

呆れを含んだ金髪馬鹿の声が聞こえると政志はＩＳを解除する。

「おい、お前。怪我は無かったか?」

声を掛けられた少女はビクッと身体を跳ね上げ、政志と向き合った。

「は、はい・・・大丈夫、です・・・・」

「あっそ。なら、ここは危ねえから、さっさとどっかに避難しろ」

「ちょ、ちょっと待って！どうして・・・私を助けたの？」

俯き気味で尋ねる少女を数秒見つめた後、政志は短い溜息を吐いた。そして、右手を上げて少女にデコピンを御見舞いする。何故デコピンされたか理解出来ない少女は涙目で政志を睨み付ける。

「じゃあ逆に聞くけど、お前は目の前に死にかけの奴がいたら見捨てるのか？」

「そ、それは・・・・」

少し困った表情になる少女を見て、政志は小さく微笑み少女の頭にポンッと手を置いた。

「今度からは気を付けろよ。下手に怪我しちまったら、綺麗な顔が台無しだからな」

「き、綺麗！？わ、私が・・・・？／／／／」

「あぁ。自信持っていいと思うぜ？んじゃ、そゆことで」

頭から手を離した時、少女が物寂しそうな表情をしていたが政志は気付かなかった。手をぶらぶら振って立ち去る政志の背中に少女が見つめていると、足を止めた政志が振り返った。

「余計なお節介と思って言うけど、お前はお前で、他の誰でもないからな」

「！！」

「兎に角自信を持って生きろ。でないと・・・・いつか自分を泣かすことになるぞ」

その言葉を最後に政志は再び歩き出し、林の中へと消えていった。
残された少女は政志の言葉の意味を理解出来ずボーッと考えていたが、避難しろと言われていたことを思い出して政志とは反対方向に歩き出すのであった。

「（そういえばあの人、何処かで見たことある気がするけど・・・・誰だっけ？）」

「（さっきのあいつ。何か楯無に似てる気がしたんだけど・・・・気のせいか？）」

少女と別れた後、似たようなことを政志は考えていた。

「（もしかして妹だったりしてな。まぁ、ないとは思うけど・・・・）」

残念ながら、今回ばかりは政志の予測とは反しており、先ほどの少女の名は『更識簪（さらしきかんざし）』。苗字の通り、楯無の妹だ。だが、政志がそれを知るのは大分先の話しである。

「（つーか。ジェイルが後ガンダムを使っていいのは三回だとか言ってたけど、早速今日一回使っち・・・まったぞ・・・・）」

突如、視界が揺らみ、足がフラつき始めた。近くの木に背を預けた途端、全身の力が抜けてズルズルと腰が落ちていきベタリと座り込んだ。

「ハァ、ハァ・・・おか、しいな・・・・？ちゃんと薬・・・・飲んだ、はず・・・・なんだけど、な・・・・」

だんだん耳も悪くなってきたのか、今まで聞こえていた上空の戦闘音も聞こえなくなった。しかし、誰かが近づいてくる音だけは聞こえた気がした。こんな所を誰かに見られるわけにはいかず、俯きながらも歯を食いしばって何とか立ち上がる。

「おい・・・誰だか知んねえけど・・・・ここは危ねぇから、何処かに・・・・」

行け。と言おうとしたが、その直後、

「会いたかったよ、『マサシ』」

「！！！！！！！」

声が聞こえた瞬間、政志の細胞が凍り付いた。全身が恐怖で震える中、その者の顔を確認しようと顔を上げる。声を聞いた時点で、政志は目の前の少女が誰だか気付いていたのかもしれない。だが、そんなはずはないと自分に言い聞かせる。足下から序々に視線を上げていき、遂に顔を見てしまった。

「どう・・・して・・・・・だって、お前はあの時・・・・・！！！！！」

「どうして？フフッ、そんなの・・・・・」

『マサシには分からないだろうね』

「うわあああああああ

墜ちる三大将

「やっと終わった～・・・っと思ったらまた来たよ・・・・」

全てのジンクス?を撃破したアル、龍鳳、クリスの三人は追軍がないか見ていたかその様子もなく一安心する。気配を感じた三人は呆れた感じで振り返るが、次の瞬間。視界に入ったのは自分達に向かってくるズ太い粒子ビームだった。

「二人とも下がって!」

言うとすぐにクリスはＧＮフィールドを展開し二人の前に出る。だが、勢いを全く殺せずに吹き飛ばされてしまう。

「この威力、まさか・・・・!」

「「クリス!!」」

吹き飛ばされた後、地上に落下するクリスを見たアルと龍鳳は視線をビームが来た方へと向ける。接近してくる機影は三つ。その三機は以前楯無に見せて貰った写真に写っていたものと同じだった。

「んじゃ、予定通りアレの始末はあたしがするから、残りは頼んだわよ」

「わかりました。行きますよ、ブリング」

「あぁ」

短い会話を済ませたヒリング、リヴァイヴ、ブリングの三人はそれぞれの相手へ向かって飛翔する。クリスがいる地上へと向かうヒリングに、アルは行かせまいとスナイパーライフルの銃口を向ける。

「悪いが、狙い撃たせて――――」

「させませんよ、深緑の狙撃手」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一気に間合いを詰めてきたリヴァイヴが駆るＩＳ『ガッデス』のＧＮヒートサーベルが振り下ろされる。咄嗟にＧＮビームピストルを交差して構え身体が真っ二つにされるのを防いだ。

「お前・・・一体誰だよ！？」

「リヴァイヴ・リバイバル、『イノベイター』です」

「い、インベーダー・・・？何だ、そのシューティングゲームみたいな名前は！！」

「アホか！！イノベイターや、イノベイター！！」

全く場にそぐわないボケをかますアルに龍鳳が全力で突っ込みを入れる。

「ふふっ、聞いた通り本当に頭が弱いようです・・・ねェ！！」

語尾を強めると同時にサーベルを引き、アルの意識がいってない腹部に蹴りを入れる。肺が押しつぶされる程の痛みを感じつつも、何とか意識を保つところは流石としか言いようがない。

「ぐはっ！・・・・や、やるじゃねえかよ・・・・・」

「アル！！くそっ・・・・・！」

「何処を見ている？」

アルの元へ向かおうとした龍鳳の前にＩＳ『ガラッゾ』を纏ったブリングが立ち塞がる。

「お前・・・・そこ退けや！！」

「通りたかったら力づくで通るんだな」

「ほなら、止めれるもんなら止めてみい！！」

夕日が沈みかけ、空が茜色に染まる。そんな雲の隙間から強い閃光

が漏れるが、それは戦いによるものだった。ラウラが駆るダブルオーライザーのGNツインランスとアリスが駆るデスティニーのアロンダイトがぶつかり合う度に空が悲鳴を上げる。

「何故貴様らはいつも私の仲間を狙うんだ!?」

「さあ?そんなこと、私に聞かないでください」

数秒の鍔迫り合い後、二人は同じタイミングで後ろへ後退する。すぐさまラウラはドッキングしてりるオーライザーのサイドバインダーに装備してあるビーム砲をアリスに向けて放つ。速射性にも関わらず高威力を誇る粒子ビームを前にアリスは焦ることなくかわしていき、その動作の中で背部に装備されている大型ビームランチャーの照準をラウラに合わせる。

「墜ちろ・・・・」

砲口が光るのとGNフィールドを展開したのはほぼ同時。目を凝らしていたラウラは威力からして真正面から受け止めるのは賢明ではないと判断して体を斜め下にズラした。すると、ビームはGNフィールドの角に当たり空へと逸れていった。

「GNフィールドの形状を利用して、ビームを逸らしましたか・・・・思ってたより頭を使った戦いをするようですね」

「余計なお世話だ!」

GNツインランスの連結を解除しGNソード?を両手に持ったラウラはアリス目掛けて三段階瞬時加速(トリプル・イグニッション)する。爆発的な加速で迫るラウラに向かってビームライフルで迎撃するが、被弾する気配が見受け

られない。仕方なく再びアロンダイトを握ると同時にラウラが眼前に現れた。

「なッ！？」

アリスの聞いていた情報ではラウラはまだダブルオーの性能を完全に引き出せていないとのこと。だが、目の前のガンダムを見る限り本当にそうなのか疑ってしまう。

「（確かに、『戦神（ヴァルキリアス）』が乗るのに相応しい機体ですね・・・・しかし！！）」

ラウラが右手に持ったＧＮソード?を左から横薙ぎで斬り付けようとするが、アリスがアロンダイトをラウラの脳天に振り下ろすのが僅かに速い。勝利を確信したアリスだったが、次の瞬間、ラウラは右手に持っていたＧＮソード?を離して右手をアリスに突き出した。すると、体の自由が奪われアリスの動きが止まる。

「これは・・・・ＡＩＣ!?何故ガンダムに停止結界が・・・・！！」

ドイツ軍の技術であるＡＩＣがダブルオーに発動できたことにアリスは驚きを隠せない。だが、ラウラがダブルオーを持つようになった経緯をしっている者なら今の状況に納得がいくだろう。

「政志から『出来るかも』とは聞いていたが、本当に出来るとはな・・・・」

当の本人、ラウラの表情から若干の呆れと驚きが伺える。こうも都合よくシュヴァルツェア・レーゲンの搭載されているシステムをダ

ブルオーが使えるとは思ってなかったようだ。ラウラは左手に持ったもう一本のＧＮソード?を握り直し、矛先をアリスへと向ける。

「どうやら、勝負あったようだな。亡国機業！」

自らの眉間に向かってくる刃を見たアリスの口からは、この場にそぐわない溜息が吐かれる。ラウラの耳にもそれは聞こえたが、全く気にとめなかった。

「・・・・バイザー、解除・・・・・」

そう呟くとアリスの顔を覆っていたバイザーが粒子化していき、彼女の顔が露わになる。そして、次の瞬間。ラウラの時が止まった。右目は海のように青く、左目にはラウラのとは色違いの赤い眼帯。腰まで伸びた綺麗な黒髪に頭の両サイドから一本ずつ細い三つ編みを携えている。そんな自分の顔を驚愕の表情で見るラウラにアリスの口元が嘲笑で歪む。

「貴様は、一体・・・・・!?」

「あぁ、そういえばまだ言ってませんでしたね」

何処か忌々しそうにアリスは名乗る。

「私はアリス・・・・アリス・”ボーデヴィッヒ”。あなたのクローンであり、俗に言うあなたの妹にあたります」

自分と全く同じ顔をした少女が淡々と語るのをラウラはただ聞くしかなかった。集中が欠け、ＡＩＣが解けたのを確認したアリスはラウラの腹部にゆっくりと手を押し当てる。

「ッ！！し、しまっ――――」

「さようなら・・・・お姉様」

掌と装甲の密着部が輝き出し、デスティニーの掌部ビーム砲『パルマフィオキーナ』が炸裂した。爆発で装甲が弾け飛び、焼け爛れた腹部が露出する。地上へと落下し意識が朦朧とする中、アリスと目が合った。それはとても冷たいもので、ラウラを見下しているようにも見える。

「ふざ・・・・けるな・・・・！私はまだ、死ぬわけには・・・・いかないんだ！！」

ラウラは唇を血が出るほど噛み締めた後、目をカッと見開く。

「あれを食らってまだ生きてましたか。では、これで止めを」

重傷を与えた敵が未だに敵意をむき出していることに気づいたアリスは大型ビームランチャーを手にとり砲口をラウラへと向ける。

「今度こそ死んでください。私が私であるために・・・・」

放たれた大出力ビームはラウラを殺さんと迫る。誰がどう見ても絶対絶命の状況。しかし、ラウラの目に諦めなど全く無かった。あるのは生きるために戦う覚悟の光。

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

ダブルオーの装甲が赤く輝くが、それはラウラの体をビームが貫くのと同時であった。この時、微かにだがラウラの体はダブルオーの装甲ごと粒子的に揺らいでいた。

「いててて・・・思わず気絶しちゃったよ」

とりあえず『上空五十メートルから落下して気絶だけですむのはあなただけです』とツッコミを入れておこう。現在クリスは一時的に気絶していたためＩＳを解除している。

「さっきから視界が斜めになってると思ったら、首折れちゃってるじゃん」

よいしょ！と掛け声を入れて両手で頭を持って真直ぐに戻した。ゴキッ！と嫌な音が鳴った後、う～んと身体を伸ばす。

「さてと、大丈夫だとは思うけど、二人のところに戻ろうかな」

再びセラヴィーを展開しようとしたクリスだったが、次の瞬間。聞き覚えのある音が周囲に響いた。

「え・・・？」

同時に左胸に激しい痛みを覚え、覗いて見ると夥しい血が溢れていた。銃声が聞こえた方を見てみると一人の少女が立っていた。木の陰で顔は見えないが、その少女から只ならぬ危険なオーラをクリスは感じた。

「・・・誰かは知らないけど、ボクがこの程度で死ぬと思っ――」

突如クリスの表情が激痛で歪む。不死の存在『ＥＴＥＲＮＡＬ（エターナル）』で

あるクリスには超再生能力が備わっている。その証拠に銃弾で撃たれた胸部の傷はすでに塞がっており出血も止まっている。しかし現に今、それにも関わらずクリスは苦しんでいる。有り得ない状況に混乱しつつも激痛に耐えかね、前のめりで地面に倒れこむ。

「一体・・・・これは、どういうこガハッ！」

ついには口から血も吐き出すようになり死にそうになる。だが、痛みは引くことも増すこともなく一定でクリスを襲っている。まさかと思ったクリスは目だけを自分を撃った少女に向けた。

「どう?今の気分は?まぁ、心臓が壊死と再生を繰り返してるんだから、死ぬほど痛いわよね」

「やっぱり・・・・ボクの、心臓に・・・・細胞分解酵素を・・・・」

「その通りよ、連邦の白い魔王。いや、魔王と言うより化け物と言った方が正しいわね」

「君は・・・・一体・・・・」

「ヒリング・ケア、イノベイターよ」

「いの・・・・べいたー・・・・・?」

「そうよ。でも、もう二度と会うことも無いから教える意味は無かったんだけどね」

そう言ってヒリングはＩＳ『ガデッサ』を展開して、手にビームサ

ーベルを握る。激痛で苦しむクリスに向かって歩き出し、サーベルを逆手に持ってクリスの背中に突き刺した。大量の血がクリスの口から吐き出され、とうとう動かなくなった。

「予定通り、クリストファー・トールギスの処理を完了～♪さてと、リヴァイヴとブリングは上手くやってるかしら？」

夕日と同じ色の装甲のガンダムが空を翔る。その後に続くのが紫色の装甲を持ったＩＳ『ガラッゾ』の機動性は脅威的なものでアリオスのスピードを持ってしても振り切れないものだった。速度を持続させたまま後ろを向きながら龍鳳はビームライフルをブリングに向けてトリガーを引くが全く当たらない。

「その程度か？龍鳳・クシュリナーダ」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一気に距離を詰めたブリングは右手の指に発生させたＧ

Nビームクローを振り下ろす。だが、龍鳳はすでに手にビームサーベルを持っており、互いのビーム刃が交差して閃光が生まれる。

「ほぅ・・・まさかあの速度に反応できるとは、やはり侮れんな」

「そんなんはどうでもええねん。ただ・・・俺はどうしても一つ聞きたいことがあるんや」

ビームサーベルを引いた龍鳳はブリングの脇腹へ回し蹴りを叩きこもうとするがブリングも蹴りを放っており、二人の脚部がぶつかり合う。しかし、一方的に龍鳳が吹き飛ばされてしまった。両腕部に1門ずつ内蔵しているGNバルカン以外遠距離兵器を積んでいないガラッゾのパワーはセラヴィーを上回るほどのもの。当然、アリオスが勝てるものではなかった。吹き飛ばされた龍鳳はすぐに体勢を立て直しビームサーベルの切っ先をブリングに向ける。

「お前・・・一体何や?」

細まった深紅の瞳がブリングを睨み付ける。それに対してブリングは表情を変えることなく静かに答える。

「ブリング・スタビティ、イノベイターだ」

「違う・・・俺が聞きたいんは”何でお前がその顔しとるいうことや”」

「・・・アーノルド・ギアナは気づいていなかったが、どうやらお前は頭がキレるらしいな」

「はっ!俺をあの馬鹿と一緒にすんなや。まぁ何にせよ、これで全

部わかったで。何でお前らが太陽炉を持っとるんか、何でダブルオーを狙うんか・・・何で政志を苦しめるんかがなぁ！！」

怒りの形相で歯をむき出しにして龍鳳が咆える。殺気を全開にした龍鳳は両手にビームサーベルを構えてブリングへと猛スピードで突っ込んでいく。

「どうやら我々の正体に気づいたようだが、ここで死ぬことには変わりは無い」

ブリングがそう静かに呟くとガデッサの装甲が赤く発行し始めた。それが何を意味するのかは一目でわかり、龍鳳は驚愕の表情を浮かべる。

「ッ！トランザム、やと・・・・！？」

「その通りだ」

後ろから声が聞こえたのと同時に装甲が弾け飛んでビーム刃が胸から生えていた。龍鳳の口から瞳と同じ色の液体が大量に吐き出され意識が朦朧となる。身体が動かなくなったのを確認したブリングはトランザムを解除して突き刺していたビームクローを引き抜いた。

「さらばだ・・・出来損ないの超兵よ」

そう告げると共に、地上に落ちていく龍鳳を金色に輝く瞳が見据えるのであった。

「ライフルビット！」

「ファング！」

アルとリヴァイヴは各々の自立兵器を射出する。ライフルビットの砲門がリヴァイヴを捉えるが、それと同時にビームサーベルを形成したファングが特攻して全機が相討ちとなる。

「野郎、よくも俺のライフルビットを・・・・！」

苦虫を噛んだような表情になったアルは右手にスナイパーライフル、左手にビームサーベルと普段ならやらない組み合わせの装備を持つ。相手の武装からして距離を詰めて接近戦を行ってくるのは目に見えており、対ビームコーティング処理が施されビームピストルでは心許ないのだ。しかし、いつもの彼なら距離を詰めさせることを許さないのだが、目の前の敵にそんな甘い考えは通じないと身体の細胞が訴えかけていた。

「おかしいですねぇ。聞いた情報では、元々ケルディムにはビームサーベルは無かったはずですが・・・・一体どうしたのですか？」

「お前には関係ないだろ！」

片手にも関わらずスナイパーライフルから放たれる粒子ビームは真直ぐリヴァイヴへと向かって直進する。少し関心したような表情を浮かべたリヴァイヴはヒョイッと容易にかわした後、アルへと瞬時加速（イグニッション・ブースト）する。だが、

「そう来るのは見え見えなんだよ！」

リヴァイヴが瞬時加速（イグニッション・ブースト）する直前に、アルはシールドビットを自分の前に展開し始めていた。九基の内の五基を合体させシールドとして自分の前に置いておき、残りの四基を格子状に組み合わせる。格子の中心から放たれるビームはケルディムの武装の中で最も強力なもので、リヴァイヴの進む軸に合わせて放ったため直撃を避けることは出来まいとアルは思っていた。

「まさかアサルトモードを使う日が来るとは・・・・帰ったらななせに何か奢ってやろうかな？」

勝利と確信していたアルだったが次の瞬間、それは消え去ってしまう。突如ガッデスの装甲が赤く輝き始め、直撃コースだった粒子ビームを残像を残して回避した。

「なっ！？まさか、アレは・・・・！！」

「おやおや。何処に驚いている暇があるのですか？」

音速を超える速度に現れたリヴァイヴはヒートサーベルを斜めから振り下ろしてシールドビットはおろか、ケルディムの装甲ごとアルの胸部を溶断する。この際、シールドビットが爆壊してその破片がアルの両目を襲った。

「・・・・くそ・・・・がぁッ！！」

両目の痛みと、内臓まで斬りつけられた痛み。常人なら気絶してもおかしくないはずのものを、アルは耐えてビームサーベルを横薙ぎで振るう。

「目が見えない上、そんな状態で私に勝とうなど・・・・上位種である我々を馬鹿にしてるようにしか思えませんね」

だが、その一振りもヒートサーベルによって防がれ、少し不愉快な表情になったリヴァイヴはトゥーキックをアルの胸の傷口に叩きこんだ。

「ガハッ・・・・！！」

大量の血を口から吐き出したアルの今の顔は、両目の出血のせいもあって血で真っ赤に染まっている。死んでもおかしくない瀕死の状態。そんな状態にも関わらずアルはスナイパーライフルの銃口をリヴァイヴに向けるが引き金を引くことはなかった。

「気絶しているのにまだ戦おうとするとは・・・・本当に馬鹿のようですね、あなたは」

リヴァイヴがそう言い切ると、アルの身体がガクンと崩れて地上へと落ちていく。そんなアルに向けるリヴァイヴが向けるのは人を見

下す視線そのものだった。

「アーノルド・ギアナ。人間にしては中々の腕だったようにも思えますが、所詮は劣等種。我々イノベイターに勝てるはずがない」

武装を損失したことに内心毒づきながらもヒートサーベルを仕舞う。視線をアルから外したリヴァイヴはその場を後にして飛び去っていくのであった。

絶望の中にも、光はある

「消えた・・・・だと!?」

アリスは今の現状に戸惑っていた。ビームは確かにラウラの身体を貫きアリスは勝利を確信した。だが、そのラウラの全身が緑色の粒子と化して消えたのだ。しかし、次の瞬間。背後に突如気配を感じた。粒子が集結し一個の存在へと変貌を遂げたそれは、赤い輝きを放つダブルオーを纏ったラウラだった。

「はあああああぁぁぁぁぁぁっ!!!!」

振り下ろされたGNソード?はデスティニーの赤い片翼を切り落した。爆発の中、アリスは後ろに瞬時加速(イグニッション・ブースト)して距離を取りながらアロンダイトを手に取る。相手は手傷を負っているいるとはいえトランザムを起動させている。一度距離を取ってから・・・・、と思考を練っていると目の前に残像を残しながら迫ってくる赤い影が見えた。

「化け物め・・・・!!」

残った片翼が羽ばたきラウラを迎え撃とうとデスティニーが誇る最高のスピードで突っ込んでいく。それを見たラウラは片手で持っていたGNソード?を両手で握りさらにスピードを上げる。そして、最強と運命を冠する二機が交差した。

―斬!―

「「・・・・・」」

斬りぬけた後、両者が背を向けたまま数秒沈黙が続いたが、それはアロンダイトが真っ二つになるのと同時に破られた。

「まだ続けるつもりか？私の妹とやら・・・・」

トランザムの限界時間を迎え輝きが消える。お互い向かい、ラウラはＧＮソード？の切っ先を向けたまま黄金に輝く両目でアリスを見据える。

「・・・・そうですね。覚醒を迎えつつあるあなたを相手にするのなら、私も本気でいかねばならないようです」

そう言ってアリスが赤い眼帯に手を掛けたその刹那。

「それは使わないはずの約束よ。アリス」

声が聞こえるとアリスの身体が静止する。二人の視線の先には白い一対の推進翼（ウィング・スラスター）を持ったガンダムを纏った黄褐色ショートカットヘアーの少女。その少女を見たアリスは眼帯から手を離して戦闘体勢を解いた。するとラウラは刃の切っ先をアリスから少女へと変える。

「貴様のその機体・・・・一体何処で手に入れた？」

「失礼ね。この子はあたしが作ったガンダムよ」

「作っただと・・・・！？」

「そうよ。まぁ、言いたいことも聞きたいことも山ほどあると思うけど、今日は退かせてもらうわ。帰るわよ、アリス」

「・・・・了解」

不服そうな顔色をしつつもアリスはその場から去っていった。少女も後に続こうとするが、背後に只ならぬ敵意を感じて振り返った。

「まさかと思うが、私がこのまま見逃すとでも？」

睨み付けるラウラを少女は鼻で笑った。それは人を馬鹿にするかのような、愚か者にするかのような、そんなものだった。

「勘違いしてるようだから言っておくけど、今あたしとあなたが戦ったらどうなるか・・・・分かってるでしょ？」

「ッ！！」

少女が纏うオーラがガラリと変わる。体中の細胞が震えるような、今までに無い恐怖をラウラは覚えた。そんなラウラを少女はブラウンの瞳で見つめた後・・・・姿を消した。ラウラはすぐに周囲を見渡そうとするが、頭の後ろでガチャンッと音がするのが聞こえた。

「零段階瞬時加速（ゼロ・イグニッション）。ノーモーションから機体が持つトップスピードまで文字通り”零段階”で加速する究極の瞬時加速（イグニッション・ブースト）。これに反応出来ないようなあたなが、どうやってあたしに勝つつもり？」

静かにそう告げた少女は頭に突きつけていたビーム砲を下ろした。

「ここであなたを殺してもいいけど、それじゃあつまらないし・・・・今日は”見逃してあげる”」

クスッと笑った少女はアリスの後を追って飛翔する。一人その空間

に残されたラウラの全身からは血の気が引いていた。もしあの少女の気が少しでも変わっていれば、自分は殺されていたのだから。

「（あの女は危険過ぎる。このことを政志達に・・・・）ん？」

ふとラウラの元にプライベート・チャンネルが入る。ななせからだった。

「・・・ななせか、何かあった――」

【大変なの！！！政志が・・・・政志が・・・・ッ！！！！】

「ッ！？」

絶望はまだ・・・・始まったばかりだ。

「「「「「「「「「・・・・・」」」」」」」」」

重苦しい空気が手術室前で流れている。空から落ちていたアルと龍鳳を受け止めた帝がそのまま地上で倒れていた政志とクリスを回収してＩＳ学園の医療施設へと運んだのだ。尚、手術室前に待機しているのは、ななせ、ラウラ、シャル、鈴、セシリア、一夏、箒、ヴィンセント、楯無の九人。千冬と帝は学園の方へと戻って事後処理にあたり、ロシナンテは政志のことを聞いた途端に何処かへ行ってしまった。

「くそっ！俺がさっさとあいつ等のことを兄貴達に伝えていれば、こんな事には・・・・！！」

ガン！と芳しくない音が静かな空間に響く。一同が目を向けるとそこには壁に拳でクレーターを作り上げているヴィンセントが小刻みに震えていた。ヴィンセントはロシナンテと共に輝火と恋相手に善戦していたのだが、何か連絡を受けた二人は撤退していったのだ。

「別にお前のせいじゃないさ。あいつらの存在に気づいた時点で、政志の無理を押し切ってでも捕らえるべきだった・・・全ては私のせいだ」

「そんなことないよ。あたしだって、何も出来なかったんだから・・・」

目頭に涙を溜め込んだラウラをななせが優しく抱きしめる。すると、手術中のランプが消えて、中から手術衣を着た男性が出てきた。

「スカリエッティさん、四人はどうなんですか！？」

「落ち着きたまえ、ななせ君。そんな風に襟を掴まれたら話したくても話せないのだが？」

「・・・・す、すみません」

申し訳なさそうな表情のななせにスカリエッティはいいよ、とだけ答え本題に入った。

「四人とも、命に関して言えば別状は無いよ。ただ、アーノルド・ギアナ君は眼球に傷が入っていて、我々も出来る限りの処置は施したが、彼の回復力しだいでは失明も有り得ることを伝えておくよ」

「・・・・そん、な・・・・」

「次に龍鳳・クシュリナーダ君。彼は内臓と共に脊髄にかなりのダメージを受けていて、目が覚めた後に下半身に障害が残るかもしれない。言い辛いが、二度と歩くことが出来ない可能性がある」

「・・・・うそ・・・・」

「次にクリストファー・トールギス君だが、彼の心臓部に特殊なウィルスが打ち込まれていて、それをどうにかしない限り何とも言えないね」

「・・・・そう、ですか・・・・」

「最後に鈴木政志君だが、彼は・・・・」

アル、龍鳳、クリスの容態を淡々と語っていたスカリエッティの表情が何か言いにくそうに歪む。だが言わないわけにもいかないので

彼は重い口を開いた。

「・・・検査の結果、脳細胞にかなりのダメージを受けていることがわかった」

「それって、どういう・・・・」

「原因は私にも分からない。しかし、一つだけ言えることがあるとすれば、四人の中で一番彼が重傷だということだ」

「ちょ、待てよ!!まさか・・・・」

「彼は二度と目覚めないかもしれない。もし奇跡的に目覚めたとしても、彼の記憶は・・・・」

最悪の状況に誰もが言葉を失う。ななせ、ラウラ、シャル、鈴、セシリアの目からは涙がポロポロ零れ落ちていた。楯無はふらふらと危なげな足取りで何処かへ行ってしまい、ヴィンセントは再び壁を殴りつける。箒が一夏の横顔を伺うと、その表情は絶望に染まっていた。いや・・・正確に言うならば、九人ともが悪夢を見ているような感覚だった。

「「・・・・・・」」

時は午後十時、場所は”元”第三アリーナ。政志によって消滅させされたアリーナの残骸の上になせとラウラは並んで座っていた。行き場のない悲しみを胸に抱き、隣の友人に声を掛ける余裕もない二人。そんな二人が座り込んでから三時間以上が経過していた。そして更に時が経ち、時計が十一時の針を指そうとしたその時。

「一体・・・誰が政志をあんな風にしたんだろうね・・・・」

なせが口を開いた。だが、その声にはいつもの彼女からは考えられないほどの怒りの熱を感じた。ラウラが横を向き、なせの表情を伺うと可憐な顔には深い怒皺が刻み込まれていた。

「そんなこと、今はどうでもいい・・・誰がやったかわかったところで、政志が目覚めるというわけでもないからな」

「そう・・・だね。あたし、何言ってるんだろ・・・・」

二人だけの空間に悲しいなせの嗚咽が響き渡る。ラウラも泣けるものなら泣きたいが、彼女の目からはすでに涙が底を着いていた。ただ空しいだけとはわかっていつつも二人はそこから動こうとせずに滞在し続けようとするが、二人の耳に誰かの足音が聞こえた。重い首を捻って後ろを向くと桃色の髪のあの少女がいた。

「お前は、政志の妹の・・・・」

「どうしたの、天空？こんなところに」

「いえ、大した用事ではないのですが、少し兄さんのことでお話ししたいことが・・・・」

兄さん（政志）という単語を聞いた二人の表情が一気に気まずく曇りだした。その反面、天空の表情はいつも通りであり、天空はななせとラウラの表情を数秒眺めたあと口を開いた。

「実は私達三人の他に、兄さんには双子の妹がいました」

「「え・・・・？」」

「幼い頃のことなので詳しくは覚えていませんが、姉さんは私達が五歳の時に亡くなったそうです。その頃の私達にはすでに両親もいなくて、家族が段々減ってることに怯える私と真海と茜は兄さんに泣き付いてばかりでした・・・・。でも、そんなある日。茜が兄さんにこう聞いたんです」

『お兄ちゃんも・・・・あたし達を置いて、死んじゃうの？』

「それは茜だけではなく、私と真海も思っていることでした。すると兄さんはただ優しく笑ってこう言ってくれました」

『何言ってんだよ。俺は死なないし何処にも行かない。お前ら三人が幸せで笑えるようになるまで、ずっと守ってやるよ』

「とても、子供が言える台詞ではないな・・・・」

「流石は政志だね・・・・」

小さい頃から漢過ぎる政志にラウラとななせは苦笑する。

「確かに兄さんは、オタクで鈍感でどうしようもない馬鹿な人ですが、約束は最後まで守ってくれる世界で一番優しい自慢の兄さんです。ですから、どうか兄さんを信じて待っててください。それが、私達の気持ちだから」

無表情な天空が少し頬を緩ませて言ってるところからして余程政志のことを信頼していることが分かった。

「では、私もそろそろ帰らないといけないのでこれで失礼します」

ペコリと礼儀正しく一礼した天空は闇の中へと消えていった。

「ああいう困った人を放って置けないところ・・・ホント政志に似てるよね」

「フッ、そうだな」

天空の話しを聞いた後のななせとラウラにいつもの表情が戻る。よくよく考えると悲しんでいたことが馬鹿らしくなりヨイショと腰を上げた。

「それじゃあ、あたし達も政志を信じて待ってようか」

「例え名医が何を言おうが、政志は必ず私達の元に帰ってくる・・・

・それを私達は忘れていたようだ」

「うん。・・・・でも、気になることがあるの」

「何だ？」

「どうやって政志の脳細胞にダメージを与えたかだよ。脳細胞に傷をつける技術なんて聞いた事ないし、第一そんなものがあったとしても政志がやられるなんてこと事態が考えられない。それに、スカリエッティさんはみんながいたから言わなかったけど、クリスがあんな風になったのは多分・・・・細胞分解酵素を打ち込まれたからだと思う」

「細胞分解酵素・・・・？」

「本当はあたしが言ったらいけないことだと思うけど、状況が状況だから言うね。実はクリスは・・・・」

（ななせの説明タイム）

「っていうわけなの」

「・・・・そうか。あのクリストファーが不死とは・・・・」

ななせの説明を聞いたラウラは少し驚いた顔になったがすぐに納得した。

「どうりで糖尿病にならないわけだ」

「いや、問題はそこじゃないから」

的確なツッコミを入れたななせは話しを何とか元に戻した。

「つまり、どうして敵がクリストファーの弱点を知っていたか。それが気になるのか？」

「だって、そのことを知ってるのはあたし達だけだったし、それが敵に知られるなんて有り得ない」

どういう経路で知られたのかななせは腕を組んで考え始めるがラウラはそんな彼女に溜息を吐いた。

「今ここで悩んでも仕方ないし、今日はもう遅いから寮に帰るぞ」

「・・・・そうだね」

歩き出した二人は寮へと向かう。何処か納得いかないななせを見ていたラウラはふとあることを思い出した。

「ななせ。お前は、零段階加速（ゼロ・イグニッション）とやらを使うことはできるのか？」

「んー・・・・あれは、あたしでも無理かな。零段階加速（ゼロ・イグニッション）は使用しただけで勝負が決まるほどの戦術だからね。あたしが知ってる限り、出来るのは政志ぐらいだよ。でも、どうしてそんなことを？」

「今日それを使われて一瞬で後ろに回り込まれたんだ。白いアルケーとディアボロスに似た砲撃特化のガンダムを纏った女に」

ラウラがそう言うとななせは歩を止めて立ち止まった。そうとは知らないラウラは歩き続け、ななせはその背中を驚愕の表情で見てい

た。

「（零段階加速（ゼロ・イグニッション）を使った!?そんなはずはない!だって零段階加速（ゼロ・イグニッション）は政志と”あの子”が編み出した技で、見よう見まねでできるようなものなんかじゃ・・・それにアルケーとディアボロスに似た砲撃特化のガンダムって、まさかアインの・・・・!?）」

だが、ここでななせは考えるのを止めた。これ以上は駄目だと本能がそう告げたからだ。ブンブンと首を横に振ったななせはラウラの元へ走り駆けて行くのであった。

翌日の朝。一年一組の教室はざわめきを隠せなかった。理由は簡単、政志達男子四人が欠席しているからだ。ななせ達が教室に入った途端に理由を詰め寄ってきたが、本当のことを言うわけにもいかず、本部に戻っていると適当に嘘をついた。

「セシリアとシャルは、まだ来てないんだね・・・・」

残り数分で朝のＳＨＲが始まるというのに二人が来る気配が全く無い。やはりアル達のことを引きずっているのかと思ったななせとラウラが教室から出ると、

「セシリア、鈴・・・・」

ばったりと出くわした二人の表情は昨日と比べると随分ましになってはいたが、昨晩泣いてばかりいたのか目元が若干赤い。何と声を掛けたらいいのかななせとラウラは悩むが意外にも声を掛けてきたのはセシリアと鈴だった。

「あのね、あたし達さっき話し合ったんだけど・・・・やっぱり落ち込んでばかりいたら駄目だなぁって」

「惨めな姿を、クリスさんが目覚めた時に見られたら恥ずかしいですから。だから、私達もななせさん達同様に待つことにしました」

「・・・そっか。みんなもそれぞれ覚悟を決めたってわけなんだね」

「ところで、シャルロットはどうした？」

「さあ？でも、あの子なら大丈夫なんじゃない？根っ子はあたし達よりもしっかりしてそうだし」

「そうですわね」

そんな風に入り口前で談笑していると四人の脳天に衝撃が走った。

「もうＳＨＲの時間だ。さっさと自分の教室に入って席に着け馬鹿者」

出席簿による容赦の無い一撃を食らった四人は頭を抑えてそれぞれの教室へ駆け込んだ。千冬と帝。一年一組を支配する二人が教室に入ると生徒全員が着席し、千冬は教卓の前に立った。

「お早う諸君。今日は皆に転校生を紹介する」

千冬がそう言うと入り口のドアが開き、長い２本の三つ編みに色白の肌の少女が入ってきた。

「本日をもってＩＳ学園に転校してきた『天野遠子（あまのとおこ）』です。皆さん、よろしくお願いします」

一通り普通の挨拶をした遠子に拍手が向けられ、遠子は空いている席に座った。さてと、と一息いれて千冬がＳＨＲを始めようとしたその時。バタバタと誰かの足音が聞こえ、教室の入り口が勢いよく開けられた。

「お、おおおお織斑先生！！！た、たたた大変ですぅぅぅ！！！」

「落ち着け山田先生。流石の俺も何が言いたいのか予想出来ないぞ」

「一体どうしたっていうんだ？山田先生」

アホなことを言う帝をスルーして千冬が山田先生に問いかけると、

「そ、それが、転校生がもう一人ウチのクラスに来るらしいんです！！」

「もう一人だと？そんな話、私は聞いてないぞ」

「どうやら急なことだったようで、伝えるのに遅れたとのことです」

ここでクラス全員が疑問が思う。『ウチのクラス転校生が多すぎないか？』と。

「来るのには構わないが、その転校生はどうしたんだ？」

「さっき着いたとの連絡があったので、もうそろそろ来る頃だと思いますよ？」

「転校初日に遅刻とは、俺も舐められたものだな」

お前が副担任ってことは知らないだろ。と皆がツッコミを入れた。

「で、その転校生の名前は？」

「ええと確か・・・・」

「あー、もう完全に遅刻だよ！！」

寮から教室に向けてシャルは疾風の如く走っていた。昨日の夜、アルのことで泣きに泣いていたのだが、ルームメイトのラウラを見ているとそんな自分が情けなくなり、いつもの調子を取り戻したまでは良かった。それが朝の三時だということを除けば。

「ラウラもラウラで、どうして僕を置いて行っちゃうかな！？」

全力で走りながらも器用に言いたいことを言っているシャルには、寝る前にグスグス泣いていたルームメイトを起こそうか悩んだラウラの気持ちを考える余裕がなかった。学園の下駄箱で下履きから上履きに履き替えたシャルはすぐさま階段に向かおうとするが、そこで一人の少女を見かけた。黄と茶色の中間のような髪をポニーテールにした綺麗な顔立ちの少女は何処か困った様子で、ネクタイの色から同学年であることが分かったシャルは少女に声を掛けた。

「あの、どうかしたんですか？」

「あ、ごめんなさい。あたし今日ここに転校してきたばかりで、教室がわからなくて」

申し訳なさそうな表情になる少女の肌はとても綺麗で目も透き通っ

た色をしており、まるで人形のような容姿に女性であるシャルは一瞬だけ見とれてしまった。すぐさま正気に戻ったシャルはそれならと言ってその少女を案内することにした。

「それで何処のクラスなの？」

「ええと、確か一年一組だった気が・・・・」

「ホントに？じゃあ、僕と同じクラスだね」

新しいクラスメイトにシャルは顔をパァと明るくさせてその少女に自己紹介する。

「僕の名前はシャルロット・デュノア。君の名前は？」

シャルのその問いに少女は天使のような笑みでこう答えたのであった。

「あたしは朝倉美羽。よろしくね、シャルロット」

偽りの笑顔（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんm（＿＿）m

今更ですが今回の話に辻褄が合わない箇所があるかもしれませんが、
そこは作者の文才の無さが齎したことなので許してください

では、本文をどうぞ！！

偽りの笑顔

学園祭翌日。ＩＳ学園一年一組に新たな二名の少女がやってきた。一人は黒髪に長い2本の三つ編みの『天野遠子』。そして数分後、遅れて黄褐色の髪にポニーテールの少女が教室にシャルと共に入ってきた。すると、ななせ、ラウラ、千冬、帝の表情が変わった。

「はじめまして、朝倉美羽です。どうかよろしくお願いします」

ニコやかにクラスの皆に挨拶する美羽。シャルをはじめ、セシリア達一年一組の人間は美羽を拍手で歓迎するが数名の人間の顔は険しく、ななせにいたっては信じられないような表情だった。

「嘘・・・・どう、して・・・・」

そんななせに美羽は微笑みを向ける。ななせにとってはそれが逆に怖く感じて顔色が段々悪くなっていく。だが、転校生を迎えることで夢中のクラスメイトは彼女のそんな変化に気づくことはなかった。

「・・・じゃあ天野、朝倉。これよりＳＨＲを始めるから空いてる席に着け」

千冬がそう言うと遠子は後ろの席に向かって歩き出したが、美羽はななせの隣の席が空いてるのを見ると表情を明るくさせた。俯いているななせでは美羽が席に座り、ななせに話し掛けた。

「久しぶりね、ななせ。長い間会えなかったけど、あなたが元気そうで良かった」

「ッ！！・・・・美羽、ちょっと来て」

屈託の無い笑みで美羽がそう言った途端、立ち上がったななせは美羽の手を引いて教室から出て行った。優等生であるななせのイキナリの行動にクラスがざわめく中、ラウラは二人が出て行ったドアを睨んでいた。

「（あの朝倉という女・・・・髪の長さは違うが、昨日の女と同じ顔だった。それに、あの言い様からして、朝倉とななせは顔見知りのよ・・・・待て。『朝倉』でななせと面識があるということは、まさかあの女が・・・・！！）」

「どうしたのななせ、授業が始まるっていうのにこんなところに連れて来て」

美羽が手を引いて連れて来られたのは学園の屋上。どのクラスもSHRをしているということから当然二人しかいない。

「・・・・ねぇ、美羽。美羽は”あの日”から今日まで、何処で何してたの?」

明るい表情の美羽とは打って変わってななせの表情は険しい。

「あぁ、実はね・・・・あたし、つい最近まで病院のベッドで眠ってて・・・・何故だか知らないけど、記憶が曖昧なの」

「え?」

「何で病院のベッドで寝てたのか、何で眠ってる間に”三年”も経ってたのか・・・・全くわからないの」

「・・・・・」

「でも、ななせ達がここにいるって聞いた瞬間、いてもたってもいられなかった。だから、ここの編入試験を受けて会いに来たってわけ」

ところで・・・・。と美羽が言い出すとななせの体中の細胞が凍りついた。次に言うことが何か分かり、何て答えるか考えるが、美羽はそんな時間を与えなかった。

「”マサシ”はどうしたの?」

今すぐにでも会いたいと言わんばかりの表情にななせは戸惑う。

「アルと龍鳳とクリスも同じクラスだって聞いてたんだけど、今日は休みなの？」

「えっ？・・・・う、うん、そう。今日から政志達、軍の仕事で暫くの間学園から離れることになっちゃって・・・・」

言えるはずがない。政志、アル、龍鳳、クリスの四人共が病院のベッドで寝ているなどと。

『自分以外の幼馴染が全員倒れているなどと』

「そう、なら仕方無いね。でも、まさか皆が軍に入っちゃうなんて、正直信じられないかな」

「・・・・どうして？」

「だって、あの馬鹿（アル）と龍鳳は兎も角、軍嫌いのななせとクリスが入るなんて・・・・マサシにいたってはアレだし」

「い、色々あって・・・・」

「色々ねぇ・・・・。まぁ、それはいいとして、あたしの機体は今何処にあるの？」

「？」

「だから、『”あたしの”ダブルオー』は今何処にあるのって聞いてるの」

『あたしの』の部分を強調して言う美羽の表情は変わらず笑顔であ

る。これになせは、何とか苦笑いを作って誤魔化した。

「ええと、その、色々あって・・・・」

「また色々ぉ？あなたって昔からハッキリしないところがあったけどまだ直ってなかったの？」

「ご、ごめん・・・・」

「はぁ、もういい。お互い、まだ聞きたいこととか色々あるだろうけど、そろそろ授業が始まる頃だから教室に戻りましょ？」

手をひらひらと振って美羽は屋上の出口へと歩を進める。長年の再開を本来なら喜ぶべきなのだが、ななせにはそれが出来なかった。

「・・・・変わったね、美羽。昔は、政志の前以外では笑わなかったのに・・・・」

呟きは誰にも聞こえることなく、予鈴の音に掻き消される。どうにもならないモヤモヤを胸に抱きながら、ななせも屋上をあとにするのであった。

自分の受け持つ授業がない合間。千冬と帝は誰もいない校舎裏に来ており、千冬は普段からは創造できないほど深刻な表情を浮かべていた。

「どういうことだ・・・・何故、美羽が生きているんだ?」

「落ち着け、千冬。まだあれが本人と決まったわけではない」

「お前と違って私は何度もあいつらと会ってたんだ。その私が見間違うはずもない・・・・だが」

「昨日の今日だからな」

「あぁ・・・・どうして政志達が倒れた翌日にいきなり政志達のクラスに入ってきたんだ?」

千冬はＳＨＲ後に美羽がどういう経路で学園に来たのかを調べたが、編入試験を受けてきたことしか分からなかった。遠子については新学期が始まってから聞かされていたが、美羽については本人が来るまで本当に知らなかったようだ。

「死んだはずのあの方の娘が、俺達が担任するクラスに来るとは・・・・それで、朝倉は専用機持ちなのか?」

「いや、どうやら違うらしい」

「そうか・・・・。なら、俺達は当分の間様子見ということか」

「そうなるな」

何も確信が持てない二人はこれ以上の検索は無駄だと判断し、歯痒い気持ちになりながらも解散する。しかし、この時二人は気づかなかった。二人を影から見つめる者がいることに。

「というわけで、暫く政志達とは連絡が取れないので・・・・はい、よろしくお願いします」

時は昼休み。ななせは電話を片手に溜息を吐く。隣にはラウラがいて通話が終わった様子のななせに声を掛けた。

「シエル大佐には何て伝えたんだ？」

「うん。とりあえず、適当な理由つけて旅に出たってことにしたよ」

「・・・そんな馬鹿みたいな嘘を信じる方も信じる方だが、それを信じさせる政志達も政志達だな」

「・・・ごめん」

馬鹿すぎる軍の仲間を恥ずかしく思いながら謝罪の一言を入れる。

「それにしても良かったのか？せめて将官の者には本当のことを――」

「連邦が誇る元帥と大将が一日で墜ちたなんて事実・・・言えると思う？」

「・・・・・」

「もし事実が連邦全体に知れ渡ったら、連邦は間違いなく崩壊する・・・だから、ラウラも」

「誰にも言わなければいいのだろ？そのぐらい私でも分かるさ」

暗い表情のななせにラウラは普段はあまり見せない柔らかな笑みを見せる。自分がどれだけ目の前の少女に気を使わせているのかが一目で分かり、内心情けなく思うも出来るだけの笑顔をラウラに返した。

「じゃあ、皆待ってるだろうし学食に行こっか」

「そうだな」

二人は箒達がいるであろう学食に向けて歩き出す。すると道中で、ラウラがふとあることを思い出した。

「ところで、朝倉は何処に行ったんだ？」

「えっ、美羽・・・？美羽なら、シャルとなんだか仲良くなってたから一緒にいるんじゃないかな？」

「・・・そうか。ならいいんだ」

ラウラは悩んだ。昨日の白いガンダムの操縦者が美羽と同じ顔だったということをなせに言うべきか。しかし、今のななせには多大な負担が掛かっている。政志のこともそうだが、連邦のこともそう。政志達が眠っている今、実質連邦の全責任は彼女にあるのだから。それに加え、美羽が来てからというものななせの表情が何処か浮かないものであるのをラウラだけは見逃してはいなかった。

「？よくわからないけど、美羽とは仲良くしてあげてね。ちょっと我儘なところがあるかもしれないけど、根は優しい子だから。それとコレ。忘れないうちに渡しておくね」

ポケットからデータチップを取り出したななせはそれをラウラに渡した。

「なんだこれは？」

「ちょっとオーライザーの強化装備を考えてて、ある程度形になっ

たからラウラの意見が聞きたいの」

「今のままでも十分だと思うが・・・・わかった。一応目は通しておく」

「うん、お願いね」

そんな話をしていると二人の視界には学食が入っていた。ドアを潜って中に入ると政志達四人を除くいつものメンバー、一夏、箒、シャル、鈴、セシリア、ヴィンセントがいるのを見つけるが、その六人に加えてもう一人。そのもう一人を見た瞬間、ななせの表情が変わった。

「マサシって実は、ああ見えて可愛い物とか好きだったりするの」

「本当かよ?政志はアニメ一筋だと思ってたんだけどな」

「ねぇ、美羽。前から気になってたんだけど、アルの趣味って何なの?」

「アルの趣味?絵描きよ。特に似顔絵」

「「「「「「「・・・・・・(あの馬鹿(アル)にそんな清純な趣味があったとは・・・・・)」」」」」」」

「でもあの子、人に許可も取らずに描いたりするから、誰か描かれてたりするかも」

ニヤニヤと意味有りげに美羽はシャルに視線を向けると、シャルの顔が赤く染まっていく。

「ど、どうして僕をアルが描いたりするのさ!?」

「だって、シャルロットってアルの弩ストライクだもん」

「そ、そんな・・・・／／／／」

耳まで真っ赤になったシャルにテーブルを囲んでいた全員が微笑ましくなる。完全に皆と馴染んでいる美羽になせは安堵と共に不安も感じた。しかし、今は安堵の方が大きいようで溜息を吐きながらも皆が座っているテーブルに向かって歩き出した。

「もう、駄目だよ美羽。アルにだってプライバシーはあるんだから」

「ななせ。それにボーデヴィッヒさんも」

「ああ・・・・隣、座らせてもらうぞ」

一言いれたラウラとなせは美羽の両隣に座った。すると、美羽はラウラの顔を覗き込んだ。

「ねぇ。折角だからボーデヴィッヒさんもファーストネームで、ラウラって呼んで良い？」

この問いにラウラは一瞬悩むが、シャル達の様子からして自分以外は全員名前で呼び合っているのであろうと考えた。

「・・・・好きにしろ」

「うん。ありがとね、ラウラ」

笑顔で一言礼を入れた後、美羽は再びシャル達との談笑に戻った。

「「・・・・・」」

何処にでもありそうな光景のはずが、ラウラとななせには違和感を感じざるを得なかった。笑いながら友達と話し合っているだけなのに、どうしてそう思ってしまうのだろうか？いくら考えても答えは出てくることはなく、結局二人は最後まで会話に参加することはなかった。そして、食事を済ませ一同が席を立とうとした瞬間。

「そう言えば、午後にＩＳの実習があったけど、良かったらあたしと模擬戦してくれない？」

いきなりそんなことを言う美羽の視線は箒へと向けられていた。

「許可が下りるかどうか分からないが、それでもいいのなら私は構わないぞ」

「ありがとう。あたしも暫く戦ってないから腕が鈍ってないか不安で・・・・だから」

『楽しみで仕方無いわ』

この時、美羽の口角は確かに邪に上がっていた。

偽りの笑顔（後書き）

次回、七話から名前が出ていた美羽の実力がとうとう明らかに！？

そして、次々回は超絶急展開にするつもりなので、お楽しみに！！

朝倉美羽（前書き）

設定をミスった気がＭＡＸの俺を誰か殴ってくれ・・・・それと後書きに目を通してくれると嬉しいです

では、本編をどうぞ！！

朝倉美羽

「というわけで千冬さん。箒と模擬戦がしたいんで許可下さい」

えっ？と言われた千冬のみならず、授業に参加していた一組と二組の生徒から声が漏れる。実習開始早々、千冬と帝に寄って来た美羽の発言に千冬は目を丸くして黙り込み、どうしようか困惑するが、

「いいだろう。俺が許可する」

勝手に許可を出す帝に千冬は眉を寄せるがそれはスルーされた。あっさり許可が出たことにラウラ、なな せ、一夏、箒、シャル、鈴、セシリア、ヴィンセントは驚く。

「折角だから天野。お前もどうだ？」

「ええと、私は結構です・・・・」

急に話を振られた遠子は両手を振って否定の意思を表した。美羽は清々しい表情でうーん、と身体を伸ばした後、箒に視線を向ける。

「じゃあ、許可も下りたことだし、さっさと戦(や)りましょ」

「あぁ。私も、戦(や)るからには本気でいくぞ」

集団から離れ、アリーナ中央へ向かう美羽に続き箒も足を進めるが、ななせが声を掛ける。

「箒、ちょっと待って」

「どうした、ななせ？」

「その・・・今からでも遅くないから、美羽と戦うの・・・止めた方がいいよ？」

「？何を言い出すかと思えばそんなことか。だが安心しろ。お互い使うのはただのＩＳだ。怪我をすることなんてないさ」

「いや、あたしが言いたいのはそういうことじゃなくて・・・」

結局、箒はななせの話を最後まで聞くことなく美羽が待つ場所へと向かっていった。

「どうしたんだよ、ななせ？そんな顔して」

箒の背中を不安げに見つめるななせに一夏は疑問符を浮かべる。多くの生徒の中、一人だけ浮いた表情をしているななせは目に入りやすいのか、一夏に続き、ラウラ達も寄ってきた。

「いや、ちょっと・・・箒が心配で」

「心配って、あんたねぇ。どれだけ美羽が強いか知らないけど、あの子が使うのは打鉄（うちがね）。紅椿とは機体性能が天と地の差よ？」

呆れ雑じりで言う鈴の意見にラウラ達も同意する。正直な話、美羽が勝つことなど誰も想像しておらず、打鉄で紅椿の絶対防御を抜くような攻撃が出来るとも思えない。だが、次のななせの発言で、そんな考えはすぐに消えることとなる。

「みんな知らないようだから言っておくけど、美羽はあたしよりも強いからね」

・・・・・。

「「「「「「「「えっ？」」」」」」」」

「小さい頃に美羽と何度も模擬戦したことあるけど、勝てたことなんて一度もなかった・・・あの子と互角に渡り合えるのは、あたしの知る限り」

『政志ぐらいだよ』

「♪～」

機嫌良く鼻歌を歌う美羽は打鉄を展開させた後、手を握ったり閉じ

たりさせていた。これから始まる模擬戦を心から楽しみにしているであろうその表情を、箒は怪訝そうに見ていた。

「・・・・随分と嬉しそうだな」

「それはそうよ。こんな風に戦うのは三年ぶりなんだから」

両者の手には互いの機体のメインウェポンが握られており試合開始の待っていた。

「あぁ、そうそう。ねぇ、お姉さんは元気？」

「えっ・・・・一体どうしたんだ急に？」

何でそんなことを聞くのか分からない箒だったが、次の瞬間。

「ななせから聞いてない？あたしのパパが死んだの・・・・”あなたのお姉さん”のせいよ？」

「――――！？」

くっきりと三日月をかたちどった口からは放たれた言葉は狂気を孕んでおり箒は後ずさりする。

「どうしたの、箒？そんなに震えちゃって？別にあなたが篠ノ之束の妹だからって、殺そうなんてこと考えてないわよ？」

ついさっきまでは美羽の笑顔を直に見れていたが今はもう見れない。それほどまでに箒の心は恐怖に支配されていた。

「あぁ、それと言い忘れてたけど。あたしこう見えて結構強いから、死なないように気を付けてね」

『天使』のような笑みで『死神』のようなことを言う美羽の周囲を黒いオーラが漂っているように見える。ななせが言っていた言葉の意味を今理解したが、時すでに遅し。

「では、はじめ！」

帝の号令と共に美羽は高速で箒へと突っ込む。しかし、未だに驚愕の表情を浮かべている箒が動く気配はない。

「私は・・・私は・・・・」

そんなことを呟く箒の目の前では美羽が刀型ブレードを背中の後ろまで振りかぶっていた。ニヤリと口を歪める美羽は動く気配の無い箒の脳天目掛けて、躊躇なく刀型ブレードを振り下ろす。だがその刹那、アリーナに一人の男の声が響いた。

「しっかりしろぉぉぉ、箒！！！」

「！！」

一夏の声が聞こえた瞬間、さっきまでの暗い表情が嘘だったかのように、瞳の闘志を戻し頭上で雨月と空裂を交互に構えて美羽の攻撃を防いだ。

「一撃で終わらせるつもりだったんだけど、どうやら無理だったみたいね」

「どれだけお前が強いかは知らないが、私と紅椿をあまり舐めない方がいいぞ！」

「へぇ、言うじゃない。だったら」

交えていたブレードを再度振り上げた美羽はブレードを握る力を一層強めた。

「証明してみなさいよ」

嫌な予感がした箒は今回は受け止めることなくブレードの軸から逸れて斬撃をかわした。音速に近い速度で振り下ろされたブレードは地面に叩き付けられ、その衝撃はアリーナの壁にまで伸びて行き一本の道を作った。

「中々良い判断ね。もし受け止めようとしてたのなら、刀ごと真っ二つになってたかも」

「何なの、今の一撃は・・・・？」

「あたしの気のせいじゃなかったら、アリーナが揺れたわよ・・・・」

シャルと鈴が目を見開いて言う。正確には目を見開いているのはそれを見ていた全員であり、口をポカンと開けている。

「まさかアレも、政志みたいな力技でやったことなのか・・・・？」

一夏は以前政志と戦った時のことを思い出した。完全な力技で斬撃やら突きを飛ばす人間離れしたチートっぷりを。美羽がやったのもそれと同じなのかと思ったが、ななせがそれを否定する。

「ううん。身体能力的には美羽はあたしと同じぐらいだから、それは違うよ」

「だったら、どうして・・・・」

「多分だけど・・・美羽は打鉄のシールドエネルギーを全部機体の出力に回してると思うの。そうでなかったら、打鉄であんな威力の一撃が出せるはずがない・・・・」

「ちょ、ちょって待ってください！仮にそうだったとしても、さっき渡された打鉄のシステムをそのように変えることなど――」

「美羽には出来るんだよ。例え始めて触る機体でも、美羽に掛かればどうってことない。なんせ、『疑似太陽炉』と『ツインドライヴ』

の理論も、全部美羽が考えたものだから」

明らかにされる美羽の神業に一同は言葉を失う。

「それだけじゃない。美羽はＩＳのコアも、疑似太陽炉も作り出すことだって・・・・」

つまりそれはガンダムを作り出せるということ。バグキャラと言われても過言ではないステータスを持つ少女、それが朝倉美羽。彼女がどうして政志達と共の軍に入らなかったのか疑問に思っていたラウラ達は、戦闘がどうなっているのかを完全に忘れていた。改めて見ると、両者のＩＳは無傷だったが操縦している人間は違った。箒は息が上がっているが、美羽は涼しい表情だった。そして、それを見るななせの目がスゥと細まる。

「完全に遊んでるね、美羽・・・・・・」

「意外とやるじゃない。ちょっと見直したわ」

「くっ・・・・！」

美羽の攻撃を避けることで精一杯の箒に反撃する余裕なんて無かった。機体性能は明らかに箒が有利だが、如何せん操縦者のレベルが違いすぎる。

「一つ良いこと教えて上げよっか。あたし今シールドバリアーと絶対防御をカットしてるから、一撃でも当てれれば勝てちゃうよ？」

「なッ！？正気かお前は！！絶対防御を切って、もし攻撃が当たったりしたら――」

「死ぬかもね。でも、心配しなくていいわ。あなたはあたしに傷一つ付けることなく負けるから」

そう言った美羽は上空へと飛翔し始める。その後を追おうと箒が飛び立った瞬間、クルリと美羽は体を反転させ進行方向を上空から箒へと変えた。いきなりのことで箒は反応しきれず、美羽が放った回し蹴りを脇腹に受けて地上へと叩き付けられる。

「がはッ・・・・！！」

内臓が押しつぶされる程の痛みだったが、箒は気を失うことは無かった。すぐさま立ち上がり美羽がいるであろう上空を見上げるが、その姿は見えなかった。晴天ということもあって空は澄んだ青と真っ白の雲で支配されていた。美羽が何処に行ったのか周りを見渡して探していると、

「箒、そこから離れて！！！」

観客席からななせの叫びが聞こえ、それと同時に紅椿から警報アラートが鳴る。

「まさか・・・・ッ！」

バッと空を仰いだ箒の視界に小さな黒い点が入った。点は序々に大きくなっていき、それが美羽だと分かった時には彼女の箒へと向かう速度は打鉄の限界を超えていた。『重力』と『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』が生み出す速度で行う超高速奇襲戦術『メテオ・ドライバー』。文字通り隕石の如く落下する美羽はブレードの切っ先を箒へと向けており、どれだけの高度から行ったのか打鉄の装甲が赤く燃えていた。箒が避けようが避けまいが今の美羽がどれほどの威力を誇っているのかは一目瞭然で帝は舌打ちを鳴らす。

「ちっ・・・全員頭を伏せろ！！」

帝が観客席にいる生徒に向けて声を張る。初めて聞く大声に驚くがそれほどのことなのだろうと理解し言う通りに動いた。シャル達も言われるがまま頭を伏せるがラウラとななせは突っ立ったままアリーナの中央を向いていた。

「何をやっている箒！早くそこから離れろ！！」

「不味い！こうなったら、あたしが・・・・！！」

一歩も動こうとしない箒を助けまいとななせがディアボロスを展開させようとしたその時。彼女の隣を白い影が通り過ぎていった。

「えっ？」

だが、そんな風に驚いている間にも美羽は着実に箒がいる地上へと距離を詰めており、箒はただ自分を目指して落ちてくる美羽を見つめていた。

「・・・・・」

直撃したら幾らＩＳを操縦しているとはいえ無事では済まないのは馬鹿でもわかる。しかし、箒は動かない。余りにも違い過ぎるレベルの美羽に目を釘付けにされている今、彼女の耳には何も届かない。そして、美羽が高度１００Ｍを切った瞬間。再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行い、遂に音速を超えた。

「いくわよ。メテオ・ドライバー」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行ったのとアリーナが揺れたのはほぼ同時だった。ステージから尋常ではないほどの衝撃が観客席まで広がり、生徒達は悲鳴を上げる。爆発でも起きたかのような煙はアリーナの外にも漏れるほど。どう考えても打鉄が出せる威力ではない。

「箒は・・・箒はどうなったの！？」

揺れと砂煙が収まった十数秒後。シャルは箒の安否を確認しようとステージを覗く。そこにはステージ全体にも及ぶほどの巨大なクレーターがあり、その中心にはブレードを地面に突き立てている美羽の姿があった。

「愛する人のピンチに颯爽と駆けつけるなんて、まるで白馬の王子様ね」

美羽の視線の先ではステージの端で白式を展開させた一夏が箒を抱えて美羽を睨んでいた。

「お前・・・箒を殺すつもりだっただろ」

「そんなことないわよ。現にあなたが助けてるし」

殺気を含んだ瞳の一夏に対して美羽は笑顔を見せる。美羽がよいしょとブレードを地面から抜くと粉々に砕けてしまった。

「んー、流石に武装がもたなかったかな?でも、一応手加減したつもりなんだけど・・・やっぱり、普通のＩＳじゃあたしについてこれないかぁ」

はぁ、と溜息を吐いた美羽は打鉄の装着を解除し出口へと歩き出した。アリーナに居る者全ての視線が彼女に刺さるが全く気にすることはない。だが、出口の手前で美羽は立ち止まって一人の少女へと目を向けた。

(次はあなたと戦ってみたいわ。勿論、本気でね)

「ッ!?」

突如頭に美羽の声が聞こえ、ラウラは目を見開く。しかし、美羽はラウラ達がいる真向かいの位置におり叫ばない限り声が聞こえることはない。

「・・・気のせいか」

そう自己完結させるラウラ。そんな彼女を遠くから見つめる少女がおり、ラウラの反応を見てクスリと笑った。

「巷で噂の戦神（ヴァルキリアス）、ラウラ・ボーデヴィッヒ。彼女が純粋種として覚醒するのも案外早いかもね」

静まり返ったアリーナに吹いた一陣の風が少女の三つ編みを靡かせる。

「あら、ななせじゃない。どうしたの？そんな恐い顔して」

「・・・・・」

アリーナの外へと出るための暗い廊下。授業中にもかかわらず教室に戻ろうとしていた美羽を待っていたのは目を細めたななせ。その表情はいつものものではなく、軍人のそれであった。

「・・・何で、あんな危険なことをしたの？」

「もう、別にいいでしょ？箒に怪我はなかったんだか――――」

「あたしが言ってるのは美羽のことよ！！」

シールドバリアーと絶対防御を切った状態で大気圏近くから落下すれば無事で済むはずがない。何故無傷なのかは分からなかったが、そんな下手すれば死ぬようなことを平気でやってのける美羽を許すことが出来なかった。

「いくら強くて頭が良いからって、身体は普通の人間なんだから・・・無茶なまねはしないで」

今にも泣きそうな顔でななせは美羽に懇願する。だが、そんななせを見た美羽は、

「確かに、普通の人間なら死んでるわね。でも悪いけどあたし、あなた達みたいに”普通じゃないの”」

ニタァと邪悪な笑みを浮かべる美羽の瞳に黄金の輝きが生まれる。暗闇の中で神々しく光る美羽の瞳を見たななせは言葉を失い目を見開く。

「明後日の日曜午後十二時。寮の裏にある灯台に一人で来なさい。そこであなたの知りたいことを全て話してあげるわ。・・・・序でに、マサシの目を覚ます方法もね」

ＩＳ学園から遠く離れたフランスの教会。天井は女神が描かれたステンドグラスで覆われており、その下では二人の少女が密会していた。

「本当なの？破壊神が墜ちたって情報は」

「私も詳しくは知らないが、情報源はＩＳ学園にいる〝奴〟からだ。間違いないだろう」

サファイアの瞳を持った銀髪の少女がそう言う。彼女の髪型は二本の三つ編みをつむじの辺りに上げて結ったもの。まるで西洋の歴史映画に出てきそうな美しい白人だった。

「そう・・・・」

「脳量子波から予想して、犯人は『聖神（パラディン）』の『冥府神』だそうだ」

「冥府神・・・・オシリスか。これまた大物が出てきたね」

「しかも、冥府神は太陽炉搭載型のガンダムを有しているらしい。それもあって、手が出せないそうだ」

「あっち側にはＩＳがあるっていうのに、こっち側には無いって不公平だと思わない？」

首を傾げるとツーサイドアップに結ったゆるい天然パーマの髪が揺れる。蜂蜜色という綺麗な髪を持っているのだが某ターミネーターが掛けていそうなサングラスのせいで可愛らしさが激減している。

「何を言う。お前には『ランスロット』と『紅蓮弐式』があるだろう？」

「確かに持ってるけど、まだフロートユニットが完成していないから空での戦闘は勿論、最終調整もまだだから地上でも碌な戦闘が出来ないよ。ていうか、紅蓮はただ預かってるだけだよ？」

「いつになったら私達の機体が完成するのやら・・・まぁ、それはいいとして、お前はどうするんだ？」

銀髪の少女の問いにサングラスの少女は表情を真剣なものへと変える。

「とりあえず行ってみるよ、ＩＳ学園に。だから・・・」

「分かった。後は任せろ」

銀髪の少女はそれだけ言って教会を後にした。扉が閉まり、一人になったサングラスの少女は、サングラスを外して天井に目を向ける。

「まさか久しぶりの再会がこんな形になるなんてね・・・・素直に喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか・・・・でも」

フッと鼻で笑った後、少女の表情は険しくなり怒りを露にする。持っていたサングラスは粉々に砕け散り、その持っていた手で壁を殴りつけた。

「もし政志に何かあったら・・・・絶対に許さない！！」

殴られた壁は吹き飛び巨大な穴を形成した。壁の埃が舞う中、少女の瞳は輝きを放っていた。だがそれは、黄金とは違い、燃える炎のような赤だった。

朝倉美羽（後書き）

政志「何だ・・・この展開は？」

アル「無茶苦茶過ぎて読者も困ってるぞ」

龍鳳「つか、政志が喋るん一ヶ月ぶりやな」

クリス「本編じゃボク達そっちのけで話が進んでるからね」

政志「一体次回に何が起きるのやら・・・不安で仕方ねぇよ」

アル「最近シリアスばかりでネタ回が無いから俺の出番が少ないんだよなぁ」

龍鳳「お前、自分が笑い担当って自覚あったんか？」

クリス「そんなことはどうでもいいとして、どうする政志？」

政志「はぁ・・・なら、ＰＶもそろそろ五十万いきそうだし、『アレ』やるか？」

ア・龍・ク「「「アレって、まさか・・・！？」」」

政志「つうわけで、第二回最強王者決定戦もとい人気キャラ投票を始めることを、ここに宣言する！！！」

アル「待て待て待てィ！！前回は奇跡が起きて九人の読者が強力してくれたけど、今回も上手くいくなんて保障は無いんだぜ！？」

政志「安心しろ。その時は俺が何とかする」

龍鳳「やたらと漢らしく言うとるけど、いくらお前でも無理なことはあるからな！！」

クリス「ルールは簡単。この小説の好きなキャラを三人選んで感想に書いてください。一番好きなのが三ポイント、二番目に好きなのが二ポイント、三番目に好きなのが一ポイントだよ」

アル「クリス！お前何で協力的なんだよ！？」

クリス「えー、だってボク前回五位だったもん。だから、今回は一位を目指そうかなって。それに、もしアルが一位になったらシャルるんが」

『アル、一位おめでとう。ご褒美にボクのこと、好きにしてもいいよ？／／／／』

クリス「ってなことを言ってくれるかも」

アル「ヨッシャアアアアアア！！絶対一位になるぞゴラアアアアアアアア！！！」

龍鳳「いや、ほれはないやろ」

政志「一位になったキャラは、そいつを主人公とした特別番外編を書くから、やってもらいたいシチュエーションがあったら投票と一緒に書いてくれ」

アル「例えば、『結婚式』とか『好きなアニメの最終回を再現しろ』とか、とりあえず好き勝手考えてくれていいから」

龍鳳「面倒臭い作業かも知れへんけど、気が向いたらでええから頼むわ」

クリス「人気投票はＰＶが五十万を突破するまで続けるからよろしくね！！」

作者「ご協力、お願いします（土下座）」

Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｏｆ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ（前書き）

キャラ投票はまだまだやってるので、ドンドン入れてください（必死）！！

では、本編をどうぞ！！

「・・・やっぱり無いね」

放課後。ななせはすぐに寮に帰ってノートパソコンを開いた。検索するのは世界中の病院の患者リスト。美羽が言ってたことが正しければ、どこかの病院に『朝倉美羽』と言う名前の少女が入院していたことが出るはずなのだが、何度検索しても見当たることはなかった。

「明後日の午後十二時、一人で来い・・・・か」

正直ななせは悩んでいた。平気で友人を殺そうとする者の言う通りにするべきなのかと。しかも一人で来いと言ってるところが更に怪しさを引き立てている。だが、美羽は政志達の状態を知っていた。昨日の出来事を美羽が知るはずもないし、朝彼女は政志が何処にいるかと聞いていた。一体何処から何処までを信じていいか分からない美羽の言葉に惑わされるななせだったが、彼女の中ではすでに答えは決まっていた。

「行くしか、ないんだよね・・・・。でも」

覚悟を決めたななせはパソコンの画面を切り替え、ある機体のデータを映し出した。

「もしものためにも、早くこれを完成させないと・・・・今のラウラとダブルオーじゃ、美羽には勝てない」

カタカタッと素早くキーボードを打つ音だけが部屋を支配するので

あった。

翌日、土曜日の十時過ぎ。ラウラは政志達がいる病室に向かっていた。昨日の放課後もシャル達と共に訪れたのだが、やはり気になってしまい、また来てしまったのだ。

「（朝倉のあの強さ・・・・ななせが言ってた通りだったな）」

昨日の模擬戦での美羽をラウラは悍ましく思っていた。政志級の技術を持っていながら、何とも表現しようのない狂気も持っている。実習の後、アリーナから出て行ったのを最後に美羽は姿を眩ました。次の日が土曜ということもあり気にかける者は少なかったが、ラウラは違った。

「（ななせの様子がおかしいのも昨日からだ。あの二人、何かあったのか？）」

そんなことを考えていると政志達の病室が見えてきた。しかし、その病室の前に佇む一人の少女がいた。

「ここが例の四人が眠ってる病室かぁ・・・・」

少女がボソッと呟いた。制服からしてＩＳ学園の生徒だと判断出来るが、ラウラにとって見かけない少女だった。金髪碧眼、巨乳、容姿端麗と完璧美人としか言いようがない。更に頭の左側に青い蝶の髪飾りを付けており、それがより一層少女の素質を醸し出している。そんな少女がどうして病室の前に居るのか気になったラウラは、少し警戒しつつも話掛けることにした。

「おい、お前。一体ここで何をしている？」

「えっ？」

少女は声がした方を向く。そこではラウラが警戒の眼差しで自分を見ており、少女はあからさまにテンパり始めた。

「べ、別に、中にいる人に用があるとか、そういうんじゃないんだからねッ！！」

「・・・何で私にキレる？」

「じゃっ、そういうことで！」

ビシッと片手を上げた少女はそのまま走り去って行った。呼び止めようと思った時にはすでに角を曲がっており、どうせただの馬鹿だろうと決め付けたラウラは溜息を吐いた後、病室に入っていった。

そこには四つのカプセルがあり、一つ一つに政志、アル、龍鳳、クリスの四人が入っている。だが、その内の一つのカプセルのそばにラウラの親友がいた。

「シャルロット・・・・」

アルのカプセルの横で、シャルがパイプ椅子に座ったまま眠っていた。昨日、シャルは帰り際に「後少ししたら帰るから、皆は先に行ってて」と言い一人病室に残った。どうやらそのまま眠ってしまい、一夜を病室ですごしたようだ。カプセルに伏せて眠っており、目元が赤く袖が濡れていた。

「こんな良い女を泣かせるとは、お前も罪な男だな」

カプセルの中で眠っているアルの両目は痛々しく包帯で覆われている。スカリエッティ曰く、目が見えなくなるかもしれないとのことだ。それを考えた時のシャルの気持ちがどうなのかはラウラにも分かった。近くにあった毛布をシャルに被せたラウラは、政志が眠っているカプセルに近寄り、そっと触れた。

「お前も、さっさと目を覚ませ・・・・。そうしないと、私となせは・・・・」

ポツリと赤い瞳から涙が零れる。いくら気を強く持っても、元に戻る可能性が一番低いのが政志であることに変わりはない。

「頼むから・・・・もうベッドに潜り込んだりしないから・・・・目を、覚ましてくれ・・・・！」

六人がいる空間を、少女の啜り声が支配する。

時は少し遡って、数分前。

「ふぅ、危なかったー・・・・」

建物から出た少女は後ろをラウラが追って来ていないのを確認し安堵の息を吐いた。

「あれって、最近噂の戦神(ヴァルキリアス)だよね？もし戦いになってたら、機体の無い今じゃ勝てっこないってば・・・・」

やれやれと言った表情の少女は懐から携帯を取り出して電話を掛ける。

「もしもし？あたしだけど、例の四人がいる場所が分かったわよ」

【へぇー、流石は諜報のプロ。良く分かったね】

「別にこのくらい大したことじゃないわよ。・・・・そんなことより、あたしはいつまで”あんたがした変装”を続けなきゃいけないのよ？」

【えー？折角可愛く美人さんにしてあげたんだから、もうずっとそのままでいいんじゃない？】

「あのねぇ・・・・本当ならあたしはまだ中三なのよ？それを態々年齢まで偽って・・・・」

【ごめん、ごめん♪でも、それも来年までだから安心していいよ】

「ッ！？それって、つまり・・・・」

【最後の一人を見つけ次第、こっちもＩＳ学園に行くから。それまでは頑張ってね～♪】

通話が終了し、少女は携帯をポケットに戻す。

「聖神（パラディン）の連中も馬鹿だよねぇ。・・・・だって」

首元を右手で掴んで引っ張ると、ベリッと薄いマスクのようなものが外れた。中から現れたのは先ほどよりも幼く見える可憐な黄色の瞳を持った顔。金髪も鬘だったようで、今ではピンクになっていた。

「”光”が”闇”に勝てるわけないのにね」

呆れた笑みを浮かべた少女はそのまま何処かへと歩いて行った。

誰が何を望もうと
誰がどう足掻こうと
世界の裏では確実に何かが動く
それがどんな闇を抱えているかは分からない

・・・しかし、所詮最後は

『強い者が生き残る』

潮風が吹き、海の香りを運んでくる灯台。海面が日光を反射してキラキラと輝いている。そこでは一人の少女が海に視線を向けて立っていた。

「どうやら、ちゃんと言われた通り一人で来たようね。ななせ」

振り返る動作と共にポニーテールが跳ねる。灯台の角にいる美羽は笑顔で、ゆっくりと歩み寄るななせは険しい顔つきだった。

「昨日一日中部屋に篭りっきりだったようだけど、何してたの？」

相変わらずの笑顔でそう質問した美羽だったが、その笑顔は消えることとなる。ななせがディアボロスを展開し、醜く黒光りするＧＮバスターライフルの砲口を美羽に向けてたからだ。

「美羽が素直に本当のことを言うなんて思ってないよ。だから・・・・力づくで聞かせてもらうから！！」

「・・・ぷっ、あはは。あははははははっ！！」

敵意を丸出しにし、ななせが本気であることを確認した美羽はお腹を抱えて豪快に笑いだした。それでも、ななせが美羽に向ける視線は変わることなく、武器を向けたままである。

「いいわ。あなたがあたしに勝てたら全部教えて上げる」

美羽がそう言うと、彼女の全身を紫の光が覆った。光が止むのと同時に、美羽はＩＳを展開させていた。白と紫の装甲で両肩の後ろには羽型のバインダーがある。背中からはコーン型スラスターがあり、そこから真っ赤なＧＮ粒子が放出されている。

「まっ、あなたがあたしに勝つなんて有り得ないけど」

ビームサーベルとライフルを手に持った美羽は余裕の表情を見せる。だが、ななせには負けられない理由がある。

「あたしだってこの三年間何もしてなかったわけじゃない！昔のあたしと一緒にしてたら、痛い目見るよ！！」

「面白い。やれるものならやってみなさいよ」

「言われなくても・・・・ッ！」

二人は上空へと飛翔し、数秒向かい合った後、目の前の敵へと突っ込んでいった。

「ディアボロス、琴吹ななせ！行きますッ！！」

「アイズガンダム、朝倉美羽。目標を死滅する」

一方、一夏と箒は寮の部屋にいた。しかし、そこに思わぬ訪問者が現れた。

「やはりあの時の少年と少女か。気は進まないが、斬らせてもらうぞ！」

仮面の男、ブレイドは部屋の扉をこじ開けると同時にマスラオを展開し、メインウェポンを一夏と箒に向けて構える。

「くっ、やるしかないのか・・・・！いくぞ、箒！！」

「あぁ！わかった、一夏！！」

それぞれのＩＳを展開させた二人は窓を突き破って外に飛び出し、ブレイドもその後を追うのであった。

同時刻。政志達のところにいたラウラ達が昼食を取ろうと施設から出たその時。

「貴様ら、性懲りも無くまた来たのかッ！！」

「言いませんでしたか？あなたは私が殺すと」

ラウラが怒り声を上げる先にはデスティニー、レジェンド、ストライクフリーダム、インフィニットジャスティスを展開させたスレイヤーズの四人がいた。

「セシリア、あんたの機体ってもう直ってるの！？」

「完全にとは言えませんが、戦える程度になら！」

「どっちにしろ、僕達が不利ってことに変わりはないよね！」

ラウラ、シャル、鈴、セシリアもＩＳを展開し即座に戦闘体勢に入った。

「たかが代表候補生がウチらに勝とうなんて、中々良いセンスのジョークだね」

「ＫとＲはイギリスと中国をやれ。フランスは私がやる」

「・・・・分かった」

マドカの指示を聞いた輝火と恋は頷く。シャル達と違い、こちらは負ける気がしないと言った表情をしており、余裕が垣間見える。それぞれの相手を引き連れシャル達は飛翔するが、ラウラとアリスは向き合ったままだった。

「質問に答えろ。この間のあの白いガンダムの女・・・・あいつは一体何者なんだ？それに、お前が私のクローンとはどういうこ――」

「知る必要はありません。あなたはここで死ぬのですから」

そう言ったアリスはバイザーを解除し、眼帯をむしり取った。ラウラの眼帯の下に隠れているのとは正反対の銀色の瞳。それを見たラウラも自らの眼帯を外した。赤と金のオッドアイと青と銀のオッドアイ。真逆の色を持つ二人は、その瞳で互いを見詰め合っていた。

「言って置きますが、今回は前回のように邪魔が入ることはないので、最初から本気でいかせていただきます」

「なら私も一つ忠告しておこう。今の私に、手加減など期待するなよ」

「始まった始まった♪ふふっ、皆あたしの思った通りに動いてくれるから本当に助かるわ」

学園内のとある場所。一人の少女が機嫌が良さそうに笑顔を見せる。だが、彼女の足元には血塗れの少女が横たわっており、彼女のものであろう専用機はボロボロになっていた。

「う、ぁ・・・・」

「五月蝿い。雑魚は黙ってて」

無慈悲にも少女は頭を踏みつけられグリグリさせられる。抵抗しようにも指一本も動かせないほどに傷つけられておりどうしようもなかった。

「本当は、出来ることなら誰も殺したくないんだよ?だって、あたし達・・・大事な、大事な『友達』だからね。アハハハ・・・・ハハハハハハハハハハッ!!!!」

Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｏｆ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ（後書き）

我ながら、凄い展開にしてしまったと後悔してます・・・・

真の死神（前書き）

みんな～、スーパー駄文タイムの始まりだよ～♪（真剣に申し訳ございません）

後、キャラ投票のご協力をお願いしますｍ（＿＿）ｍ

では、本編をどうぞ！！

真の死神

「ファングッ！！」

青空の下、叫びと共に牙の名を冠する兵器が射出される。ななせは六基のファングを美羽へと向かわせ、先端にビームサーベルを発生させた。美羽は右手に持ったＧＮバスターライフル（ディアボロスのものより威力は低いが連射性に優れている）でファングを一基ずつ撃ち落していく。一基、二基、三基。だが、残りの三基は撃ち落すことが出来ず、舌打ちを鳴らした美羽は左手にビームサーベルを持ち横薙ぎに払った。

「生意気なのよ。あなた程度が自立兵器を使うなんて」

一度しかビームサーベルは振られていないのにもかかわらず三基のファングは両断された。ビームサーベルを振るう速度が速すぎるため、三回の攻撃が一回に見えてしまったのだ。

「（くっ、やっぱり実力ではあっちの方が上か・・・・！だったらＧＮステルスフィールド、展開！！」

ディアボロスのバックパックとサイドアーマーが展開させる。そこから夥しい量のＧＮ粒子が放出され三対の赤い巨翼を形成し、ななせを中心とした空間が赤く染まった。この空間内ならディアボロス以外のビームは拡散され、一気にペースを自分のものに出来る。勝利に近いものをななせは確信するが、美羽は全く動揺していなかった。

「なるほど、確かにこれはちょっと厄介ね。・・・・でも」

自分がいる空間を一通り見渡した美羽は一枚ディスプレイを呼び出し片手で素早く操作する。操作を終えた美羽は何事もなかったかのように左手のライフルをななせに向けトリガーを引いた。

「粒子波長をあなたの機体と同じにすれば、どうってことないのよ」

「ッ！？」

放たれたビームをななせは驚きの表情を浮かべたまま回避する。美羽がディスプレイを操作したのは五秒にも満たない。彼女はそれだけの時間でディアボロスの最強武装を無力化したのだ。

「・・・強いとは分かってたけど、ここまでチートだとは思わなかったよ・・・・」

ステルスフィールドが意味を成さないのなら最早展開させる理由はなく、バックパックとサイドアーマーを元に戻した。空間は赤から青に戻り、ななせは苦い表情を浮かべる。

「（長期戦は明らかにこっちが不利・・・・ここは一かバチかトランザムで――――）」

「戦闘中に考え事なんて、豪く余裕があるのね」

右サイドから声が聞こえバッと横を向く。そこにはビームサーベルを振り下ろそうとしている美羽の姿があり、ななせもすぐさま右腕からビームサーベルを発生させ防御する。二人のビームサーベルが火花を散らし合い、弾かれたように離れると同時に、美羽はバインダーを脇下へと移動させる。

「中々戦えるようにはなったみたいだけど、あたしを倒せるのはマサシだけよ！」

「まだ勝負がついてないのにそんなこと言うなんて、気が早いんじゃない！？」

強気に返答しながらバインダーから放たれたビームを避け、ななせは両手にバスターライフルを持ち連結させる。

「トランザムッ！！」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

ディアボロスの漆黒の装甲が赤く輝きだす。ツインバスターライフルの砲口を向けられている美羽は逃げる素振りを見せずバインダーを肩越しに展開させた。

「いいわ！だったら次の一撃で決着を付けてあげる！！」

バインダーの間にフィールドが発生し粒子が圧縮されいく。二人とも本気で勝負を付けるようで、機体の粒子の大半をこの一撃に費やしている。

「ＧＮツインバスターライフル、発射ァッ！！！」

ツインバスターライフルから強大な粒子ビームが放たれる。同時に、バインダーの間からも深紅の輝きが放たれ互いの一撃同士がぶつかり合う。その衝撃は空間が歪むのではないかと思うほどであり、赤い閃光が周囲に散る。

「はあああああああああッ！！！！」

雄叫びと共にななせが放った粒子ビームが均衡を崩し押していく。いくら威力が高かろうとトランザム状態のディアボロスの一撃には及ばない。

「ふっ・・・・」

自分に迫る赤い閃光に美羽は鼻で笑い、そのままビームは美羽に直撃し爆発を起こした。トランザムを解除し、ななせはアイズの破損した装甲が舞う黒煙の中から落下する美羽を両手で抱えて地上に降りるのであった。

「約束通り聞かせてもらうよ。何から何まで全部」

「どうした!?本気を出すとか言ってた割には大したことないじゃないか!!」

「ちぃっ!ツインドライヴだからと調子に乗って・・・・!!」

ＧＮツインランスとアロンダイトのぶつかりが火花を生む。両手で握っていたアロンダイトを左手だけで持ち、右手をラウラの腹部へと伸ばす。掌から輝きが生まれ、パルフィマキーナが火を噴こうとする。だが、一度食らったものを二度も食らうラウラではなく、ＧＮフィールドを展開することでそれを防いだ。

「だったらこれはどうです!!」

アロンダイトを上へと放り投げ、後ろに下がりながらビームランチャーの砲口をラウラへと向ける。ＧＮフィールドと高出力ビームが激突する。機体性能で負ける気はしなかったが、戦闘の長期化を避けたいラウラは舌打ちを鳴らした。

「（私は兎も角、シャルロット達のＩＳではこいつらには勝てない・・・・!）」

今にも増援に向かいたいが、目の前の敵がそれを許してはくれない。ＧＮフィールドから機体に衝撃が伝わる中、ラウラは止むを得ずトランザムを使うことにした。

「トランザム・・・・!!」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

装甲が赤く輝き出しＧＮフィールドの強度が上がる。それを見たア

リスはビームの照射を止めてビームランチャーを引っ込める。投げたアロンダイトがクルクルと上空から落下し、それをキャッチしたアリスは瞬時加速（イグニッション・ブースト）でラウラへ突っ込む。

「今こそ見せて差し上げましょう。これが私の『力』・・・・・」

銀の瞳がラウラを捉え、憎悪の火が灯る。

「発動・・・・『凍る世界（アイス・エイジ）』ィッ！！」

アサルトライフルから銃弾が放たれるが、それはビームに掻き消され蒼き翼に届くことはない。ドラグーン八基のオールレンジ攻撃を避けながらシャルは攻撃するが全く相手にならない。正確に言えば、相性が悪すぎた。実弾しか装備していないラファール・リヴァイヴと多彩なビーム兵器を搭載しているストライクフリーダム。機動性も圧倒的に劣っている中、未だに被弾していないところから見てシ

ャルの実力が伺える。

「このストライクフリーダムを前に未だに無傷とは、やるじゃないか」

シャルの技術を前にしたマドカの口から賞賛の声が漏れる。ドラグーンを背部に戻しながら、両手で握っていたビームライフルを連結する。銃口が輝くのとシールドエネルギーが急減するのはほぼ同時だった。シールドバリアー、装甲、絶対防御を突破し、衝撃がシャルを襲い表情が苦痛で歪む。

「がはっ！！・・・・ま、負けるわけには・・・・」

「必死で足掻くところ悪いが、これで終わりだ」

全武装を展開させたマドカの眼前にマルチロック用の小型ディスプレイが現れ、何十ものロックオンカーソルがシャルを捕捉する。そして、十三の銃口に輝きが生まれる。

「・・・・弱い」

ビームサーベルによって衝撃砲が両断される。肩のアーマーが爆発したことによって大きく体勢を崩した鈴に、恋はビームサーベルを懐へと突き刺す。

「そう簡単にやられるわけないでしょ！！」

間一髪のところで、鈴はもう残った衝撃砲から不可視の砲弾を放った。だが、それは恋の超人的な反射神経によって防がれる。至近距離で衝撃砲を防がれたのにも驚いたが、極めつけは防いだ方法だった。

「衝撃砲を掴むって、どんな神経してんのよ・・・・！？」

恋の右手の掌からは煙が立っている。不可視であると同時に音速の早さの砲弾を掌で受け止めるなど常人には不可能。目の前で驚く鈴に恋は蹴りを腹部に放った後、シールド外縁に設置されたビームブーメランを投げつけた。ビームブーメランは残りの衝撃砲を破壊し、クルクルと回転しながら恋の元へと戻った。

「（機体性能が云々以前の問題に、実力が違い過ぎる！！）」

鈴は双天牙月を手に持ち恋が動くのを待った。下手に先に動いても勝てる気がせず、奇跡を願って恋が隙を見せることを願う。しかし、恋は頭で考えて戦うわけではなく、本能で戦っている。戦闘中は相手を倒すことしか考えておらず、身体はその願いを叶えるために動

くだけ。そして今も。

「・・・・・」

鈴が動かないのを見た恋は、二本のビームサーベルの柄を連結させた後、ただ真直ぐ突っ込んだ。自らに迫ってくる恋に対して、鈴は双天牙月を振り下ろし、恋はビームサーベルを振るう。

―斬！―

「嘘・・・・！？」

鈴の手に握られているのは柄だけになった双天牙月。刃はビームサーベルに切り落とされ虚しく地上へと落ちて行く。

「・・・・恋の、勝ち」

灰色と青のビットが空を翔る。しかし灰色の方が圧倒的に数が多く青は次々と撃ち落されていく。

「それでも代表候補ぉ？もっと頑張ろうよ～」

「くぅ・・・・ッ！」

八基の小型ドラグーンによって四基のＢＴ兵器が破壊された。レジェンドはブルー・ティアーズの完全上位互換と言って良いほどの性能を持っており、セシリアの勝機は限りなく闇の中にあった。諦めまいとスターライトｍｋＩＩＩを輝火へと向けて撃つが全てビームシールドによって防がれる。

「あー、つまんない。こりゃ一番弱いの引いちゃったかな？」

はぁ～、と大きな溜息が輝火の口から漏れる。その目は最早セシリアを敵と見ておらず、視線も上の空である。これにはカチンと来たセシリアは残った二基のビットからミサイルを放つ。その瞬間、輝火は面倒臭そうに背部ユニットから大型ドラグーンを射出する。大型ドラグーンに内臓されているビーム砲は九門。計十八門から放たれたビームは壁に似たものを形成し、ミサイルを輝火から守った。

「ごめんね～、強過ぎて」

弱者を見下す目でセシリアに蔑笑を送り、背部ユニットに残っていた八基の小型ドラグーンが射出される。大小十基のドラグーンはセシリアを包囲し、計三十四のビーム砲がセシリアに向けられた。

「その程度か、少年ッ！」

ブレイドが振り下ろしたビームサーベルを一夏は雪片で受け止めるが、力負けして吹き飛ばされてしまう。歯を食いしばり負けじと二段階瞬時加速（ダブル・イグニッション）でブレイドとの距離を再び詰める。

「落ち着け一夏！零落白夜は、太陽炉搭載型に効果がないんだぞ！！」

箒の声は聞こえているはずなのだが、一夏が返答することはない。

「うおぉぉぉぉぉぉっ！！」

雄叫びと共に全身全霊で雪片が振り下ろされる。それをブレイドは冷たい眼差しで見ており、身体を逸らして回避した。雪片は空を切り、大きな隙が出来た。不味いと思った箒はすぐさま空裂を振るおうとするが、

「・・・斬る価値も無し」

ブレイドは手に持っていたビームサーベルではなく、蹴りを叩きこんだ。すると、視線を一夏から箒へと替えてビームサーベルの矛先を向ける。

「悪いが私に愚か者を切る気は無いのでな。次は君に相手をしてもらおうか」

「俺が、愚か者って・・・どういうこ――」

「そんなことも分からぬ者はここから立ち去れ！戦う通りを見失っている今の君に、ＩＳを駆る資格も、剣を握る資格も無いッ！！」

「で、あなたは何が聞きたいの？」

腰を下ろし、灯台に凭れ掛かった美羽がななせに問う。戦闘の意思は無いようだが、何故かＩＳは展開したままだったので、ななせもそうしている。ななせは立った状態なので座っている美羽を見下ろす形になり、美羽はそれが気に食わないのは不愉快な表情だ。

「・・・じゃあ、まず一つ目。美羽がこの間まで病院にいたってのは嘘だよね？」

「ええ、そうよ。何処に居たかは、言わなくても分かるわよね」

「やっぱり、亡国企業の機体は・・・・」

「全部あたしが作ったものよ。でも、連中の操縦者って雑魚ばかりだから、どんなに良い機体作っても全部あなた達に壊されちゃったわ」

今まで連邦が、政志達が戦ってきた亡国企業のＩＳは全て美羽が作ったものだと知ったななせの顔が強張る。そんな表情の変化を見た美羽は口元に小さな笑みを浮かべた。

「ついでに言うけど、企業の連中をここに何度も襲わせたのも、ＶＴシステムをエクシアのデータに書き変えたのも、『マサシをやったのも』、ぜ～んぶあたしよ？」

「どうして・・・そんなことしたの？」

「さぁ～、どうしてだと思う？」

クスクスと笑う美羽の目の前では、ななせが肩をプルプルと震わせ

て握り拳を作っていた。ミシミシと装甲が聞こえるほど力を入れており、どれだけ怒りを蓄えているのか一目瞭然である。

「政志は・・・・どうやったら元に戻るの？」

今にも殴りそうな衝動を抑えつつ、一番聞きたかったことを聞いた。しかし、

「・・・・ぷっ、あはは!!あはははははははっ!!!!残念ね、ななせ。もうマサシは、あなたの知ってるマサシは、この世にいないわ」

「えっ・・・・？」

「マサシはあたしの膨大な脳量子波をモロに受けたのよ!?目を覚ますことはあっても、記憶は全部消えてるに決まってるわ!!」

「脳量子波って、まさかあなた・・・・!?」

「言っとくけど、超兵なんかと一緒にしないで」

よいしょ、と立ち上がった美羽の琥珀色の瞳に黄金の輝きが生まれる。

「あたしは人類を革新へと導く存在・・・・『イノベイター』よ」

次の瞬間。ななせは目を見張ることになる。美羽の身体が機体と共に塵になっていき、潮風が海へと連れ去って行く。自らの身体の変化に美羽は驚くことなく、ふ～ん、といった感じの表情を浮かべる。

「どうやらあたしは用済みのようね・・・・まぁ、別にいいけど」

「ちょ、待って!!一体どういうことなの!?」

訳が分からない状況になせは困惑し、美羽に問いかけるが美羽の身体はもう半分以上消えていた。五秒もしない内に首から下はすでに無くなっており、残った口の部分は最後に三日月型に歪んだ。

「せいぜい頑張りなさい。死神に命を刈り取られないように・・・・」

その言葉を最後に美羽は完全に消えた。何が何だか分からないなせはただ呆然と立ち尽くすことしか出来ない。だが、突如背後に気配を感じ、なせは力無く振り返った。そこには美羽と共に転校してきた天野遠子が立っていた。

「どうしたの、琴吹さん?そんな浮かない顔して」

「・・・あなたは確か、天野さ――――!?」

なせの言葉が途切れる。最初は遠子の顔しか見ていなかったが、彼女の右手に持つものを見た途端、全身の細胞が凍りついた。遠子の足元には血塗れの女性がいて、遠子の右手に髪を掴まれていた。血で髪も赤く染まっていたが、その中で微かに見える”水色”が女性の正体を明らかにさせる。

「楯、無・・・・せんぱい・・・・・?」

「・・・・・・」

震える声で楯無の名を呼ぶが返事は返ってこない。そんななせの表情を見た遠子が邪悪な笑みを浮かべると、彼女は自分の前に楯無をポイッと投げ、懐から拳銃を取り出し楯無に向ける。

「止め、て・・・・止めてぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ななせが叫ぶのと、遠子が引き金を引いたのはほぼ同時だった。しかし、それよりも早く、突如表れた紫の影が楯無を連れ去って凶弾から守った。

「ヴィンセントッ！！」

「わりぃ、ななせ。場所が分かんなくて遅れちまった」

レグナントを展開したヴィンセントは、楯無を抱きかかえたままななせの隣に降り立った。楯無をそっと地面に下ろすが、衰弱し切って、出血が酷い。今すぐにでも病院に連れて行かねば命に関わるのは目に見えていた。ヴィンセントは楯無をこんな姿にしたであろう遠子に目と殺気を向ける。

「最初っから怪しいと思ってたが、とうとう尻尾を出しやがったな！俺は知ってんだぜ！？『天野遠子』って名前の女なんか、本当は存在しないってことがよぉ！！」

「・・・へぇ、”あたし”のことを嗅ぎ回る鼠がいるとは思ってたけど、まさかもう一匹いたなんてね」

「もう正体バレてんだよ・・・・！良い加減、素顔見せやがれ！！『朝倉美羽』ぅッ！！！」

「えっ！？」

怒りを露にするヴィンセントと、驚きの表情を浮かべるななせ。そんな二人を前に遠子は、右手で顎の下を、左手で三つ編みの片方を掴んで引っ張った。べりべりっ、ばさっ、という音と共に、顔に付いていた薄いマスクみたいな特殊メイクと、黒の三つ編みが付いた鬘を取った。中身は黄褐色のショートカットで、琥珀色の目を持った少女。髪の長さは違えど、それは正しく『朝倉美羽』だった。

「あ～あ、バレちゃった。流石は連邦の魔獣、腕だけでなく鼻も利くようね」

口調も美羽のもので、ななせはすぐ本人だと分かった。目の前の美羽から感じる”何か”は先ほどの美羽のものより濃くて恐怖を抱くほどのもの。

「どう？偽者とはいえ”あたし”に勝った気分は？」

「偽、者・・・・？」

「正確に言えば、あたなが戦った『朝倉美羽』はあたしのＤＮＡを元に作った生体端末。あの子は急ピッチで作ったから、戦闘能力まではあたしと同じには出来なかったのよねぇ・・・・」

う～ん、と顎に手を当てる美羽だったが、まあいっかと自己完結させる。完全に美羽はテンションがななせとヴィンセントと異なり緊張感が感じられない。

「じゃあ正体もバレちゃったことだし、ここは無難に”死んで”も

らおうかな？」

美羽の胸元が白い輝きを放ち、全身を包む。光が消えると、美羽は純白のガンダムを纏っていた。アルケーとディアボロスに酷似した形状を持つ美羽の『シリウス』。それを見たななせの表情は苦くなる。

「その機体、やっぱりアインの・・・・」

「ええ。あなた達がスローネの発展型を使ってたから、態々合わせてあげたのよ。まっ、性能はあなた達のと比べ物にならないけど」

そう言うと背部右側に装備されているＧＮランチャーの砲門をななせとヴィンセントに向ける。砲門に輝きが集まりだし、粒子をチャージしているのが分かった。ななせとヴィンセントは砲撃に備えるが、それを見た美羽は意外そうな顔をする。

「へぇ、あたしと戦う気なんだ。堕天使と魔獣が、死神に勝てるわけないのに」

溜息を吐くと、美羽の顔つきがガラリと変わり戦士のものとなる。その変化は美羽が本気であることを意味しており、ななせとヴィンセントの額に一筋の冷や汗が流れた。

「朝倉美羽とシリウス・・・・行くわよ」

死神が、堕天使と魔獣の”命”を・・・・・”刈る”。

真の死神（後書き）

今期のアニメ、俺得過ぎるんだけど・・・・

Ｗｈｉｔｅ　Ｄｅａｔｈｓｃｙｔｈｅ（前書き）

人気投票まだまだ受け付けてるのでご協力お願いします！！

では、本編をどうぞ（涙）

White Deathscythe

「・・・・・」

少年は暗闇の中にいた。そこには何も無く、少年がただ蹲っているだけ。彼は闇から抜け出せないのではない、抜け出さないのだ。何もかもどうでも良く感じた彼は目を閉じて、再び眠りにつくのであった。

「・・・どうして俺は、破壊の神になんかなったんだろう・・・？」

絶望というものは人によって重さがことなるもの。耐え切れない弱者にあるのは死に行く運命（さだめ）。これは、全てを破壊しようとした彼に与えられた『罰』、或いは『試練』なのかもしれない・・・。

「チャージ完了。ＧＮメガランチャー、発射」

全てを滅ぼす極光が放たれた。一目見ただけでもディアボロスのツインバスターライフルと同じか、それ以上の威力を誇っているのが分かる。舌打ちを鳴らしながらヴィンセントは、ななせと地面に伏せている楯無の前に出てＧＮフィールドを展開する。

「ぐぅっ・・・・！！」

ＧＮフィールドで防いではいるものの衝撃までは緩和することが出来ず、身体が悲鳴を上げる。ビームの照射が終わるとヴィンセントはＧＮフィールドを解き、彼らを見た美羽の表情が関心を浮かべる。

「今のを防ぎきるなんて、結構硬いのね。まっ、それも関係無くなるんだけど」

美羽の眼前に一枚のディスプレイが現れ、片手で操作し始めた。高速で打ち込む指が彼女の持つ技術の高さを物語る。三秒後、操作を終えたディスプレイは消え、美羽は両手にビームサーベルを握って突っ込んだ。

「上等だぁッ！楯無を頼むぞ、ななせ！」

ヴィンセントも美羽に向かって駆けて行く。だが、ななせに分からなかった。美羽が一体何の操作をしたのかが・・・・。しかし、そんなことを考えている間にもヴィンセントは右手のクローを束ねて美羽へと突き出していた。美羽は足で右腕を蹴り上げて軌道を逸らし、刺しを回避する。その際、ビームサーベルを振るって右手に付いていた五本のファングを切り裂いた。

「確かに強ぇ・・・・けどなぁッ！！」

レグナントの大型ＧＮキャノンが展開される。この至近距離で曲げ撃ち可能の粒子ビームを避けることは出来まいと考えたが、美羽は動じることなく鼻で笑った。

「この程度であたしとシリウスを墜とそうだなんて、舐めるのも良いとこだわ」

砲門が輝くと同時に美羽を球状のバリアが包む。放たれた粒子ビームは光の壁に弾かれ青空へと消えていった。

「ＧＮフィールド・・・・だと・・・・・！？」

驚愕の表情を浮かべるヴィンセントを無視して、美羽は後退しながらＧＮランチャーを向けて粒子ビームを連射する。ちぃっ！とヴィンセントは声を出しつつＧＮフィールドを展開させる。だが、この瞬間。美羽が小さく笑ったのをななせは見逃さなかった。

「まさか・・・・！？駄目、ヴィンセント！ＧＮフィールドは――」

ななせの警告がヴィンセントの耳に届くが、それと同時に”粒子ビームがＧＮフィールドを通過した”。粒子ビームが各部に被弾し装甲が飛び散る。両肩と両足、そして胸部から黒煙が上がり、顔が苦痛で歪む。

「どういうことだ・・・・？何で、ＧＮフィールドが・・・・」

何故粒子ビームがＧＮフィールドを突破してきたのかが分からず困惑する。そんなヴィンセントを見た美羽は呆れた蔑んだ視線を送った。

「あなた知らないの？ＧＮフィールドの攻略法を」

ＧＮフィールドは確かに強力だ。高濃度圧縮したＧＮ粒子を一方向、または全方位に展開する事で強固な防御フィールドを形成し、実体弾やビーム兵器を防ぐ事が可能になり、更に機体の前面に展開させる事で単独での大気圏突入も可能となっている。　だが弱点も存在する。一つは、ＧＮソードと言ったＧＮ粒子を纏った実体剣の攻撃。そしてもう一つは、『粒子圧縮率の解析』。

「お前、まさか・・・・！」

漸くヴィンセントは謎を解いた。最初の一撃を防いだあの時、美羽は何かの操作をしていた。しかし、一目見ただけ。それも、たった三秒の操作で粒子圧縮率を解析することなど出来るはずがない。そう信じたかったが、目の前の死神はそれを容易にやってのけた。

「だが俺は、まだ戦える・・・・ッ！！」

バッと両腕を美羽へと向け電磁アンカーを射出し、更にそこから子機が放たれた。計八つの子機は美羽の身体を絡めとり電流を流そうとする。今度こそ勝利を確信したヴィンセントだったが、その幻想はすぐに打ち砕かれた。

「行きなさい、ファング」

シリウスのバインダーからファングが射出される。その数は十四基

にも及び、先端にビームサーベルを展開したファングは全てのワイヤーを切断した。

「もう終わり？だったら、死ぬしかないわよね」

そのままファングをヴィンセントへと向かわせようとする。しかし、堕天使はそれを許さなかった。

「そういえばあなたがいたことを忘れてたわ、ななせ」

GNフィールドを展開して粒子ビームを防いだ。視線の先では、ななせがバスターライフルの銃口を美羽に向けており険しい表情で睨んでいた。

「誰も殺させやしない、例えあなたが相手であろうと・・・・ッ！！」

ヴィンセントの隣に並んだななせからは怒りが伺える。だが、ななせはすでにトランザムを使っている上、ファングを全て喪失している。ヴィンセントのレグナントも戦闘出来る状態ではなく、そんな二人を前に美羽は呆れて溜息を吐いた。

「あなたって相変わらず馬鹿ね・・・・あたし、あなたのそういう所、昔っから大ッ嫌いだったの！！」

ガチャンとGNランチャーを展開させる。ななせとヴィンセントはその砲門が自分に向けられていないのに気づき、美羽が狙おうとしているものに目を向けた。それは、地上で気を失って倒れている楯無だった。

「美羽止めて！楯無先輩があなたに何したっていうの！？」

「そうね。確かに、傷ついた人間を撃つのは気が進まないわ。・・・・でも、それであなたが苦しむのなら、あたしは喜んで引き金を引くわ。それに、そうじゃなくても・・・マサシに近寄る女は全て殺すッ！！」

狂気の叫びと共に粒子ビームが楯無に向かって放たれた。ななせとヴィンセントは動くが明らかに間に合わない。無慈悲にも、粒子ビームは着弾し全てを飲み込んだ。ヴィンセントは口を開けたまま閉じることが出来ず、ななせの目から涙が零れる。目の前の現実が信じられない二人の表情を美羽は満足そうに見て粒子ビームの照射を終えた。しかし、楯無が居たところに視線を移すと、

「・・・ちっ。まさかこのタイミングで邪魔するなんて」

眉を寄せて舌打ちをする。彼女が望む光景は、灯台ごと楯無が消滅しているもの。だが、楯無は無事だった。彼女を守ったであろう”緑”の装甲を持ったＩＳを駆るのは、濃い茶色の髪を持った青年。

「もう止めろ朝倉。こんなこと、あの方が見たら悲しむだけだぞ」

「あの方ってパパのこと？でも残念ね。パパはもう死んでこの世にいないのよ、逢沢先生」

「どうやら、口で言っても無駄なようだな・・・・。千冬、お前は更識を連れてここから離れろ」

帝は後ろにいる千冬にそう指示する。楯無を抱えた千冬はコクリと頷き、その場を後にしようとするが、数歩駆けた所で立ち止まった。

「・・・死ぬなよ、帝」

「当然だ。俺を誰だと思っている？」

二人は、互いに背を向けたまま伝えることだけ伝えた。千冬と楯無が離れていくのを美羽は面白くなさそうに見ており、ＧＮランチャーの砲門を再び向ける。

「困るのよ。勝手にステージに上がりこんで、役者を連れて行くなんて――――」

「なら、お前の言うステージもこれまでだ」

粒子ビームを撃とうとした美羽の目の前に帝が現れた。今の幻騎士の装甲は”黒”となっており、右手の指に展開させたミラージュソニックを振り下ろす。美羽は即座にビームサーベルを握り、自らに迫る刃を受け止めた。

「やはりその機体・・・お前があの時の女だったか」

「ええ、そうよ。でも、まさかこんな風に邪魔してくるなんて思ってもいなかったわ」

「今の俺は教師、生徒を守るのは当然だ。それに、お前との決着がまだだからな」

「あ～・・・そんなこと言ったわね、あたし」

ふと、帝は何かを察知してミラージュソニックを引いて美羽と距離

を取る。すると、さっきまで自分がいたところに十四基のファングから放たれたビームが通過した。

「その反射神経、人間にしては大したものね」

口では褒めているが目は完全に見下していた。そんな美羽の反応に帝は気にすることなく、千冬が走っていった方向を見ていた。すでに遠くまで行ったのか後ろ姿は見えない。心の中で安堵の息を漏らした帝は再び視線を目の前の敵へと戻した。すると、幻騎士の装甲が一瞬だけ赤く発光し、次の瞬間には武装が変わっていた。

「近接特化武装『炎帝』・・・確かそんな名前だったかしら?それ」

美羽の口から面倒臭いと言わんばかりの溜息が吐かれる。彼女のIS、シリウスは砲撃特化の機体で近接武装がビームサーベルしか配備されていない。だが、彼女に敗北の文字など存在しない。あるのは敵を死滅させることのみ。

「まぁいいわ。三人纏めて相手して上げるからさっさと来なさい」

「ほぅ、随分な自信だな。お前一人で俺達”三人”に勝てるとは思えないが?」

「フフッ、あなたも面白いこと言うわね。満身創痍の二人に、ななせよりちょっと強いぐらいの人間が一人増えたぐらいで、あたしに勝てる?笑わせないでよ」

美羽の目がスゥと細まりシリウスの翼が広げられる。

「このシリウスにとって、敵が一人増えようが増えまいが関係無いところを見せて上げるわ」

それぞれの翼に四つのオレンジの輝きが生まれ収束していく。帝も以前戦った時には見たことのなかった武装だったのでより一層警戒を強くしていた。

「GNアルテミス、発射」

白き翼から八つの粒子ビームが放たれた。威力はビームライフルより少し強そうだが、特に変わった特徴は見受けられなかった。三人は斜線上から離れ回避行動を取ろうとしたが、有り得ないことが起こった。ビームの軌道を変えて三人に向かいだしたのだ。一瞬、レグナントのものと同じ性質なのだろうと思ったが違った。どれだけ動こうが粒子ビームは軌道を変えて追って来る。

「追尾するビームなんて、聞いたことねぇぞ!?」

全く持ってその通りだ。いつまで経っても追尾を止めないビームを、止むを得ず両腕の装甲で受け止めた。受け止めたといっても無傷なわけではなく、装甲が吹き飛んだ両腕は火傷を負っている。ななせは両腕に展開させたビームサーベルで、帝はダイダロス?を振るって掻き消した。

「美羽、まさかそれって・・・・!」

「別にそんなに驚くことないでしょ?あの頃は無理だった粒子ビームの属性追加も、今のあたしにとってはどうってことないわ」

「永久追尾ビーム砲弾『アルテミス』・・・・本当に完成させるな

んて」

「でも、今のあなた達みたいに消されたりしたら追尾の意味が無くなっちゃうのよ。まっ、それなら”数”で圧倒すればいいだけの話なんだけど」

【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】

美羽の口角が上がると同時に純白の装甲が赤く発光する。それが何を意味するのか分かった三人の表情に焦りが現れるが、死神は容赦無く死滅の光を放った。

「ＧＮアルテミス、全弾連続発射」

「ヒリングッ！！貴様どういうつもりだ！？」

「どうって、この状況を見ても分からない？」

シャルは困惑していた。自分に向かってマドカの一斉砲撃が放たれる寸前、どこからか彼女に向かって巨大な粒子ビームが放たれた。回避のため砲撃を中断し、その御蔭でシャルは無事で済んだ。ビームが放たれ方角から現れたのはガデッサを展開させたヒリング。彼女の顔は美羽と全く同じであり、違う所があるとすれば声と髪だけだ。

「お前達は・・・・ドクターは亡国企業（我々）を裏切るというのか！？」

「裏切る？いいえ、違うわ。正確に言えば”見限る”のよ」

ニヤリと笑みを浮かべるヒリングは、ＧＮメガランチャーの砲門をマドカに向けながらそう告げるのであった。

「じゃ、そういうことだから殺すわよ？答えは聞いてないけど」

White Deathscythe（後書き）

あれ、美羽強過ぎじゃね？

・・・まぁ良しとしよう！

作者の妄想予告（前書き）

こんなの書く暇あったら本編書けって？ええ、全くその通りですね。

それはそうと、人気投票はまだ続けているので感想にてお待ちしております（ぼ、僕は諦めないからねッ！）。

では、駄文ですがどうぞ！

作者の妄想予告

「これが私の新しい力（ガンダム）・・・『ダブルオークアンタ』」

最強の力を手にした少女は、世界を滅亡から救うべく仲間と共に立ち上がる――

「『ガンダムサバーニャ』。アーノルド・ギアナ、狙い撃つぜ！」

「『ガンダムハルート』。龍鳳・クシュリナーダ、迎撃行動をとる！」

「『ラファエルガンダム』。クリストファー・トールギス、行くよ！」

始まりしは人を超越した存在・・・『神』同士の戦争。

「この俺の『シャイニング』に勝とうなんざ、千年早ぇんだよ！！」

「さぁて、あたし達も『クロスボーン』で出ようか」

「聖神（パラディン）が一人、『暗黒神エレボス』と『マスターガンダム』。勝てるものなら勝ってみな！」

最強（ガンダム）の称号を有する”光”に対して、”闇”も動き出す。

「行くよ。『ランスロット・コンクエスター』」

「私と『斬月』に斬れないものなんて、この世界に有りはしないんだから！」

「我らは『邪神（デスペラード）』。人類に”絶望”を与え、”破滅”へと導くものなり」

戦いは人の意思など関係なく、平和すらも呑み込んでいく。

「これがわたくしのナイトメア、『紅蓮』ですか？」

「お願いアルケー。あなたに意思があるというのなら、私に力を貸して！」

「殺してやる・・・・！僕とお嬢様の幸せを奪う奴らは、全員殺してやる！！」

十四の神々は、何を願い、何を想うのだろうか？

「あたしはただ皆と笑っていたかった・・・・それだけよ」

「嘘・・・お兄ちゃん、なの・・・・！？」

「誰かを守りたい。皆そう思って戦ってるだけだと思います」

「問おう。あなたが、私のマスターか？」

だが、この戦いを『彼等』が見逃すわけもなく、闘争の渦へと潜り込んでいく。

「何だか良く分からないけど、今のボクは機嫌がチョー悪いから気を付けた方が良いよ」

「アルが戦うっていうのなら、そこは僕の戦場でもあるんだから」

「俺は箒も、仲間も、全部守ってみせる！」

「ハーッハッハッハー！！行くぜぇ、これが反射と思考の融合だぁ！！」

「残念だったなぁッ！こっからは魔獣の殺戮タイムだ！！」

知性を持ったばかりに生まれてしまう争い。些細な誤解に気づくものなど誰も居やせず、物語は終幕へと加速する。

「お前が、父上と母上を・・・殺したっていうのかッ！？」

「この瞬間をもって、世界は我が手に墜ちた！」

「そんな、どうしてお前が・・・・？」

「悪いな真海。あたしの邪魔をするっていうのなら、容赦なく殺すよ？」

「彼の名はゼロ。この国の”黒”から生まれたカオスの権化よ」

「そう、だったな・・・・あいつは、もういないんだな・・・・」

悲しみが蠢く中、『破壊』と『創造』が乱舞し、神をも越える。

「ったく。またメンドクセェことになって来やがったぜ」

第二作『ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞～聖神ｖｓ邪神†十四人のイノベイター～（仮）』

期待はしないでね☆　ｂｙ作者

作者の妄想予告（後書き）

完全に分けワカメですね。

まぁ、今はこの話にもっていけるように本編を頑張りますわ。

では、次回こそは本編を・・・ッ！！

全ては哀しみの中へ（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません

そのせいで無駄に文字数が多いですが勘弁してください

では、本編をどうぞ！！

全ては哀しみの中へ

嘗て人間を越えた存在を生み出す計画があった。そのために様々な人間のＤＮＡが集められ、その数は一億を悠に超えた。計画の最終目標は全てにおいて絶対な能力（ポテンシャル）を持つ人工生命対の創造。計画は順調に進み、誰もが成功を確信していた・・・・しかし、ある問題が発覚して計画は中止となった。

「な、何だ”これ”は・・・・！？」

試験管の中では人間の形をしていたものが、成長と共に異形と変貌したのだ。ありとあらゆる薬品の投与とＤＮＡ操作は『彼等』から人間の姿を奪ったのだ計画の目標は最強の”人間の形”をした人工生命対の創造であり、決して化け物などではなかった。結果、一億の人口生命体の内人間の形をしたものは十数人だけだった。しかも、能力的には人間と大差なくただのクローンを作っただけで計画は終わった。その計画の名は、

『ＰＲＯＪＥＣＴ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』

「何、だと・・・・！？」

ラウラの視界に両断されたオーライザーの破片が入る。アリスは多段瞬時加速（ガトリング・イグニッション）で不規則な軌道を描きラウラとの距離を詰めた。振り下ろされるアロンダイトをラウラは避けようとするが”出来なかった”。右肩のバインダーが斬られたが幸いにも太陽路は無事で、狙いを外したのかアリスは舌打ちを鳴らした。

「ふむ、やはりもう少し微調整が必要ですか・・・・」

そう言ったアリスは一先ずラウラから離れてアロンダイトを握りなおす。ラウラもＧＮソード？を構えるが先ほど起きた現象が何なのか分からないままだった。避けれたはずの対艦刀を避けれなかった・・・・いや、正確には”動けなかった”。即座に思考を練り、原因を探るものの思い当たる節は無かった。”一つ”を除いては。

「（あの左眼。私の『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』の様に、ナノマシンを移植されていると考えるのが妥当か・・・・）」

金の左目が銀の左目を見据える中、アリスが再び動き出した。先ほどは大した破損が無かったが、次は真っ二つにされるかもしれない。視界がスローモーションになる感覚でラウラは必死に打開策を見つけようとしていた。

「（考えろ。そもそも私は何故動けなかったんだ？奴の左目は一体何を見・・・そうか！それなら私が”反応”出来なかったのも頷ける！！）」

グッとＧＮソード？を握りなおしたラウラは両目をスゥっと閉じる。目の前まで来ていたアリスはそれを自分への侮辱と捉え、眉間に怒りを刻みながら瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行った。そして、ラウラの左真横に瞬時加速（イグニッション・ブースト）したアリスは身体とアロンダイトの切っ先をラウラへと向けて突っ込んだ。

「ここで終われ！ラウラ・ボーデヴィッヒッ！！」

声が聞こえると同時にラウラは両手に持ったＧＮソード？の柄を連結させＧＮツインランスにする。自らの身体が貫かれようとしているのにも関わらず、両眼は未だに閉じられたまま。ラウラはただ、流れるような動作でＧＮツインランスを右手で持ち、左手を自分に向かってくるアリスに突き出した。刹那、アリスの動きが静止した。

「なっ、ＡＩＣ！？いや、そんなことより、どうして今の攻撃に”反応”を！！？？」

「その言い様からすると、私の予想はあながち間違っていなかったようだな」

開眼された赤と金に、青と銀が睨み付ける。アリスはＡＩＣから逃れようとするが、全く動ける気配はしなかった。

「まさか、あなたは一度見ただけで、私の『凍る世界（アイス・エイジ）』を・・・・！？」

「その左眼、『凍る世界（アイス・エイジ）』と言うのか？まぁ確かに、相手の反応出来ない『死角』を見ることが出来るのだから、間違ってはいないだろう」

「ッ！！」

どんなに反射神経が良くても人間には絶対に反応出来ない場所『死角』が存在する。アリスは左眼の『凍る世界（アイス・エイジ）』で見つけ、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰め”そこ”に攻撃をする。つまり、避けようと思っても動けないわけだ。しかし、それは対象が攻撃者を見ていたらの話。

「戦闘においてその能力（ちから）は強力だろうが、いくら相手の死角を突いても”相手が眼を閉じていれば意味が無い”ようだな」

普段人間は、視神経から得た情報を脳が分析し、そこから動神経に指令を出す。つまり、アリスはこれの『脳から出す指令を遮断』していたのだ。しかし、視神経が情報を得ることなく、脳から指令を出すわけでもなく、ただ”勘”で動いた場合どうなるだろうか。その答えは今のラウラが出していた。

「政志ほどではないが、私の勘も捨てたものではないな」

「ッ！！あなたは、勘で私の『凍る世界（アイス・エイジ）』を攻略したのいうのですか・・・・！？」

「あぁ、そうだ。何か悪いか？・・・・いや、今はこんな話をしている時間さえ勿体ないか」

そう言ってララウが右手に持ったＧＮツインランスを振るおうとした。だが、デスティニーの推進翼の隙間（ウィング・スラスター）から何かが光ったのを視認

し、アリスにかけていたＡＩＣを解除した。

「なッ！？一体どういうつも――」

「黙ってろ」

困惑するアリスに一言だけ入れ、そのままアリスの腕を引いて自分の後ろへとやった。すると、ラウラはＧＮツインランスを両手で握り大きく振りかぶる。そして、迫って来ていた光輝く”オレンジ色の粒子ビーム”に向かって振り降ろした。

「はああッ！！」

粒子ビームはＧＮツインランスにぶった斬られ、ラウラとアリスの両隣を通過する。ラウラは自分とアリスに向かって攻撃したモノに目を向けると、目を細めながら「やはりな・・・・」と呟いた。ラウラとアリスの視線の先にいるのは黄金の装甲を持つ無人ＩＳ『アルヴァトーレ』五機と、数えるのも面倒臭くなるほどの無人ＩＳ『ジンクス？』。それを見たアリスの表情から隠しきれない動揺の色が表れる。

「どうして、ドクターのＩＳが・・・・」

ドクター、つまり美羽の作った機体が自分を攻撃した意味をアリスは理解出来なかった。いや、心の奥では分かっているはずなのだが、それはつまり・・・・。

「”お前たち”はもう用済みってことだろう？まぁ、あの”朝倉”ならやりかねんがな」

「・・・・ッ！！」

ラウラが現実を淡々と述べる。数秒後、アリスはどこか悲しげな表情でラウラに背を向け赤き翼を広げた。

「私はこれから仲間のところに向かいます」

「そうか」

「ですから、”あれ”の相手はあなたに任せます」

「分かった」

「それと、先ほどは助けていただいて・・・ありがとう、ございました」

「気にするな。どうせ私達は殺し合う間柄だ。馴れ合うのはこれが最初で最後」

「承知しています。なんせ、あなたを殺すのは私ですから」

「だったら死ぬなよ?私も、お前にまだ聞きたいことが山ほどあるからな・・・ついでに、私の仲間も頼んだぞ」

「いいでしょう。どうせ”最初で最後”ですし」

会話を済ませたアリスは仲間の下へ飛翔した。その口元には微かにだが笑みが浮かんでおり、それはラウラも同じだった。

「敵に向かって『死ぬなよ』・・・か。我ながら可笑しなことを

言ってしまったな」

敵を助けたりと自分らしくないことをしたと思ったラウラだったが悪い気はしなかった。だが、そんな穏やかな心地を無人機ＩＳ達が見過ごすわけもなく、一斉にラウラに向かって突っ込んだ。

「そろそろトランザムの限界時間か・・・・。なら、一撃で仕留めるしかないな」

両肩のバインダーと連結を解除させた両手のＧＮソード?を無数の敵に向ける。装甲の赤い輝きが更に強まり、ダブルオーライザー最強の一撃が放たれた。

「トランザムライザー！！」

「山田先生は生徒の避難を！それから、決して教師部隊を出させる

なッ！！」

「は、はいィッ！」

千冬の指示を受け、山田先生が走り出す。楯無を医療施設に運んだ後、千冬は観察室に行き山田先生と合流。そして、モニターで学園にいる敵を映し出し、険しい表情を浮かべた。

「大型無人ＩＳ五機。他にもＧＮドライヴ搭載型が・・・・百オーバーか」

千冬が教師部隊を出させなかったのは、死ぬのが目に見えているからだ。教師達のＩＳではＧＮドライヴ搭載型に勝てるわけもなく、そもそも数が圧倒的に違い過ぎる。だが、千冬にとっての不安材料はそれらなどではなかった。

「・・・・・」

無言で見つめるモニターは何も映し出さない。死神と戦闘を行っている帝、ななせ、ヴィンセントの三人。彼等の安否が確認出来ないことから来る苛立ちで、千冬は下唇を強く噛み締める。

「帝・・・・・」

しかし、彼女はこの時あることを見落としていた。何も映し出さず、真っ黒なままのモニターがもう一つあることを。それは、ブレイドと戦う一夏と箒を映し出すものだった。

「やっぱり、あたしとまともに戦えるのはマサシだけみたいね」

もはや灯台の面影も無くなった場所に帝、ななせ、ヴィンセントはいた。トランザム状態のシリウスが放ったアルテミスの数は百を超え、回避しきれなかったななせとヴィンセントは被弾した。ＩＳを解除し地面に伏せている二人の前に、帝が守るように立っているが、幻騎士の装甲にもいくつか損傷が見受けられる。

「さてと。憂さ晴らしも済んだし、後は”アレ”を回収するだけか・・・・」

「お前・・・・これ以上何をするつもりだ？」

「ちょっと預かり物を返してもらいに行くだけよ、逢沢先生。それともこんな風に」

美羽はＧＮランチャーを展開させ砲門を学生寮がある方向へと向ける。

「大事な生徒を殺した方がいいかしら？」

「なッ・・・・！！」

美羽が言っていることが冗談であるかないかなど考えることなく、帝は動いた。幻騎士の装甲が緑に輝き、遠距離追加武装『狙撃』を展開させる。

「ＧＮ粒子１００％チャージ完了」

ＧＮランチャーの砲門が異常なまでに輝きを放つ。帝は瞬時加速（イグニッション・ブースト）でＧＮランチャーの射線上に入って、推進翼から十六基の自立シールド『ガーディアンビット』を射出する。この武装は楯無に放たれたＧＮランチャーを防ぎきるほどの防御力を持っており、帝はそれを自分の前方に全て展開し、十六層の楯に。だが、美羽はそれに驚きも感心もせず、口元に笑みを作り砲撃を放った。

「圧縮粒子開放。ＧＮハイメガランチャー、発射」

ＧＮランチャーの砲門から放たれた粒子ビームの威力は、ディアボロスのツインバスターライフルを遥かに陵駕しており、ガーディアンビットを一枚一枚飲み込んでいく。威力が衰えることなく迫る粒子ビームに帝は苦虫を噛んだような表情になり、終には全てのガーディアンビットが消滅した。千冬の指示で寮の生徒は避難しているとは思ったが、目の前の粒子ビームが”寮だけ”を消し飛ばすとは思えない。ＩＳ学園全体が消滅しそうな一撃を帝は両腕を前に突き出し受け止めようとする。だが、

「はあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

両腕の装甲が弾け、内側から爆ぜるように血が噴き出す。スラスターを全開にし何とかしようとするが、一向に止まる気配は無く押されていく。苦痛に顔を歪め、咆哮を響かせる帝は諦めようとせず、それを見た美羽は舌打ちを鳴らした。

「そんなに死にたいなら、今すぐ殺してあげる」

次の瞬間。粒子ビームの出力が上がり、一回り大きくなった。腕だけでなく全身の装甲が弾け出し、今にも意識が飛びそうな激痛が帝を襲う。ニタァと口元に笑みを作り美羽は帝が死ぬ様を楽しみにしていたが、シリウスの装甲から赤い輝きが消え、粒子ビームの照射が強制終了した。

「あ～あ。このタイミングでトランザムが終わるって、空気読めなさ過ぎじゃない？後少しで殺せたのに・・・・」

不服そうな表情の美羽の視線の先では、帝が海へと落下し水飛沫を上げる。地上へと降下しながら美羽は今のシリウスの状態を確認し始めた。

「粒子残量もあとちょっとしかないけど、まぁ大丈夫かな」

装甲に傷一つないシリウスの純白の装甲が日の光を浴びて神々しく見える。地に足を着けて辺りを見渡すと立っているのは自分だけで、綺麗だった灯台も跡形もなく消滅していた。

「結局、一人だけの理想郷か・・・・」

何処か遠く悲しげな目をした美羽は次の目的のために飛翔しようと

する。だが、後ろから聞こえた幼馴染の声によってそれは中断された。

「どう、して・・・・こんなこと、するの・・・・・？」

弱弱しい、今にも消えそうな声でななせが問いただす。体中ボロボロで、眠っていた方が楽なのに決まっている。しかし、どうしても聞きたいことがあった。

「美羽に・・・・何があったかは、知らないけど・・・・政志は、美羽のことが・・・・”好き”だったんだよ？」

「・・・・そんなこと今はどうでもいい。あたしはあの頃を取り戻すために戦うだけ。あたしとマサシが幸せだった、あの頃を」

背を向けたまま淡々と話す美羽の声を聞いていると、ななせの目から涙が零れ始めた。啜り声に反応したのか、美羽は振り返ってななせを見る。そして、満面の笑みを浮かべるのだが目は笑っていなかった。

「折角だから教えてあげるわ。あたしが”あの時”、マサシに何をしたのかを」

そして、ゆっくりと小さな口が開かれ真実が語られる。

「　　」

「・・・・・・・・・・え？」

聞き取れたはずなのだが、美羽の口から出た言葉をすぐに理解する

ことができなかった。彼女の言っていることが本当なら、『朝倉美羽』は正しく『死神』に違いない。再び背を向けた死神は翼を広げ飛翔した。

「まさ・・・・し・・・・・」

それを最後に、ななせは意識を手放すのであった。

「私達三人は、朝倉美羽のＤＮＡを基に生み出されたイノベイターです」

「イノベイター・・・・何だそれは!?」

「あんた達みたいな劣等種より遥かに優れた存在よ」

ヒリングがＧＮメガランチャーをマドカ、恋、輝火に向かって放つ三人は一斉に散開して回避するが、そこにビームクローを展開させたブリングが突っ込む。目標は・・・・。

「ちょっ、何でウチなの！？」

輝火は自らに向かって振り下ろされたビームクローをビームサーベルで受け止める。だが、力負けした輝火は後ろに弾き飛ばされ、ブリングが追撃をしかけんとするものの、左右から敵意を感じ取り両手を広げる。すると、恋とマドカのビームサーベルとビームクローがぶつかりあって豪快に火花を散らす。

「・・・・輝火、恋の友達。絶対、守る」

「我々は美羽から、お前達四人の始末とそのＩＳの破壊を命じられている。悪いが死んでもらうぞ」

「くっ！なら何故、ドクターは私達に機体を与えたんだ！？」

「そんなの決まってるじゃない。あんた達四人が、データを採取するのに打って付けだったからよ」

「まぁ、あなた達は劣等種にしては中々の腕ですしね」

声が聞こえると同時に恋とマドカの腹部にヒリングとリヴァイヴの蹴りが入り吹き飛ばされた。二人は輝火とぶつかり三人は団子状態となる。

「じゃ、今度こそ終わり♪」

GNメガランチャーの照準を三人に合わせトリガーを引こうとするヒリングだったが、マドカ達の前に三人の少女が現れ中断する。

「ちょっとあんた達、仲間を殺そうとするなんてどうかしてるんじゃない！？」

「いくらさっきまで敵同士だったとはいえ、見過ごすわけにはいかないね」

「それに、あなた達が美羽さんと同じ顔をしているのも気になりますわ」

鈴、シャル、セシリアの三人だ。彼女らの行動が自分達を敵と認識してのものだと理解するとリヴァイヴは鼻で笑った。

「仲間？面白い冗談を言いますね」

「じゃあ一つ聞くけど、ジュースを飲み終えた空き缶をどうする？普通捨てるでしょ？これはそれと一緒」

「彼女達を始末した後、我々は全勢力を持って亡国機業を潰す。その邪魔をするというのなら、一般人であるお前達を排除することになるが？」

「「「・・・・・」」」

シャル、鈴、セシリアは無言のまま互いの顔を見合って頷く。今の彼女達のＩＳはボロボロでまともな戦闘が出来る状態ではない。例え万全の状態だったとしても圧倒的な性能差で負けてしまうだろう。だが、彼女達は退くことをしない。

「何を考えているかは知らないがそこを退け！死にたいのか！？」

「まさかと思うけど、さっきまで自分を殺そうとしてた相手を助けようなんて考えてないよね！？」

「・・・・だとしたら、馬鹿」

マドカ、輝火、恋の言葉にシャル達は口元に微かな笑みを浮かべ大声で答えた。

「「「馬鹿で結構！！」」」

「・・・・そう。なら、纏めて殺すしかないわね」

不愉快そうな表情でヒリングは六人に向けてＧＮメガランチャーを放とうとする。六人は砲撃に備えて身構えるが、次の瞬間。飛来したビームによってＧＮメガランチャーが爆発した。そして、赤き翼を持ったＩＳが六人の前に舞い降りる。

「どうやらギリギリセーフというやつですね、皆さん」

「「「「「「アリス！！／・・・・アリス／ラウラ！？／ラウラさん！？」」」」」」

マドカ、輝火、恋はマドカが来たことに安堵し、シャル、鈴、セシリアはラウラそっくりのアリスに驚きの色を隠せずにいた。自分を見て驚くシャル達に疑問符を抱くが、バイザーを外したままであることを思い出した。しかし、細かいことを説明している暇など無く、ビームライフルを後腰に戻してアロンダイトを握った。

「どうする？正直あの子の死角認識能力苦手なのよね、あたし」

ヒリングが心底面倒臭そうに言う。いくら圧倒的な力の差があるとはいえ、実質『三対七』であることに変わりはない。それにアリスが来たことで、マドカ、恋、輝火に余裕が出来た。

「彼女がいるのといないのでは大きく戦力が変わりますからね・・・・仕方ない。ヒリング、ブンリング。ここは一気にトランザムアタックで――――」

リヴァイヴがそう言い切ろうとした刹那。リヴァイヴ、ヒリング、ブリングの顔付が変わりその場から離れた。すると、彼女達がいた場所に巨大な光が通過した。それは誰もが初めて見るほど大きなもので、シャル達は勿論アリス達も目を見開いていた。

「な、何なのよ今のビームは・・・・下手したらシリウスのハイメガより威力あるんじゃない・・・・！？」

光が消えると同時にヒリングはガデッサのセンサーで、ビームが飛来してきた方角を見る。しかし、それでも砲撃者を捉えることは出来なかった。

「嘘でしょ！？あたしのガデッサの射程を超えてるなんて・・・・！！」

そんな風に焦り出すヒリング達だったが、

「「「！！」」」

突如、誰かに話しかけられたような表情になり動きを止める。すると数秒後。

「・・・・分かりました。こちらは今すぐ帰還します・・・・では、例のポイントで」

小さく呟いたため、ハッキリとは聞こえなかったが、彼女達が撤退するということだけは分った。

「命拾いしたわね、屑共・・・・。でも、次会った時は〝本気〟で殺すから」

納得出来ていないような表情でヒリング達は去っていった。遠くなっていく三人の後ろ姿をシャル、鈴、セシリアが見送っているとマドカ、恋、輝火もヒリング達とは反対方向へ飛翔し始めた。

「あっ、ちょっと待っ――――」

「礼なら結構ですよ。私達とあなた方は敵同士なんですから」

呼び止めようとしたシャルに一人残ったアリスが真直な瞳で告げた。その言葉からは、今度会う時にはまた戦うことになるという意味が含まれているのが分かる。

「それから、これを渡しておきます」

アリスが取り出したのは携帯用の端末でシャルに投げ渡した。

「それには私が知ってるドクター達のデータが入っています。どうするかはあなた方の自由ですが、これだけは言っておきます・・・・

・あの方達を倒せるのは、”ガンダム”だけです」

無力な少女達に現実を叩きつけたアリスはマドカ達の後を追うように、その場を後にした。そして、残された三人を悲しみのオーラが包み込み。

「どうして僕達って・・・・こんなにも弱いの、かな・・・・・？」

「「・・・・・・」」

シャルの頬を一筋の涙が伝う。彼女の問に、鈴とセシリアは答えることが出来ず、ただ情けなく思うことしかできなかった。

『覚悟』とそれ相応の『力』が無い者は、何も守れない・・・・・。

「・・・・・」

ＩＳ学園から遠く離れたとある山の頂上。そこに一人の少女がいた。酸素が薄いというのにも関わらず平然としている所から彼女が常人でないことは明らかだ。それを証拠に、彼女はＩＳを展開させている。白を基準としたトリコカラーの装甲に、背中にはＬ字型のリフレクターと巨大なキャノン砲が装備されている。

「あの子が、『ＰＲＯＪＥＣＴ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』で私のＤＮＡを基に作られた・・・・」

少女の悲しげな青い瞳は、ＩＳ学園がある方を見つめている。風が少女の黒髪を靡かせ、鈴の髪飾りがチリンッと音を立てる。

「冥府神オシリスとそのイノベイド達がこれからどう動くか・・・・場合によっては私達が相手をすることになるね、『Ｘ』」

自分の機体に優しく語りかけた少女は地を蹴って空へ舞い上がり、誰もいない山頂に鈴の音だけが木霊する。そんな彼女の機体の装甲の一部に、機体名であろう英語が刻まれていた。

『Ｇｕｎｄａｍ　Ｘ（ガンダムＸ）』・・・・・と。

全ては哀しみの中へ（後書き）

次回は密かにやっていた人気投票の発表です！！

第二回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）（前書き）

学園祭の準備で多忙な作者を許してください・・・・

ていうか人気投票の時期にいつもテストがあるってどういうことなの？

まさか、一種の呪いなのか・・・・ッ！？

では、そんなアホな考えは放置して、結果発表～

第二回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）

政志「第二回。『ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞～紅蓮の破壊神～』人気キャラクター投票結果発表」

一同《シャアアアアア！！》

ゴゴゴゴゴゴ・・・・ッ！！

政志「はいはい。熱気で前回に続いて空間が軋んでますね」

アル「何故に適当！？」

龍鳳「つうわけで、今回の司会進行は俺と」

クリス「ボクがやるよ～」

ななせ「・・・・そんな適当なので大丈夫かな？」

龍鳳「今更何言うとんねん、ななせ。この小説に出てるやつらがマトモなわけないやろ？」

ななせ「・・・・そうだね。みんなに常識を求めたあたしが馬鹿だったよ」

クリス「えーとねぇ、今回協力してくれた六人の人達で、作者も含めると七人だね」

政志「作者的には一位ラウラ、二位ななせ、三位シャルだってよ」

龍鳳「しゃあ！ほなら早速順位発表と行こか！」

クリス「・・・・龍鳳、ちょっと待って」

龍鳳「ん？何かあったかクリス？」

クリス「第五位の人・・・・原作キャラでランクインしてるんだけど、この人作者のお情けの一票しか入ってないよ」

龍鳳「おい、言うなって。本人に聞こえたらどないすんねん」

シャル「ゴメン・・・・全部聞こえてたよ（泣）」

龍・ク「「ギャーーーーーース！！！」」

アル「コラァ、そこの屑野郎共！！シャル泣かせてんじゃねぇぞ！！」

龍鳳「喧しいわ、金髪糞野郎！！お前にだけは屑って言われとうないわ！！」

クリス「同感だね！！龍鳳は兎も角、ボクを屑扱いするのは許せないよ！！」

龍鳳「クゥゥリィィスゥゥゥゥゥ！！！！」

ヴィンセント「ったく。本編で出番がないからってここでストレス発散するなよな」

政志「はぁ・・・しかたねぇ。ここからは俺が代わりに司会するか。では、第八位のシャルロット・デュノアに拍手ー」

《・・・パチパチパチパチッ》

シャル「拍手の前の『・・・』は何なの!?」

政志「はい、続いて第四位の発表～」

シャル「えっ、ちょ、政志無視しないでよ!?」

政志「えぇと、二票で第四位を獲得したのは・・・あぁ、こいつらか。次期赤い悪魔、鈴木真海と天才博士、篠ノ之束」

真海「あぁ、あたし?票を入れてくれてありがと」

政志「無駄にはにかむな、音楽キチ。スターか貴様は」

真海「黙れ、アニオタ。寧ろ妹がランクインしたんだから、もっと喜びなよ?」

政志「分かった分かった。茜と天空もランクインしたらな」

束「まーしー、ヤッホーヤッホー!!ひっさしぶりだね～!!」

政志「・・・・・」

ヴィンセント「?どうしたんすか兄貴、急に黙りこんで」

政志「・・・いや、別になんでも（言えねぇ・・・面倒臭いや

つが来たなんて、言えねぇ）」

束「ん～？何だかまーしー元気ないねぇ～？もっと笑っていこうよ！アハハハハッ！！」

政志「・・・・イラッ☆」

ヴィンセント「ダァーッ！！兄貴が恐ろしい笑顔を！！」

ななせ「お、落ち着いて政志！！取りあえずその握り拳を・・・・ッ！！」

一夏「・・・・なぁ、どうする？家の主要キャラ全員いなくなったんだけど」

箒「それは０票の私達に聞くことじゃないだろ」

鈴「ちょ、箒！あたし結構気にしてるんだから言わないでよ！」

セシリア「そうですわ！第一回は兎も角、何故この私が第二回でも０票なのですか！？」

政・ア・龍・ヴィ「「「「そりゃ人気がないからだろ」」」」

一・箒・鈴・セ「「「「言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」

政志「まぁ、アホは放っといて続きといくか。四票を獲得して第三位に輝いたのは、連邦の中将で殲滅の堕天使と恐れられる、琴吹ななせ」

ななせ「あ、ありがとう・・・・／／／／」

鈴「うわぁ・・・・あんたって本当可愛いわね。何かムカついてきたから殴っていい？」

龍鳳「そこのツンデレまな板中華娘。嫉妬は醜いぞ」

鈴「誰がツンデレまな板中華娘よ！！この似非関西弁！！」

龍鳳「なッ・・・・！俺の関西弁はマジ物や言うとるやろが！！」

クリス「何だかまた痴話喧嘩が始まってるけど、ここは無視の方向で」

政志「あぁ、それが一番だな。で、今の心境はどうなんだ、ななせ？」

ななせ「そうだね。前回よりかは順位が下がっちゃったけど、こんなあたしに票を入れてくれる人がいるだけで幸せかな？」

アル「うわっ！ななせが輝いて見えるぞ！？」

セシリア「うぅ・・・・何だか私、恥ずかしい気持ちになってきましたわ」

一・箒「「同じく・・・・・」」

政志「何だか感動してる奴らがいるけど、次の二位の発表に行くぞ～」

ア・龍・ク・ヴィ・ラ「「「「「ちょっと待ったーーーー！！！」」」」」

政志「あぁ？何だよ藪からスティックに」

アル「それを言うなら『藪から棒』だろって突っ込みたいけど、それより次が二位の発表ってどういうことだよ！？」

龍鳳「この順位やなかったら俺ら０票ってことになるんやぞ！！」

クリス「もしここで名前を呼ばれなかったら、数話しか出てない政志の妹とかに負けたってことになるんだよね！？」

ヴィンセント「それだけは絶対に嫌っすよ！！」

ラウラ「私が原作キャラ達と一緒の０票など、絶対に認めん！！」

ななせ「一応言っとくけど、ラウラも原作キャラだからね・・・・」

政志「何だか騒がしいけど、第二位の発表するぞ？」

アル「あぁ・・・ちゃちゃっとやってくれ（はぁ・・・どうせお笑い担当の俺は０票なんだろうなぁ）」

政志「獲得投票七で第二位にランクインしたのはこの三人」

『貴様のその歪み、この私が断ち切る！！』

政志「今の所原作キャラ最強、進化し続ける革新者、ラウラ・ボー

デヴィッヒ」

『ほらほらぁ！死神様のお通りよ！！』

政志「現在本編で無双中、最強かつ最凶の死神、朝倉美羽」

『狙い撃つぜ？成層圏の向こう側までッ！』

政志「馬鹿で転がり担当、全てを撃ち落す狙撃手、アーノルド・ギアナ。以上の三名でした～」

龍・ク「「待たれぇぇぇぇぃ！！！！！」」

アル「あっれ～。何か負け犬が五月蝿いんだけど、気のせいかな？（笑）」

龍鳳「調子に乗んなや糞野郎！！」

クリス「これは何かの間違いだよね！？そうだって言ってよ作者さん！！」

ヴィンセント「・・・・・（正直、前回一票しか入って無かったから、そんなに悲しくないんだよな）」

剣「この私に票が入っていないとは聞き捨てならん！！成敗してくれるッ！！」

《変態武士仮面は引っ込んでろぉぉぉぉぉ！！！》

政志「とりあえず、０票組みは放置して二位になった三人。尺の関

係上短くコメントしてくれよ・・・・特にアル」

アル「お前ってやつはホントに・・・・まぁいいや。こんな馬鹿な俺に投票してくれてありがとうございます。おかげで青髪関西弁に勝てたし、これで思い残すことなくいつでも死ねるぜ！」

美羽「相変わらず五月蝿いわね・・・・いつでもじゃなくて、今死になさいよ」

政志「それは俺も思ったけど、そんなことよりコメントしてくれ」

美羽「あっ、ゴメンねマサシ～」

≪（うわぁ・・・出たよ、猫かぶり）≫

美羽「馬鹿と同じ順位っていうのは気に入らないけど、一応礼を言っておくわ」

龍鳳「ちょ、二位に不満があるってお前何様やねん！？」

クリス「ボク達は一票も入ってないっていうのに・・・・！！」

ヴィンセント「神か！？神なのかお前は！？」

美羽「五月蝿いわね屑共。それに、あたしにとっては神もただの下僕よ」

政志「金ピカ英雄王みたいなこと言うなよ・・・・。じゃあ次、ラウラな」

ラウラ「ふっ、ようやく私の出番か」

美羽「はいコメント終了～」

ラウラ「何・・・・だと・・・・・！？」

政志「どう考えても嘘に決まってんだろ。美羽も無駄にちょっかい入れんなよ」

美羽「うん。分かった」

ラウラ「朝倉、貴様ぁ・・・・本編で後悔させてやるから覚悟してろ。投票してくれたこと、感謝する」

シャル「何だか一瞬だけとてつもない殺気を感じたんだけど、スルーの方向でいった方が良さそうだね」

ななせ「次は一位の発表だけど、ここまで来たら誰だかもう分かっちゃうよね？」

アル「獲得投票数十四で一位になったのはこの小説の主人公！」

『通りすがりの破壊神だ。覚えておけ！』

ラウラ「皆の兄貴分！紅蓮の破壊神、鈴木政志！！」

政志「ウィ～ッス、ども」

アル「二連続で一位になったんだからもっと喜べよ・・・・」

ななせ「それはいいとして、一言コメントお願いね、政志」

政志「次回のＰＶ５０万突破（？）記念の番外編だけど、今回ランクインしたキャラが登場する、話題のアニメのパクリになるらしいぞ」

ななせ「堂々とパクリって言わないでよ・・・・」

ラウラ「候補としては、『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』、『ＷＯＲＫＩＮＧ！』、『僕は友達が少ない』、『未来日記』、『ましろ色シンフォニー』、『ギルティクラウン』だそうだ」

美羽「またこんな機会があったら協力してよね」

アル「投票してくれた六人の方々に無上の感謝を」

政志「てなわけで、Ｓｅｅ ｙｏｕ ｎｅｘｔ ｔｉｍｅ！」

第二回最強王者決定戦（キャラ人気投票結果発表）（後書き）

次回も本編ではありませんがご了承下さいm（＿＿）m

では後日お会いしましょう。

ＰＶ５０万突破記念！超絶番外編「もしこいつらがファミレスで働いたら」（前編）

三週間も留守にしてて申し訳ございません。

テストも学園祭も終わり、漸くこちらに力を入れることが出来ます。

本編の方も頑張りますので、今回はこの駄文で許してください。

では、どうぞ！！

ＰＶ５０万突破記念！超絶番外編「もしこいつらがファミレスで働いたら」

とある日本の、とある都会にある、とあるファミリーレストラン『アイエス』。外見は普通で店内も普通。だが、そこの従業員はどいつも曲者揃いだった。まず店長の篠ノ乃束。全く仕事をせず休憩室に持ち込んだ機械で怪しげな発明をしているマッドサイエンティストだ。

「にゅっふっふ・・・・これが完成すれば、全ての客を束さんの思い通りに――――」

――爆！――

「うにょ～～～～～～～ッ！！」

そして『アイエス』キッチン担当、アーノルド・ギアナ。何故かポケットに拳銃を入れており、キッチンの床下にスナイパーライフルを仕込んでいる。頭脳が残念な男だ。

「オムライス五人前？はっ、んなもん五秒で十分だ！！」

もう一人の『アイエス』キッチン担当、朝倉美羽。容姿端麗、頭脳明晰で完璧人間なのだが、実は腹黒く、一部の者から『死神』と言われている。機嫌が悪い時には、客ですらストレスの発散対象となる。

「塩と砂糖を間違えてもいいわよね？どうせ馬鹿には分からないだろうし」

キッチンから変わって『アイエス』フロアチーフ、シャルロット・デュノア。『アイエス』内で数少ない常識人の一人で、他の従業員の自由っぷりには苦笑するしかない。アーノルドに好意を寄せてはいるが、そのせいもあってアーノルドと●●●している夢をよく見てしまう。そんな夢を見た翌日。彼と会うと恥ずかしさのあまり、何処から出したのか突っ込みたくなるパイルバンカーを打ち込んでしまう。

「悪気はないんだけど、つい・・・・」

『アイエス』フロア担当、琴吹ななせ。彼女もシャルと同じく常識人であり、突っ込み担当である。彼女の人気は尋常ではなく、ファンクラブまで出来てしまうほど。誰もが認めるツンデレである。

「べ、別に・・・・これに深い意味は無いんだからねッ！／／／／」

『アイエス』フロア担当、鈴木真海。たまにドン引きしてしまうほどの音楽キチで、仕事中にもギターケースを肩に掛けている。曲のフレーズやメロディが思いつくと仕事を放り出しギターを取り出して演奏し始める。好物はうどんらしい。

「ここはやっぱりこうした方がいいか・・・・え、注文？今はそれどころじゃないから、後にしてくれ」

『アイエス』フロア担当、ラウラ・ボーデヴィッヒ。根っからの軍人で、何故ファミレスでバイトをしているのかが分からない。接客は滅茶苦茶で、店長がマトモな人間なら百％クビになっている。

「コーヒーだと？貴様のような人間に味が分かるとは到底思えんがな」

そして、『アイエス』フロア担当にして影の支配者、鈴木政志。碌でもない客がいると平気で暴力を振るい、店をも壊すことから『破壊神』の異名を持つ。真海の他にも妹がいて、政志の給料の大半は妹達の小遣いと化す。大のアニメ好きとしても有名である。

「今日の生放送に間に合わせるためにも、テメェ等全員ここで死んでいけぇ！！」

これは、そんな残念な八人が繰り広げる日常の物語である。

「おい、そこの店員。悪いんやけど、スマイル百個くれへんか？」

「折角遊びに来てあげたのに、無視するなんてどういうつもりかなぁ？ボク達客は君達にとって神なんだよ？」

「じゃあ俺、今から神殴るわ」

「「あべしぃっ！！」」

中々イラッとすることをほざいた青髪関西弁と白髪甘党小動物に政志は手加減無しでブッ飛ばした。ガラスを突き破り道路に飛び出た二人は車に撥ねられ星となり『キラ～ン☆』という効果音が聞こえた。

「あいつら毎度毎度懲りねえなあ・・・・で、お前はどうするんだ？ヴィンセント」

「あぁ俺っすか？俺はその・・・・まだ頼むもんが決まってないんで」

そう言いながらヴィンセントは先ほどからチラチラとウェイトレス姿のななせを見ていた。どうやら彼女に注文を聞いてもらいたいようで、それを察した政志はキッチンへと足を運んだ。だが、キッチン担当のアルは白目を剥いて倒れており、彼を踏み台にして美羽が高いところにある食材を取っていた。

「ったく、お前またシャルにパイルバンカーもらったのかよ。相変わらず仲が良いよなお前等」

「どこをどう見たらそう見えるんだよ！？何も悪いことしてねえのに、いつもいつもパイルバンカー食らわせられて・・・・俺ってシャルに嫌われてるのかなぁ？」

「喋るな。動くな。息するな。少しでも揺れたら殺すわよ」

「無茶苦茶かお前は!?つか、俺が気絶してるのをいいことに何勝手に人を踏み台にしてんだよ!?」

「パパが言ってたわ。『馬鹿は踏まれ、嘲笑われる者』だって」

「そんな言葉存在しねぇよ!!いいから早く――――」

退け!と言おうとしたアルだったが、それと同時に何かが床に落ちる音が聞こえた。音がした方に三人が目を向けると、そこには客席から運んできた空のコーヒーカップを床に落としたシャルが、今にも泣きそうな顔で立っていた。

「げっ、シャル!?」

「あ、アルにそんな趣味があったなんて・・・・」

「あらシャルロット。あなた知らなかったの?この馬鹿はあたしの忠実な奴隷だってことを」

「(こいつはまた適当なことを・・・・)」

ニヤリと邪悪と笑みを浮かべる美羽に政志は呆れため息を吐く。

「そう、だったんだ・・・・へぇ・・・・」

「ちょ、シャルロットさん!?お願いだからそんな曇った目で俺を見ないでェ!!」

「オシアワセニ・・・・ね」

「シャルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

完全にファンが見たくない表情をしたシャルはそのままキッチンを後にして店から出て行ってしまった。「チーフ帰っちゃ駄目だろ」と政志と美羽が心の中で突っ込んでいると、美羽の足を退かしたアルが床下からスナイパーライフルを取り出した。

「この際仕方無ぇ・・・・シャルを止めるついでに、そのままハートも狙い撃ってやろうじゃねえか！！」

「「それで撃ったら間違い無く死ぬけどな」」

「というわけでちょっくら行ってくるぜ！待ってろよぉ、シャルゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

馬鹿に何を言っても意味がない。颯爽と駆け出して行ったアルを呼び止めることなく、政志と美羽は面倒臭そうな顔をする。

「おい、美羽。からかうのも大概にしねえと、店が崩壊しちまうぞ」

「あー・・・確かにさっきのはやり過ぎたかもね・・・・でも」

「でも？」

「あの二人弄るの楽しいから無理♪」

「・・・・そうか。なら、俺はもう何も言わねえよ」

「うん♪」

何カラットか分からない笑みを浮かべる美羽を背に政志はキッチンから出て行った。出口の方に目を向けるとドアが破壊されており、先ほどの二人が壊したのは一目瞭然だった。

「馬鹿やるのはいいけど、店まで壊すなよ・・・・」

「それを兄貴が言うのか？」

いつの間にか隣に立っていた真海が突っ込みを入れる。手にはノートとボールペンが握られており仕事をしているようには見えず、政志は米神を引きつかせた。

「テメェ・・・・また仕事しねえで歌作ってたのか？」

「あぁ、そうだけど？」

「・・・・（―＿―メ；）」

―撃！―

我が妹ながらイラッとした政志は、真海にダイナミックチョップをお見舞いするのであった。

「・・・で、真海ちゃんとバトった挙句、店の壁がまた壊れちゃったと？」

「壊れたんじゃねえ、壊したんだ」

「うん、尚更性質が悪いね」

溜息を吐き、壁があった箇所を見つめる束。政志と真海のバトルは休憩室まで被害が及び、いくつかの機材を粉砕し、束は絶望した。そして、バトルの後、見事真海に勝利した政志は束にお叱りを受けるのであった。

「ちっ、仕方ねえ。店の修理代は給料から引いててくれ」

「最初の舌打ちが気になるけど・・・まあいっか。じゃあ、まーしーの給料から引いて――」

「いやいや、真海の給料からに決まってんだろ」

ビシッと指さす先には真海が頭から煙を立ててソファーで横になっていた。政志のダイナミックチョップを交わした真海は殺られまいと反撃を開始したが、破壊神の二つ名を持つ兄に勝てるわけもなく撃沈。

「ただでさえ俺から小遣い貰ってんのに、それに飽き足らずここでもバイトしてんだ。数か月分の給料が無くなっても問題ねえよ」

「十万円ちょっとが貰えなくなるのが問題無いとは思えないけど、修理代を払ってくれるならいいよ。今から束さんは修理屋に連絡してくるから、少しここ片付けといてね～」

手をヒラヒラと振りながら束は携帯片手に何処かへと歩いて行った。面倒くさそうにポリポリと頭を掻いた政志は瓦礫の山と向き合い作業を開始。・・・・するわけでもなく携帯を取り出し、クラスメイトである織斑一夏に電話をかけた。

「もしもし一夏君？俺だけど、ちょっと頼み事聞いてくれないかな～」

【頼み事云々に、お前が人を君付けで呼んでるのが不気味で仕方無いんだけど・・・・】

「じゃあ単刀直入に言ってやろう。今すぐアイエスに来て瓦礫片付けろ。五分以内に来なかったら殺す」

【無茶苦茶かお前はッ！？】

「ったく、我儘な野郎だなお前は・・・・。五分以内ってのは冗談だから、早く来てくれよ」

【殺すってのは冗談じゃないのか！？】

「一々突っ込むなよ。アルか、お前は？」

これ以上何を言っても突っ込みしか返ってこない気がした政志は溜息を吐きながら切り札（ジョーカー）を使うことにした。

「わぁったよ。お前が頼み事聞いてくれたら、ウェディング体験が出来るなネズミーランドのプレミアムチケットやるよ」

【なっ！？それって入手困難なアレか！？】

「そうだよ。俺が持ってても仕方ねえから、箒と行って――」

【一分でそこに行くから、ちょっと待ってろぉぉぉぉぉ！！！】

ブツンと電話が切れるが、よくよく考えると今一夏が居るであろう家からアイエスまでの距離は五キロ弱。どう頑張っても一分以内で来れるわけもないが、声の勢いが不可能を可能にしそうな程だった。

「店長は修理屋に電話しに行ったっきり帰ってこねえし、ホールのチーフとキッチンの馬鹿は消息不明。その上、我が妹は爆睡中（気絶させたのはお前だからな）。よくこんなので今までやってこれたな」

電話をポケットにしまい、政志は休憩室を出て仕事に戻ろうと客が待つテーブルへと向かった。すると、そこではアイエスの問題児の一人であるラウラが男性客二人に水を渡していた。

「私はこう見えて忙しいのでな。これを飲んだらさっさと帰れ」

当然のようにそう言うラウラに向かって、政志は躊躇なくお盆を投擲。すぐさま客に頭を下げさせた。

「すいません。こいつバイト始めたのつい最近なんで」

「何を言う！ここでのバイトはもう半年以上になるぞ！」

真顔のラウラをド突こうとするが、客の目の前でやるわけにもいかず政志は何とか耐えた。

「ちょっとちょっと～。ここの店どうなんてんの？」

「客に対してこの態度。ふざけてんのかゴラ？」

政志とラウラが漫才染みた会話をしていると、男性客が苛立ちを込めた声で二人に話しかける。よく見るとこの男性客二人。明らかにヤで始まる不良にしか見えず、政志は「なるほどな」と納得した。基本的にこの店は常連客が多くいて、大半が心の広い人達でラウラの接客ですら慣れてしまうほど。初めて来る客でもラウラの接客を受け、アレな方向に目覚めたりと何とかやってこれたが、この手の客となると話は別。

「どうしたの政志。何かあった？」

騒ぎに駆けつけて来たななせは首を傾げる。だが、客とラウラを見た途端に「あぁ・・・・そういうことか」といった表情を浮かべた。

「おっ、何だ可愛い子いるじゃん」

「ねーねー彼女～。この後、俺達と遊ばない？」

「結構です」

軽蔑の眼差しで丁重にお断りするななせだったが、流石不良といったところか簡単には引いてくれなかった。

「そういわずにさ～」

しつこく誘おうとする男がななせに手を伸ばそうとした瞬間。男の頭に黒い液体が降りかけられた。

「ホットコーヒー入りまーす」

「あちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「タカシィィィ！！」

バケツ一杯に入った熱々のコーヒーを何の躊躇いもなく投下した美羽は悶え苦しむタカシらしき男に、ゴミでも見るかのような視線を送っている。

「当店自慢のコーヒーのお味は如何でしたか？お・きゃ・く・さ・ま」

「てめぇ・・・・よくもタカシを！！」

「待てよケンジ！この女、最近噂のあの死神じゃないのか！？」

「何ぃ！？あの県知事にも土下座をさせる鬼畜の死神がこの女っていうのかよ！？」

「随分物騒な噂が流れてるんだね、美羽・・・・」

男達の話を聞いてななせは苦笑いを浮かべ、それを見た美羽はムスッとして口を尖らせる。

「死神って呼ばれるのは別に良いけど、鬼畜に関しては身に覚えが無いんだからね」

「「「（嘘つけ）」」」

政志、ななせ、ラウラの心がシンクロした。

「くっ・・・！仮にこいつが死神だとしても、このまま黙って引き下がる俺達じゃねえ！！」

「行くぞ、ケンジ！」

「おうよ、タカシ！」

雑魚ＡとＢが見事な死亡フラグを立てながら美羽に殴りかかる。美羽はただ溜息を吐き、ななせは携帯を取り出す。入力する番号は１１９。

「調子に乗るのも」

「いい加減にしろよ」

ＡとＢの前に立ちふさがった政志とラウラが大きく足を振りかぶる。ここで男達は「ハッ！」とあることを思い出すことになる。ファミリーレストラン『アイエス』にいるのは死神だけではない。圧倒的な暴力で敵を滅ぼす破壊神と、冷徹に目標を駆逐する戦神。一騎当

千を誇るその存在が目の前の二人であることに気づくが、時すでに遅し。政志とラウラの蹴りは男達の顔面を捉えており、店の壁を突き破って向かえに建っているビルへと飛んで行った。

「おい、ラウラ。お前もうちょっと加減しろよ。また店壊れちまったじゃねえか」

「そういうお前こそ。一日に一回は店を壊してるだろう」

「（そんなことより、救急車を呼ぶあたしの身になってよ・・・・）」

ガックリと肩を落とすななせ。美羽は「どうせなら死ねばよかったのに・・・・」と恐ろしいことを呟く。

「何か凄い音がしたと思ったら・・・・また兄貴の仕業か」

「ちょ、まーしー！！さっき休憩室の修理を頼んできたばかりなのに、何でまた壊しちゃうのー！？」

店の奥から出てきた真海は呆れた表情を浮かべており、束は涙を流している。

「おーおー。また派手にやらかしたのか？政志」

「基本的にこういうのって、僕がいない時に起きるよね・・・・」

入り口から帰還したアルとシャルだったが、気のせいか手を繋いでいた。しかも、指を絡める恋人繋ぎ。これをみた店員が二人を暫く弄り倒したのは言うまでもない。

「はぁ・・・メンドクセェことになりやがったぜ」

「あぁ、全くだ」

「「「「「「全部お前達のせいだろ」」」」」」

ファミリーレストラン『アイエス』は今日も平和であった。

めでたし、めでたし♪

ＰＶ５０万突破記念！超絶番外編「もしこいつらがファミレスで働いたら」（後

何だこれ・・・・

敗れる者　目覚める者（前書き）

あー忙しい。アニメ見るので忙しい・・・・。

『僕は友達が少ない』

『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』

『ＷＯＲＫＩＮＧ！！』

『真剣で私に恋しなさい』

『ギルティクラウン』

『Ｃ３　－シーキューブ－』

『ましろ色シンフォニー』

『灼眼のシャナ？』

『ベン・トー』

『未来日記』

この十作品を毎回三通りぐらいみてるので暇人の自分でも時間を食われてしまいます。

・・・・え、自業自得だって？

・・・・すいませんm（＿＿）m

では、本編をどうぞ！！

敗れる者　目覚める者

黒と紅がぶつかり合い火花が散る。箒が振り下ろした雨月と空裂をブレイドがビームサーベルで受け止める。鍔迫り合いは長く続くことはなく、ブレイドが力を入れて押すと箒が吹き飛んだ。

「どうした。君の力はその程度なのか？」

「ぐっ・・・・！」

背部の展開装甲二機を切り離してビットとして射出させる。エネルギーソードを発生させたビットと共にブレイドに突っ込む箒だったが、それを見たブレイドは「ほう・・・・」と関心するだけ。

「女性を斬るのは私の道義に反するが、美羽の命令なのでな・・・・」

「なっ・・・・！？（美羽の命令だと！？一体どういうこ――――）」

美羽の名が出ると同時に箒の表情に驚きが生まれる。それをブレイドは見逃すことなく、左右の手に持ったビームサーベルを背中の後ろまで大きく振りかぶった次の瞬間。黒が消えた。

「秘剣。九頭阿修羅（くずあしゅら）」

黒い線が箒の隣を通過すると同時に左肩の展開装甲が弾け飛ぶ。誰しもが回避行動を取ろうと考えるが、そんな間も無く次々と黒が箒を襲う。

―斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬―

八回の切り抜けは紅椿の展開装甲と武装を破壊しシールドエネルギーを空にさせた。

―斬！―

最後の一撃と同時に箒の体が宙を舞い、ブレイドが動きを止める。両手のビームサーベルを下ろし、スッと目を閉じた後、彼は呟いた。

「切捨て・・・・御免」

―爆！―

宙を舞っていた箒の紅椿が爆発を起こす。黒煙の中から放り出された箒は傷だらけで、額から血を流している。朦朧とする意識の中、箒は愛する人のことを想っていた。

「いち・・・・か・・・・・」

地上へと落下する箒だったが、彼女の体を受け止める者がいた。その者を見た箒は安堵の笑みを浮かべた後、意識を手放すのであった。

『戦う通りを見失っている今の君に、ＩＳを駆る資格も、剣を握る資格も無いッ！！』

（・・・・・）

ブレイドのその言葉は一夏から戦意を奪った。戦っている筈を移す彼の目は曇っており、何も感じはしなかった。

（俺に足りないものって・・・・一体何なんだよ・・・・）

オータムに襲われた時も真海の助けがあってこそ無事だった。今までも助けてもらったことは何度かあった。その度に感謝を言葉を述べたが、悔しいという気持ちがなかったわけでもない。

（俺は、皆を守りたいだけなのに・・・・）

彼は忘れている。自分が自分以外になれないことを。だが、彼はそれを”今”願っている。無双の強さで戦場を駆け巡る友のようになりたいと。

（政志・・・・）

そんなことを思っていると、ふとクラス代表決定戦のことが頭を過

ぎった。政志に敗れた後、更衣室へと向かっていた二人。そこで二人は他愛も無い会話をしていた。

「やっぱお前強いよな。俺専用機で戦ったのに」

「最近乗り始めた奴に負けるほど俺も弱くねえよ。まっ、強くもないんだけどな」

「え？」

「どいつもこいつも勘違いしてるけど、俺は・・・俺達は好きで強くなったんじゃねえんだよ。ただ、失いたくないもんを守るための力。それを手に入れようとしてたら、今みたいなのになっちまったんだ」

「・・・・・」

「強すぎる力は世界を滅ぼす。アル達は兎も角、俺は近いうちに世界から弾き出されるのかもな・・・・」

「・・・それ、どういう意味だよ？」

「さあな。ふと思ったことを口にしただけだ。忘れてくれ。・・・・・あぁ、それはそうと一夏。お前に言っておきたいことがあるんだけど、いいか？」

「まだ何かあるのか？」

「これから先、何があっても大事なもんは死ぬ気で守れ。それが・・・・」

『お前が最強になるための、唯一の方法だ』

その約束は、一夏にとっては当然に等しいことでもあった。何故なら彼は誰かを守ることを望んでおり、それが子供頃から変わることのない欲望。あの時はどういう意味だか理解出来なかったが、今となっては政志が言いたかったことが分かる気がする。

（本当にあいつは・・・・大した奴だよ）

情けないとか。守ってもらってばかりとか。そういうことなどどうでも良かった。どれだけ挫けようが、諦めず、立ち上がって、己の信念を貫き通す。それが、一夏が”最強”から学んだことである。

（我武者羅でも良い！俺は、大事なものを・・・・何が何でも守ってみせる！！）

だから・・・・！！

「ここから先は俺が相手だ。仮面野郎」

箒を受け止めた一夏はブレイドを睨み付ける。その表情は戦士のものであり、纏う空気も別人のようであった。そんな彼を見た箒は弱々しくであるが、柔らかな笑みを浮かべ、瞳を閉じた。

「ごめんな、箒。俺が不甲斐無いばかりに・・・・。でも、これから先は何があってもお前は俺が守る」

闘志を宿した瞳に炎が見える。ブレイドの口角も自然に上がり、心が躍るのを感じた。

「見違えたぞ少年。これなら私の戦いにも、意味があったというものだ」

「もうこれ以上誰も傷つけさせない。そのためにも、お前は俺が倒す！！」

「敵機撃破数３２５。敵機の殲滅を確認」

装甲に溜め込んでいたＧＮ粒子を全て使い切ったため、赤く輝いていた装甲が青に戻る。ライザーソードは敵機を蹂躙し、全て消滅させた。

「粒子のチャージ完了まで・・・・待ってるわけにもいかないか」

仲間の元へと飛翔しようとするラウラ。諸悪の根源が美羽であることは明らかであり、ラウラの怒りの矛先は美羽に向いている。だが、ラウラはあくまで無表情のまま。しかし、その瞳には確かに、抑え切れ無い激情が渦巻いていた。

「・・・・貴様の思い通りになど、させない」

どこまでも静かな。しかし、確かな激情を湛えた声が空間に響く。

そして。

「あなたにあたしが止められるかしら?戦神(ヴァルキリアス)、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「っ!?」

聞き覚えのある声が背後から聞こえる。その声には喜気が混じっていたが、絶対的な冷たさも含んでいた。どうしようもない悪寒が全身を駆け巡る中、振り返ったラウラの視界に入ったのは”死神”だった。

「そろそろ返してもらうわよ。ダブルオーは、元々あたしの機体なんだから」

ニコリと笑みを浮かべる美羽は手に持っていた蛸足の装置をラウラの胸部に押し付ける。すると、ダブルオーの装甲に黒い電流のようなエネルギーが走った。

「がああああっ!!」

それはラウラ自身にも影響を及ぼし、激痛が彼女を襲う。苦痛で悶える中、装置は粒子と化してダブルオーの装甲を覆う。

「お帰り・・・・”ダブルオー”」

電流が収まると同時に、装甲を覆っていた粒子が集まり形を成した。それは六角形の青く輝くクリスタル。それを優しく両手で持った美

羽はラウラから距離を置きながら胸元に当てる。

「やっと・・・やっと取り戻せた。あたしの大切な、パパが作った最強のガンダムを」

まるで子供のように喜ぶ美羽の言っていることがわからないラウラだったが、すぐさまＧＮソード?で斬りかかろうとする。しかし、彼女の手にそんなのなど無かった。何故なら、今彼女が展開させているＩＳはダブルオーではないからだ。

「どういうことだ・・・ダブルオー!ダブルオー!!」

何度も呼ぶが”シュヴァルツェア・レーゲン”がダブルオーとなることはない。

「ふふっ。確かに返してもらったわよ。あたしのダブルオーを」

「貴様・・・一体どうやって!?」

「さっきあなたに使った装置。あれは亡国機業（ファントム・タスク）の『剥離剤（リムーバー）』ってものをあたしなりに改造したものよ。効果は・・・言わなくても大体予想出来てるんじゃない?」

満面の笑みを浮かべる美羽は手に持った”ダブルオーのコア”をラウラに見せつける。

「今まで預ってもらってたお礼に、その機体のコアを直しておいたわ。・・・さて、どうしようかしら。ガンダムの無いあなたを、殺すも生かすもあたしの自由。ま、ガンダムがあってもあなたじゃあたしに勝てっこないと思うけど」

スッと琥珀色の瞳を閉じ、次に開けた時には両眼が輝く金色に染まっていた。すると。

（リヴァイヴ、ヒリング、ブリング。こっちはななせとクリスの弟と幻騎士を墜としたわ。目的のダブルオーも抑えたし、今日のところは引き上げるわよ）

頭の中で声が響きラウラは困惑する。それは美羽の声であり、先日にも同じようなことがあったのをラウラは思い出す。

（あぁ、それから剣のことは放っておいていいから。どうせ言っても聞かないだろうし）

会話を終えた美羽はラウラの反応を見ると、口角を上げる。純粋なる邪悪な笑み。例えて言うなら正にそれだった。

「その様子、やっぱりあなたもイノベイターだったのね」

「イノベイター・・・・何だそれは!?それより、ななせ達を墜としたとはどういう意味だッ!?」

「言葉の通りよ。まぁでも、死んではいないと思うから安心しなさい。た・ぶ・んの話だけど♪」

美羽が言い切った次の瞬間、彼女の姿がぶれて消えた。ハッとしたラウラだったが、美羽はすでに背後に回っていた。

「あなた見かけによらず学習能力が無いのね。こうして零段階瞬時加速（ゼロ・イグニッション）で後ろを取られるの、これで二回目よ?実質二回死んでると思

ってた方が良いかもね」

「くっ・・・・！」

確かに迂闊だったのかもしれない。同じ手に二度も引っ掛かったことに対して、ラウラは歯軋りする。振り向きざまに最大出力のＡＩＣをぶつけて、そこにレールカノンを撃ち込もうと一度は考えたが、動いた瞬間に殺される気しかしなかった。

「この際だからイノベイターについて教えてあげるわ。知りたいでしょ？自分のことなんだから」

「・・・ふんっ。この私がそんな妖しげな存在だとは思えないな。証拠でもあるのか？」

「あるわ」

「何！？」

余りにも即答。それは絶対的な自信から来るもので、ラウラはこれから彼女が口にすることが事実であろうと思ってしまう。

「イノベイターは、まあ簡単に言えば進化した人間ね。脳量子波で他者と表層意識を共有し、驚異的な反射神経を発揮。他にも常人の二倍以上の寿命を持ち、細胞の活性化が早い。これが”どの”イノベイターもが持つ能力よ。でも、脳量子波に関しては、龍鳳みたいな超兵がいるから色々とメンドくさいのよね」

「（超・・・・兵？）」

「超兵っていうのは人工的に脳量子波を使えるようにされた強化人間兵士のことよ。言っとくけど、脳量子波は使い方で人の思考も読めるから」

「っ！？」

「今のあなたにそれが出来ないのは、まだ完全に覚醒していないだけ。だって、覚醒したイノベイターがオリジナルの太陽炉を持つＩＳを使ってこんなに弱いわけないもの」

「・・・・・」

美羽は淡々と話しラウラはそれを黙って聞くことしか出来なかった。

「話は変わるけど、アルケーのＧＮ粒子の色が黒くなったのは何故だと思う？ななせから一度は聞いたことがない？」

「・・・機体と操縦者のシンクロ率が、１００を越えたから・・・？」

「ん～、残念だけどそれだと五十点ぐらいかな。ＩＳとのシンクロ率は限界が１００で、これはＩＳ適正が”Ｓ”の『ヴァルキリー』や『ブリュンヒルデ』が証明しているわ」

「なら、どうして・・・・？」

「政志のＩＳ適正が、あたし達イノベイターと同じ”ＥＸ”だからよ」

「ＥＸ・・・・だと！？」

世界で定められているＩＳ適正の最高はＳであり、このクラスでさえ数えるほどしかいない。だが、目の前の少女は更にその上があると言っている。

「ＥＸ。つまり、イノベイターがオリジナルの太陽路を積んだ機体を操縦した時に起きるＧＮ粒子と粒子ビームの色の変動。そして、機体出力の上昇。あたしはこれを『神秘化（アルカナ）』と呼んでるわ。つまり政志も・・・・」

「イノベイターだと言うのか・・・・！？」

「確信は無いけど恐らくそうよ。でも、あの様子だとまだ完全には目覚めていないわ。その証拠に、あたしの脳量子波に耐え切れなかった」

「その言い様・・・やはり政志はお前が――」

「そうよ。まぁ、そんなことはどうでもいいとして・・・・」

刹那。背後にあった美羽の気配が消えた。

「アリスにやられた傷、もう治ってるんじゃない？」

「なっ！？」

目の前に現れた美羽はラウラの腹部にそっと手を当てる。そこは先日アリスのデスティニーのパルフィマキオーナによって火傷を負わされた場所。だが、ＩＳスーツを引きちぎって腹部を露出させてもそこにあるのは綺麗な白い肌。火傷の痕すら残っていなかった。

「あなたはコレを見ても、まだ自分がただの人間だと言うの？・・・・いい加減、認めたらどう？あたなはあたしと同類だってことを」

溜息を吐き呆れた表情を浮かべる。そんな死神を見るラウラの瞳には消えぬ敵意の炎が灯っており、それを見た美羽は腕を引いてラウラの腹部に掌底を叩き込んだ。

「がはっ・・・・！」

「神秘化したダブルオーと一緒に、あたしは全てを取り戻す。だから・・・お願いだから、あたしの邪魔をしないで」

懇願するその声はとても儚く、泣きそうな声。美羽が口にしたとは思えないその声を耳に、ラウラは地上へと落下するのであった。その時、僅かにだが。悲しげな表情の美羽の口元が「ごめん・・・・」と動いているように見えた。

「まったく、何時までここでいじけているつもりなの？あなたは」

「・・・・・」

空間を染めつくしていた闇が紅蓮に変わる。それと同時に少年の前に現れたのは全てが赤い少女。少女は呆れた感じで少年に問いかけるが彼が口を開くことはない。

「あなたがこうしてる間にも、外では皆が戦ってるんだよ？そして傷つき倒れていく。全部、あなたのせいでね」

「・・・じゃあ、俺は・・・俺はどうすれば良かったんだ！！」

「知らないよそんなの。私はあなたの、マスターの望む力を具現化するだけの存在だから」

「だったら寄越せよ！！俺が望まぬ現実を、壊す力を！！！」

「それは無理だよ。だって、あなたはそんなこと望んでないもの」

「え・・・・？」

少女は、”赤い悪魔”はゆっくりと少年に歩み寄り、指で左胸を突いた。

「苦しむことも、悲しむことも、傷つくことも。自分が犠牲になることを分かってて、破壊の神になることを選んだんでしょ？大事な人を守るために」

「・・・でも、俺は守れなかった！それどころか、俺は美羽を傷つけて追い込んだ！それだけじゃない！今まで俺が、正義を言い訳にどれだけの人を殺してきたと思ってるんだよ！！」

すると、少年の後ろの赤い空間が変化していき、少年が大剣で人を殺しているものへとなった。その少年の表情は悪魔といっても過言ではないほどの邪悪な笑みを浮かべており、次々と死体の山を積み上げていく。

「俺という存在は人を苦しめることしか出来ない。だから・・・・」

「死んだ方がマシって言いたいの？」

「・・・・・」

少年の沈黙は肯定の意を持っており、少女は溜息を吐く。

「そんな風に思ってるのは・・・あなただけだよ」

少女がそう言うと今度は少女の後ろの空間が変わっていき、一つの光景を生み出す。そこでは少年とその仲間が笑いあっていた。

「琴吹ななせ、アーノルド・ギアナ、龍鳳・クシュリナーダ、クリストファー・トールギス、ヴィンセント・トールギス、織斑一夏、篠ノ乃箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、そして・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ。ＩＳ学園で彼らと過ごした時間は、あなたにとって掛替えのないものになってたんじゃないの？」

「・・・・・」

「彼らの笑顔を見て、さっきと同じことがまだ言える？・・・・言えないよね。だって、あなたは誰よりも優しい人だから」

少女はゆっくりと数歩後退した後、まっすぐな瞳で少年を見据えた。

「我がマスターよ。改めて問うが、あなたは”何”を望みますか？」

少年の胸の中で砕けていた何かが元に戻り始めた。そして、少年は自覚することとなる。自分は破壊神になったのではない。自分という存在は、根っからが破壊神なのだと。

「何を望むか？・・・・そんなの決まってる。俺はただ壊すだけの存在。気に入らないもんをブッ潰す破壊の神だ。だから、俺が望むのは”俺と共に破壊をなす力”だ」

表情が変わった少年を満足そうに見ると、少女は少年の手を引いて走り出した。

「じゃあ行こう！皆が待ってる戦場へ」

「あぁ。この魂砕けようと、俺は壊し続ける」

空間を白い光が包み込み、二人の姿が擦れていく。

「俺は破壊という名の力で仲間を護る」

それが彼の力の根源。

「仲間がいる、この世界を護る」

揺らぐことのない信念。

「それを邪魔する奴はブッ壊す」

闇から抜け出した少年は全てを壊すために目覚める。

「死神だろうがなんだろうが関係ねえ！！俺が存在する限り、仲間に手は出させねえぞ！！！美羽ッ！！！！」

敗れる者　目覚める者（後書き）

その内、過去編を書かないと駄目だね。

後、イノベイターに関する設定が適当過ぎますが御了承ください。

「戦いの中で進化するとは・・・・流石は織斑千冬の弟といったところか。だが、それだけで勝てるほど戦いは甘くないぞ。少年」

ブレイドが地面に横たわる一夏に向かって言う。その隣には箒も居て、二人とも気絶しておりＩＳスーツだけを身に纏っている。ブレイドのＩＳ、マスラオの装甲は一夏との戦闘で所々に傷を負っているが、大きな損傷は見受けられない。

「機体の性能差さえなければ、この程度では済まなかったかもしれんな・・・・」

お世辞でも何でもない。ブレイドは心から一夏を評価し、好敵手と認めた。それほど一夏の想いは強く、ブレイドに届くほどであった。

「君と戦えたことを私は誇りに思う。願わくば、もう一度手合わせしたいものだな」

清々しい表情でブレイドは一夏と箒に背を向けた後、飛翔しその場を離れた。

だが。

「ブレイドも甘いわね。目の前に敵がいるのに、止めをささないなんて」

一夏と箒が横たわっている上空でヒリング、リヴァイヴ、ブリングが降下する。美羽からの指示で撤退していた三人だったが、その途中で飛び立つブレイドを発見。そして、今に至る。

「で、どうするのです？美羽は引き上げろと言ってましたが」

「大丈夫だって。脳量子波は切ってるし、バレてもブレイドのせいすれば良いだけの話よ」

ニヤリと笑みと浮かべるヒリングがＧＮバルカンの砲門を一夏と箒に向ける。今のヒリングには誰かを甚振ることしか頭にない。リヴァイヴとブリングも特に止める理由もなく、ヒリングが二人を殺そうとするのを黙って見ていた。

「死んじゃえばいいよ♪」

しかし、ＧＮバルカンが一夏と箒を捉えることはなかった。二人の前に突如現れた白いＩＳ（？）を纏った少女が、腕から展開したで緑色のバリアーで光弾を弾いたのだ。

「身動きも取れない・・・倒れている無抵抗な人間に攻撃するなんて中々下衆なことをするね」

少女の蜂蜜色の髪が風で靡く。表情はサングラスをしているため分

かり難いが、口元が蔑笑を象っている。

「誰だか知らないけど、新手の自殺願望者ってことで殺すわよ」

「殺れるものなら殺ってみれば？たかが“イノベイド”風情が、『理子』に勝てるとは思えないけど」

「「「っ！！？？」」」

理子と名乗る少女が『イノベイド』と言う単語を出した途端に三人の表情に驚きが生まれる。

「貴様・・・・一体何者だ？」

「べっつに～。・・・・理子はただの“泥棒”で、“あくま”で・・・・」

『通りすがりの“破壊神”だよ』

ヒリング達が怪訝な表情を浮かべる中、理子は両足に装着されているランドスピナーで地面を“滑走”し、ヒリング達に突っ込む。

「地面を滑るだと?そんなＩＳ、聞いたことがないぞ」

「何にせよ、敵であることに変わりはないでしょう」

「その力、見せてもらおうじゃないさ！」

リヴァイヴはファングを射出。ヒリングはビームサーベル、ブリングはビームクローを展開して理子を迎え撃とうとする。彼女ら三人は美羽の遺伝子を基に作られたクローン。性格などは異なれど強さは折り紙付き。現に彼女らは不意打ち気味ではあるがアル、龍鳳、クリスの三人に重傷を負わせた。

「ちょこっとだけ本気でいくよ。『ランスロット』」

自らの機体に語りかけると、ランスロットの腕部と腰部から二基ずつワイヤー式アンカー『スラッシュハーケン』が射出された。蛇のような動きで、スラッシュハーケンはリヴァイヴが射出したファングを全て破壊し、軌道を変えて二基ずつヒリングとブリングに向かう。

「その程度の攻撃・・・・！」

ヒリングとブリングはそれぞれの武器でスラッシュハーケンを叩き落す。それを見た理子は動じることなく、ただ口元に笑みを浮かべるだけだった。

「掛かった掛かった♪」

叩き落される際、搭載されているブースターが働き四基とも綺麗にヒリングとブリングの足元に刺さった。ワイヤーが引き巻かれると

アンカーが突き刺さっていた地面が岩となり宙を舞う。

「「「なっ！？」」」

四つの岩に気を取られている三人を他所に理子はライフルの形を模した可変弾薬反発衝撃砲『ヴァリス（Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ａｍｍｕｎｉｔｉｏｎ　Ｒｅｐｕｌｓｉｏｎ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｓｐｉｔｆｉｒｅの略）』を手に取り岩に向かってトリガーを引く。放たれた弾丸は四つの岩を粉々に砕き、煙と飛礫が生まれる。それらはヒリング達の視界を防ぐものとなった。

「目晦まし！？そんなもの利くとでも思っているのか！！」

「この状況で無駄口を叩く暇があるなんて、りこりんもビックリだよ」

煙が晴れると三人の中間地点に理子がいた。だが、彼女が纏っているＩＳ（？）が変わっていた。赤い装甲に、異様に長く爪の付いた右腕。形状は先ほどの白い機体と全く異なるが、推進機関などは見受けられず、両足にランドスピナーが装備されている点は同じである。

「防御した方が良いよ。“これ”結構威力高いから」

異質な右腕を地面に押し付ける。すると、「ガチャンッ」という機械音が鳴り、地面と掌との接点が赤く輝きだし、地面が沸騰するかのようにブクブクと膨れだす。

「見せてあげる。『紅蓮弐式』の“輻射波動”を」

「不味い！！逃げ――――」

リヴァイヴ達はその場から離れようとしたが、すでにエネルギーの臨界点は超えており、地面が、大地が派手に爆壊した。

「「「ぐあああああああっ！！！」」」

足元が爆発したことによってリヴァイヴ達は吹き飛ばされ、近くに生えていた木に叩き付けられた。

「これ以上理子と戦うっていうのなら、次は直接お見舞いすることになっちゃうけど・・・・どうする？」

「くっ・・・・！黙って聞いてれば調子に乗ってぇ！！」

「止めろ、ヒリング。癪だが、ここは大人しく退いた方が良さそうだ」

「どうしてよ、ブリング！？私達が本気で掛かれば、あんな奴一人ぐらい――――」

「残念だけど、もう一人いるわよ」

「「「！？」」」

新たな介入者の登場にリヴァイヴ達の顔が強張る。理子の後方からスタスタと歩いて来るのはＩＳ学園の制服を着たピンクの髪の少女。×マークの髪飾りが特徴的だ。

「やっほー、『亜夢』ちん♪元気してた～？」

「・・・そっちは相変わらず、マイペースみたいね」

キャピキャピとした感じの理子に、亜夢と呼ばれた少女は呆れて溜息を吐く。

「はっ、面白いじゃないさ！こうなったら、二人纏めて・・・・！！」

「この状況を見てもまだそんなことがいえるとは・・・・あなたの目は節穴ですか？」

「イレギュラーが二人。しかも、その内の一人に一本取られてしまったとあれば、無事では済まないのは目に見えている」

「それに彼女・・・・まだ何か隠してそうですしね」

「ちっ・・・・分かったよ！美羽にバレる前に、さっさと帰りましょう」

ヒリング、リヴァイヴ、ブリングは地面を蹴り飛翔する。三人が豆粒ぐらいになるほど遠くへ行ったのを確認すると、理子はやれやれと肩を竦めながらＩＳ（？）を解除させた。

「もぉ・・・・理子は政志が心配で来ただけなのに、何であんな雑魚と戦わないといけないのさ～？」

ブーブーと口を尖らせ文句を垂れる理子に亜夢は苦笑する。

「あんたってホント強いよね。さっき使ってた二機も、まだ試作段

階なんでしょ？」

「いやぁ、そこはさ？実力でカバーしないと♪・・・・で、どうして亜夢ちんがこんなところにいるの？」

「どうしてって・・・ここまで好き勝手暴れられて、黙ってるわけにもいかないじゃん。そっちこそ、何でこの二人を助けたの？下手したら、あんたの素性が・・・・」

「大丈夫大丈夫♪そんなこと、りこりんがするわけないっしょ！」

グッと親指を立ててサムズアップする理子。「ハァ・・・・」と深い溜息を亜夢が吐いていると彼女の頭上で電球が光った。

「そうそう思い出した！あたし、あんたに言うことがあったんだっけ。良い報告と悪い報告があるんだけど、どっちからがいい？」

「ん～・・・じゃあ悪い方から」

「さっき『ジャンヌ』から連絡があって、あんたが居ないのが“あいつ”にバレたらしいから、さっさと戻って来いってさ」

「・・・・ちっ」

亜夢から出た“あいつ”とは誰のことだか分からないが、理子の表情が笑顔から険しいものに変わったところから、どうやら理子はその者が嫌いなようだ。

「あいつ自分の立場わかってないのかなぁ？感動の再会を邪魔するなんて・・・・いつか絶対殺してやる」

殺意丸出しの理子を亜夢が「まぁまぁ」と宥める。機嫌を損ねた理子だったが、もう一つの報告によってそれはすぐに直ることとなる。

「で、もう一つの報告なんだけど・・・あんたがこの間言ってた“最後の一人”。どうやらこのＩＳ学園にいるみたいよ？」

それを聞いた理子は驚きの表情を浮かべ、数秒後に「そっか・・・・」とポツリ呟いた。

「『暴食魔ベルゼバブ』・・・まさかこんなところにいるなんて、運命ってのは怖いものだね」

「覚醒前の微弱な脳量子波を感じただけだから、誰なのかまでは特定出来てないの。ごめん」

申し訳なさそうにシュンとなる亜夢に、理子は笑って答えた。

「別に良いって亜夢ちん！じゃ、理子はこれで帰るけど、引き続き重要人物の監視と、暴食魔の捜索頑張ってね！分かってると思うけど、“蝿”だよ？蝿の痣があるやつを探すんだよ？」

「そのぐらい分かってるってば！あたしにもあるんだから」

そう言って亜夢は制服の右袖を捲り上げる。露出された二の腕。そこには獣の形をした痣があった。それを見た理子は「プススッ」と口を押さえながら小さく笑うのであった。

「にしても亜夢ちん。女の子が“熊”の痣って・・・よく考えると中々コアだね」

「う、うるさいわね！そういうあんたこそどうなのよ！？」

「理子の？理子のはカッチョ良いから気に入ってるよ♪」

「あんたのその性格が時々羨ましく思えるのが情けないんだけど・・・。それはそうと、このまま帰って良いの？態々フランスから会いに来たんでしょ、鈴木政志に」

「・・・・・」

亜夢のその問いに理子は小さく笑う。だが、その笑みの奥には寂しさも伺え、理子がこのような表情になるのが珍しく、亜夢は少し心配そうに見つめる。

「確かに・・・会えないのは寂しいけど、別に良いよ。また次の機会に来ればいいし・・・。それに、政志のお友達を助けれただけも理子は満足だしね」

亜夢とＩＳ学園に背を向け歩き出す理子。その後ろ姿は今にも壊れてしまいそうな、ただの儚い少女にしか見えなかった。亜夢はそれを、真っ直ぐな瞳で見つめていた。

「・・・あんたが血の道を歩くっていうのなら、あたし達はそれに付いていくだけよ。“龍”の痣を持つ、我等（邪神）の王よ」

静かにポツリと呟いた亜夢は理子に背を向け歩みだす。この少女二人とその仲間が、近い未来。世界を賭けて戦争を起こすことになるなど、この時。誰も知り得はしなかった。

「ななせとヴィンセント・・・・それに逢沢先生の三人でも美羽に勝てないなんて・・・・」

「あの子・・・・どんだけ強いのよ・・・・」

夕日が差し込む医療施設の一室。そこにラウラ、シャル、鈴、セシリアの四人がいた。今の彼女達の身体には、所々包帯を巻かれている。だが、それは他の負傷者に比べれば数倍マシだった。帝、楯無は一命は取り留めたものの重傷であることに変わりはなく、ななせ、ヴィンセント、一夏、箒の四人も軽傷だが未だに目を覚まさない。

「代表候補生と言いましても、今の私達は・・・・あまりにも無力ですわ」

「・・・・・」

セシリアが自分達の力の無さに嘆き、ラウラは無言で唇を噛みしめる。悔しさと情けなさが心を支配し、自分自身に怒りすら覚えるほどだ。そんな彼女らがいる部屋は必然的に重苦しい空気が流れる。

「・・・・で、これからどうするの？」

沈黙を破るが如く口を開いた鈴が口にしたのは他の三人も思っていたことだ。全員が顔を上げて互いを見る。

「僕が貰った情報だと、美羽は日本海の真ん中に浮かぶ無人島、そこに個人のラボを作ってるらしいんだ。だから、美羽達は今・・・・」

「そこにいるということか・・・・」

ラウラの問にシャルが小さく頷く。

「・・・・わかった」

数秒ほど何か考えたのか、ポツリとそう呟いたラウラはドアへと向かって歩き出した。だが、何者かに後ろから肩を掴まれ進行を止められた。無表情のままのラウラが振り返ると、そこには怪訝な表情の鈴がいた。

「あんた、一体何所に行くつもりなのよ・・・・・？」

「・・・・今の話を聞いたならやることは一つだ。政志やななせの仇を取るためにも、これ以上被害を出さないためにも・・・・・・・・朝倉を討つ」

「「「ッ！？」」」

美羽を倒す。ラウラがその言葉を口にするとシャル、鈴、セシリアは驚きの色を見せる。

「あ、あんた、それ本気で言ってるの？なせ達が三人で掛かっても勝てなかった美羽に、どうやって勝つっていうのよ・・・・ッ！？」

「それにラウラ、ダブルオーを盗られちゃったんでしょ？とてもじゃないけど、シュヴァルツェア・レーゲンじゃ、ガンダムには勝てないって！」

「敵は美羽さんだけではなく、一夏さんや箒さん・・・・クリスさん達を倒した人達もいるのですよ！それをわかって――」

「わかっている・・・・。しかし、だからと言って何もしないことなど出来ない。それはお前達も同じのはずだ」

「「「・・・・・」」」

「アーノルド達をあんな風にしたやつが誰かわかったなら、仇を取りたいとは思わないのか！？」

思っているに決まっている。それは誰もがわかっていること。今すぐにでも部屋から飛び出して美羽のところへ行きたい。だが、彼女達には“力”がない。

「ったく、湿気た面してんじゃねえぞ。誰かの葬式じゃあるまいし」

「「「「・・・・・えっ？」」」」

いつの間にか部屋に入っていた少年が呆れた表情で四人に言う。緊張感の無い声で、面倒臭そうにボリボリと頭を掻いている。少年の姿を見たシャル、鈴、セシリアは目を見開き驚いており、ラウラの頬を一筋の涙が伝った。

「まさ、し・・・・なのか？」

「他の誰に見えんだよ。鈴木政志に決まってんだろ」

掠れた声でラウラが問いかけると、政志は口元に微かな笑みを浮かべた。フラフラと歩み寄るラウラはそのまま政志の胸に顔を埋めた。

「心配掛けた。すまねえ」

「言うな・・・お前が無事なら、私は・・・・」

泣き出したラウラの頭を政志は優しく撫でる。その手の暖かさは政志が戻ってきたことを実感させるほどだった。そんな政志とラウラを微笑しながらシャル、鈴、セシリアが見ていると、視線に気付いた二人がハッとなり離れる。ラウラの顔は赤く上気しており、政志の頬も僅かにだが紅潮している。そんな反応を鈴がニヤニヤと見て

いると、政志は数回咳払いを入れて真剣な表情になる。

「それはそうと、お前らこれからどするんだ？正直な所、今のお前らじゃ美羽に勝てる確率は０・・・・いや、それ以下だな。あいつとは何度か模擬戦なり色々してきたが、決着がついたことは一度もねえ。情けない話、俺も美羽に勝てるか分かんねえからな」

「「「「・・・・・」」」」

それを聞いた途端、ラウラ、シャル、鈴、セシリアの表情が一気に暗くなる。しかし。

「でも、まぁ・・・・“手”が無いこともないんだけどな」

・・・・・。

「「「「ふぇ？」」」」

衝撃の告白に四人の口から間の抜けた声が漏れる。そして、それと同時に「あるんだったら早く言えよ」と心中で思った。

「ほらよ」

ポイッと四人に向かって政志は何かを投げた。取り合えずそれをキャッチした四人だったが、それが何かに気付くと慌て出す。

「え、ちょ、政志！？コレって・・・・」

「さっき俺が再調整してきたやつだ。つっても。それを使ってもお前らが勝てる確率はせいぜい四割ぐらい。後の六割は“今”からど

うにかしろ」

そう言い切ると部屋に三人少女が入ってきた。赤、茶、ピンクの髪の少女達の登場にラウラ達は唖然とする。

「いきなり倒れて、目が覚めたと思ったら『いいから来い』だなんて。ホントお兄ちゃんは勝手なんだから」

「でも、兄さんが無事で良かった」

「ま、こうなることは大体予想出来てたんだけど」

茜、天空、真海が思ったことを言う。茜は呆れた表情を浮かべているが、三人とも微かに口元に笑みを浮かべている。ラウラ達が状況が全く把握出来ていないまま話は進んでいく。

「お前らを呼んだのは電話で話した通りだ。真海はシャル、茜は鈴、天空はセシリアの相手を頼む。ラウラは俺がやる」

「「「ＯＫ／了解／分かりました」」」

「政志・・・・質問があるのだが、いいか？」

「ん？何ぞい、ラウラ」

「今から我々は、何をするのだ・・・・？」

これ以上勝手に話が進んではやばいと本能がそう告げる。額に冷や汗を流す四人を代表してラウラが問う。しかし、返ってきたのは予想していた答えだった。

「“超短期特訓”に決まってんだろ。今お前ら戦っても死ぬだけだ。それに、強くなるには実戦が一番手っ取り早いからな」

ニヤー、と好戦的な笑みを政志が浮かべると、政志とその妹達の体を光が覆いＩＳを展開させる。

「お兄ちゃんから『死なない程度に殺せ』って言われてるから、本気で行かせてもらいますよ、凰先輩」

赤い装甲を持ったガンダム。『スローネドライ』を茜が纏う。

「お相手願います、オルコットさん」

黒い装甲を持ったガンダム。『スローネアイン』を天空が纏う。

「いつもはバンシィ使ってるから腕が鈍ってないといいんだけど・・・取り敢えずデュノアさん。最初から殺す気でいくんで、そこんとこよろしく」

緋色の装甲を持ったガンダム。『スローネツヴァイ』を真海が纏う。

「ここまで来たら後は説明しなくても分かるよな？今から一時間。俺達はお前らを殺すつもりで襲うから、頑張って耐えろ」

青い装甲を持ったガンダム。『エクシア』を政志が纏う。そんな四人を前に、鈴は慌てふためく。

「そ、そんなこと急に言われても、この機体使うの始めてなのよ！？あんた達と戦うのなんて無理に決まって――」

「だったら今から慣れろ。それから“無理”なんて言葉を無闇に使うな。寝てる間にアニメの生放送を見逃したのもあって不思議とイラっとする」

「「「「無茶苦茶過ぎるわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」

四人の叫び声と同時に彼女らがいた病室はフッ飛んだのであった。

「破損部分の修復完了、ツインドライヴに異常無し・・・・フゥ。やっと終わったわ」

「ずいぶんと疲れているようだが、随分とそのガンダムに執心と見える」

「・・・・剣。今帰ったの？」

「いや。君が余りにも楽しそうにしているもので、声が掛け辛かっただけだ」

歩み寄るブレイド、剣に美羽は溜息を吐く。美羽が操作しているディスプレイに映し出されているのは『ダブルオーライザー』と『シリウス』のスペックデータ。

「一人の研究者として、パパの娘として、“最強のガンダム”を手にすることが出来たんだから、喜ぶのは当たり前よ。でも、ダブルオーを調べているうちに一つ残念なことが分かったわ」

ディスプレイを消してダブルオーの待機状態である青い剣が付いたネックレスを、白衣のポケットから取り出した。

「どうやらこの子、あたしには起動出来なくなってるみたい」

「ほぉ、それは奇怪なことだな。魔導士クラスの天才科学者である君でも、ダブルオーのデータを書き換えることは出来ないと？」

「ダブルオーとアルケーに使われてるコアは、パパとその仲間が作った世界最初のコア・・・・七つある『神の心臓』のうちの二つよ。神に等しい意思を持つコアが使用者を選別しても、何もおかしくはないわ」

淡々と説明する美羽だが、それはダブルオーが自分を認めていないこと言っているようにも聞こえる。

「行方知れずの残り五つ神の心臓はそのうち探すとして、今は・・・・」

美羽がスゥと目を細めると警告アラートが研究所内に響き渡る。この警告アラートは島に向かってくる敵を知らせるもの。

「どうやら、性懲りも無く来たようね。今のあの子達なら、リヴァイヴ達を出す必要もないわね」

「・・・・残念だが、そうはいかないようだ」

「え？」

剣が見つめるモニターに美羽が視線を移すと彼女の眉間に皺が寄る。舌打ちをした美羽はモニターに背を向け部屋の出口へ向かって歩き出す。

「どこへ行くつもりだ？」

「・・・・分かってることを一々聞かないで。あの子達はあたしとリヴァイヴ達に用があるんだから、あたしが相手しないのは失礼でしょ？それから剣」

「む」

待機状態のダブルオーが剣に向かって投げ渡され、剣は黙って受け取った。

「今あれの調整が出来るのは一人しかいないわ。後は・・・・言わなくて分かるわよね？」

「・・・・承知した」

「そう。なら行ってきなさい。あたしはあたしの戦いをするから」

屈託のない純粋な笑み。それを見た剣は言葉を失い唖然とするが、その間に美羽は部屋を後にする。少し残念そうにする剣が再びモニターに視線を移すと、そこには“ガンダムを纏った四人の少女”が飛行していた。

「まさか一時間であそこまで伸びるなんて・・・・伊達に代表候補はやってないってことかな」

「私もすぐに終わると思ってたけど、どうやらあの人達を舐めてたみたいだね」

「それだけ、勝ちたいって想いが強かったんだと思う」

「天空の言う通りだな。今度戦う時は、下手したら負けるかもね。特に兄貴が相手してた、あの人は・・・・」

「・・・・そろそろ敵の索敵範囲に入る。三人とも覚悟はいいか？」

「聞かれなくても大丈夫に決まってるでしょ、ラウラ。じゃなかったら、今ここに居ないって」

「鈴さんの言う通りですわ」

「僕も、もう負けるつもりはないよ。アルの想いが詰まったこの機体で、負けるわけにはいかないしね」

決意を胸にする少女達の前に、海面から無数のジンクス？が現れた。それを見た四人の“戦士”は、怯むことなく敵に向かって飛翔する。

「アルケー、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「ケルディム、シャルロット・デュノア」

「アリオス、凰鈴音」

「セラヴィー、セシリア・オルコット」

「「「「目標を破壊する！／目標を狙い打つよ！／目標を迎撃する！／目標を消滅させますわ！」」」」

新たな操縦者を乗せたガンダムが、戦場を“舞う”。

想いを力に

「・・・・懐かしいな」

人気の無い森にポツリと建つ教会。その前に政志は立っていた。建物全体を何処か悲しげに見渡すと両開きのドアを開けて中に入る。

「俺達がここを出て三年、か・・・・時が経つのは不思議と早ぇもんだ」

しかし、その割には中は綺麗で埃一つ無く、誰かが掃除をしたであろうと政志は思った。誰かは考えるまでもなく分かり苦笑が零れる。

「やっぱお前は相変わらず優しい奴だよ・・・・美羽」

誰もいない教会にコツコツと政志の足音だけが響く。爪先が指す方向には主として崇められる神が描かれた色鮮やかなステンドグラスが部屋の奥に貼られており、政志はその手前にある大きな十字架の前で足を止める。銀色に輝く十字架は床に刺さっており、政志はそれにそっと触れる。

「照合開始」

そう呟くと十字架が赤く輝き始め、電子音が聞こえ出す。

【声紋、指紋、虹彩、網膜、静脈。以上のデータとバンクから鈴木政志と断定。ロックを解除します】

ガチャコンッ！ガチャコンッ！と機械音が連続して鳴り始め、十字

架が刺さっていた床が変形していく。現れたのは地下へと続く階段。
光の無い闇に政志は下っていくのであった。

一時間前。特訓が終わってすぐのこと。

「じゃ、俺は用事があるから、後は頑張れよ～」

「は、はぁ・・・・ッ！？」

政志の爆弾発言。ヘトヘトで地面に座るラウラは残った気力で突っ込みを入れる。

「ま、政志・・・お、お前は戦わない、のか・・・・！？」

「疲れてんだから無理して喋んな。それに、俺のアルケーはお前に渡してあるし・・・何より、やらなきゃなんねぇことがあるんだ

よ」

「？」

「美羽と戦うのは俺じゃなくてお前の方がいい気がする。ま、勘だけどな」

「ッ／／／／」

不意に政志に頭を撫でられ赤面する。黙り込み真剣な表情となった政志は、ラウラの耳元でそっと囁いた。

「美羽のことを頼む」

それだけ告げた政志はラウラに背を向け歩き出す。その後姿をジッと見つめるラウラに、呆れた表情の真海が歩み寄った。

「いいの？あのオタクと話したいこと、色々とあるんじゃない？」

「・・・まぁ、無いと言えば嘘になるが、今はあいつの好きにさせてやるさ」

意外な返答に真海は「へぇ」と声が漏れる。余りにも清々しい表情のラウラに、真海は頭上に？を浮かべる。

「妹のあたしが言うのもなんだけど、あの兄貴は無茶しかしない命知らずの破壊神（デストロイヤー）。今追いかけなかったら後悔するかもしれないよ？」

その問いにラウラは愚問だな、とでも言いたげに鼻を鳴らす。

「ふんっ、そんなことは分かっている。そうでなければ、私が政志に惚れるものか」

自慢げに話すラウラは立ち上がって、政志が歩いて行った方とは逆の方へと歩みだした。

「そんなお前の頼みとあれば、私はこの命に賭けてでも朝倉を倒してやろう。破壊神の魂が宿った、このアルケーでな」

「はあああああああっ！！」

ラウラの振り下ろすＧＮバスターソードが次々とジンクス？を両断していく。シャル、鈴、セシリアもそれぞれの主力武器（メインウェポン）で敵を破壊しているが、一向に減る気配がない。寧ろ、四人が倒すよりも海面から出てくる数の方が多いぐらいだ。

「どうすんのよ、この数！全く減らないじゃない！！」

「このままでは無駄に粒子を消耗するだけですわ！！」

「にしてもこの数、美羽は全戦力を投入してるって考えていいね！！」

ラウラは兎も角、シャル、鈴、セシリアはすでにガンダムを乗りこなしていた。命を賭けた超短期特訓が彼女達の才能を目覚めさせたのだろう。しかし、それを嘲笑うかのようにジンクス？は次々と沸いて出てくる。

「仕方ありませんわ・・・・ここはセラヴィーのトランザムで一気に――――」

「その必要は無い」

声と共に飛来した赤いエネルギー弾が十機近くのジンクス？を飲み込む。何事かとラウラ達が視線を向けると、黒い竜巻がジンクス？を蹂躙している。黒い竜巻がラウラ達の前で回転を止めると、そこには黒い竜騎士がいた。

「こんな雑魚に力を無駄に使うな。お前達には、他に戦うべき相手がいるはずだ」

「「「「ロシナンテ！！」」」」

「こいつらの相手は俺に任せて先に行け」

「そんな・・・・いくらロシナンテでも、この数相手に一人でなん

て無茶よ！」

「いいから早く行け！俺はただ政志に頼まれたから来ただけだ！変な仲間意識を持つな！！」

ラウラ達に怒声を吐きながらドラモンキラーを振るうロシナンテ。鬼気迫る勢いのロシナンテに言葉を失い、その行動を無駄にしないためにもラウラ達は動いた。

「・・・・分かった。だが、お前は一つはき違えている」

「あたし達、とっくの昔から仲間でしょ？」

「現にあなたは、こうして私達のために戦ってくれてますわ」

「仲間じゃないなんて、寂しいこと言わないでよ」

ラウラ、鈴、セシリア、シャルの言葉にロシナンテは目を見開いて動きを止める。自分の隣を通過する四人の口は「ありがとう」と動いており、それを見たロシナンテの中で何かが弾けた。

「仲間、か・・・・。ハハハ！そうか、仲間か！！」

ロシナンテから歓喜に満ちた声が漏れる。ラウラ達がジンクス？の群れを抜けたのを確認したロシナンテは両手を上げ、頭上に巨大なエネルギー弾を形成した。

「同じ機械の身である者共よ。どうやら俺には、悪いが負けるわけにはいかない理由が出来たようだ。この身が滅びようと、貴様らを彼女達の元には行かせんぞ！！」

エネルギー弾は更に巨大と化し、“千”機近くのジンクス?に向かって投げ放った。

「ガイアフォースッ!!!!」

終わりが見えない戦い。“仲間”のための戦いが始まった。

「・・・・シャルロット、鈴、セシリア。どうやらお前達の相手が来たようだ」

静かな声でラウラがそう告げるとシャル、鈴、セシリアは無言でその場で静止した。三人が睨む先にはＩＳを展開させたリヴァイヴ、ブリング、ヒリングの三人の姿が。ラウラは警戒しながらも三人の側を通過するが、三人は何もアクションを起こさないままラウラを通した。

「・・・敵である君達が、よく素直にラウラを通したね？」

「あの子は美羽の獲物ですからね。勝手に手を出したらこちらが怒鳴られます」

敵意を向けたシャルに対し、リヴァイヴは淡々と答える。誰が誰の相手をすればいいのかは皆が分かっており、その相手と数秒睨みあった後、六人は動いた。シャルはスナイパーライフルの標準をリヴァイヴに合わせながら上昇する。

「ハロ！ライフルビットを！」

【リョーカイ、リョーカイ】

ななせが試作段階組み上げていた独立支援ＡＩ『ハロ』。それを政志はケルディムにインストールした上でシャルに渡したのだ。他のガンダムよりもビットが多いケルディム。今のシャルにとって、これほど頼りになるパートナーは居はいなだろう。

「ガンダムなら勝てると思ったのですか？その甘い考え、私が叩き潰して上げましょう！」

声を上げながらリヴァイヴはライフルビットから放たれる粒子ビームを回避しながらシャルに突っ込む。それを見てすぐさまスナイパーライフルを右肩に戻し、左右の背部ＧＮバーニアから１挺ずつビームピストルを左右の手に取った。

「これから接近戦に入るからライフルビットを戻して！状況によっては、シールドビットでの防御をお願い！」

【マカセロ、マカセロ】

ライフルビットが本体に戻ると同時に、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰めたリヴァイヴがヒートサーベルをシャルの頭目掛けて振り下ろす。シャルは焦ることなく、ビームピストルを交差させてヒートサーベルの切っ先を受け止めた。

「中々やりますね。ですが、深緑の狙撃手を墜としたこの私に、あなたは勝つつもりですか？」

「確かに僕なんかよりもアルの方がずっと強いよ。・・・・でも、君を倒すという想いが僕を何倍も強くする！！アルをあんな風にした君を、僕は絶対に許さない！！！」

「ちょこまかと避けてんじゃないわよッ！！」

豪快に振り下ろすビームサーベルを避けるブリングに向かって鈴が吼える。中々無茶なことを言ってるが、今の鈴の頭には目の前の敵をブッ飛ばすことしかなかった。横薙ぎでブリングの胴体を両断するつもりでビームサーベルを振るう鈴。しかし、展開されたビームクローによって、それは防がれた。

「機体の持ち味であるスピードが活かせてないようだが、それで勝つつもりか？」

瞬時にビームクローを消して、ビームサーベルを持っていた鈴の腕を両手で掴む。セラヴィーを超えるパワーを持つガラッゾ。掴まれた腕の部分の装甲に「バキバキ」と音を立てながら輝が入っていく。だが、その中でブリングは気付いた。激痛が襲っているにも関わらず、口元を吊り上げる鈴に。

「・・・掛かったわね」

掴まれていない方の腕をガラッゾの左肩に押し付ける。「しまった」とブリングは口にしようとしたが、それよりも鈴がビームマシンガンを連射する方が早かった。

―弾！・弾！・弾！・弾！・弾！・弾！―

刹那、ガラッゾの左肩の装甲が装備されていたシールドと共に弾けた。爆発によって手を緩めた隙に鈴はブリングから離れる。左手の装甲には輝が入り火花を散らせており、右手は密着状態で放ったことにより損傷し、ビームマシンガンが使い物にならなくなっていた。

「その機体の左肩がＧＮフィールドの発生装置になってることを、

あたしが知らないとでも思ったわけ？」

「貴様、どこでそれを・・・・！！」

「あんた馬鹿ぁ？そんなの敵のあんたに教えるわけないでしょうが」

相手の防御を潰したのを確認した鈴は、不適な笑みを浮かべながら左右の手にビームサーベルを握る。

「あたしの似非関西弁に手を出したこと、死ぬほど後悔させてやるんだから！！」

「そんな火力だけの機体で、あたしに勝とうだなんてね！！」

ヒリングがＧＮメガランチャーをセシリアに向けて放つ。だが、それはＧＮフィールドに防がれ舌打ちを鳴らした。

「あなたのような下品な女性にクリスさんが負けたなんて、未だに信じられませんわ」

セシリアもセラヴィーの全砲門を展開させ粒子ビームを撃った。自分に向かって来る六つの光。それを難無く避けながら、ヒリングはＧＮメガランチャーを片手に持ち替え、空いた手にビームサーベルを握る。

「下品・・・・？ハッ！あんたのような雌豚に言われたくないわよ」

粒子ビームを避けながらジワジワと距離を詰めてくるヒリングを見てセシリアは覚悟を決める。

「・・・・いた仕方ありませんわね」

両肩、両膝のＧＮキャノンの砲口部が腕に変形しビームサーベルを握った。それだけに留まらず、両手にも一基ずつビームサーベルを握り、それを見たヒリングは口角を上げて嘲笑う。

「その機体で接近戦だなんて馬鹿じゃないの？そもそも、あんた自体接近戦が出来るか疑問だわ」

「私の力量の無さは、覚悟で埋めて見せますわ！それに、そちらの機体も接近戦が得意とは思えませんが？」

「人間風情が・・・・ほざいてんじゃないわよぉぉッ！！！」

「・・・・何ッ！？」

島を視界に捉え、スピードを上げるラウラだったが、突如島の方からオレンジ色の粒子ビームが飛来してきた。一端静止して回避した後、攻撃方向を睨みながらディスプレイを展開しカメラをズームさせる。赤と白の重装甲を持った砲撃主体にみえるＩＳを展開させた美羽がいた。

「くっ、やはり朝倉か！しかしあの機体は・・・・」

初めて見る機体に困惑しつつも飛んでくる砲撃を避けながら、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で美羽の姿が視認出来る距離まで一気に近づいた。

「あれだけやられてよく来る気になったわね。勇敢なのか馬鹿なのか・・・・。多分、後者なんだろうけど」

オープンチャンネルから美羽の声が聞こえる。砲撃を止め、海岸の岩場を蹴って上昇し、ラウラと同じ目線になった美羽。口元は笑っ

ているが、目が戦士のそれであったことから、最初から本気なのだとラウラは悟った。

「ねぇ、マサシは目を覚ましたんでしょ？だったら・・・・どうして、あたしの相手がマサシじゃなくてあなたなの？」

「そんなこと、聞きたければ力づくで聞くんだな。まぁ、“聞けたら”の話だが？」

【Ａｒｃｈｅ（アルケー）　Ｕｐｇｒａｄｅ（アップグレード）】

マシンボイスが響くと同時にヤークトアルケーが展開された。その様子を見た美羽の表情から笑みが消え、氷のような冷たい表情となる。

「・・・笑わせないで。少しはマシになったようだけど、その程度であたしに勝てるとでも？・・・・良いわ。ならこっちも、“死神”らしく戦ってやろうじゃない。あなたを殺してマサシを、もう一度あたしの物にするから」

「あたしの“物”だと・・・・ッ！？貴様は政志を何だと思っている！！」

「“犬”よ。マサシは昔から、そしてこれからも。あたしのそばに居続ける忠実な“犬”よ」

「ッ！！・・・・その歪んだ考えのせいで政志達は苦しんだんだ！！貴様のその歪みを、この私が断ち切る！！！」

怒りを顔に刻みながらラウラは両手にバスターソードを握り戦闘態

勢に入る。それを見た美羽はただ静かに「いい覚悟ね」と呟き、全砲門をラウラに向けた。

「ヤークトアルケー！」

ラウラは眼帯を毟り取るように外し、赤と金の瞳で“死神”を睨む。

「リボーンズキャノン！」

対して美羽は、オレンジ色の粒子を迸せることで“戦神”に応える。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「朝倉美羽！」

今、死神と戦神の戦いの火蓋が・・・・切って落とされた。

「「出るッ！／行く！」」

薄暗い地下室。政志が手探りでスイッチを押して照明を灯すと部屋が光で満たされた。部屋は教室一個分ぐらいの広さで、七つの空のカプセルとパソコンが一台あるだけ。政志はカプセルに歩み寄り、プレートに掛かった埃を払いのけて一つ一つ確認していく。

『？1　黒龍王（ダイダロス・ドラゴン）』

『？2　青龍殿（クリスタル・エンド・ドラゴン）』

『？3　赤龍帝（ウェルシュ・ドラゴン）』

『？4　白龍皇（バニシング・ドラゴン）』

『？5　金龍君（カイゼル・トール・ドラゴン）』

『？6　銀龍天（グロリアス・ドラゴン）』

『？7　極龍神（インペリアル・ドラゴン）』

「龍・・・？あの親父（ジジイ）、何作りやがったんだ？」

絶対に碌でもないものだと思いつつ、カプセルから離れパソコンの電源を入れる。デスクトップにある多くのフォルダの中で、政志が目を付けたのは『神の遺産（ロスト・ロギア）』と名前を付けられたもの。開くとそこには一つのファイルがあり、政志は何の躊躇いもなくマウスを押した。すると、いつくものデータが画面に映し出された。

『GNドライヴ』

『革新者（イノベイター）』

『神の心臓（セイクリッド・コア）』

『悪魔の遺児（イーヴィル・チルドレン）』

『聖剣』

『魔剣』

他にもあったが、数が多かったり、データが破損しているものもあった。政志は無言のままマウスを『革新者（イノベイター）』のところに持って行き、クリックした。

『革新者（イノベイター）』とは人を超越した存在のことである。身体能力、生命力など、全てのスペックが常人の数倍はあると言われている。姿は普通の人間と同じであるため見分けることはまず不可能。両目が変色し輝く以外、身体的な特徴はない。例の“予言”によると、“初”の自然発生する革新者（イノベイター）は全部で■■人。一部の人間は革新者（イノベイター）を神と崇める者もおり、そのせいもあって両目が“金色”に輝く『正』の革新者（イノベイター）は『聖神（パラディン）』と呼ばれている。そして、人類と共に“歩む”『聖神（パラディン）』とは別に、人類を“滅ぼす”革新者（イノベイター）『邪神（デスペラード）』が存在する。瞳が“赤く”輝くためもあって、『悪魔』とも呼ばれることがある。『聖神（パラディン）』と『邪神（デスペラード）』にも階級があり『■』、『■』、『■■』、『■』の四つ。『■』は『■』を守り戦う存在。『■』は『■■』から『■』の言葉を聞き『■』達に指示を出す存在。逆に『■■』は『■』を守る絶対的な守護者。その力は『■』と同じであり、『■』の次に最強の存在。そして、最も危険なのは、世界を“破壊”し“創造

”し得る究極の存在で――――』

ここで文面は途絶えており、政志はスゥと目を細める。他のファイルも開き閲覧していると、突如マウスから手を離しパソコンをシャットダウンさせた。灯りを消して階段を上る。最後の段を踏み教会に戻るとそこには一人の男がいた。

「テメェ・・・ここまでしつこいとストーカーで訴えるぞ」

「それは心外だな破壊神。私はただ、君との果し合いを望んでいるだけだ」

剣の言葉に「ちっ、こいつ馬鹿かよ」と心中で思ったのは内緒である。

「それにしても、まさかそのような地下への道があるとはな。今まで美羽と何度か来たことはあったが、気付かなかったぞ」

「あそこは親父(ジジィ)が死ぬ直前、俺にだけ教えた場所だ。美羽が知らないのもしょうがねぇよ。・・・・で、お前は俺に何の用だ?残念だが、今の俺には――――」

言葉を遮るように剣が政志に向かって何かを投げつけた。怪訝な表情でそれを受け取った政志は少し驚きの色を顔に見せる。

「・・・どうしてテメェがダブルオーを?」

「言ったはずだ。私の目的は、破壊神を、“鈴木政志”を超えることだと。それを証明するためには、君にはガンダムが必要だ。“オリジナルの太陽炉”を持ったガンダムが」

今まで付けていた仮面をバッと外して、床に投げ捨てる。顕わになったその顔に、政志は「なるほど」と一言呟いた。

「それが、テメェが俺をしつこく狙う理由か」

「そうだ。『ＰＲＯＪＥＣＴ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』の数少ない成功例であり、失敗例であるのが、この私だ」

髪と瞳がオレンジで大きな傷がある以外、政志の顔と違う点が見当たらない。それが、『剣（つるぎ）』の素顔。

「何とか似た顔で人の姿には生み出されたが、“力”は違った。生まれたすぐの私には、君のような圧倒的な能力は無く、挙句の果てには『失敗作』とまで言われ、様々な実験の材料にされてしまった。・・・しかし、そんな光の無い人生を変えてくれたのが美羽だ。彼女に出会ったことで私は生きる目的を得ることが出来た。それが、“私のオリジナルである鈴木政志を倒し、戦士のみが到達しえる極に辿り着くこと”だ。」

真っ直ぐな瞳で政志を見据えながら剣は語った。だが、次の瞬間。政志が纏う空気が一気に変質する。

「分かった・・・。なら俺も、“本気”で戦ってやろう」

「ッ！？」

余りにも異質で、恐怖すら感じる政志に、剣は瞬時に教会の外まで後退した。いつの間にか手には汗をかいており、悪寒すら覚えるほどだ。そんな彼に向かって、破壊神はゆっくりと歩を進める。

「けど人間相手に本気で壊(や)るのは初めてだからな。頼むからすぐには死んでくれるなよ？」

以前会った時は何かが違う。いや、別人と言っても過言ではないほど、政志は“人間離れ”していた。だが、そんな相手を前にして、剣は口元を上げて歓喜の声を上げる。

「ククク・・・そうだ！私は“これ”と戦いたかった！！この時を待っていた！！！」

剣の身体を光が包み込むと、光は白と黒の装甲を持ったマスラオに酷似したＩＳとなる。それを見た政志はダブルオーを起動させその身に纏う。

「さあ・・・・壊すとしようかぁ！！！！！」

【ＡｒｃａｎａｓｙｓｔｅｍＦｕｌｌｄｒｉｖｅ(アルカナシステム フルドライヴ)】

邪悪な笑みを浮かべると共に、背中から放出されるＧＮ粒子が黒く染まっていく。闇を思わせるそれを見た剣は更に気持ちを高ぶらせた。

「それで良い！！寧ろ、それで無くては困るぐらいだ！！！」

二人は同時に地面を蹴り、凄まじい速度で上昇し、あっという間に雲の上に到達した。睨み合うこともなく、二人は主力武器(メインウェポン)を手に取り、政志は“狂気”を、剣は“闘志”を互いに放つ。

「ダブルオーライザー！！」

「マスラオ改めスサノオ！！」

「目標を」

「いざ尋常に」

「「破壊する！！！／勝負！！！」」

各地で始まった血戦。そんな中、とある場所に、深い眠りから覚めた三人の男がいた。

「ふぁ～・・・・よお寝たわ」

「でも、まだ寝たりねぇから、もう一口寝る～・・・・」

「同じく～・・・・・」

・・・・・・。

「「「って、こんなことしてる場合じゃねぇからからぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」」

起きて早々、相変わらずテンションが高い三馬鹿であった。

想いを力に（後書き）

次回は過去編を書きまっす！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1692r/

IS＜インフィニット・ストラトス＞～紅蓮の破壊神～

2011年12月14日18時53分発行